

御経塚遺跡Ⅲ

野々市町御経塚第二土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

2003

石川県野々市町教育委員会
野々市町御経塚第二土地区画整理組合

例 言

- 1 石川県石川郡野々市町御経塚1・2・4・5丁目に所在する御経塚遺跡の発掘調査報告書である。本書における調査区のブナラシ地区は2丁目、デト地区は1丁目地内にあたる。
- 2 野々市町御経塚第二土地区画整理事業に係る緊急発掘調査として、野々市町教育委員会が野々市町御経塚第二土地区画整理組合の委託を受け実施した。現地における調査期間、面積、調査担当者は以下のとおりである。調査総面積は10,250㎡である。

年次	地区名	調査年	期間	面積(㎡)	担当者
1	デト	1989年(平成元年)	7月3日～12月16日	3,470	吉田淳・横山貴広
2	デト	1990年(平成2年)	12月4日～17日	190	
3	デト	1992年(平成4年)	5月26日～6月5日	140	
	ブナラシ	〃	6月3日～11月3日	980	
4	ブナラシ	1993年(平成5年)	4月15日～6月10日・9月28日～12月25日	760	
	デト	〃	7月12日～10月24日	1,210	
5	ブナラシ	1994年(平成6年)	6月10日～7月21日・8月29日～10月12日	390	
	デト	〃	10月11日～12月9日	1,160	
6	デト	1995年(平成7年)	5月9日～10月30日	1,620	
7	デト	1996年(平成8年)	5月8日～6月27日	330	

- 3 発掘調査にあたっては御経塚第二土地区画整理組合理事長 塚本一雄(故人)、塚崎吉信(故人)、杉林敏信、副理事長 塚崎昭夫をはじめ組合員各位、御経塚町各位、野々市町都市計画課の協力を得た。
- 4 本書での第1～5章の執筆・編集は、吉田淳が担当し、第5章第1節は布尾和史が執筆・編集を行った(野々市町教育委員会文化課)。第4章第5節3は坪内光次郎氏の協力を得て作成した。第6章は山本直人(名古屋大学大学院文学研究科)、小川寛典(名古屋大学年代測定総合研究センター)の函状から報文を賜った。
- 5 発掘調査及び本書の作成にあたっては下記の方々から御教示・指導を得た。記して深謝申し上げたい。
荒川隆史、小川寛典、加藤二千雄、坪内光次郎、木下哲夫、楠 正勝、小嶋芳幸、高塚勝喜(故人)、高田秀樹、出越茂和、橋本英道、新美倫子、西野秀和、橋本澄夫、浜崎悟司、久田正弘、藤田邦雄、木田秀生、増山 仁、二浦純夫、南 久和、山本直人、谷内尾晋司、安 秀樹、湯尻修平、米澤義光(敬称略)
- 6 本書の各図・写真図版の指示は以下のとおりである。
- (1) 本書での遺構・地図等の方位はすべて真北を表示する。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、(m)で表示する。
 - (3) 各図の縮尺は以下のとおりである。
遺構 1/1000、1/250、1/200、1/120、1/80、1/60
土器 1/3・1/6、土製品1/2、石器その他1/2、1/3
 - (4) 遺構平面図内の数字は遺物の出土地点を示し、この数字と遺物実測図番号、遺物一覧表番号、写真図版の遺物番号は対応する。
 - (5) 遺構名の略号は堅穴建物(SI)、独立柱建物および建物(SB)、上坑(SK)、溝(SD)とした。
ブナラシ地区の土坑・ピット名称は、Pを冠し、検出グリッド名一検出グリッド内番号としている。
- 7 本遺跡の出土遺物、記録資料は野々市町教育委員会が 一括保管している。

目次

第1章	位置と環境	
第1節	地理的環境と遺跡の位置	5
第2節	歴史的環境	5
第2章	調査の経緯と経過	
第1節	これまでの調査概略	9
第2節	調査の経緯	13
第3節	調査の経過	13
第3章	ブナラシ地区の調査	
第1節	概要と地形	16
第2節	縄文時代	16
1	建物	28
2	石囲が	35
3	埋設土器	35
4	土坑	39
5	配石遺構	39
6	土坑・ピット・溝出土土器	40
7	包含層出土土器	43
8	土製品	50
9	石器	51
10	石製品	57
	遺構図版・遺物図版	60
第3節	弥生時代以降の遺構と遺物	200
	ブナラシ地区遺構平面図	201
第4章	アト地区の調査	
第1節	概要と地形	227
1	概要	227
2	地形と河道跡	227
第2節	縄文時代	230
1	建物	230
2	埋設土器	232
3	土坑	233
4	河道・溝・ピット	236
5	包含層出土土器	236
6	土製品	238
7	石器	238
8	石製品	240
	遺構図版・遺物図版	241

第3節	弥生時代～古墳時代初期	274
1	前期の上器	274
2	竪穴建物	275
3	掘立柱建物	278
4	土坑	278
5	溝	278
	遺構図版・遺物図版	285
第4節	古墳時代後期～古代	313
1	掘立柱建物	313
2	土坑・溝	313
	遺構図版・遺物図版	314
第5節	中世後期	318
1	東側集落城	318
2	西側集落城	319
3	出土陶磁器の組成と比率	327
	遺構図版・遺物図版	330
第6節	近世以降	364
1	建物	364
2	井戸	364
3	土坑	366
4	溝	367
	遺構図版・遺物図版	371

第5章 総括

第1節	御経塚遺跡における建物跡の検討 ～北陸縄文時代晩期集落理解への基礎作業～	391
第2節	弥生時代以降の様相	426
1	ブナラシ地区	426
2	デト地区	426

第6章 土器附着炭化物の放射性炭素年代

写真図版	ブナラシ地区 調査区1～4
	縄文時代 遺構1～8、土器9～17、土製品18・19、石器19～24、石製品24～25
	デト地区 調査区26～30
	縄文時代 遺構31～32、土器33～35、土製品36、石器35・36・37、石製品37
	弥生時代～古墳時代初期 遺構38、遺物39～41
	古墳時代後期～古代 遺構・遺物42
	中世 遺構43～46、遺物47～48
	近世 遺物48～50

(遺構全体図1/300の2葉を巻末袋入、ブナラシ地区・デト地区)

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境と遺跡の位置

加賀の霊峰白山を源とする県下最大の河川である手取川は古来より暴れ川として知られ、現在は山間地が平野に開ける鶴来町において流れを北から西へ急激に向きを変え日本海へとそそいでいる。しかし、手取川の旧河道跡は現在の富樫用水や郷川水をはじめとするセツ用水が想定され、氾濫のたびに流れが南遷したことを物語っている。

この手取川の堆積作用によって形成された扇状地は鶴来町を扇頂として扇径約12km、展開度約110度の規模をもち、勾配は扇央1/170、扇端1/200を測る。東側は富樫山地の低い急崖と接し、北東端では犀川扇状地と重なり不鮮明となる。その境界を伏見川が北西方向に流れる。

石川県七川郡野々市町は、広大な穀倉地帯として恩恵を与えてきた手取川扇状地北東部の扇央から扇端部にかけて、南北6.7km、東西4.5km、面積13.56km²の町域と人口4万5千人を有する。石川県のほぼ中央に位置し、北及び東は県都金沢市、西は松任市、南は鶴来町に接する。

近世以来、都市近郊の農業地帯として経済基盤を確かなものとしてきた野々市町北西部の御経塚町周辺地域は、1960年代後半の金沢バイパス（現国道8号線）築造と、1970年代後半から始まった土地再開発事業によって、農村と新興住宅街が混在する地域と移り変わっていった。しかも近年は、金沢都市圏への人口集中と農業衰退が加わり、都市開発は急激に進行を進め大型店舗を中核とする商業地や住宅地へと一変した。旧来の景観は失われ、点在する水田や畑地が往時をとどめるに過ぎない。

御経塚遺跡は、石川郡野々市町御経塚1・2・4・5丁目にかけて分布し、JR野々市駅から北北東へ約500mの地点が遺跡のほぼ中心部となる。縄文時代後晩期から近世にかけての複合遺跡として扇状地北端部に立地し、西を流れる郷川本流の馬場川（大塚川）と東の十人川に挟まれる海拔10mの微高地上に展開する。扇状地端部の地下水白濁地帯として昭和30年代までは白濁がみられた。この扇状地端部一帯は、近世及び明治人正期の耕地修理にいたる開発を経て現在は平坦な地形となっているが、以前は河川や小支流が入り組む起伏の複雑な地形が想定され、周辺の調査では東西に約100m前後の距離をおきほぼ北流する河道跡や低湿地を確認しており、遺跡の多くはこの低地間南北方向の微高地上に存在している。

遺跡地は、その中央を級国道8号線が南北に、東西方向には都市計画街路定田一御経塚線が走り、付近は商業地化している。遺跡の中心部である国道8号線御経塚交差点の南西側14,897m²は、国指定史跡として史跡公園化し保存されており、出土品の展示・整理施設である野々市町ふるさと歴史館が隣接する。

第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する手取川扇状地北端部周辺は遺跡の密集する地域として知られ、縄文時代から中近世にわたり注目する遺跡も多い。多岐にわたる開発により遺跡の発見が相次ぎ、緊急発掘調査が相次いでいる地域である。

縄文時代 周辺では、前期末より中期初頃の土器が出土した上安原遺跡（01047）がもっとも古い時期であり、中期前葉～中葉の守府ヒタ遺跡（01078）、中期後葉～後期前葉の北塚遺跡（01088）、後期前葉後半の押野大塚遺跡（16038）が存在し、さきの二者は犀川左岸の沖積地に立地する。後期中葉以降になると遺跡はやや増加し、加賀川B1～B2式期並行の馬替遺跡（01400）と御経塚シンデン遺跡（16030）が展開する。以下は本遺跡と並行する時期を有する遺跡で、縄文式期と中層式後半の集落が確認された米沢遺跡（01125）が東方2.1kmに、中葉の後半期から営みを始め晩期後葉まで至り、木柱根の残る建物多数検出注目された新保本町チカモリ遺跡



第1図 野々市町位置図

(01064)が北北東方向約1.2kmに、後葉の松任市一塚遺跡(08125)は西北西方向約3kmに位置する。後期後葉の晩期に入ると前葉～中葉の中層遺跡(01050)が北西方向約1.7kmに、中葉後半の中層サワ遺跡(01052)は北西方向約1.5kmに、晩期後葉の長竹遺跡(08044)や晩期末～弥生時代初頭の乾町遺跡(08045)が南西方向約3kmに、また後～晩期と考えられる打製石斧の素材採集場所である栗田遺跡(16008)が南南東方向3.7kmにみられる。周辺一帯は国指定史跡や標識遺跡など注目される遺跡が集中し、生活基盤の安定を反映する地域である。弥生時代 扇端部の八川中遺跡(08128)、押野タチナカ遺跡(16031)、扇尖部では前述の乾町遺跡で最古の弥生土器が出土している。中期になるとⅡ様式の良い資料が出土した八木ジワリ遺跡(01059)が北方に位置する。しかし、後期前半まで遺跡は散発的な様相である。後期後半になると安定した稲作と人口の集中増加とともに集落の形成が活発化し遺跡は急激に増加する。いずれも扇端部に立地し、横江古屋敷遺跡(08142)、御経塚シンデン遺跡(16030)、二日市イシバチ遺跡(16024)、長池ニシタンボ遺跡(16026)が近江、東方面では押野タチナカ遺跡(16036)、押野ウマワリ遺跡(16037)などが形成される。

古墳時代 前期の集落では御経塚シンデン遺跡や上荒屋遺跡(01053)、旭遺跡群の宮永遺跡(08121)、旭小学校遺跡(08123)が見られ、山陰地方との密接な関係を示す四隅突出墳墓1基と、前方後方墳2基を含む28基の墳墓古墳が検出された。塚墳墓・古墳群(08126)や本遺跡古墳群(16031)、横江古屋敷遺跡では地域統合を物語る初期の前方後方墳を含む古墳群が出現する。また、平成12年に発見された野々市町本町1丁目から金沢市横川町にかけて分布する本町横川遺跡の調査では、前期古墳の方墳1基が検出されている。しかし、この時期以降は集落の拡散により遺跡は減少しその後の営みは7世紀以降を待たなければならない。7世紀の前半には扇端部の第2次開発が御経塚シンデン遺跡の後期集落や本遺跡のツカダ地区で小規模に始まるが、散発的である。しかし扇尖部では同時期の上林古墳、以降の末松古墳・田地古墳が築造されるなど6世紀末から7世紀の前半には開発が着手されたものと考えられる。この結果、7世紀第3四半期に建立をみる白鳳の大寺院末松庵寺(16013)は、政治的・経済的基盤を確立し一定の権力を有する首長の存在を如実に物語るものである。

奈良・平安時代 扇尖部では7世紀から続く開発が大規模化し集落遺跡が増加する。三浦遺跡(08034)、下新庄アラチ遺跡や上林新庄遺跡など大規模な基幹遺跡や、栗田遺跡(16008)、末松A遺跡などが展開する。扇端部においても御経塚遺跡アスナロ団地地区、初期荘園の横江荘遺跡(08135)と「純住」など多数の墓舎土器や木簡が出土した上荒屋遺跡が出現する。

中世以降 律令制の崩壊とともに荒廃した手取川扇状地の再開発に取り組んだ在地領主の林・富樫氏は、藤原利仁の末裔と称する加賀斎藤氏の有力な武士である。両氏とも「和名鑑略抄」に載る石川郡の郷名を名字の地とし、林氏は野々市町南郷から鶴巻町にかけての拝師郷、富樫氏は高橋川中流域の高樫郷をこの地とする。在地の主導権を握っていた林氏は、承久の乱(1221)の際朝延側につき没落の運命をたどるが、幕府側について富樫氏は守護北条一門の下で勢力を伸張し、在地領主の棟梁としての地位を確かなものとしていった。建武2年(1335)足利尊氏が富樫高家を加賀守護に補任した後、富樫氏は守護所を野市に置いたとされ、14～15世紀には野市が加賀の政治・経済の中心となる。しかし、長享2年(1488)高樫政親が加賀一向一揆の攻撃により滅亡し、天文15年(1546)の金沢御堂建立以後は中心地をあけわたすこととなった。守護所とされる富樫館跡(16039)は野々市町本町・住吉町地内に所在し磁研瀝りの堀が確認されている。また館跡の南東500mに位置する扇が丘ハワイゴク遺跡(16043)では、総柱の掘立柱建物や13世紀前半からの遺物を検出している。野々市町押野には富樫氏庶流押野氏の居館である押野館跡(16035)が所在し、館を巡る掘跡、掘立柱建物、竝伏状遺構などの検出や14～15世紀代の遺物が出土している。

中世後期の集落遺跡が本遺跡周辺には近在し、南方1.5kmには14世紀後半頃の散居村的景観を有する二日市イシバチ遺跡(16024)、一定区域に住居が集中し居住域を形成する14世紀後葉～16世紀前半の長池キタノハシ遺跡が南方500mに、南東400mには14～15世紀の御経塚遺跡ゲト地区、南西700mの松任市横江町には林氏系横江氏が居を構えたとされる14世紀後半～16世紀頃の横江館跡(08137)が存在する。またJR北陸本線南側の野々市町二日市・三日市地内では野々市町北西部土地区西整理事業開始に伴う分布調査において大規模な中世の遺跡が確認されている。

御経塚町の町名の由来ともなった御経塚経塚(16029)が北東方向約400mに存在する。礎石経が出土したとされ、中世末から近世初頭頃の築造と推察するものである。



第2図 周辺の遺跡 (1/30,000) 「石川県遺跡地図」 1992より

旧御経塚村の村名は正保郷帳に見られ、「高免付給人帳」では寛文年間(1661~1672)の家高数17、百姓数25。宝永5年(1708)の「村々高免家数等覚帳」では、家数46、人数243。いわゆる「皇国地誌」には家数59・人数332とあり町村制施行後は石川郡押野村に所属した。押野村は昭和31年(1956)に金沢市に編入したが、分市合併を強く要望する御経塚、野代、押野、押越の4地区が、住民投票を経て翌32年4月に野々市町へ編入した。

第2章 調査の経緯と経過

第1節 これまでの調査概略(第3図参照)

1 遺跡の発見

御経塚の集落では、明治41年(1908)から大正3年(1914)にかけて耕地整理事業が行なわれ、その際発見した遺物が区長宅に保管されていた。また、木川の耕作や田植えのとき、素足に土器のカケラや石が触れ煩わしかった話が伝えられており、春の江掘り作業で土器や加工した石が出ることは知られていた。

昭和28年(1953)6月、高麗郷喜ほか石川考古学研究会員が区長宅の保管遺物を実見し、末期の弥生土器数点と磨製石斧三点、縄文土器一点を確認している。同時に多数の石鏃が出上した情報も得ているが、長い年月の経過から出上地は不明のままであった。

一方、同年11月の八日市新保遺跡(現金沢市新保本町チカモリ遺跡)発見と、翌29年3月の発掘調査がきっかけとなり、御経塚集落北東約100mの水路から土器片を採集していた押野中学校生市村正則の通報によって、同年4月頃に御経塚遺跡の明らかな所在地が研究者の知るところとなっている。

2 第一次発掘調査

発掘調査は、昭和31年(1956)3月後半にA・B・C区の3地点で行なわれ、A区は36㎡、B区は15㎡の面積を調査し、C区は試掘にとどまっている。小さな発掘調査面積であったが、A区からは呪具とされる御物石器を石で囲み埋納したとみられる遺構が検出された。御物石器は、長さ7cmと15cmほどの自然石八個によって50×48cmの大きさでほぼ円形に囲まれ、調査区際の上層から竅穴状の落込みを確認している。この石器は住居の一隅に安置して祈願をこめたもので晩期前半の所産と推定されている。

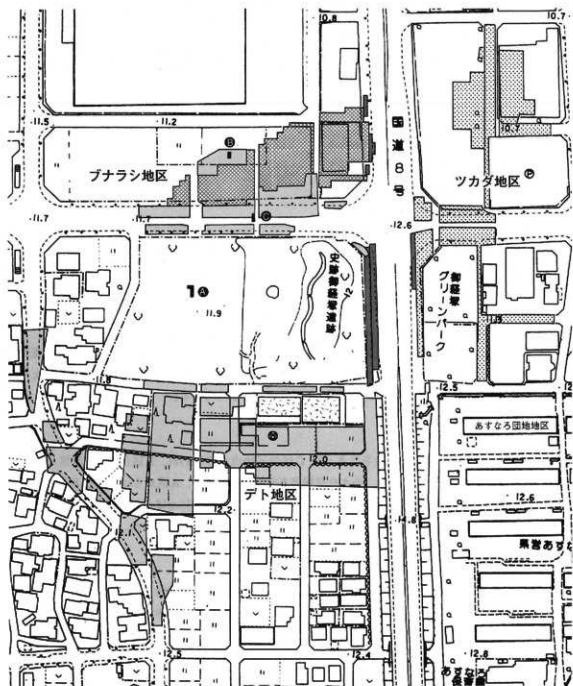
調査によって出上したA区の土器群は、八日市新保遺跡の土器群とともに、土器組成や文様、分布圏の検討や現金沢市中屋遺跡出土の土器との比較が行われた。この作業によって八日市新保式土器と御経塚式土器が型式設定され、北陸の晩期前半における土器編年の序列を八日市新保式→御経塚式→中屋式とした。精製土器の文様は、八日市新保式土器では三叉状連続文、御経塚式土器では単純な三叉文を指標とし、縄文調整の粗製土器が御経塚式土器では殆ど見られないとする特色が提示されている(高瀬1964)。

3 金沢バイパス(国道八号線)関連の調査

昭和43年(1968)秋、道路の盛土工が終了し側溝工事中に遺物が出土した。道路工事は一日中断し、石川考古学研究会主体の調査団によって道路側溝に沿った試掘溝状の調査が行われ、同時に遺跡の範囲確認調査が進められている。遺跡は径約200mの円形に近い大集落跡で、集落は中央に広場とみられる低地を挟み二分かれる形態が推定された(高瀬他1983)。

昭和47年(1972)7月には金沢バイパスから西へ伸びる石川広域農道(現庄田―御経塚線内)工事に伴う発掘調査、翌48年7~8月には金沢バイパス西側拡幅に伴う発掘調査を石川県教育委員会が実施している。これらの調査で、晩期後半の下野式土器の良好な資料が得られ、後期後葉から晩期後半にいたる長期定住集落と判明した。また、弥生時代終末期から奈良・平安時代、中世の遺物が出土し複合遺跡であることも確認されている(橋本他1973)。

石川広域農道の国道八号線取付け部拡幅に伴う調査が、昭和50年(1975)11月から翌年3月にかけて石川県教



第3図 御経塚遺跡発掘調査図 (S=1/2,500)

- | | |
|---------------|-----------------|
| 第1次調査 (●・◎・⊙) | 第1期土地区画整理事業関係調査 |
| 国道8号線関係調査 | 第2期土地区画整理事業関係調査 |
| 国指定への調査 | 出土品展示収蔵施設建設関係調査 |

育委員会により実施されている。積雪期にあたることから一部の調査区は農業用のビニールハウスで覆い行われている。調査地は遺跡の東辺部とされ、方形の竪穴建物1棟を検出している。広場と仮称されてきた低地箇所の土層から、この低地は後期後葉以前の段階ですでに生じており、晩期中頃の中層式期にはかなり埋まっていた状況が観察され、最も低い地点では遺物包含層の流失がみられることから、晩期後半以降に大きな冠水があったことが報告されている(湯尻他1976)。

4 国指定へ向けての調査

昭和46年(1971)、野々市町教育委員会は国道8号線の開通以降都市化が必至の状況にある御経塚遺跡を保存するため、石川県教育委員会、石川考古学研究会、地元御経塚町有志と協議を行い、遺跡を可能な限り緑地保存する基本方針が確認されている。

この方針に基づき、保存区域の確定と整備策定を計るため、集落構造の解明を目的に昭和48年から3ヶ年継続事業として発掘調査を実施することが決定した。調査団長を高畑勝喜とする石川考古学研究会主体の御経塚遺跡調査会が結成され、遺跡の北半部に相当する石川広域農道の北側において、延べ約4,100㎡の大規模な発掘調査を実施している。

これらの調査で、遺跡の規模は東西180m、南北210mと若干修正されたが、竪穴建物や炉跡など集落形態に關する遺構状況をおおむね把握し、土器や石器をはじめとする莫大な量の出土遺物とともに、北陸における縄文時代後期から晩期に営まれた代表的な遺跡であることが検証された。その成果は毎年刊行した概報によって要約し、保存地区の検討も進められている。

後年の昭和58年(1983)には従来からの発掘調査を総括する報告書が刊行し、竪穴建物6棟、炉跡2基、配石遺構3基、土坑約200基などの検出結果から現状に分布する住居域が捉えられた。土器は、後期中葉酒見式から晩期末下野式までみられ、その考察により従来の八日市新保式と中層式を新古に分け、八日市新保Ⅱ式から晩期とし、後期中葉から晩期全般を九区分する土器編年が提唱された。生業活動用具の石器は、打製石斧2732点、磨製石斧273点、敲石1675点、石皿363点、石鏃766点、石錐147点を数える。祭儀用具では、土偶77点、御物石器5点、石冠類58点、石棒・石剣・石刀類273点が出土している。また、石器園や土器鉢部に残る網布・カゴ底土痕の検討が行われた。花粉分析による古環境の解析では、年平均気温が現在より摂氏二度程低い涼涼な古気候が提示されている(高畑他1983)。

5 遺跡の指定

遺跡に対する重要性の認識と地元の理解が深まった昭和50年(1975)3月に国指定の申請が行われ、同時に御経塚町全50戸をもって構成する御経塚遺跡保存会が組織され、市村正規が会長となっている。

昭和52年3月8日に遺跡地14897㎡が国指定史跡として文部省から告示され、永久に保存されることになった。指定区域は同年12月に公有化が行なわれ、同51～57年にかけて保存整備事業が進められた。指定区域の東半部では、昭和48年調査区の成果をもとに住居1棟の復元と築落の一部を表示し、花粉分析で確かめられた植生が原生林として再現されている。西半部は運動場が楽しめる広場とし、出土品の展示館と併せて昭和58年5月に公開が始まった(野々市町教委1983)。

6 第一期土地区画整理事業の調査

国道8号線東側の区域は、昭和47年(1970)7月1日に金沢都市計画地域における市街化区域となった。この地区は、弥生時代から平安時代にかけて従来で言う御経塚B遺跡の分布域にあたり、昭和48～49年に行われた照管すなわち団地建設に伴う石川県教育委員会の発掘調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物群が検出されている(湯尻1983)。

昭和54年(1979)には、県営あすなろ団地の北側一帯が御経塚第一十地区区画整理事業の実施区域となり、昭和55～58年(1980～83)にかけて野々市町教育委員会が4630㎡の発掘調査を行った。

弥生時代終末期から古墳時代前期の集落を主体とし、縄文時代や古墳時代後期の遺構分布が認められた。各時代の遺構が複合し従来の遺跡名称では混乱が生じることから、御経塚町の東部に分布する遺跡全体を御経塚遺跡と総称することにし、この地区は御経塚遺跡ツカダ地区と名称の変更をしている。

縄文時代の主要な遺構として、柱穴を円形に配置する円形建物2棟と方形に配置する方形建物1棟、炉跡1基、土器2基、土坑3基を検出し、集落の東端部は河道から東へ約80m付近と把握した。

ツカダ地区では、広範囲に分布する晩期末の下野式後半期の土器が目立ち、西日本の影響を受けた突帯文系土器の壺や浅鉢が出土している。そして、後続する弥生時代初期の土器群と分布を同じくする傾向が認められ、弥生時代への過渡的状況下における集落構造の新たな変化が推測された。

弥生時代末期～古墳時代初期では、竪穴建物14棟、掘立柱建物1棟、土坑35基を検出している。7世紀代の古墳時代後期では竪穴建物2棟、掘立柱建物6棟を検出している（野々市町教委1984・1989）。

御経塚遺跡調査一覧表（調査機関における調査団は石川考古学研究会を主体として組織されたものである）

調査次	旧名称・地区等	調査年	調査機関	原因等	文献
第1次	御経塚(1次)	昭和31年3月(1956)	押野村史編集委員会	村史編集	高瀬1964
第2次	御経塚(2次)	昭和43年10月(1968)	調査団	金沢バイパス工事(現8号線)	高瀬他1983
第3次	御経塚(3次)	昭和47年8月(1972)	調査団・石川県教委	農道拡幅工事(現石川広域農道)	〃
第4次	御経塚(4次)	昭和48年7～8月(1973)	調査団・石川県教委	金沢バイパス拡幅工事	橋本他1973
第5次	御経塚(5次)	昭和48年9～12月(1973)	調査団・野々市町教委	保存区域及び整備策定	高瀬他1983
第6次	御経塚B	昭和48～49年(1973～74)	石川県教委	泉住宅建設(アスノ閉地)	湯沢1983
第7次	御経塚(6次)	昭和49年9～11月(1974)	調査団・野々市町教委	保存区域及び整備策定	高瀬他1983
第8次	御経塚(7次)	昭和50年9～12月(1975)	調査団・野々市町教委	保存区域及び整備策定	〃
第9次	御経塚(8次)	昭和50年11～3月(1975～76)	調査団・石川県教委	広域農道取付国道8号線拡幅	湯沢他1976
第10次	御経塚(9次)	昭和51年9～12月(1976)	調査団・野々市町教委	保存区域及び整備策定	高瀬他1983
第11次	御経塚(10次)	昭和52年9～11月(1977)	調査団・野々市町教委	分布確認、住宅新築	〃
第12次	御経塚(11次)	昭和53年12月(1978)	野々市町教委	国道8号線東側遺構確認	〃
第13次	御経塚(12次)	昭和55年3月(1980)	野々市町教委	国道8号線東側分布確認	〃
第14次	ツカダ	昭和55年9～11月	野々市町教委	御経塚第1土地区画整理事業	野々市1984・1989
第15次	御経塚(13次)	昭和56年3月(1981)	野々市町教委	国道8号線東側分布確認	高瀬他1983
第16次	ツカダ	昭和56年6～10月(1981)	野々市町教委	御経塚第1土地区画整理事業	野々市1984・1989
第17次	ツカダ	昭和56年10～12月(1981)	野々市町教委	御経塚第1土地区画整理事業	〃
第18次	デト	昭和57年4～6月(1982)	野々市町教委	壺藏文化財収蔵庫建設	〃
第19次	ツカダ	昭和57年10～12月(1982)	野々市町教委	御経塚第1土地区画整理事業	野々市1984・1989
第20次	ツカダ	昭和58年5～7月(1983)	野々市町教委	御経塚第1土地区画整理事業	〃
第21次	デト	平成元年7～12月(1989)	野々市町教委	御経塚第2土地区画整理事業	本書
第22次	デト	平成2年12月(1990)	野々市町教委	御経塚第2土地区画整理事業	〃
第23次	デト	平成3年4～5月(1991)	野々市町教委	ふるさと歴史館建設	〃
第24次	ブナラシ・デト	平成4年5～11月(1992)	野々市町教委	御経塚第2土地区画整理事業	本書
第25次	ブナラシ・デト	平成5年4～12月(1993)	野々市町教委	御経塚第2土地区画整理事業	〃
第26次	ブナラシ・デト	平成6年6～12月(1994)	野々市町教委	御経塚第2土地区画整理事業	〃
第27次	デト	平成7年5～10月(1995)	野々市町教委	御経塚第2土地区画整理事業	〃
第28次	デト	平成8年5～6月(1996)	野々市町教委	御経塚第2土地区画整理事業	〃

第2節 調査の経緯

今回、報告対象となる御経塚遺跡の調査は、御経塚地内で第二期の十地区西整理事業にあたる御経塚第二十地区西整理事業に伴い実施したものである。

国道8号線東側での御経塚第一十地区西整理事業が完了した昭和57年（1982）には、はやくも国道8号線西側一帯の御経塚町全域と長池町、二日市町の一部を含むJR北陸本線北側の地域について新たな十地区西整理事業施行の機運が高まり、地元では御経塚第二十地区西整理事業組合設立準備委員会が発足し準備作業が進められ同59年（1984）には事業認可が決定的となった。その事業区域には周知の御経塚遺跡・御経塚緑線が分布しており、さらに新たな埋蔵文化財の存在が想定されることから、十地区西整理準備委員会、野々市町都市整備課（現都市計画課）、野々市町教育委員会の三者により事前協議を行い、同59年12月～翌60年3月の冬季にかけて施行予定全域についての埋蔵文化財分布確認調査を急遽実施した。なお、同59年11月30日には面積60.1haが市街化区域に編入されている。分布調査では新たに御経塚シンデン遺跡、御経塚オッコ遺跡、長池キタノハシ遺跡、長池ニシタンボ遺跡、二日市イシバチ遺跡を発見した。その後の協議で埋蔵文化財は、記録保存を目的とする緊急発掘調査とし、道路築造部分と併せ住宅及び店舗等が建設必至の街区内についても調査の対象範囲に含め、野々市町教育委員会が受託事業として実施することを確認した。翌61年6月12日に野々市町御経塚第二十地区西整理組合設立準備委員会と協定を締結している。

第3節 調査の経過（第4回）

御経塚遺跡は、史跡指定地周辺において広範囲な調査地区が想定されることから、石川広域農道を境にして南側をデト地区、北側はブナラシ地区として調査を進めることにした。以下、調査の経過は地区毎とする。また、調査時に使用した調査区名を（ ）で示している。

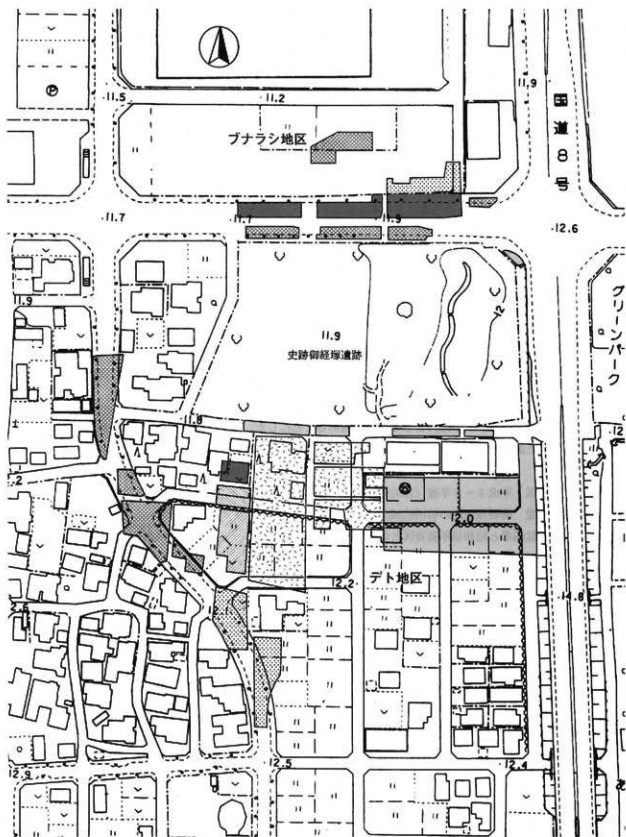
1 ブナラシ地区 平成1～6年度（1989～94）

平成4年度調査 御経塚地内の石川広域農道は都市計画道路の元川一御経塚線となることから、平成4年の調査区はその道路拡幅部と昭和48年調査区との間の街区を調査対象とした。調査区は東西に細長い形状となり、水田の区画にもとづき東から3区の一部（2-1区）、6区（1-1区）、8区（0-1区）の3区に分かれることになった。6月3日に調査を開始し、重機による表土除去作業後8区から包含層の調査を進めた。地山まで包含層の調査作業を3～4段階行いながら遺構の確認作業をすすめた。遺構の多くは地山付近になるまではっきりしなかった。3区では配石遺構を取り囲むように下野式後半期の埋設土器5基を検出し、その東南部では遺構がみられず、この地区を集落の広場と推定した。この地区を現状に囲むように遺構密度の高いピット群や半截木柱の痕跡を検出したが、遺構に關しての認識はピット・土坑群の域を越えず、建物に認識したものは僅かであった。調査の遅れと年内の調査計画から街区部は翌年以降に行うことにし、調査は11月13日で終了した。調査面積は980㎡である。

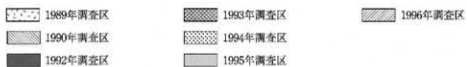
平成5年度調査 昭和50年調査区の北側に位置する街区部5区（1-3区）と、路床置換をするため石川広域農道敷である4区（2-A区）、7区（1-A区）、9区（0-A区）と道路拡幅部である1区（3-1区）の調査を実施した。5区と1区の調査を4月15日～6月10日にかけて行い、5区では井戸式期のか跡1基と、中層式期の埋設土器4基、土坑を検出した。1区ではピットを検出したものの詳細は不明である。

4・7・9区の調査は9月28日から開始し12月25日に終了した。前年度調査区と同様に調査を進め環状柱穴と推察できる遺構もみられたが、現場では遺構の多きから認識できなかった。この調査から空中写真測量を採用し、12月7日と25日に撮影した。調査面積は合計で890㎡である。

平成6年度調査 平成4年に調査を延期した3区の一部の街区部（2-2区）を実施した。調査は一時中断を挟み6月10日～7月21日と8月29日～10月12日に行い、最終日に空中写真測量を実施した。調査面積は390㎡である。



第4図 調査区位置図 (1/2,000)



2 デト地区 平成元・2・4～8年(1989・90・92～96)

平成元年度調査 史跡指定地南側の一部が、御経塚集落内を通過する道路計画に伴う住宅の移転先となったことで7～8区(C1～C3区)とII区(D区)の調査区を設定し、7月3日から調査を開始した。II区の北側から包含層の調査を始めるが、縄文時代の遺構は散発的であった。中央部で月影期の小型竪穴と環状的な溝を確認し、中央部では外周溝が廻る県下最大規模の大型竪穴建物1棟と中型竪穴建物1棟を検出した。南側では中世後期の井戸や掘立柱建物のみられ、現集落域への分布を推定した。10月30日から7～8区に移ったが、調査区はII河道路とほぼ重なり部分的な調査とし、実測作業を終え12月16日に調査が完了した。調査面積は3470㎡である。

平成2年度調査 街区道路の築造に急遽決定し対応したもので、12月4日～17日に調査を実施した。月影期の土坑1基と中世後期の溝を検出した。調査面積は190㎡である。

平成4年度調査 集落内道路の変更に伴う住宅改築が原因で対応したものである。5月26日に開始し6月5日に終了した。12区にあたり、月影期の竪穴建物1棟を検出した。調査面積は140㎡である。

平成5年度調査 集落内を通過する従来の調査で遺構の分布が確実視されることから7月12日に調査を開始した。北から15～18区(I～IV区)となる4地区の調査区を設定した16区から遺構検出を行い、近世後期の根石建物と中世期の井戸3基を検出した。7月26日からは17区に移り、近世の溝と井戸を検出しと中世遺構の遺存は良くなかった。8月26日に16・17区の空中写真測量を行っている。8月30日から15・18区を実施した。15区では縄文時代後期中葉の滷見式期の土坑と月影期の竪穴建物1棟を検出し、18区では中世の井戸群を検出している。10月24日に15・18区の空中写真測量を行い現場作業を終了した。調査面積は1210㎡である。

平成6年度調査 前年に引き続き都市計画道路部分の調査で、19区(V区)と20区(VI区)を設定した。10月11日に調査を開始し12月9日に終了した。10月18日から20区の遺構検出を始め、月影期の竪穴建物2棟と、中世期の掘立柱建物や竪穴状遺構を検出した。11月14日から19区の遺構検出に入る。中世と近世の井戸群を検出しているが、調査区を横断する近代の日本路は部分的な検出とした。12月8日に空中写真測量を行い9日に現場作業を終了した。調査面積は1160㎡である。

平成7年度調査 史跡指定地の南に接する東西方向の道路部分1・2・6・10区と、野々市町ふるさと歴史館の南側にある5区の調査を5月9日から開始した。まず国道8号線と平行する5区東側の道路築造部分を5月23日～6月20日にかけて行った。II小河道SD19を検出している。6月22～30日には国道8号線御経塚交差点南西側の拡幅部を調査した。この調査区は、ブナラシ地区の1区として報告している。6月21日～8月30日にかけては5区東半部の調査であり、8月9日にその部分について空中写真測量を行った。9月1日から1・2区の調査を開始した。良好な遺物包含層が残り、縄文期の方形建物SB04や埋設土器を検出した。9月29日に1・2区の空中写真測量を終え10月3日から再び5区の調査を実施した。縄文期の埋設土器や古墳時代後期と推定する掘立柱建物を検出した。10月17日の空中写真測量をもって5区の調査が終了し、10月19日から6・10区の遺構検出を始める。6区では自然河道SD23、10区では弥生時代の掘立柱建物1棟と11区から延びる溝SD26を検出した。最後の空中写真測量を10月30日に行い現場作業を終了した。調査面積は1620㎡である。

平成8年調査 街区の未調査分であった14区の調査を5月8日から実施した。遺構の検出を6月14日、実測作業は6月27日に終り現場作業を終了した。調査面積は330㎡である。

なお、出土品の整理作業は平成元年度から平成13年度にかけて行っている。

発掘調査の現地作業及び出土品整理作業は以下の方々に協力して頂いた。記して謝意を表する。

〔現場作業〕 相木秀雄、市村美知栄、依元たみ子、浅田恵子、井出和郎、伊藤恵行、大瀬戸武夫、大村麻子、小川加寿美、尾倉利男、尾崎義雄、黒田博昭、北和子、北川弘子、木村玉子、木村友吉、小松義一、小山岡作、小柳幹男、三崎友吉、辻田トキ子、新藤吉、高田マチ子、田中よね子、谷口珠江、塚本朋子、塚本千代子、塚本友江、寺島隆子、遠塚一豊、中黒正雄、中橋都、中村哲也、西幸次、藤本高代子、長谷川啓子、早崎長三、東 猛、矢失朋子、本田興子、浜野光雄、市村美紀子、南外志雄、宮野波、宮下トヨ子、村野俊子、八嶋正芳、山崎友子、吉田邦一

〔整理作業〕 市村美知栄 大杉幸江 川端敏子 竹田倫子 野村洋子 長谷川啓子 嶋山明美 宮本洋子

第3章 ブナラシ地区の調査

第1節 概要と地形 (第5～18図参照)

御経塚遺跡の分布域のなかで、都市計画街路正田一御経塚線の北側、かつ国道8号線の西側にあたる区域をブナラシ地区としている。この地区では国道8号線関連の調査をはじめ、国指定へむけた大がかりな発掘調査が昭和48～50年に実施されている。今回の調査区は、この調査区をさき東西約150m、南北約80mの範囲内に位置している。このため、調査グリッドは昭和48～50年調査時における4mグリッドを踏襲した(第5図)。このグリッドは水田の区画を基準としたもので、調査では公共座標を併用している。その調査地区の位置関係から調査区に1～9区の名称をつけて報告するものである(第5図)。

1・2区ではピット群を検出したが、小面積のため建物の復元にはいたらなかった。1・2区は、従来の調査で「凹地」または「河道跡」とされた地区で、昭和50～51年に実施された石川広域農道関係の調査では、晩期後半以降に大きな冠水の存在が報告されており(潮尻他1976)、ピットの検出はこれをうらづけるものであろう。

近接する3・4・6・7区は遺構密度がひじょうに高く、これらの地区で方形建物7棟、亀甲形建物27棟、円形建物16棟、合計50棟の建物(SB)を復元した。また、この建物群と複合するように埋設土器16基、土坑3基、配石遺構1基を検出している。

5区では、石甕炉1基、集中する4基の埋設土器、土坑10基を検出している。また、SD02は中世期の溝とかbがえられる。8・9区は遺構密度の低い調査区で、土坑とピットが認められた。

地山の標高は、1区ではほぼ10.10m、2区では9.58～9.90mで北西方向に傾斜している。3区では、北東部と南西部が10.41mと高く、中央部では北西から南東方向に傾斜する9.9～10.2mの凹地状の地形となり、この南東部では遺構のない区域が中央部される。4区は地山は標高10.00～10.35を測り東方向へ傾斜している。5区は、南西部が10.45～10.50mで、東半部は3区の凹地状地形が延びており10.17～10.24mを測る。6・7区は、西端部が10.50～10.58mと高く、東端は10.35m前後で東方向へ傾斜している。8・9区は、東端部が10.50～10.36mと高く、10.35～10.40mを測る西端部へ傾斜している。調査区での地山の高低差は約1mとなる。

全体を概観すると、6・7区と8・9区の間から5区南西部にかけて凸地状筋がみられ、他では3区の北東部と南西部で凹地状となる。凹地状の地形では、北西から南東方向が3～5区にかけてみられる。また、2区と3・4区の間ではデト地区SD23の延長となる「河道跡」がこの凹地と「X」状に交差するものと考えられる。

基本的な層序は、上位から①水田耕作土、②水田床土、③黒褐色粘質土、④暗褐色粘質土、⑤灰褐色粘質土、⑥黄灰色シルト質土(地山)である。

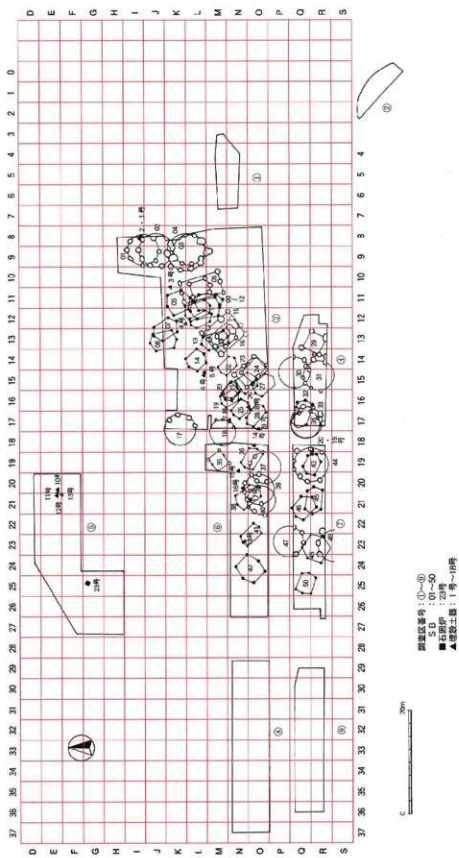
第2節 縄文時代

遺構とその出土土器については、1建物、2石甕炉、3埋設土器は遺構と土器を併せて記述したが、土坑は遺構の記述にとどめ、土器については6土坑・ピット出土土器でまとめて記述した。包含層出土土器も各区でまとめて記述している。また、その記述は実測図からでは確認しづらい点を主に行ない、相愛したものが多い。底部瓦痕の網代片痕は「超えー遊りー送り」とし材料の本数を記した。

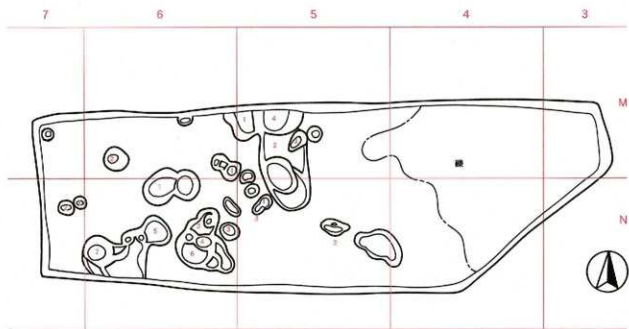
文様を有する土器等の型式については以下のとおりとしている。出土土器は後期中葉後半期からみられ、その中葉後半期は酒見式とし、後期後葉の前半は、井川Ⅰ式(井川Ⅱ式前半)・井川Ⅱ式(井川Ⅱ式後半)、後半は八日市新保Ⅰ式・八日市新保Ⅱ式とした。晩期は御経塚1～3(B-BC1)・中層Ⅰ(BC2)・中層Ⅱ(C1前半)・中層Ⅲ(C1後半)・下野(C2)・長竹(A)とし、並行する大海縄文を()と考えた。しかし、小片や粗製土器については不明な部分が多くあり、また、筆者の型式細分の不理解から混乱が生じていることを了す承願したい。

晩期の前半は、小島・西野・酒井1994の編年にて、後半は久川1998を、また全般的に南2001を参考としている。

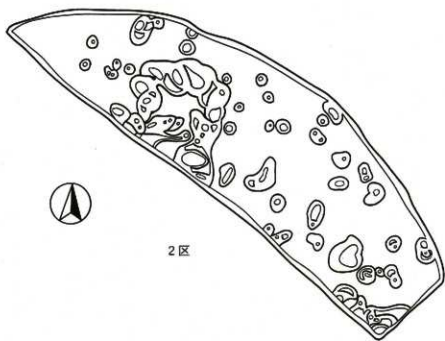
土製品、石器、石製品は8～10で記述した。土製品や石製品は出来るだけ多量を抱載したが、石器については典型的なものを図示している。



第5図 主要遺構分布図 (1/750)



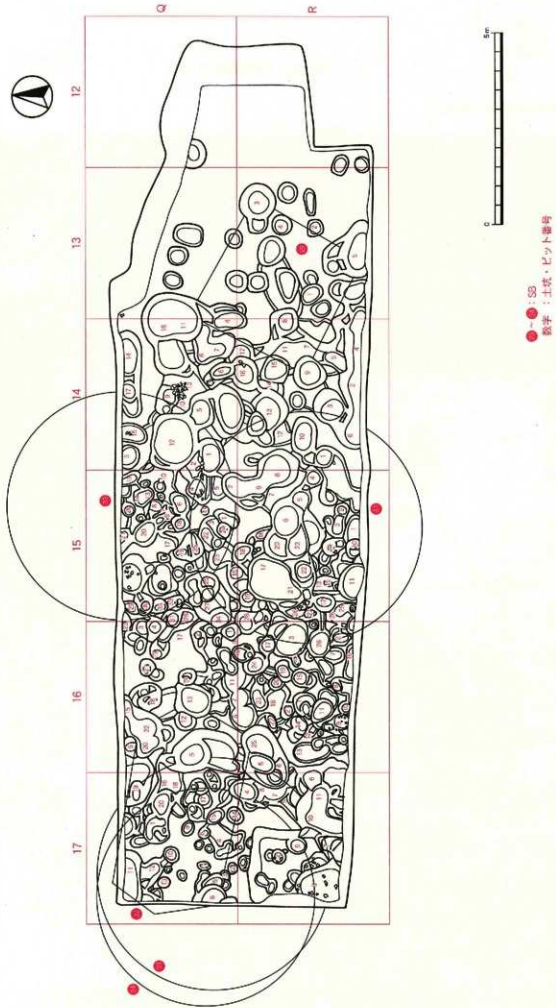
1区



2区



第6图 1·2区平面图 (1/100)



第7図 4区平面図 (1/100)



第 8 図 3 区平面図 (1/100)

●~●: SB
▲~▲: 埋設土器
数字: 土坑・ピット番号



17

16

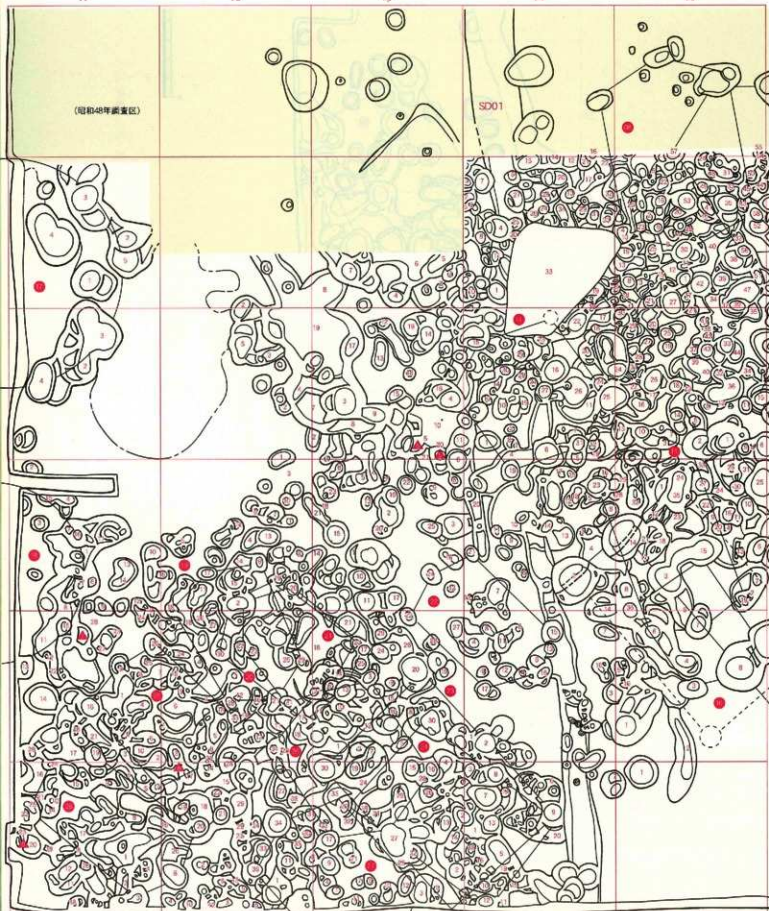
15

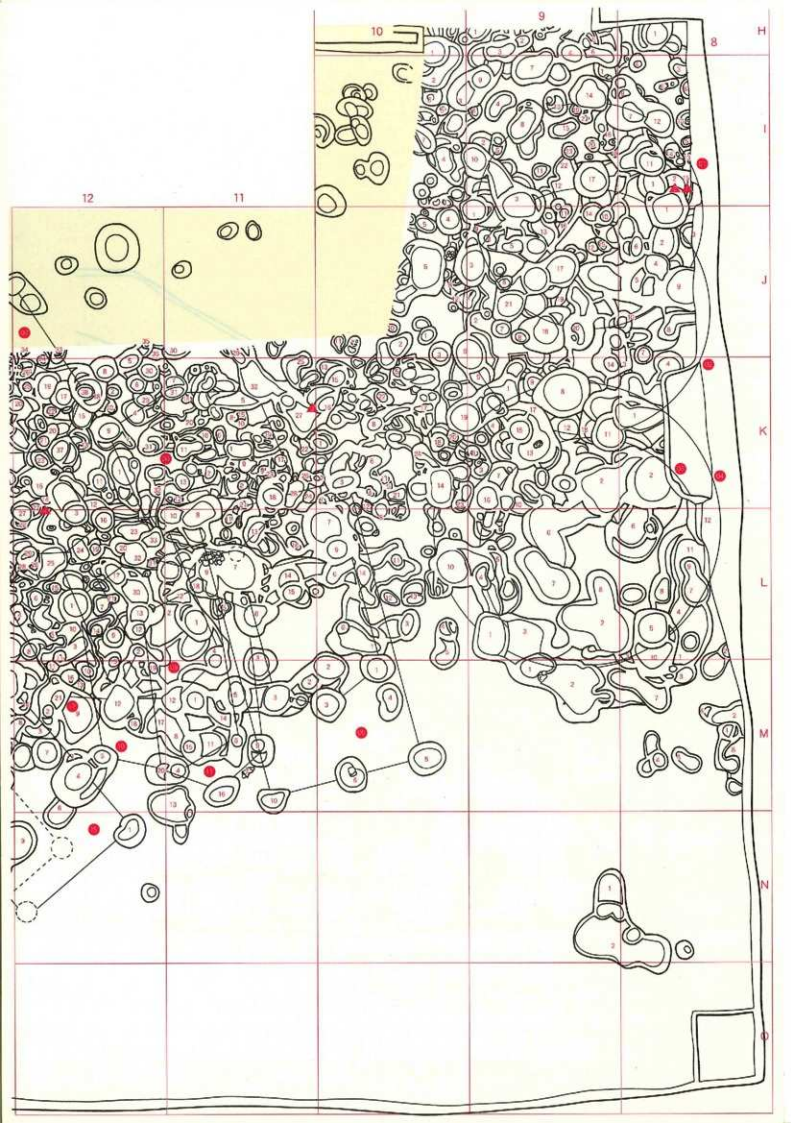
14

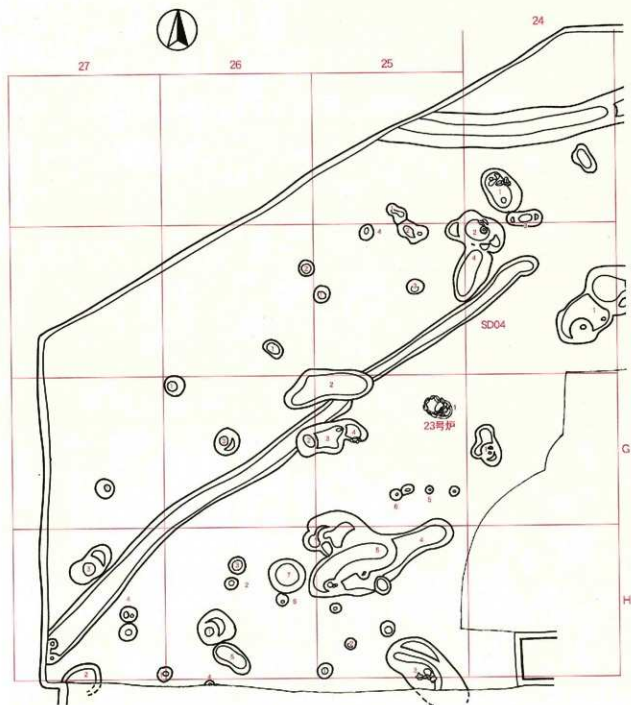
13

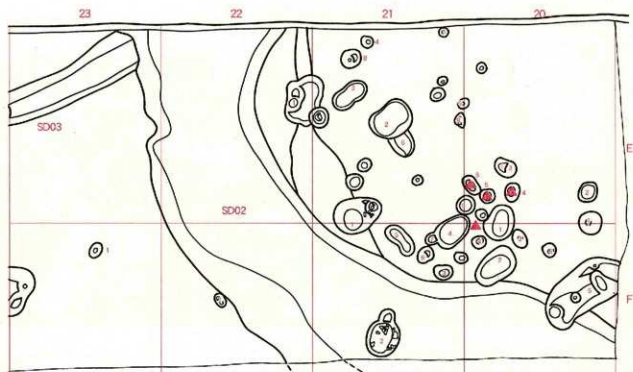
(昭和49年調査区)

SD01









▲-▲: 埋設土器
 数字: 土坑・ピット番号

第9図 5区平面図 (1/100)

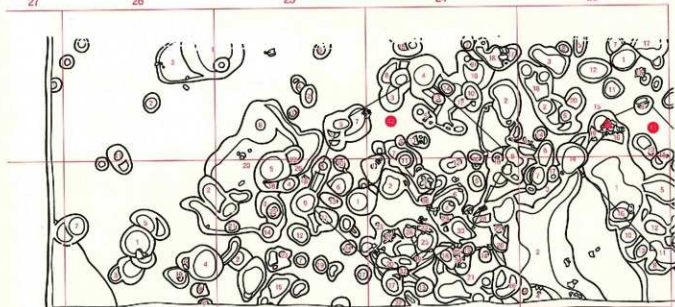
27

26

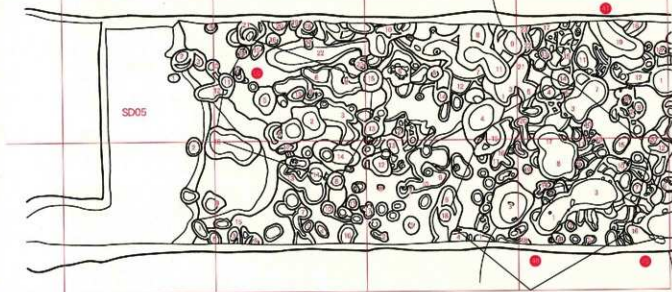
25

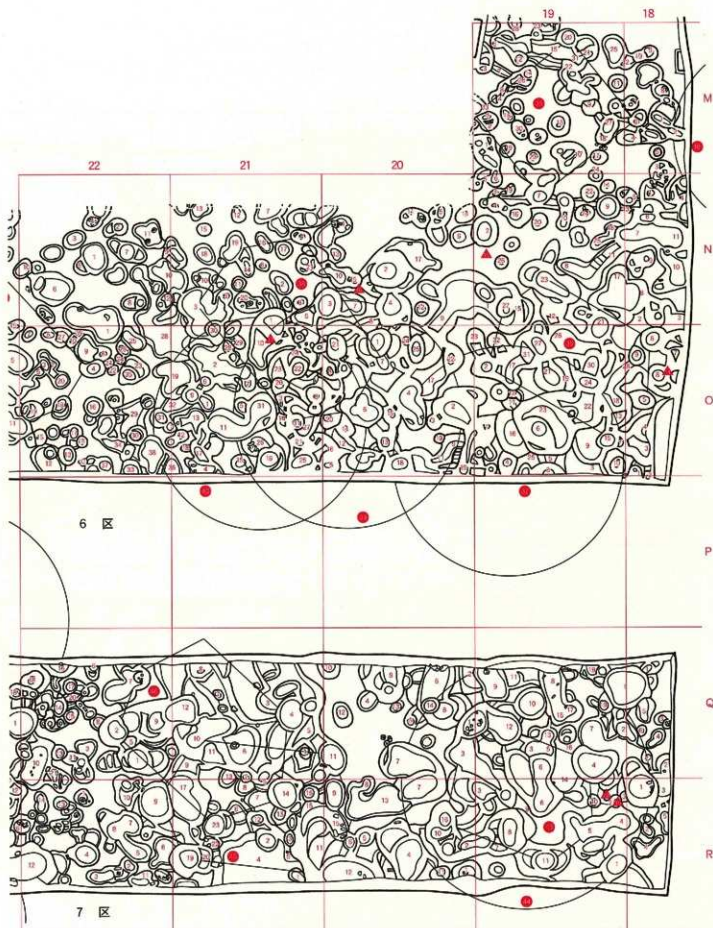
24

23

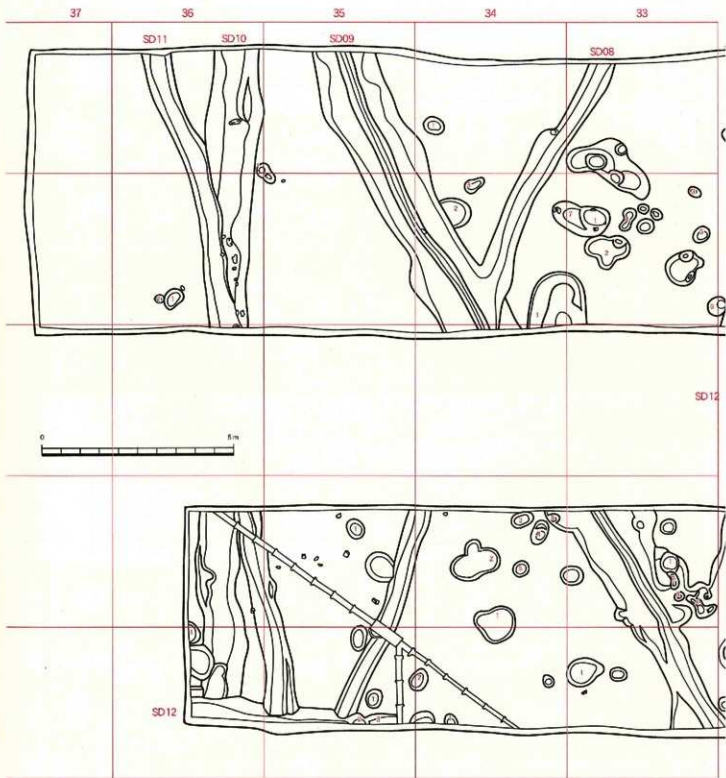


- : SB
- ▲-▲ : 埋設土器
- 数字 : 土坑・ピット番号



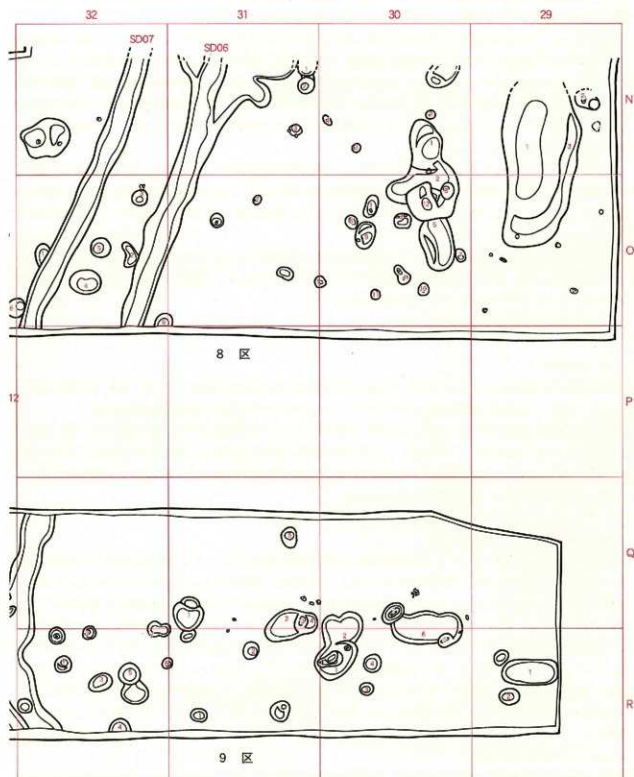


第10図 6・7区平面図 (1/100)



数字 : 土坑・ピット番号

第11図 8・9区平面図 (1/100)



1 建物

1) 建物の類型

建物は、木柱根を多数検出した金沢市新保木町チカモリ遺跡(南1983)の類例と、その検討により復元したもので、木柱を立てる構造物と推定されることから、「建物」の用語を使用した。平面の形態から方形、亀甲形、円形に大別し以下のとおり分類した。第4章デト地区も同様の基準としている。

方形建物は、1×1間配置で4本柱のA1類、桁行2間以上のA2類がみられ、このA1・A2類の木柱の多くは丸柱と考えられる。A3類は、柱の配置を内側と外側にもつち重配置になる建物で、布尾和史氏によって新たに認識されたものである(布尾2002)。外側の平面形は長方形で、この4間では半載柱の半載面を長軸で対向する配置とし、集落外部側の短軸では半載柱間に1本の丸柱を有するが、集落内部側の短軸については半載柱間の柱の有無は不明である。内側は、丸柱を1×1間配置にする4本柱の集落内部側に半載柱1本を加えて平面を五角形とするものである。

亀甲形建物は、籠峰遺跡(観跡・野村ほか1996)・青田遺跡(宮本2002)など新潟県の事例とチカモリ遺跡の検討から復元した6本柱の建物である。青田遺跡では丸柱を用いるが、チカモリ遺跡は半載柱である。建物の長軸が棟持となるB1類と、棟持≦梁行となるB3類があるが、長軸方向にもう1列架が加わるB2類の復元は行っていない。

円形建物は、いわゆる「環状木柱列」や「環状柱穴列」と呼ばれているものである。復元は、柱穴がほぼ正円上に配置されること、またその配置もほぼ線対称になることを基本とした。分類は6本柱のC1類、8本柱のC2類と10本柱のC3類としたが、C1類はみられない。

建物の類型は第5章第1節を参照願いたい。

2) 方形建物

方形建物7棟を復元した。その内訳は、A1類1棟(SB29)、A2類4棟(SB15・23・24・35)、A3類2棟(SB05・16)である。方形建物の規模は9.0~31.2㎡で、A1~A3類の順に大きくなる傾向がみられる。

柱穴名は建物ごと便宜的にP1からとしたが、併記する()内が実名称である。この実名称は「P」を冠し、「検出グリッド名-検出グリッド内番号」としたものである。柱穴の大きさは、複合のため推定したものが多く、柱穴の間隔は、柱穴の中央点を基準として求めている。柱穴からの出土土器については()で柱穴名を併記した。以上については円形・亀甲形建物も同様である。

SB05 (第12図・第46図1)

3区のK10・11~M10・11グリッドに位置するA3類の建物である。P1~6で長方形を構成する外側の規模は7.6×4.1m、面積は31.2㎡、面積は31.2㎡、長軸はN18°Wである。柱穴間は、長軸のP1~6とP3~P4が7.6mである。短軸のP1~2~3とP4~5~6はいずれも2.05mである。4隅の柱穴の平面形は楕円形と半月形があり、大きさは80~120×65~82cmである。底面標高はP5が9.7mと他の9.24~9.4mより深さは浅く、P5は外側構成の一員となるかは不明である。南側のP4・6では空洞化した半載柱の痕跡がみられた。近年まで木柱根が残っていたが、地下水位の低下による腐食で空洞になったものであろう。半月形となる痕跡の大きさは、P4で弦長80cm、厚さ31cm、P6は弦長82cm、厚さ35cmであった。丸軸中間のP2・5は略円形で、径70~90cmである。

内側に配置される柱穴では、長方形配置のP7~10の規模は3.4×2.7mで、P11はP9~10軸から55cm離れて位置する。P7~8軸と外側のP1~3軸の間隔は1.7mである。柱穴は略円形で、大きなP7・8が径100~130cm、他は径90~100cmである。

浅鉢1は口縁部で僅かに外反する器形で、内面に2条沈線をもつ。また、P2から緩い勾配の字L1線に縦行条痕文を施す破片がみられた。以上は下野式前半期であろう。

SB15 (第13図・第46図2・3)

3区のL13、M12・13、N12・13グリッドに位置するA2類の建物である。柱穴P5・7は複合するSB16と共に

通して復元したもので、柱穴1基は現場での見落としと考えられる。3間×1間配置の規模は6.5×3.5m、面積は22.8㎡、長軸はN44°Wである。柱穴間は、P1～2～3～4が順に1.5・3.0・2.0m、P5～6～7は順に1.7・3.1mを測り、中間の柱間の間隔が広い。P5では空洞化した半載柱の痕跡がみられ、その大きさは弦長66cm、厚さ26cmであった。柱穴は略円形や楕円形で、大きさは90～130×80～120cmである。

2は眼鏡状文をもつ浅鉢で、楕円文内には縄文を施しているようである。浅鉢3の口縁部外面には赤彩痕がみられる。図示していないが、P2・3からは縦行条痕文を施す深鉢の破片が出土している。以上は下野式後半期である。

SB16 (第14図)

3区のM13・14、N12～14グリッドに位置するA3類の建物である。柱穴P2・8は複合するSB16と共通して復元したもので、外側配置の柱穴2基は現場での見落としと考えられる。確認した外側の柱穴は短軸のP1～3で、P2 (SB15～P5) を丸柱とすると、SB16はSB15に先行するものと推定できよう。外側は短軸3.9mで長軸は不明である。P1では空洞化した半載柱の痕跡がみられ、その大きさは弦長56cm、厚さ15cmであった。柱穴は略円形や楕円形で、大きさは120～130×80～120cmである。

内側に配置される柱穴では、長方形配置のP4～7の規模は2.7×2.4mで、長軸はN42°Wである。P8はP6～7軸から50cm離れて位置し、P4～5軸と外側のP1～3軸の間隔は1.8mである。柱穴は略円形で、大きなP6・8が径110～120cm、他は径60～100cmである。

図示していないがP2から長竹式の楕円区画T字文をもつ浅鉢片が出土している。

SB23 (第15図・第46図4～7)

3区のN14・15～O14・15グリッドに位置するA2類の建物である。2間×1間配置の規模は5.2×3.6m、面積は18.7㎡、長軸はN47°Wである。柱穴間は、P1～2・P2～3・P4～5は2.6mを測る。柱穴は略円形や楕円形で、大きさは80～90×70～80cmである。

深鉢4は酒見式で、C字状の階帯には貝殻と考えられる刻みが施される。浅鉢5～7は長竹式である。5は眼鏡状文と楕円区画T字文、外面が赤彩される7の文様は菱形になるものか。

SB24 (第16図)

3区のN14・15～O14・15グリッドに位置するA2類の建物である。2間×1間配置の平面形はやや歪み、規模は4.3・4.5×2.8・3.0m (平均値4.4×2.9)、面積は12.8㎡、南側長軸はN56°Wである。柱穴間は、P1～2が2.3m、P2～3が1.9m、P4～5が2.2m、P5～6は2.3mを測る。柱穴は略円形で、大きさは65～100×55～70cmである。

出土土器は図示していないが、P2・4・6から中層2～3式の土器が出土している。

SB29 (第17図)

4区のQ13・14～R13・14グリッドに位置するA1類の建物である。方形配置の規模は3.4×3.3m、面積は11.2㎡、長軸はN66°Wである。単独となるP2・4は略円形で、径82～98cmである。

出土土器は図示していないが、P4から短い無文口縁部が弱く屈出し、下部に列点文をもつ中層3式土器が出土している。

SB35 (第17図)

6区のM18・19、N19グリッドに位置するA2類の建物である。2間×1間配置の規模は3.1×2.9m、面積は9.0㎡、短軸はN42°Wである。柱穴間は、P1～2～3が順に1.7・1.4m、P4～5～6は順に1.8・1.4mを測る。柱穴は略円形で、大きさは25～70cmである。

出土土器は図示していないが、P4から中層2式の瓦片が出土している。

3) 亀甲形建物

亀甲形建物27棟を復元した。その内訳は、B1類25棟 (SB06～14・19・20～22・25～27・28・32・36・38・41・43・45・46・50)、B3類2棟 (SB42・48) である。

B1 類の規模は、面積8.0～17.5㎡の範囲であり、9.9㎡以下が8棟、10.0～14.9㎡が13棟、15.0㎡以上は4棟である。B3 類2棟の規模は面積17.3・18.5㎡で、亀甲形建物では最も大きな部類である。

建物の規模は、平均値の桁行×奥行と棟持長で表し、方位は棟持軸とした。

SB06 (第18図)

3区のK11・12～L11・12グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.1×4.0m、棟持4.7m、面積15.6㎡、棟持方位はN21°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模68～92×68～80cmである。

出土土器は図示していないが、P1から口唇部が突り縦行条痕文をもつ野野・長竹式の深鉢片が出土している。

SB07 (第18図)

3区のJ12・13～K12・13グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.3×3.0m、棟持5.1m、面積12.6㎡、棟持方位はN36°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模52～100×42～82cmである。

出土土器はなかった。

SB08 (第19図)

3区のJ13・14～K13・14グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.7×3.6m、棟持5.1m、面積15.8㎡、棟持方位はN11°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模52～76×48～52cmである。

出土土器は図示していないが、P5から入組三叉文をもつ中層2式土器が出土している。

SB09 (第19図)

3区のL11・12～M11・12グリッドに位置するB1類の建物である。規模は4.1×2.9m、棟持5.2m、面積13.5㎡、棟持方位はN24°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模58～122×58～98cmである。

出土土器は図示していないが、P4から縦行条痕文をもつ下野式の深鉢胴部片が出土している。

SB10 (第20図・第46図8)

3区のL11・12～M11・12グリッドに位置するB1類の建物である。規模は4.2×3.5m、棟持5.8m、面積17.5㎡、棟持方位はN14°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模70～86×54～86cmである。

深鉢8は口縁部が内傾する器形で、口唇部に沈線が引かれる。長竹式の所産であろう。

SB11 (第20図・第46図9)

3区のL11・12～M11・12グリッドに位置するB1類の建物である。規模は4.0×2.7m、棟持5.5m、面積12.8㎡、棟持方位はN9°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模66～100×48～86cmである。

9は酒見式の浅鉢である。図示はしていないが、P1からは緩いくの字口縁で縦行条痕文を施す下野式の深鉢片が出土している。

SB12 (第21図・第47図10・11)

3区のL12・13～M12グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.9×2.4m、棟持4.5m、面積8.9㎡、棟持方位はN30°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模54～120×46～106cmである。

浅鉢10、深鉢11は酒見式である。10の降帯ぎみとなる2段の沈線間は、上段が刻山文で下段は充填縄文である。図示していないが、P6から緩いくの字口縁で縦行条痕文を施す中層2式土器が出土している。

SB13 (第21図・第47図12)

3区のL13～M13・14～N13グリッドに位置するB1類の建物である。規模は4.2×2.7m、棟持5.3m、面積12.8㎡、棟持方位はN21°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模54～74×46～66cmである。

12は酒見式の深鉢である。図示はしていないが、P4・6から中層2式土器が出土している。

SB14 (第22図・第47図13)

3区のL14・15～M14グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.5×3.2m、棟持3.8m、面積10.1㎡、棟持方位はN46°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模54～90×48～70cmである。

13は御経塚式の深鉢である。図示はしていないが、P1から緩いくの字口縁に縦行条痕文を施す下野式の深鉢片が出土している。

SB19 (第22図)

3区のM16～N16グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.9×2.4m、棟持3.8m、面積8.0㎡、棟持方位はN32°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模38～51×26～54cmである。

出土土器は図示していないが、P5からくの字口縁の深鉢で口縁部のLR縄文地に2段の横位短沈線をもつ中層2式の小片と1唇部の一部を三角状に刻む横行条痕文土器片が出土している。

SB20 (第22図・第47図14～16)

3区のM15・16～N15・16グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.9×2.5m、棟持3.7m、面積8.3㎡、棟持方位はN54°Wである。柱穴は略円形で、径34～64cmである。

深鉢14・15、蓋16は御経塚式である。図示していないが、P5から斜行条痕文地に横行する連続短沈線文を2段施す下野式前半の深鉢肩部片が出土している。

SB21 (第23図)

3区のM15・16～N15・16グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.1×2.3m、棟持3.2m、面積6.1㎡、棟持方位はN50°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模38～80×28～58cmである。

出土土器は図示していないが、P6から縦行条痕文を施す下野式の深鉢胴部片が出土している。

SB22 (第23図)

3区のM14・15～N14・15グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.9×2.4m、棟持4.0m、面積8.3㎡、棟持方位はN51°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模42～68×36～56cmである。

出土土器は図示していないが、P3からやや外反する口縁部で横行条痕文を施す深鉢が出土している。中層2式であろう。

SB25 (第23図)

3区のN16・17～O16・17グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.8×2.6m、棟持3.5m、面積8.2㎡、棟持方位はN45°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模28～90×24～56cmである。

出土土器は図示していないが、P4から細い縦行条痕文と3条の沈線がみられるを施す下野式の深鉢小片が出土している。

SB26 (第23図)

3区のN15・16～O15・16グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.9×3.2m、棟持推定4.1m、面積10.1㎡、棟持方位はN32°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模54～66×40～54cmである。

出土土器は図示していないが、P6から中層2式と考えられるLR縄文と沈線文をもつ小片が出土している。

SB27 (第24図)

3区のO15・16グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.4×3.0m、棟持推定4.3m、面積推定11.6㎡、棟持方位は推定N45°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模64～84×52～74cmである。

出土土器は図示していないが、P2から短い無文のくの字口縁で、口唇部に三角状刻みをもつ中層3式の小片が出土している。

SB28 (第24図・第47図17～19)

3区のN17～O16・17グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.6×2.4m、棟持4.5m、面積9.7㎡、棟持方位はN33°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模44～98×36～64cmである。

浅鉢17は中層2式で、蓋18、口唇部と外面に赤彩痕がみられる浅鉢19は中層3式であろう。図示はしていないが、P6から鋭いくの字口縁に縦行条痕文を施す下野式の深鉢小片が出土している。

SB32 (第24図・第47図20)

4区のQ16・17～R16・17グリッドに位置するB1類の建物である。規模は4.1×3.0m、棟持推定5.8m、面積推定14.9㎡、棟持方位は推定N80°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模94～112×88～96cmである。

20は1段のLR縄文地に列点文を施すもので、外面は赤彩される。割れ口の状態で蓋とも考えられる。中層3式であろう。

SB36 (第25図)

6区のN19・O18・19グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.5×2.8m、棟持4.4m、面積11.1㎡、棟持方位はN60°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模62～80×40～64cmである。

出土土器は図示していないが、P4から縦行条痕文と沈瀬間列点文の下野式の深鉢小片が出土している。

SB38 (第25図・第47図21)

6区のN20・21～O20・21グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.9×3.0m、棟持5.2m、面積13.7㎡、棟持方位はN41°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模40～78×38～51cmである。

21は内外面が赤彩される御経塚式の浅鉢である。図示はしていないが、P5から緩いくの字口縁で、無文地に2平行沈瀬を施す肩部小片が出土している。中屋3式であろう。

SB41 (第26図)

6区のN22・23～O22・23グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.6×2.5m、棟持4.2m、面積9.8㎡、棟持方位はN46°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模60～88×40～80cmである。

出土土器は図示していないが、P4から内傾口縁で斜行条痕文の長竹式とみられる深鉢片が出土している。

SB42 (第26図・第47図22)

6区のN24・25～O24・25グリッドに位置するB3類の建物である。規模は3.2×4.6m、棟持4.3m、面積17.3㎡、棟持方位はN50°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模72～112×46～86cmである。

22は八日市新保2式の浅鉢である。図示はしていないが、P4から縦行条痕文を施す胴下半部片と底部片が出土した。下野～長竹式か。

SB43 (第27図)

7区のQ19・20～R19・20グリッドに位置するB1類の建物である。規模は2.6×2.8m、棟持4.1m、面積9.4㎡、棟持方位はN67°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模62～126×58～88cmである。

出土土器は図示していないが、P3から緩いくの字口縁に縦行条痕文を施す下野式の深鉢片が出土している。

SB45 (第27図・第47図23)

7区のQ20～22・R20～22グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.7×3.1m、棟持5.1m、面積13.6㎡、棟持方位はN90°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模76～114×58～94cmである。

23は井口2の浅鉢である。図示はしていないが、P1から下野式とみられる縦行条痕文の深鉢胴部片が出土している。

SB46 (第28図・第47図24・25)

7区のQ21・22～R21・22グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.5×3.3m、棟持5.0m、面積推定14㎡、棟持方位はN55°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模74～96×58～90cmである。

24・25は八日市新保2式の深鉢である。図示はしていないが、P4から平縁で口縁部に縄文帯をもつ小片と緩く外反し沈瀬をもつ肩部片とがみられ、前者は御経塚3式、後者は中屋式か。

SB48 (第28図・第47図26・27)

7区のQ23・24～R23・24グリッドに位置するB3類の建物である。規模は2.9×4.8m、棟持4.8m、面積推定18.5㎡、棟持方位はN36°Wである。柱穴は略円・楕円形で、規模50～122×42～90cmである。

26・27は八日市新保1式の浅鉢であろう。図示はしていないが、P4から縦行条痕文を施す下野式とみられる深鉢小片が出土している。

SB50 (第28図・第47図28・29)

7区のQ24・25～R25グリッドに位置するB1類の建物である。規模は3.3×2.9m、棟持4.0m、面積10.6㎡、棟持方位はN75°Wである。

28は酒見式の深鉢であろう。浅鉢29は凹線文の上が刻日文となり、その下では縄文が施される。元住古山2式に比定されるもので、井口1式にあたる。図示はしていないが、P5から口縁部が縦行条痕文、頸部に1段の列点文、以下は横行条痕文の下野式とみられる深鉢片が出土している。

4) 円形建物

円形建物16棟を復元した。その内訳は、C2類6棟(SB01・17・30・31・34・49)、C3類10棟(SB02~04・18・33・37・39・40・44・47)である。

C2類の規模は、径5.4~6.1m、面積22.9~29.2㎡の範囲であるが、径5.4mのSB34のほか5棟は径5.8~6.1mで、ほぼ同規模となる。C3類の規模は、径5.0~7.3m、面積19.6~41.8㎡の範囲である。径5.0~5.5mが2棟、径5.8~6.2mが5棟、径6.5~7.3mが3棟となり、径6.0m前後の割合が高い。

建物の規模と面積は、遺構図上で柱穴を結んだ正円をもとに求めた値であり、方位として概ねの線対称軸を記した。また、この線対称軸がとる集落内部側の柱穴間を入口部と推定している。

SB01 (第29図)

3区の18・9~J8・9グリッドに位置する。8本柱のC2類で、径6.1m、面積29.2㎡である。P5~6間の線対称軸方位はN17°Eである。P1~7の柱穴間は、順に1.9・1.9・2.6・2.7・1.9・2.9mである。柱穴は楕円形で、規模78~122×70~110cmである。

出土土器は図示していないが、P4から縦行条痕文に沈線内列点文とS字状文をもつ胴部上部片とP7から縦行条痕文を施す下野式の胴部片が出土している。

SB02 (第30図・第48図30~35)

3区の18・9、J8~10、K8~10グリッドに位置する。10本柱のC3類で、径6.8m、面積35.8㎡である。南側柱穴はP7またはP8であり、P8はSB03のP2と同じものである。P6~7間の線対称軸方位はN17°Eである。P1~6の柱穴間は、順に2.1・2.1・1.9・2.4・2.4mで、P6~7は推定2.0m、P6~8は2.4mである。柱穴は略円・楕円形で、規模98~120×88~120cmである。

深鉢30、浅鉢31、注口土器32は酒見式である。32には貝殻彫文がみられる。深鉢33は井口1式である。深鉢34は頸部で沈線周列点文を施すもので、35は口縁に幅広の1条沈線、口唇部は面取りされ刺突が施されており、長竹式である。

SB03 (第31図・第48図36)

3区のK8・9~M8・9グリッドに位置する。10本柱のC3類で、径6.2m、面積30.2㎡である。P6~7間の線対称軸方位はN16°Wである。P1~9の柱穴間は、順に2.1・1.8・1.9・2.0・2.2・1.8・2.2・1.9mである。柱穴は略円・楕円形で、規模98~136×70~100cmである。

深鉢36は刻日凸帯文をもつもので、口唇部は面取りされている。長竹式である。

SB04 (第32図・第48図37~41)

3区のK8~10、L8~10、M8・9グリッドに位置する。10本柱のC3類で、径7.3m、面積41.8㎡である。P7~8間の線対称軸方位はN25°Wである。P1~9の柱穴間は、順に2.2・2.7・2.0・2.1・2.2・2.4・2.7・2.3mである。柱穴は略円・楕円形で、規模106~158×74~136cmである。

深鉢38・40は刻日凸帯文の深鉢で、口唇部は面取りされている。37・39は下野式、38・40は長竹式である。

SB17 (第33図)

3区のK17・L17に位置する。8本柱のC2類に推定し、径6.0m、面積28.3㎡である。P3~4間の推定線対称軸方位はN41°Wである。P1~4の柱穴間は、順に2.0・2.1・2.0mである。柱穴は略円・楕円形で、規模92~120×72~96cmである。

出土土器は図示していないが、P1から横行条痕文で頸部を刻み、3条の沈線間を刻む小片と、P3からは無文で口縁が短く、断面形状は、内面は緩いく字で外面は緩く外反する口縁部小片が出土しており、中屋3式とみられる。

SB18 (第33図・第48図42)

3・6区のM17・18~N17・18に位置する。10本柱のC3類で、径5.0m、面積19.6㎡である。P2~3間の推定線対称軸方位はN70°Wである。P1~4の柱穴間は、順に1.2・1.4・1.5mで、P5~6間は1.3mである。

柱穴は略円・楕円形で、規模52～70×38～50cmである。

42は御経塚式の深鉢である。図示していないが、P3から横行条痕文を施し、口唇部に小突起と短沈線がみられる中屋2式とみられる小片が出土している。

SB30 (第34図)

4区のQ14～16に位置する。8本柱のC2類で、径5.9m、面積27.3㎡である。P4～5間の推定線対称軸方位はN72°Wである。P1～5の柱穴間は、順に2.4・2.6・2.1・2.0mである。柱穴は略円・楕円形で、規模65～86×40～66cmである。

図示していないが、P4から口縁内面に凹線をもつ縦行条痕文の口縁部片が出土しており、下野式とみられる。

SB31 (第34図・第48図43・44)

4区のQ14～16・R14～16に位置する。8本柱のC2類で、径5.8m、面積26.4㎡である。P5～6間の線対称軸方位はN85°Wである。円形配置の柱穴P1～6と1.1m張り出すP7・8によって復元したもので、類例として富山県小杉町北野遺跡第2号柱跡がある(小杉町教委1987)。P1～6の柱穴間は、順に2.0・2.3・2.4・1.9・2.4mで、P7～8は2.3mである。柱穴は略円・楕円形で、規模66～100×60～100cmである。

深鉢43・44は酒見式である。43は口縁に粘土紐を蛇行して貼付している。図示していないが、P4からの縦行条痕文を施す深鉢胴部小片とP8から斜行条痕文地で沈線内を刻む小片は、中屋3式～下野式にあたろう。

SB33 (第35図・第48図45～49)

4区のQ17・R17に位置する。10本柱のC3類で、径5.9m、面積27.3㎡である。P3～4間の線対称軸方位はN51°Wである。P1～5の柱穴間は、順に1.8・1.8・2.1・1.8mである。柱穴は略円・楕円形で、規模64～98×50～98cmである。

45は八日市新保2式の浅鉢である。深鉢46と外面が赤彩される蓋49は中屋2式、3条の沈線間に列点文を施す深鉢47と外面が赤彩され口唇部に沈線を施す浅鉢48は中屋3式～下野式前半である。

SB34 (第35図)

4区のQ16・17～R16～17に位置する。8本柱のC2類で、径5.4m、面積22.9㎡である。P2～3間の推定線対称軸方位はN50°Wである。P1～3の柱穴間は、順に2.2・2.0mである。柱穴は略円・楕円形で、規模74～80×55～60cmである。P4・5はSB31でみられるような張り出して位置する柱穴の可能性がある。

図示していないが、P2からの胴下半部片は横行条痕文の下部から縦行条痕文とするもので、下野式と考えられる。

SB37 (第36図・第49図50～53)

6区のO18～20に位置する。10本柱のC3類で、径5.9m、面積29.6㎡である。P1～2間の線対称軸方位はN80°Wである。P1～6の柱穴間は、順に1.8・1.5・2.4・1.5・1.8mである。柱穴は略円・楕円形で、規模84～98×52～80cmである。

深鉢50は井口2式、深鉢51は八日市新保2式である。52の注土器は中屋1式で、外面が赤彩され入組三叉文の蓋53は中屋2式である。図示していないが、P5から緩いくの字口縁で細い縦行条痕文を施す下野式とみられる深鉢胴部小片が出土している。

SB39 (第36図・第49図54)

6区のN20・21～O20・21に位置する。10本柱のC3類で、径6.0m、面積28.3㎡である。P1～2間の線対称軸方位はN77°Wである。P1～6の柱穴間は、順に2.4・2.1・1.7・2.1・1.4mである。柱穴は略円・楕円形で、規模82～120×65～90cmである。

深鉢54は頸部に2列の沈線内列点文とその下に幅広沈線がみられ、地文は1段のLr縄文で、下野式前半期であらう。

SB40 (第37図・第49図55)

6区のN21・O20～22に位置する。10本柱のC3類で、径5.5m、面積23.7㎡である。P1～2間の線対称軸方位はN82°Wである。P1～6の柱穴間は、順に2.2・1.4・1.6・1.6・1.8mである。柱穴は略円・楕円形で、規

横75×110×60～90cmである。

深鉢53は八日市新保2式である。図示していないが、P1からの斜行条痕文地に横行条痕文を加える小片、P4からの外面横行条痕文で内面に2条の幅広沈線を施す口縁部小片と、無文地と縦行条痕文がみられる胴下半部片は中層3～7野式であろう。

SB44 (第37図・第49図56～62)

7区のQ18～20・R18～20に位置する。10本柱のC3類で、径6.5m、面積33.2㎡である。P7～8間の推定線対称軸方位はN70°Wである。P1～8の柱穴間は、順に2.2・1.8・1.6・1.6・1.9・2.6・2.2mである。柱穴は略円・楕円形で、規模90～118×70～116cmである。

深鉢56・59は御経塚1式土器である。壺57、蓋58の外面は赤彩されるもので中層2式である。壺60、深鉢61は口縁に沈線間の列点文をもつもので、60の外面は赤彩されている。62は楕円区画工字文の浅鉢である。60～62は長竹式である。

SB47 (第38図・第49図63～74)

7区のQ22～24に位置する。8本柱のC2類で、径5.8m、面積26.4㎡である。P3～4間の推定線対称軸方位はN54°Wである。P1～4の柱穴間は、順に2.5・2.0・1.8mである。柱穴は略円・楕円形で、規模90～100×65～82cmである。

63は口縁部内面に縄文と沈線をもち、64は2条沈線間に斜めの刻みをほどこすもので酒見式か。65～73は八日市新保式で、74は御経塚式である。深鉢65の胴部には巻貝の刺突を起点に弧線文がみられる。浅鉢68の文様は一見連結三叉文であるが、対向部をややずらしており齶付土器様式の入組文と考えられる。鉢67、浅鉢68の外面と浅鉢71の口唇部は赤彩されている。72は碗形の器形になるもので外面に赤彩痕がみられる。74は御経塚式の深鉢である。図示していないが、P1から口唇部を押し縦行条痕文が施され縁の字口縁になると考えられる口縁部片と、縦行条痕文をもつ胴部片が出土しており、以上は下野式である。

SB49 (第38図)

7区のR22～24に位置する。8本柱のC2類で、径6.0m、面積28.3㎡である。推定線対称軸方位はN68°Wで、P1～3の柱穴間は、順に2.2・2.2mである。柱穴は略円・楕円形で、規模138～168×90～120cmである。

図示していないが、P1から口唇部を押し横行条痕文が施される字口縁になると考えられる口縁部片と、斜行条痕文をもつ胴部片が出土している。中層式後半期と考えられる。

2 石囲炉

1基検出しており、石囲炉の名称はプナラシ地区1973～1975年調査(高橋他1983)からの連番とした。

23号炉 (第39図・第50図75・76)

5区のG25グリッドに位置する。単式の石囲炉で、隅には深鉢が斜位に設置される。8個の礎で囲む炉の規模は66×55cmで、長軸の方位はN65°Wである。礎は18～20cmのもの5個、15cm前後2個、11cmのもの1個を用いているが、南東隅の礎は耕作によって内側に移動したようである。周囲で柱穴を探索したが確認できなかった。

炉内に設置されていた深鉢75はほぼ完形に復元できたものである。口縁の内面にはやや斜めの押し文を連続し、焼成の良いものである。底部の網代止痕は「2-2-1」である。口径260mm、底径67mm、器高275mmである。75は煮炊きを使用した痕跡はみられない。76は炉内から出土した深鉢胴部片である。浅い3条の間線文下に刻みを施す井口1式のものである。

3 埋設土器

3・5～7区において20基の埋設土器を検出した。調査区別の検出数は、3区が9基、5区が4基、6区が5基、7区は2基である。3・6区にかけての埋設土器の分布は、東北東方向から西南西方向にむけて並ぶ傾向がみられる。やや離れた5区では4基が1地点に集中していた。

1号埋設土器 (P18-15) (第39図・第50図77・78)

3区の18グリッドに位置する。約40度の斜位に埋設した合口土器棺で、深鉢77(A)に深鉢78(B)を14cmほど被せており、深鉢Aの口縁方向はS67°Eである。深鉢A内にみられる長さ12・20cmの襷は上から落ち込んだもので、はじめは土器棺の上に位置していたものであろう。上坑PI8-15は楕円形で規模は90×72cm、底面は傾斜している。

77はほぼ完形に復元できた字口縁の深鉢で、口縁はわずかに内湾して外傾する。口唇部はD字状に連続して刻まれる。外面に条痕文を施し、その方向は口縁部がほぼ横行、頸部以下は斜行となる。器面は凹凸や輪積み痕がみられ、その調整は雑である。底部の圧痕は不明。内外面には炭化物が付着している。口径373mm、頸径329mm、底径96mm、器高390mmである。中層3式期の埋設土器であろう。

78もほぼ完形に復元できたもので、胴下半が大きく外傾する器形である。口縁は内側方向から輪積みされ、内面には指押さえ調整の押圧がみられる。内外面には炭化物が付着している。底部の網代圧痕は「2-2-1」、口径456mm、底径112mm、器高333mmである。

2号埋設土器(PI8-2)(第39図・第51図79)

3区の18グリッドに位置する。横位に埋設したもので土器棺は不明である。深鉢の口縁方向はS60°Wである。使用した深鉢は復元すると、遺存も2/3ほどで底部を欠くものであった。検出状況を見ると深鉢は埋設時には二つの大きな破片の状態で、まず一片を敷きその上にもう一片で被ったものと考えられる。上坑PI8-2の規模は不明である。

79は口唇部と外面にRL縄文を施す。井口1式と考えられるもので、口径は356mm、現存高345mmである。

3号埋設土器(第39図・第51図80)

3区のK10・11グリッド界に位置する。横位に埋設した単棺の土器棺で、口縁方向はS86°Eである。上部は削平をうけており遺存状態は3/4ほどである。底部を欠くが全周する深鉢を用いており、周辺には襷が多くみられる。上坑の掘方は不明である。

80は口縁がほぼ直立して緩い字口縁になり胴径が口径を超えるもので、外面は斜行条痕文が施され、口径370mm、頸径365mm、胴径383mm、現存高330mmである。下野式後半期であろう。

4号埋設土器(第40図・第51図81)

3区のK12・L12グリッド界に位置する。大型の壺を横位に埋設した単棺の上器棺で、口縁方向はN70°Eである。上部は削平をうけた土器の2/3は失われているが、底部と口縁部の一部がみられた。周辺には襷がみられる。上坑の掘方は不明である。

81は口縁に2条沈線間の列点文、肩部は3条沈線間の列点文が施される。推定口径380mm、推定頸径365mm、胴径486mm、底径111mm、器高612mm、底部圧痕は環状圧痕である。長竹式である。

5号埋設土器(PL15-20)(第40図・第51図82)

3区のL15グリッドに位置し、6号埋設土器と縦列する。壺を横位に埋設した土器棺で、口縁部は大きさ25×24cm(接合後)の別な土器片で蓋をしている。壺の口縁方向は約S70°Eである。上部は削平をうけているが遺存状態は良好である。上坑PL15-20は、楕円形で規模70×65cmほどであろう。底面南側隅には6~8cmの小襷が3個みられた。

82は口縁部の約2/3を欠くが、ほぼ完形に復元できたものである。口縁を肥厚させ突帯状にし、楕円状の押圧文を連続し、段をもつ胴部までを無文とする。底部の網代圧痕は「2-2-1」である。口径220mm、頸径225mm、胴径430mm、底径104mm、器高545mmである。長竹式のもので、縦列して埋設する6号埋設土器は同時期と推定する。図示していないが、82を蓋したものは壺様の器形となる土器片で、肩部に列点文がみとめられる条痕文土器である。

6号埋設土器(PL15-21)(第40図・第52図83・84)

3区のL15グリッドに位置し、5号埋設土器の西側に20cm離れて縦列する。壺83(A)を横位に埋設した土器棺で、口縁部は大きな深鉢土器片84(B)で蓋をしている。壺の口縁方向は約S70°Eである。上部は削平をうけているが遺存状態は良好である。土坑PL15-21は、楕円形で規模68×49cmである。

83はほぼ完形に復元できたもので、器形は無頸となり口縁部は無文帯とする。底部の網代圧痕は「2-2-1」で、口径210mm、胴径390mm、底径95mm、器高495mm。84の遺存は全周の約1/3で、口唇部が条痕調整され口縁は最大径の胴部から内傾する器形である。推定の口径324mm、胴径384mmである。長竹式後半である。

7号埋設土器 (PN17-28) (第40図・第52図85-87)

3区のN17グリッドに位置する。壺85(A)を横位に埋設した土器棺で、深鉢86(B)と鉢87(C)の破片によって蓋をしたものと推定しているが、削平によって不明な点が多い。壺Aの胴部は大きく削平され遺存は1/3ほどで、推定口縁方向はN30°Eである。このA土器内に落ち込んだ状態で鉢C片が多くみられた。土坑PN17-28は略円形で径70-76cmである。

85は頸部に幅広い沈線がみとめられ、推定胴径530mm、底径130mm、推定現存高570mmである。底部を欠くが86はほぼ完形にちかく復元できたもので、口径307mm、現存高300mmである。87も完形にちかいため、内傾する口縁部の上下に1条の沈線を施す内帯文系の浅鉢である。口径310mm、胴径340mm、現存高240mmである。85-87は長竹式である。

8号埋設土器 (第41図・第53図88-90)

3区のO16グリッドに位置する。横位に埋設した合口土器棺で、3個の土器を用いる。底部を欠く深鉢89(A)の下半部に90(C)を入れて底部として利用し、これに深鉢88(B)を合口として12-15cm入れ込む。Bの口縁方向はN34°Eである。周囲には塚がみられる。土坑の掘方は不明である。

88はほぼ完形に復元できたもので、口縁部は内傾する。口径353mm、胴径363mm、底径110mm、器高410mmで、底部の網代圧痕は「2-2-1」である。底部を欠くが89は全周にちかく復元できたもので、胴上部から口縁部にかけてほぼ直立する器形となる。2段の2条沈線周列点文が施された長竹式のものである。口径108mm、現存高332mmである。90の遺存は全周の1/3ほどで、胴上部から内傾する器形であろう。底径100mm、現存高312mm、底部圧痕は縞状圧痕である。

9号埋設土器 (第41図・第53図91-92)

3区のO17グリッドに位置する。横位に埋設した合口土器棺である。底部を欠く大形土器92(B)の胴下半部に深鉢91(A)を入れ込み合口としている。Bの底部側は同じ土器の破片でふさいでいる。Aの口縁方向はN65°Wである。周囲には塚がみられる。土坑の掘方は不明である。

91の遺存は削平のため約1/2である。口径320mm、底径89mm、器高345mmである。92の外面は条痕調整後磨かれていて、胴下半部は省略されている。長竹式であろう。

10号埋設土器 (PE20-4) (第42図・第54図93)

5区E20グリッドに位置する。胴部下半を欠いた深鉢を正位に埋設したものである。土坑PE20-4は楕円形で規模は48×36cmである。

93はほぼ全周を復元できたく字口縁のもので、口縁部は横行条痕文、頸部以下は斜行条痕文である。口径328mm、頸径298mm、現存高216mmである。中屋2式である。

11号埋設土器 (PE20-5) (第42図・第54図94)

5区E20グリッドに位置する。胴部下半を欠いた深鉢を正位に埋設した土器で、12号埋設土器の一部を壊していることから、これに先行する。土坑PE20-5は略円形で径40-45cmである。

94は口縁部が外傾するもので、ほぼ全周を復元できた。口径360mm、現存高275mmである。中屋1式か。

12号埋設土器 (PE20-6) (第42図・第54図95-98)

5区E20グリッドに位置する。深鉢95(A)を横位に埋設した土器棺で、その口縁部を深鉢96(B)・97(C)・98(D)3個体の大きな破片で蓋したものである。Aの口縁方向はS50°Eである。大きさ60×40cmの浅いPE20-6を確認したが埋設時の掘方規模は不明である。

く字口縁の95は完形に復元できたものである。外面の条痕文は、上半部が横行で下半部は斜行となる。底部の網代圧痕は「2-2-1」である。口径314mm、頸径284mm、胴径298mm、底径64mm、器高384mmである。96はほぼ全周を復元できたものである。口唇部は外側に刻まれ、台形状の押圧を入れるB字状突起が9単位みられる。

肩部の人組三叉文はやや直線化している。口縁部と胴部に結び目のLR襷文が施される。口径286mm、頸径230mm、胴径291mmである。97の遺存は全周の約1/3である。口唇部は小さな刻みと、この内側にハの字または三角状の刻みを施し、肩部から胴部に2段の入組三叉文がみられる。口径237mm、頸径196mm、胴径270mmである。98の遺存は全周の約1/3である。口唇は刻まれ口縁部はやや外傾するもので、推定口径368mmである。95～98は中層2式である。

13号埋設土器（第42図・第54図99）

5区E20グリッドに位置する。胴部下半を欠いた深鉢を正位に埋設した土器で、その西側の部分を欠いておりPF21-4が張り込まれたとき壊されたものと考えられる。土坑の掘方は不明である。

99の遺存は全周の1/2～1/3である。低い波状口縁の胴の張らない器形で、波頂部は逆六形状の持ち、波頂部にB字状突起をもつものと推定する。頸部の無文帯と胴部文様帯の境は低い段となり、あやくり帯縄文がほどこされる。推定口径316mm、頸径267mm、胴径280mm、現存高238mmである。中層1式であろう。

14号埋設土器（第42図・第55図100）

6区O18グリッドに位置する。大型の壺を約60度の斜位に埋設した土器棺である。上部は擾乱を受けておりその状態は不明であるが、別個体の破片や底部がみられることから蓋をした可能性が残るものである。壺の口縁方向は推定S70°Eである。周囲には線がみられる。土器棺東側に土坑掘方を認めるが全体は不明である。

100の遺存は口縁部が1/2で、頸部以下はほぼ全周を復元できたものである。器形の復元には疑問があり、口縁部はまだ内傾するものかもしれない。推定口径280mm、頸部径270mm、胴径462mm、底径108mm、推定器高580mmである。底部の網状圧痕は「2-2-1」である。長竹式であろう。

15号埋設土器（第42図・第55図101）

6区N19グリッドに位置する。底部を欠いた深鉢を横位に埋設した土器棺で、口縁の方向はN40°Eである。土坑の掘方は不明である。

101はほぼ円形に復元できたものである。口縁部は直立する器形で口唇部が尖りぎみとなる。口径422mm、現存高442mmである。下野式後半～長竹式。

16号埋設土器（第43図・第55図102）

6区N20グリッドに位置する。胴部下半を欠いた深鉢を正位に埋設した土器棺で、口縁部は削平のため失われている。土坑の掘方は不明である。

外面無文深鉢102の口縁部は緩いくの字口縁になると推察されるもので、中層2式であろう。胴径は252mmである。

17号埋設土器（第43図・第55図103）

6区O21グリッドに位置する。深鉢を横位に埋設した土器棺で、上部は削平のため失われている。口縁の方向はS55°Wであり、土坑の掘方は不明である。

103の遺存は全周の約1/5であったが、その復元はできなかった。緩いくの字口縁のもので口唇部は押圧される。推定口径384、推定頸径350mm、底径118mm、推定器高は実測復元図より高く約500mmである。底部の圧痕は簾状圧痕と推定する。中層3式であろう。

18号埋設土器（第43図・第55図104）

6区N23グリッドに位置する。深鉢を横位に埋設した土器棺で、上部は失われている。口縁の方向はN65°Wであり、土坑の掘方の一部は認められるが全体は不明である。

104の遺存は全周の約1/2である。口縁部がほぼ直立する器形で口唇部はD字状に刻まれる。条痕文は口縁部から下部に向い斜行、縦行となり、内面に斜行条痕調整がみられる。口径395mm、底径110mm、器高470mmで、底部は笹の葉状の圧痕である。長竹式の前中期。

19号埋設土器（第43図・第55図105）

7区R19グリッドに位置し20号埋設土器と隣接する。胴部下半を欠いた深鉢を正位に埋設した土器であるが、遺存は悪い。土坑の掘方は不明である。

105の遺存は全周の約1/2以下である。くの字口縁の屈折がゆるくの字唇部が刻まれ横行条痕文が施されるもので寸詰まり的器形である。口径382mm、頸径340mm、現存高193mmである。中壘3式であろう。

20号埋設土器 (第43図・第55図106)

7区 R19グリッドに位置する。遺存が悪く、胴部下半を欠いた深鉢を正位に埋設した土器と推定する。土坑の掘方は不明である。土器は薄手である。中壘式後半期か。

4 土坑

遺構密度の高い3・4・6・7区では建物の柱穴か土坑かの判断はつかないが、土器の出土状況から6区の3基を土坑とした。他の10基の土坑は5区で検出したものである。規模についての()は推定値である。土坑の名称は「P」を冠し、「検出グリッド名-検出グリッド内番号」としたものである。出土土器については、6土坑・ピット出土土器で報告する。

1) 5区 PE21-2、PF20-6、PF21-1・2、PH25-3~5、PF24-2・4、PG25-2・3 (第44図)

PE21-2は楕円状を呈し、規模は118×90cm、深さ24cmである。

PF20-6は長楕円状を呈し、規模は(190)×100cm、深さ42cmである。PF21-1は略円形を呈し、規模は96×92cm、深さ60cmである。PF21-2は楕円状を呈し、規模は104×82cm、深さ72cmである。PF24-2は楕円状を呈し、規模は(110)×94cm、深さ23cmである。PF24-4は楕円状を呈し、規模は(160)×90cm、深さ27cmである。

PG25-2は不整形で、規模は240×92cm、深さ17cmである。PG25-3は楕円状を呈し、規模は(140)×82cm、深さ18cmである。

PH25-3は楕円状を呈し、規模は(230)×116cm、深さ25cmである。PH25-4は楕円状を呈しPH25-5に先行する。深さは20cmだが規模は不明。PH25-5は楕円状を呈し、規模は(280×150)cm、深さ30・46cmで、2つ以上の土坑が複合している。

2) 6区 PN20-2・PO19-31・PO20-1 (第44図)

PN20-2は略円形を呈し、規模は110×100cm、深さ27cmである。PO19-31は略円形と考えられ、規模は(110×100)cm、深さ30cmである。PO20-1は楕円状を呈し、規模は(120×100)cm、深さ25~36cmである。

5 配石遺構

1基検出しており、その名称はブナラシ地区1973~1975年調査からの継番とした。

4号配石遺構 (第45図)

3区のM15・16~N15・16グリッドに位置する長方形の配石遺構で、約5.6×4.5mの分布範囲の全体を4号配石遺構とし、南側のN15・16~O15・16グリッド⑤の部分については、別の集石と判断している。この長方形の分布範囲のなかで、集石が密になるまとまりの①~④がみられる。①は2列の直線上の配石で、長さ120~130cm、間隔は40~50cmである。②は1列の直線上の配石で、長さ110cmである。③は略円形の配石で、大きさは100×90cmである。④は楕円形の配石で、大きさは100×60cmである。この④の西~南側で一定量の焼けた人骨を検出し、その種別は頭蓋骨、側頭骨、上顎骨、大腿骨、四肢であった。

配石は下部の土坑・ピットなどとの関連は認められず、配石内で石の存在しない地点においては、ピットなどの掘方と対応する例がみられる。

焼骨は、『野々市町史』編纂に伴い御経塚遺跡の焼骨資料について名古屋大学の新美倫子氏に鑑定を頂いたもの一つで(新美2003)、焼骨資料については機会をあらため別途報告したい。

6 土坑・ピット・溝出土土器

土坑・ピットの出土土器は、主に精製土器を抽出して図示したものである。土器は、出土した遺構名を上器実測図に記していることから記述は調査区ごととし、実測図で判断しがたい点に限った。また、実測図版とグリッドを概ねの単位とし、遺構名のグリッドまでを見出しとした。出土した遺構については第7～11図の各調査区平面図を参照願いたい。

1) 3区

PH8～10、PI9・10 (第56図107～130)

浅鉢107は口唇部に刻みを挟み三叉文が対向し口唇部は赤彩する。108は突起と沈線の上下が刻まれる注口土器であろう。深鉢109と連弧文の110は同一個体の可能性が高い。深鉢111は波状口縁の波低部で〔状の区切文を対向させ磨消縄文とする。深鉢113は頸部に沈線3条と連続刺突文を施し、口唇部は面取りされ内面の沈線上部には1段の縄文がみられる。114の内面は細い刻みである。115は区切文と沈線上部に縄文がみられる。118の口唇部には縄文が施される。119の文様は細い沈線と細かな刺突文で、施文は丁寧である。

120は口縁部に縦位の突帯をもつ浅鉢である。123の浅鉢外面は赤彩される。深鉢126は短沈線文と鎌の子文がみられ、その間に縄文を施す。深鉢127は縄文地に矢羽状文を施す。128は内面に半円状突起をもち外面は縦縄文を施し赤彩される。浅鉢130には入組み文と赤彩痕がみられる。

酒見式は108～113・118～120・125・127、井口1式は114・121、井口2式は116、八日市新保2式は128、御経塚1式は107、2式は122、3式は117・123・130、中屋2式は124・129、3式は126となろう。

PJ8・10、PK8～13 (第57・58図131～163)

浅鉢131の波頂部には刻みが施される。深鉢133の波頂部は円形に押圧され2条沈線間を刻む。深鉢134は矢羽状の沈線文がみられる。深鉢135は口縁部の方形区画の磨消縄文帯と貼付隆帯、その下には連弧文を有する。深鉢136・137は同一個体である。

口縁部の136は沈線2条と縄文が施される。胴部137の磨消縄文帯は横方向に長い連弧文状になり、縄文は1段の上縄文である。深鉢138の口唇部は上方から押圧されている。推定口径212mm。浅鉢139は粗い羽状縄文帯に沈線文を施し体部は無文とする。口径280mm。壺140は3条の押し列点文と赤彩痕がみられ、口縁部と胴下半は1段の縄文を施す。大洞系の浅鉢141は口縁にB字状突起が貼付され、外面は赤彩されるものでC2式期に比定されよう。注口土器144には釜具の回転文がみられる。ほぼ完形の深鉢146は、口径132mm、胴径107mm、底径32mm、器高109mmで、LR縄文を磨消す。浅鉢147は沈線で囲む三叉文がみられる。深鉢150は口唇部と屈折部にLR縄文が施される。深鉢153は刻み文で、155は楕円状の区画と縄文がみられる。緩い波状となる深鉢154は端部を刺突する沈線が施され、沈線間には刻み状のものがみられる。波頂部の上面は円形の押しと沈線内を連続して刺突したC字状文、細かい刻みがみられる。深鉢157は刻みを入れた縦の隆帯を貼付している。深鉢159・160は半衛状文系である。浅鉢161の外面に赤彩痕がみられる。

酒見式は133・135～137・139・142～146・150～158・163、井口1式は132、八日市新保1式は134、2式は161、162、御経塚1式は131・149、2式は147・148、3式は138・140、中屋1式は159・160、下野式は141であろう。

PL9・11～15・17 (第58・59図164～194)

深鉢165の内面には貼付粘土に三叉文が施される。蓋と考えられる166は糜手状の隆帯と三叉文の透かしをもち、外面は赤彩される。168は実測図が逆であり、鉢の高台部とも考えられる。深鉢170の文様帯の上下はLR縄文、172の沈線間はRL縄文が施される。浅鉢173の外面は赤彩される。浅鉢174は貼付隆帯間に円文がある。深鉢176の口縁部は蛇行状の貼付隆帯である。178は182と同一個体である。179は波状口縁になる浅鉢と考えられるもので、外面の突帯から内面の沈線間に赤彩痕がみられる。

深鉢182は焼成もよく精緻なつくりである。深鉢186は波頂部からC字状の隆帯が口縁下端の縄文帯へつながるもので、沈線の端部を刺突する。波頂部片の187は2条の沈線と円形押し文が施される。深鉢188・199の口縁

部は下部が肥厚し端部にかけて先細りとなる。深鉢191の胴部文様には長さ4cmほどの沈線を連続する。鉢190は擬縄文が施される。192・193は大洞系の浅鉢である。193の口唇部は三角形の彫去を内側と外側から行い連続する突起状となるもので、口径110mm、丸底気味の底径60mm、器高59mmである。深鉢194は逆C字状文による区画を右から左へ施文している。

酒見式は169・173・175・176・178・182・185・186、井口1式は187、2式は174、八日市新保1式は177・194、2式は181、御経塚1式は164・167、2式は165・166・183・190、中屋3式は168・188・189・191・193、下野式は184、長竹式は179・180であろう。

PM 8・9・13～16 (第59・60図195～207)

浅鉢196の口縁部は内面の沈線から外面の文様帯に、蓋197の外面に赤彩痕がみられる。深鉢199は口径166mm、頸径144mm、胴径182mmである。202は口縁外面に斜め方向から押圧を連続する。鉢203の外面には赤彩痕がみられる。高台の204は全面が赤彩されるもので、入組状の区画文と充填文が施される。205の口唇部に赤彩痕がみられる。

酒見式は200・201・206、八日市新保2式は207、御経塚2式は198・205、3式は199、中屋2式は197・204、3式は196・203、下野式は195・202であろう。

PN15～17 (第60図208～224)

浅鉢208の口縁部は赤彩される。209の幅広い沈線には先端が三角状となる處で連続する浅い押圧がみられ、口唇と口縁部に赤彩痕がある。210の口縁部は1段の縄文と幅広い浅い沈線が施される。鉢211・212の外面は赤彩される。浅鉢215は口唇部に半円状とこれをつなぐの肩付降帯がみられ縄文を施す。216の口縁部は肩付によってK字状文を連続するもので内外面が赤彩され口径は137mmである。217の口唇部と内面の段部、220の外面に赤彩痕がみられる。221の外面は縦行条痕文である。224は胴部径が器高を上まわる筒形になるもので、文様帯の下の幅15mmほどを浅く削りとり以下は斜行の条痕文となっている。

八日市新保1式は223、2式は213、御経塚1式は217、2式は210・222、3式は208・214・218・219、中屋2式は211・212・215・216・220、3式は224、下野式は209・221であろう。

PO14～17 (第61図225～238)

蓋225は隆帯と沈線による文様が組み合わされるもので外面は赤彩される。深鉢227の口唇部は楕円状に押圧され、外面は1段の縄文が施されている。229の内面、231の口唇部、232の口縁部内面、237の外面、238の口唇部に赤彩痕がみられる。

酒見式は228、御経塚1式は234・238、2式は225・231・232、中屋1式は230、3式は226・227・229・233・237、下野式は236であろう。

2) 4区

PO14～17、PRI3～17 (第62・63図239～262)

浅鉢239の外面は赤彩される。横行条痕文を施す深鉢240の口唇部には間隔をかけた三角形の彫去がみられ、推定流量は口径312mm、頸径278mm、胴径322mmである。口径380mmの浅鉢240は小さな突起をもつが単位は不明である。口唇部の突起間に幅広い沈線、内面の段部から外面に赤彩痕がみられる。深鉢244は口径191mm、頸径130mmである。浅鉢245は充填、246は磨消縄文で、外面は赤彩される。深鉢247は平縁に台形状の突起をもつもので、浅鉢248は平縁を半円状に挟り外面を積載する。253は凸帯文系の浅鉢であろう。深鉢254は緩い波状で、波頂部から逆C字状に隆帯を貼付し口縁部の上下は縄文を充填する。蓋257は焼成が悪く調整は不明である。258の口唇部には三角形の彫去を施す。259は浅鉢で外面が赤彩され、縄文は充填文である。浅鉢260は上方を楕円状に押圧する台形状の低い突起とB字状突起をもち、その突起間の口唇部は縄文が施され赤彩がみられる。小形の261は口縁部の1箇所に径2.5mmの円孔があり、口径45mm、器高20mmである。

酒見式は254・255、御経塚1式は249、2式は241・248・250、3式は239、中屋1式は256・257、2式は243、3式は258、下野式は241・242・251～253であろう。

3) 5区

PE20・21、PF20・21・24、・PR13~17 (第63~65圖263~299)

263は注口土器に推定するもので、口縁下部はRL縄文を施す。深鉢264の頸部では単位文として凹状に押圧する貼付がみられ、浅い凹線の端部を刺突する。265の波頂部は凹状に押圧される。266は口唇部を三角形彫去し、その周を外側から刻みB字状の突起状とする。270の押し文は凹文で、272は指頭による凹文、273は巻貝の殻頂刺突である。274の浅鉢は口径208mmで大きめの波頂部に凹形の押しがみられ、1対の縦貼付文を施す。275は弧線連結文である。小形の注口土器の276は弧線連結文の連結上部に三叉状の持ちがみられ赤彩される。注口土器277の胴上半部には赤彩痕がみられる。深鉢279は凹形押し文の周面に巻貝で斜位に押し凹線上部は刻まれる。282は末端を斜めに押しされる凹線文と巻貝殻頂刺突文が施され、口径337mm、底径67mm、器高180mmである。283は282と同様な文様をもつ深鉢の底部で底径は53mm。286の内面と外面凹線下部は刻目である。289は内面に凹線とRL縄文が施される。口縁部羽状縄文の290は口径226mmである。292の外面のLR縄文帯に赤彩がみられる。294の口縁部と肩部はRL縄文帯で赤彩痕がある。297は頸部で括れ内屈する口縁の深鉢である。口径158mm、底径50mm、器高167mmである。

涌見式は263・268・278・288~290・297、井口1式は264・267・279~287・291、2式は269・270・272~275・294・295、八日市新保1式は265・271・276・277、御経塚2式は292・293、中屋3式は266・296、下野式は298・299であろう。

4) 6区

PM18・19、PN18~21・23・24・26 (第66~68圖300~338)

301の口唇部は縦隆帯と連結三叉文が施される。303は注口土器で単位文は楔形頸去文である。305は赤彩され縄文地に刻目文と雲形文か。307は黒色を呈し三角状に括られる。309の口唇部は刻目入りの隆帯と沈線文が施される。310は赤彩される。312は台形波状口縁部片で凹孔をもつ。313の口径は284mm、316の口径は316mm、319の口径は258mmである。320は赤彩され、口径は287mmである。沈線で連結三叉文と轆轤文を描くが三叉部の頸去は雑で行わない部分もある。323の胴部は縦行条痕文である。324はB字状突起をもち、325と同一個体かもしれない。328・329は沈線内に列点文を施す。浅鉢330はLR縄文帯が赤彩され口唇部に十字状の隆帯に小突起が付く。331は口縁部に貼付隆帯がめぐり胴部は幅広の列点文をもつ。丁寧に磨かれた浅鉢332の凹線端部には巻貝の押しがみられる。333の波頂部には小さな刺突文、波底部は押しされた貼付文をもつ。334の内面はLR縄文帯である。335の波頂部にはX状に描く連結三叉文風の文様とT字状文がみられ、口径は169mmである。336の小突起下は巻貝押し文で、337の波頂部文は三叉文である。

涌見式は331、井口1式は332・334、2式は333、八日市新保1式は303・311・314~322・335・336、2式は302・307・309・313・326、御経塚1式は312・327、2式は300・301・310・337、3式は304・338、中屋2式は308・330、3式は324・325・328・329、下野式は305・323、長竹式は306であろう。

PO19~26 (第68~71圖339~394)

340の波頂部は山字状文である。341の口唇部は隆帯、連結三叉文、凹形押し文がみられる。344は凹形押し波頂と台形波頂が交互に4単位となるもので、口径180mmである。注口土器と思われる346に赤彩痕がみられる。348の口縁・胴部は無節縄文である。把手部の356の外面は赤彩される。363は口唇部に縦隆帯、内面に沈線がみられる。364は口唇が刻まれ内面に短沈線文、外面は沈線内に列点文を施す。365は蛇行沈線文か。366は縦縄文である。367は赤彩が施される。拓影は45度左回転が正しい。368は外面無文で拓影は内面内である。壺369は赤彩される。370の口唇部には隆帯、RL縄文、連結三叉文がみられる。371の口唇部には凹形・縦・斜隆帯、RL縄文と赤彩が施される。373の刺突文は巻貝殻頂である。375の三角輪状部は頸去されている。口径は330mmである。376は凹線文の浅鉢である。377の文様詳細は不明であるが、平行沈線間にX字状に沈線が引かれている。378は1対の刻み隆帯をもつ。379の口径は280mmである。381の内面に浅く半凹文がみられる。382のLR縄文帯は赤彩され、口径232mm、器高58mmである。384は沈線施文後、6単位の条線文を施す。385は凹形押し文で、386は台形波状片である。鉢387は口唇部に沈線と凹形刺突、外面の沈線内は連続刺突され補修孔がみられる。389は楔状押し、

392は羊歯状文である。393・394の刺突文は巻貝殻頂である。

井口1式は354・356・373・393・394、2式は353・357・376・385、八日市新保1式は339・352・358・363・375・378・380・384・387・389、2式は340・346・349・350・361・362・390・391、御経塚1式は347・351・368・370・374・386、2式は366・367・369・371・372、中屋1式は392、2式は382、3式は348・383、下野式は364・365・381であろう。

5) 7区

PR18・19・21・23・25、PR19～21・23・24 (第71～72図395～424)

396は型去された三角棘状文である。壺399の刻み突起は3個と考えられ、2個の円孔をもち外面は赤彩される。400はRL縄文地に短沈線が施される。402は外面と口唇部にRL縄文が施され内面の刻みは指環のようである。403は凹文と幅広沈線文である。404は幅広沈線の上部に同様の縦沈線を連続させるものであろう。405の単位文は楔形文である。406は内面にRL縄文が施される。407は縦沈線で寸断され文様部に赤彩痕がみられる。408は口唇部に沈線、内面にRL縄文が施される。409は台形状波頂部片で凹線文と巻貝殻頂刺突文が施される。凹線文の410にはRL縄文が施される。411は口唇部にナデによる幅広の沈線がみられる。412の口唇部にはLR縄文が施される。415は元住吉山1式糸上器である。418は齋付土器系の注口土器で、隆線による弧線文がみられる。420は粘土貼付に巻貝押印文を施す。423は下部凹線に巻貝の斜位刺突がみられ、424の同様の手法は雑である。

酒見式は406・408・415、井口1式は409・410・418・420・423・424、2式は398・402・403・412・413、八日市新保1式は397・400・405・407、2式は396・401、御経塚1式は416・417、2式は395・404・419・421、中屋3式は399・411・414となろう。

6) 9区

PR30・34、SD09・11 (第73図425～433)

425は沈線区画内に羽状縄文が施される。426は沈線文2条。427は細い横行条縄文で口縁端部をナデで無文帯とし、口径は332mmである。429は精緻な薄い土器で内面に段がみられ、文様は変形した羊歯状文か。431は刻目凸帯土器で肩部の刻目文の下部はケズリ調整である。

酒見式は425・426、八日市新保1式は427・428、中屋1式は429、2式は430、下野式は432・433、長竹式は431となろう。

7 包含層出土土器

包含層からの土器については、各地区において型式ごとの土器出土の分布様相が異なることから、地区別での報告とし、図の順序は土器型式に従ったが齟齬が生じているものが多い。なお、粗製土器の多くは割愛した。

土器は番号の横に括弧書きでグリッド名を表わし、ハイフンの次に土層名を入れた。土層の表記は、「B」が黒褐色粘質土、「BG」が暗褐色粘質土、「G」は灰褐色粘質土である。その次に数字を続けて表記する場合は同一層内の検出順を示し、大きい数字がその層内の下部になるものである。

しかし、調査では遺構の状況を確認し得たのはG土層または地山面であった。遺構密度が高く、この間の出土遺物は遺構内のものも含んでおり、現実には正確な層位による遺物の検出ではないことを認識いただきたい。

1) 3区 (第74～86図434～758・第125図40)

435の内面は突起をめぐり幅広のC字状沈線文がみられる。436は横位隆帯に逆C字状の隆帯が付く。注口土器438の沈線区画内は二枚貝の腹線文か。注口土器441の貼付刺突は巻貝と思われる。浅鉢口縁部445の沈線端部は刺突が加えられ、赤彩痕がみられる。446は入組むような弧線文と刺突文がみられる。447の沈線間は振縄文である。450の波頂部には逆C字状の隆帯が付き沈線下はRL縄文。451は逆C字状隆帯状となり端部は突起状である。452の波頂部は幅1cm前後で突起状に肥厚し刻みを入れる。453は貼付突起で沈線周の上下はRL縄文。454・462の刺突は巻貝か。459の隆帯はし字状となる。463口縁部の縄文は縄の閉端部にひねりを加えたものであろう。467は口縁下部が突帯状となる。470の口縁部は貼付縦隆帯を連続する。注口土器471は沈線内と端部が刺突

され、上部の口縁平行区画内は刻目で、下部の区画は438と同様に二枚貝の腹縁文か。473は3沈線間に単沈線を連続している。474は沈線の上下を刻んでいる。476は凹線文的である。478の口縁部は刻みで、479は凹文と沈線端部斜刺突である。483は口縁部に蛇行状の隆帯を貼付する。484は突起を弧線文ではさむ。484は押し引き列点文で赤彩される。487は小波状口縁と思われ波頂部を押し压す。493は注口土帯であろう。495は刺突される凹形隆帯をもつ。501は口唇部に沈線文、口縁部端部と波頂突起は刻まれ、刺突具は先の欠けた巻貝か。502の刺突も501と同じである。注口部509の刺突沈線下の半円状部にRL縄文がみられる。小形の注口土帯511の最大径は80mmである。514の注口部は環状隆帯に刺突突起を貼付し赤彩される。515は口縁部を刻み口径は156mmである。518は口唇部に縄文を施す。519は口縁部に刺突突起をもつ。

434~519を酒見式土器と判断したが、441は井口1式、447・515は御経塚3式、485・511は中屋2式であろう。520は凹形押し文で、521では巻貝の押しと斜位の殻頂刺突が施される。522は刻目文と内面沈線端部に刺突がみられる。523の単位文は巻貝押し文である。526の刺突は巻貝の殻頂部である。

520~526を井口1式と判断したが、522は酒見式で、527は時期不明である。井口1式は521・522・526、他は2式であろう。

528での刺突具は不明である。浅鉢531は赤彩される。530・533は無文である。532は凹形押し文が沈線を寸断する。534は2沈線文による鋸歯状文間が要欠される。浅鉢535には赤彩痕がみられる。536は隆帯をもつ。537は隆帯間に縄文と連結三叉文が施される。538は口縁部と胴部にL縄文帯をもつ。541は推定口径346mmで、文様帯に赤彩痕がみられる。長楕円状区画文であろう。543は隆帯、X字的縦帯の連結三叉文、凹文をもつ。544は隆帯と壘去する連結三叉文をもつが、器壁は543より薄い。

528~544を八日市新保式と判断した。1式は528・530~533・541、他は2式であろう。

546の外表面は赤彩される。547の口唇部は赤彩され隆帯をもつ。浅鉢548は突起上に三叉文とN字状隆帯をもつ。551は突起側面を凹形とし刺突を入れる。554はコップ状の器形となろう。552は無文で押し压される小突起をもつ。556は壘形器形である。557・560はL口唇部に小突起をもち擬縄文を施す。559は肥厚する内面に抉りによって玉抱三叉文とする。574は内面に2条の幅広沈線が施される。575は口唇部に押し压がみられる。

545~576を御経塚式と判断したが、561・570・572・576は八日市新保2式と思われる。御経塚1式は545・550・553・555・562・564、2式は546・548・551・552・554・556~558・560・563か。

577・578は小突起をもち577・579の外表面は赤彩される。580の口唇部は三角状に刻まれる。581の口唇部の一部は八字Iに刻まれ沈線間に列点文、擬縄文が施される。壘582の口唇部は三角状に刻まれ、赤彩される。584は尖形文であろう。585は口縁部に沈線による羊歯状文が施文され口唇部は刻まれ内面には沈線をもつ。586はB字状突起、羊歯状文をもつ壘様の器形となるもので、口縁部に赤彩痕がみられる。587は鍵手状に沈線がひかれる。588の外表面は赤彩される。590の外表面沈線区画は十字状になろう。591の外表面に赤彩痕がみられる。594は柄部を欠き、外表面は赤彩される。595は口唇部が八字状にきざまれ外表面は赤彩される。596は直線の雲形文で口唇部と外表面は赤彩される。597は口唇部にB字状突起をもち沈線内に刻まれる。壘599の外表面に赤彩痕がみられる。600は約5cm間隔で小突起をもつ。601の外表面は赤彩される。602は、口唇部に浅い沈線と一对の刻みがみられ、外表面は連続刺突文である。603・608・609の外表面は赤彩される。610は環状裝飾がくずれた雰囲気での凹形隆帯に三角状刻みが、口唇部にはB字状突起、赤彩痕がみられる。611・612・614~616・620・621の外表面は赤彩痕がみられる。623の沈線刺突は鍵の手状を意識し擬縄文を施す。624の文様は雲形文か。625・626・628・631・632の外表面は赤彩される。631は擬縄文を施す。634は口唇部の一部に三角状の刻みを一対いれ、文様帯は赤彩される。635は荒いLR縄文帯をもち、口径158mm、胴径186mmである。637は赤彩痕がみられる。638の口唇部にはB字状の突起と三角状的な刻みを持つ。643の口縁部はL縄文で頸部以下の地文は横条文脈文となり、口径188mm、胴径181mmである。645~647・649・652・653・655・659の外表面は赤彩痕がみられる。660の注口部下には粒状の紋飾がみられる。666はL唇部に三角状刻みをもつ。669は壘形で口唇部に沈線を施す。670・671の外表面は赤彩痕がみられる。第125図40は2凹孔をもつ蓋で先の尖るヘラ状貝で刻み十字状の沈線を入れ、裏面は凹孔を繋ぐ細い沈線を施す。

577~671を中層式と判断したが、581・583・591・596・600・602・606・622・625・642・664は中層3式~下野式前半期のものであろう。

672は口縁端部に刻目凸帯をもつ。674の外面に赤彩痕がみられる。675は沈線区画内に縄文を施す。676は刻み入りの突起をもち眼鏡状文下は縄文が施され、外面に赤彩痕がみられる。679の口唇部は、対のV字刻みと連続刻みが交互に施される。681の口唇部は緒状体による圧痕が施される。684の楕円状区画内は縄文を施し、赤彩痕がみられる。685・687は眼鏡状文をもつ。688の屈折部は段状に肥厚し、赤彩痕がみられる。689のI帯部は浮線状の鋸歯状文となり701と同一個体である。691・692・695・696・698は眼鏡状文をもつ。702は指頭周縁文か。703は口径273mmで比較的大形の壺となろう。705の外表面は赤彩される。712の壺は頸部を無文とし肩部文様帯以下は斜行条痕文となる。713は幅広凹線が施される。714の凸帯の刻みは不明瞭である。715は眼鏡状文をもつ。716の左面と717は接合する。718の左拓影の口縁部は欠損しており右拓影と上下の位置がずれている。719の隆帯下に浮線的な楕円I字文がみられる。720の剥離部は眼鏡状文か。722は浮線文系の浅鉢で外面は赤彩される。724は刻目凸帯文土器である。725は肥厚する口縁下部がナデられている。726・727は眼鏡状文をもつ。729・730の外表面は赤彩され、729の文様は楕円I字文がくずれたものか。731のI字文の中央部は突起状となり、外面に赤彩痕がみられる。732は他の破片から壺と考えられ、口縁部と肩部の平行沈線間に矢羽状文を施し、外面が赤彩される。733・737は眼鏡状文をもつ。734は口縁部が赤彩帯となる凸帯文系の浅鉢である。738の口縁部は沈線間列点文である。739のI帯部はI字文状である。740は浮線文系の鉢である。I字文の鉢742の口径は308mmである。745は眼鏡状文をもつ747の凸帯は刻まれない。壺750は6波状口縁になるものと推定されその口径は330mmである。751と749は同一個体で、口径288mm、底径68mm、器高112mmである。752・753は列点文である。756は凸帯をもつ壺である。757は対弧線文と円形区画文が施され、外面の文様帯は赤彩される。758は内面に3条の幅広の沈線が施される。

672~758は下野式~長竹式と判断したものであるが、678・758は御経塚式で、下野式は675・676・679・682・684・688・735・744、他が長竹式となろう。

2) 4区 (第87・88区759~801)

759は口縁部上下にRL縄文を施す。760の外表面は赤彩される。761は三叉文内に円孔をもち擬縄文が施され、外面は赤彩痕がみられる。763の口縁部は段状となりRL縄文帯をもつ。769は擬縄文が施される。774の2山波頂の口唇部には短沈線と刺突される小突起がみられ、口縁部はRL縄文列点文帯とする。776は口唇部と内面が赤彩される。777の口唇部は隆帯、N字状隆帯、縄文、赤彩が施される。780は外側から口縁部が刻まれる。大形の壺781は口径256mm、筒径41mm、器高95mmで外面は赤彩される。782・783の外表面に赤彩痕がみられる。785肩部の列点文間は無文とする。雲形文が施される791は一部に小突起をもつが形態は不明で、口唇部にはハ字状の刻みがみられる。792は小波状口縁で口唇部に短沈線を施し、内面は1条の幅広沈線と波頂部にI字文をもつ。793の赤彩は外面全体と内面は口縁から約15mmの部分である。795の口唇部は隆帯と刺突文を挟み短沈線文が施され、外面に赤彩痕がみられる。797の外表面に赤彩痕がみられる。798の眼鏡状文の沈線部は刻まれる。799の口縁下部は段状となる。凸帯文系の影響か。小形の注口土器800は赤彩され口縁部と楕円状の区画に縄文を施す。801は先端が二分される施文具で2段の沈線間列点文となる。

酒見式は759・763~765、八日市新保式は770、御経塚式は760~762・766~770・772~777で、1式が760・762・766・772・776、2式は761・767・768・773・774・775・777、3式は769か。

中層式は778~785・788~791・794~797・800で、1式は783、3式は784・785・791・795・796、他は2式か。下野式は786・787・798、長竹式は792・799・801である。

3) 5区 (第89~103区802~1029・第122区19)

802の口縁部は羽状縄文帯に3条の平行沈線が施され、最下段沈線に外側からの刺突文が1点みられる。口径は185mmである。803・804は凹線の下上が刻まれ、803では押圧文のまわりに斜位巻貝殻頂刺突文がみられる。803~808の凹線は接するように施文される。波状口縁の809は凹線の上下にRL縄文を施す。波底部では口唇部と口縁下部の突起に巻貝の側面押印文がみられる。810は半円台形状の波頂部で、刺突文は巻貝殻頂である。811は口

唇部に沈線が施され、2刺突文は巻貝殻頂である。812は大きな巻貝殻頂刺突文を囲むように小さな同じ刺突文を施す。813の刺突文は巻貝殻頂で、口径は175mmである。814は巻貝の逆扇状文の周囲を殻頂刺突する。815は7単位の波状口縁となるもので波頂部の上下に巻貝側面押圧文を施すが、下のものは殻底を若干回転させており、凹線端部は殻頂刺突である。816は巻貝側面押圧文の左右と波頂部に殻頂刺突を施し口縁端部は外向きの小突起をもつ。817は粘土貼付部に巻貝殻頂を垂直的に刺突する。818の波頂部は幅広くナデ下げて押圧を加えたものか。819は巻貝による扇状文か。820の単位文は巻貝による扇状押圧文で、口径162mm、底径46mm、器高132mmである。822は円形押圧文、823は巻貝の殻頂刺突と側面押圧で、若干ひねりを加える。824は平行沈線文帯下部に小さな巻貝殻頂刺突を施し口縁部から縦沈線文でつなげている。826・827は同一個体である。口縁部の上下に凹線を施し、殻底を縦隆帯側として巻貝側面を押圧する。828は小突起を刻み、凹線間は巻貝殻底列点文、下部は斜位の刻みである。829は押圧文、830は巻貝殻頂刺突で文様帯が赤彩される。831は扇状文で内外面に赤彩痕がみられる。832は半円状突起で、円形押圧される。833は小さな巻貝殻頂刺突を施す。834・835は沈線帯の上下に縄文を施す。834は小突起上とその下の縦隆帯下部に巻貝側面を押圧し、4つの殻頂刺突をもつ。835は巻貝殻頂刺突の列点文である。836は注口土器で凹線を上下方向で巻貝殻頂刺突する。837は注口土器で巻貝扇状文をもつ。839の推定口径は377mmである。840は扇状の波頂で、下部は巻貝側面押圧し他は殻頂を刺突する。841の刺突は先の破損した巻貝か。843は楕円状の押圧文である。845は把手基部両側に殻頂刺突を施す。848は一对の貼付隆帯を配置し、文様帯は赤彩される。847は口径296mm、底径48mm、器高84mmである。849は凹線下を刻み扇状文的止痕となる。850は浅鉢の把手部に楕形状となり、巻貝殻頂刺突を施す。851は羽状縄文を施した後磨消す。852は縄文を施すS字状貼付隆帯をもつ。853の口唇部は刻まれる。854は羽状縄文帯に沈線を施す。波頂部内面は楕円状に大きく押圧されている。856は凹線文帯下部に縄文が施され、波頂部は楕円状押圧文である。857は口縁部に1条、胴部は2条凹線文で上下を刻み、胴部の単位文は下斜め方向からの2刺突文である。口径240mm、胴径290mmである。858は粘土貼付に巻貝の扇状文を施す。859は凹線端と波頂部に巻貝の斜位刺突を施す。860は巻貝殻頂刺突。861の波頂部は縦隆帯状に肥厚し、上部は巻貝の殻頂刺突、下部は扇状文となる。862の上部は巻貝の側面押圧で下部は凹線状押圧である。863・864は巻貝殻頂刺突。865の波頂下部は巻貝の側面押圧で、上部と沈線間に殻頂刺突を施す。866・867は半円状突起で巻貝の扇状文。868は沈線帯の上下に縄文を施し、貼付突起を下方から押圧する。869は巻貝の逆扇状文を施す。870は内面に短沈線を施す低い突起をもち5単位とせらう。押圧文は扇状風で口径は265mm。871は楕円状と円形の押圧文を施す。872・873は凹線文帯を1軍に磨く。872は口唇部と凹線文帯下部に縄文を施す。873の円形押圧文は殻底か。874の口径は426mmである。875は凹線文帯部がやや薄く口縁端部と屈折部が稜状となり、口径は311mmである。976は注口土器と考えられ、口径133mm、胴径は225mmである。878は上面楕円状の低い波頂部で上面と縦隆帯の左右に巻貝の殻頂刺突を施し赤彩痕がみられる。879は平面形状の波状浅鉢で、波頂部と波状突起部に巻貝を回転させずに殻頂刺突を2〜3回同じ扇状文風とする。880は口唇部に縄文を施し口縁部は縦短沈線帯とする。881は縦短凹線を施し、凹線間は縄文帯とする。882の凹線文帯は丁寧な磨きである。883は波頂部に縦凹線を施し、その下部に巻貝の側面押圧文をもつ。殻頂刺突は、波頂部上方からと左右は斜刺突となる。凹線端部も押圧され区面部に縄文を施す。884は巻貝側面押圧後そのまま押し上げて凹線を寸断し、凹線に斜刺突を加える。885は浅い凹線で巻貝側面の押圧と斜刺突がみられる。886・887は同一個体で巻貝扇状文をもち内外面に赤彩痕がみられる。888は刻んだ貼付文をもち外面に赤彩痕がみられる。889は上面半円状の円形波頂部で巻貝殻頂刺突をもつ。891の単位文は巻貝を斜刺突して若干回転させ扇状文風とし、892は円形押圧である。893は巻貝殻頂刺突で赤彩痕が見られる。894は巻貝側面を押りきする単位文であり、内面全体と外面文様帯が赤彩される。896の単位文は巻貝側面押圧で、897は巻貝側面押圧後、その上部を殻頂刺突する。895の口縁端部は刻まれ、898は巻貝殻頂刺突である。899は棒状具で寸断し凹線文に斜刺突を加える。900は6単位の波状口縁となるもので巻貝殻頂刺突を施す。901の波頂部の上下に大きな巻貝側面押圧しその周囲に小さな側面押圧を加え、縄文が施される。902・903は巻貝の扇状文で、904は巻貝の押し、905は巻貝押圧か。906は注口土器で口縁部、頸部、胴部に小突起をもつ。907の刺突は殻頂か。908は巻貝側面押圧と殻頂刺突で、909は殻頂刺突である。910・911の内面は刻みである。912は逆扇状の波頂部で上部は巻貝殻頂刺突、

下部は扇状押圧である。913は扇状文と沈線端部は斜殻頂刺突である。914は逆台形状の波頂部で上部に3、下部に1個所粘土貼付し、中央1下は巻貝側面押圧、他は殻頂刺突である。915は凹線に殻頂刺突を施す。916は7単位の波状凹線と考えられ、破頂部上下に凹形押圧するが下部は粘土貼付に施す。917は注口土器であろう。918は不明瞭な殻頂刺突か。921は口唇部に縄文を施し、刻んだ小突起と円文をもち赤彩痕がみられる。922は上面半円形の伸びた波頂部で中央に縦凹線、上面に殻頂刺突を施す。923は台形状に伸びた波頂部で巻貝の扇状文を施す。927は縄文帯を幅広く窪ませその両端部をさらに押圧する。928の内外面の押圧文は巻貝の扇状文である。929の内面は刻みである。931の凹線文帯は丁寧に磨かれ上下に3個の楕円状押圧を施す。933は凹形押圧文。935・936・944・945は巻貝の扇状文をもつ。937・938・943は巻貝の殻頂刺突をもつ。939~941は凹形押圧文をもつ。946は粘土貼付に凹形押圧を加える。947は注口土器で粘土貼付部を逆三角状にする。

以上、802~947を酒見式~井口式と判断したものであるが、926・927は八日市新保1式期であろう。酒見式とその同時期と考えられるものは802・851~856・880・881・906・919・924である。井口1式は803~817・823~828・834・836・840・845・846・850・857・859・865・868・872・875・876・882~885・889・890・895・898・899~901・908・910・911・914~917・920~922・925・929~933・938、他は井口2式であろう。

948・954・956・961・963・966は口縁端部をナデで面になるようにし口唇部は尖りぎみとなる。948・956は波頂部を楕円押圧し、粘土貼付部を三角状に刻む。956は粘土貼付文をもつ。952は沈線文帯を幅広く窪ませその両端部をさらに押圧し、外面に赤彩痕がみられる。三角状または楔状の抉りをもつものは、955・960・961・966である。963は沈線文帯をX字状に刻む。967は半円状の隆帯をもち赤彩される。965は波頂部に粘土貼付し縦凹線を入れる。969の外面に赤彩痕がみられる。第125図19は吊手土器の面装飾部で側面に凹孔と瘤がみられる。2面の顔部は逆台形状と逆三角状となり、眉、鼻は粘土貼付する。目、口も同様な手法であろう。東北地域からの搬入品と推定される。

948~970を八日市新保式と判断したものであるが、965は井口2式である。また948・954・956は井口2式末~八日市新保1式初頭と考えられる。八日市新保2式は957・958・970で、他は1式であろう。

974の内面に円形の粘土貼付がみられる。978・979は注口土器で978の外面は赤彩され、凹孔をもつ。982は小突起をもち外面の状文帯は赤彩される。

971~985を御経塚式と判断した。1式は971~977・983・984、他は2式であろう。

988は4単位の小突起をもつ把手付の壺で、T字文風の文様をもつ。989の口唇部は斜めの刻みで安帯状の肩部は沈線間列点文である。990はB字状突起をもつ。992の口唇部刻みは三角状と短沈線で、外面縄文帯は赤彩される。993は口径113mm、柄径24mm、器高42mmである。996は口唇部が三角状に刻まれた雲形文の鉢で外面は赤彩される。997は半円状小突起に短沈線を施し、口径240mm、胴径215mmである。998・1000の口唇部は三角状刻みで、998の刻みは簞である。1001は磨耗が激しいが縦行条痕文を施す。1002~1004の外面に赤彩痕がみられる。1005の口唇部刻みは短沈線であり、口径150mm、胴径164mmである。1006の文様帯に赤彩痕がみられる。1008は口唇の一部に粘土貼付して三角状刻みを施し、色調は987と同じである。1009・1011の外面は赤彩される。1010の小突起は995と同様で、口唇部刻みは三角状と斜沈線である。1012の口縁部はLr縄文である。1013の三叉文は人組とはならない。口径229mm、柄径42mm、器高83mmで、外面に赤彩痕がみられる。1014は頸部が欠損するが頂部に凹孔をもち、Lr縄文を施す。1016の頸折部は刻まれ粘土貼付部は三角状刻みを施し、赤彩痕がみられる。1017は口縁端部に突起をもち浮線文系文様をもつ。1018は浮線文系土器で第1段階に比定される。1022の口唇部刻みは三角状と斜沈線を交互に施す。1024は口唇部が押圧され一部で八字状刻みをもち、肩部は沈線内列点文である。1023の口唇部刻みは八字状で外面に赤彩痕がみられる。1029の頸部刻みは雑な三角形状で外面は赤彩され、口径140mm、柄径36mm、器高55mmである。

986~1029は中屋2式~長竹式である。中屋2式は990~996・1003・1005・1006・1009・1015・1025・1028、3式は997・1000・1002・1004・1007・1010・1012~1014・1016・1021・1027・1029、下野式は986~989・998・999・1001・1008・1011・1019・1020・1022~1024・1026でその前半期にあたり、長竹式は1017・1018であろう。

4) 6区 (第104~111図1030~1290)

1035は口縁部に1条沈線のみ内外面が刻まれる。1036は外面無文で内面に沈線と縄文帯をもつ。1039は小突起をもつ注土土器で口縁部は羽状縄文を施し、小さな貼付文をもつ。1042は巻貝の肩状文、1043は巻貝殻頂刺突がみられる。1044は刻みである。1046・1052は円形押圧文をもつ。1049・1061・1062は巻貝側面押圧と殻頂刺突がみられ、1061は赤彩される。1051は巻貝の回転押圧と殻頂刺突をもつ。1053は小巻貝の側面押圧をもつ。1055・1060・1064は巻貝殻頂刺突される。1063は台形状波頂で扇状文をもつ。

1030~1066を酒見~井口式と判断したが、1030は中層2式、1057は八日市新保1式か。1031は不明である。酒見式は1032~1041、井口1式は1043・1048~1051・1056・1058・1061・1062・1064~1066、他は井口2式であろう。

1067は押圧小突起をもち内面の平抱三叉文帯と思われる部分が赤彩される。1069の波頂部は外側から押圧され、円形押圧文をもつ。1084の口唇部と内面縄文帯は赤彩される。1085の口唇部は下方から押圧して半円状の面をもち縄文を施し赤彩される。1086・1087の口唇部に赤彩痕がみられる。1089の口縁端部の一部は外側から押圧され沈線文の起点となり、その下部に小さな刺突文が並ぶ。1092の波頂部垂直刺突は巻貝の殻頂である。1096の波頂中央部は外側から押圧される。1098の外面は赤彩される。1102は沈線間列点文である。1104の区画沈線はY字状につながる。1105は区画沈線の端部を三叉文状とし、外面は赤彩される。1109の連結三叉文はまず一状に描き短沈線を加える。1116は口縁端部をナデて面になるようにし口唇部は尖りぎみとなり、粘上貼付部を模状に刻む。1120の外面は赤彩される。1125は擬縄文が施される。1131の連結三叉文は1109と同様であり、口唇部は赤彩される。1134の口縁端部は内外面から横方向に押圧され口唇部上面は蛇行状となる。1136の口縁一部は外側から押圧される。1138の口縁端部は1134と同様であるが内面の押圧は弱い。1149の外面、1150の口唇部は赤彩される。1157・1158・1160の外面は赤彩される。なお、1157の拓影は上下逆である。1163・1164は3縦線帯が施され、1164は縦に刻まれ内面に短沈線を施す。1166は擬縄文が施される。1175・1182・1190・1192・1193・1200・1203・1205・1211の外面に赤彩痕がみられる。1176の波頂部はA字状に刻まれる。1205は擬縄文が施される。1206は外面と内面肥厚部が赤彩される。1208は1対の小突起をもつ。

1067~1212を八日市新保~御経塚式と判断した。八日市新保式は、1068~1071・1075・1076・1079~1084・1089~1099・1101・1104・1105・1106~1113・1116・1117・1120~1124・1126~1128・1131~1136・1140~1142・1145・1147・1150・1155・1156・1162~1166・1172~1179・1185・1188~1192・1194・1195・1201~1203・1207~1212である。1式は1079・1082・1090・1091・1092・1104~1106・1108~1110・1112・1113・1116・1117・1120・1126・1131・1132・1134・1140・1162・1163・1164・1175・1176・1185・1188~1190・1194・1208・1210・1211、細分不明は1117・1136・1155・1156で他は2式であろう。

御経塚式は1067・1072~1074・1077・1078・1085~1088・1100・1102・1103・1114・1115・1118・1119・1125・1129・1130・1137~1139・1143・1144・1146・1148・1149・1151~1154・1157~1161・1167~1171・1180~1184・1186・1187・1193・1196~1200・1204~1206である。1式は1067・1072~1074・1077・1088・1100・1114・1115・1125・1130・1137・1152・1157・1160・1167・1169・1170・1179・1180・1199・1204~1206、細分不明は1086・1087・1129・1138・1144・1151・1153・1161・1171・1182・1186・1187・1196~1198、他は2式であろう。

1213の口唇部には、楕円文、三叉状文、B字状突起がみられ赤彩される。1214の口唇部は三角状刻みで外面に赤彩痕がみられる。1216の口唇部刻みは八字状である。1219は口縁端部が肥厚し眼鏡状文をもつ。1220・1227・1249・1250は羊歯状文をもつものであるが、やや雑な造作である。蓋1218・1222~1224・1229・1234・1235・1242・1244・1248(摘部)・1253・1252の外面に赤彩がみられる。1228は内面に半円状の貼付文をもち、縄文帯は赤彩される。また、赤彩痕のみられる鉢・浅鉢類は、1238・1239・1251・1275・1279・1285・1289で、1285は内面も赤彩され1288と接合する。1236・1240は擬縄文が施される。1256は沈線間に短沈線を施す。1258は内面に弱い押圧が並ぶ。1263・1269・1282は眼鏡状文をもつが1269は沈線が引かれず、口縁端部に短沈線がみられる。1257・1276・1277は凸帯文系の浅鉢と判断したものである。

1213～1290を中屋～長竹式に判断したが、1258・1266は井口2式、1272は八日市新保1式、1226は御経塚2式である。中屋式は1213・1214・1216～1218・1220～1225・1227～1229・1232～1235・1238～1254で、1式は1220・1227・1232・1249・1250、2式は1231・1217・1218・1221～1225・1238・1240・1244・1248・1251・1252、他は3式であろう。下野式は1215・1219・1230・1231・1236・1237・1261・1263・1268・1269・1278・1279・1286・1289、長竹式は1255～1257・1259・1260・1262・1264・1265～1267・1270・1271・1273～1277・1280～1285・1287・1288・1290であろう。

5) 7区 (第112～115図1291～1397)

1291・1298は口唇が肥厚し縦線状文をもつ。1293は内面に1条の凹線がみられる。1294は口縁端部と縦隆帯に縄文を施す。1295は舌状の波頂部に縄文を施す。1299は内面に縄文を施す。巻貝の側面押圧するものは、1304・1314・1329、殻頂刺突は1301・1308・1312・1314・1315・1327・1338、斜刺突は1309・1329・1333、扇状文は1305・1306・1310・1316・1318・1320・1322・1324・1331である。円形押圧文を施すものは1302・1309・1319・1335である。赤彩がみられるものは1312・1314・1322・1333・1335である。1314は縦隆帯の口唇部と口縁下部に巻貝の側面押圧し沈線端部に小さな殻頂刺突がみられる。

1291～1338を酒見式～井口式と判断した。酒見式は1291～1297である。井口1式は1300・1304・1307・1309・1313・1329・1330・1332・1335・1336・1337、他は2式であろう。

1342は擬縄文帯をもつ。1343の図・拓影は上下逆で、E字文である。1345口縁端部は刻まれ赤彩される。外面に赤彩痕がみられるものは、1351・1359・1369・1377である。1370と1371は同一個体で、口縁部の対弧文間を波形状に深く抉り磨かれる。1372の口唇部には円形貼付文と三叉状文がみられる。

1339～1379を八日市新保～御経塚式に判断したが、1343は長竹式である。八日市新保式は1339・1340・1344・1346・1347・1350・1353～1358・1361～1373・1375～1379で、1式は1357・1360・1361～1364・1370～1373・1375～1377、他は2式であろう。御経塚式は1式が1341・1342・1345・1348・1349・1351・1352・1375、2式が1359・1374であろう。

1384は内外面がE字文となる。1386・1393は浮線文系の鉢である。1387の凸帯は刻まれぬ。1390の口唇部は面取される。眼鏡状文をもつものは1388・1391・1392・1397で、1397の胴部はX字状文を施す。

1380～1397を中屋～長竹式に判断した。中屋2式は1380～1382、下野式は1389・1396・1397、他は長竹式であろう。

6) 8区 (第115～120図1398～1478)

1398は凹線端部が巻貝殻頂で斜刺突される。1400は楕円文と巻貝の斜刺突である。1402は巻貝扇状文の周囲に側面押圧文をもつ。1401・1402は巻貝の逆扇状文と斜刺突である。1045の胴部は縄文が施される。1407は注口土器で口唇部の凹線上下は刻まれる。4波状口縁の1411は波頂口唇部に凹線を施し、波底部に2貼付隆帯をもつ。4波状口縁の1417は1線が外反し楕円状押圧がみられ、下部は突帯状となる。1410は巻貝殻頂刺突で、1414は斜刺突である。巻貝扇状文は1412・1413・1415・1416・1420に施される。注口土器1418は下方から押圧された粘土瘤をもち凹線施文後に縄文を施す。1419の小刺突は巻貝殻頂による。1421は波頂端部を内側へ押し、縦の凹線と巻貝側面押圧をもつ。口縁形態は八日市新保式と同様である。1422は内面に刻日をもつ。1423の凹線間にはせまく注口基部に楕円状押圧がみられる。1424はE字文と巻貝殻頂小刺突である。1427の巻貝殻頂刺突は、口縁部では粘土貼付後、胴部では直接施し、胴部には突帯がめぐる。

1383～1428を酒見～井口式と判断したが、1421は八日市新保1式か。酒見式は1425、井口1式は1399・1400・1404～1409・1422・1423・1427・1428、2式は1398・1402・1403・1410～1420・1424・1426であろう。

1429は肥厚させる波頂部に単位文の縦沈線を施し、胴部は楔状文で沈線を寸断する。1430の内面は擬縄文帯で赤彩される。1431は第48図45と接合した。出土位置は約50mの距離を隔てる。1434は内面に凹線をもち外面に赤彩痕がみられる。1437の文線帯は赤彩される。1438は波頂端部に短縦沈線を施す。1441は沈線を施す小突起と対弧文間が決られ、外面は赤彩される。1442の波頂内面は肥厚し円形押圧をもつ。1446の外面縄文帯、1448の口唇部は赤彩される。

1429～1449を八日市新保～御経塚式と判断した。八日市新保式は1429～1433・1435～1438・1440・1441で、1式は1429・1433・1437・1438・1440、他は2式であろう。御経塚式は1434・1439・1442～1449で、1式は1434・1439、他は2式であろう。

1450は、列点文を施すあやくり帯縄文をもち、B字状と長方形状突起が交互にみられる。1453は半筒状文をもち外面が赤彩される。1457は円孔上部に4B字状突起をもつ。1458はフ字状入組文に、シ字状文を加えて刻む半筒状文で、肩部文様はシ字状文に刻みを加えたものである。1459は半筒状文がくずれて沈線とあやくり状文間を刻んだもので、低いB字状突起をもつ。1461はB字状突起をもつ。1462は押圧・縦・レ字状貼付をもち縄文部は赤彩される。1466は貼付小突起をもつ。1467・1469の口唇部は三角状に刻まれる。1470の外面、1472のB字状突起に赤彩痕がみられる。1476・1477は浮線文系土器である。1478は肥厚する口縁部とその下部に沈線を施し刻む。

1450～1478は中層～長竹式と判断したものであるが、1450・1453・1458・1462は御経塚3式～中層1式であろう。中層1式は1459、2式は1451・1454・1457・1460・1461・1464～1474、3式は1456、下野式は1475、長竹式は1476～1478であろう。

7) 9区 (第120図1479～1492)

1479は肥厚する三角状の波頂部は刺突され、口縁部は縄文を施す。1480は口唇～L縁部に縄文を施し縦沈線を施す。1481は巻貝殻頂刺突が単位文となる。1482の外面は赤彩される。1485はニ又文とF字状文がみられる。1486は低い双頭突起をもち口唇部は沈線、単純刻み、ハ字状刻みが施され、外面に赤彩痕がみられる。1488・1490・1492は2段の列点文である。1489は列点区画文をもつ。

酒見式は1479・1480、井口1式は1481、八日市新保2式は1482、御経塚3式は1483・1485、中層2式は1484、中層3式は1496、下野式は1487～1492であろう。

8 土製品

土製品については、第121～125図に掲載したが、第122図19は吊子土器の吊子部、第125図40は蓋であり注意していただきたい。なお、器種、出土遺構、出土グリッド、層位、法量、備考等を下表において記した。

土製品における器種別の報告点数と()内で示す出土点数は、土偶34点(37点)、耳飾4点(4点)、有孔球状土製品1点(1点)、垂飾1点(1点)、土鏃2点(2点)、土製円盤11点(11点)で、出土合計点数は56点である。

土製品一覧表 (第121～125図)

図	番号	器種	区	出土遺構	グリッド	層位等	高・径(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	時期
121	1	土偶	3区		B8	BG2	(31)	(31)	14	(13.9)	胴部	
	2	土偶	3区		B9	BG1	(57)	(55)	(24)	(53.3)	胴部、赤彩痕	
	3	土偶	3区	PJ9-01	J9		(36)	(19)	18	(10.7)	胴部、赤彩痕	
	4	土偶	3区	PK10-16	K10		(46)	(52)	(37)	(69.1)	胴部、赤彩痕、ニ又文、中空	御経塚
	5	土偶	3区		L11	BG2	(52)	(34)	29	(50.7)	胴部、赤彩痕	
	6	土偶	3区		K12	BG1	(45)	(28)	(31)	(36.4)	胴部(右)	
	7	土偶	3区		L12	BG2	(51)	22	18	(28.9)	胴部	
	8	土偶	3区	PK13-03	K13		(31)	(29)	(19)	(9.4)	肩～胴部、中空	
	9	土偶	3区		L13	BG2	(48)	(25)	24	(34.1)	胴部(半分)	
	10	土偶	3区		M14	G(地上)	(43)	(39)	37	(56.9)	胴部、赤彩痕	
	11	土偶	3区		M17	BG	(59)	(36)	40	(78.2)	胴部(半分)	
	12	土偶	3区		O15	BG2	(54)	28	23	(36.0)	胴部、赤彩痕	
	13	土偶	3区		O16	BG	(45)	(26)	(20)	(20.2)	胴部	
	14	土偶小	3区		O16	BG	(25)	13	11	(5.6)	胴部、石製吊か	
	15	土偶	3区	PO17-12	O17		(33)	18	22	(16.5)	胴部	
	16	土偶	4区	PR15	R15		(51)	85	24	(92.2)	胴部	
122	17	土偶	5区		R20	BG 上層	(77)	(54)	48	(159.0)	胴部(半分)	
	18	土偶	5区		R21		(50)	(38)	18	(33.0)	胴部、赤彩痕ニ又文	御経塚
	20	土偶	5区		R24	BG	(54)	(32)	(20)	(24.5)	胴部、漆結ニ又文	八日市新保
	21	土偶	5区		IT25	BG	(58)	49	45	(102.4)	胴部	
	22	土偶	5区		IT26	BG	(39)	(40)	19	(28.8)	胴部、区画文	御経塚

図	番号	器種	区	出土遺構	グリッド	層位等	口径(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	時期	
122	23	土鍋	5区		P24	B	(47)	(33)	(22)	(43.0)	胴部		
	24	土鍋	6区		O18	BG1	(62)	84	35	(115.0)	胴部		
	25	土鍋	6区	SD02	N19		(29)	(49)	18	(18.0)	胴部		
	26	土鍋	6区	PO19-29	O19		(42)	(33)	(10)	(19.4)	胴部、中空、赤彩痕		
123	27	土鍋	6区		O23-4	B-BG	(137)	119	(21)	(300.0)	胴一腰部、両肩に円孔	長竹か	
	28	土鍋	6区		O24	BG3	(68)	(44)	25	(107.6)	胴部		
	29	土鍋	6区		PO24-22	O24-25	B	(94)	(43)	(38)	(104.0)	胴一腰部(右半)	
	30	土鍋	6区		N26	B	(38)	(49)	16	(26.0)	胴部		
	31	土鍋	7区		R23	BG1	(85)	(61)	(30)	(125.0)	胴部		
	32	土鍋	8区		O30	G	(53)	(60)	(36)	(95.0)	胴部		
124	33	土鍋	8区		N31	B	(39)	(42)	15	(25.5)	胴部		
	34	土鍋	9区		R31	G	(56)	(40)	(10)	(18.3)	胴部、中空		
	35	土鍋	9区		R35	BG	(64)	(55)	(34)	(77.8)	胴部、中空		
	36	耳飾	3区		L-13		(68)		14	(2.9)	海草形、中央円孔		
	37	耳飾	3区	PK12-39	K-12-13	BG1	(58)		17	(8.1)	海草形、中央円孔		
	38	耳飾	6区	PO19-23	O-19		(70)		20	(11.0)	海草形、中央円孔		
	39	耳飾	6区	PN20-2	N-20	1/2円盤+棒	(58)		22	(15.2)	海草形、中央円孔		
	125	41	有孔帯状土製品	3区		K-12	BG2	(55)	22	10	(35.9)	沈彫文、LR編文	後期
		42	土製巻筒	3区		L-10	BG2	(24)	20	16	(6.0)	沈彫文、孔径2	
		43	土鉢	3区	PO15-16	O-15		(38)	30	(16)	(18.4)	有湾痕形	
44		土鉢	6区	PN18-2	N-18		(34)	(24)	(18)	(12.4)	有湾痕形		
45		土製円盤	3区		L-12	G	34	(22)	5	(4.5)	無文、円孔径5		
46		土製円盤	3区	PN13-4	N-13		44	41	6	15.2	浅彫・縁部、LR編文、円孔径5	中層	
47		土製円盤	3区	PK14-7	K-14		35	32	8	14.9	無文		
48		土製円盤	3区		O-15	BG	42	35	7	15.8	無文、円孔未開通		
49		土製円盤	3区	PO17-12	O-17		37	29	4	6.4	RL編文、円孔径4、赤彩痕、不彫形	中層	
50		土製円盤	6区	PO19-29	O-19		42	38	4	10.5	人顔・又文か、円孔径3	中層2	
51		土製円盤	5区	PH26-5	H-26		37	30	6	10.4	無文円孔径5		
126	32	土製円盤	6区		N-24	B-BG	37	35	5	8.0	RL編文、円孔径4	中層か	
	53	土製円盤	6区		N-24	B-BG	38	37	5	11.5	条痕文、円孔径5		
	54	土製円盤	8区		O-29	B	29	24	3	4.6	円孔径4、赤彩痕	中層	
	55	土製円盤	8区		O-29	B	28	25	5	5.0	円孔径4、赤彩痕	中層	

9 石器

石器については、実測図を第126～144図に掲載した。器種、出土遺構、出土グリッド、層位、法量、分類、備考、石質、遺存率を石器一覧表に記した。

石器の器種別の報告点数と()内で示す出土点数は、打製石斧26点(1,009点)、磨製石斧35点(96点)、敲石22点(314点)、磨石28点(302点)、石皿23点(245点)、砥石38点(236点)、擦切用石器7点(41点)、石錐16点(26点)、環状石器1点(1点)、石鏃37点(450点)、石錐15点(84点)、削器4点(13点)、石匙2点(2点)で、出土合計点数は2,775点である。

1) 打製石斧(第126～128図1～26)

打製石斧は、1,009点出土した。完形とほぼ完形のはそのうち333点である。また、形態での分類ができたものは588点で、このうち、短筒形は68点、椀形は516点、分銅形は4点であった。打製石斧の分類は形態を基に以下のとおりの組合せとした。

I 短筒形 1 側縁がほぼ直線的なもの 2 側縁がやや内曲するもの 3 側縁がやや膨らむもの

A 円刃のもの B 直刃のもの C 偏刃のもの

II 椀形 1 側縁がほぼ直線的なもの 2 側縁がやや内曲するもの 3 側縁の内曲が強いもの

A 円刃のもの B 直刃のもの C 偏刃のもの

III 分銅形 A 円刃のもの B 直刃のもの C 偏刃のもの

2) 磨製石斧(第129～130図27～61)

磨製石斧は、96点出土した。そのうち90%以上遺存するものは35点であった。磨製石斧の分類は高橋他1983を参考に以下の組合せとした。

A定角式形 B孔棒状形

- 1大形(長9cm以上、幅5~7cm) 2中形(長6.5~9cm、幅3.5cm前後)
3小形(長5cm前後、幅2.5~4cm) 4最小形(長3.5~5cm、幅1.5~2cm)

3) 敲石(第130図62・63・65~67、第131図71~78・80、第132図82~87、第134図109・111)

いわゆる磨石・敲石・凹石であるが、磨ってあるものを磨石とし、磨っていないものを敲石とした。敲石は314点出土した。そのうち95%以上遺存するものは218点であった。敲石の分類は使用痕跡を基に以下のとおりとした。分類が認識できた286点のうち、Ⅰは91点、Ⅱは140点、Ⅲは55点であった。

Ⅰ凹だけみられるもの

Ⅱ凹と側縁に敲痕があるもの Ⅱb平面部にも敲痕がみられるもの

Ⅲ側縁に敲痕だけみられるもの Ⅲb平面部にも敲痕がみられるもの

4) 磨石(第130図64・68、第131図69・70・79、第132図81・88~91、第133・134図92~108・110)

磨ってあるものを磨石とした。第130図64・68、第131図69・70・79、第132図81は見直しの結果、敲石から磨石としたものである。磨石は302点出土した。そのうち95%以上遺存するものは240点であった。磨石の分類は使用痕跡を基に以下のとおりとした。分類が認識できた300点のうち、Ⅰは40点、Ⅱは32点、Ⅲは101点、Ⅳは127点であった。

Ⅰ磨痕だけみられるもの

Ⅱ磨痕と凹があるもの

Ⅲ磨痕と側縁に敲痕があるもの Ⅲb平面部にも敲痕がみられるもの

Ⅳ磨痕と凹、敲痕があるもの

5) 石皿(第134図~第138図112~134)

石皿は245点出土したが、遺存状態は悪く50%以上遺存するものは9点であった。石皿の分類は埴田1999と形態により以下のとおりの組合せとした。おおまかな分類が認識できた92点のうち、Ⅰは18点、Ⅱは57点、Ⅲは17点であった。

Ⅰ有縁形 Ⅱ無縁形 Ⅲ無縁板状形

Aくぼみの深いもの Bくぼみの浅いもの C平坦なもの D側縁方向へ緩く傾斜するもの(無縁のみ)

6) 砥石(第139~141図135~154、第142~143図178~192、第151図341・342・345)

砥石は236点の出土である。このうちの63点は高瀬他1983での砥石状石製品とされたものや、断面が方形状で右溝のものも含んでいる。また、石冠と考えていた第151図341・342・345は砥石として扱った。分類は、宮下1983を参考に使用状況と形態、断面の形状(下記のA~I)から以下のとおりの組合せとした。

Ⅰ右溝のもの(緩い溝のものはⅠY) Ⅱ無溝のもの Ⅲ打製石斧の刃部に似た形状のもの

Ⅳ定形化したもの(高瀬他1983での砥石状石製品類) Ⅳb定形化したもので小形のもの(10cm以下)

(Ⅳには使用経過によって不定な形状に変化したと思われるものもふくめている。)

A楕円形 Bカマボコ形 C扁平形 D正方形 E三角形 F不定形 G長方形 H台形 I方形

7) 擦切用石器(第141図155~161)

擦切用石器は41点出土した。遺存状態は悪く分類は行っていない。代表的なものを図示した。

8) 石錘(第141・142図162~177)

石錘は26点の出土である。石錘の分類は紐掛け部の造形により以下のとおりとした。

AⅠ打欠いたもの(礫石錘)

BⅠ切目をいれたもの(切目石錘) BⅡ細い溝を縦に刻らすもの(有溝石錘)

CⅠ敲打溝が全周するもの(敲打有溝石錘) CⅡ側縁に敲打溝があるもの(敲打有溝石錘)

CⅢ側縁の敲打溝が不鮮明なもの(敲打有溝石錘)

9) 環状石器(第143図193)

扁平な楕円形状の中央部に凹孔を有することから環状石器とした。1点の出土である。

10) 石鏝 (第141図194-230)

石鏝は450点の出土で、多くが80%以上遺存するものである。石鏝の分類は鈴木1981を参考として以下の組合せとしている。分類が認識できた369点のうち、Aは352点、Bは10点、Cは7点であった。また、AとBのほとんどは三角形鏝で、五角形鏝は50点であった。

- A 無茎鏝
- 1 基部に抉入りがあり三角形のもの (凹基無茎三角形鏝)
 - 2 基部が直線的で三角形のもの (平基無茎三角形鏝)
 - 3 基部に抉入りがあり五角形のもの (凹基無茎五角形鏝)
 - 4 基部が直線的で五角形のもの (平基無茎五角形鏝)
- B 有茎鏝
- 1 基部に抉入りがあり三角形のもの (凹基有茎三角形鏝)
 - 2 基部が直線的で三角形のもの (平基有茎三角形鏝)
 - 3 基部が突出する三角形のもの (凸基有茎三角形鏝)
 - 4 五角形のもの (凸基有茎五角形鏝)
- C 尖・円基鏝
- 1 基部が尖るもの
 - 2 基部が丸いもの

11) 石錐 (第144図231-245)

石錐は84点の出土である。石錐の分類は矢島・前山1983に拠った。その基本分類は下記とおりであり詳細は参照願いたい。分類が認識できた69点のうち、Aは33点、Bは22点、Cは1点、Dは10点、Eは3点であった。

- A 全体の形状が棒状をなすもの
- B 明瞭なつまみ状の頭部をもつもので錐部の長いもの
- C 明瞭なつまみ状の頭部をもつもので錐部の著しく短いもの
- D 錐部がしだいに太くひろがり、頭部との区分が不明瞭なもの
- E 棒状あるいは長三角形の剥片の先端に微細な調整加工を加え、そのまま石錐として用いたもの

12) 削器 (第144図246-249)

削器は13点の出土である。

13) 石匙 (第144図250-251)

石匙は2点の出土である。

石鏝一覧表 (第126~144図)

図	番号	図種	区	出土遺跡・グロッフ	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考	石質	遺存率	
126	1	打製石斧	3区		LJ2	BG	199	59	36	614	I 3B	短棒形	火山噴霧灰岩	100%
	2	打製石斧	3区		O17	BG	146	50	25	221	I 1B	短棒形	緑色凝灰岩	100%
	3	打製石斧	3区	PJ8-11	J8		167	64	35	532	I 2B	短棒形	火山噴霧灰岩	100%
	4	打製石斧	3区		N14	G	156	70	36	574	I 1A	短棒形	凝灰岩	100%
	5	打製石斧	6区		O24	BG2	188	76	39	682	II 1A	棒形	角閃石安山岩	100%
	6	打製石斧	6区		O25	BG2	174	75	34	596	II 2B	棒形	火山噴霧灰岩	100%
	7	打製石斧	5区		H26	BG	158	68	30	391	II 2B	棒形	安山岩	100%
	8	打製石斧	6区		N20	BG1	132	71	24	271	I 2A	短棒形	火山噴霧灰岩	100%
	9	打製石斧	6区		O18	BG1	191	77	39	710	II 2B	棒形	均岩	100%
	10	打製石斧	5区		F25	BG	145	67	24	280	II 2B	棒形	砂岩	100%
127	11	打製石斧	3区		L16	BG2	126	78	23	310	II 1B	棒形	削粒凝灰岩	100%
	12	打製石斧	3区	PM16-5	M16		140	57	25	290	II 1B	棒形	粗粒凝灰岩	100%
	13	打製石斧	5区		E24	B	132	62	24	260	II 1A	棒形	火山噴霧灰岩	100%
	14	打製石斧	3区	石成石調	N15	BG	154	85	40	407	II 2B	棒形	火山噴霧灰岩	100%
	15	打製石斧	3区		O16		132	79	29	428	II 2A	棒形	火山噴霧灰岩	100%
	16	打製石斧	3区		O16	G	155	83	27	437	II 1A	棒形	火山噴霧灰岩	100%
	17	打製石斧	5区		E21	BG3	185	103	35	764	II 1B	棒形	緑色凝灰岩	100%
	18	打製石斧	5区	SD02	E22	砂層	140	87	27	361	II 3A	棒形	火山噴霧灰岩	100%
	19	打製石斧	6区	F024-10	O21		151	80	33	475	II 2B	棒形	凝灰岩	100%
	20	打製石斧	6区		E23	BG1	206	106	36	792	II 2B	棒形	角閃石安山岩	100%
128	21	打製石斧	3区		O16	G	181	85	38	618	II 2B	棒形	火山噴霧灰岩	100%
	22	打製石斧	3区	燧石	N16		174	116	35	580	II 2B	棒形	安山岩	100%

国	番号	岩種	K	出上遺構	グループ	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考	石質	透存率	
128	23	打製石斧	7K		R21	BG	151	69	15	196	Ⅱ2B	楕形	火山凝灰岩	100%	
	24	打製石斧	6K		K23	BG1	141	80	21	(236)	Ⅱ3B	扁形	砂岩	95%	
	25	打製石斧	7K		Q22	G1	139	87	21	(281)	Ⅱ2B	楕形	砂岩	95%	
	26	打製石斧	3K		M14	BG	139	83	30	394	Ⅲ B	分銅形	粗粒凝灰岩	100%	
	27	磨製石斧	3K		M14	G	(83)	70	28	(243)	A1	定角大形	砂岩	60%	
129	28	磨製石斧	3K	PL15-9	L15		(50)	67	28	(150)	A1	定角大形	蛇紋岩	30%	
	29	磨製石斧	6K		O20	BG2	(114)	(61)	32	(382)	A1	定角大形	緑色凝灰岩	70%	
	30	磨製石斧	3K		R27	BG	(62)	55	32	(165)	A1	定角大形	砂岩	50%	
	31	磨製石斧	6K		O18	B	(104)	43	19	(133)	A1	定角大形	砂岩	95%	
	32	磨製石斧	6K	SD02	O19		137	52	34	(365)	A1	定角大形	緑色凝灰岩	95%	
	33	磨製石斧	3K	PM14-20	M14		(121)	39	31	(270)	A1	定角大形	緑色凝灰岩	80%	
	34	磨製石斧	3K		-J9	BG1	(91)	42	29	(177)	A1	定角大形	流紋岩	80%	
	35	磨製石斧	3K		-B	BG1	(217)	58	41	(770)	B1	乳棒大形	緑色凝灰岩	95%	
	36	磨製石斧	3K		K18	BG1	(93)	45	24	(124)	A1	定角大形	緑色凝灰岩	85%	
	37	磨製石斧	6K		-P30	G2	82	33	13	57	A2	定角中形	緑色凝灰岩	100%	
	38	磨製石斧	4K		Q16	BG1	(74)	31	12	(41)	A2	定角中形	蛇紋岩	95%	
	39	磨製石斧	6K		O24	BG2	(86)	50	21	(121)	A2	定角中形	蛇紋岩	95%	
	40	磨製石斧	3K		PK17-6	K12		76	36	65	A2	定角中形	蛇紋岩	100%	
	41	磨製石斧	6K	SD02	O19		88	43	22	140	A1	定角大形	蛇紋岩	100%	
	42	磨製石斧	7K		R23	G1	(77)	45	20	(110)	A2	定角中形	液飛流紋岩類	95%	
	43	磨製石斧	3K		K7	BG1	(83)	45	22	(130)	A2	定角中形	緑色凝灰岩	95%	
	130	44	磨製石斧	7K		R23	BG1	(65)	45	16	(75)	A2	定角中形	凝灰岩	90%
		45	磨製石斧	6K		O20	BG3	(96)	34	10	(35)	A2	定角中形	環状岩	95%
		46	磨製石斧	7K		R20	BG1	64	29	10	34	A3	定角小形	蛇紋岩	100%
		47	磨製石斧	7K	PQ21-8	Q21		(50)	32	10	(25)	A3	定角小形	蛇紋岩	90%
		48	磨製石斧	7K		R19	BG2	(54)	32	9	(28)	A3	定角小形	蛇紋岩	90%
		49	磨製石斧	3K		O17	BG3	(48)	33	13	(35)	A3	定角小形	蛇紋岩	95%
		50	磨製石斧	6K		O25	BG4	(51)	33	10	(29)	A3	定角小形	蛇紋岩	95%
		51	磨製石斧	6K		O22	BG5	(55)	33	12	(32)	A3	定角小形	凝灰岩	95%
		52	磨製石斧	7K		R22	BG6	(47)	33	11	(28)	A3	定角小形	蛇紋岩	95%
		53	磨製石斧	6K		O25	BG7	(49)	27	11	(20)	A3	定角小形	蛇紋岩	95%
		54	磨製石斧	4K	FR15-20	R15	BG8	49	30	8	18	A3	定角小形	蛇紋岩	100%
		55	磨製石斧	5K		F22	BG9	47	30	8	16	A3	定角小形	蛇紋岩	100%
		56	磨製石斧	4K		R15	BG10	60	18	11	20	B3	乳棒小形	緑色凝灰岩	100%
		57	磨製石斧	3K		J8	BG11	44	21	8	11	A4	定角小形	凝灰岩	100%
		58	磨製石斧	7K		Q R26	BG12	42	22	10	15	A4	定角小形	緑色凝灰岩	100%
		59	磨製石斧	7K		R19	BG13	(41)	21	9	(15)	A4	定角小形	蛇紋岩	95%
60		磨製石斧	3K		Q32	BG14	(37)	22	7	(9)	A4	定角小形	蛇紋岩	95%	
61		磨製石斧	3K		PL11-13	L11		33	23	7	8	A4	定角小形	蛇紋岩	100%
62		礫石	3K		PL9-7	L9		90	92	56	620	I	敲、門形、被熱	砂岩	100%
63		礫石	3K		M14	B	95	66	61	580	I	敲、楕円形	砂岩	100%	
64		礫石	4K	FR17-7	R17		94	83	36	300	IV	扁、凹、敲、門形	砂岩	100%	
65		礫石	6K		O21	BG3	100	85	29	370	I	敲、楕円形、被熱	砂岩(粗粒)	100%	
66		礫石	6K		N22	BG3	117	63	36	400	I	敲、長楕円形、被熱	砂岩(粗粒)	100%	
67		礫石	3K		K9	BG2	116	72	34	430	I	敲、楕円形	砂岩	100%	
68		礫石	3K		G27	B	167	113	46	1250	IV	扁、整面、敲、楕円形	砂岩	100%	
69		礫石	7K		G24	G2	123	120	80	170	IV	磨、凹、敲、凹形	砂岩	100%	
70		礫石	3K	PK8-1	K8		105	90	51	670	IV	磨、凹、敲、楕円形	砂岩	100%	
71		礫石	7K		R24	G2	87	81	57	560	II	凹、敲、凹形	砂岩	100%	
72		礫石	3K		H10	BG1	101	96	58	700	II	凹、敲、楕円形、被熱	砂岩(粗粒)	100%	
73		礫石	6K	PN20-2	N20		93	84	55	600	II	凹、敲、楕円形、被熱	砂岩	100%	
74		礫石	3K		K12	BG2	80	72	47	370	II	凹、敲、門形	砂岩	100%	
75		礫石	3K		L11	BG	96	74	33	330	II	凹、敲、楕円形、被熱	砂岩(粗粒)	100%	
76	礫石	3K		M13	B-BG	144	60	32	380	II	凹、敲、長楕円形	砂岩(粗粒)	100%		
77	礫石	8K		O35		128	87	35	610	II	凹、敲、楕円形、被熱	砂岩(粗粒)	100%		
78	礫石	7K		Q25	B	97	47	38	250	II	凹、敲、不定形、被熱	砂岩	100%		
79	礫石	6K		O25	BG1	115	89	70	1070	III	磨、敲、楕円形	砂岩(粗粒)	100%		
80	礫石	6K		N23	BG1	86	77	63	550	III	敲、門形、被熱	砂岩	100%		
132	81	礫石	6K	SD02	N19		120	105	27	480	III	磨、敲、凹形、被熱	砂岩	100%	
	82	礫石	3K		L14	BG	120	71	63	815	II	凹、敲、長楕円形	砂岩(粗粒)	100%	

図	番号	基種	区	出土遺構	グロフ	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考	石質	遺存率	
132	83	殿石	3K	朽尻石跡	M16		141	55	42	510	IV	殿、長楕円形	緑色凝灰岩	100%	
	84	殿石	4E		Q16	BG1	185	61	65	990	IV	殿、不定形	砂岩	100%	
	85	殿石	3K		K14	BG2	77	55	31	215	IV	殿、不定形	砂岩	100%	
	86	殿石	3E		O15	B	101	97	60	825	IV	殿、円形	砂岩	100%	
	87	殿石	8K		P29	B	51	53	33	135	II	殿、円形	砂岩	100%	
	88	扉石	3E		O16	G	96	91	94	690	II	扉、扇、円形	砂岩	100%	
	89	扉石	3K	朽尻石跡	N15		112	91	52	780	III	扉、楕、楕円形	砂岩	100%	
	90	扉石	6E		O18	BG	106	91	60	800	I	扉、楕円形	砂岩(粗粒)	100%	
	91	扉石	6E		O24	BG2	95	93	61	750	I	扉、円形	砂岩(粗粒)	100%	
	92	扉石	6E		O22	BG2	88	71	69	601	I	扉、長楕円形	砂岩(粗粒)	100%	
	93	扉石	3E	PL8-2	J8		66	64	46	210	III	扉、楕、円形	砂岩	100%	
	94	扉石	3E	PJ8-1	J8		93	90	60	710	III	扉、楕、円形、被熱	砂岩(粗粒)	100%	
	133	95	扉石	3E		O16	BG	100	88	68	780	III	扉、楕、楕円形	砂岩	100%
96		扉石	3E	PO14-1	O14		100	90	45	590	III	扉、楕、楕円形	砂岩	100%	
97		扉石	6E		O19	BG	130	81	39	(640)	III	扉、楕、長楕円形、被熱	砂岩	95%	
98		扉石	5E		G27	BG	98	98	53	990	IV	扉、円、楕、楕円形	砂岩	100%	
99		扉石	6E		O24	BG3	91	94	52	620	IV	扉、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩	100%	
100		扉石	7E		Q22	BG1	89	72	45	420	IV	扉、円、楕、楕円形	砂岩(粗粒)	100%	
101		扉石	6E		O25	BG1	120	83	59	860	IV	扉、楕、楕、楕円形	砂岩	100%	
102		扉石	3E		J9	BG1	125	91	45	800	IV	扉、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩	100%	
103		扉石	6E		O19	BG3	130	95	39	710	IV	扉、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩	100%	
134		104	扉石	3E	朽尻石跡	N15		125	80	37	590	IV	扉、円、楕、長楕円形	砂岩	100%
		105	扉石	6E	PO20-4	O20		141	96	55	990	IV	扉、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩	100%
		106	扉石	5E		F25	B	113	63	27	250	IV	扉、円、楕、長楕円形	砂岩	100%
		107	扉石	3E	JP-17	J9		130	89	31	590	IV	扉、楕、楕、楕円形	砂岩	100%
	108	扉石	7E	PQ22-18	Q22		165	95	36	990	II	扉、楕、楕、楕円形、被熱	凝灰岩	100%	
	109	扉石	7E	PQ22-18	Q22	BG	158	73	33	630	I	楕、長方形	火山噴出凝灰岩	100%	
	110	扉石	3E		K13	BG	179	103	71	1830	IV	扉、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩(粗粒)	100%	
	111	扉石	7E		R20	BG1	79	75	23	190	I	楕、不定形	砂岩	100%	
	112	石扉	3E		N17	BG	(158)	(268)	(63)	(3340)	II B	無縁、楕、楕、楕円形	石炭安山岩	30%	
	113	石扉	6E		E20	BG	(180)	(133)	(69)	(1770)	II A	無縁、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩	20%	
	135	114	石扉	3E	M8-08		(280)	(317)	(80)	(3210)	II B	無縁、楕、楕、楕円形	凝灰岩	20%	
		115	石扉	3E	M16	BG	(163)	(140)	(60)	(1900)	II A	無縁、楕、楕、楕円形、被熱	角閃石安山岩	60%	
		116	石扉	5E	E21		(144)	(117)	(67)	(636)	II A	無縁、楕、楕、楕円形、被熱	凝灰岩	10%	
117		石扉	6E	PM19-31	M19		(122)	(80)	(60)	(705)	I B	有縁、楕、楕、楕円形、被熱	石炭安山岩	10%	
118		石扉	6E	N21		(208)	(209)	(81)	(3730)	II B	無縁、楕、楕、楕円形	砂岩	30%		
136		119	石扉	3E	M14	G	(167)	(166)	(32)	(824)	II B	無縁、楕、楕、長方形	緑色凝灰岩	40%	
	120	石扉	3E	SD01	N14		(163)	(139)	(35)	(932)	II B	無縁、楕、楕、楕円形、被熱	角閃石安山岩	70%	
	121	石扉	6E	N22	BG1		(95)	(130)	(26)	(508)	II A	無縁、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩	60%	
	122	石扉	3E	K10	BG1		(270)	295	30	(3598)	I B	有縁、楕、楕、楕円形、被熱	緑色凝灰岩	50%	
	123	石扉	3E	L9	BG2		(107)	(89)	38	(404)	I B	有縁、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩	5%	
	124	石扉	3E	L11	BG		(73)	(62)	(53)	(294)	I B	有縁、楕、楕、楕円形、被熱	緑色凝灰岩	5%	
	125	石扉	7E	PQ20-9	Q20		(136)	(120)	(60)	(883)	I A	有縁、楕、楕、楕円形、被熱	砂岩	10%	
	126	石扉	3E	PK10-19	K10		(224)	(146)	47	(1140)	I B	有縁、楕、楕、楕円形	緑色凝灰岩	20%	
	127	石扉	6E	O20	BG2		(155)	(284)	42	(3350)	II B	無縁、楕、楕、楕円形	緑色凝灰岩	30%	
	128	石扉	3E	PK9-8	K9		(161)	(260)	42	(2300)	II C	無縁、平楕、楕円形	凝灰岩	30%	
137	129	石扉	3E	PK17-3	K17		285	215	47	(110)	II B	無縁、楕、楕、楕円形	砂岩(粗粒)	98%	
	130	石扉	3E	PK9-8	K9		(162)	(205)	35	(2815)	II B	無縁、楕、楕、楕円形、被熱	角閃石安山岩	30%	
	131	石扉	6E	PK25-9	K25		(183)	173	45	(1710)	II C	無縁、平楕、楕円形、被熱	石炭安山岩	50%	
	132	石扉	6E	N21	BG2-3		(261)	(285)	45	(3540)	II C	有縁、平楕、楕、楕円形、被熱	凝灰岩	30%	
	133	石扉	8E	SD09	O34		215	(107)	41	(1510)	II C	無縁、楕、楕、楕円形、被熱	凝灰岩	20%	
	134	石扉	3E	PK11-2	K11		(80)	(120)	41	(600)	II C	有縁、楕、楕、楕円形、被熱	凝灰岩	10%	
	139	135	扉石	6E		N21		249	105	106	3800	I B	有溝、長楕円形、被熱	砂岩	100%
		136	扉石	4E		R11	BG	(288)	(215)	72	(6600)	I E	有溝、平楕形、被熱	石炭安山岩	50%
		137	扉石	6E	PO26-6	O26		140	118	45	990	I YC	有溝、楕円形、被熱	砂岩	100%
		138	扉石	5E		E21	BG	158	99	33	870	I C	有溝、楕円形	砂岩	100%
139		扉石	6E	PO26-12	O26		125	91	36	570	I YC	有溝、楕円形、被熱	砂岩	100%	
140		扉石	7E		R19	BG	93	67	17	134	I C	有溝、楕円形	砂岩	100%	
140	141	扉石	4E	PK17-6	R17		(159)	84	67	(1360)	I C	有溝、長楕円形、被熱	砂岩	70%	
	142	扉石	4E	PK15-20	R15		(91)	(111)	46	(612)	I G	有溝、長楕円形、被熱	砂岩	40%	

区	番号	器種	区	出土遺物	デッド	厚径	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考	材質	透率%
140	143	磁石	6区		N20	BG1	(118)	102	50	(840)	I YA	有溝、長楕圓形	砂岩	30%
	144	磁石	3区		J9	BG1	(119)	68	24	(167)	I E	有溝、長楕圓形	砂岩	60%
	145	磁石	3区		N13	B-BG	(148)	(65)	(32)	(287)	I A	有溝、楕圓形	砂岩	60%
	146	磁石	3区		N16	BG	(92)	66	40	(204)	I E	有溝、長楕圓形、被熱	砂岩	40%
	147	磁石	7区		R23	G1	(81)	(86)	13	(76)	I C	有溝、形不詳、被熱	砂岩	5%
	148	磁石	3区		K17	BG1	118	101	15	(143)	II C	無溝、楕圓形	砂岩	95%
	149	磁石	3区		J8	BG2	(80)	93	20	(165)	II C	無溝、二部形、被熱	砂岩	95%
	150	磁石	3区		N14	BG	182	141	44	1670	II A	無溝、楕圓形、被熱	砂岩	100%
	151	磁石	5区		F25	B	118	103	45	820	II A	無溝、楕圓形、被熱	砂岩	100%
	152	磁石	3区		N16	BG	112	89	19	(280)	II C	無溝、楕圓形	砂岩	95%
153	磁石	3区		N17	G	138	66	34	431	II A	無溝、長楕圓形	砂岩	100%	
154	磁石	8区		P29	B	(93)	(57)	16	(140)	III C	無溝、予持ち、楕圓形	緑色凝灰岩	60%	
155	模切用石蓋	3区		J9	BG1	(46)	(111)	(5)	(40)			新敷岩	60%	
156	模切用石蓋	3区		L14	DG1	(56)	(68)	(5)	(30)			直刃	砂岩	30%
157	模切用石蓋	3区	汎器蓋	L15	PL15-20	(46)	(76)	(6)	(28)			凹刃	砂岩	60%
158	模切用石蓋	6区		PO25-5	O25	(43)	(67)	(9)	(47)			直刃	砂岩	40%
159	模切用石蓋	3区		PO15-15	O16	(47)	(54)	(6)	(20)			直刃	砂岩	20%
160	模切用石蓋	6区		SD02	N19	(39)	(47)	(4)	(10)			直刃	砂岩	50%
161	模切用石蓋	3区		J9	BG1	(47)	(56)	(7)	(20)			直刃	砂岩	20%
162	石鏝	7区		R22	G1	68	37	14	56	B1	切目、長楕圓形、被熱	頁岩	100%	
163	石鏝	3区		K13	BG2	(56)	36	8	(24)	B1	切目、楕圓形、被熱	輝石安山岩	95%	
164	石鏝	3区		F19		99	59	37	320	C1	敲打有溝、長楕圓形、被熱	砂岩(粗粒)	100%	
165	石鏝	3区		PM12-8	M12	88	84	26	230	A1	打欠、楕、楕圓形、被熱	火山凝灰岩	100%	
166	石鏝	3区		J9	BG1	98	71	25	255	A1	打欠、楕、不定形、被熱	砂岩	100%	
142	167	石鏝	7区		R22-23	BG1	67	95	21	(215)	A1	打欠、楕、長楕圓形、被熱	砂岩	85%
	168	石鏝	6区		O23	BG1	38	75	10	(45)	A1	打欠、楕、長方形、被熱	凝灰岩	97%
	169	石鏝	6区		SD02	O19	44	102	14	91	A1	打欠、楕、不定形、被熱	砂岩	100%
	170	石鏝	4区		PO16-12	Q14	67	119	54	(530)	C1	敲打有溝、長楕圓形、被熱	角閃石安山岩	95%
	171	石鏝	4区		PO16-22	Q16	64	105	65	530	C1	敲打有溝、長楕圓形、被熱	角閃石安山岩	100%
	172	石鏝	6区		PN20-2	N20	63	109	62	530	C1	敲打有溝、長楕圓形、被熱	凝灰岩	100%
	173	石鏝	3区		F23	B	61	90	62	470	C1	敲打有溝、楕圓形、被熱	砂岩	100%
	174	石鏝	11区		PN6-4	N6	61	86	49	400	C1	敲打有溝、楕圓形、被熱	砂岩	100%
	175	石鏝	4区		PO15-2	Q15	61	89	48	360	C1	敲打有溝、楕圓形、被熱	凝灰岩	100%
	176	石鏝	4区		N18	BG	64	73	62	343	C1	敲打有溝、楕圓形、被熱	角閃石安山岩	100%
177	石鏝	3区		PI10-4	I10	25	70	17	40	C1	敲打有溝、長楕圓形、被熱	緑色凝灰岩	100%	
178	磁石	6区		O25	BG1	214	36	33	293	IV I	定形、短楕圓形、被熱	砂岩	100%	
179	磁石	3区		M8	BG1	(98)	46	17	(95)	IV C	定形、扁平短楕圓形、被熱	凝灰岩	70%	
180	磁石	5区		P20	BG	(83)	39	32	(140)	IV I	定形、短楕圓形、被熱	砂岩	40%	
143	181	磁石	3区		K14	BG1	(84)	(42)	(31)	(130)	IV G	定形、短楕圓形、被熱	砂岩	40%
	182	磁石	8区		O31	B	(96)	35	29	(134)	IV G	定形、短楕圓形、被熱	砂岩	50%
	183	磁石	3区		O16	G	(90)	32	32	(110)	IV I	定形、短楕圓形、被熱	砂岩(粗粒)	50%
	184	磁石	3区		K9	BG2	(87)	35	30	(130)	IV I	定形、短楕圓形、被熱	砂岩	50%
	185	磁石	7区		R19	G	(84)	26	24	(70)	IV I	定形、短楕圓形、被熱	砂岩	50%
	186	磁石	3区		PN16-25	N14	(72)	36	31	(100)	IV G	定形、短楕圓形、有溝	砂岩	40%
	187	磁石	6区		PN18-9	N18	(60)	29	32	(76)	IV I	定形、短楕圓形、有溝	砂岩	30%
	188	磁石	6区		SD02	O19	(90)	30	24	(87)	IV G	定形、短楕圓形、被熱、有溝	砂岩	50%
	189	磁石	6区		PO21-22	O21	(57)	48	16	(55)	IV C	定形、扁平短楕圓形、有溝	砂岩	50%
	190	磁石	3区		PO17-6	O17	(70)	47	18	(50)	IV C	扁平、不定形、有溝	砂岩	50%
191	磁石	5区		H25	B	47	31	23	40	IV B	小形、短楕圓形、被熱3	砂岩	100%	
192	磁石	8区		P29	G	(23)	32	14	(10)	IV C	扁平、短楕圓形、有溝	砂岩	10%	
193	原状石蓋	3区		PL13-12	L13	78	65	20	110			楕圓形	緑色凝灰岩	100%
144	194	石鏝	6区		SD02	N19	40.2	(15.4)	4.4	(1.8)	A1	凹基無蓋、三角形	フロント	97%
	195	石鏝	6区		O19	BG3	(34.6)	(12.8)	6.14	(1.7)	A1	凹基無蓋、三角形	フロント	95%
	196	石鏝	3区		SD02	F21-22	(26.8)	14.1	3.8	(1.0)	A1	凹基無蓋、三角形	輝石安山岩	97%
	197	石鏝	3区		E23	B	(28.3)	14.5	3.1	(0.9)	A1	凹基無蓋、三角形	輝石安山岩	95%
	198	石鏝	3区		E21	BG	(23.2)	18.8	3.8	(1.4)	A1	凹基無蓋、三角形	輝石安山岩	99%
	199	石鏝	3区		PO16-16	O16	26.6	19.1	4.3	1.7	A1	凹基無蓋、三角形	輝石安山岩	100%
	200	石鏝	3区		PL13-39	L13	(29.1)	19.9	4.7	(2.3)	A1	凹基無蓋、三角形	輝石安山岩	97%
	201	石鏝	3区		K10	BG1	23.9	1.35	2.8	0.9	A1	凹基無蓋、三角形	輝石安山岩	100%
	202	石鏝	3区		E21	B	20.0	15.1	3.5	0.9	A1	凹基無蓋、三角形	輝石安山岩	100%

図	番号	器種	区	出土遺構	グリッド	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考	石質	適合率
144	203	石鏡	8区		N30	G	23.7	18.8	3.7	0.9	A1	円基無茎、三角形	輝石安山岩	100%
	204	石鏡	5区		E24	BG	(20.1)	(15.6)	3.1	(0.6)	A1	円基無茎、三角形	輝石安山岩	95%
	205	石鏡	3区	内1-12	M11		15.3	16.0	2.5	0.3	A1	円基無茎、三角形	輝石安山岩	100%
	206	石鏡	3区		N16	B	20.6	14.4	2.1	0.4	A1	円基無茎、三角形	フリント	100%
	207	石鏡	3区	PH-14	R8		(23.8)	21.2	3.0	(1.2)	A1	円基無茎、三角形	輝石安山岩	97%
	208	石鏡	3区	P18-1	J8		19.8	15.7	3.1	0.7	A1	円基無茎、三角形	輝石安山岩	100%
	209	石鏡	5区		E20		(25.2)	(16.6)	3.7	(1.1)	A1	円基無茎、三角形	メノウ	95%
	210	石鏡	3区		N15	B	(12.3)	13.6	2.8	(0.4)	A1	円基無茎、三角形	輝石安山岩	97%
	211	石鏡	3区		M14	G	(15.7)	13.7	2.7	(0.5)	A1	円基無茎、三角形	柱状凝灰岩	97%
	212	石鏡	6区		O19	BG3	(33.1)	11.4	4.1	(1.3)	A2	平基無茎、五角形	輝石安山岩	96%
	213	石鏡	5区		H24	BG	(19.3)	15.9	6.1	(1.5)	A2	平基無茎、五角形	フリント	95%
	214	石鏡	3区		M11	B	(34.3)	17.6	6.7	(3.6)	A2	平基無茎、五角形	輝石安山岩	97%
	215	石鏡	3区	PK13-4	K15		(27.6)	(21.7)	5.3	(2.3)	A2	平基無茎、五角形	輝石安山岩	97%
	216	石鏡	4区		Q17	G2	(22.2)	(17.7)	13.7	(1.5)	A2	平基無茎、五角形	輝石安山岩	97%
	217	石鏡	5区		E21-23	BG	21.5	11.7	3.6	0.9	A3	円基無茎、五角形	輝石安山岩	100%
	218	石鏡	5区		E21	B	(18.1)	(12.1)	2.9	(0.6)	A3	円基無茎、五角形	輝石安山岩	95%
	219	石鏡	3区		M16	BG-G	34.9	(12.8)	4.9	(2.4)	A3	円基無茎、五角形	輝石安山岩	97%
	220	石鏡	6区	SD02	N19		(33.6)	15.8	6.8	(3.2)	A3	円基無茎、五角形	フリント	98%
	221	石鏡	3区		J9	BG1	(33.9)	13.2	5.2	(1.9)	A3	円基無茎、五角形	輝石安山岩	95%
	222	石鏡	3区		N16	B	(31.1)	15.4	4.7	(2.0)	A3	円基無茎、五角形	フリント	99%
	223	石鏡	3区		L13	BG2	(22.9)	(18.3)	4.2	(1.4)	A3	円基無茎、五角形	輝石安山岩	95%
	224	石鏡	6区		O24	B	(31.1)	24.1	6.2	(2.8)	A3	円基無茎、五角形	輝石安山岩	97%
	225	石鏡	3区		M14	G	16.9	(16.8)	4.8	(1.3)	A3	円基無茎、五角形	輝石安山岩	97%
	226	石鏡	6区		M19	B	(53.9)	14.0	6.4	(4.4)	B3	凸基有茎、五角形	輝石安山岩	90%
	227	石鏡	6区		M19	B	(54.1)	14.1	6.6	(4.6)	B3	凸基有茎、五角形	輝石安山岩	90%
	228	石鏡	5区	SD02	E23-24		(40.5)	10.4	4.6	(1.6)	C1	尖基、柳葉形	フリント	97%
	229	石鏡	6区		N20	G	(32.9)	(8.2)	3.8	(1.0)	C1	尖基、柳葉形	輝石安山岩	95%
	230	石鏡	3区	PK12-1	K12		(40.5)	14.0	11.9	(4.8)	C1	尖基、柳葉形	フリント	78%
	231	石鏡	5区		F20	表土	(46.3)	13	9	(5.2)	A1a	両端尖、棒状	変質凝灰岩	96%
	232	石鏡	6区		O22	BG3	(29)	8.5	6	(2.0)	A1b	両端尖、棒状	フリント	95%
	233	石鏡	6区	SD02	O19		26	9.5	6	1.3	A1a	両端尖、棒状	フリント	100%
	234	石鏡	8区				(24.5)	8	4	(0.9)	A1a	両端尖、棒状	フリント	95%
	235	石鏡	5区		F22	B	(34)	12.5	5	(2.45)	A1a	両端尖、棒状	フリント	97%
	236	石鏡	4区		R15	G1	(25.5)	11	6	(1.4)	A1a	両端尖、棒状	フリント	90%
237	石鏡	3区		O17	BG2	(33.3)	10.5	5	(1.5)	A2	全体加工、鈍三角形	フリント	97%	
238	石鏡	5区		F22	B	23	(19)	4	(1)	B1	全体加工、有頸棒状	フリント	97%	
239	石鏡	9区		Q31	G	27	(17)	5	(1.4)	B1	全体加工、有頸棒状	輝石安山岩	97%	
240	石鏡	3区		K11	BG1	21.3	(16.5)	6	(1.7)	B2	頸部未加工、有頸棒状	輝石安山岩	90%	
241	石鏡	7区	SD05	Q-R26		(33)	16	10.5	(3.7)	B2	頸部未加工、有頸棒状	輝石安山岩	97%	
242	石鏡	3区		K9	BG1	(43.5)	29	9.5	(8.2)	B2	頸部未加工、有頸棒状	輝石安山岩	90%	
243	石鏡	9区		R30	BG1	43	10	5	1.5	B2	頸部未加工、有頸棒状	フリント	100%	
244	石鏡	3区		O14	G(堆土)	29.5	12.5	7	2.7	D1	全体加工、一角形	輝石安山岩	100%	
245	石鏡	3区		O12		(26.5)	13.5	5	(1.5)	E	斜片端加工、二角状	輝石安山岩	97%	
246	刺器	3区	PK13-7	N13		36.0	50.0	9.0	22.2		フリント	100%		
247	刺器	3区		N16	B	33.0	(31.5)	9.5	(8.7)			輝石安山岩	90%	
248	刺器	3区		O16	BG	24.0	23.0	6.5	5.5			輝石安山岩	100%	
249	刺器	5区		H27	B	23.5	27.0	6.0	4.4			倉鉄フリント	100%	
250	片刃	8区		P32	B	70.0	44.0	9.5	28.5			輝石安山岩	100%	
251	石匙	5区		E23	B下層	28.0	18.5	6.0	(2.3)			フリント	69%	
151	341	砥石	3区	PH-10	19		(104)	46	38	(450)	II E	無溝、刀身状形、断面-両縁線	角閃安山岩	90%
	342	砥石	8区	PO33-7	O33		66	40	(125)	(390)	IV B	定形、短冊形	砂岩	50%
	343	砥石	3区		K14	BG1	40	29	210	290	IV I	定形、短冊形	凝灰岩	100%

10 石製品

石製品については、実測図を第145～151図に図示した。また、石冠と考えていた第151図341・342・345は砥石として扱った。器種、出土遺構、出土グリッド、層位、法量、分類、備考、石質等を石製品一覧表において表記した。

石製品の器種別の報告点数と()内で示す出土点数は、玉類11点(11点)、垂飾13点(14点)、石鏡2点(2

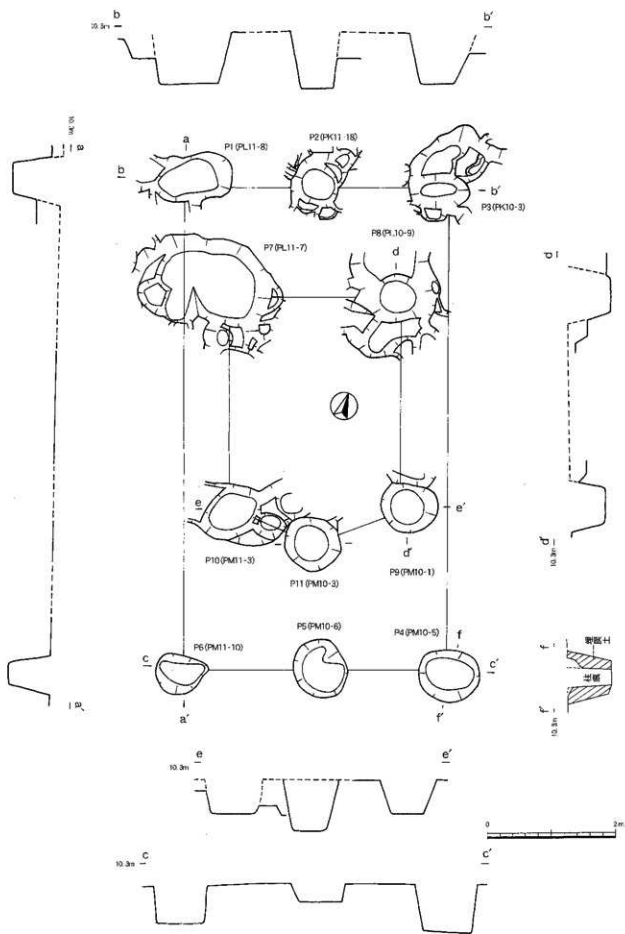
点)、御物石器1点(1点)、石冠23点(48点)、石棒21点(64点)、石剣1点(7点)、石刀23点(61点)で、出土合計点数は208点である。

なお、第145図272は骨角器である。第145図273は垂飾としたが別種の可能性がある。第148図319は石棒としたが石冠かもしれない。第151図344は石棒である。

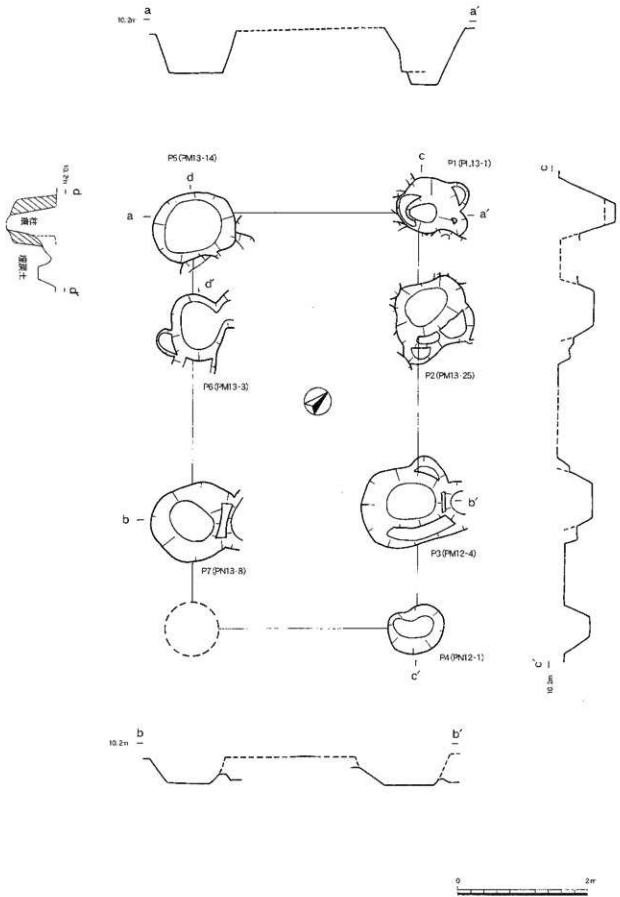
石製品一覧表(第145~151図)

図	番号	器種	区	出土遺跡	グッド	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	備考	石質	透存率	
145	252	丸玉	6R		N23	BG3	12.1	15.3	15.1	4.7		含硬玉珪質岩	100%	
	253	白玉	3R		K14	BG2	9.0	12.1	(12.1)	(1.0)		滑石	50%	
	254	丸玉	3R		K10	BG2	8.3	10.4	10.4	1.2		含硬玉珪質岩	100%	
	255	白玉	5R		F24	B	3.9	7.1	6.8	2.7		含硬玉珪質岩	100%	
	256	丸玉	8R		O33	BG	4.4	6.2	6.1	0.2		含硬玉珪質岩	100%	
	257	丸玉	3R		F20	B	3.2	5.6	5.5	0.2		含硬玉珪質岩	100%	
	258	垂飾	4R		R16	BG1	38.0	21.0	11.0	16.9		含硬玉珪質岩	100%	
	259	角玉	5R		P25	B	20.0	13.0	7.0	1.7		含硬玉珪質岩	100%	
	260	垂飾	3R	PL9-8	L9		26.3	11.8	7.6	4.3		含硬玉珪質岩	100%	
	261	垂飾	6R		O23	BG3	18.6	13.7	7.4	2.4		含硬玉珪質岩	100%	
	262	垂飾	5R		F22	BG1	21.0	13.0	8.0	(2.3)		含硬玉珪質岩	90%	
	263	垂飾	3R		K11	BG3	15.4	8.4	3.9	0.9	穿孔	含硬玉珪質岩	100%	
	264	垂飾	6R	PM19-7	M19		(31.5)	(23.9)	5.4	(4.2)	穿孔	凝灰岩	40%	
	265	長玉	5R		F23	B	15.6	13.9	13.9	4.5		含硬玉珪質岩	100%	
	266	長玉	6R		M19	B	11.4	7.6	7.1	1.7		滑石	100%	
	267	長玉	3R		K14	BG2	11.0	6.8	5.3	0.7		含硬玉珪質岩	100%	
	268	垂飾	6R	SD02	M19		10.5	(7.2)	(4.2)	(0.4)	穿孔	含硬玉珪質岩	50%	
	269	長玉	6R		O21	G	18.8	5.7	5.6	0.9		滑石	100%	
	270	角玉	8R		O29	B	19.0	6.9	3.9	0.6		緑色凝灰岩	100%	
	271	垂飾	5R		G26	B	15.0	9.0	5.0	1.0	切目あり未製品か	蛇紋岩	100%	
	272	骨角器	3R		B	BG2	30.9	5.4	3.6	0.8		ヤス状製品か		
	273	垂飾か	6R		N24	B-BG	(25.2)	(6.7)	5.0	(0.5)		産状製品か	フリント	30%
	274	岩板	6R		O24	BG	(36.9)	(35.7)	(4.6)	(3.9)		円盤状、産状、穿孔2個所	凝灰岩	20%
	275	岩板	5R		E21	B	(52)	(11)	(13)	(32)		張織文	凝灰岩	20%
	276	石棒	6R		M19	B	(256)	82	46	(129)		有頸	粘板岩	30%
	277	石棒	6R	SD02	O19		(142)	(53)	(47)	(425)		有頸	緑色凝灰岩	40%
	278	石棒	9R		R33	BG	(70)	57	32	(120)		有頸	緑色凝灰岩	20%
	279	石棒	6R		O21	BG3	(74)	61	(36)	(210)		有頸、線刻	粘板岩	10%
	280	石棒	6R		O20	BG2	(84)	48	(20)	(130)		有頸	緑色片岩	10%
	281	石棒	6R		O23, 21	BG3	110	64	55	(335)		被熱	砂岩	40%
	282	石棒	5R		F24	B	(110)	32	31	(160)		被熱	緑色凝灰岩	30%
	283	石棒	3R	PK10-17	K10		(186)	(30)	(18)	(72)		被熱	粘板岩	10%
	284	石棒	3R	PI10-3	I10		(52)	34	25	(76)		被熱	緑色凝灰岩	20%
	285	石棒	5R		J125	B	(91)	39	35	(140)			粘板岩	10%
286	石棒	4R		R15	G1	(63)	42	34	(149)			砂岩	10%	
287	石棒	6R	SD02	M19		(40)	(52)	(23)	(50)		線刻	凝灰岩	5%	
288	石棒	6R		N22		(126)	111	111	(1420)		被熱	凝灰岩	10%	
289	石棒	6R		O20	BG1	(79)	78	55	(469)			緑色凝灰岩	20%	
290	石棒	6R	SD02	N19		78	(73)	81	(725)		被熱	砂岩	20%	
291	石棒	6R		O25	BG	(82)	33	14	(80)			緑色片岩	20%	
292	石剣	3R		N17	G	(142)	26	(13)	(100)			緑色片岩	50%	
293	石棒	6R		O20	BG3	(64)	30	14	(60)		被熱	緑色片岩	20%	
294	石刀	3R		I9	BG1	(80)	26	19	(70)		線刻	粘板岩	30%	
295	石刀	6R		O20	BG3	(111)	24	17	(80)			粘板岩	30%	
296	石刀	3R	PL10-1	L10		(191)	32	21	(89)		変形文、被熱	緑色片岩	30%	
297	石刀	3R		I9	BG1	(52)	32	22	(58)		丁字状二文文	粘板岩	20%	
298	石刀	6R	SD02	O19		(67)	(25)	(10)	(20)			粘板岩	5%	
299	石刀	7R	PK23-1	R23		(46)	(28)	(9)	(15)		被熱、線刻	粘板岩	5%	
300	石刀	7R		R20	B	(46)	(52)	(9)	(13)		被熱	緑色凝灰岩	5%	
301	石刀	6R	SD02	N19		(34)	(22)	(14)	(8)		線刻状文、被熱	緑色凝灰岩	5%	
302	石刀	6R		N21	BG1	(46)	(11)	15	(16)		線刻状文	頁岩	10%	
303	石刀	5R		F21	BG	(107)	39	14	(165)		被熱	頁岩	20%	
304	石刀	8R		O32	B	(100)	34	21	(165)			凝灰岩	30%	

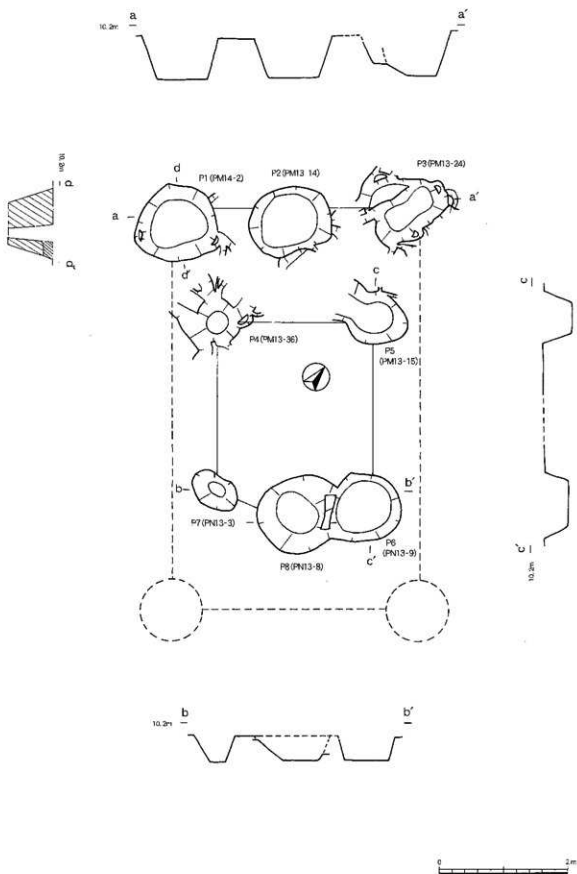
図	番号	器種	区	出土遺構	グリッド	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	焼熱	備考	石質	適存率	
147	305	石刀	3K		J9	BG1	(105)	34	21	(126)	被熱		凝灰岩	40%	
	306	石刀	8K		O29	B	(94)	40	22	(135)			凝灰岩	30%	
	307	石刀	5K		E20	BG	(94)	39	22	(135)			凝灰岩	30%	
	308	石刀	3K		L16	BG1	(124)	33	20	(105)	被熱		粘板岩	40%	
	309	石刀	6K	SD02	O19		(141)	26	16	(105)			緑色片岩	40%	
	310	石刀	8K		N31	B	(68)	25	14	(25)			凝灰岩	20%	
	311	石刀	4K		R16	BG1	(97)	18	12	(30)			粘板岩	30%	
	312	石刀	6K		O21	BG2	(106)	28	17	(80)			緑色片岩	30%	
	313	石刀	7K		Q20	G2	(140)	27	14	(85)	被熱		緑色片岩	40%	
	314	石刀	8K		O31	B	(109)	25	18	(70)			泥岩	30%	
	315	石刀	3K		O16	B	(125)	27	17	(104)			緑色片岩	40%	
316	石刀	3K		O17	G	(73)	24	16	(45)	被熱		緑色片岩	20%		
317	石剣	3K		L9	BG1	(196)	27	16	(72)	被熱		緑色片岩	40%		
318	石棒	4K		R23	BG1	(177)	93	38	(880)	有頸、扁平		凝灰岩	40%		
319	石棒	3K		K13	BG1	251	65	60	1220	楕圓形か		緑色凝灰岩	100%		
149	320	御物片器	3K	PJ9-3	J9		(132)	48	75	(810)			角閃石安山岩	50%	
	321	石冠	5K		P20	BG	87	45	39	195	龜頭状基部、基部線刻		緑色凝灰岩	100%	
	322	石冠	7K		R21	BG	39	48	72	186	縦長形基部		凝灰岩	100%	
	323	石冠	5K		P22	B	56	(59)	68	(135)	縦長形基部		緑色凝灰岩	70%	
	324	石冠	3K		J9	BG2	63	59	54	(170)	縦長形基部		緑色凝灰岩	80%	
	325	石冠	3K		PJ9-7	J9		69	53	69	(215)	縦長形基部、被熱		凝灰岩	90%
	326	石冠	3K		L14	BG2	66	51	69	155	縦長形、被熱		凝灰岩	100%	
	327	石冠	3K		K11	B	65	47	56	145	半圓状基部		緑色凝灰岩	100%	
	328	石冠	6K	SD02	O19		68	68	(50)	(300)	縦長形基部、被熱		凝灰岩	70%	
	329	石冠	4K		PQ16-18	Q16		95	48	94	455	半円弁頭状基部、被熱		凝灰岩	100%
	330	石冠	7K		Q19	G	82	56	69	(290)	基部尖鋭、被熱		緑色凝灰岩	90%	
150	331	石冠	4K		Q17	G2	63	57	(45)	(255)	縦長形基部、被熱		凝灰岩	60%	
	332	石冠	6K	SD02	O19		71	58	(43)	(200)	縦長形基部、被熱		凝灰岩	40%	
	333	石冠	3K		J9	BG2	181	33	80	590	半円弁頭状		緑色凝灰岩	100%	
	334	石冠	8K		O31	B	(156)	23	56	(265)	蹄形		凝灰岩	60%	
	335	石冠	3K		L11	B	(105)	43	70	(285)	半円形、被熱		凝灰岩	60%	
	336	石冠	3K		PK12-3	K12	(90)	46	67	(255)	蹄形、側面凹		緑色凝灰岩	30%	
	337	石冠	7K		PR23-17	R23	(109)	48	65	(233)	半円弁頭状、側面凹、線刻被熱		凝灰岩	50%	
	338	石冠	4K		R17	BG1	150	46	85	690	半円形、被熱		凝灰岩	100%	
	339	石冠	3K		PK9-13	K9	(148)	53	63	(529)	蹄形、被熱		砂岩	50%	
	340	石冠	7K		PQ25-8	Q25	(120)	78	(112)	(1620)	半円弁頭状、被熱		砂岩	30%	
	343	石冠	7K		PR19-5	R19		(136)	38	42	(340)	蹄形		緑色凝灰岩	50%
151	344	石棒	3K		N16	BG	50	51	(85)	(320)	被熱		凝灰岩	20%	
	346	石冠	6K	SD02	O19		(167)	22	48	(100)	蹄形、三叉文		凝灰岩	45%	
	347	石冠	3K		PO17-16	O17		113	29	63	(284)	蹄形		砂岩	95%



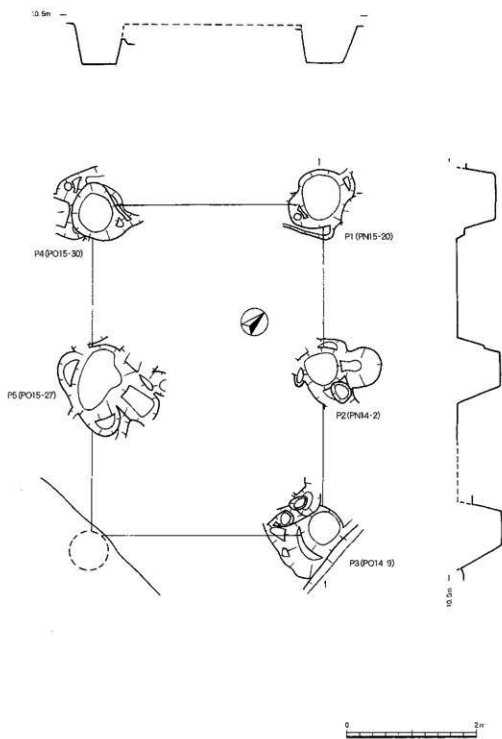
第12図 SB05遺構図 (1/60)



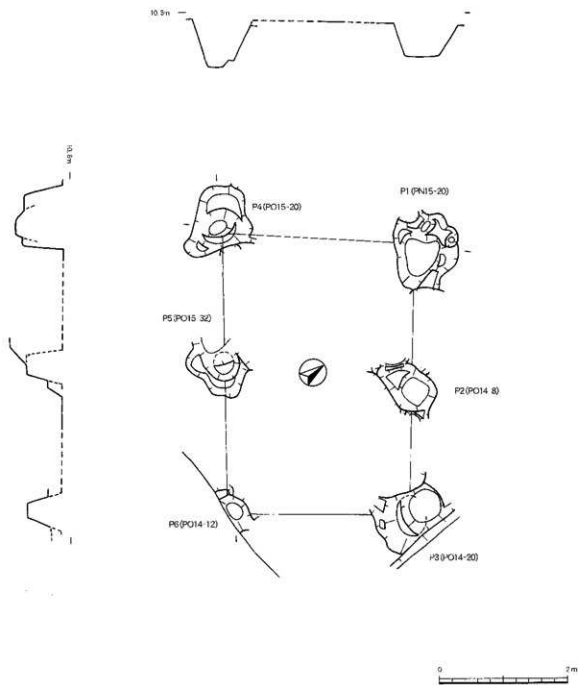
第13図 SB15遺構図 (1/60)



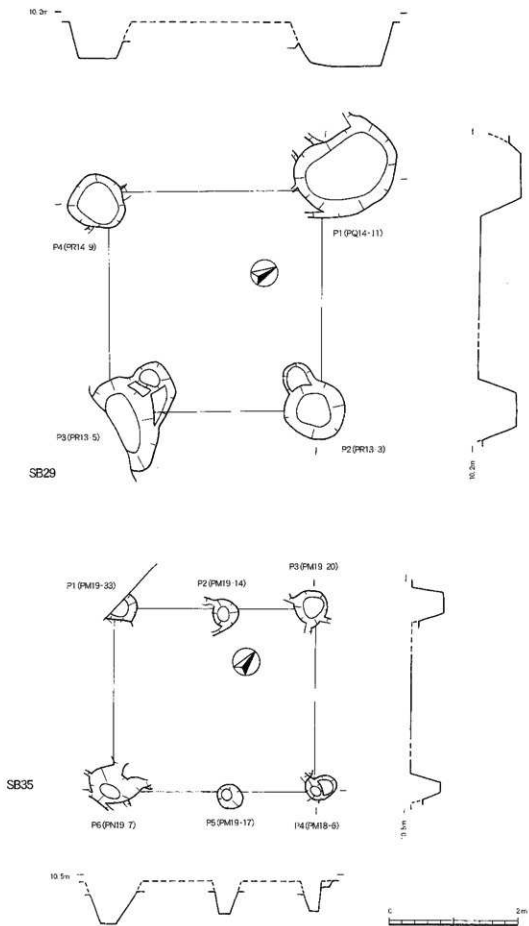
第14図 SB16遺構図 (1/60)



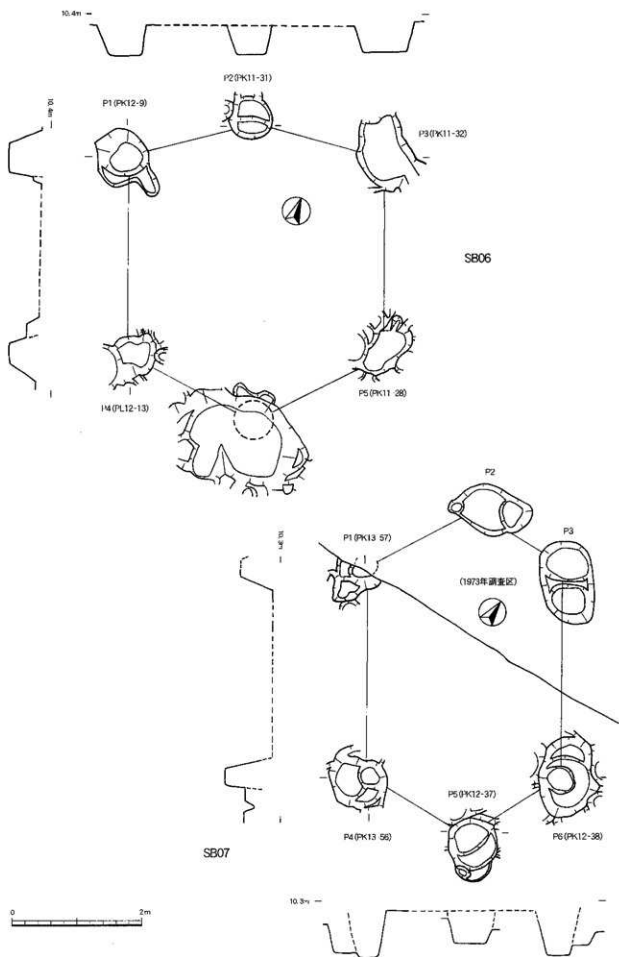
第15図 SB23遺構図 (1/60)



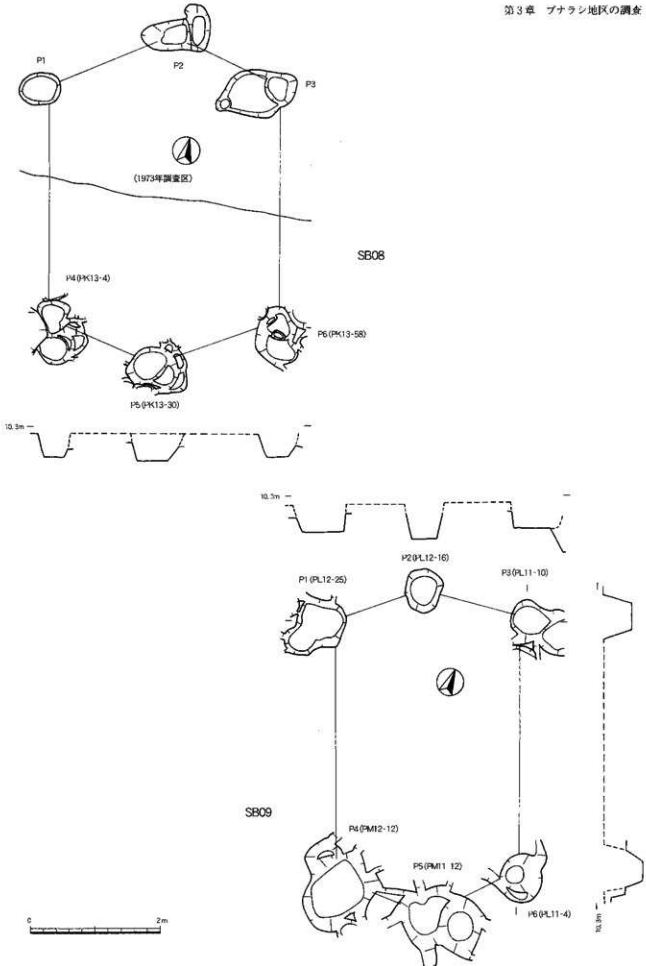
第16図 SB24遺構図 (1/60)



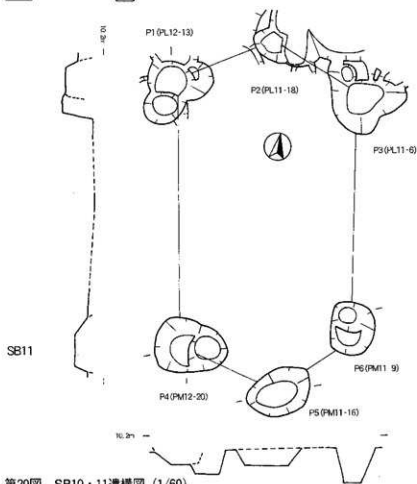
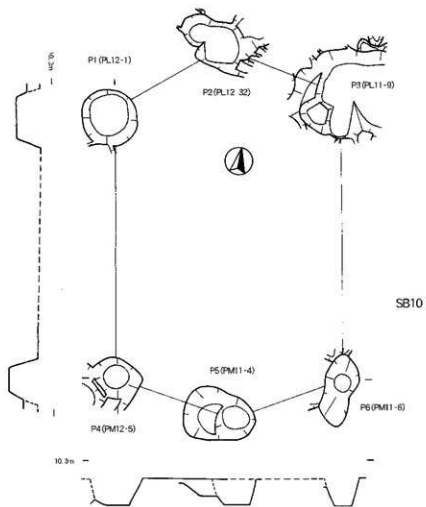
第17図 SB29・35遺構図 (1/60)



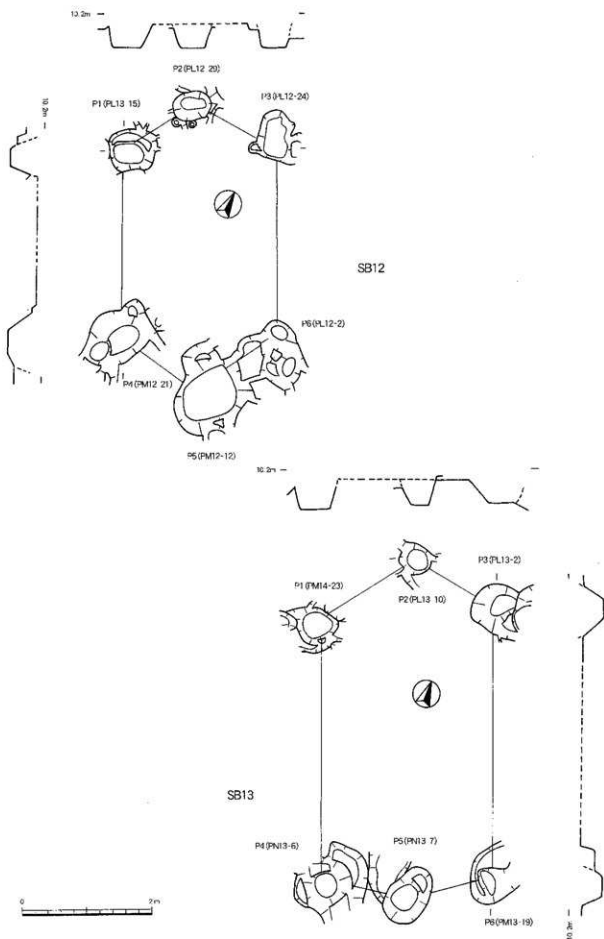
第18図 SB06・07遺構図 (1/60)



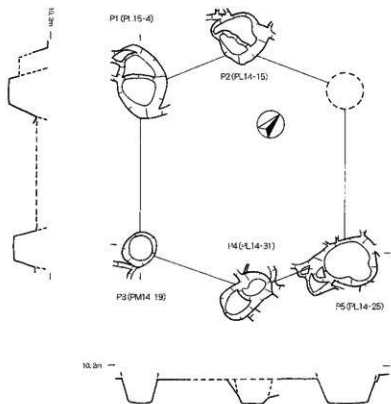
第19図 SB08・09遺構図 (1/60)



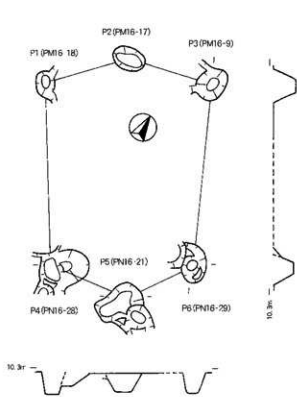
第20圖 SB10・11遺構圖 (1/60)



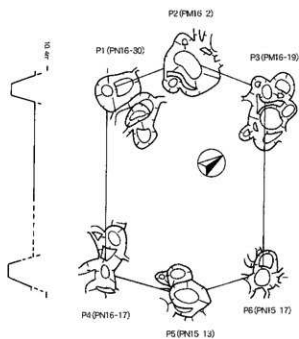
第21図 SB12・13遺構図 (1/60)



SB14



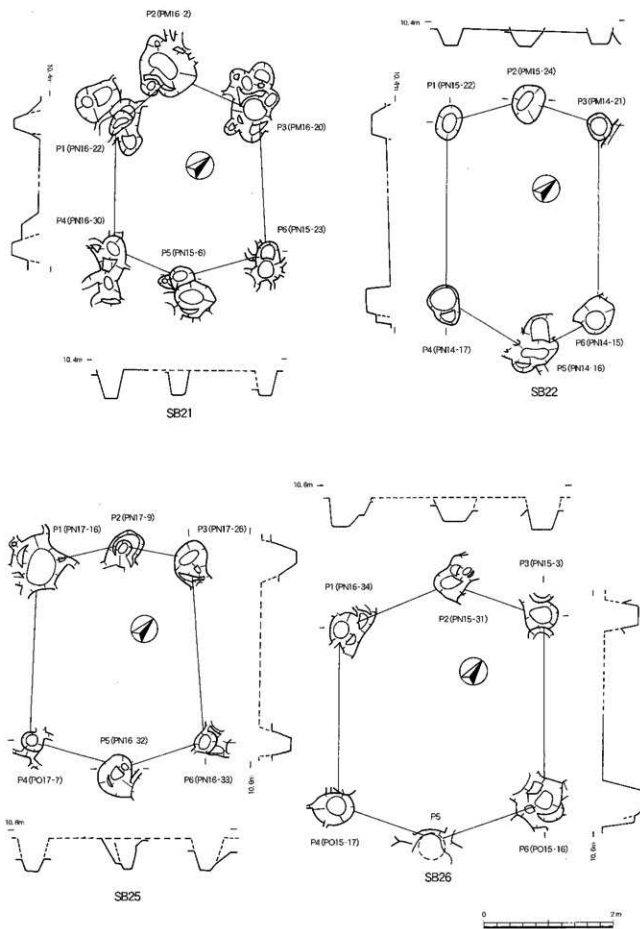
SB19



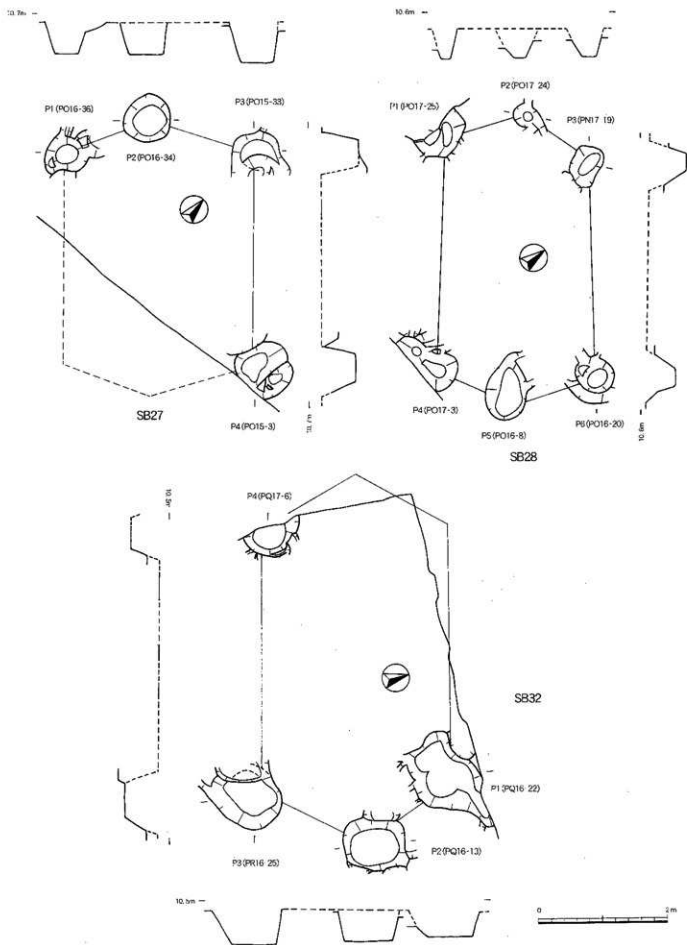
SB20



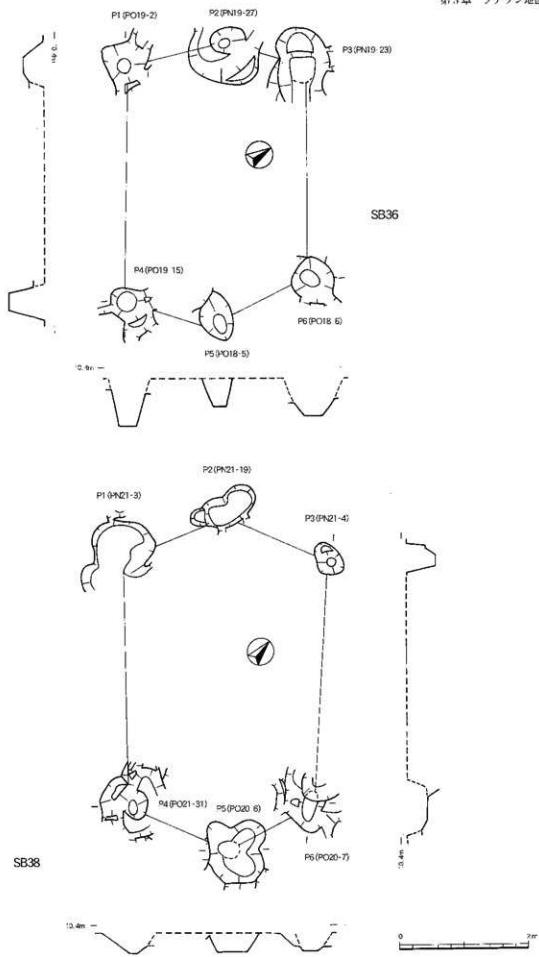
第22図 SB14・19・20遺構図 (1/60)



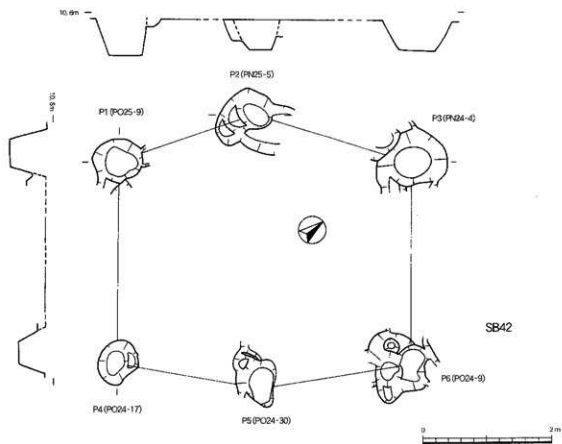
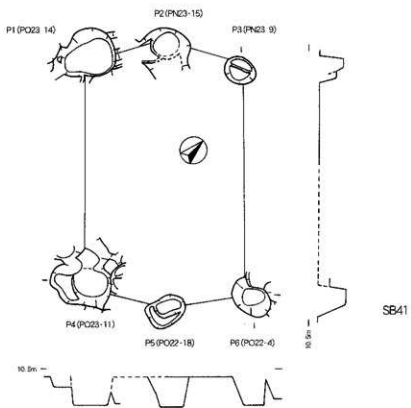
第23図 SB21・22・25・26遺構図 (1/60)



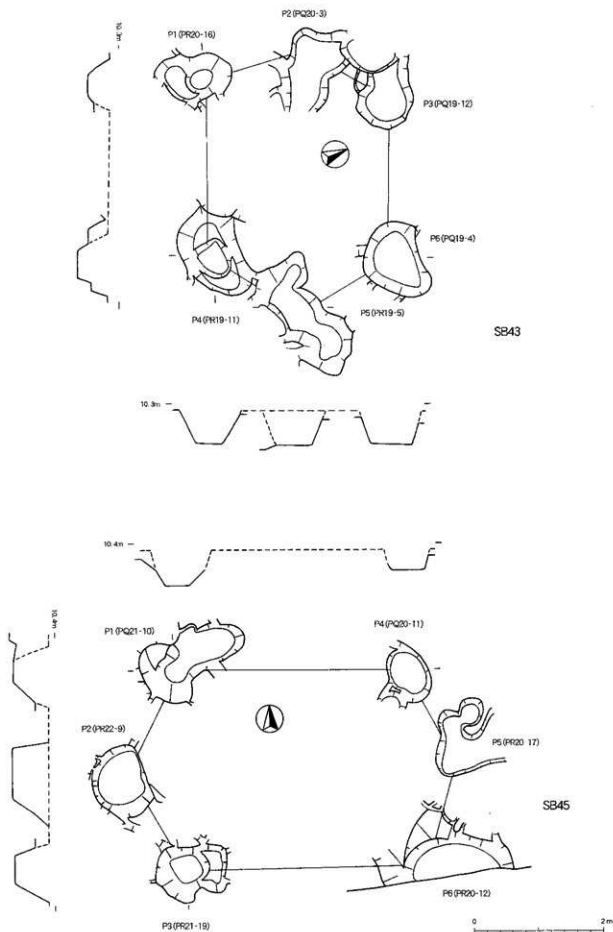
第24図 SB27・28・32遺構図 (1/60)



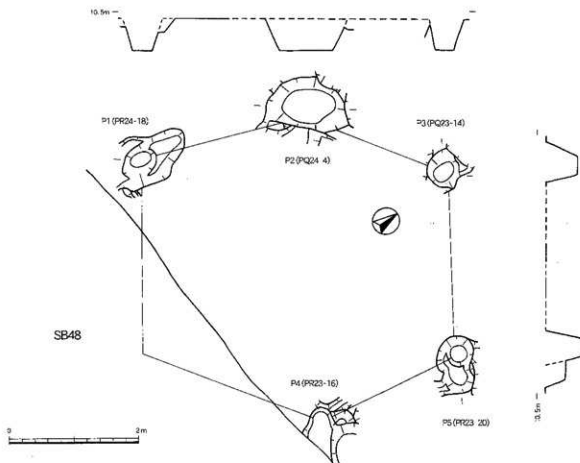
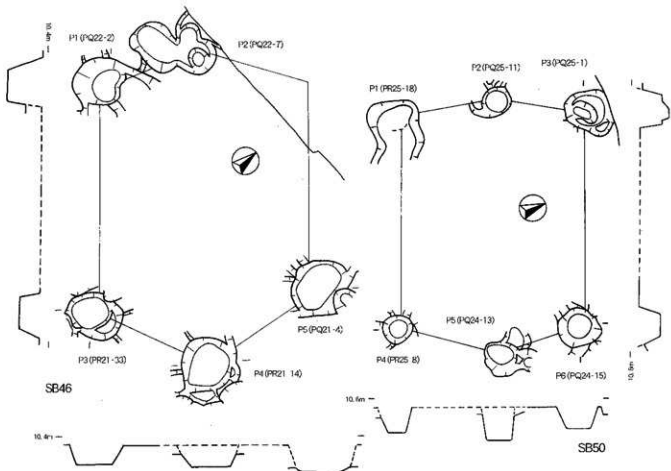
第25図 SB36・38遺構図 (1/60)



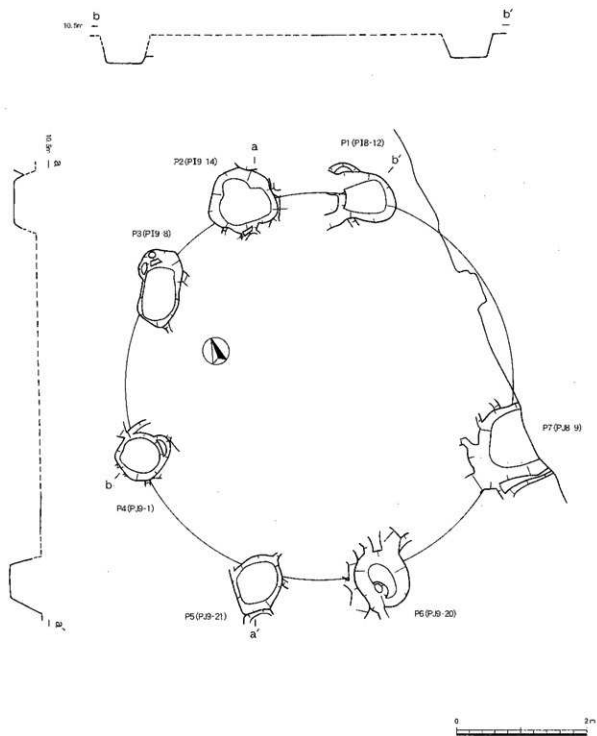
第26図 SB41・42遺構図 (1/60)



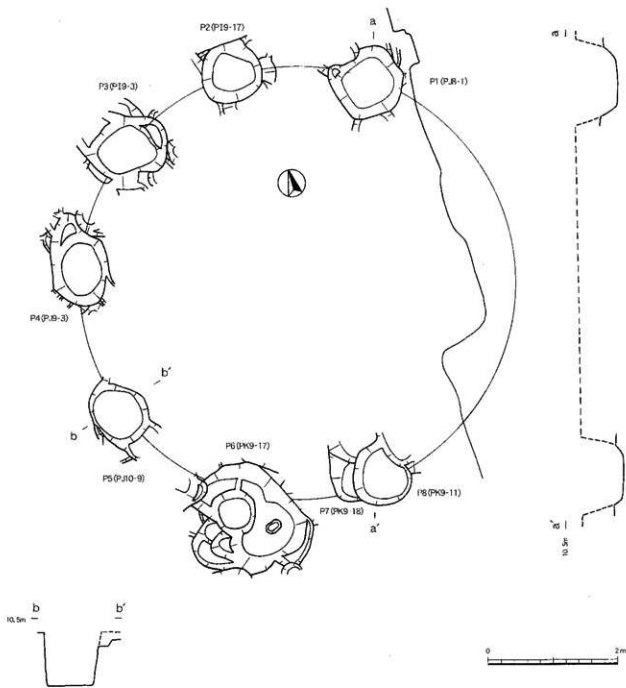
第27図 SB43・45遺構図 (1/60)



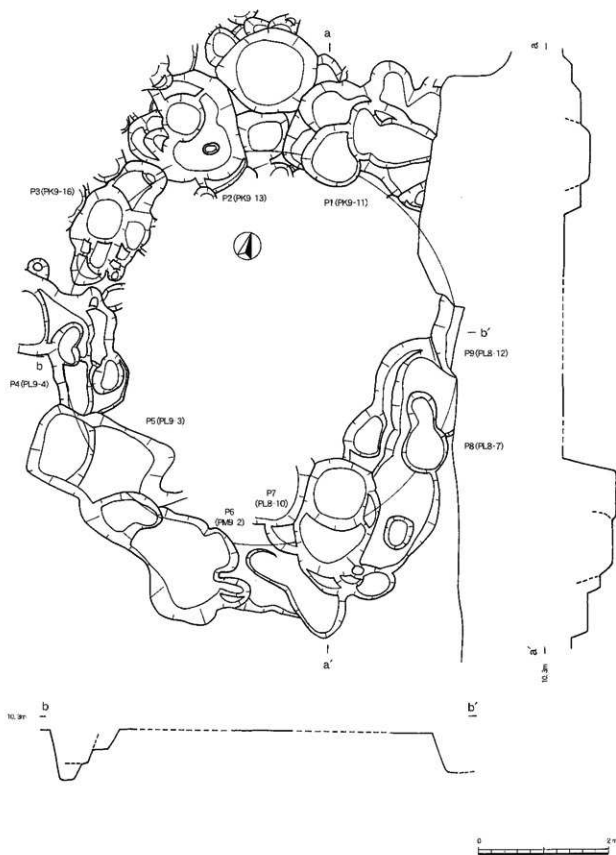
第28图 SB46・48・50遺構图 (1/60)



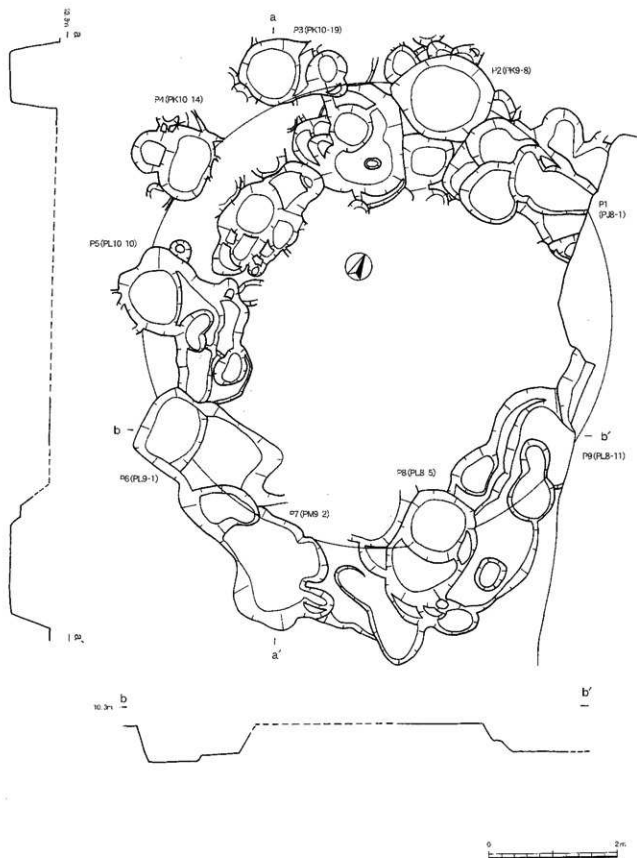
第29図 SB01遺構図 (1/60)



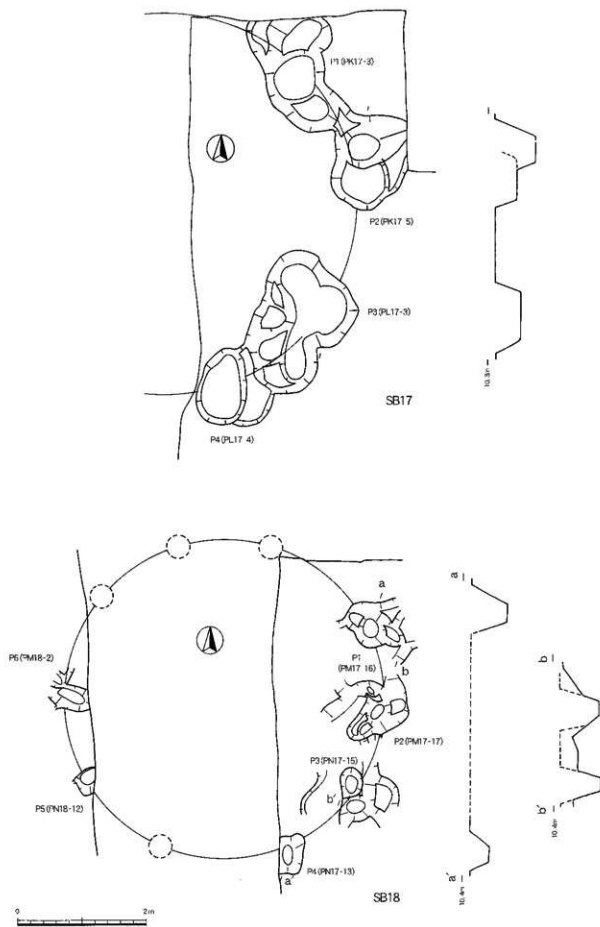
第30图 SB02遺構図 (1/60)



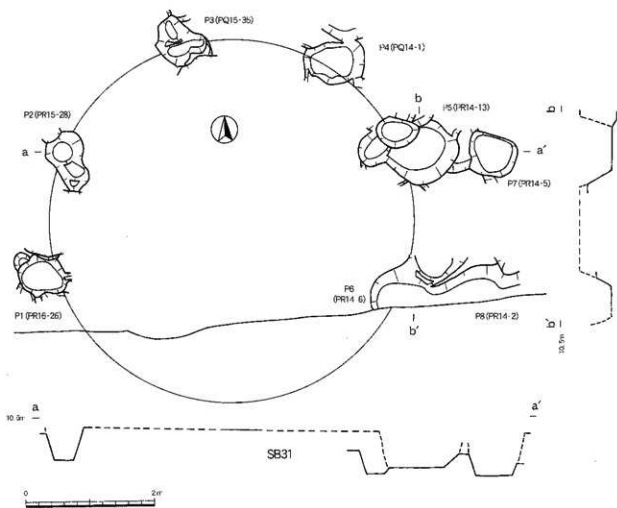
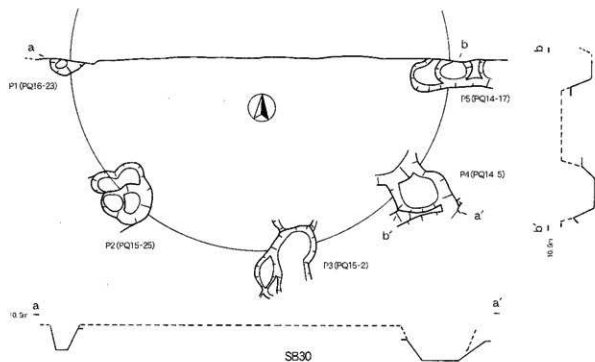
第31図 SB03遺構図 (1/60)



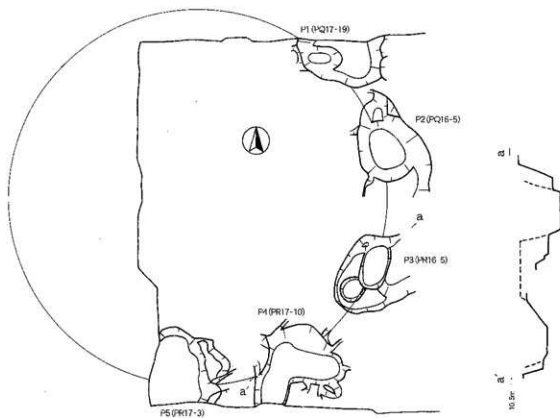
第32图 SB04遺構図 (1/60)



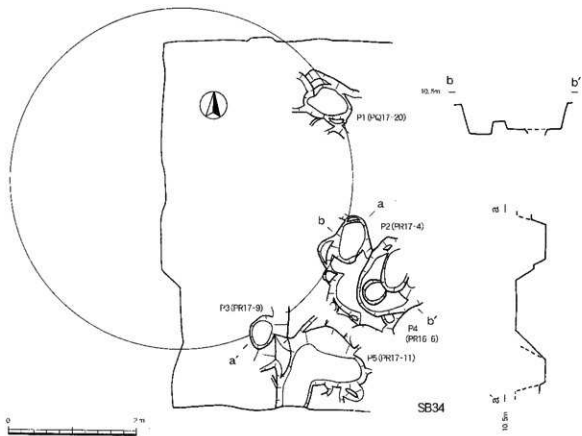
第33図 SB17・18遺構図 (1/60)



第34圖 SB30・31遺構圖 (1/60)

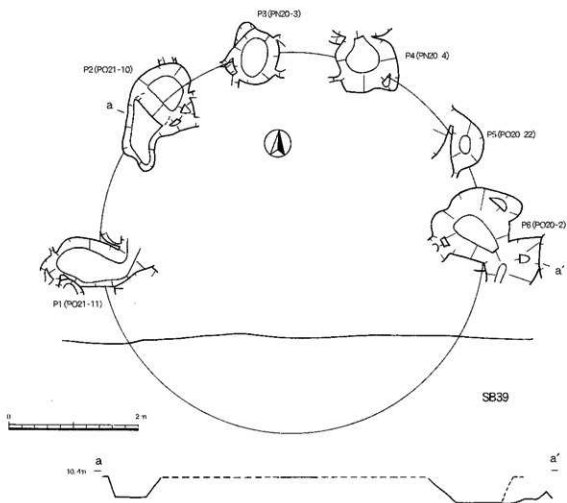
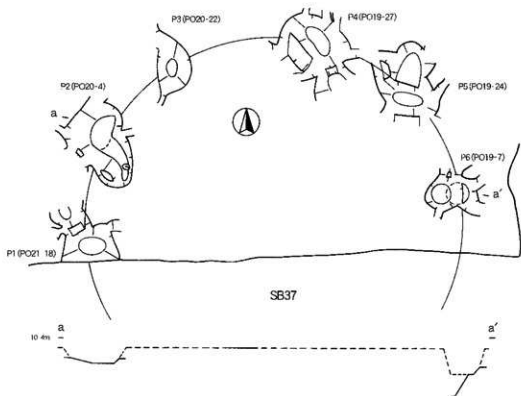


SB33

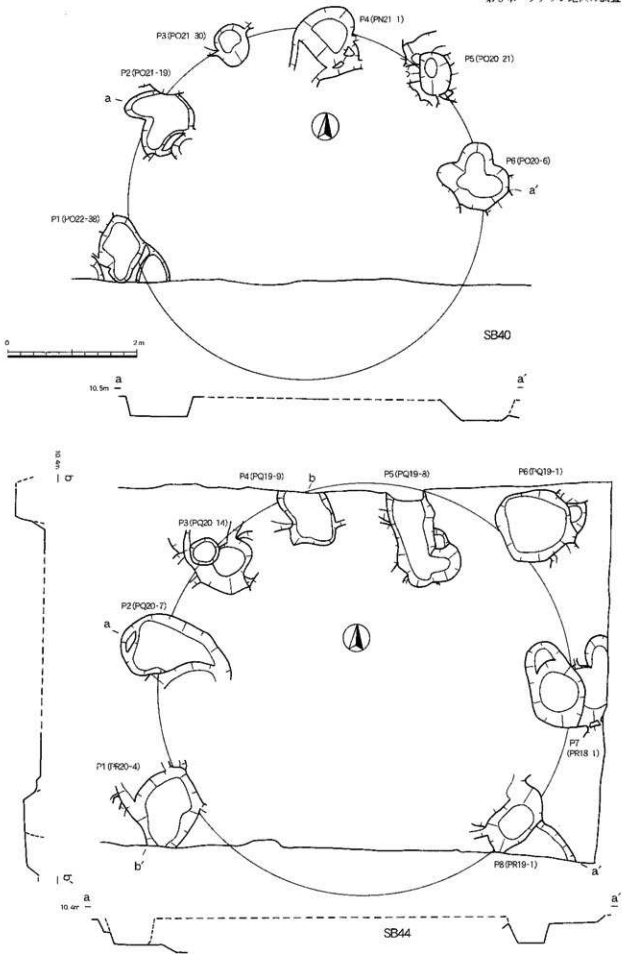


SB34

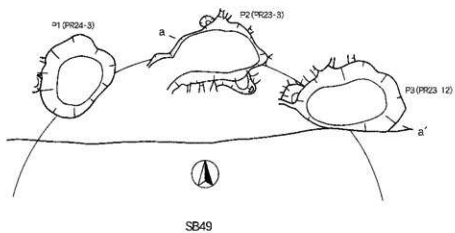
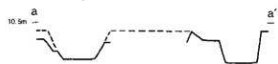
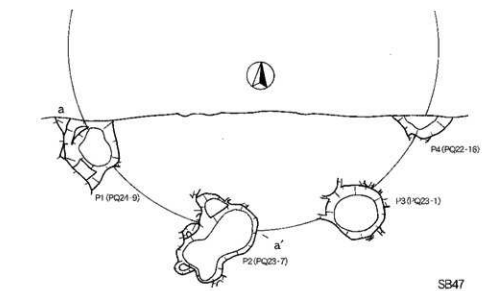
第35図 SB33・34遺構図 (1/60)



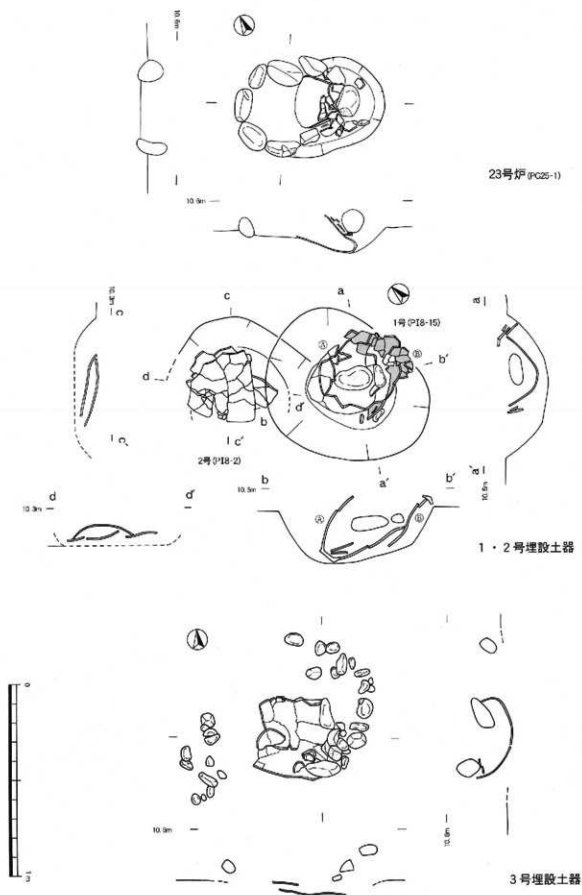
第36圖 SB37・39遺構圖 (1/60)



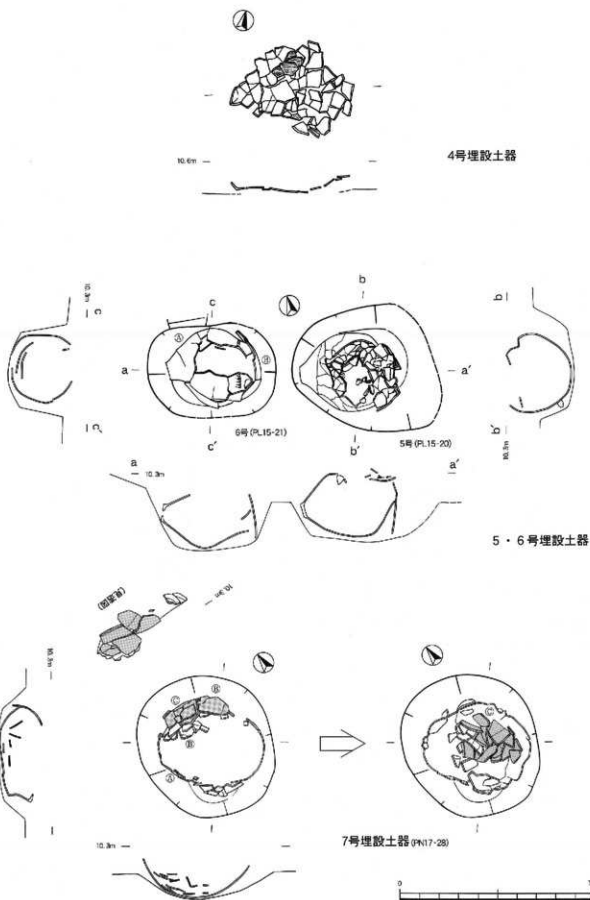
第37図 SB40・44遺構図 (1/60)



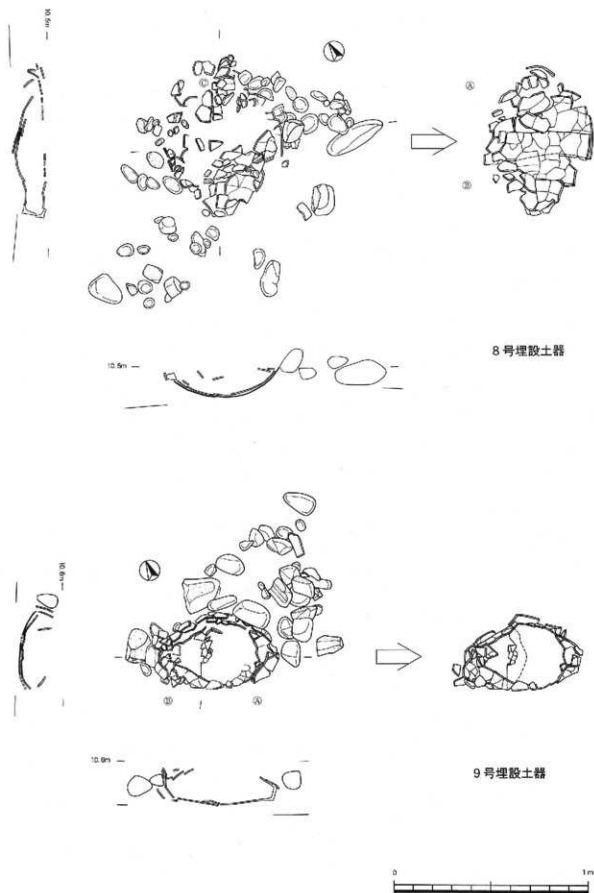
第38圖 SB47・49遺構圖 (1/60)



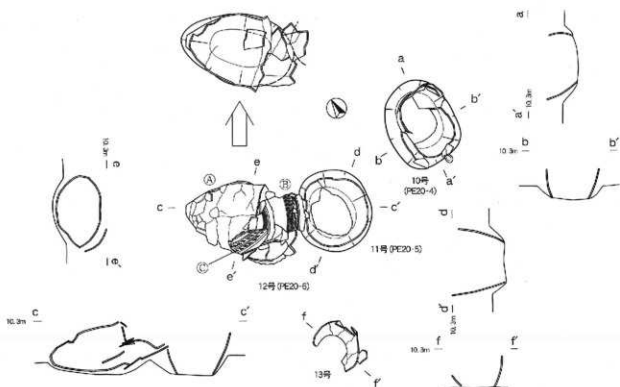
第39図 23号炉・1～3号埋設土器 (1/20)



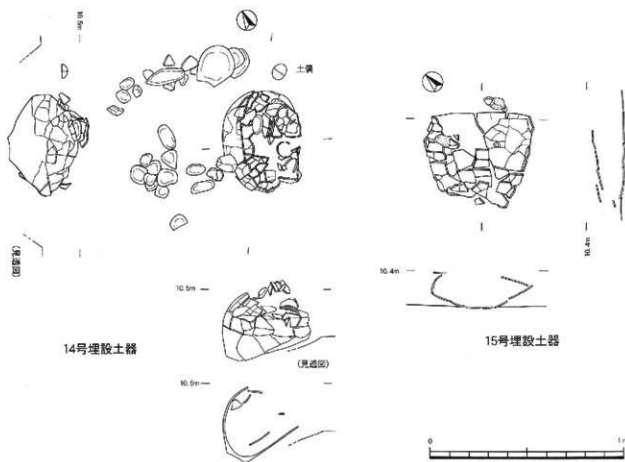
第40图 4~7号埋設土器 (1/20)



第41図 8・9号埋設土器 (1/20)



10~13号埋設土器



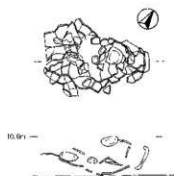
14号埋設土器

15号埋設土器

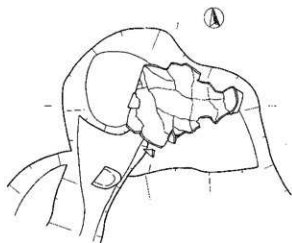
第42图 10~15号埋設土器 (1/20)



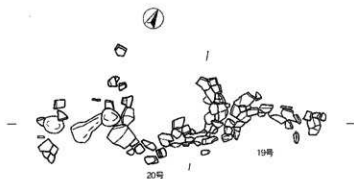
16号埋設土器



17号埋設土器



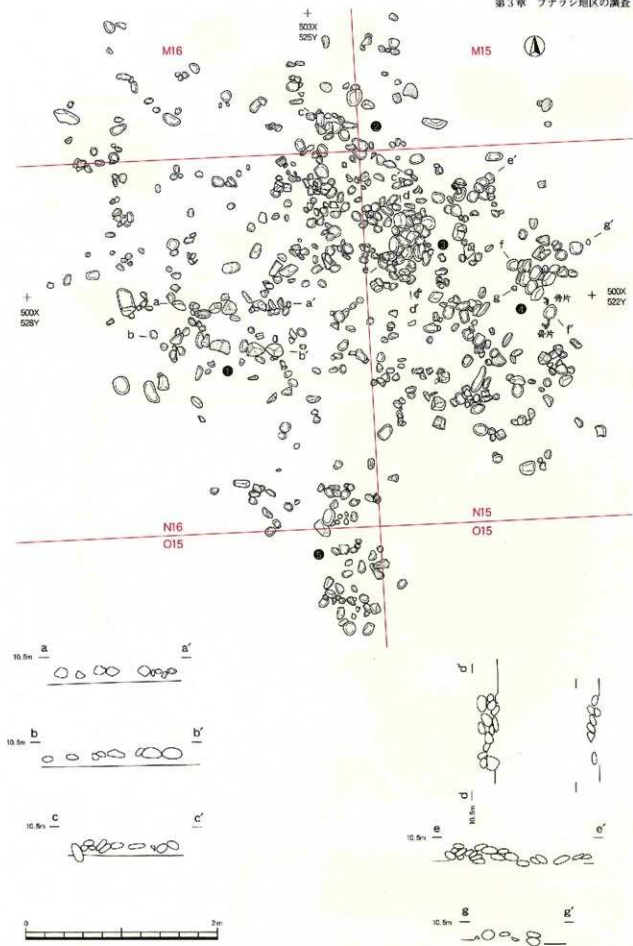
18号埋設土器 (PH23-18)



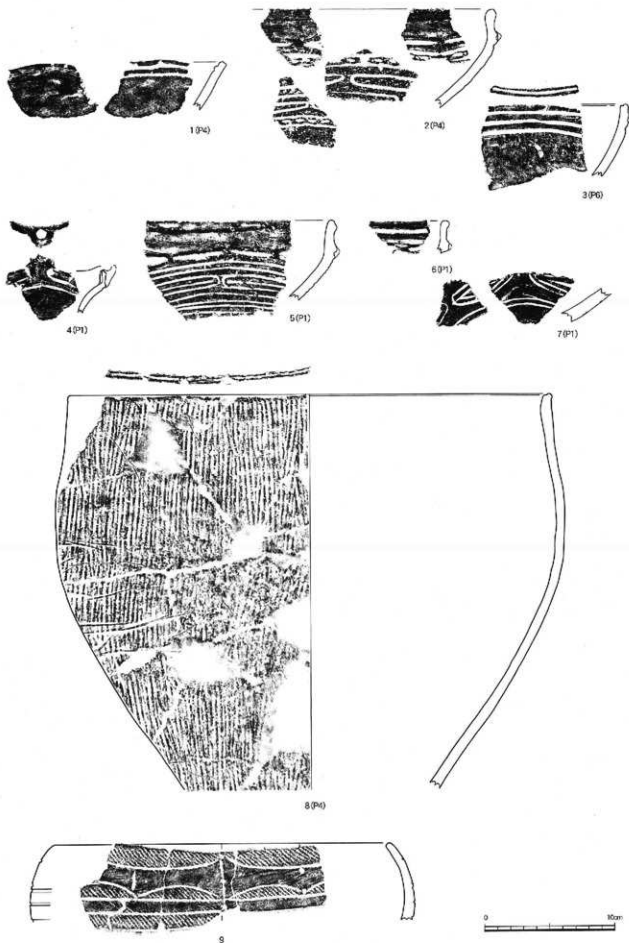
19・20号埋設土器



第43図 16~20号埋設土器 (1/20)



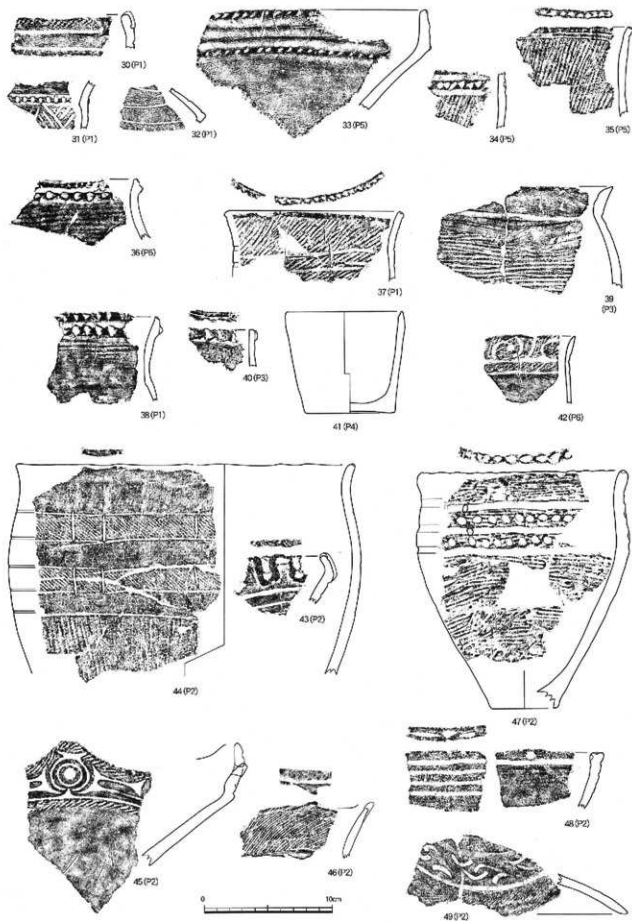
第45図 4号配石遺構 (1/40)



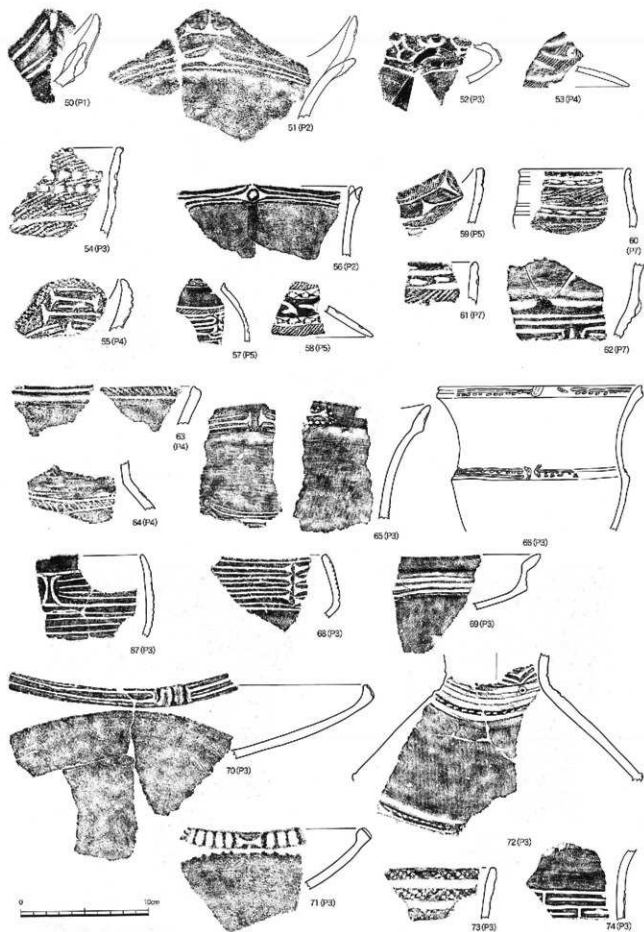
第46図 SB05 (1)・SB15 (2・3)・SB23 (4~7)・SB10 (8)・SB11 (9) 出土土器 (1/3)



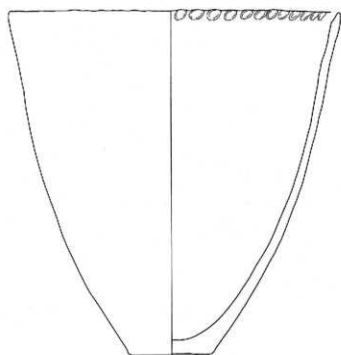
第47図 SB12 (10・11)・SB13 (12)・SB14 (13)・SB20 (14~16)・SB28 (17~19)・SB32 (20) SB38 (21)・SB42 (22)・SB45 (23)・SB46 (24・25)・SB48 (26・27)・SB50 (28・29) 出土土器 (1/3)



第48圖 SB02 (30~35)・SB03 (36)・SB04 (37~41)・SB18 (42)・SB31 (43・44)・SB33 (45~49)
 出土土器 (1/3)



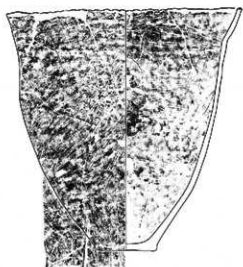
第49図 SB37 (50~53)・SB39 (54)・SB40 (55)・SB44 (56~62)・SB47 (63~74) 出土土器 (1/3)



75



76



77(A)

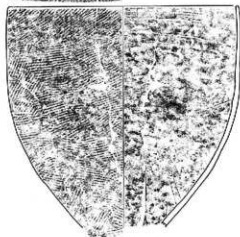


78(B)

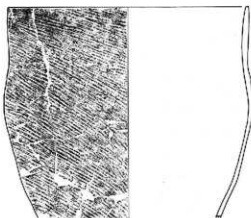


第50图 23号炉出土土器 (75·76:1/3) · 1号埋没土器 (77·78:1/6)

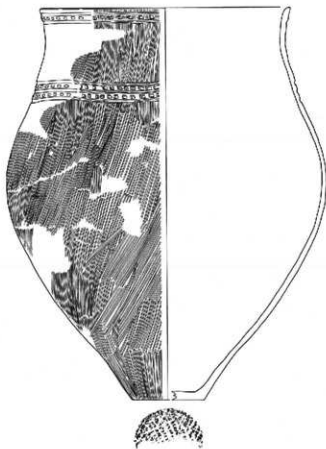
Коллекция этнографического музея



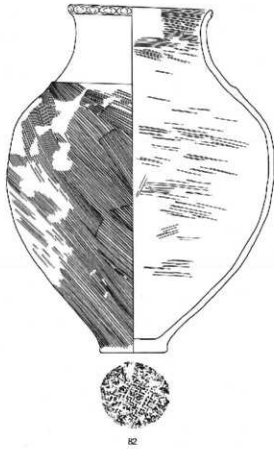
79



80



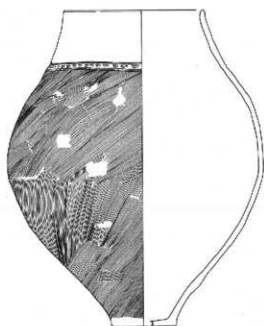
81



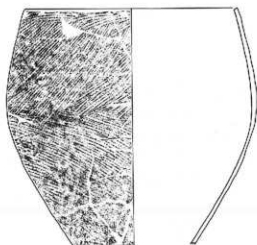
82



第51図 2号(79)・3号(80)・4号(81)・5号(82)埋設土器(1/6)



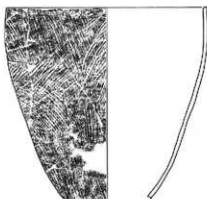
83(A)



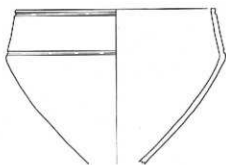
84(B)



85(A)



86(B)



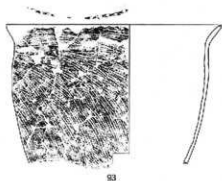
87(C)



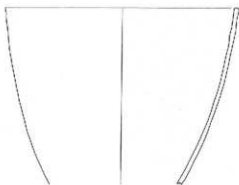
第52図 6号(83・84)・7号(85~87)埋設土器(1/6)



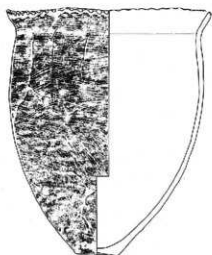
第53図 8号(88~90)・9号(91・92)埋設土器(1/6)



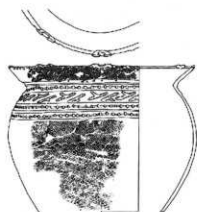
93



94



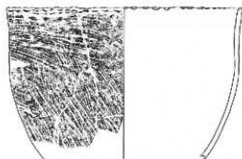
95(A)



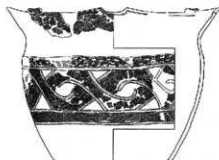
96(B)



97(C)



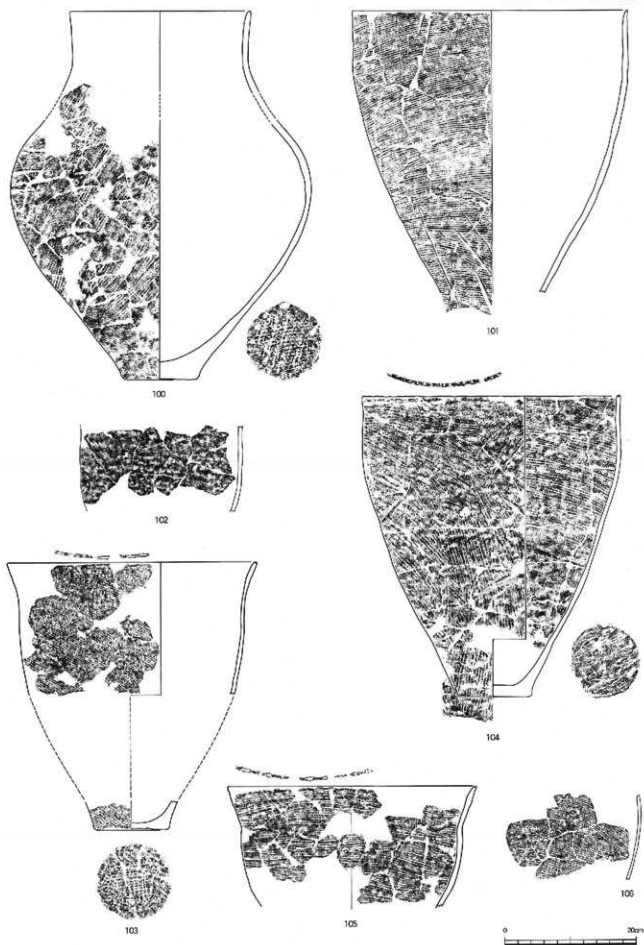
98(D)



99



第54図 10号 (93)・11号 (94)・12号 (95~98)・13号 (99) 埋設土器 (1/6)

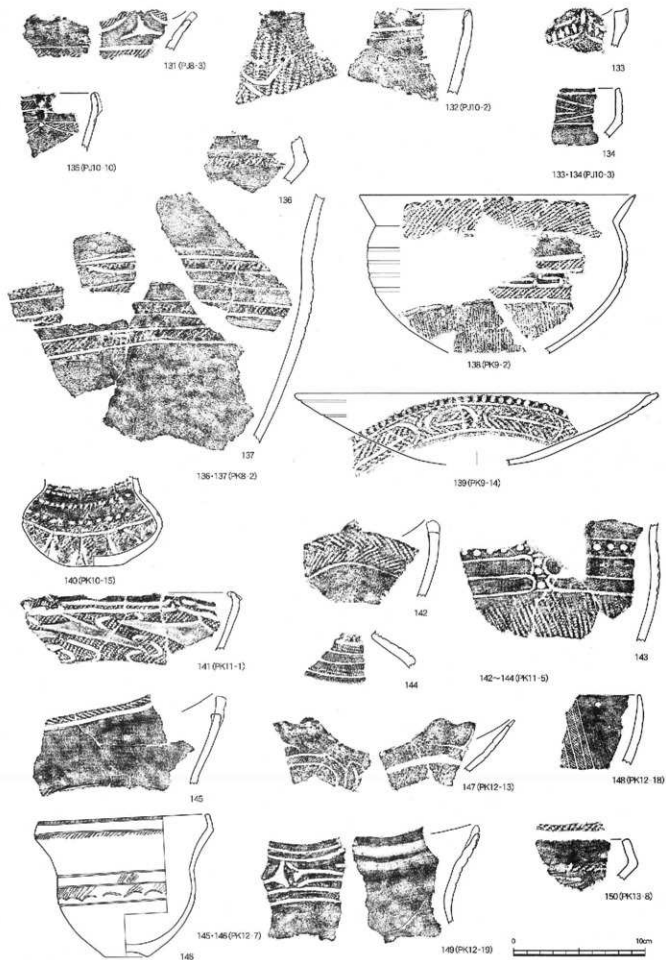


第55図 14号 (100)・15号 (101)・16号 (102)・17号 (103)・18号 (104)・19号 (105)・20号 (106)
埋設土器 (1/6)



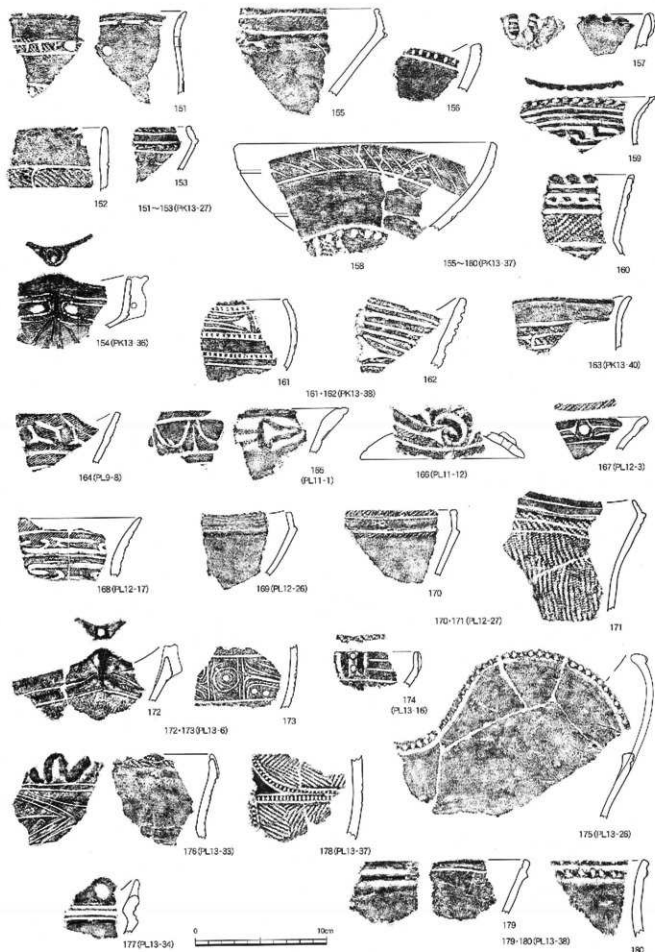
第56図 土坑・ピット出土土器 1 (1/3)

107~130: 3区



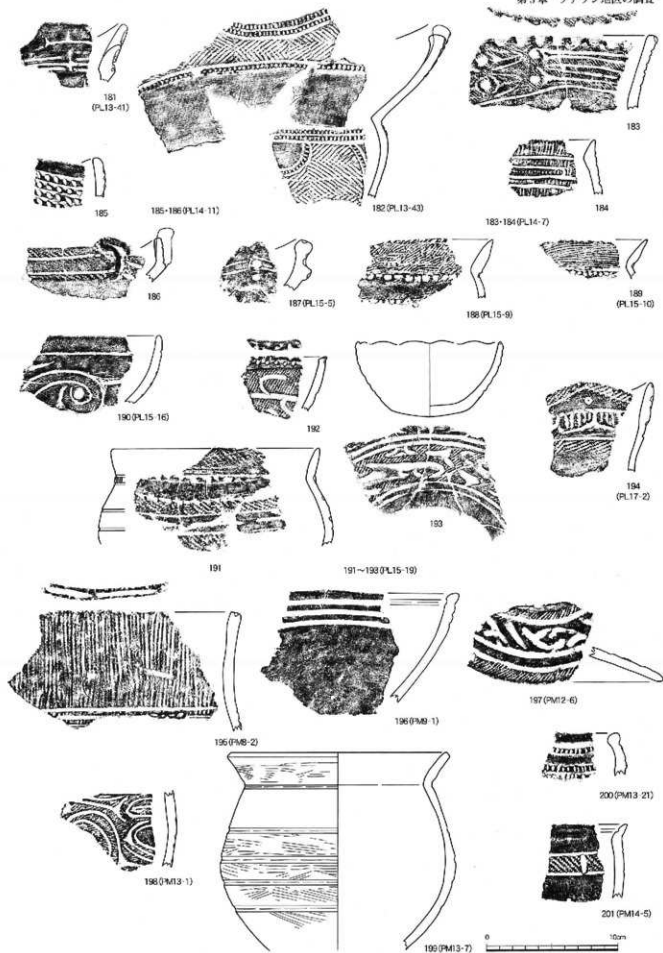
第57図 土坑・ピット出土土器 2 (1/3)

131-150 : 3区



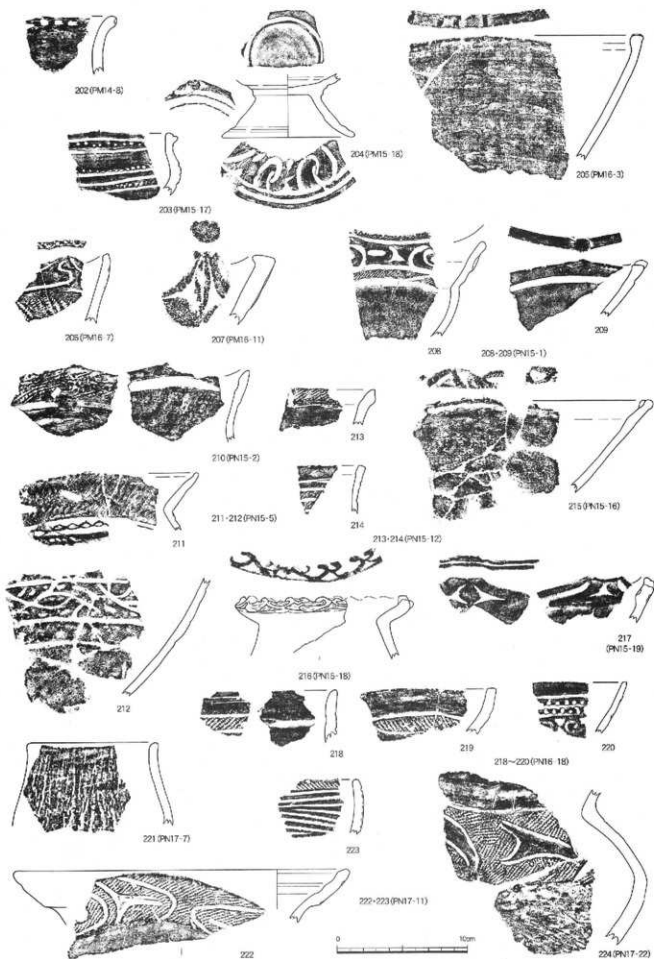
第58図 土坑・ピット出土土器 3 (1/3)

151~180 : 3区



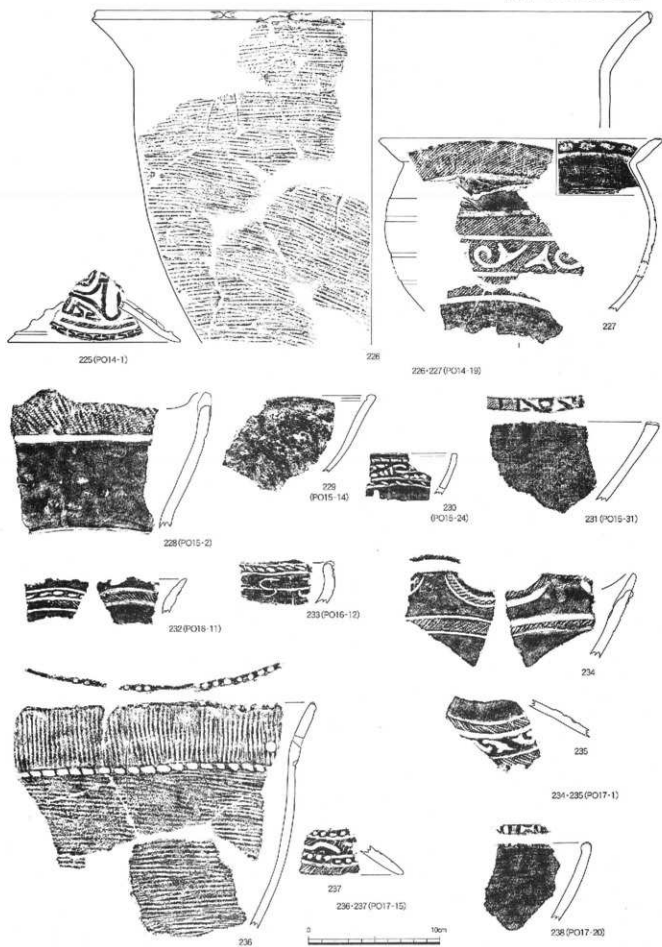
第59図 土坑・ピット出土土器 4 (1/3)

181~201 : 3区



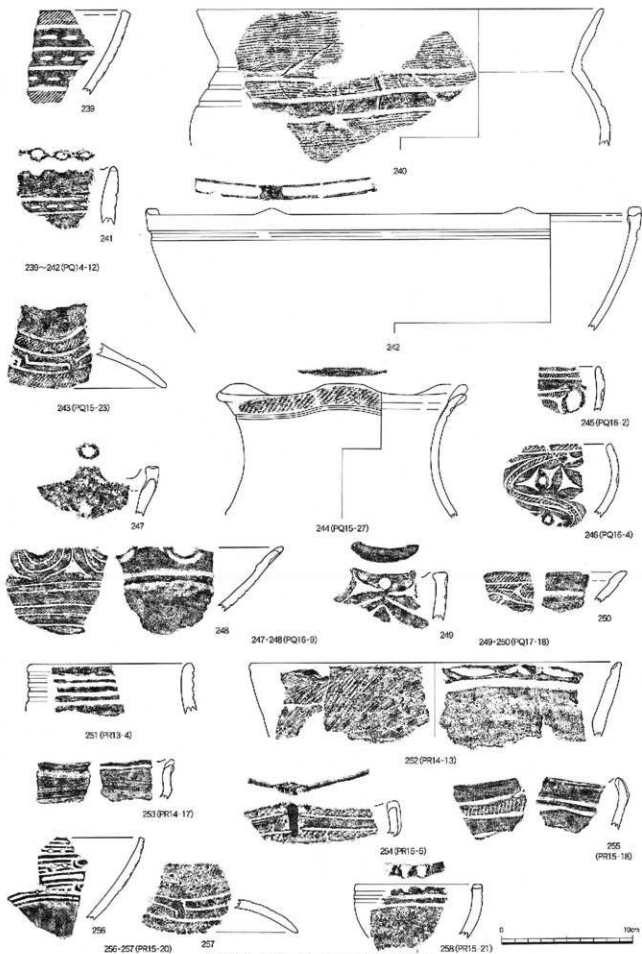
第60図 土坑・ピット出土土器 5 (1/3)

202~204 : 3区



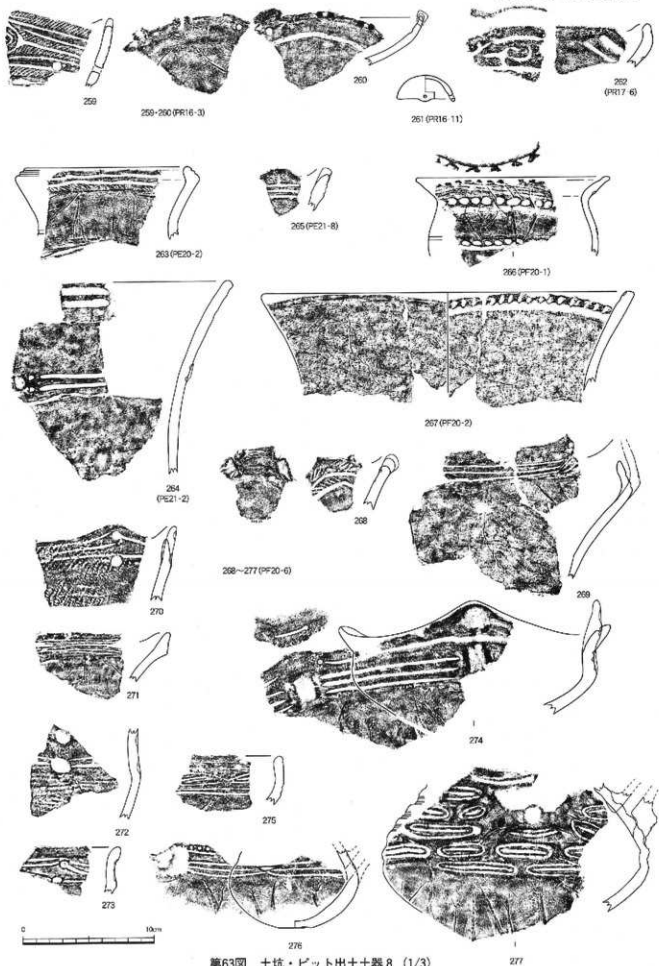
第61図 土坑・ピット出土土器 6 (1/3)

225-238 : 3区



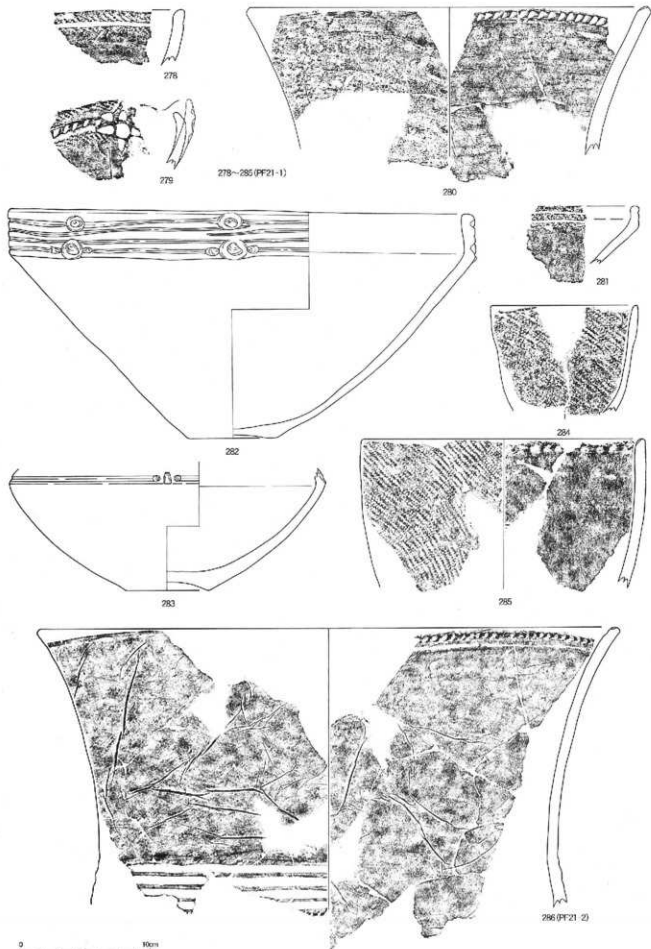
第62図 土坑・ピット出土土器 7 (1/3)

239~258 : 4 枚



第63図 土坑・ピット出土土器 8 (1/3)

259~262 : 4区 263~277 : 5区

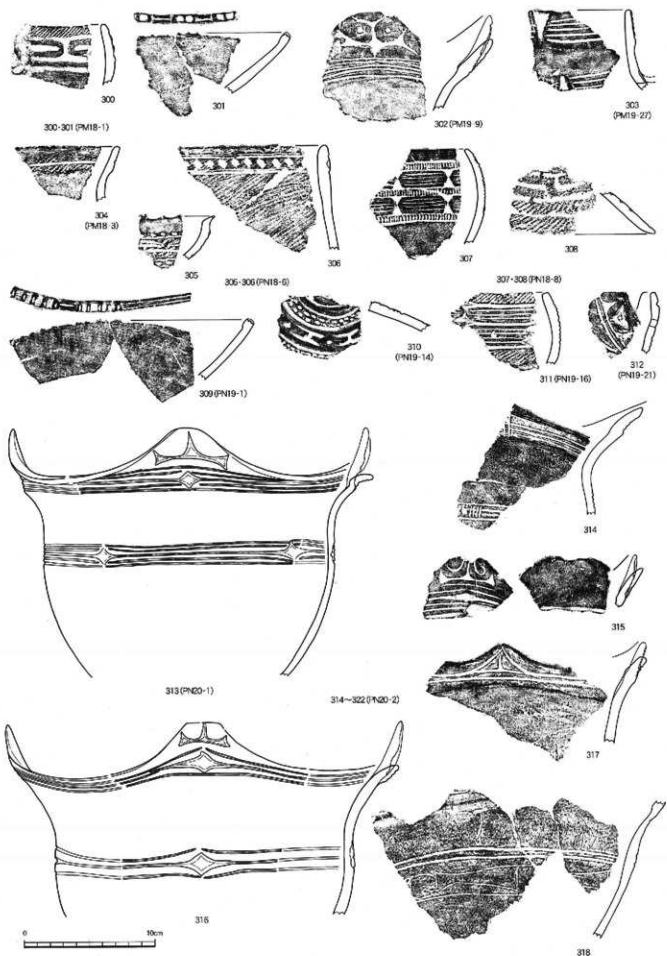


第64図 土坑・ピット出土土器 9 (1/3)

278~286 : 5区

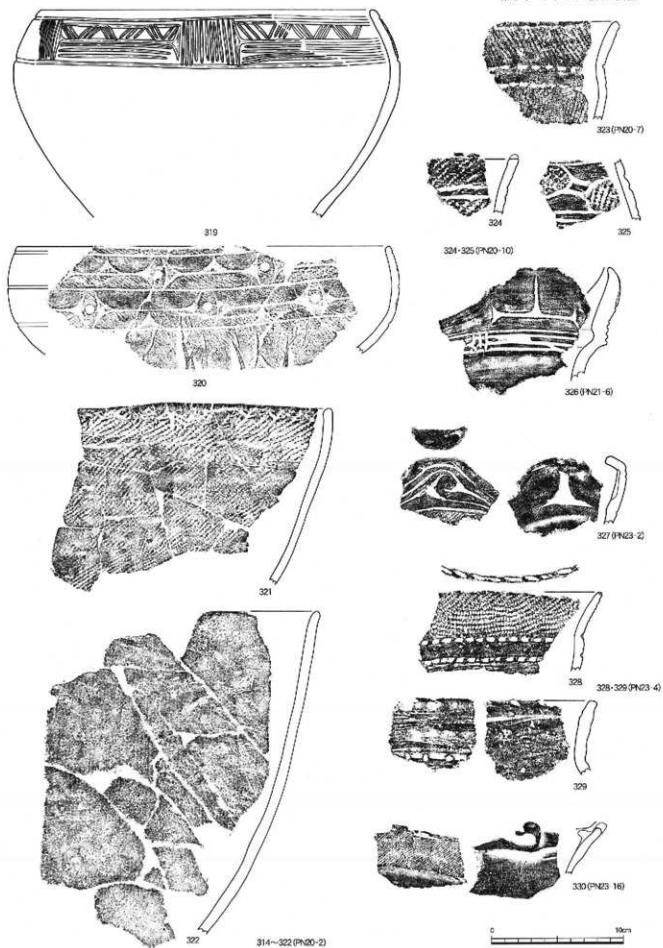


第65図 土坑・ピット出土土器10 (1/3)



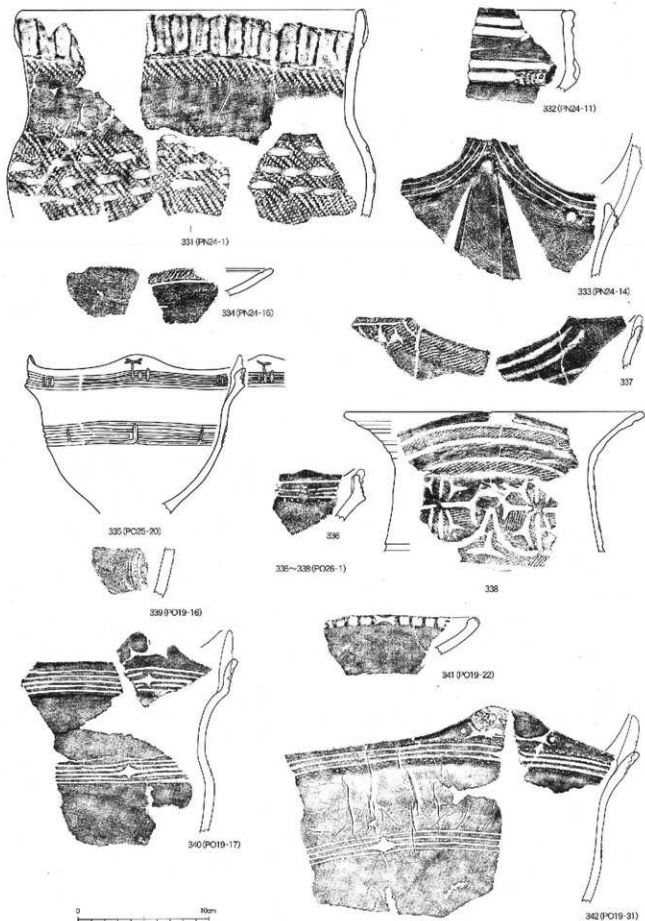
第66図 土坑・ピット出土土器11 (1/3)

300-318 : 6区



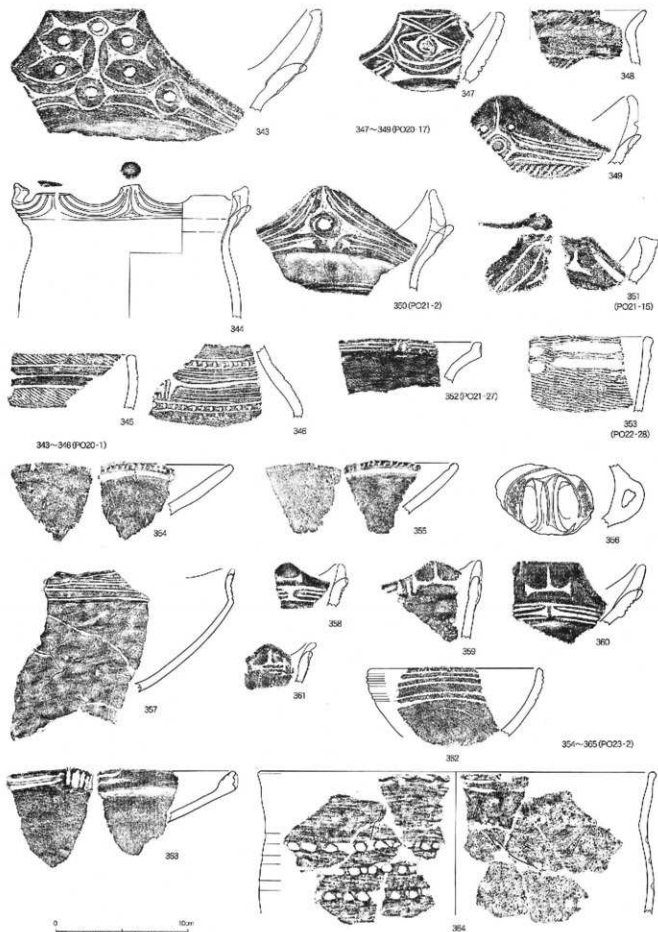
第67図 土坑・ピット出土土器12 (1/3)

319~330 : 6区



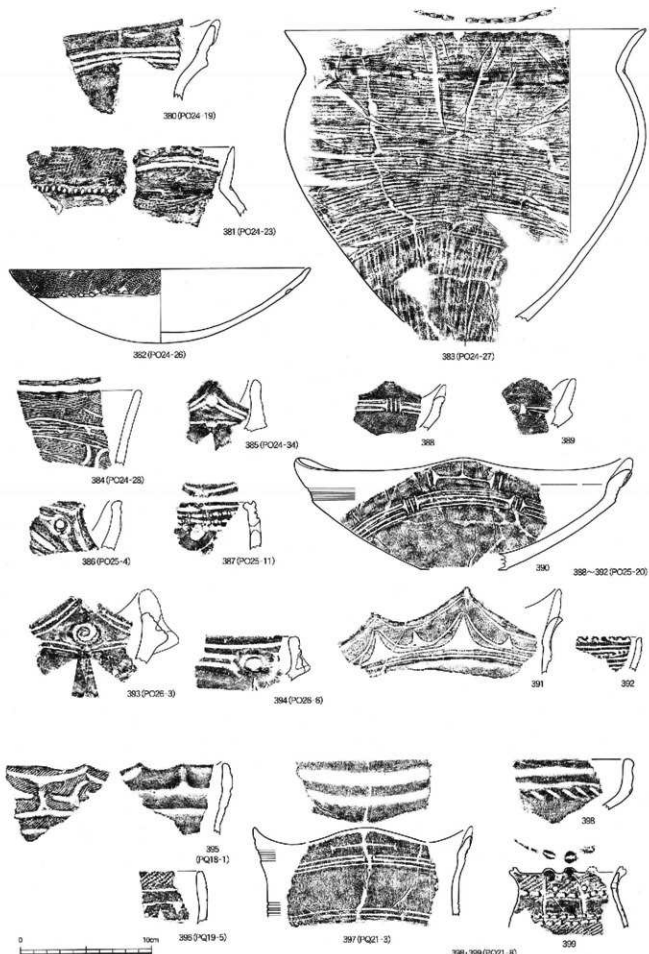
第68図 土坑・ピット出土土器13 (1/3)

331~342 : 6区



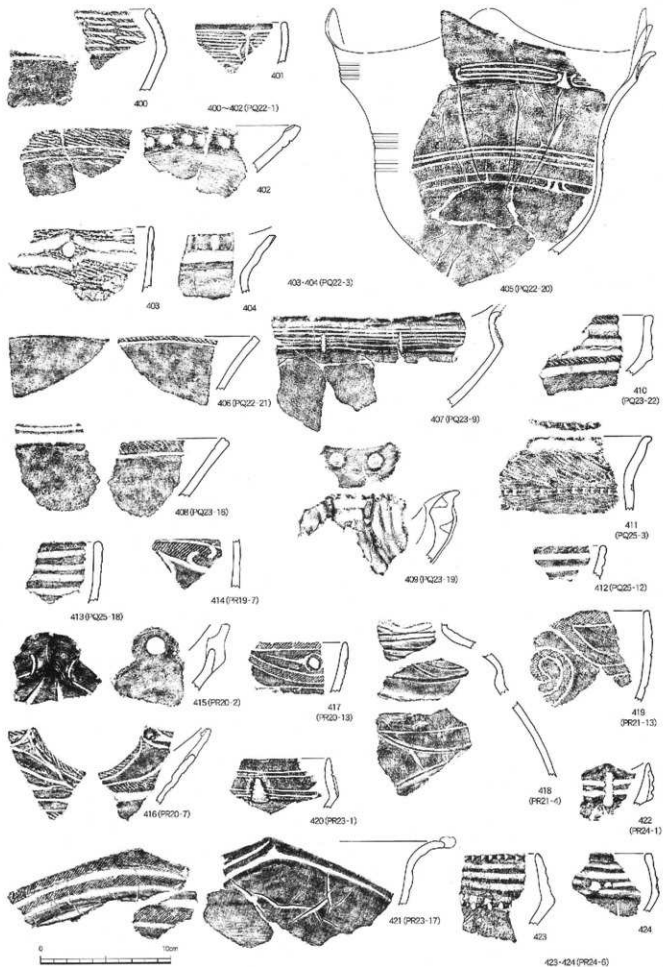
第69図 土坑・ピット出土土器14 (1/3)

343~354 : 6京



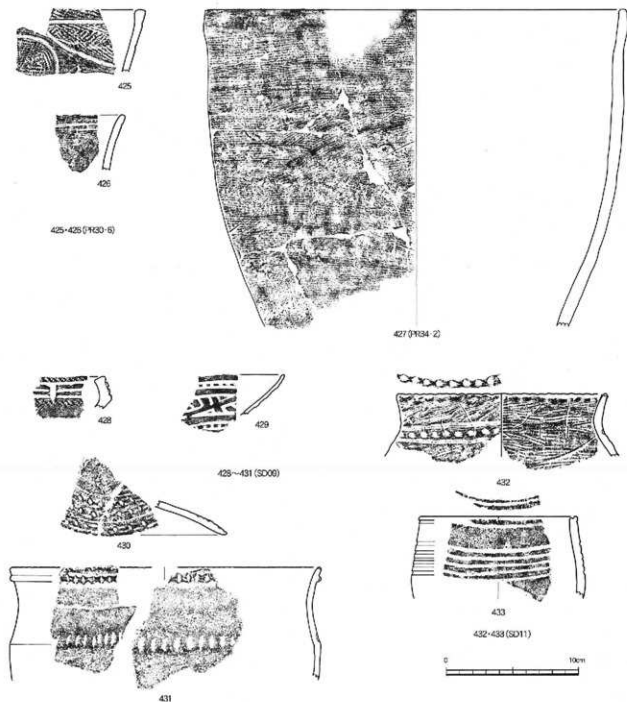
第71図 土坑・ピット出土土器16 (1/3)

380~384 : 6区 385~389 : 7区



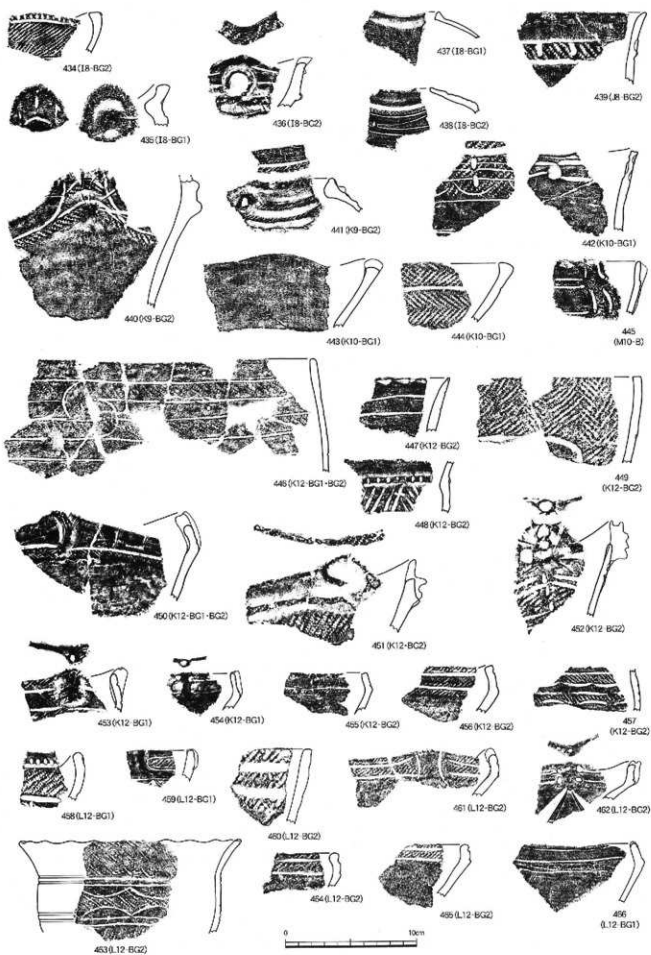
第72図 土坑・ピット出土土器17 (1/3)

400~404 : 7頁



第73図 土坑・ピット出土土器18 溝出土土器 (1/3)

425~433 : 9B



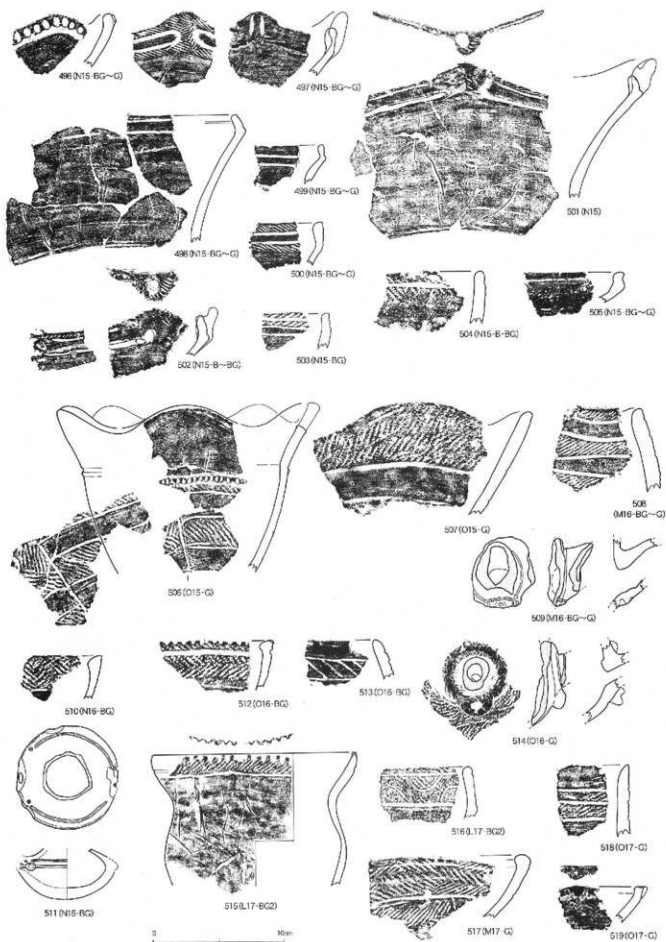
第74图 包含層出土土器 1 (1/3)

434—465 : 3区



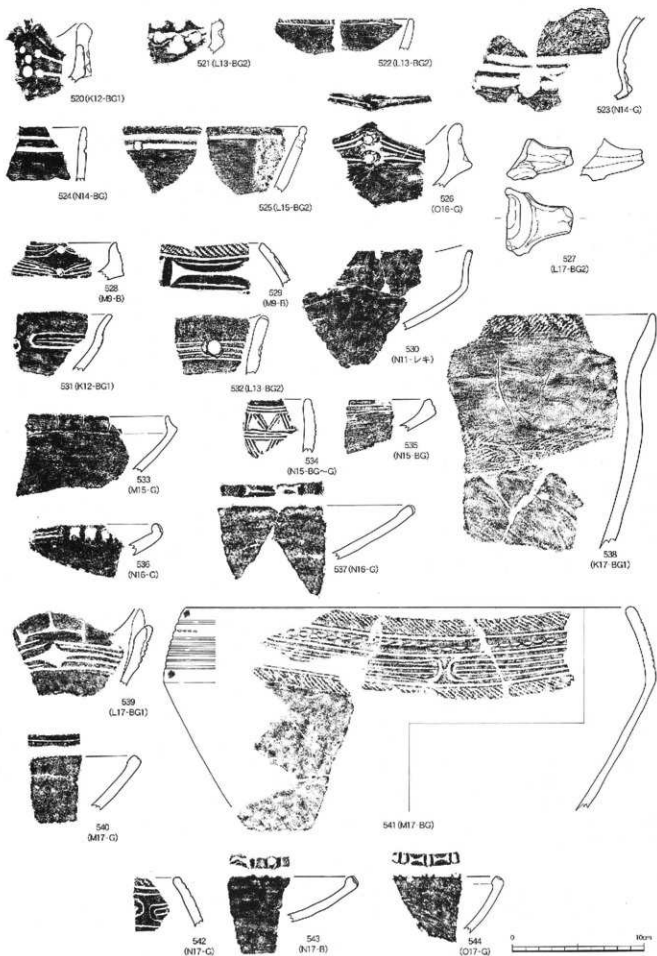
第75図 包含層出土土器 2 (1/3)

467~495 : 3区



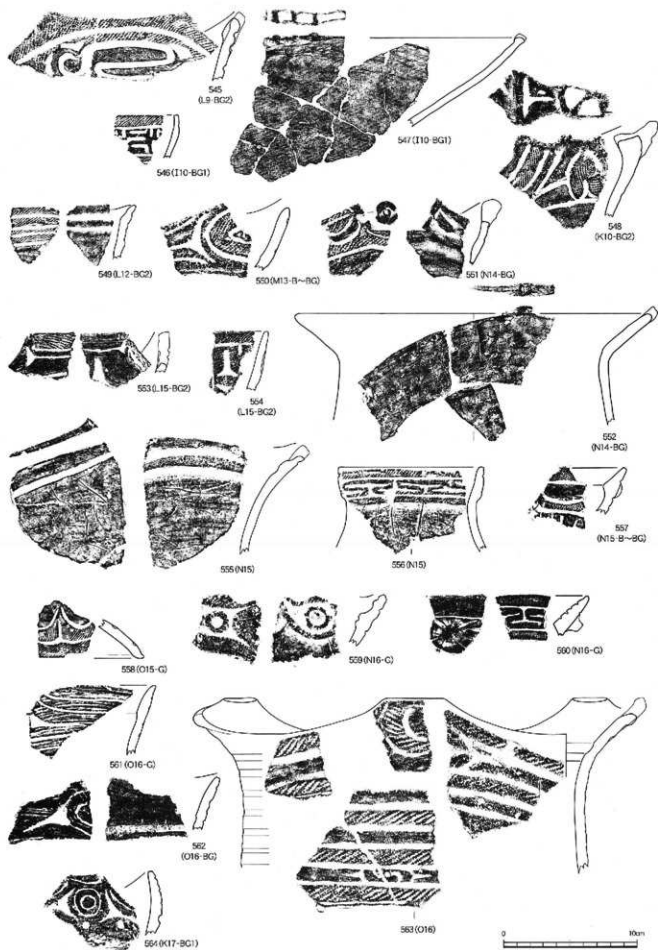
第76图 包含層出土土器 3 (1/3)

496-519 : 3区



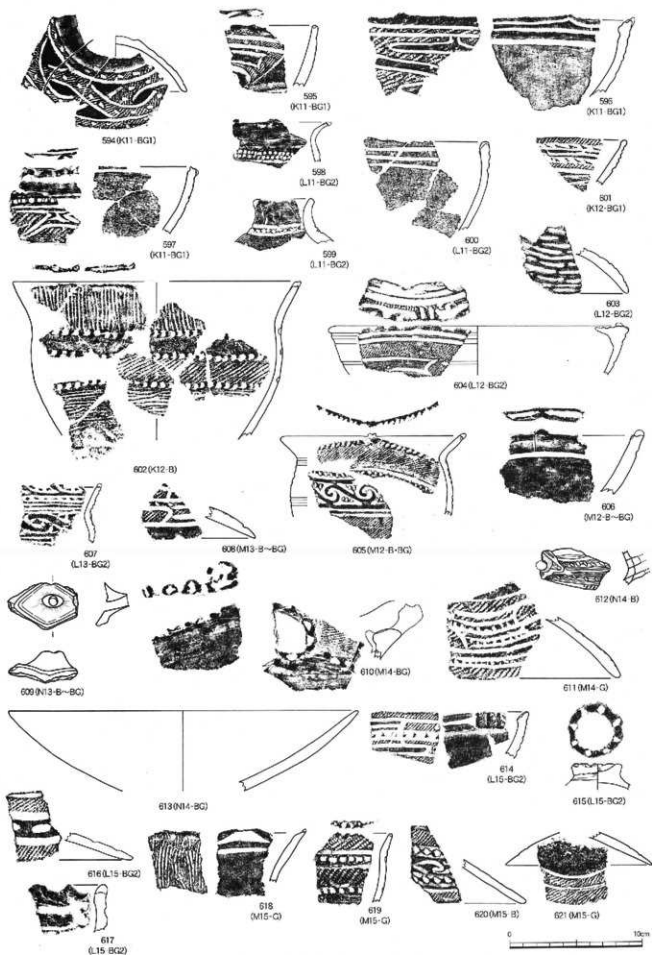
第77圖 包含層出土土器4 (1/3)

520~544 : 3区



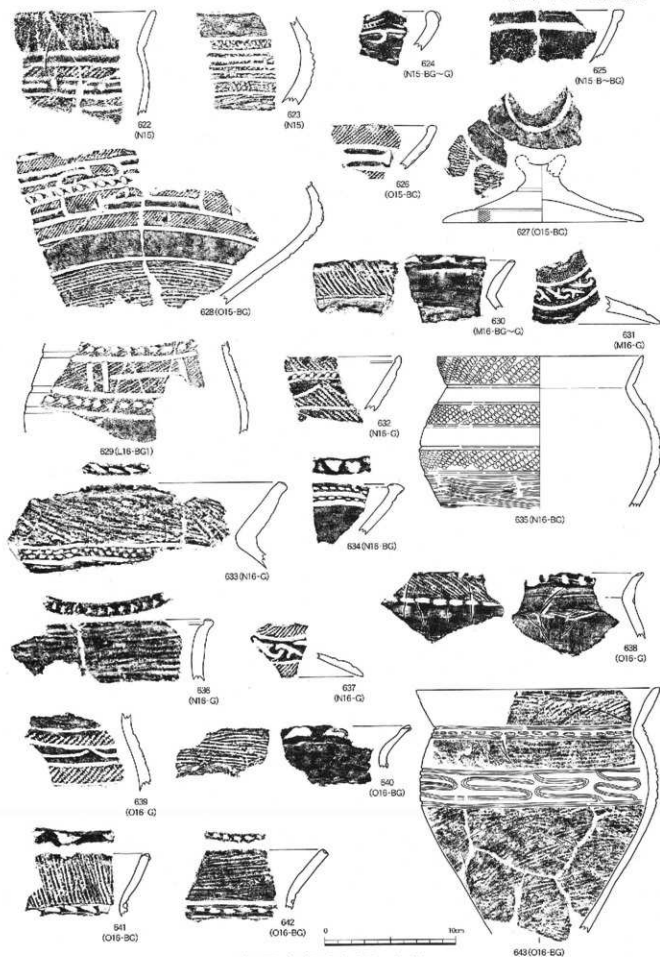
第78図 包含層出土土器 5 (1/3)

545-564 : 3区



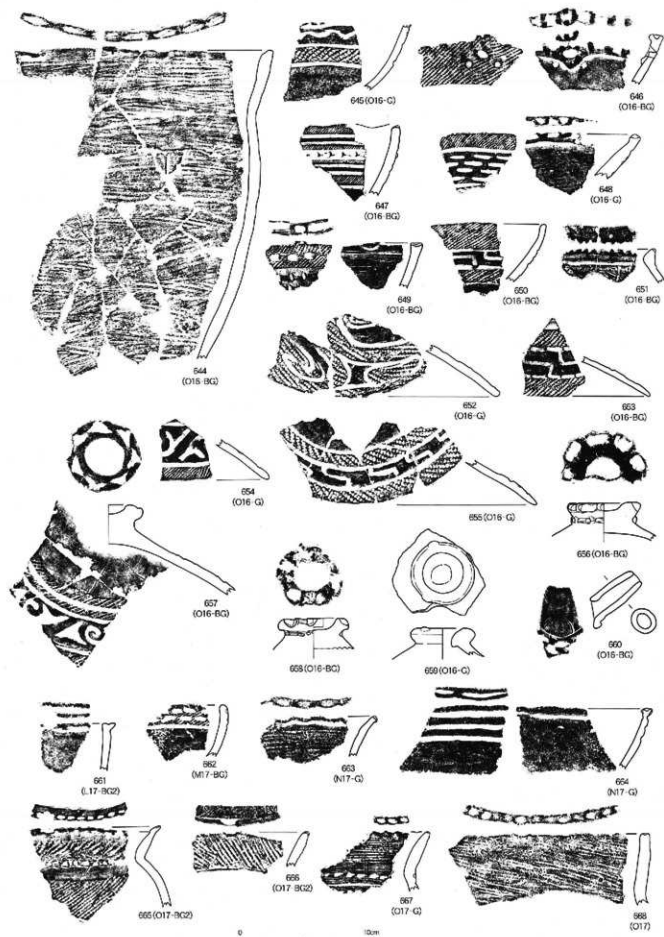
第80圖 包含層出土土器 7 (1/3)

594~621 : 3区



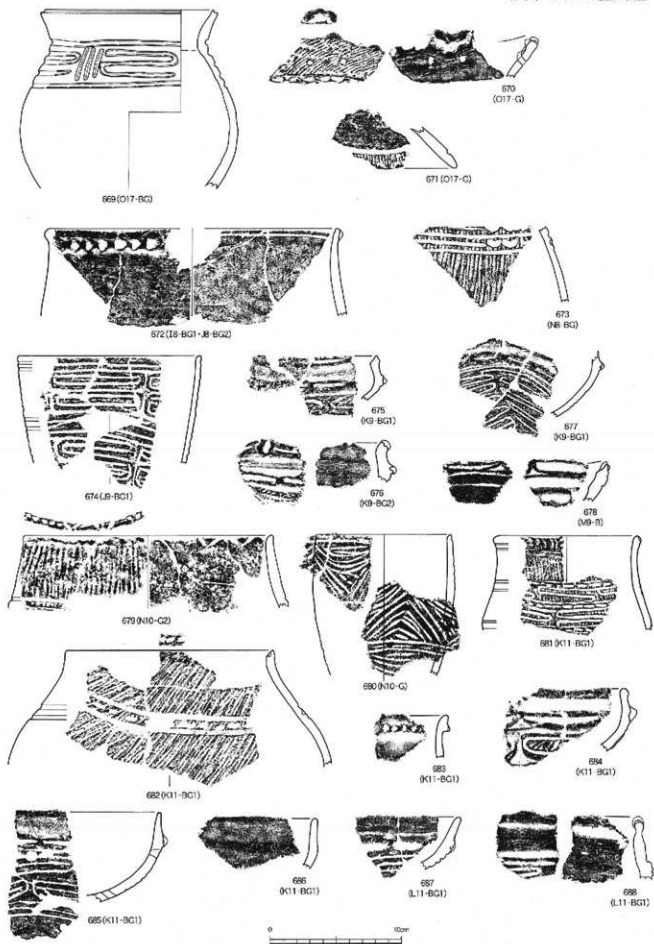
第81図 包含層出土土器 8 (1/3)

622-643: 3区



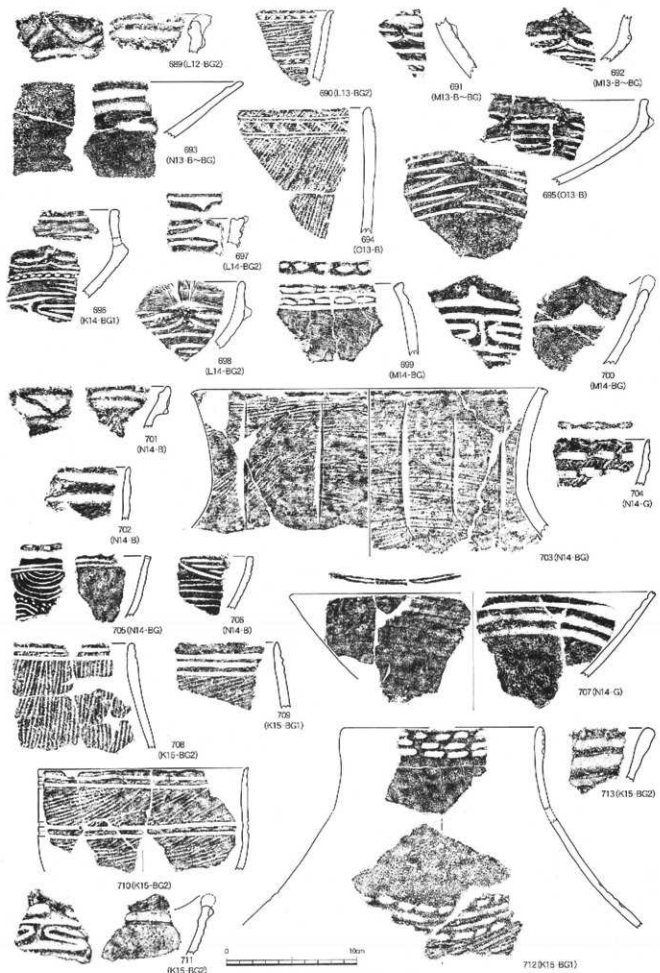
第82图 包含层出土土器 9 (1/3)

644~688 : 3区



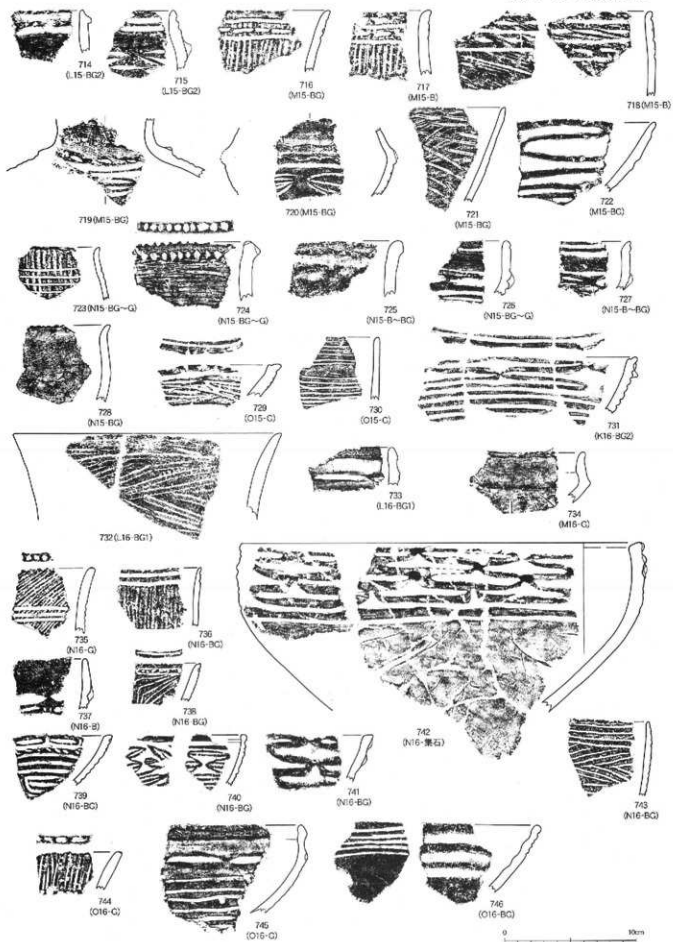
第83図 包含層出土土器10 (1/3)

669-688 : 3区



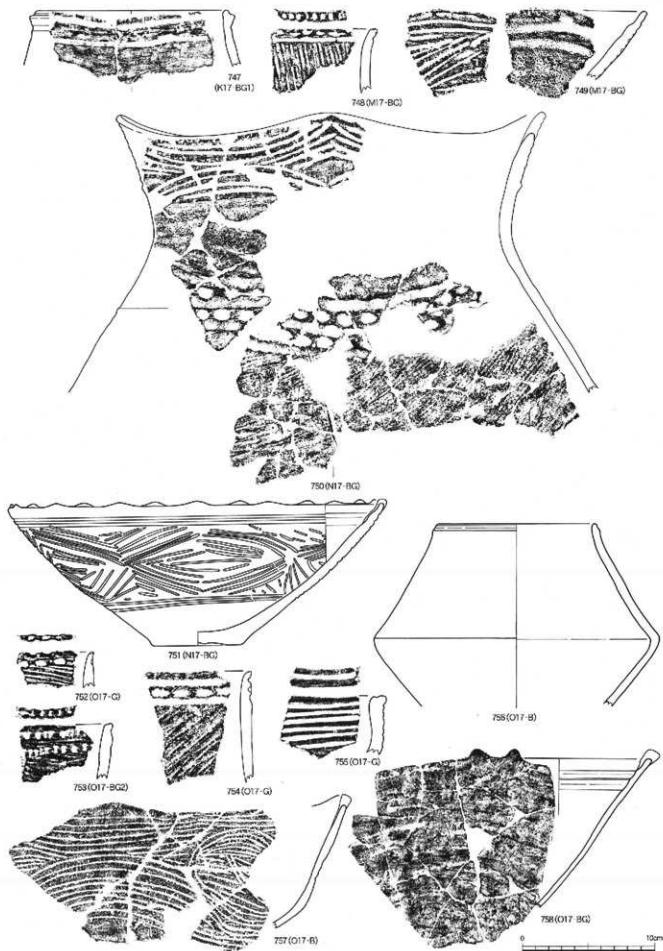
第84図 包含層出土土器11 (1/3)

689~713 : 3区



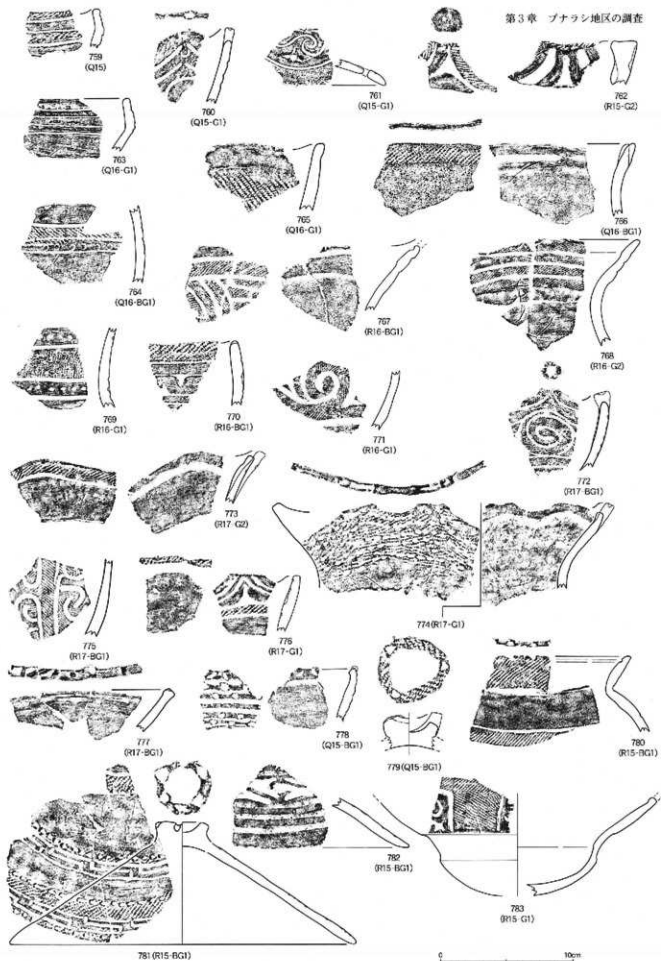
第85図 包含層出土土器12 (1/3)

714~746: 3区



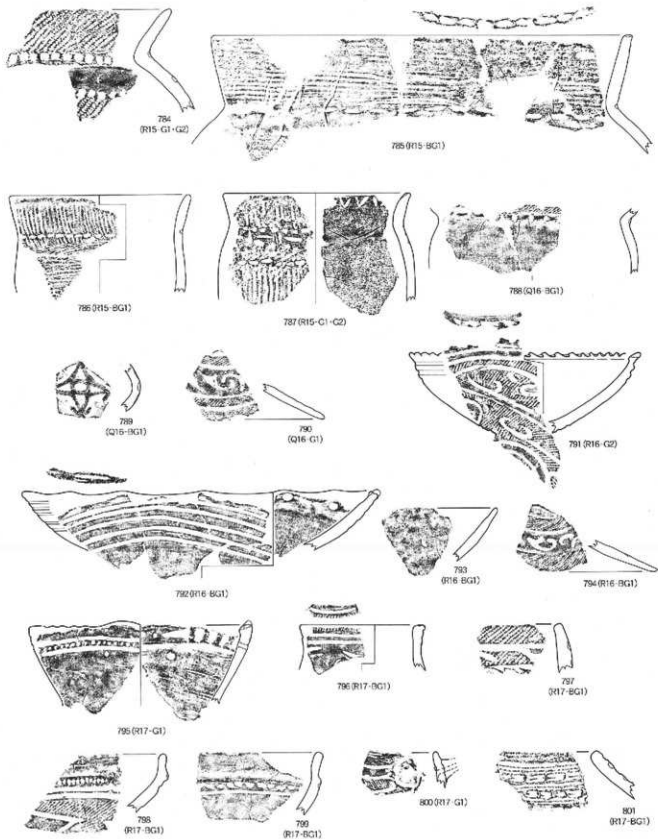
第86图 包含層出土土器13 (1/3)

747~758 : 3区



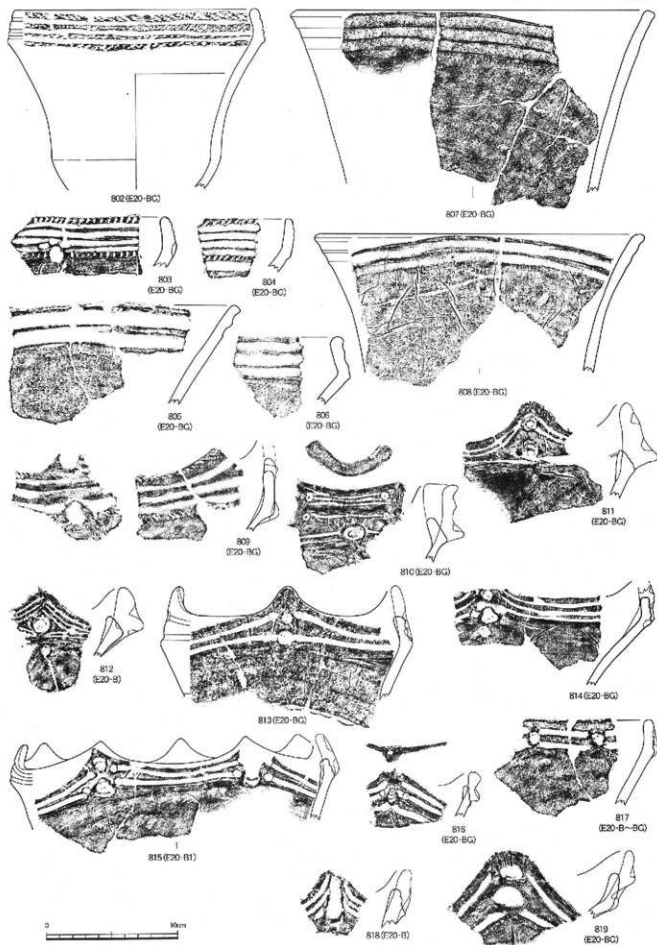
第87図 包含層出土土器14 (1/3)

759-783 : 4区



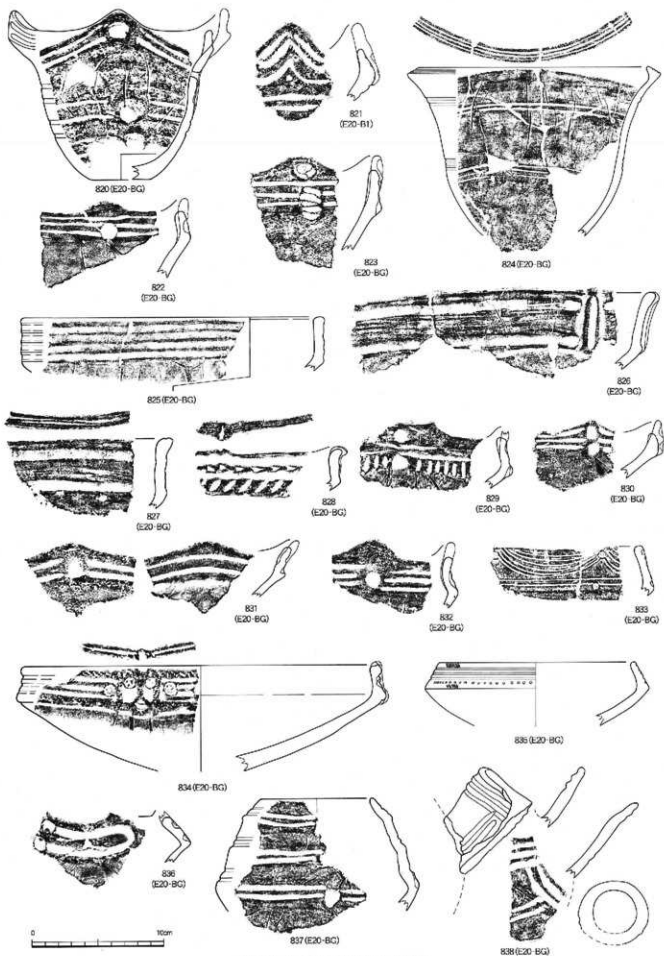
第88图 包含層出土土器15 (1/3)

784-801 : 4区



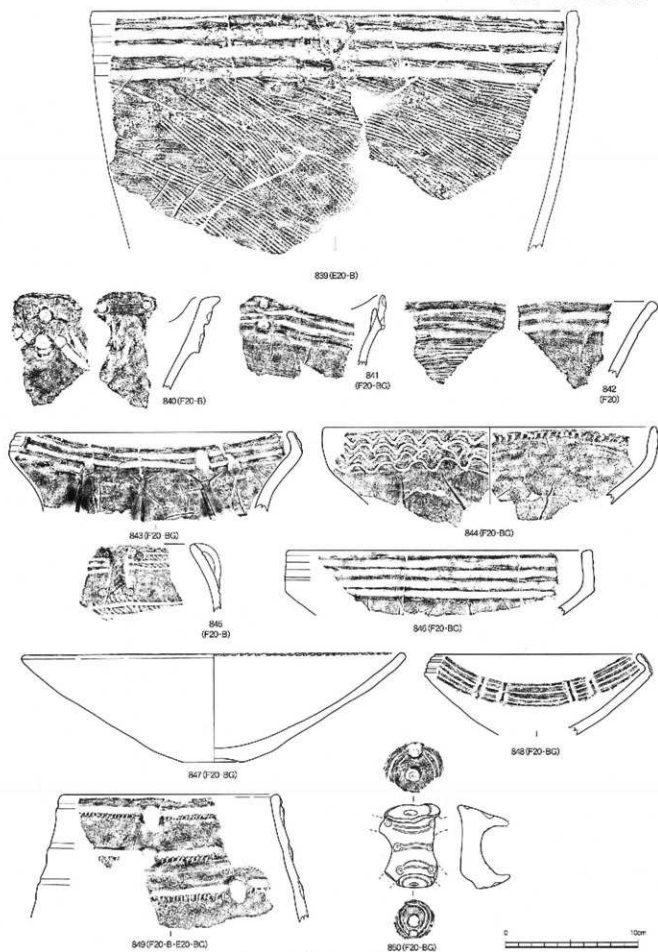
第89図 包含層出土土器16 (1/3)

802~819: 5区

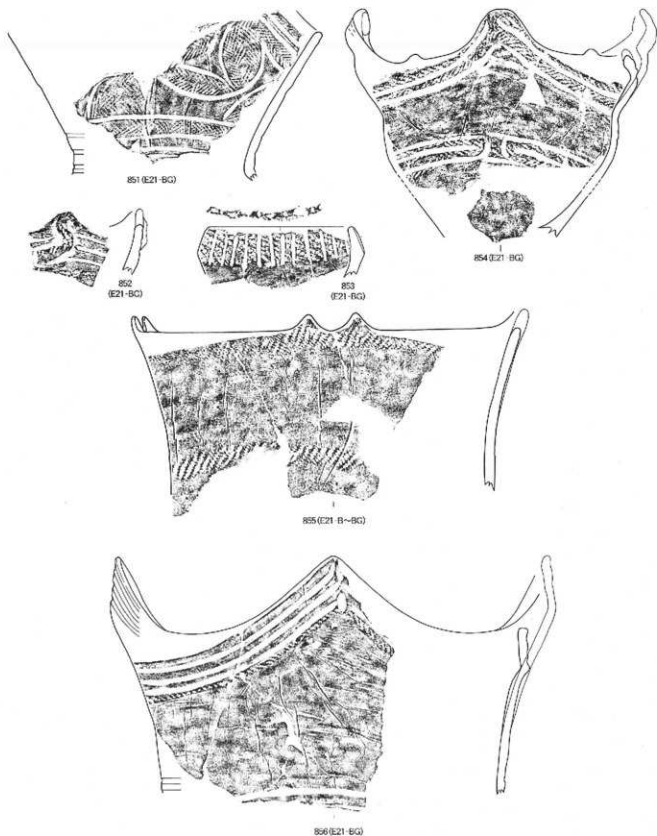


第90图 包含層出土土器17 (1/3)

820~838 : 5頁

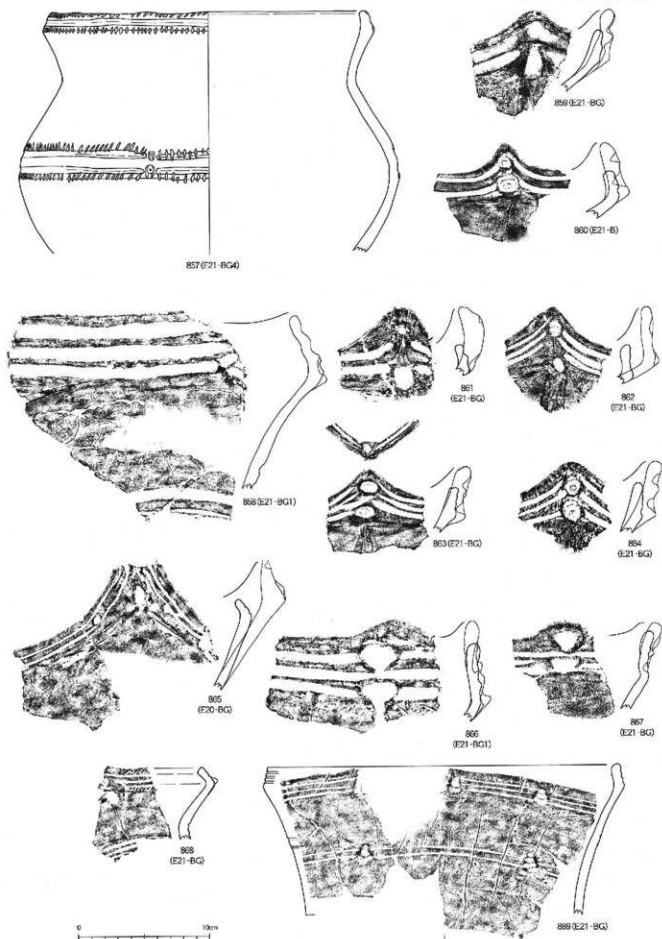


第91図 包含層出土土器18 (1/3)



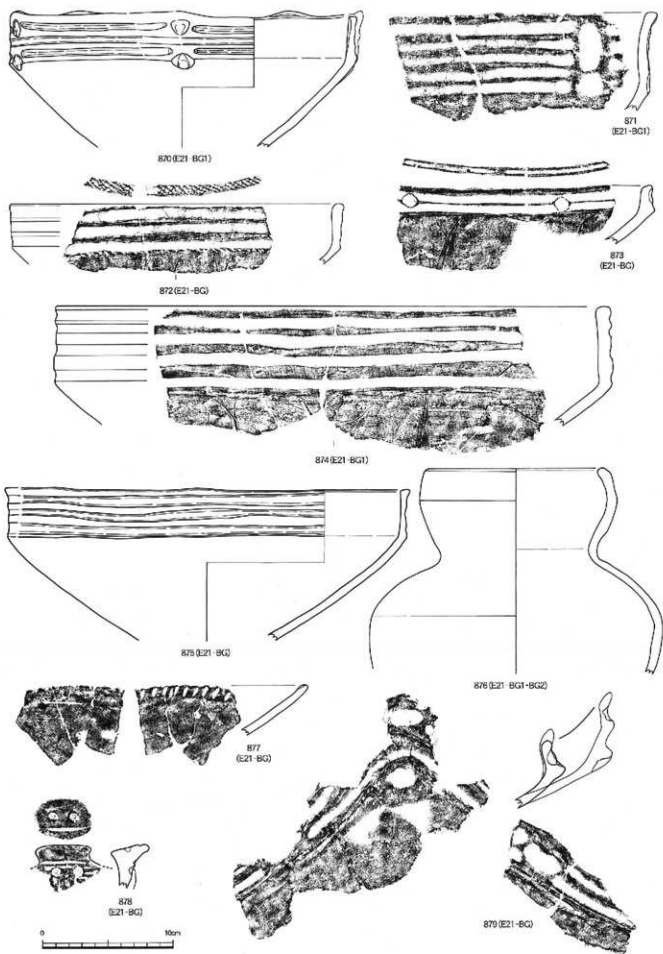
第92図 包含層出土土器19 (1/3)

851~856 : 5区



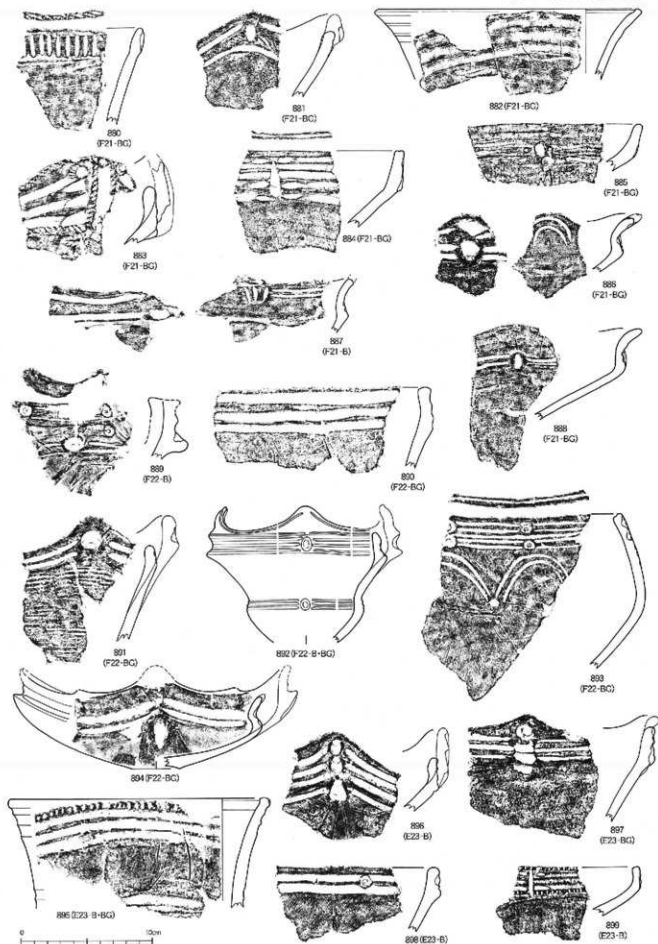
第93図 包含層出土土器20 (1/3)

857~869 : 5区



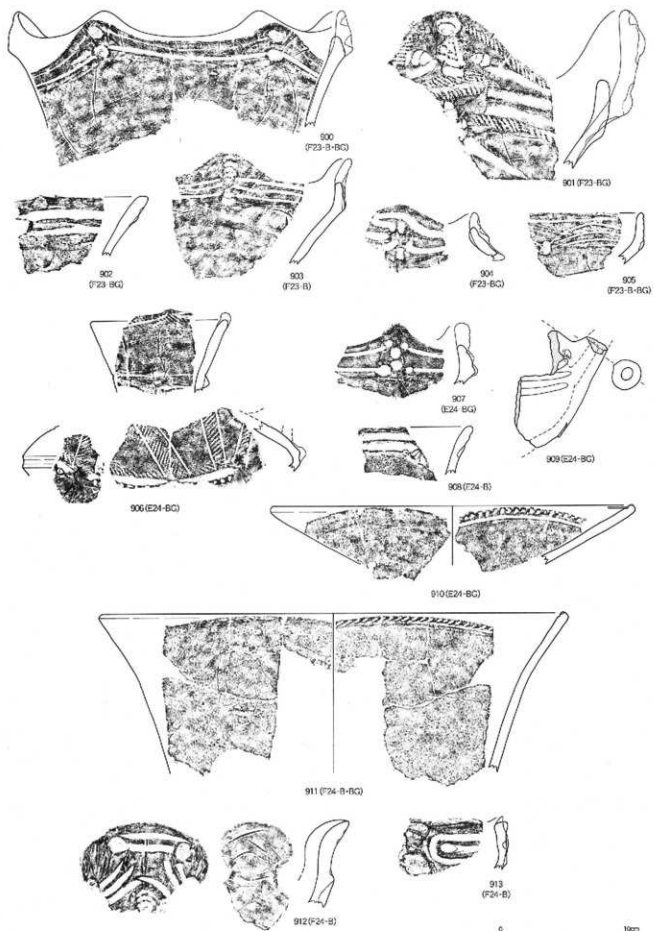
第94图 包含層出土土器21 (1/3)

870~879 : 5 E



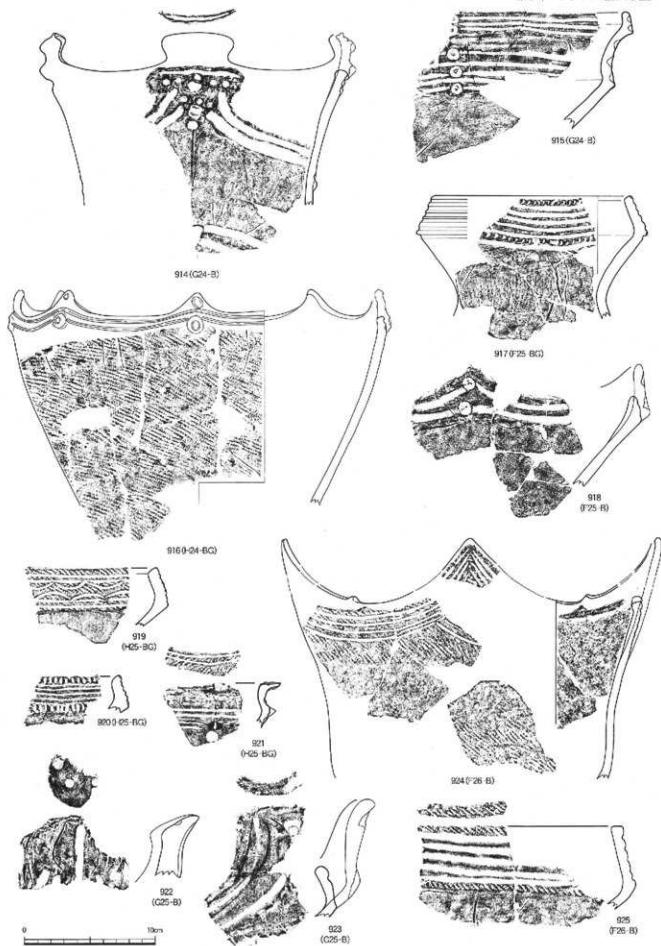
第95図 包含層出土土器22 (1/3)

880~889 : 5区



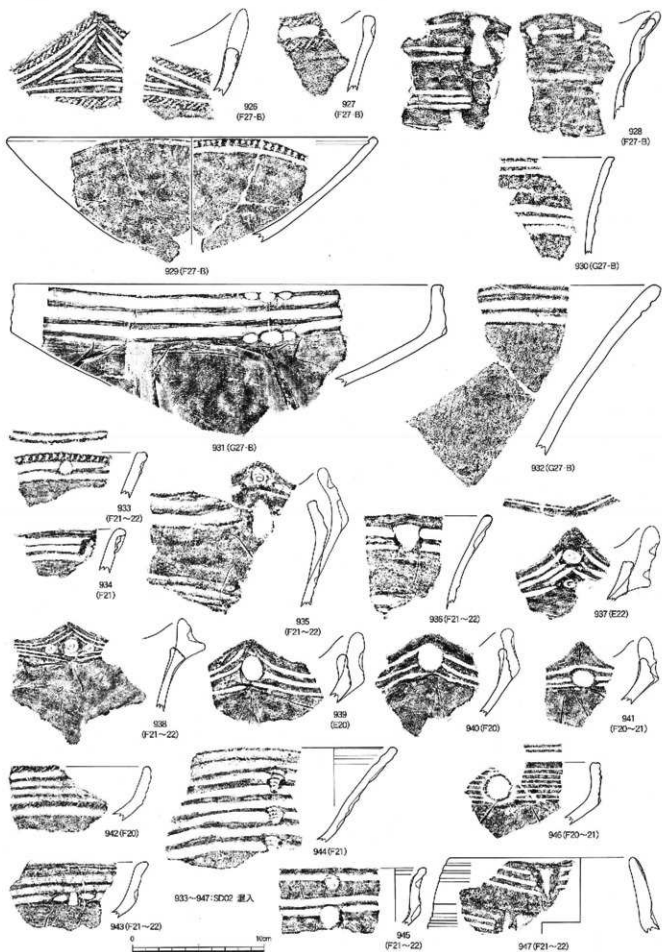
第96圖 包含層出土土器23 (1/3)

900-913 : 5区

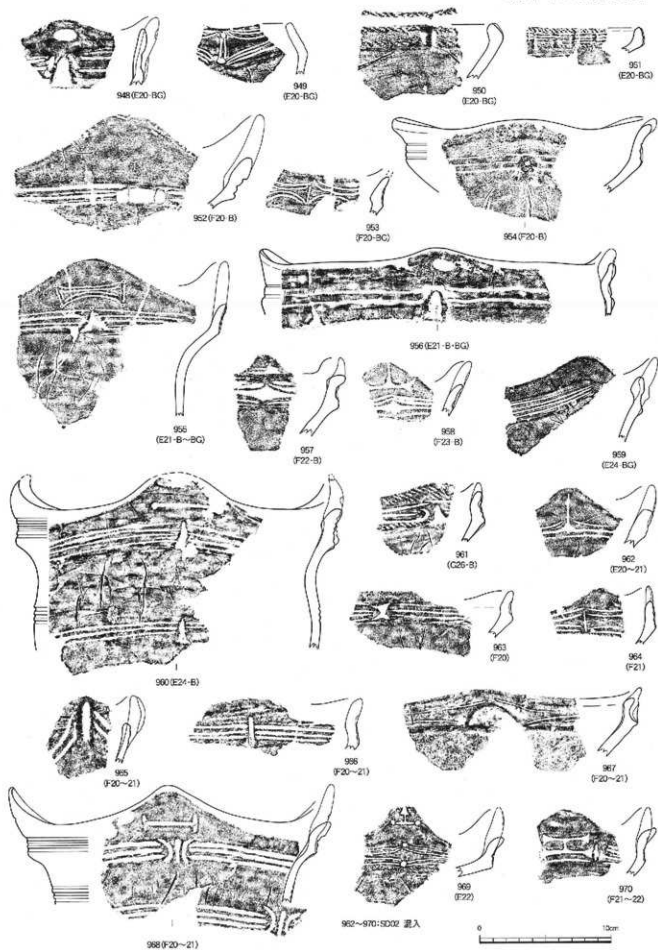


第97図 包含層出土土器24 (1/3)

914~925 : 5区

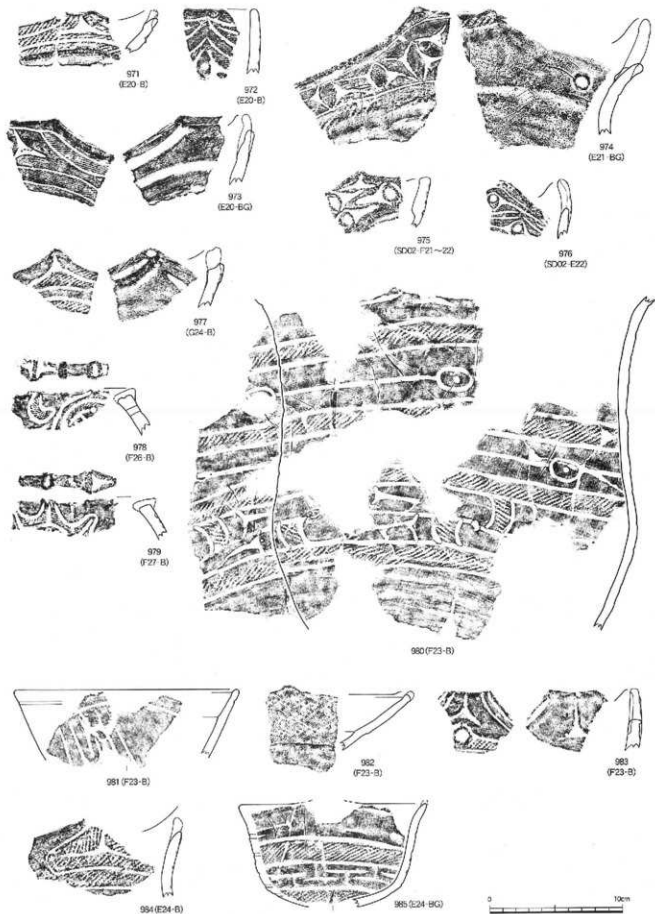


第98图 包含層出土土器25 (1/3)

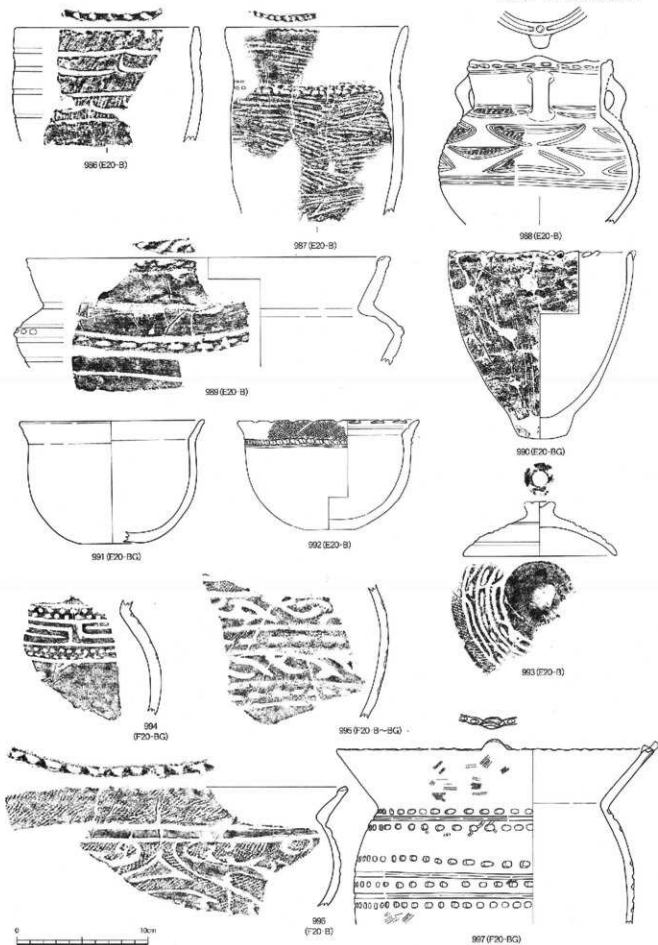


第99図 包含層出土土器26 (1/3)

948~970 : 5区

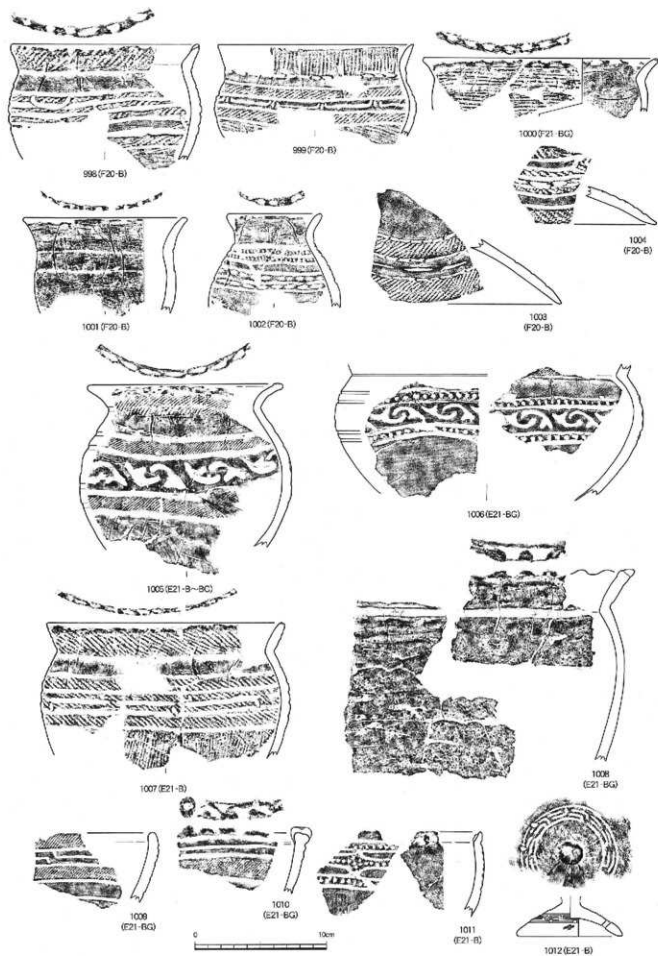


第100图 包含層出土土器27 (1/3)



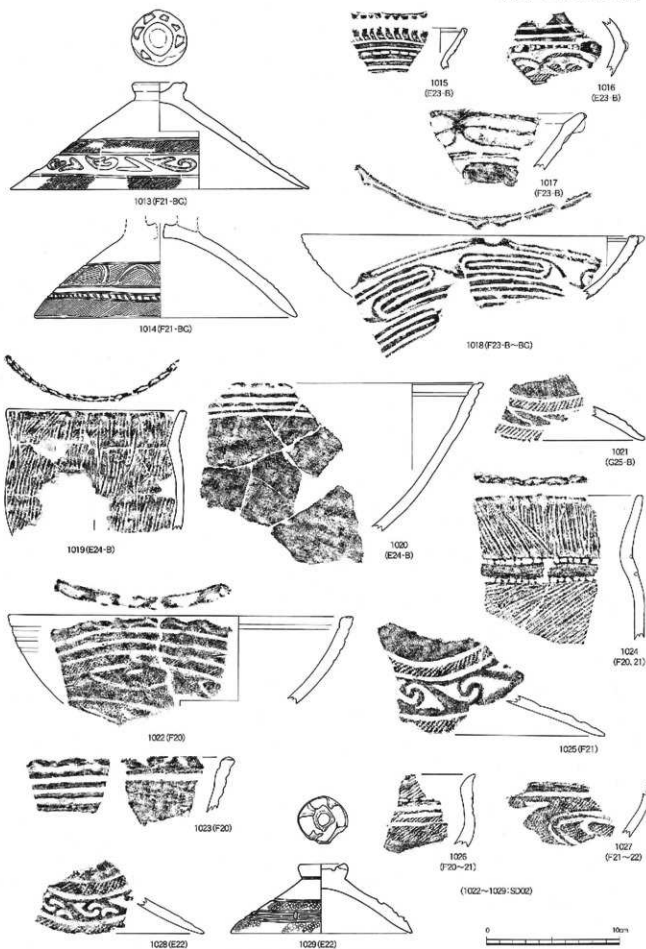
第101図 包含層出土土器28 (1/3)

986~987: 5区



第102图 包含层出土土器29 (1/3)

996~1012 : 5区



第103図 包含層出土土器30 (1/3)

1013~1029: 5区



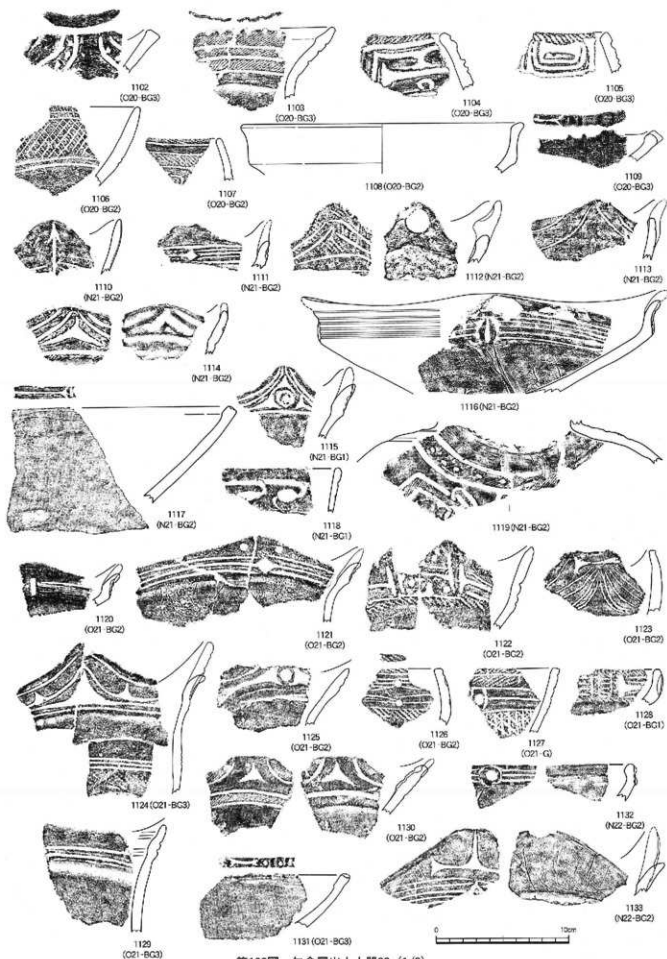
第104图 包含层出土土器31 (1/3)

1030~1066: 6区



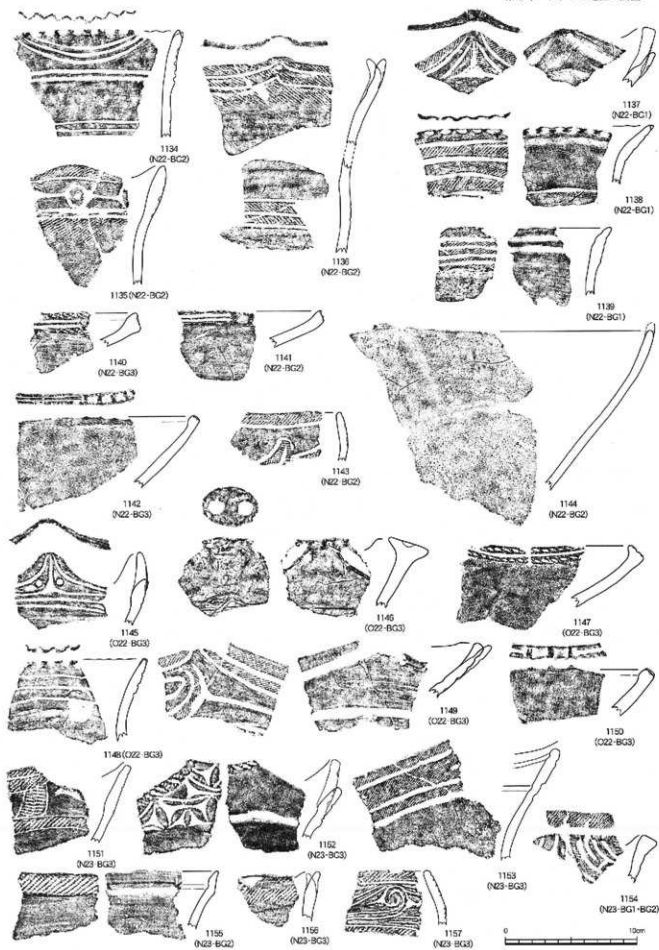
第105図 包含層出土土器32 (1/3)

1067~1101 : 6区



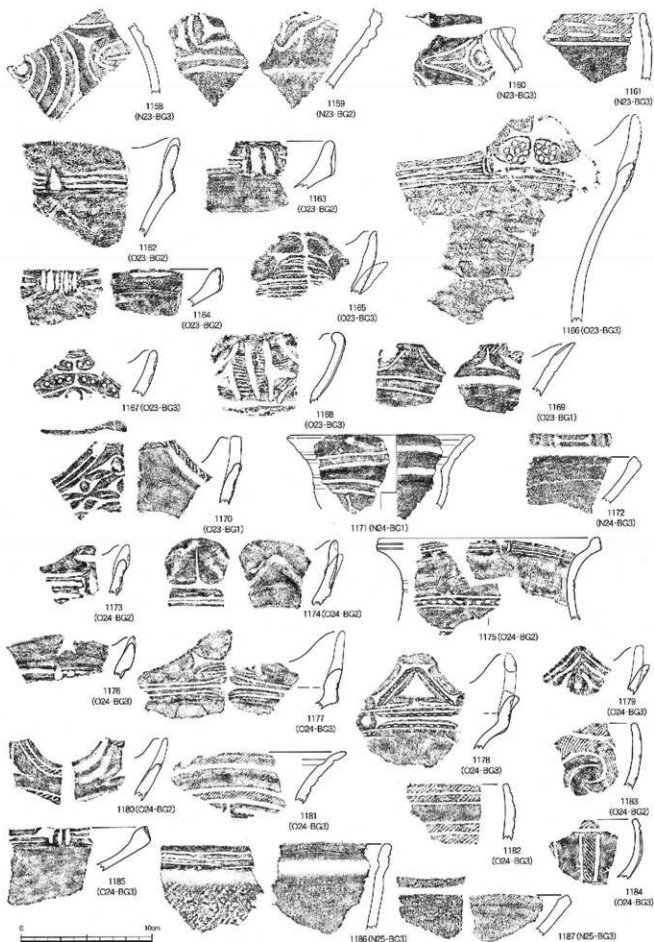
第106图 包含层出土土器33 (1/3)

1102~1133: 6区



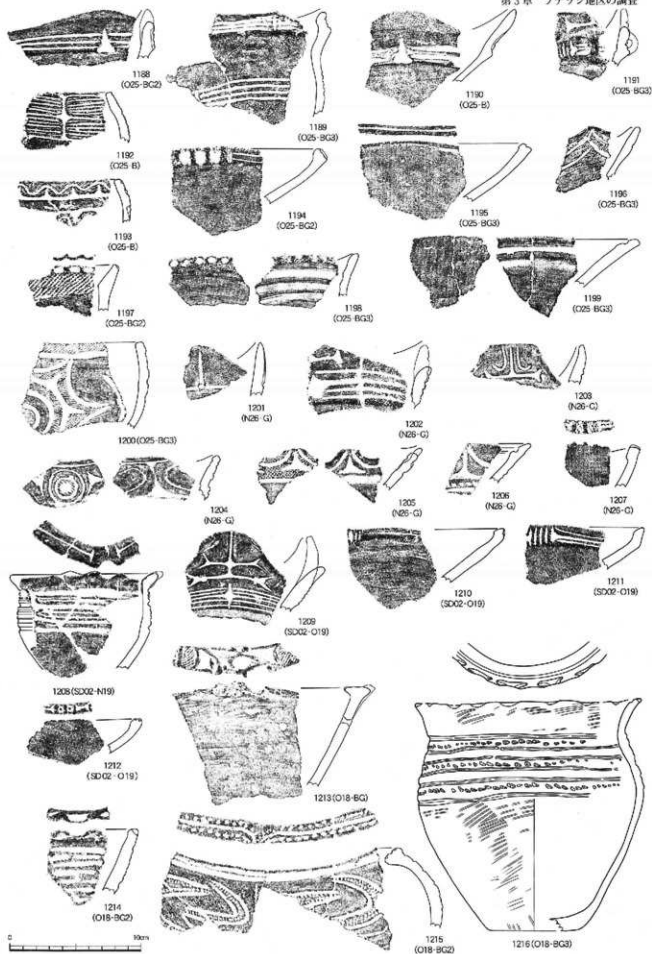
第107図 包含層出土土器34 (1/3)

1134~1157 : 6区



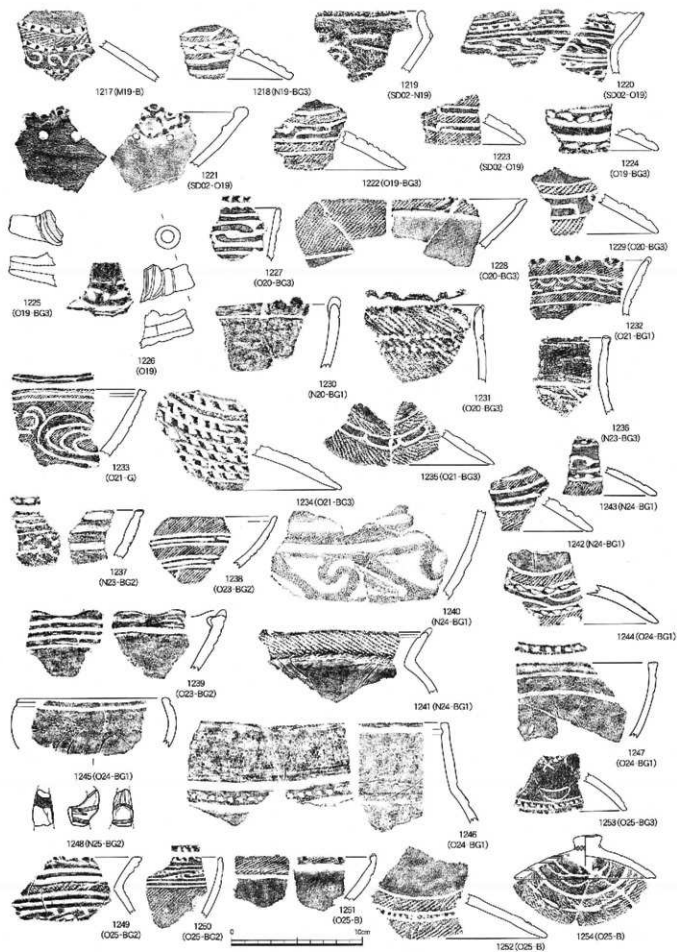
第108图 包含层出土土器35 (1/3)

1158-1187: 6区



第109図 包含層出土土器36 (1/3)

1188~1216 : 6区



第110图 包含層出土土器37 (1/3)

1217~1254 : 6区



第111図 包含層出土土器38 (1/3)

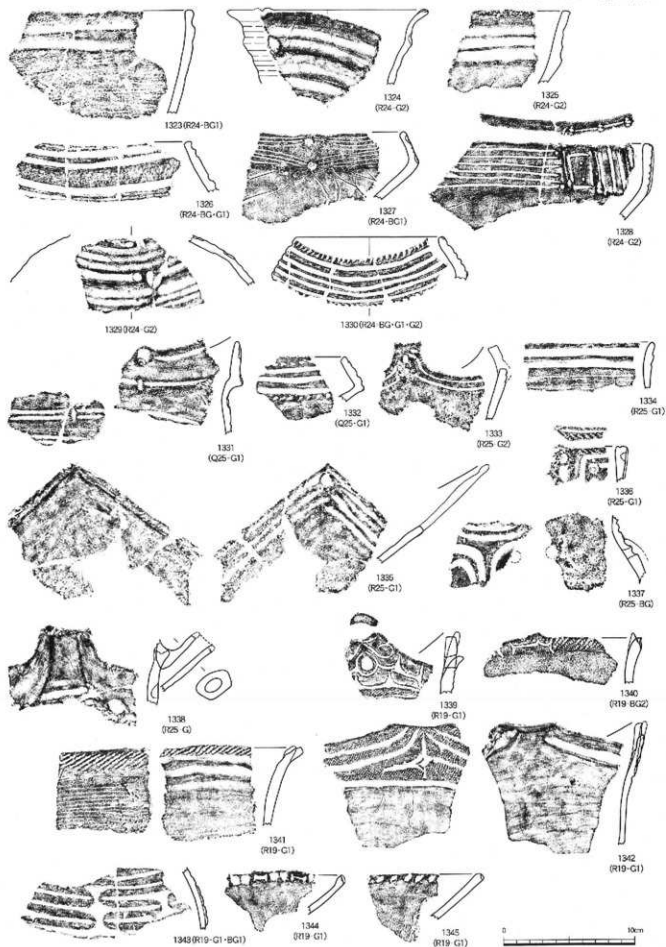
1256~1290 : 5 区

1290 (O24-BG2)



第112图 包含厝出土土器39 (1/3)

1291~1322 : 7 区



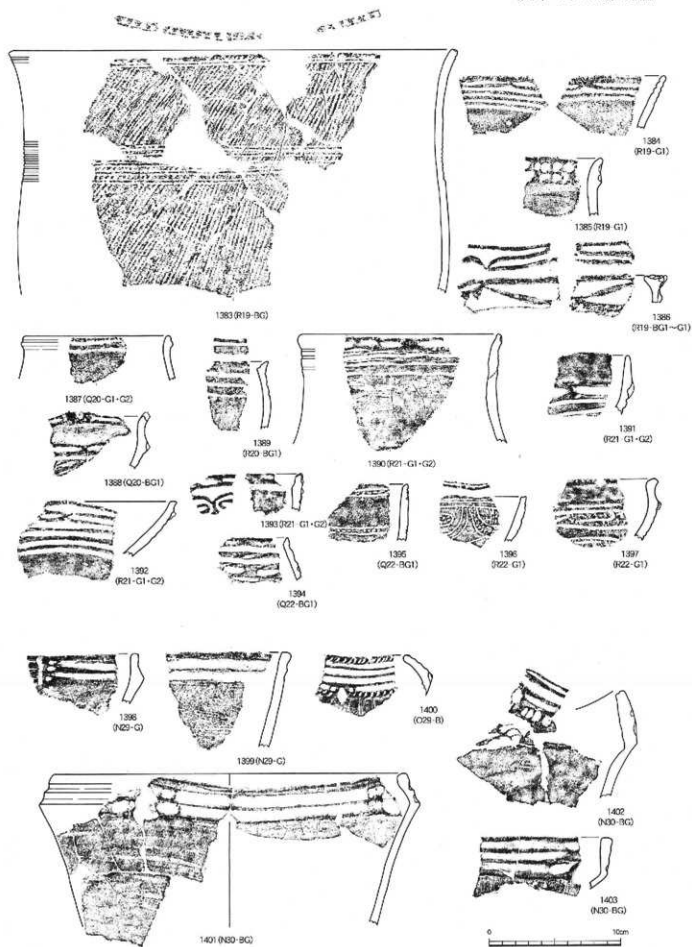
第113図 包含層出土土器40 (1/3)

1323~1345: 7区



第114圖 包舍層出土土器41 (1/3)

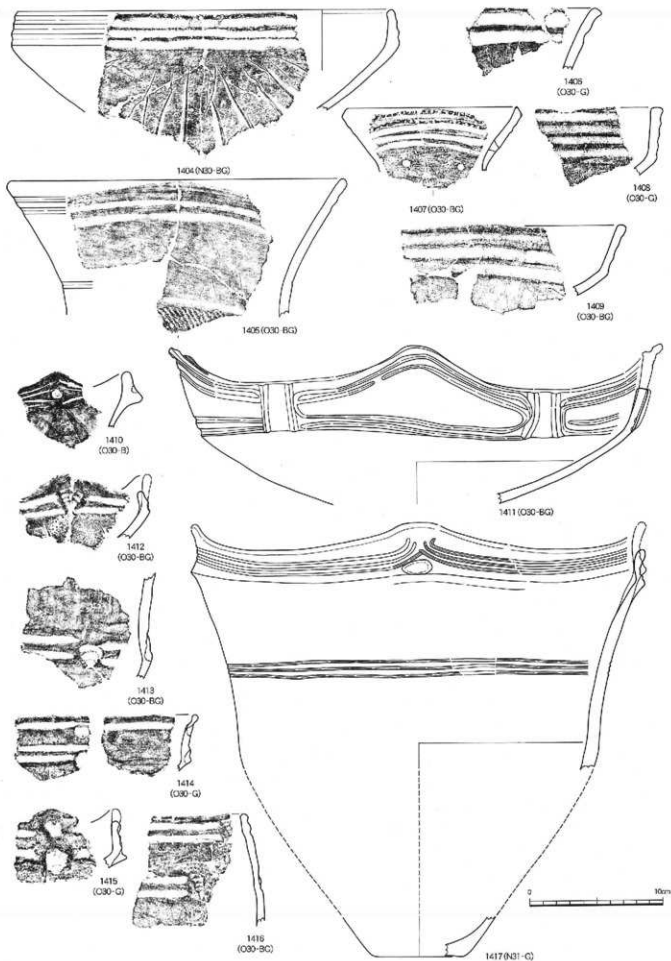
1346~1382 : 7区



第115図 包含層出土土器42 (1/3)

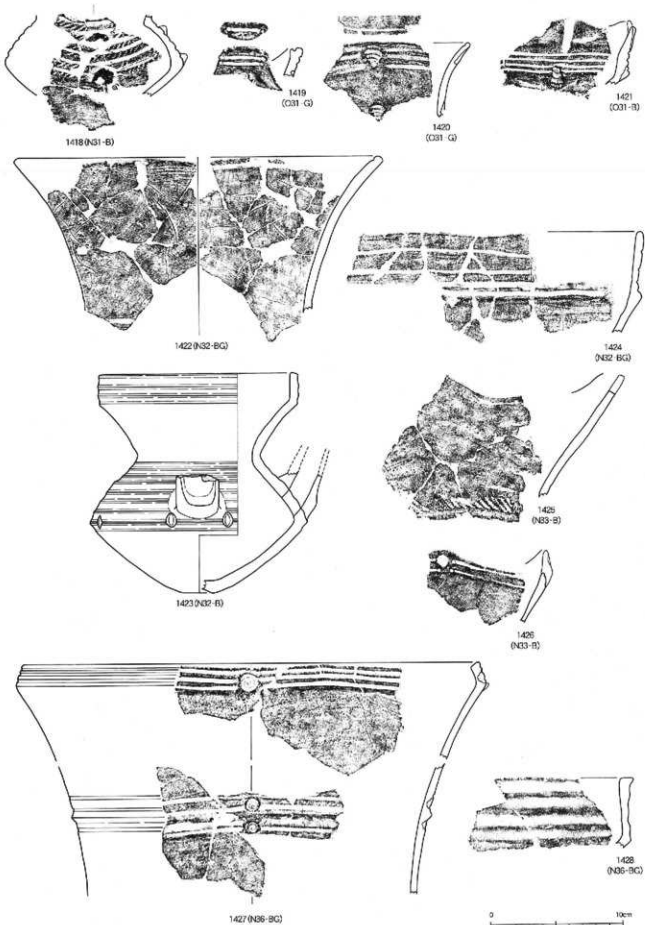
1383~1397: 7区

1398~1403: 8区



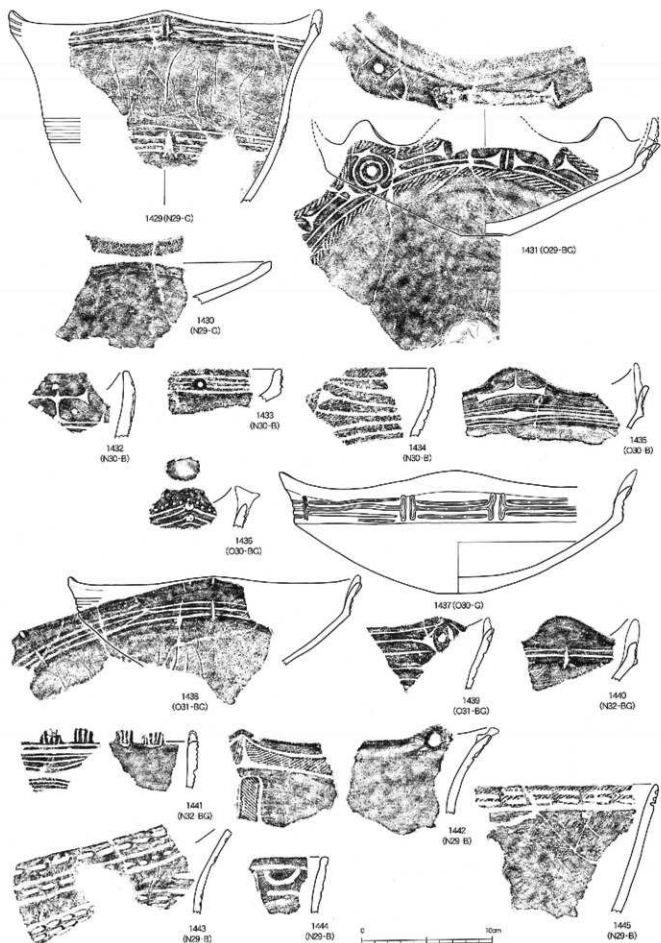
第116图 包含層出土土器43 (1/3)

1404—1417 : 8区



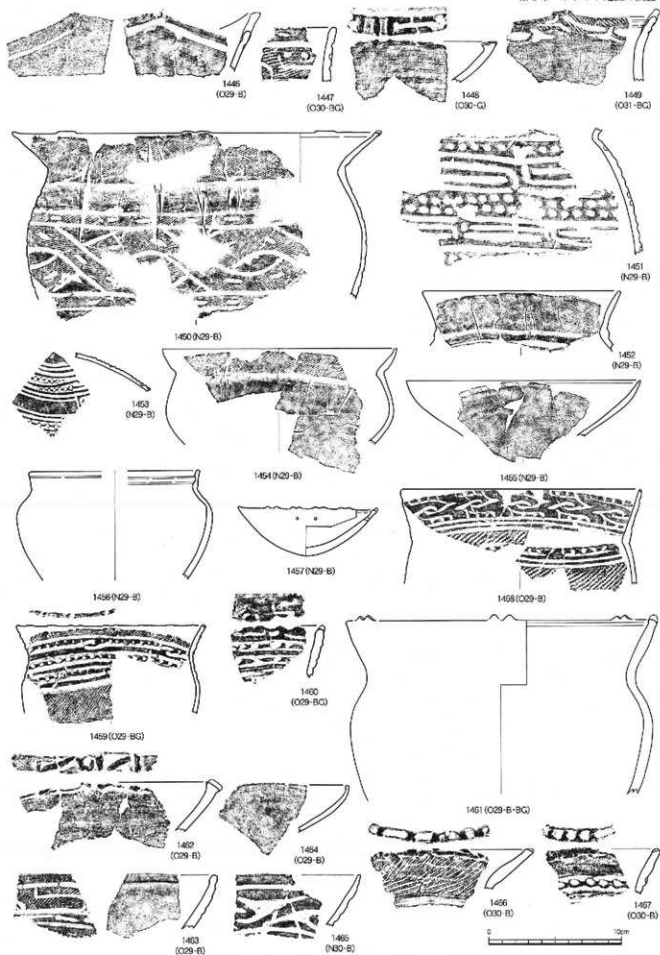
第117図 包含層出土土器44 (1/3)

1418~1428 : 8区



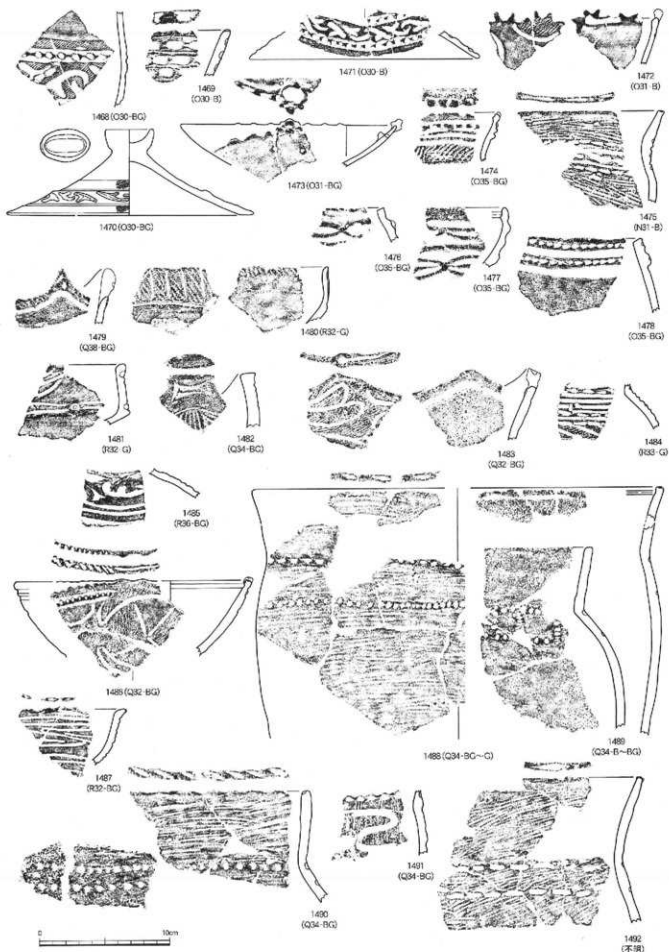
第118团 包含層出土土器45 (1/3)

1429~1445 : 8区



第119図 包含層出土土器46 (1/3)

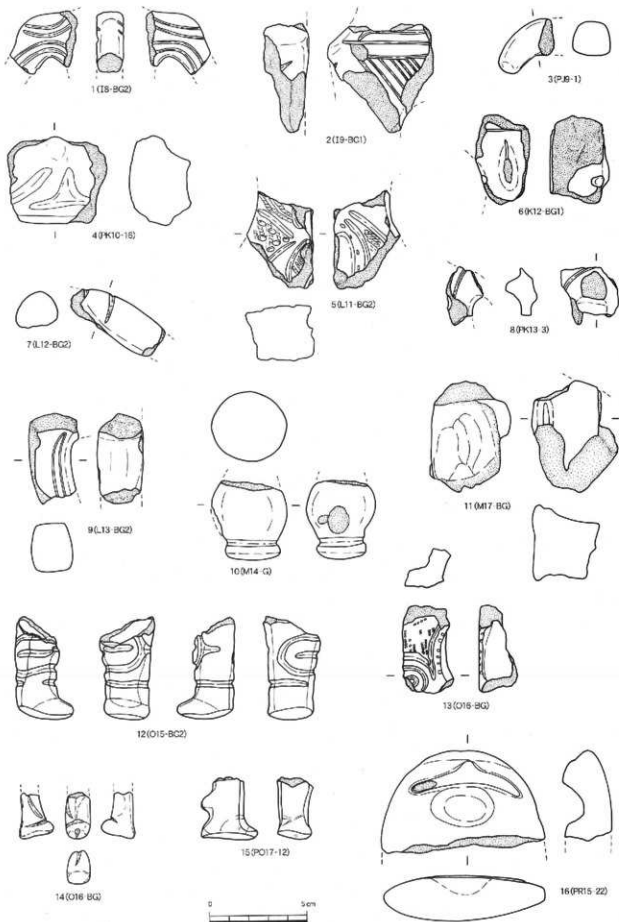
1446-1467 : 8区



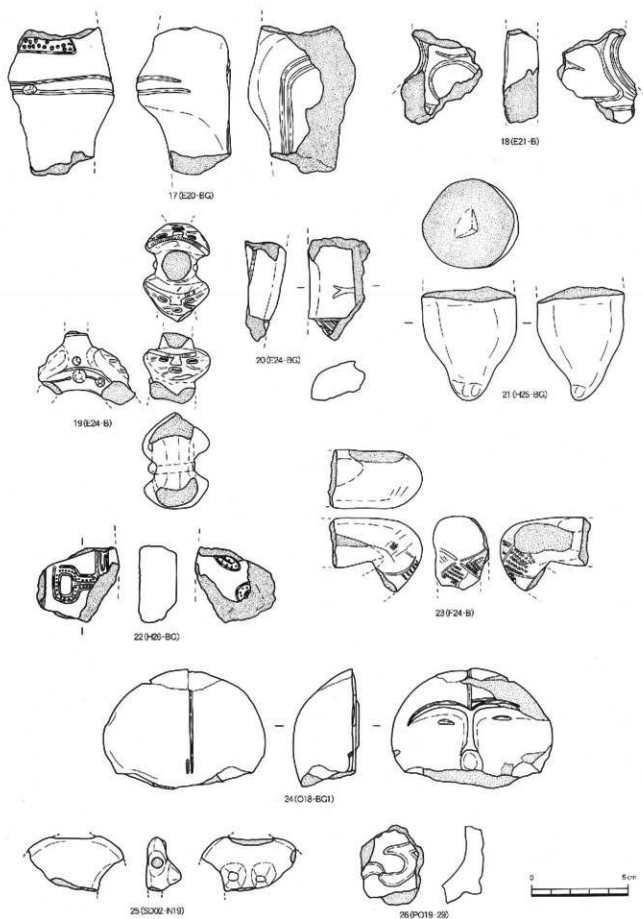
第120回 包含層出土土器47 (1/3)

1468-1475: B区

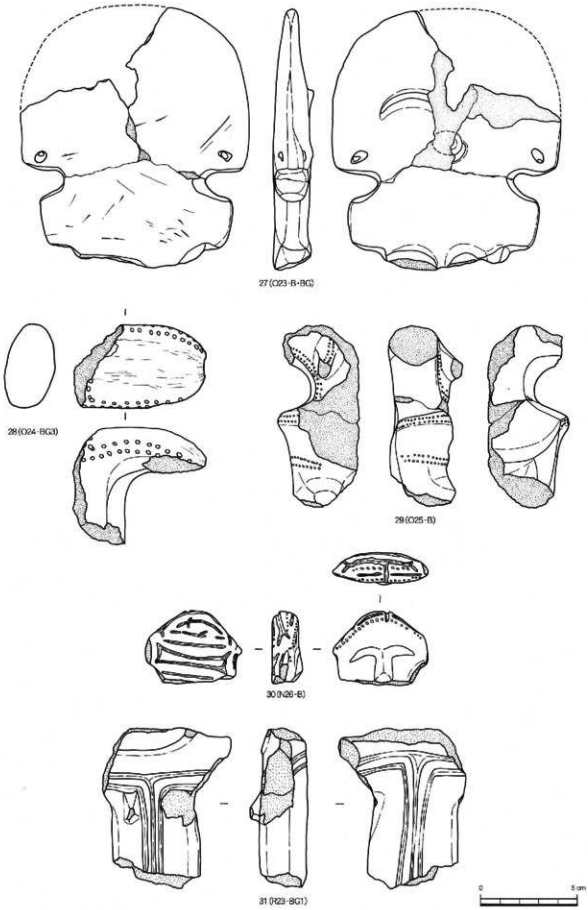
1476-1492: C区



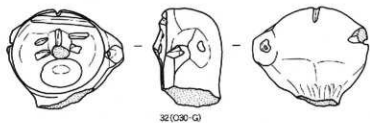
第121図 土製品 1 (1/2)



第122図 土製品 2 (1/2)



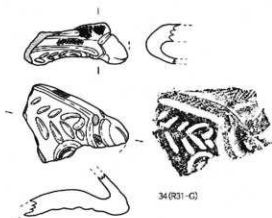
第123図 土製品 3 (1/2)



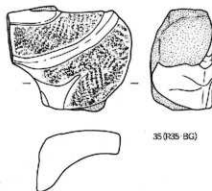
32 (C30-G)



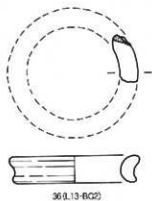
33 (N31-B)



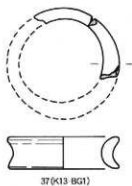
34 (R31-G)



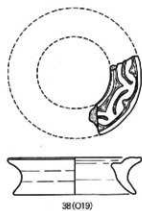
35 (E5-BG)



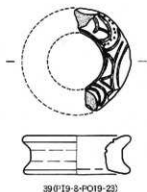
36 (L13-BG2)



37 (K13-BG1)



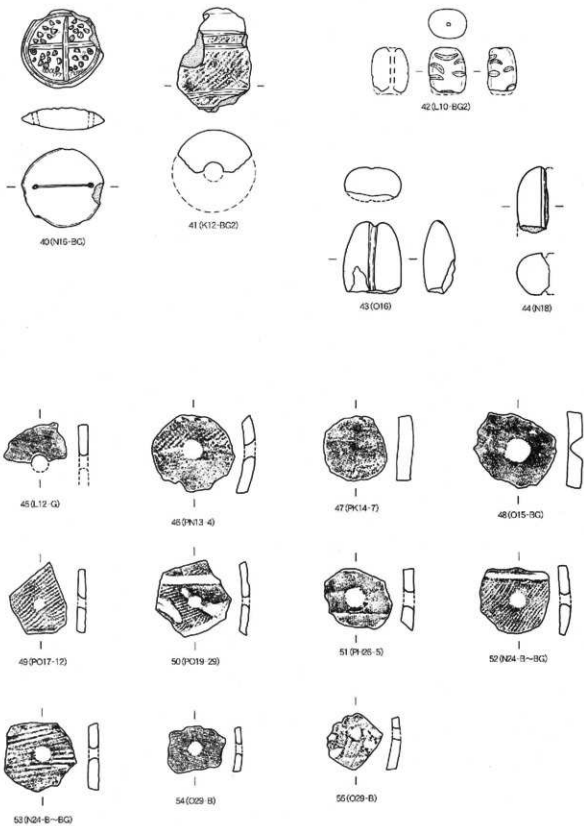
38 (O19)



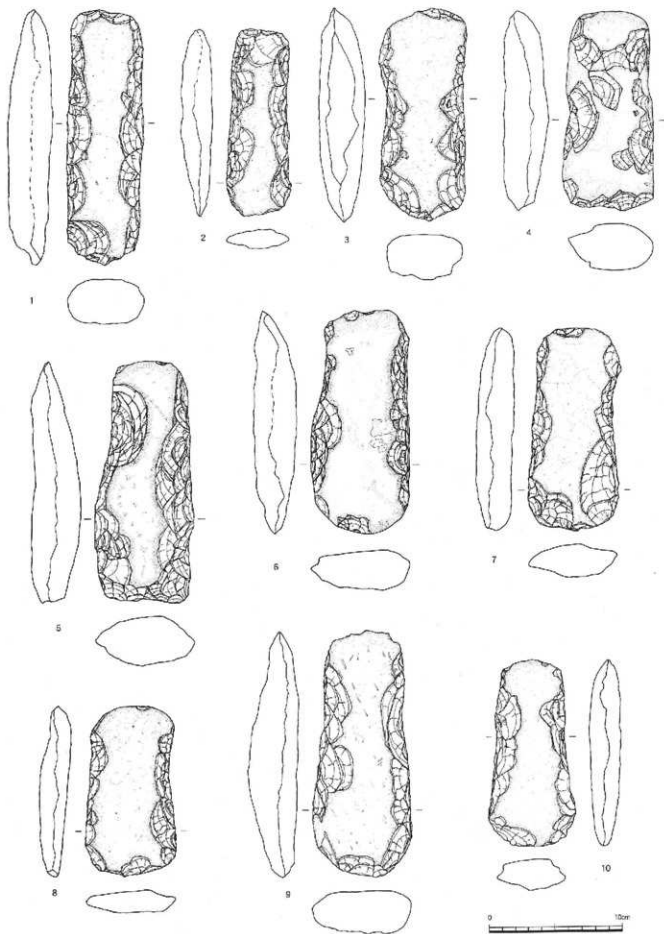
39 (O19-5-FO19-23)



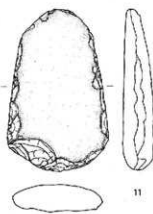
第124図 土製品 4 (1/2)



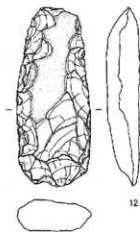
第125図 土製品5 (1/2)



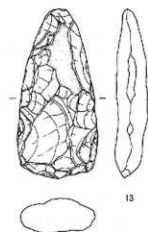
第126圖 石器 1 (1/3)



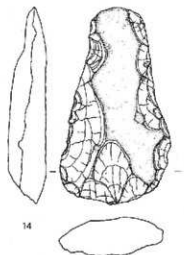
11



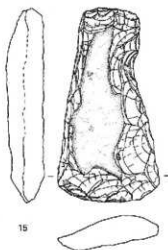
12



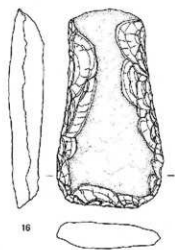
13



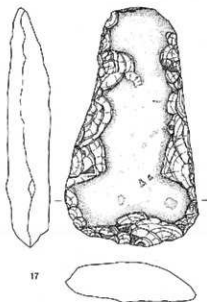
14



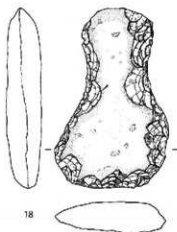
15



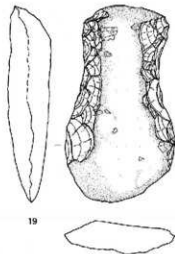
16



17



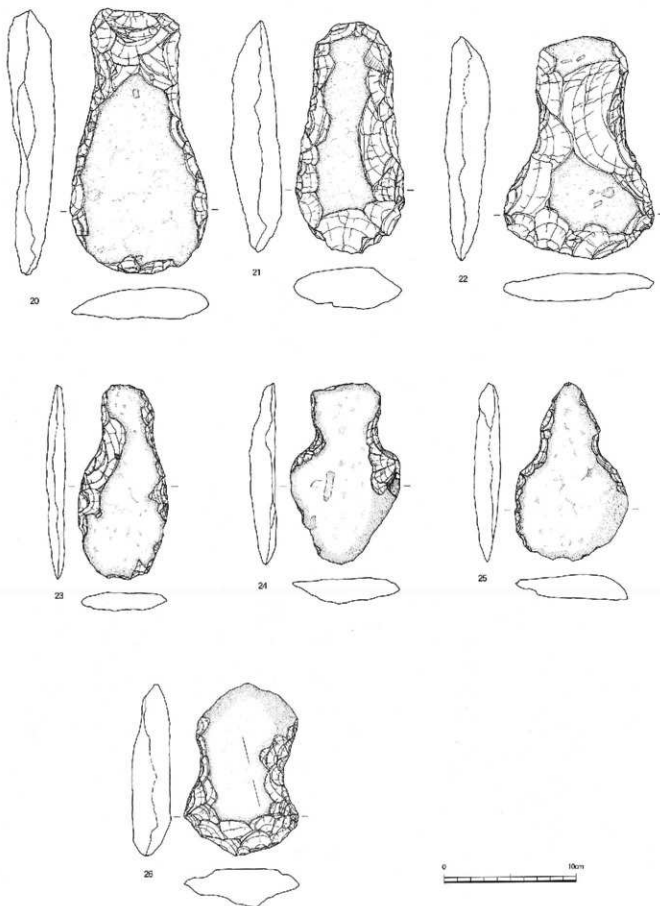
18



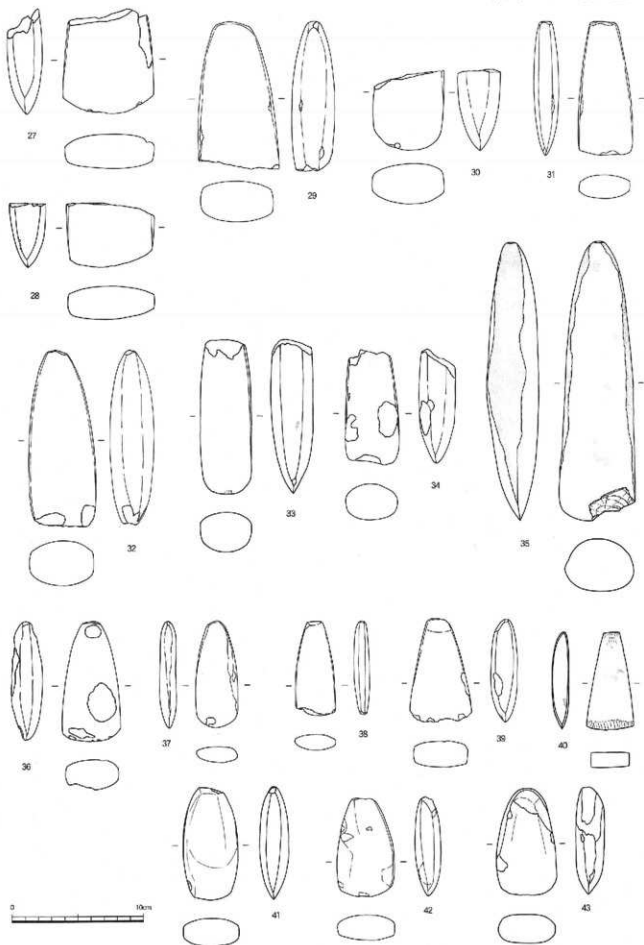
19



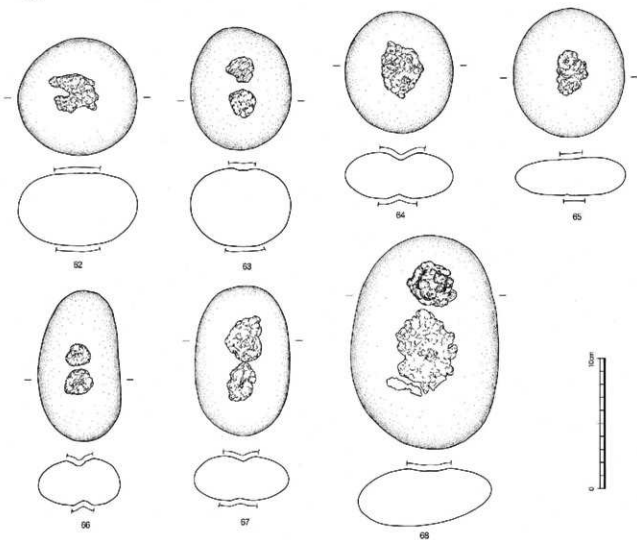
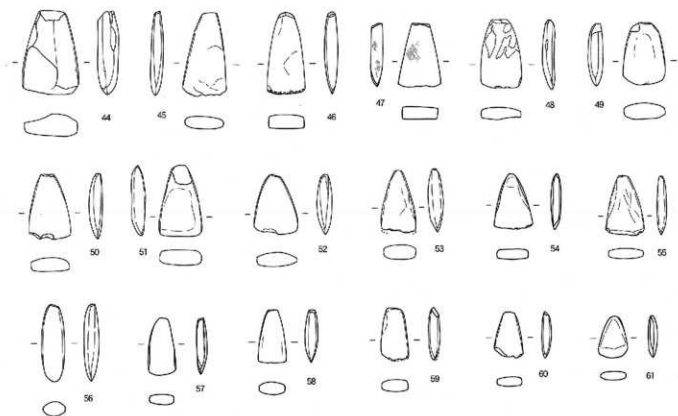
第127図 石器2 (1/3)



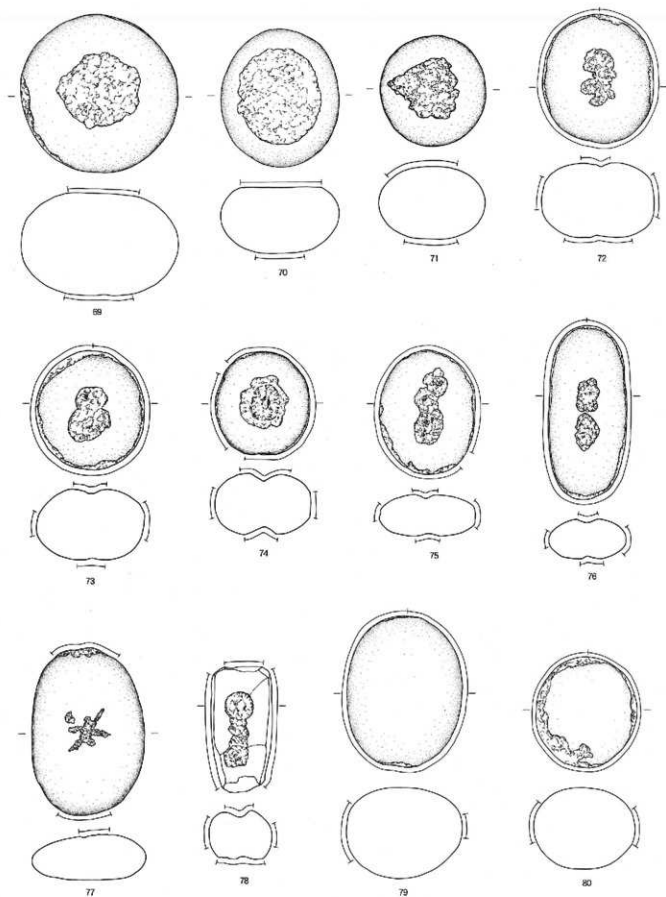
第128圖 石器 3 (1/3)



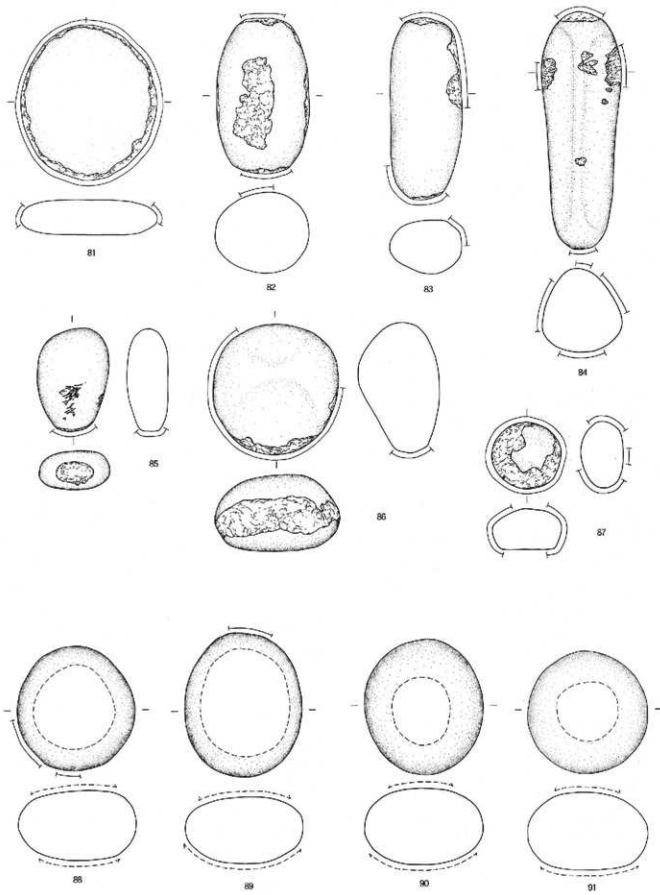
第129図 石器4 (1/3)



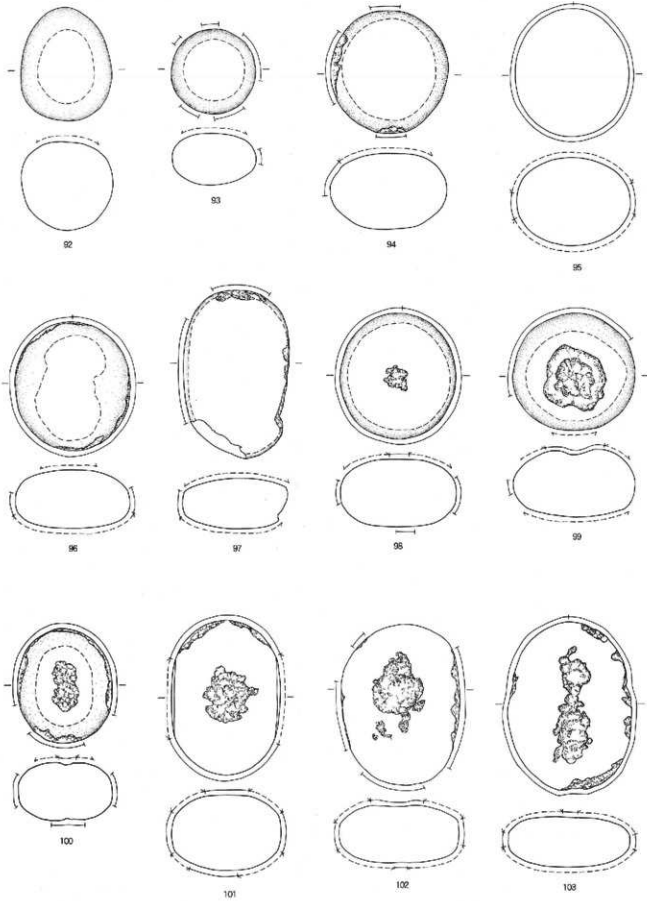
第130圖 石器5 (1/3)



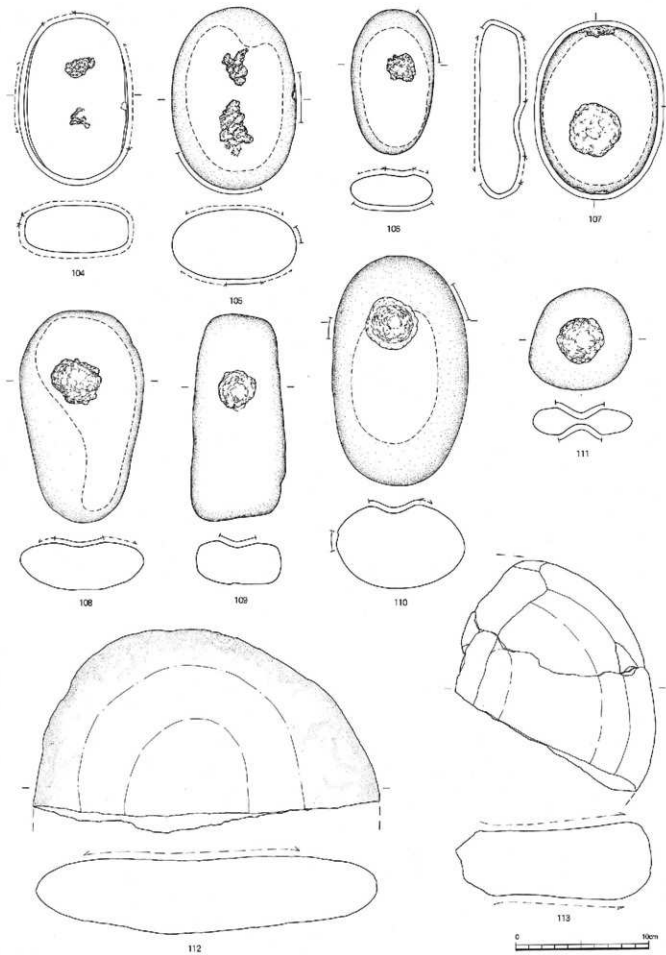
第131図 石器6 (1/3)



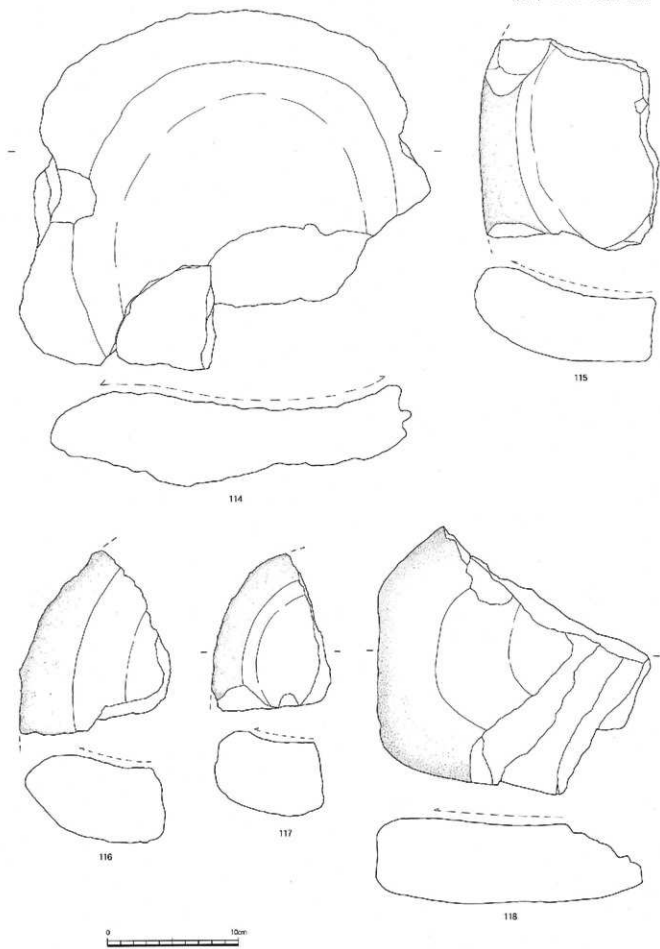
第132圖 石器7 (1/3)



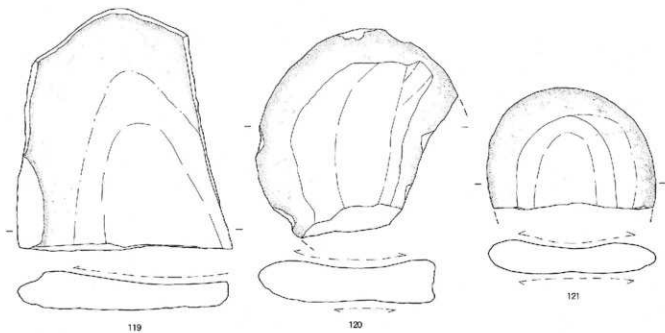
第133図 石器8 (1/3)



第134圖 石器9 (1/3)



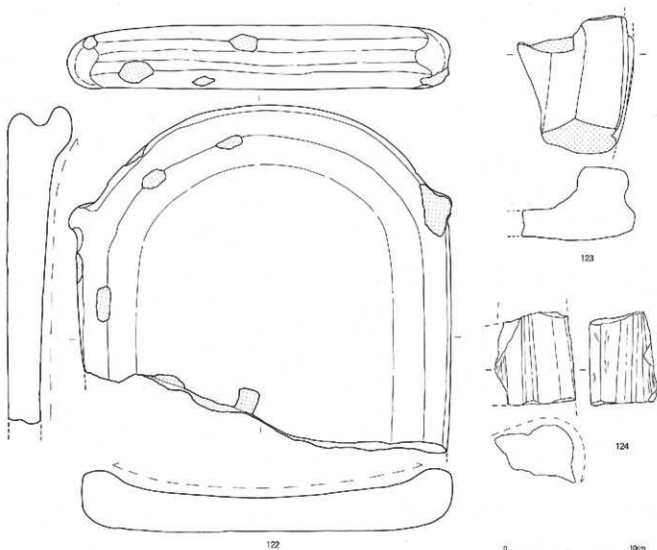
第135図 石器10 (1/3)



119

120

121



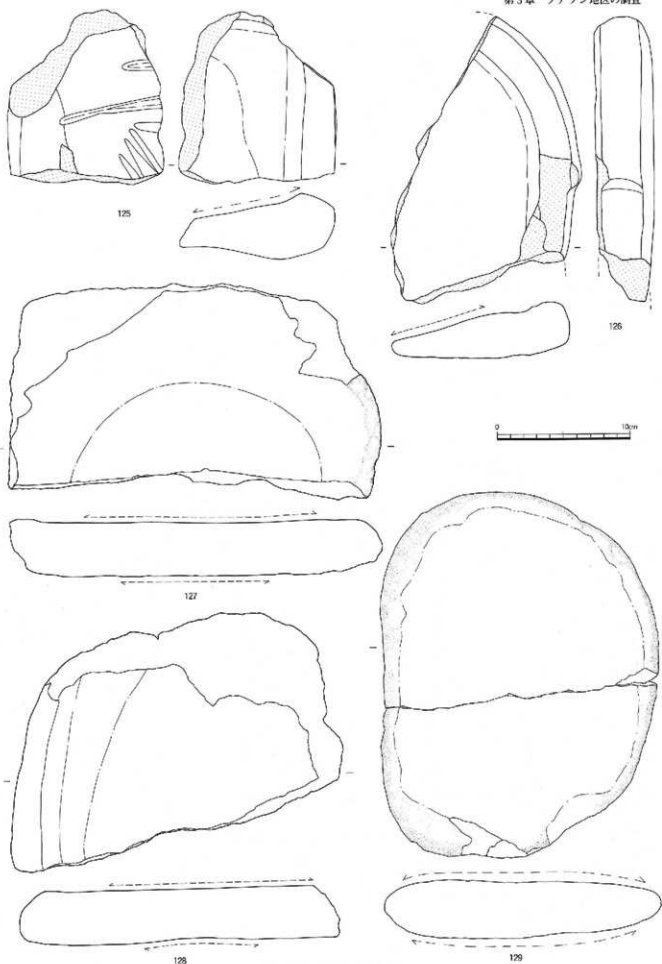
122

123

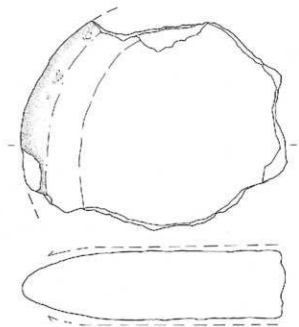
124



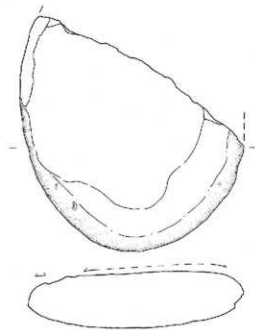
第136图 石器11 (1/3)



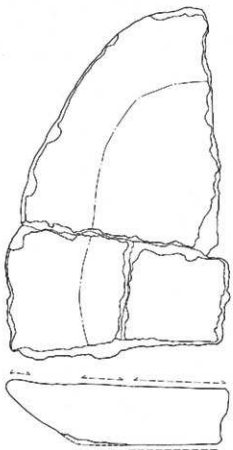
第137図 石器12 (1/3)



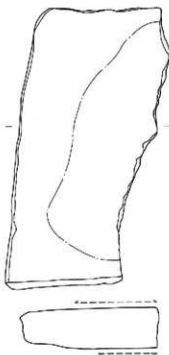
130



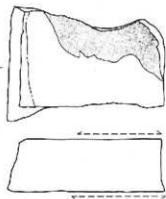
131



132



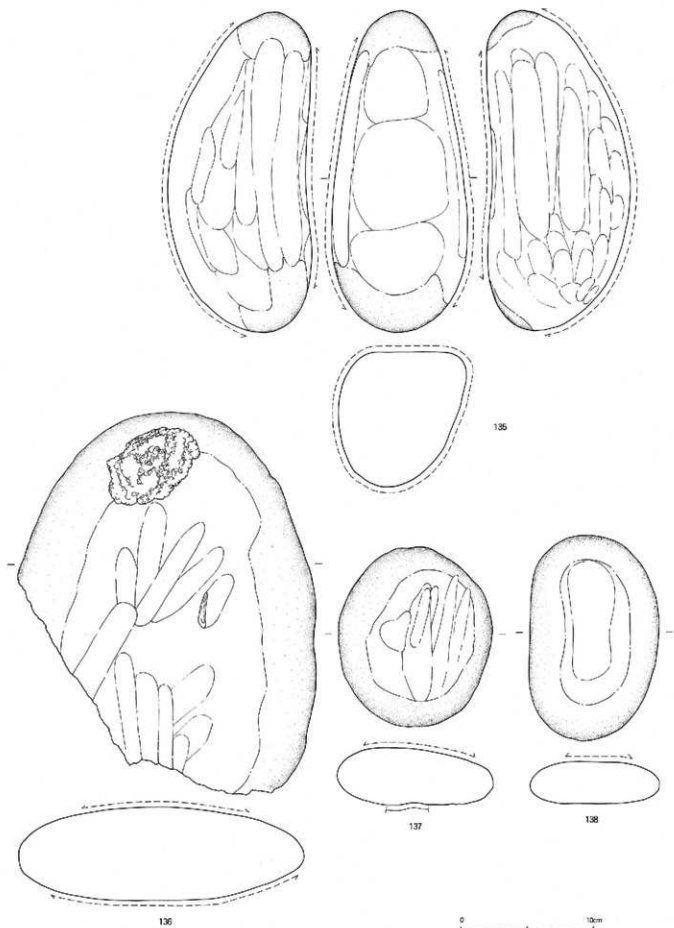
133



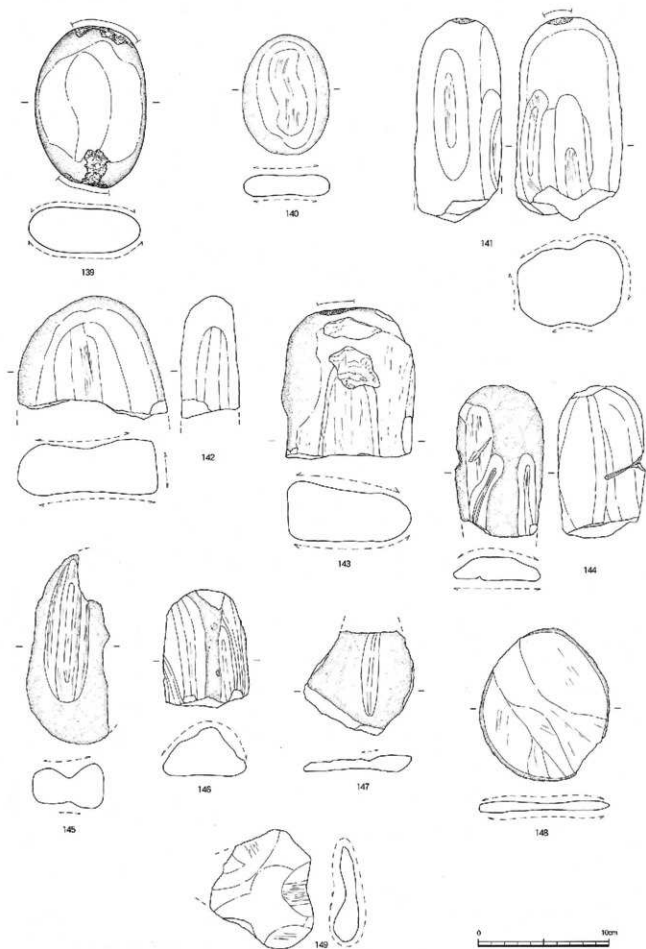
134



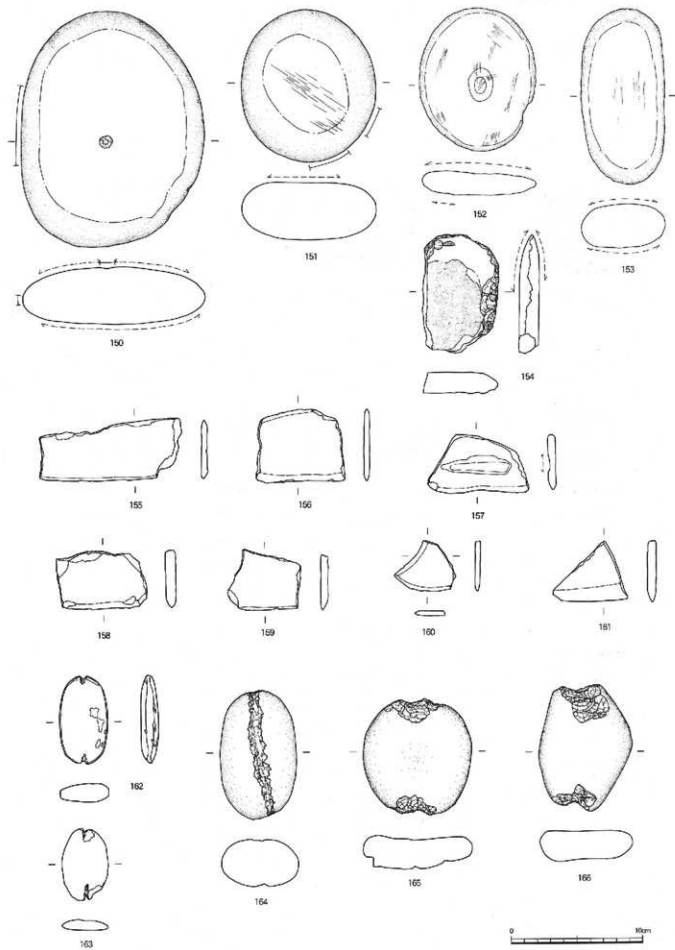
第138回 石器13 (1/3)



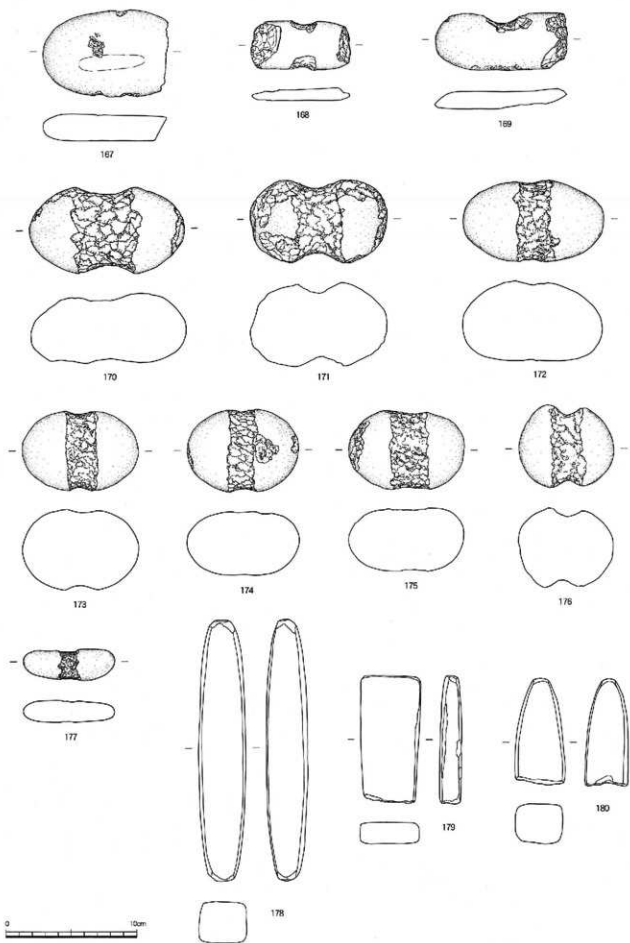
第139図 石器14 (1/3)



第140图 石器15 (1/3)



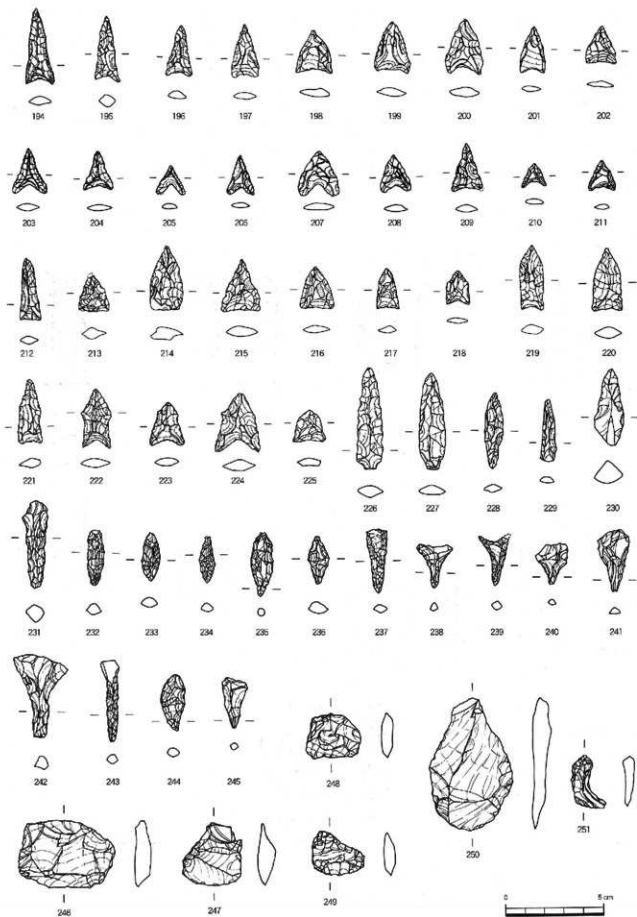
第141図 石器16 (1/3)



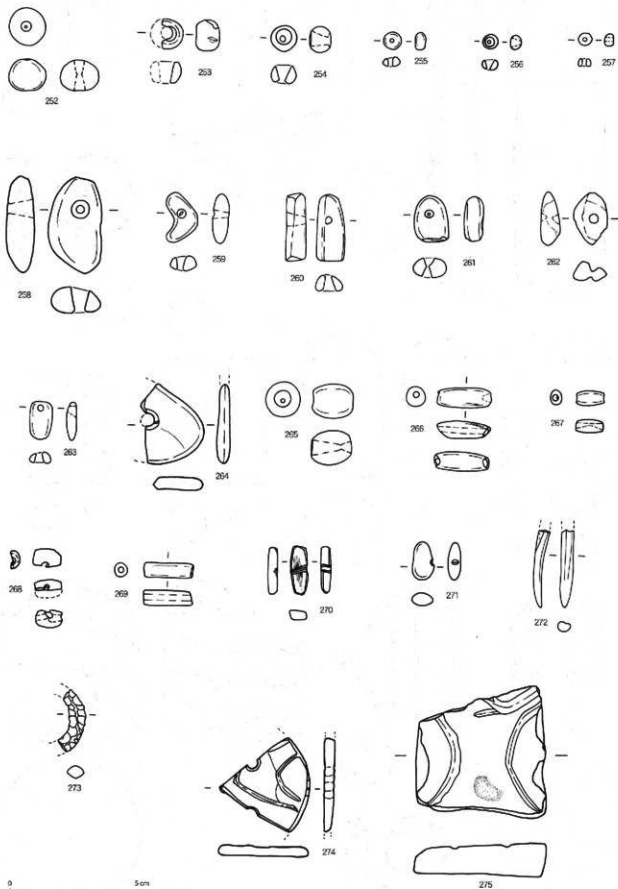
第142图 石器17 (1/3)



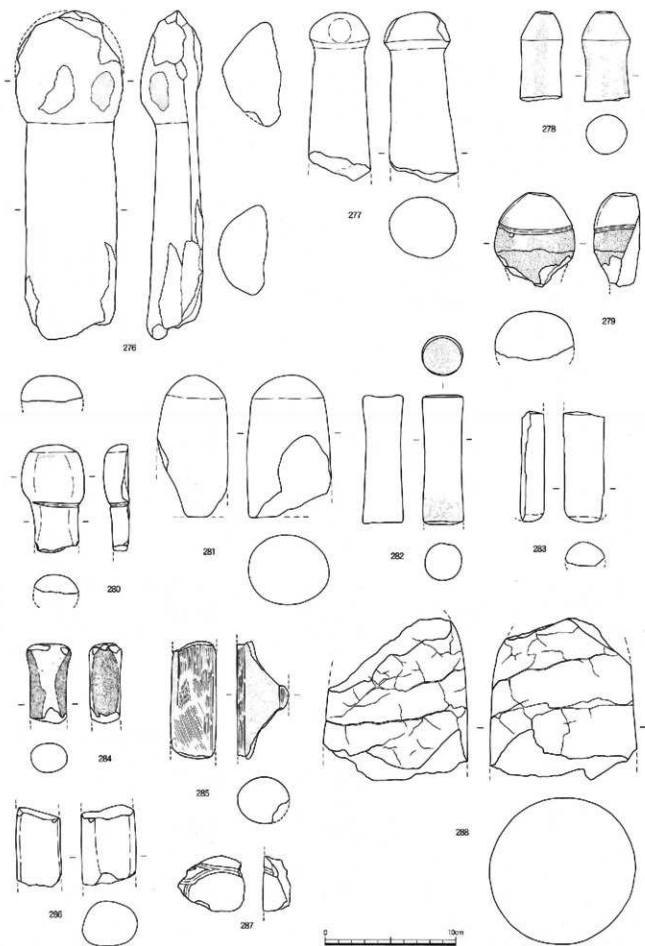
第143図 石器18 (1/3)



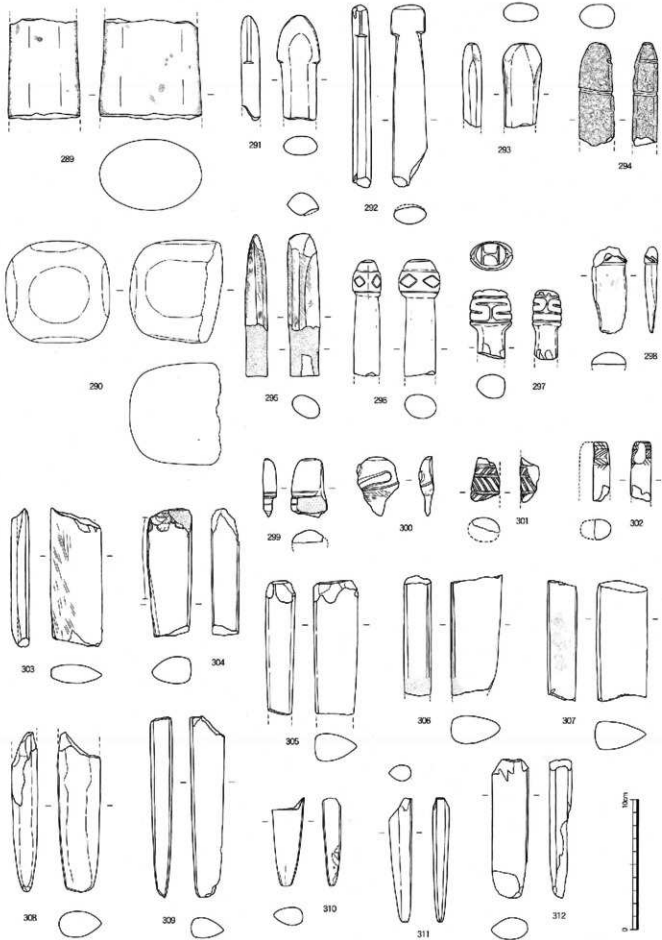
第144圖 石器19 (1/2)



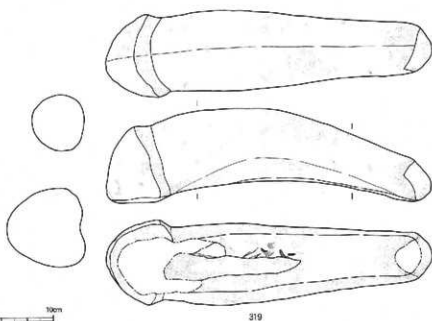
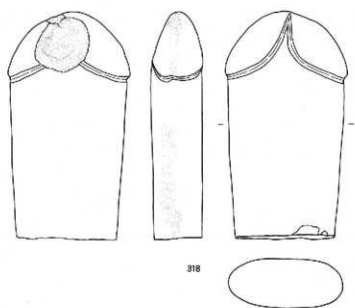
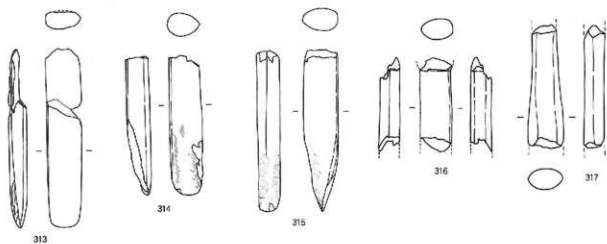
第145図 石製品1 (2/3)



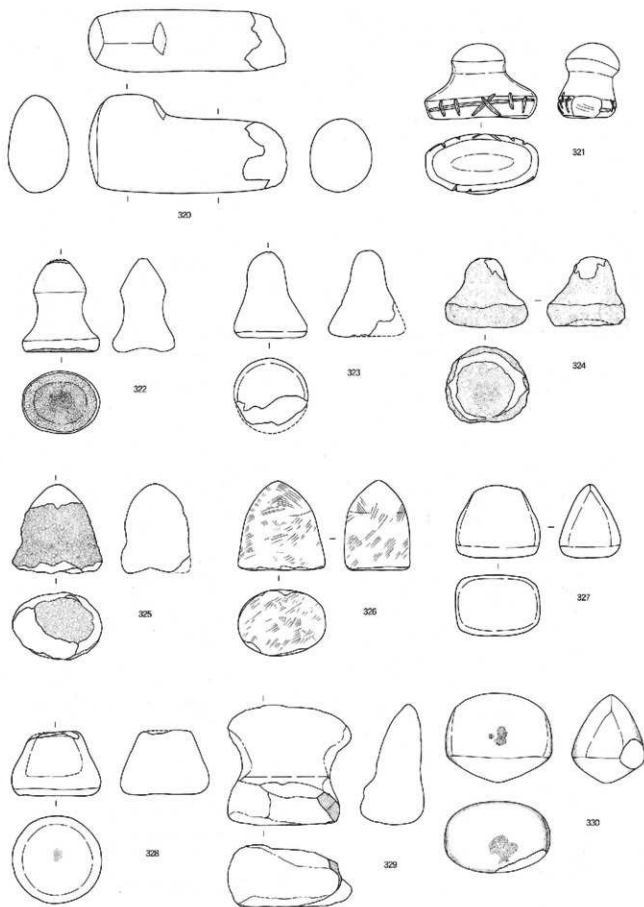
第146図 石製品 2 (1/3)



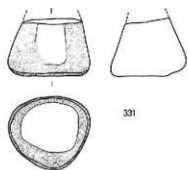
第147図 石製品3 (1/3)



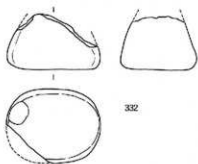
第148図 石製品4 (1/3)



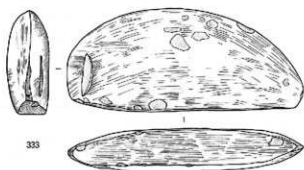
第149図 石製品5 (1/3)



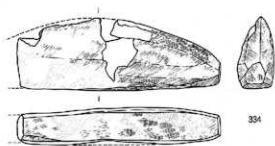
331



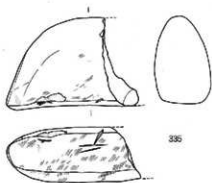
332



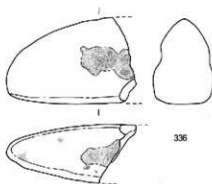
333



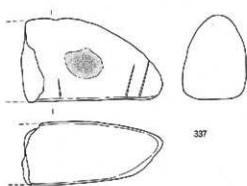
334



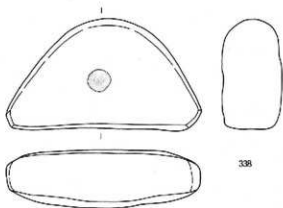
335



336



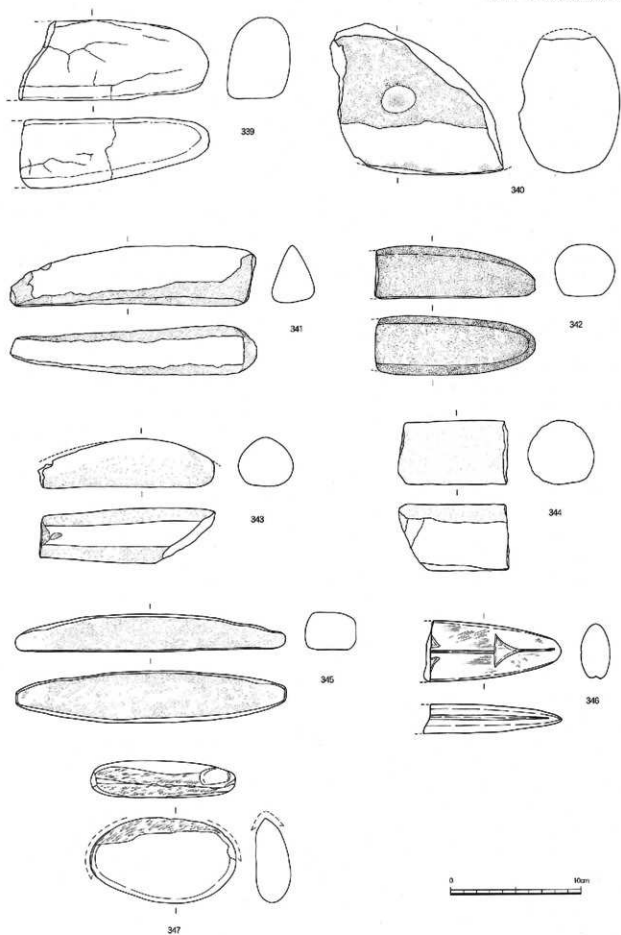
337



338



第150圖 石製品 6 (1/3)



第151図 石製品7 (1/3)

第3節 弥生時代以降の遺構と遺物

弥生時代の確実な遺構は確認していない。8・9区の南北溝SD10（第11図）は、幅約1.5m前後、深さ40cm前後で、デト地区のSD26（第215図）の延長部にあたる可能性をもつ。遺物は5区から弥生時代末期にあたる月影Ⅱ式の甕口縁部片が出土したが小片のため図示しなかった。

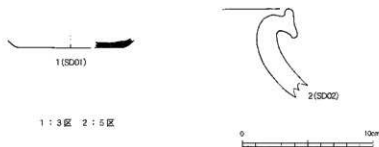
古代の遺構は、3区で北流する溝SD01を検出した（第8図参照）。幅は1m前後、深さは10～20cmである。野々市町教委1983（24頁）のⅡ区で「律令期溝跡」とされた溝にあたり、流路は3区の北側から約5m付近で北北東方向、約37m付近で北東方向に流路方向が変わる。

SD01から須恵器の杯（第152図1）が出土した。9世紀後半頃の所産と推定している。以前の調査の出土品は野々市町教委1983（308頁）を参照願いたい。

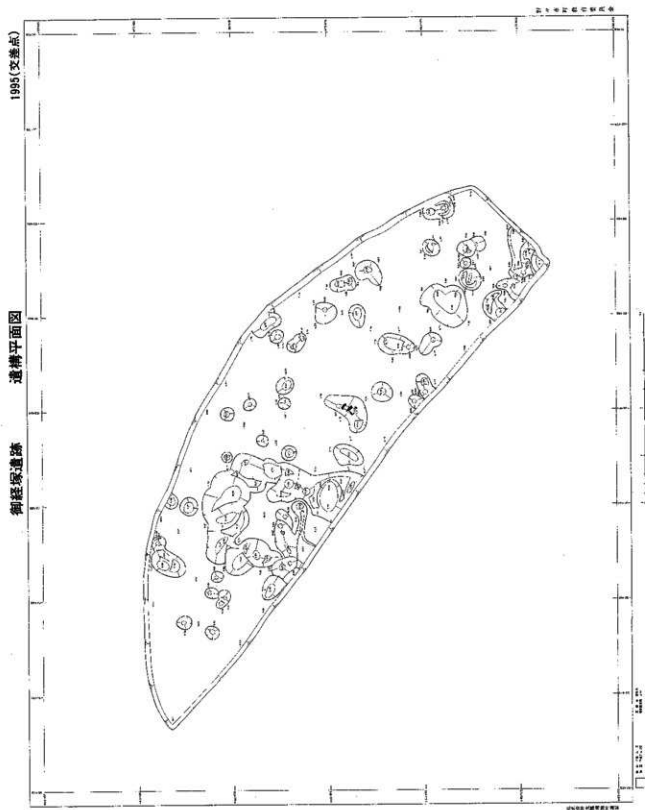
中世後期の遺構として、5区でSD02を検出した（第9図参照）。南東方向から北へ流路を変える部分にあたり、小河道跡と考えられる。幅は4～5m、深さは30～35cmである。SD02は、野々市町教委1983（24頁）のⅠ区で「律令期河道跡」とされた遺構の下流域にあたる。6区ではグリッド列18・19で薄い砂層を検出しており、SD02の痕跡と判断している。しかし、7区において砂層は検出していない。

SD02から加賀焼の壺（第152図2）が、縄文土器に混在しながら出土している。N字状口縁となるもので14世紀前半期の所産であろう。

なお、5区の北東方向溝SD04は、8・9区のSD06の延長部にあたりと推定され時期は不明であるが、重複状況からSD01とSD02の間の時期にあたる。

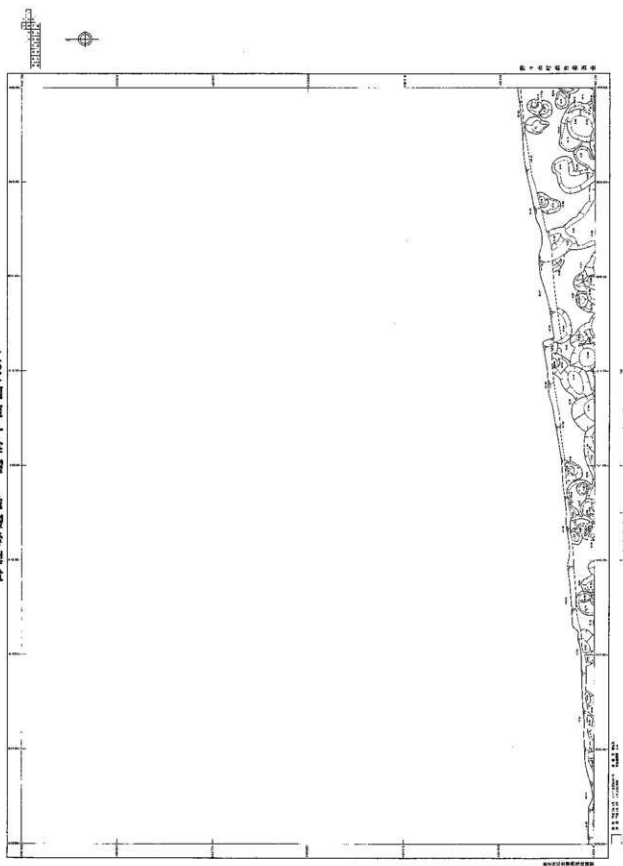


第152図 古代以降の遺物（1/3）



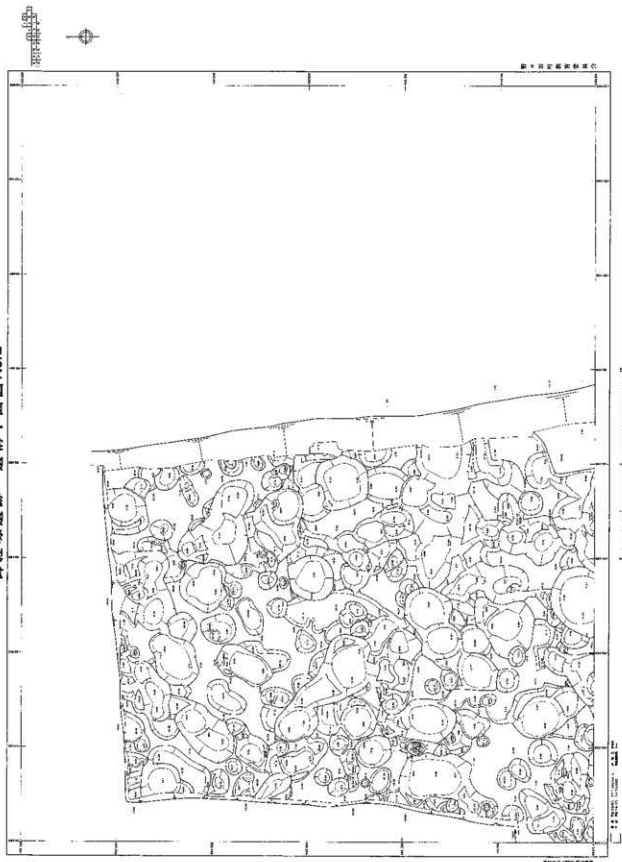
第153図 遺構平面図1 (1/80) 2区

御経塚遺跡 遺構平面図 No. 1



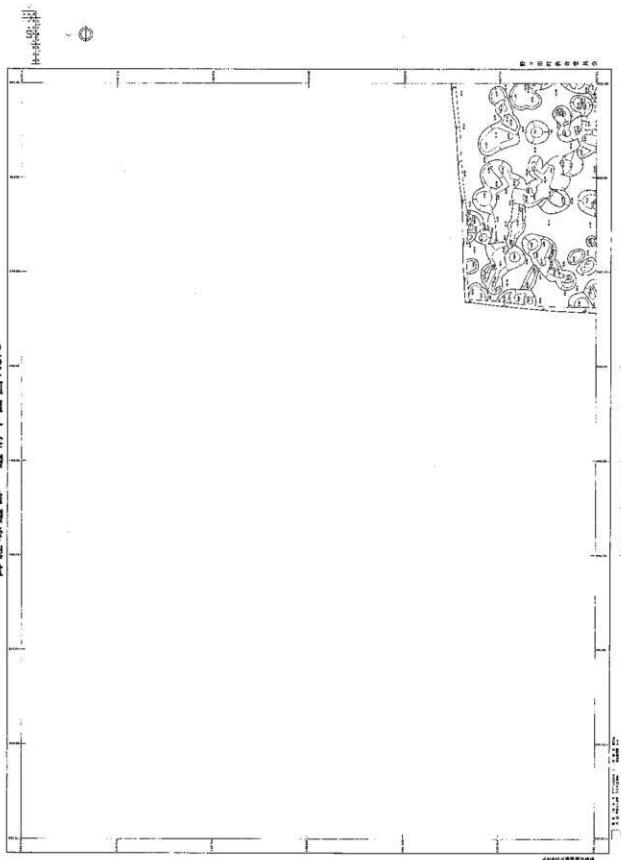
第154図 遺構平面図 2 (1/80) 3区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.2



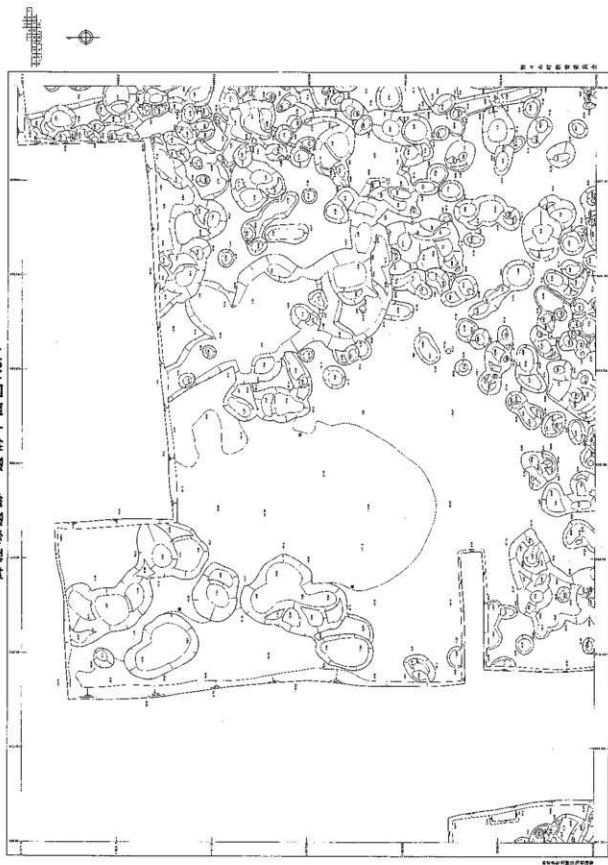
第155図 遺構平面図 3 (1/80) 3区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.3



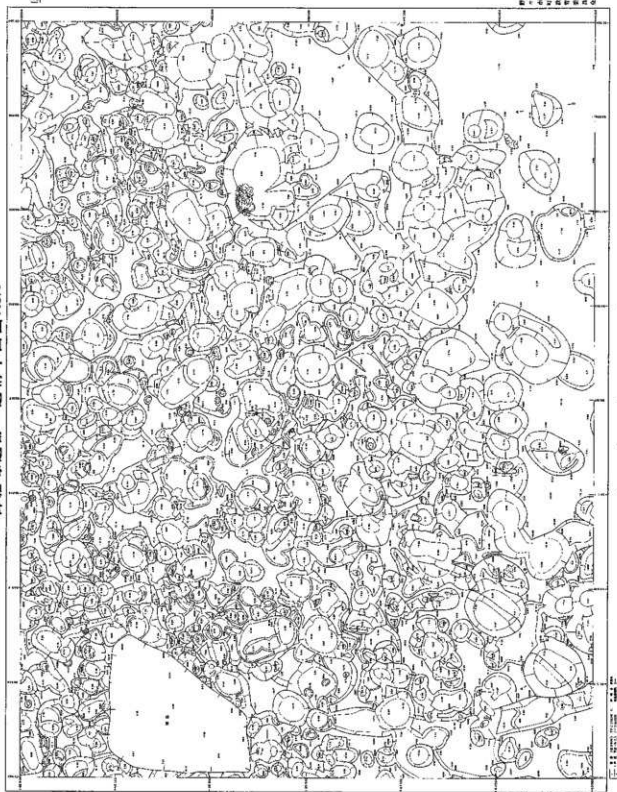
第156図 遺構平面図4 (1/80) 6区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.4



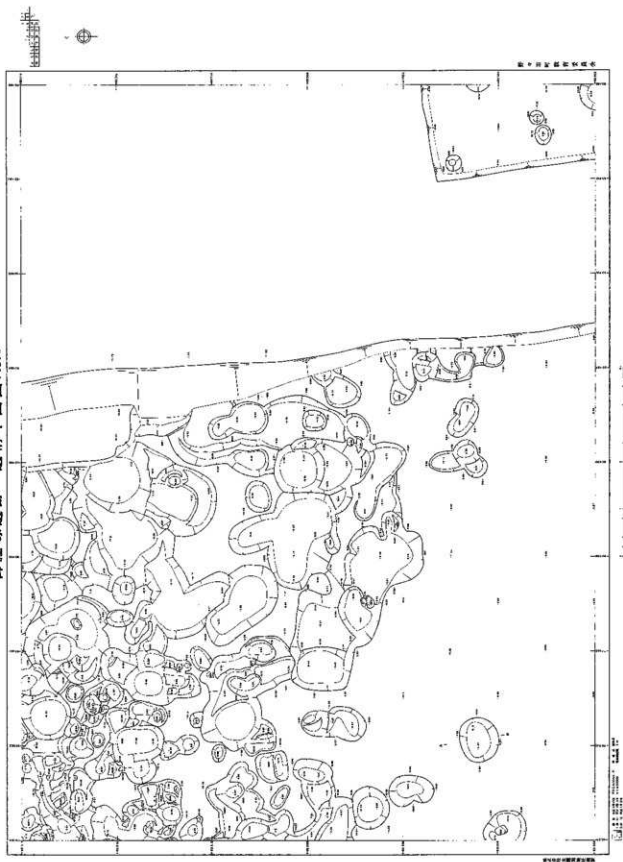
第157図 遺構平面図5 (1/80) 6・3区

梅桂塚遺跡 遺構平面図 No.5



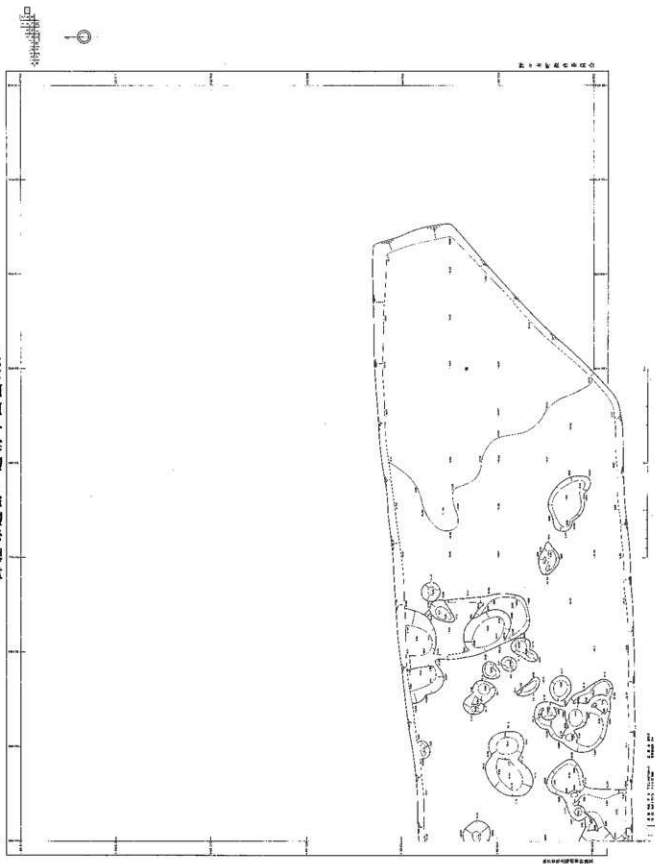
第158図 遺構平面図6 (1/80) 3区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.6



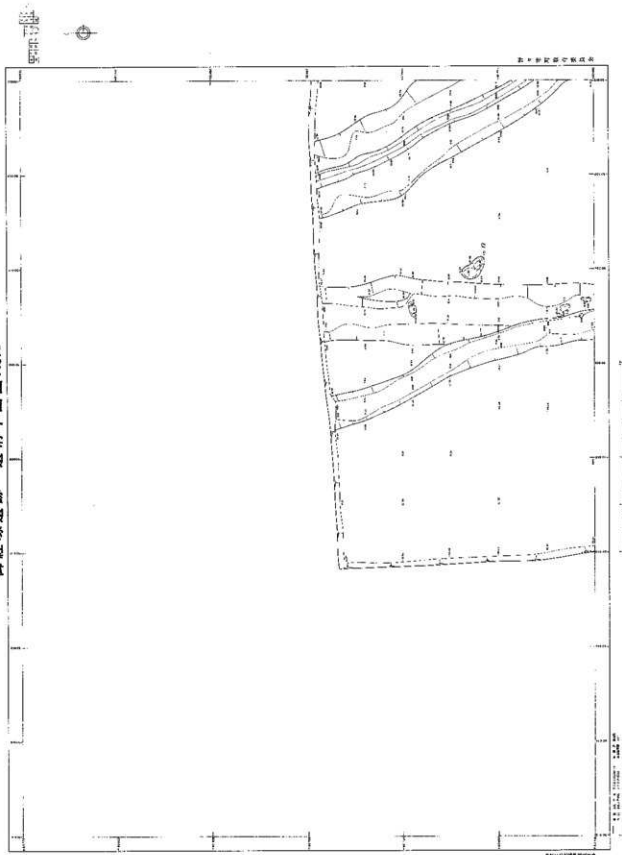
第159回 遺構平面図7 (1/80) 3・1区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.7



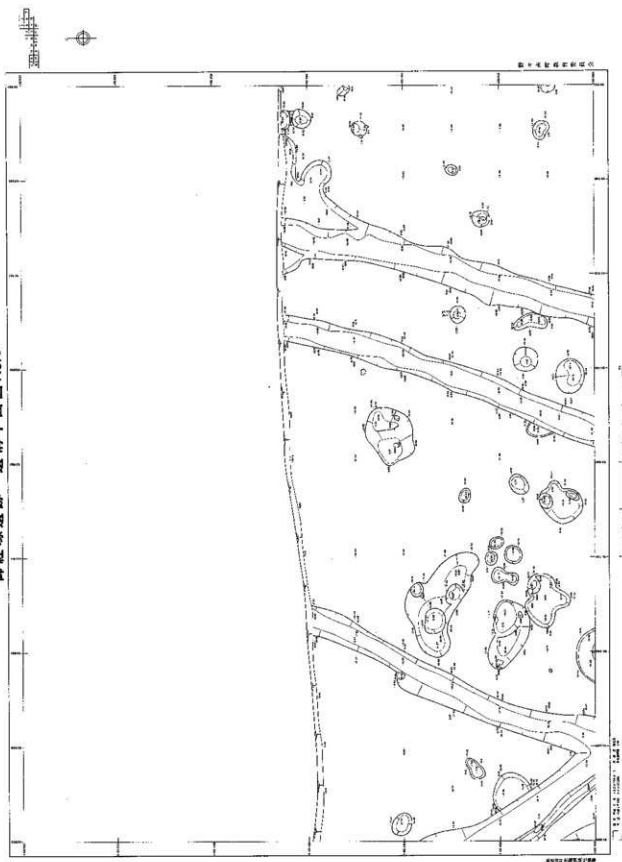
第160図 遺構平面図 8 (1/80) 1区

御柱塚遺跡 遺構平面図 No.8



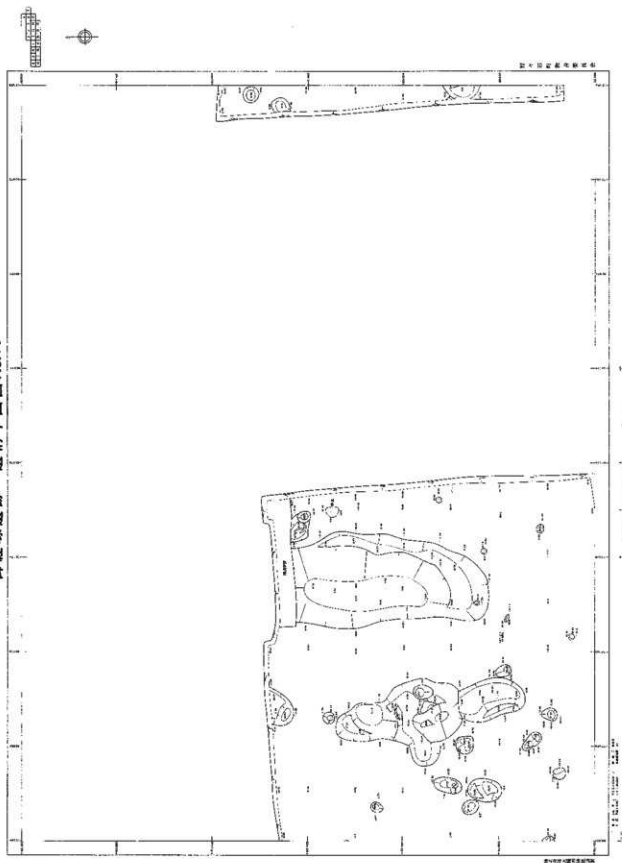
第161図 遺構平面図9 (1/80) 8区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.9



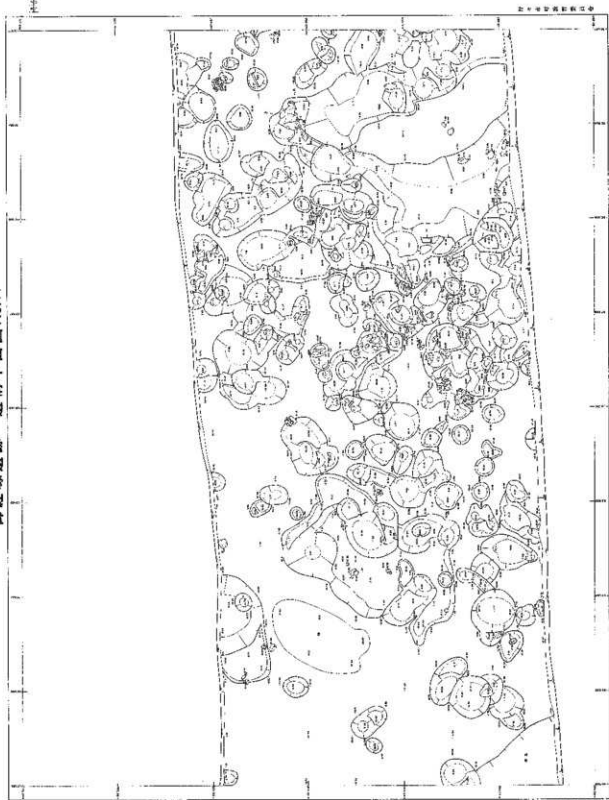
第162図 遺構平面図10 (1/80) 8区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.10



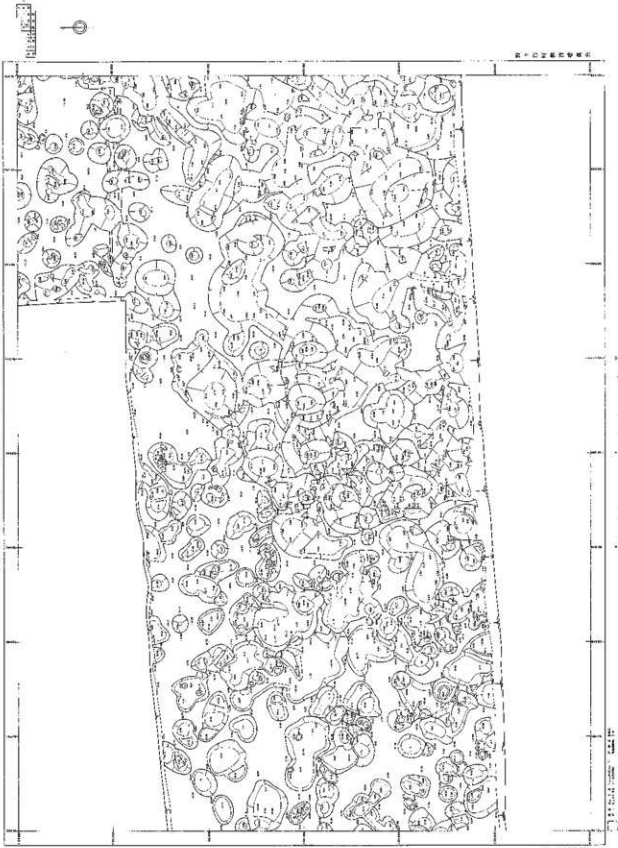
第163図 遺構平面図11 (1/80) 8・6区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.11



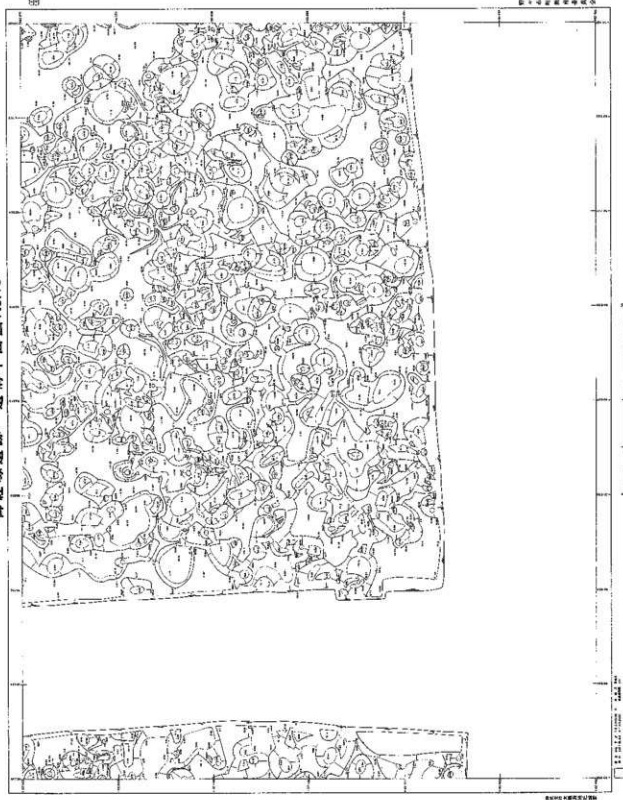
第164区 遺構平面図12 (1/80) 6区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.12



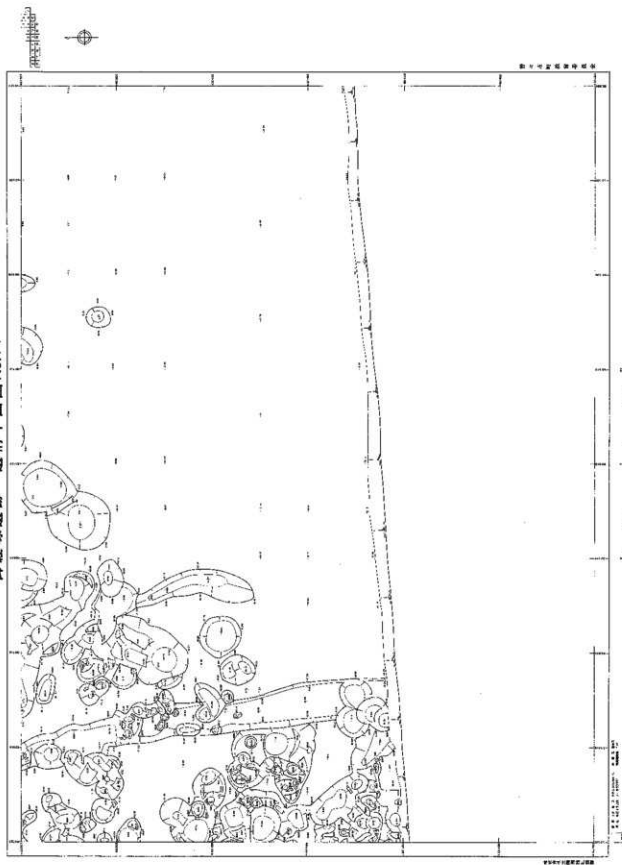
第165図 遺構平面図13 (1/80) 6区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.13



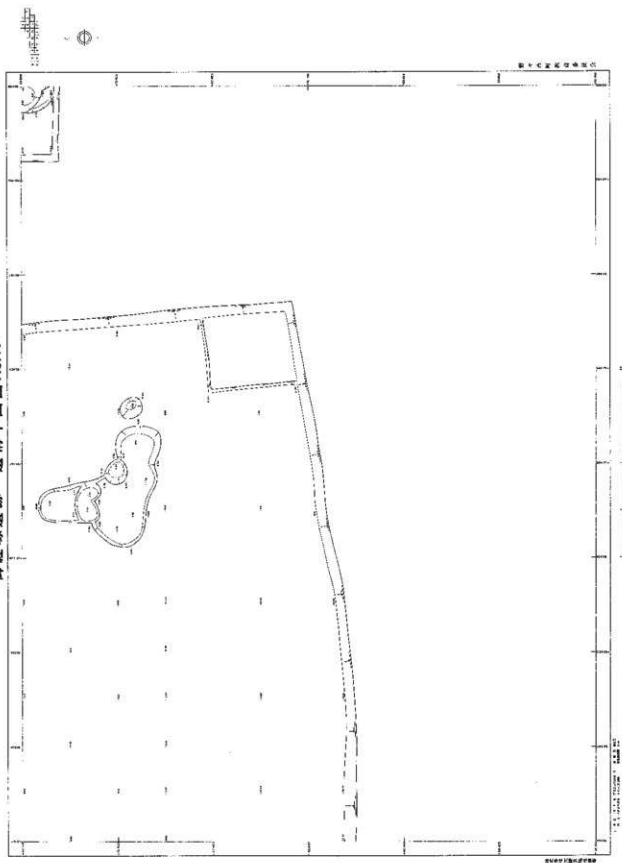
第166図 遺構平面図14 (1/80) 6・3区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.14



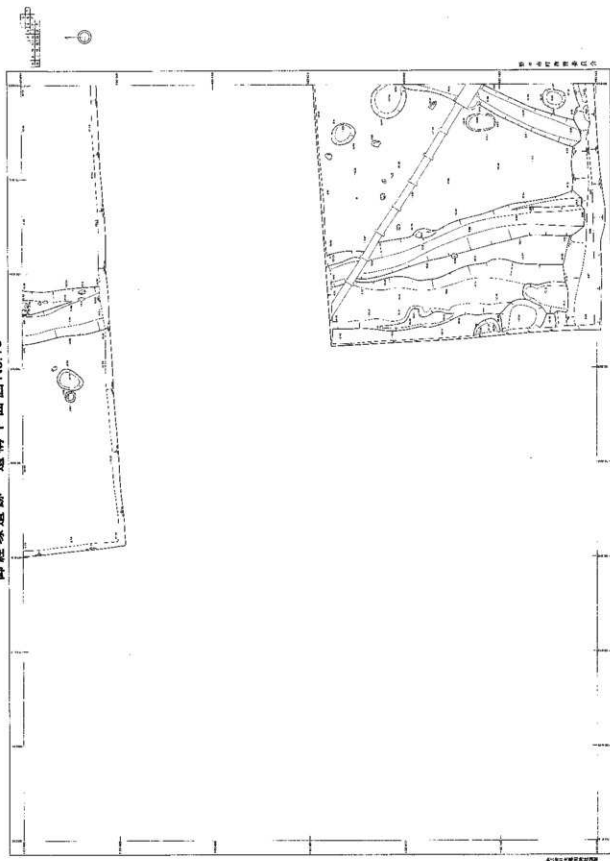
第167図 遺構平面図15 (1/80) 3区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.15



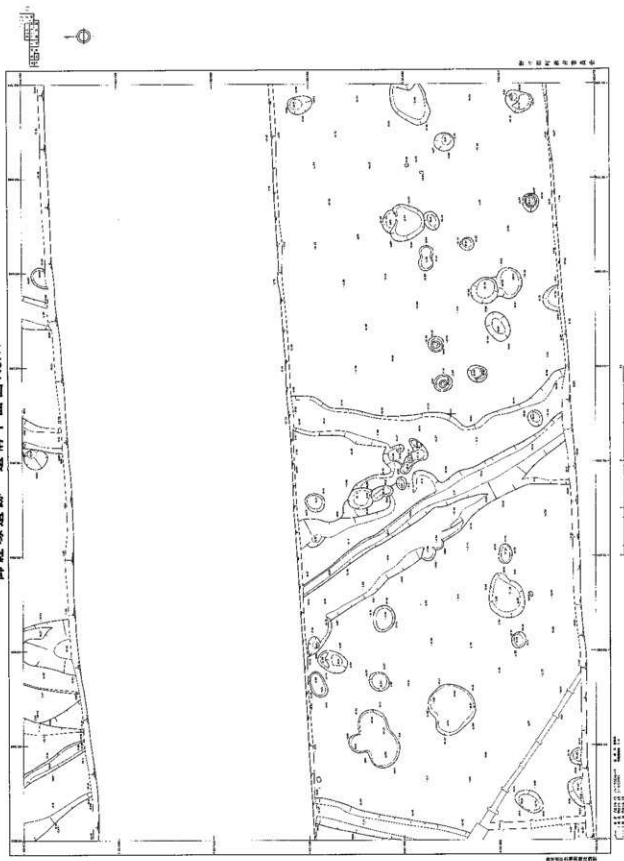
第168図 遺構平面図16 (1/80) 3・1区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.16

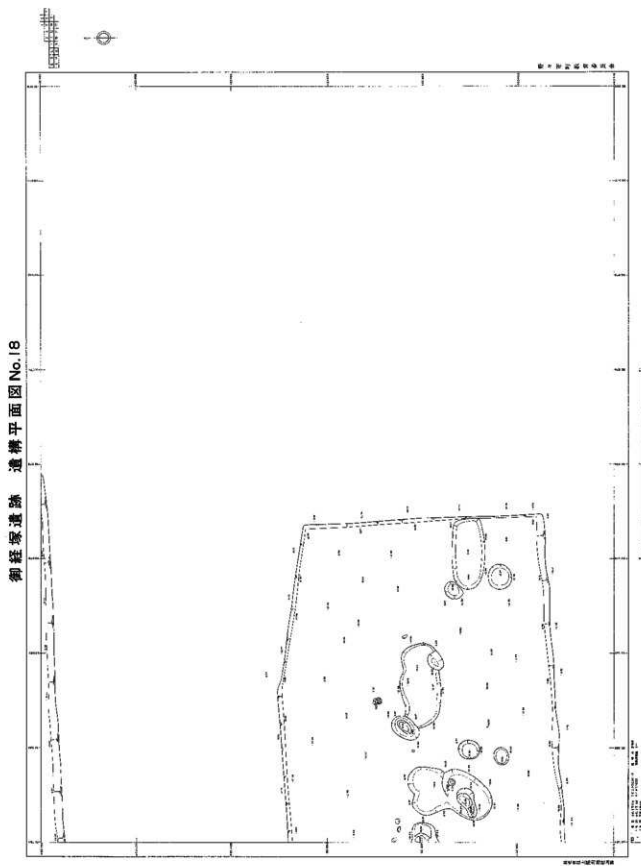


第169回 遺構平面図17 (1/80) 8・9区

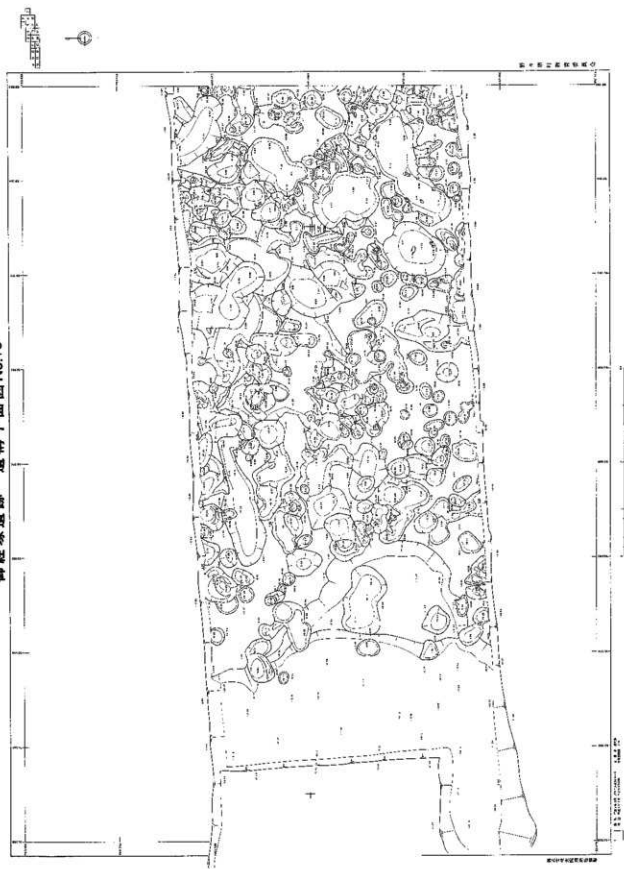
御経塚遺跡 遺構平面図 No.17



第170図 遺構平面図18 (1/80) 8・9区

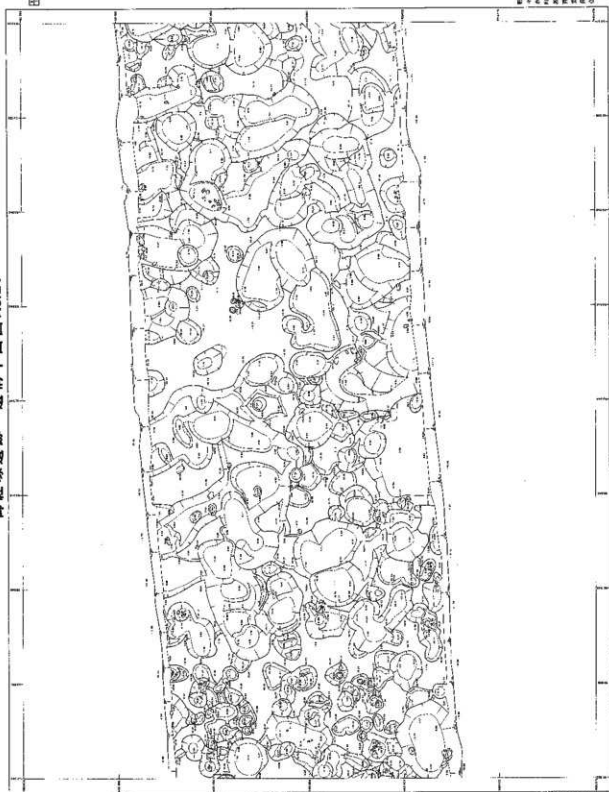


御経塚遺跡 遺構平面図 No.19



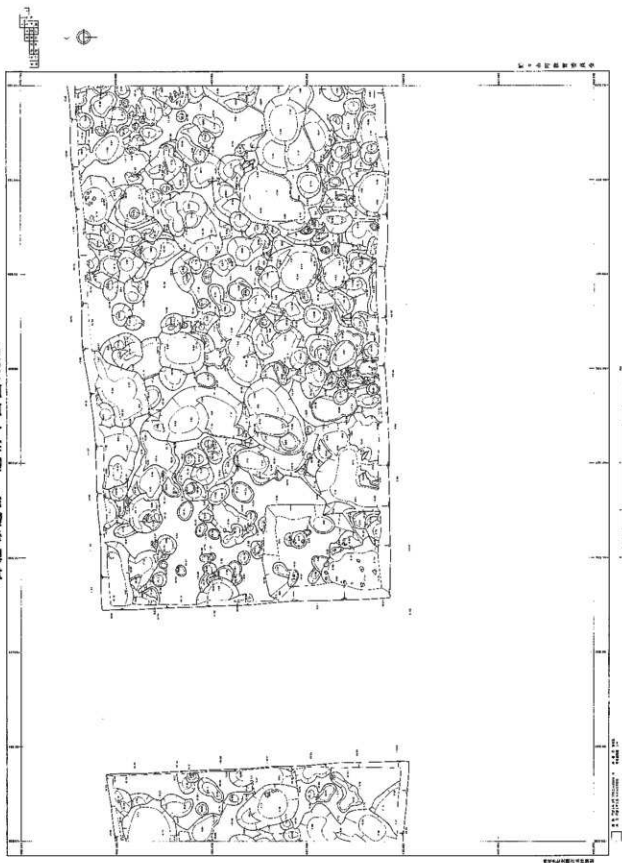
第172図 遺構平面図20 (1/80) 7区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.20



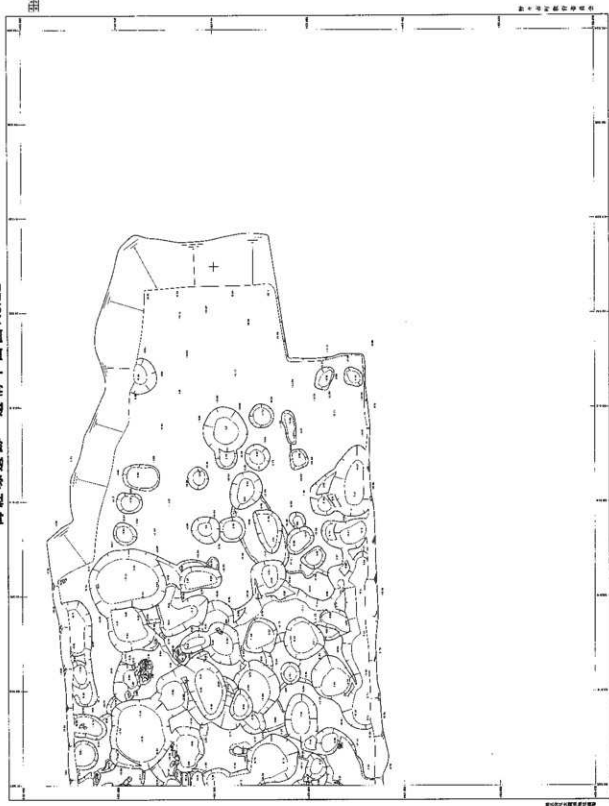
第173図 遺構平面図21 (1/80) 7区

御経塚遺跡 遺構平面図 No.21



第174図 遺構平面図22 (1/80) 7・4区

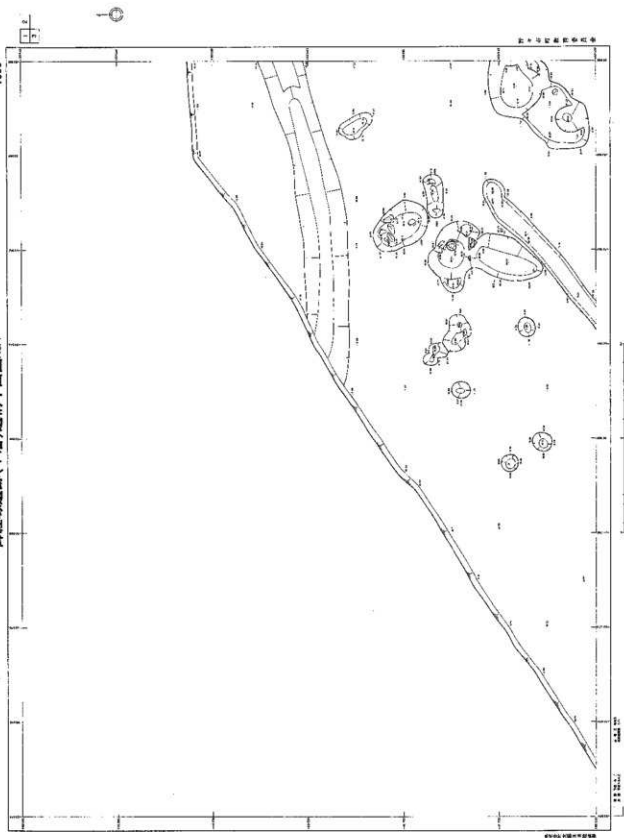
御経塚遺跡 遺構平面図 No.22



新175区 遺構平面図23 (1/80) 4区

1993

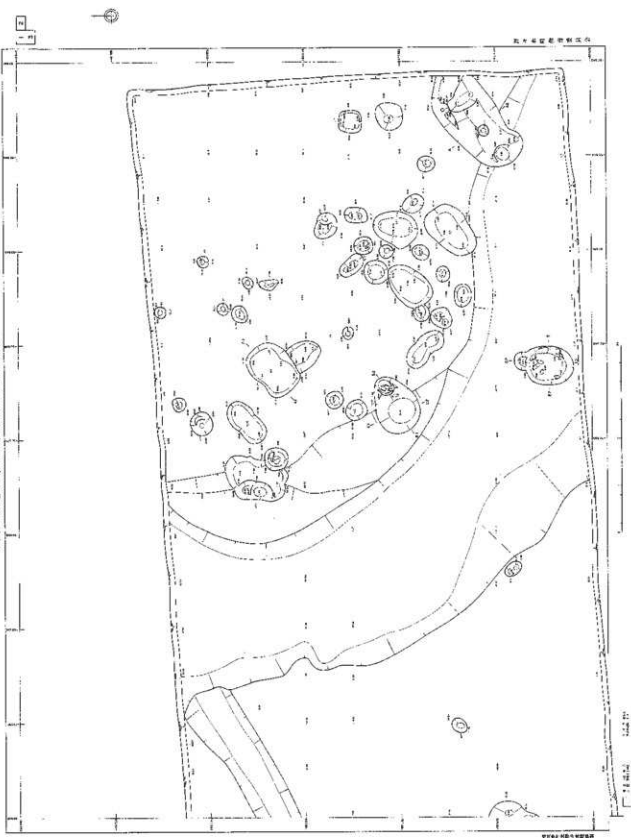
御経塚遺跡(下層)遺構平面図No.1



第176図 遺構平面図24 (1/80) 5区

1993

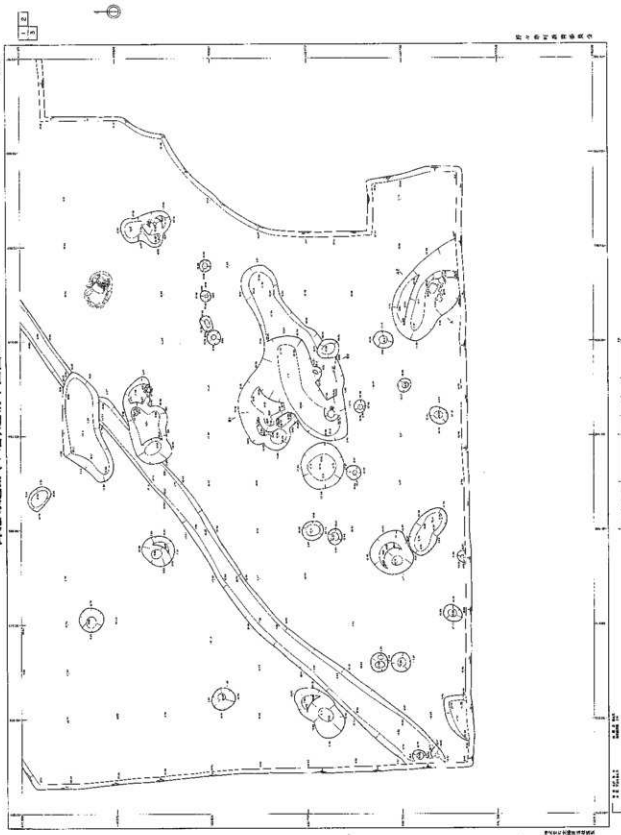
御経塚遺跡(下層)遺構平面図No.2



第177図 遺構平面図25 (1/80) 5区

1993

御経塚遺跡(下層)遺構平面図No.3



第176図 遺構平面図26 (1/80) 5区

第4章 デト地区の調査

第1節 概要と地形

1 概要

御経塚遺跡の分布域のなかで、都市計画街路正門一御経塚線の南側、かつ国道8号線の西側の区域をデト地区として設定している。この地区では、平成元・2・4～8年の土地区画整理事業関係調査と展示館建設の調査を実施しており、その調査地区の位置関係から調査区に1～20区の名称をつけて報告するものである。なお、3・4区にあたる展示館建設の調査については、各時代の検出遺構数、主要遺構分布図、巻土折込図にその数量や遺構図を加えてあるが、本書においての報告対象ではないことを断っておく。

縄文時代では、史跡指定地に近接する調査区で晩期後半を主体とする建物や埋設土器などの遺構分布がみられる。史跡指定地の南西部一帯では弥生時代終末から古墳時代初期の集落が、特大型の竪穴建物2棟を擁し展開する。古墳時代後期～古代では、国道8号線以東一帯に主体部をもつ集落の掘立柱建物跡の分布がみられる。遺物量は少なく6世紀後半～7世紀前半と9世紀末頃の遺物が散見される。中世は14世紀後半～16世紀の後期にあたり、東西に二つの集落域がみられ、とくに西の集落域では掘立柱建物の検出状況から集住化の様相が確認できる。近世では、御経塚の宅地部分と重なる区域で、18世紀～19世紀の井戸・溝・土坑などを確認している。

2 地形と河川跡

調査区は、東西約230m、南北約190mの範囲内に位置している。このなかで、東端部にSD19、中央部にSD23、西端部にSD88のほぼ北流する自然河川跡を検出している(第181図参照)。

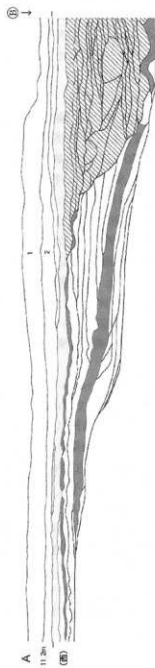
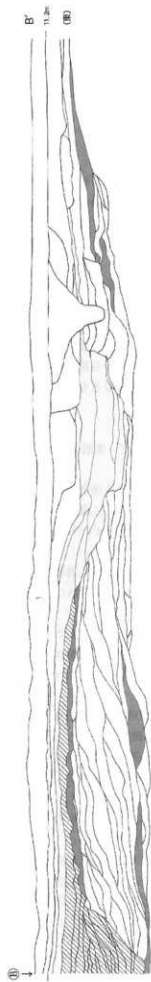
SD19とSD23に挟まれる幅約70～90mの微高地の標高は、その中央部における南北間の地山標高で約10.80(北)～11.25m(南)を測る。SD23西側の微高地は、地山が西方に向かって徐々に高くなる傾向がみられ、その最も高くなる尾根状部の地点は17区近辺と推定している。地山の標高は、東西方向での11区から17区では11.27～11.40mとなり、15区と20区の南北間では11.09～11.56mである。

この地区は耕地整理事業などで削平が行なわれており、表層上である耕作土または人為的盛土直下が地山になる部分が大半であった。基本的な層序が確認できる箇所は、史跡指定地に南接する調査区に限られており、その層序は耕作土・床土・暗褐色粘質土・灰褐色粘質土・地山となるものである。

5区東端部のSD19は、幅12m前後、深さ50～60cmを測り、縄文時代晩期中層式期までにはかなり埋っていた状況が複合する遺構と上層から確認している。また、この河川はツカダ地区15区北側の凹地部(野々市町教委1989)と、ブナシ地区の昭和46年調査区東部に位置し、縄文時代後期後葉の溝状凹地とされたもの(高畑1975)へのつながりが想定される。

6～9区に位置するSD23は、幅21～30mで深さ1.3mを測る。調査期間の都合上河川跡は完掘していない。全体がわかる土層断面図を第179図として提示したが、分層数が多く記述は概観にとどめた。下部の黒色系粘質土層が弥生時代終末期の土器を包含する層にあたり、その下の灰褐色系の粘質土が同終末期以前の堆積層で縄文期にさかのぼるものである。古墳時代後期までにはほぼ埋った状態となり、幅約4m深さ1.3mの溝Bが確認できる。また、中世段階と考えられる幅約3.9m深さ90cmの溝Aがみられる。SD23は、ブナシ地区の昭和49年調査区南部で検出している河川の落込みや、ツカダ地区北部調査の西河川跡につながるものである。この河川跡は「古墳時代初期以降における大洪水によって形成された大溝であることは確実である。」(高畑他1983)とされているが、昭和50～51年に実施された石川広域農道関係の調査では、晩期後半以降に大きな冠水の存在が報告されており(湯尻他1976)、ツカダ地区の西河川跡では弥生時代終末期の月影式土器包含層(黒色系粘質土)の下で晩期末頃の土器包含層(灰褐色系砂質土)がみられること(野々市町教委1989)、また、本地区でも縄文土器を包含する灰褐色上層の堆積層が確認できることから、この河川跡は後期の集落形成時から存在していたものである。

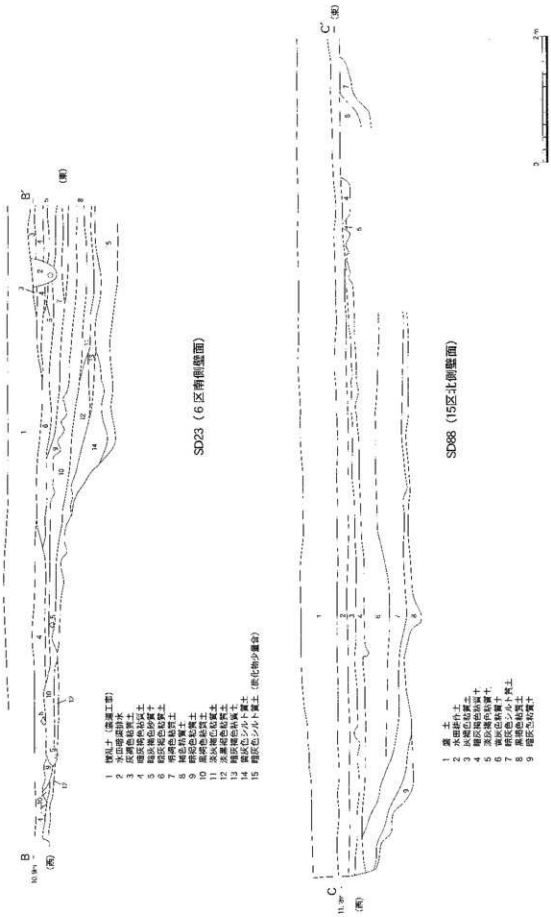
15区に位置するSD88は、幅約14m深さほぼ1mを測る。縄文時代酒見式期の後に開口したもので、弥生時代終末期までには埋っていた河川跡である。



- 1 砂状土
- 2 泥状土
- 3 泥A
- 4 泥B
- 5 砂状泥质土



第179图 自然河道SD23断面图 (1/60)



第180図 自然河道 SD23・88断面図 (1/60)

第2節 縄文時代

デト地区での遺構分布は、北東部の1・2区で遺構密度がやや高く建物も検出しているが、他の調査区では埋設土器または土坑が散見できる状況である(第181図)。その状況から、集落の範囲を確認できており、南端部は、史跡指定地から南へ約60m付近、西端部は史跡指定地から西へ約40mの15区付近にあたる。しかし、12・16～20区では遺構を確認していない。

検出した遺構は、建物(SB)6棟(方形建物3棟、亀甲形建物1棟、円形建物2棟)、埋設土器5基、土坑(SK)4基、ピット多数を検出している。出土土器は、集落の濫觴期にあたる後期中葉後半から晩期末までみられるが、晩期後半のものも多く出土しており、遺構についてもこの時期に帰属するものが多い。デト地区は、ブナラシ地区と比較すると遺構の密度は低く、相応するように出土遺物の量も少ない。

調査におけるグリッドは、5m四方を基本とし史跡指定地南辺の直線部を基準として設定しているが(第181図)、12～20区はこのグリッドを用いていない。

出土土器は、遺構出土のものについては遺構ごとに記述し、包含層出土土器は別項とした。また記述は実測図からでは確認しづらい点を主に行ない、記述を割愛したものが多い。網代止痕は「超え一溝り一送り」とし材料の本数を記した。土器型式の記述はブナラシ地区に従っている。

土製品や(製品)の祭儀具は出来るだけ多くを掲載したが、石器については典型的なもの抽出して図示した。

1 建物

方形建物3棟の内訳は、A1類1棟(SB01)、A2類2棟(SB02・04)、亀甲形建物1棟(SB05)はB1類で、円形建物2棟はC2類(SB03・06)である。建物の分類は、第3章第1節2の1)を参照されたい。

1) 方形建物

SB01 (第182図)

1区のF1・G1グリッドに位置する。柱穴P1～P3により復元したもので、正方形配置となることから4本柱の建物と推定している。柱穴間は、P1～2が2.7m、P2～3は2.6mを測り、軸方位はN23°Wである。略円形の柱穴は、径74～91cmで深さは14～16cmと浅いものである。図が示していないが、縦行条痕土器の胴部破片がみられた。長竹式期の土器と考えられよう。

SB02 (第182図)

2区のH1・I1グリッドに位置する。2周×1周配置の6本柱建物で、規模は5.0×3.0m、面積は15.0㎡、長軸方位はN55°Wである。柱穴間は、桁行のP1～2が2.4m、P2～3は2.6mとなる。略円形の柱穴は径30～50cmで、深さ24～33cmである。図示していないが、緩いくの字口縁で、11唇部に斜めの刻みと口縁部内面に幅広いの沈線をもち横行条痕文を施す下野式前半期の深鉢片が出土している。

SB04 (第183図・第191図1～4)

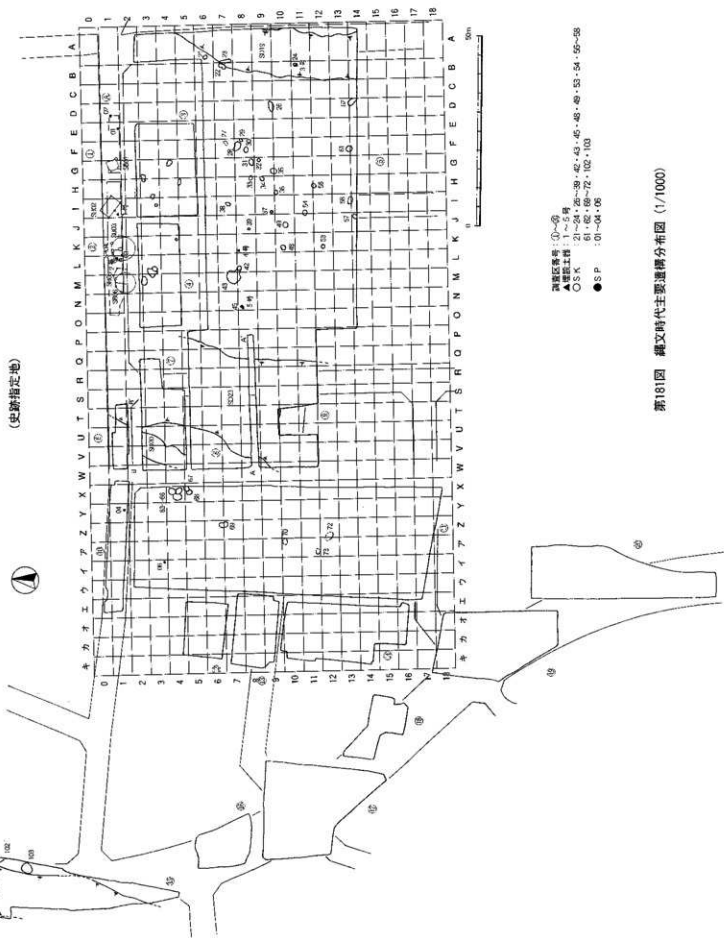
2区のK1・L1グリッドに位置し円形建物SB03より後出する。長方形配置となる四つの柱穴から、2周×1周配置となる6本柱の建物に復元でき、推定規模4.0×2.9m、面積11.6㎡、長軸方位はN13°Wである。柱穴間は、桁行のP1～2・P3～4は2.0m、梁行は2.9mである。略円形の柱穴は径72～推定120cmと大きく、深さ47～70cmである。柱穴の覆土は暗褐色粘質土であった。

1の深鉢は、11縁の2条平行沈線下に低い連弧文・縦沈線・曲線文による区画文がある。3は口縁部が緩く内向する深鉢で、4の深鉢の胴部には2段の列点文が施される。また、P3からは4号埋設土器10と同様の口縁部片がみられた。新相の深鉢3は長竹式後半期に比定できよう。

2) 亀甲形建物

SB05 (第183図)

2区のL1・M1グリッドに位置し方形建物SB04と複合する。柱穴P1～P3により北半部を復元したもので、



第181図 縄文時代主要遺構分布図 (1/1000)

梁行 P1～3は3.6mを測るが桁行の規模は不明である。棟持の P2は梁行の線上から90cm離れて位置する。略円形の柱穴は、径48～64cmで深さ32～41cmである。図示していないが、底部近くの縦行条痕文の小片1点が出土しており、下野式と思われる。

3) 円形建物

SB03 (第184図)

2区 L1・M1グリッドに位置し方形建物 SB04に先行する。径6.6mの環状に配置される柱穴 P1～P4により復元したもので、全体では8本柱の建物となる。柱穴間の距離は、P1～2が2.7m、P2～3が2.8m、P3～4は3.0mである。略円形の柱穴は径30～50cmで、深さ24～33cmである。図示していないが、縦行条痕文土器の胴部片、凸帯文系土器と推定するケズリ調整された胴部片がみられた。長竹式期であろう。

SB06 (第184図)

2区 M1グリッドに位置する。径5.2mの環状に配置される柱穴 P1～P4により復元したもので、全体では8本柱の建物となる。柱穴間の距離は、P1～2が2.0m、P2～3が2.1m、P3～4は2.0mである。楕円形状の柱穴は長軸32～60cm、短軸32～46cmで、深さ33～39cmである。図示していないが、中層式と思われる横行条痕文が施される落手の胴部小片がみられた。

2 埋設土器

1号埋設土器 (第185図・第191図5・6)

2区 I1グリッドに位置する。底部を欠く深鉢5(A)を横位とし、その口縁部と下半部を蓋をするように深鉢6(B)の土器片 B1・B2を用いた土器で、Aの口縁方向は N45°W である。B土器を分けて用いており単純な合形とはなっていない。設置順は、まず全周1/2ほどのB2を敷き、その上に5cmほど重ねてAを置くが、口縁の向きをB2とは90度変えている。Aの下半部をB2でふさぎ、全周1/2ほどのB1を合口としてAの中に12cmほど入れ込んでいる。

A土器の5は、口縁部で緩く外反すもので外面は斜行条痕文を施す。口径400mm、頸径376mm、器高289mmである。B土器の6は、頸部でわずかにくびれて口縁部がわずかに外反するが直立に近い。横行条痕文を施し胴部下半は斜行条痕文となる。口径345mm、頸径335mm、胴径350mmで、下野式後半の土器であろう。

2号埋設土器 (第185図・第191図7)

2区 L1グリッドに位置する。口縁部は無く下半部を全周する同一土器の破片を、横位に2段ないし3段重ねているもので、土器がそのまま潰れた状態ではなかった。何かを上器片で被ったとも考えられることから埋設土器としたが、廃棄した状況かもしれない。

深鉢7は外面に横行条痕文を施すが、底部付近では条痕文が省略され輪組み痕が顕著にみられるなど調整を簡略している。網代土痕の編み方は「2-2-1」である。胴径307mm、底径74mm、器高281mmである。晩期の中層3式～下野式土器であろう。

3号埋設土器 (SK24) (第185図・第191図8)

5区 B11グリッドに位置する土坑 SK24内の土器である。SK24の平面形は楕円状で、規模は上面73×60cm、底面40×30cm、深さ33cmである。土器は坑底から10～13cmの高さで検出したもので、口縁部を下方にする。形を有していた土器が潰れたものかは不明であり、完形にちかく復元できたが底部はなく打ち欠いたようである。

深鉢8は、口縁部に LR 縄文を施し頸部以下を無文とする中層2式の土器である。口径203mm、頸径160mm、胴径231mm、器高215mmで、中層2式土器である。

4号埋設土器 (SK41) (第186図・第192図9～11)

5区 K8グリッドに位置する。上面は削平のため擾乱されており、掘り込まれる土坑 SK41も浅い検出であった。壺9(A)、深鉢10(B)、浅鉢11(C)の3個体がみられた。横位として南に口縁をむけるAが土器棺である。Aは底部を欠いているが、形を有していた土器がそのまま潰れた検出状態で、口縁部の上には大きき19×15cmの白然石がみられ、口縁方向は S41°E である。擾乱のため B・C の状態についてはよくわからないが、BはA

の両側と下半部の下にその破片を敷いたものであろう。CはAと分布状況が重なることはなくA下半部の北西側で検出している。楕円形のSK41の規模は上面80×60cm、底面46×30cm、深さ10cmである。

深鉢9は胴上部で強く内傾して口縁部が外反するもので、2段の2条沈線間連続列点文が施され地文は斜行条痕文である。口径230mm、頸径219mm、胴径293mm、器高311mmである。深鉢10は胴上部からやや内傾ぎみに立ち上がる口縁部をもち、細い縦行条痕文が施される。底部内底は笹の葉であろう。遺存は1/3ほどで、口径247mm、胴径252mm、底径75mm、器高293mmである。浅鉢11は眼鏡状文、2段の楕円区尚工字文がみられ、外面は赤彩が施される。口径364mm、胴径412mm、器高199mmで、長竹式の埋設土器である。

5号埋設土器 (SK45) (第186図・第191図12・13)

5区N8グリッドに位置する。口縁部を欠く深鉢13(B)を正位に埋設した土器棺で、この上面を12(A)の破片によって蓋をするような状態で検出した。略円形のSK41の規模は、径45~38cm、底面径16cm、深さ32cmである。深鉢13は、斜行条痕文が施され、底径98mm、器高215mmである。12は大きく内湾する口縁の深鉢と思われる、13は4号埋設土器10の胴下半部の器形と近似することから長竹式土器と考えられる。

3 土坑

土坑とした46基は、遺構密度の低い5・11・15区で検出した。穴遺構のなかで大きめのものを土坑にしたもので、判断はあいまいである。また、堅穴状の遺構もここに含めており、規模における()は推定値である。土坑の覆土はSK43の上層土を除き灰褐色系粘質土であった。以下、調査区ごとに報告するが、土器が出土していないものもあり土器から判断する時期に不明なものも多い。

1) 5区 SK21~23・25~39・42~43・48・49・53・54・56~58・61・62 (第187~189図、第193・194図14~38)

SK21はA6グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は126×100cm、深さ20cmである。

SK22はB7グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(126)×104cm、深さ22cmである。長竹式土器小片がみられた。

SK23はA7・B7グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(210)×110cm、深さ21cmである。いくつかの土坑が複合しているものであろう。

SK26はD9・10グリッドに位置する。不整な楕円状を呈し、規模は274×130cm、深さ27~38cmである。八日市新保式と考えられる土器小片がみられた。

SK27はF7グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は153×100cm、深さ20cmである。

SK28はF8グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は130×168cm、深さ68cmである。

SK29はF8グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は88×(73)cm、深さ68cmである。14は小波状となる竈の口縁部であるが、沈線の文様は工字文か。15は鉢の胴部片で文様は工字文か。長竹式土器であろう。

SK30はF8グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(175)×120cm、深さ40cmである。深鉢16の口唇部は押圧され、地文は斜行条痕文である。長竹式土器であろう。

SK31はG8・9グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は180×122cm、深さ34cmである。蓋17は中屋2~3式にあたり文様帯には赤彩が施される。

SK32はG9グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は(98)×90cm、深さ27cmである。深鉢18の口唇部は籠状具により押圧されている。長竹式土器である。

SK33はH8グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は138×(100)cm、深さ29cmである。

SK34はH9・10グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は144×103cm、深さ37cmである。深鉢19の口唇部は面取りぎみに長く押圧され、幅広の2条沈線と斜行条痕文がみられる。20の深鉢は破片がまとまった状態で検出したもので、遺存は1/3ほどである。口縁部が大きく内傾する器形で、口径314mm、胴径414mm、器高450mmである。長竹式後半期にあたろう。

SK35はG10グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は(165)×154cm、深さ45cmである。長竹式と思われる土器片がみられた。

SK36はH10グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は(103)×95cm、深さ47cmである。鉢21は折り返す口縁の内面に1条の沈線を施し、外面は同心重弧線文や刺突文がみられる。22は蓋またはコップ形になるもので、最上部以下の沈線は途切れている。赤彩は外面と内面の口縁から2cmほどに施されている。23はコップ形の器形になるもので、外面に赤彩が施される。21~23は松任市乾遺跡において類例が多くみられるもので長竹式後半期であろう。

SK37はI9グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は75×(50)cm、深さ22cmである。坑底に長さ38cmの石がみられる。浅鉢24は外面に楕円区画工字文、内面に降帯がめぐる長竹式土器である。

SK38はI7グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は120×(80)cm、深さ26cmである。

SK39はJ8グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は70×62cm、深さ22cmである。坑底に長さ30cmの石がみられる。25の鉢は口縁部が内傾し3条の平行沈線を施すもので、土器断面図の傾きは訂正を要する。

SK42はL8グリッドに位置する。規模は(110)×100cm、深さ26cmである。不整で底面に段をもつことから土坑2基の複合であろうか。浅鉢27は、口縁部に低い突起を有し、頂部には浅い刺突がある。幅広の平行沈線は突起の位置で途切れ降帯状となり、屈折部の突起は眼鏡状文か。長竹式土器である。

SK43はM7・8グリッドに位置する。不整な隅丸方形を呈する。規模は370×(340)cm、深さ28~53cmである。整穴状の遺構であるが、不整な平面形や坑底の起伏から遺構の複合を想定するも不明である。土器は覆土上層から出土している。28は低い波状口縁になる深鉢で、波頭部は押圧される。口縁部には横位の突帯が1条めぐるものであろう。深鉢30、浅鉢33・35の口唇部は長めの押しがみられ、鉢31の口唇部押しはやや深めである。以上は長竹式土器に比定されよう。また、第208図4の土偶が出土している。

SK48はK10グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(130×70)cm、深さ37cmである。深さ27cmほどの土坑と複合している。長竹式と考えられる土器片がみられた。

SK49はJ10グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(130×110)cm、深さ30cmである。36は口縁に幅広沈線による凹状突帯をもち一部で突起状となる長竹式の壺であろう。

SK53はK12グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は90×(65)cm、深さ32cmである。37は浮線網状文系の浅鉢で、土器断面図の傾きは、まだ30°程度立ちきみとなる。長竹式後半期に位置づけられよう。

SK54はI・J11グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は145×(110)cm、深さ35cmである。晩期と考えられる土器片がみられた。

SK56はH12グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は126×100cm、深さ48cmである。長竹式と考えられる土器片がみられた。

SK57はJ14グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は130×110cm、深さ48cmである。浅鉢38の浮線網状文系の文様は不明である。長竹式であろう。

SK58はI14グリッドに位置する。不整形で、規模は126×100cm、深さ34cmである。下野式以降と考えられる土器片がみられた。

SK61はF14グリッドに位置する。不整形で、規模は160×140cm、深さ19・20cmであり、土坑2基の複合であろう。

SK62はD14グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(265)×124cm、深さ24cmである。下野式以降と考えられる土器片がみられた。

2) 11区 SK63~70・72・73 (第189・190図、第194図39~47)

SK63はX4グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(185)×136cm、深さ31cmである。深鉢39は口縁内面が面取りされている。中屋3式土器か。

SK64はX4グリッドに位置する。略円形を呈し、規模は(140)×110cm、深さ55cmである。鉢40の文様は区画系工字文である。深鉢41は、多くの破片が出土した。口唇部は面取りによって外側に肥厚し、内面も条痕調整

される。40・41は長竹式土器である。

SK65はX4グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(215)×106cm、深さ25cmである。42は小形の土器で沈室内に赤彩痕がみられる。

SK66はX4グリッドに位置する。平面形は不明で、規模は7×(140)cm、深さ23cmである。深鉢43の口縁部は押圧後、棒状具による半沈線がみられる。中屋2～3式土器か。

SK67はX5グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(190)×100cm、深さ34cmである。

SK68はX5グリッドに位置する。楕円状を呈し、規模は(110×90)cm、深さ40cmである。

SK69はZ7グリッドに位置する。不整形で、規模は210×110～150cm、深さ14cmである。浅鉢44は、巻貝の殻頂突起がみられる井口1式土器である。推定口径313mmである。

SK70はA10グリッドに位置する。平面形や規模は不明、深さは12cmである。45の文様は区画系「」字文であるが器軸は鉢形であろう。

SK72はZ12グリッドに位置する。平面形は楕円状と推定するが、規模は不明である。深さは25cmである。46は振幅の大きい推定4波状の深鉢で、LR縄文地の胴部文様は平行沈線とこれを寸断する蛇行沈線がみられ、上部の屈折部を段状にする。東日本系の酒見式土器で加曾利B2式後半期に並行しよう。鉢47は口径124mmである。

SK73はA12グリッドに位置し、弥生末期の土坑と複合する。平面形は楕円状で、規模は(100×70)cm、内部に段があり深さは15・27cmである。

3) 15区 SK102・103 (第190図、第195～199図48～87)

SK102は15区北東部に位置する。楕円状を呈し、規模は(210)×95cm、深さ40cmである。深鉢48はLR縄文地に3条の平行沈線をもち、単位文は巻貝扇状圧痕文と円文である。注1土器49は沈線間の隆帯が2段めぐり、巻貝扇状圧痕文や沈線端部の側面押圧文をもつ。48・49・53～56は非L2式土器、50～52は御器塚式土器である。

SK103は15区北東部に位置する。隅丸三角形を呈しする整穴状の遺構で、規模は300×245cm、深さ22～26cmである。この土坑からは、後期中葉酒見式土器57～81と石器82～87が一括して出土した。土器は坑底から5cm前後浮き、その土器の上に礫が位置する状態であった。主な土器については第190図に土器番号で出土位置を示した。在地系の深鉢57は、約1/4の遺存で、ごく低い波状口縁になるが単位は不明である。文様は縄文帯による入組状文、弧線文をもち、弧線文の起点では円形の刺突がみられる。口縁部は充填するRL縄文、胴部はRL縦縄文である。推定口径470mmである。在地系の深鉢58の遺存は約1/3で、文様は縄文帯を2列の縦沈線で区切るものである。口縁部は充填するRL縄文、胴部はRL縦縄文である。口径389mm、推定器高380mmである。底部の網代圧痕は「1-1-1」で一部にもじり纏とみられる圧痕がある。59～61・70・71は西日本系の深鉢である。59は全周を復元できたものである。4単位の低い波状口縁で、口縁部は波頂部の下に逆C字状の突帯をもち2本沈線の面側にRL縄文を施し、胴部文様は連続する弧線文である。口径444mm、胴径321mmである。60の口縁部文様は59と同様のものである。しかし、59は充填縄文であるが60は磨消LR縄文となる。口径400mmである。波状口縁の深鉢61も口縁部文様は59・60に類似するが、沈線の両側は刻みが施され沈線端部に刺突文がみられる。70は隆帯に縄文が施される。胴部片の71は、細かい縦縄文を地文とし弧線内を磨消すもので、図は上下逆である。59・60・70・71は元住吉山1式の古段階に、61はその新段階に位置づけられている。62～65は沈線と無文帯と縄文帯を区画するもので、64・65は縦状縄文が施される。62は口径380mm、63は口径164mmである。69・72・73は注1土器で、69は口径96mmである。74～80は縄文・無文の深鉢と底部で、74は胴下半を無文とするもので、口径300mm、底径94mm、器高94mmである。78は口径264mm、底径72mm、器高257mmである。80・81の網代圧痕は「2-2-1」である。SK103の酒見式土器群は元住吉山1式・加曾利B3式に並行するものと考えたい。

82～84は円錐、85は平基の石鏝で、石質はいずれも輝石安山岩である。82は長さ25mm、推定幅17mm、厚さ4.1mm、重さ1.3g、83は長さ15mm、幅15mm、厚さ2.4mm、重さ0.4gである。84は長さ16mm、幅8.8mm、厚さ3.3mm、重さ0.3gである。85は長さ25.6mm、幅22.8mm、厚さ7.2mm、重さ3.6gである。石鏝86は長さ44.9mm、幅12.2mm、厚さ6.3mm、重さ3.1gで石質は輝石安山岩である。87は不定形の砥石状石器で、溝状の磨り面がいくつもみられる。石質は粗粒砂岩である。

4 河道・溝・ピット

1) 河道・溝 SD19・20・23 (第199~201図88~116)

SD19は5区東端に位置する自然河道で第1節の2を参照して頂きたい。88は凹線間が刻まれるもので井口1式の浅鉢、89は御経塚2~3式の深鉢胴部、外面が赤彩される蓋90と浅鉢91・92は中屋1式か。幅広い凹線を施す93の壺は外面と内面の上部2.5cmほどを赤彩するものである。94は区画系上字状文の浅鉢、浅鉢95は口縁直下の内外面に帯状の赤彩痕がみられ、その幅は外面が約3cm、内面は約2.5cmである。95は下野式、93~94・96~99は長竹式である。93・94は幅広い沈線も施すもので、94の上字状文は浮線式的である。

SD20は7区のU3・V3~V5グリッドに位置する浅い落込みで、幅は約4.5~6m、深さ10cm前後だが、続く他区の状態は不明である。100は中層2式の蓋で、101は長竹式の深鉢である。

SD23は6・7~8区に位置する自然河道で検出状況は第1節の2を参照して頂きたい。河道の黒色系粘質土からは104・110~112が、その下層の灰褐色粘質土からは103・106・107・109が出土した。また河道の右岸にあたる9区のQ9グリッド付近からは113・115・116が出土した。102・103の波状深鉢は井口2式土器である。102は口唇部に縄文を施し、唇具による刺突文をもつ。103は台形状の波状となり、口縁部の2条沈線の下には隆帯がめぐり、沈線の端部は押圧されている。深鉢104・105、注口土器106・鉢111は御経塚式土器である。深鉢107・鉢108は中屋2式土器で、107の口唇部は三角形形去と八字状沈線がみられ、108の口唇部は三角形形去で外面は赤彩される。深鉢109・壺110・114は下野式土器である。109の頸部以下には縦行ぎみの浅い条痕文がみられる。114の口唇部は八字状沈線で深く押圧される。浮線文系土器112、矢羽状文の113、深鉢114~116は長竹式土器である。116の遺存は1/3で口径363mmである。

2) ピット SP01~04・06 (第201図117~121)

SP01・02は1区、SP03は2区、SP04は10区、SP06は11区に位置する(第181図参照)。

壺117・鉢119は下野式土器である。117は沈線内を連続刺突する弧線文と区画文がみられ、117・118の外面は赤彩されている。深鉢120・121は中層2式土器である。

5 包含層出土土器

包含層からの土器は調査区別とし、おおむねの土器型式順に図版を作成した。遺物番号の横に括弧書きでグリッド名を表わし、ハイフンの次に土層名を入れた。東西に細長い1・2・6・10区では、主体となる「1」グリッドのみを使用している。上層の表記は、「BG」が暗褐色粘質土、「G」は灰褐色粘質土である。「BG1・BG2」など上層の次に数字を続けて表記する場合は同一層内の検出層を示し、大きい数字がその層内の下部になるものである。なお、粗製土器の多くは割愛している。

1) 1区 (第202図122~126)

鉢122の口縁部は1段のLr縄文地に3条の沈線文を施すもので中層2式土器。鉢123・124、深鉢125・126は下野式土器である。123は口唇部に沈線を引き低い突起をもつもので、内外面に赤彩痕がみられる。125は頸部に2条の沈線文が施される。126は頸部に沈線間が刻まれ縦行条痕文が施される。124~125は下野式前半期か。

2) 2区 (第202~204図127~166)

深鉢127は井口2式土器で西日本の高滝式に比定される。深鉢128・163、浅鉢129・130、蓋145は御経塚式土器で、129は内面の沈線上部に1段の細いLr縄文を施し、その部分と外面に赤彩痕がみられる。163は沈線間に竹管状工具による刺突文を施すもので波状口縁になろう。口縁部の内湾が強い鉢131は文様帯に赤彩痕がみられるもので、器形から御経塚式土器か。

鉢132・浅鉢133は中層1式土器である。132は口縁に四角形状の突起をもち、133は波状口縁となる。

134~144・146・147は中層2式土器である。深鉢134は方形入組文がみられるもので、口径312mm、胴径286mmである。深鉢135・136の口唇部は三角形の形去がみられ、135の口径は172mmである。鉢137は精緻なつくりで胴部凹形浮文には赤彩痕があり、底部は抉って凹底にする。口径166mm、胴径192mm、底径32mm、器高92mmである。小形の壺139は口縁部に環帯状の裝飾をもち胴部に入組三叉文を施すもので、底部は抉って凹底にする。口縁部

と胴部文様帯に赤彩痕がみられ、口径74mm、胴径114mm、底径7mm、器高148mmである。140～147は蓋で、外面の赤彩は140・141に認められる。143・146のつまみ部は三角形彫去がみられる。

148・149は中層3式、150は～161は中層3式米～下野式の所産であろう。148は口縁部が短い深鉢で胴部に鍵の手足を施し、縄文は1段のL縄文で口径265mmである。鉢149は口脣部に間隔をあけて八字状沈線がみられ、口縁部は赤彩される。150は頸部に刺突する貼付文を中心としたX字状の文様となろう。152は口脣部に小突起と胴部に横長のH字状文を施すもので、外面に赤彩痕がみられる。153の文様は「粗大な工字文」とされるものの変形であろう。154～160は鉢または浅鉢である。155は鍵手状沈線文が施され、外面は赤彩される。156・157は同一個体で文様は平行線化し、外面は赤彩される。158は蛇行沈線文とこれに沿う連続刺突文が施されるもので、細かいLR層消縄文をもつ。159は頂部が刺突される突起をもち内外面に赤彩痕がみられる。160は口径277mm、161は口脣部に間隔をあけて三角形彫去が施され、口径183mm、胴径172mmである。

162・164～166は長竹式に判断したものである。162・164は鉢で、165・166はコップ形の上器である。

3) 5区 (第205図167～196)

167は羽状縄文を施す酒見式の浅鉢である。波状口縁の深鉢168は、口脣部に縄文を施すもので、酒見一井口1式期の土器であろう。浅鉢169のB字状突起は6個を1単位とするもので、全部で4単位存在しよう。口縁部の縄文帯は赤彩され、口径は215mmである。中層2式の所産であろう。浅鉢170には連続するつ字状の変形変形文がみられ、外面は赤彩を施す。170・鉢171は中層3式から下野式土器であろう。172～196は長竹式に比定するものである。浅鉢172・173は口縁部に沈線、緩い屈折部に眼鏡状文をもつもので、内面には炭化物の付着がみられる。173は口縁部の沈線間を押圧しH字状文とする。浅鉢174は押圧される山形の突起をもち、胴部は楕円区画工字文である。浅鉢175は楕円区画工字文、浅鉢176・177はH字工字文、浅鉢178・179は浮線文を施す。コップ形土器182は欠羽状文を施すもので、口径64mm。浅鉢底部の183は菱形状区画を連続する文様であろう。184～187は蓋である。185は口縁の突帯に突起をもち、186の口脣部と突帯は幅広の工具で押圧される。187の列点指頭によるものであろう。188・190～196は深鉢である。188は2条沈線を口縁部と胴部に施す。口縁部の上下に1条の沈線を施す189は凸帯文系の浅鉢であろう。

4) 10区 (第206図197～208)

197は口縁部に方形組文を施す深鉢で中層1式か。内外面が赤彩される浅鉢202は中層2式である。199・200・203は中層2式で198・201は中層3式から下野式であろう。198は弧線文がみられる深鉢で口径144mmである。199・200の鉢は同一個体で口縁部内面と外面は赤彩される。※201の肩部の刻みには一對の粘土粒を貼付しており、肩部文様は雲形文系入組文か。浅鉢203の口脣部は八字状に刻まれ、外面は赤彩される。204～208は長竹式に判断した。204は突帯に2条沈線を施す凸帯文系の蓋である。205は浅鉢で工字文を施すものか。浅鉢206は内外面が赤彩される。

5) 11区 (第206・207図209～248)

深鉢209・210、浅鉢211は酒見式、深鉢212～214は八日市新保2式である。213の外面は赤彩が施される。深鉢215・216、浅鉢217・218、赤彩痕がみられる注口土器219は御経塚式である。羊歯状文をもつ深鉢220・221、口縁部に入組文がみられる深鉢223・224は中層1式であろう。三叉状入組文の鉢225・226、蓋238は中層2式である。227～237・239は中層3式～下野式土器である。深鉢227・229は鍵の手足を施すもので、229は口縁部が縦行条痕文、胴部文様帯は縄文、胴下半は横行条痕文となるもので、口径360mmである。228は口縁部に縦行条痕文を施し頸部以下には縄文がみられる。230～237は浅鉢である。230～231は大洞系の浅鉢で、雲形文系のつ字状文が施される。

浅鉢240～242・248、深鉢243～247は長竹式である。240の内外面は赤彩される。241の文様は楕円区画工字文であろう。248の外面は指頭による連続押圧文が施される。

6 土製品

土製品については、第208図に掲載したが、6の上鑊と思われる製品は縄文時代の所産ではないと考えられる。なお、器種、出土遺構、出土グリッド、層位、法量、備考等を下表に記した。

土製品における器種別の報告点数と()内で示す出土点数は、土偶5点(6点)、土製円盤5点(5点)で、出土合計点数は11点である。

土製品一覧表(208図)

図	番号	器種	区	出土遺構	グリッド等	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	時期	
208	1	土偶	2区		K1	BG1	(39)	(36)	22		胴部片		
	2	土偶	2区		L1	BG	(27)	(33)	(19)		胴部片		
	3	土偶	5区		J7	BG	(86)	(75)	23		頸部(右)、耳部円孔	長竹か	
	4	土偶	5区	SK43	M7	下層	(48)	(37)	(10)		胴部片	長竹か	
	5	土偶	11区	SD26	X10	下層	(49)	(56)	(13)		胴部片、赤彩痕		
	6	上鑊か	11区		B2	S2	25	23	25	14.6	縄文期ではない		
	7	土製円盤	3区	SD19	A9-14	下層	BG	31	30	4	6.2	輪製円孔径2	
	8	土製円盤	11区	SK66	X1			44	25	8			無文
	9	土製円盤	11区		Y3	S2		50	45	6	20.3	条痕文	
	10	土製円盤	11区	SD26	73			45	43	7	16.4	条痕文、スス付着	
	11	土製円盤	11区		X3	S2		30	24	4	4.7	無文円孔未貫通	
	12	土製円盤	11区		X8			63	25	7	(13.4)	条痕文、スス付着	

7 石器

石器については、実測図を第209～212図に掲載したが、石製品内の第213図69は石剣転用の石匙とした。器種、出土遺構、出土グリッド、層位、法量、分類、備考、石質、遺存率を下表に記した。石器の分類は第3章ブナラシ地区の石器を参照願いたい。

石器の器種別の報告点数と()内で示す出土点数は、打製石斧3点(520点)、磨製石斧13点(30点)、敲石0点(66点)、磨石0点(58点)、石皿1点(42点)、砥石10点(42点)、擦切用石器2点(3点)、石錘13点(16点)、石鏃15点(57点)、石錐6点(13点)、石匙1点(1点)、削器3点(7点)で、出土合計点数は845点である。

打製石斧は刃部が幅広となるものの代表的なものを図示した。520点のうち完形またはほぼ完形のは、120点である。敲石・磨石については、形態等がブナラシ地区と同様なため割愛した。

石器一覧表(第199・209～213図)

図	番号	器種	区	出土遺構	グリッド等	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考	石質	遺存率	
199	82	石鏃	13区	SK103			25.0	(17.0)	4.1	(1.3)	A1	凹基無茎	フリント	90%	
	83	石鏃	13区	SK103			(15.0)	(15.0)	2.4	(0.4)	A1	凹基無茎	フリント	70%	
	84	石鏃	13区	SK103			16.0	8.8	3.3	(0.3)	A1	凹基無茎	フリント	95%	
	85	石鏃	13区	SK103			(25.6)	22.8	7.2	(3.6)	A2	平基無茎	フリント	97%	
	86	石鏃	13区	SK103			(44.9)	12.2	6.3	(3.1)	A1a	両端尖、棒状	輝石山石	95%	
	87	敲石	13区	SK103			85	65	30	(115)	I F	有溝、不定形	砂岩	90%	
	209	1	打製石斧	5区	ビット	F10		196	111	35	>60	II 3B	楕形、内刃	火山礫質灰岩	100%
		2	打製石斧	6区	SD23	T1		119	104	23	(237)	II 3B	楕形	火山礫質灰岩	97%
		3	打製石斧	11区	カクラン	X8		110	93	22	185	II 3B	楕形	凝灰岩	100%
		4	磨製石斧	2区		K1	BG1	(63)	71	28	(170)	A1	定角大	凝灰岩	40%
5		磨製石斧	5区		E12	BG	115	52	31	(260)	A1	定角大	凝灰岩	95%	
6		磨製石斧	2区		K1	BG1	(111)	55	35	(345)	A1	定角大	砂岩	90%	
7		磨製石斧	2区		M1	BG	(98)	52	25	(163)	A1	定角大	凝灰岩	80%	
8		磨製石斧	2区		K1	BG1	(77)	40	16	(62)	A2	定角中	緑色凝灰岩	80%	
9		磨製石斧	11区	カクラン	X8		(73)	41	23	(105)	A2	定角中	緑色凝灰岩	95%	
10		磨製石斧	5区		H6	BG	(83)	52	21	(128)	A2	定角中	凝灰岩	90%	
11		磨製石斧	10区		I 1	BG1	(33)	24	8	(8.6)	A4	定角小	凝灰岩	80%	
12		磨製石斧	11区		Y5	S2	(87)	59	(38)	(214)	A1	定角大	緑色凝灰岩	40%	
13		磨製石斧	2区		H1	BG1	(86)	53	26	(160)	A1	定角大	凝灰岩	75%	
14		磨製石斧	3区	SD19	A9	DBG	(120)	50	24	(705)	A1	定角大	砂岩	95%	
15		磨製石斧	3区		H7	BG	112	33	20	103	A2	定角中	緑色凝灰岩	100%	
16		磨製石斧	11区		X2	S2	(92)	48	37	(177)	B2	乳棒中、側面磨	凝灰岩	90%	
17		石皿	11区	SD25	A2		(310)	(171)	60	3500	I B	有縁、縁口、両面使用	緑色凝灰岩	30%	

四	番号	岩種	区	色・造像	ツグ等	形状	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	分類	備考	石質	遺存率	
210	18	礫石	11区	SD26	Y7	中層	121	101	27	491	II C	無溝、楕円形	砂岩	100%	
	19	礫石	7区		不明	S3	(94)	(139)	33.5	(682)	I YC	縁溝、楕円形	砂岩	50%	
	20	礫石	3区		F6	BG	205	91	41	(1150)	I YA	縁溝、長楕円形	砂岩	90%	
	21	礫石	5区		A4	B	(63)	89	40.5	(381)	II C	無溝、楕円形	砂岩(粗粒)	50%	
	22	礫石	11区	SD23	Y9		123	64	28	360	I A	有溝、長楕円形	砂岩	100%	
	23	礫石	11区		Z4	S3	106	43.5	29	176	I B	有溝、長楕円形	緑色凝灰岩	100%	
	24	横切開石巻	2区		II	BG	(45)	80	(11)	(40)		直刃	砂岩	40%	
	25	横切開石巻	2区		II	BG	(48)	56	(6.5)	(29)		両刃	砂岩	30%	
	26	石錐	11区	SD21	X5		61	(31)	10	(25)	BI	切目、扇形	頁岩	70%	
	27	石錐	3区		G11	BG	112	93	38	570	AI	打欠・縁、線形	緑色凝灰岩	100%	
	28	石錐	3区		G11	BG	102	81	27	331	AI	打欠・縁、線形	緑色凝灰岩	100%	
	29	石錐	3区		G11	BG	94	73	19	200	AI	打欠・縁、不定形、線形	砂岩	100%	
	30	石錐	3区	ビット	G11		84	79	25	240	AI	打欠・縁、線形	凝灰岩	100%	
	31	石錐	5区	ビット	G11		80	65	27	202	AI	打欠・縁、線形	火山凝灰岩	100%	
	32	石錐	9区	SD23	東岸前南		58	25.5	14.5	30	AI	打欠・縁、線形	砂岩	100%	
	33	石錐	11区	SD26	X10		67	144	42	476	C2	縁打側面有溝、長、線形	砂岩	100%	
	34	石錐	5区		J7	BG	57	109	50	425	C1	縁打有溝、線形	安山岩	100%	
	35	石錐	11区	SD26	Y7	上層	47	85	39	205	C1	縁打有溝、線形	火山凝灰岩	100%	
	36	石錐	8区	SD23		砂層	42	(111)	31	(203)	C1	縁打有溝、線形	火山凝灰岩	97%	
	37	石錐	1区		G1	BG	104	39	35	211	C1	縁打有溝、不定形、線形	緑色凝灰岩	100%	
	38	礫石	2区		K1	BG1	81	36	28.5	(95)	IV G	定形、短冊形、被蝕	砂岩	40%	
	39	礫石	3区		E7	BG	114	50	44	(396)	IV G	定形、短冊形、被蝕	砂岩	40%	
	40	礫石	11区		A76	S3	105	41	34.5	(216)	IV G	定形、短冊形	緑色凝灰岩	30%	
	212	41	石錐	5区		L7	BG	23.0	15.5	3.0	(0.7)	AI	凹基無茎	輝石安山岩	97%
		42	石錐	5区	SD19			26.0	17.0	3.5	0.95	AI	凹基無茎	輝石安山岩	100%
43		石錐	2区		K1	BG1	27.5	16.0	3.0	1.1	AI	凹基無茎	フリント	100%	
44		石錐	2区		K1	BG1	24.5	(17.5)	4.0	(1.0)	AI	凹基無茎	フリント	97%	
45		石錐	5区		G8	BG1	31.5	(17.0)	5.0	(2.2)	AI	凹基無茎	輝石安山岩	97%	
46		石錐	2区		J1	BG1	(39.0)	(15.0)	3.0	(1.2)	AI	凹基無茎	輝石安山岩	95%	
47		石錐	5区	オチコミ	N6	B	(24.0)	17.5	5.0	(1.6)	AI	凹基無茎	輝石安山岩	97%	
48		石錐	5区	SR43	L-M7	上層	(40.0)	(10.5)	3.5	(1.6)	AI	凹基無茎	輝石安山岩	97%	
49		石錐	11区		X4	S2	(35.0)	14.5	6.0	(2.1)	AI	凹基無茎	輝石安山岩	95%	
50		石錐	11区		44	S2	16.0	11.5	4.0	0.6	AI	凹基無茎	フリント	100%	
51		石錐	3区		K7	BG	(28.0)	15.5	7.0	(2.2)	AI	凹基無茎	珪化凝灰岩	97%	
52		石錐	3区		L7	BG	(46.5)	12.0	6.0	(4.0)	A1a	両端尖、棒状	フリント	97%	
53		石錐	11区		X4	S2	37.5	10.0	4.5	2.0	A1a	両端尖、棒状	フリント	100%	
54		石錐	11区	ビット	X6		41.0	(13.0)	5.0	(2.8)	A2	金体加工	輝石安山岩	95%	
55		石錐	3区		K7	BG	(33.0)	25.5	6.5	(5.15)	B2	頭部未加工、有頸棒状	フリント	97%	
56	石錐	2区		K1	BG1	29.0	(15)	5.0	(1.7)	B2	頭部未加工、有頸棒状	フリント	90%		
57	割器	11区		A72		29.5	(35.5)	6.5	(7.2)			フリント	85%		
58	割器	5区		K7	BG	23.5	(32.5)	6.0	(7.25)			フリント	90%		
59	割器	2区		J1	BG2	27.0	(19)	5.5	(2.9)			フリント	95%		
213	69	石錐	5区		K7	BG	95	25	12	(43)	錐形	刃部内生	緑色片岩	95%	

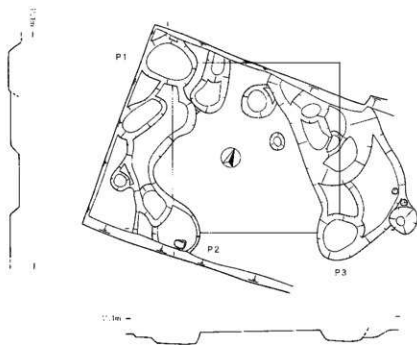
8 石製品

石製品については、実測図を第213～214図に掲載したが、第213図69は石剣転用の石匙とし石器で報告した。器種、出土遺構、出土グリッド、層位、法量、分類、備考、石質、遺存率を下表に記した。

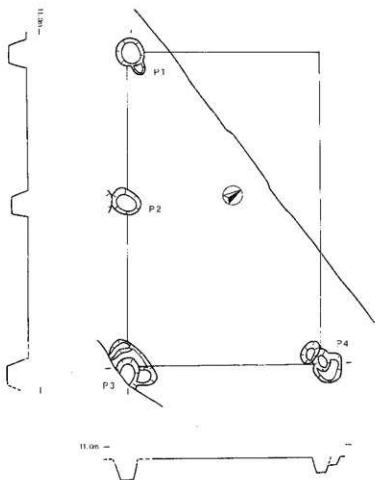
石製品の器種別の報告点数と()内以示出土点数は、石冠5点(7点)、石棒8点(14点)、石剣0点(4点)、石刀4点(18点)、岩版1点(1点)で、出土合計点数は44点である。

石製品一覧表(第213～214図)

図	番号	器種	区	出土遺構	出土地点	層位等	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	備考	石質	遺存率
213	60	石棒	2区		K1	BG1	(117)	40	39	(250)	有頭、熱	緑色凝灰岩	50%
	61	石棒	11区		Y6	S-3	(104)	42	(32)	(205)	有頭、被熱	緑色片岩	20%
	62	石棒	11区		X2	S-2	(71)	32	24	(65)	有頭	凝灰岩	20%
	63	石棒	5区		I6	BG	(68)	46	37	(138)		緑色凝灰岩	10%
	64	石棒	10区	ビット	Z1		(58)	(33)	(12)	(22)		凝灰岩	5%
	65	石刀	5区		K1	BG1	(75)	35	(17)	(60)	割刃	粘板岩	20%
	66	石刀	5区	ビット	R8	BG	(211)	48	26	(384)	被熱	緑色片岩	60%
	67	石刀	2区		I1	BG1	(108)	32	19	(75)		泥岩	30%
	68	石刀	5区		I6	BG	(170)	34	27	(70)	被熱	緑色凝灰岩	20%
	70	石棒	11区	SD26	X10	上層	(142)	102	50	(950)	被熱	凝灰岩	20%
	71	石棒	11区		Y5		(250)	115	112	(3540)	被熱	凝灰岩	30%
214	72	石冠	1-5区		R8-G1	BG	114	41	86	275	亀頭状頭部	緑色凝灰岩	100%
	73	石冠	5区		M7	BG	64	46	(65)	(122)	亀頭状頭部、被熱	砂岩	80%
	74	石冠	8区	SD21			88	39	70.5	(300)	頭部變形	緑色凝灰岩	95%
	75	石冠	7区	SD20	V4		66	62	55	240	極長形基部、被熱	凝灰岩	100%
	76	石冠	3区		A4	B	(131)	41	81	(770)	短筒形、被熱	砂岩	40%
	77	石棒	9区	SD23		東岸北	(340)	70	33	(1270)	未製品か 一部割打痕あり	凝灰岩	60%
	78	石冠	7区	SD20	U3		(104)	(65)	84	(860)	極長形	凝灰岩	20%
	79	石冠	5区		E6	BG	(65)	37.5	64	(149)	石籠形、被熱	角閃石玄山岩	20%
	80	岩版	11区		X9	S-3	(40)	(17)	(19)	(46)	三叉文	凝灰岩	10%

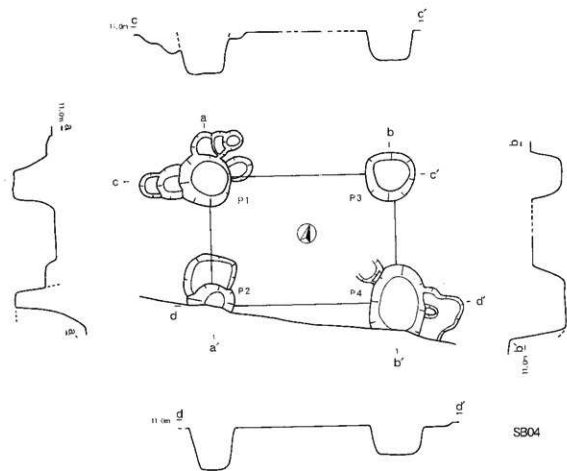


SB01

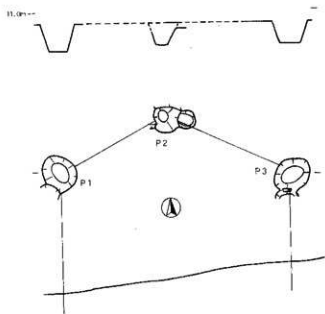


SB02

第182図 SB01・02遺構図 (1/60)



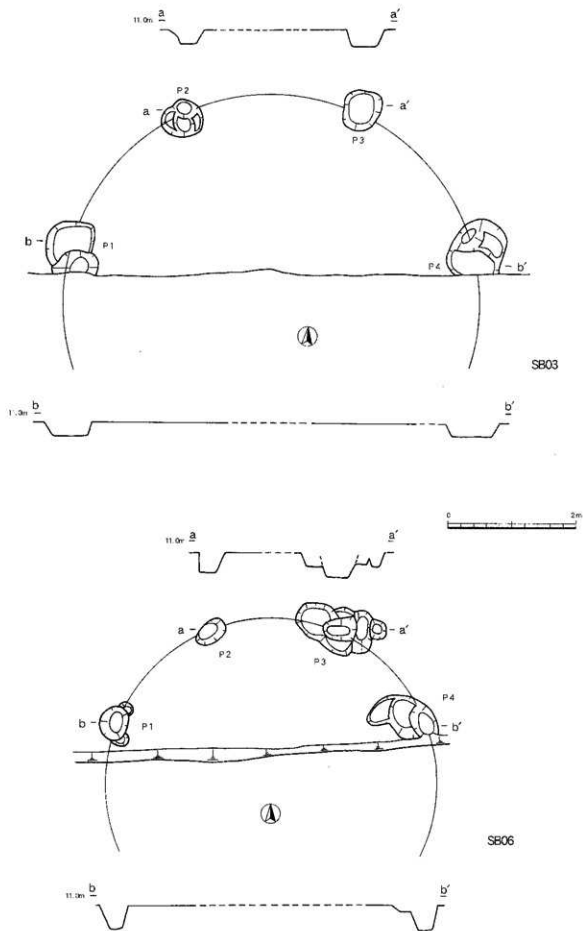
SB04



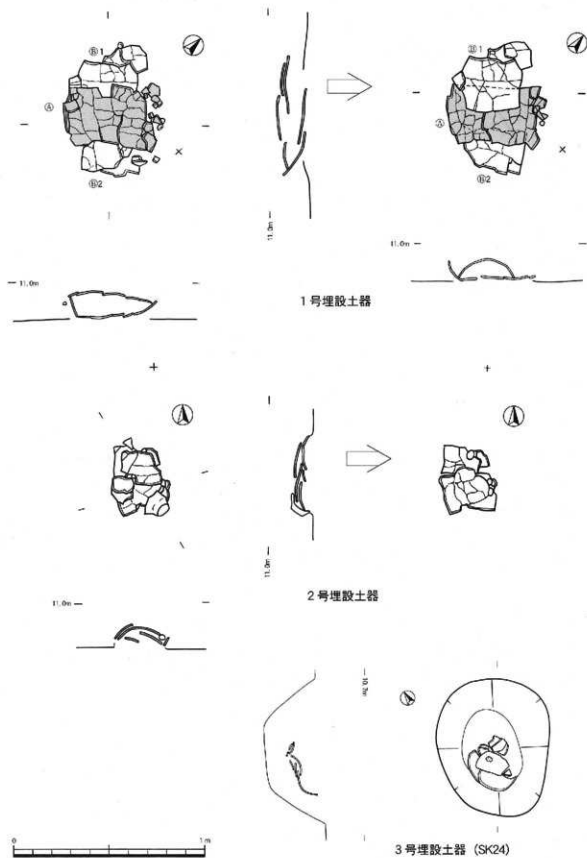
SB05



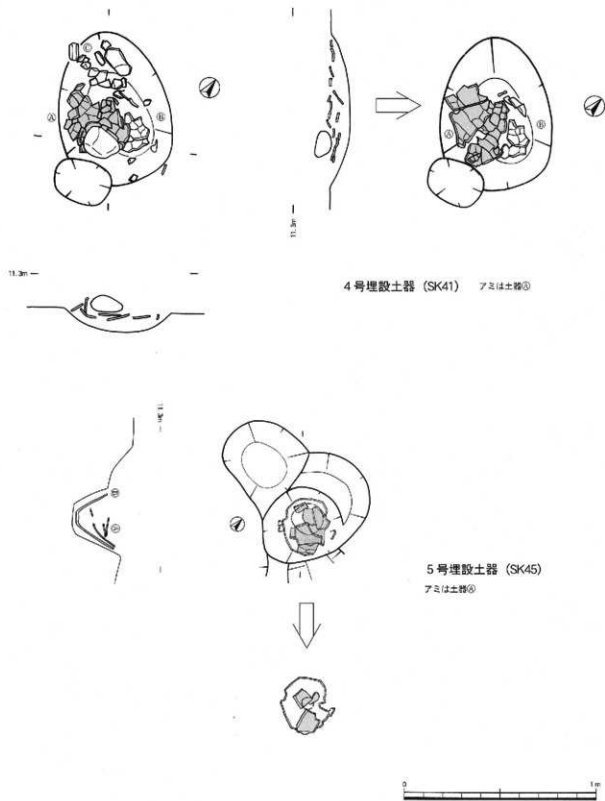
第183図 SB04・05遺構図 (1/60)



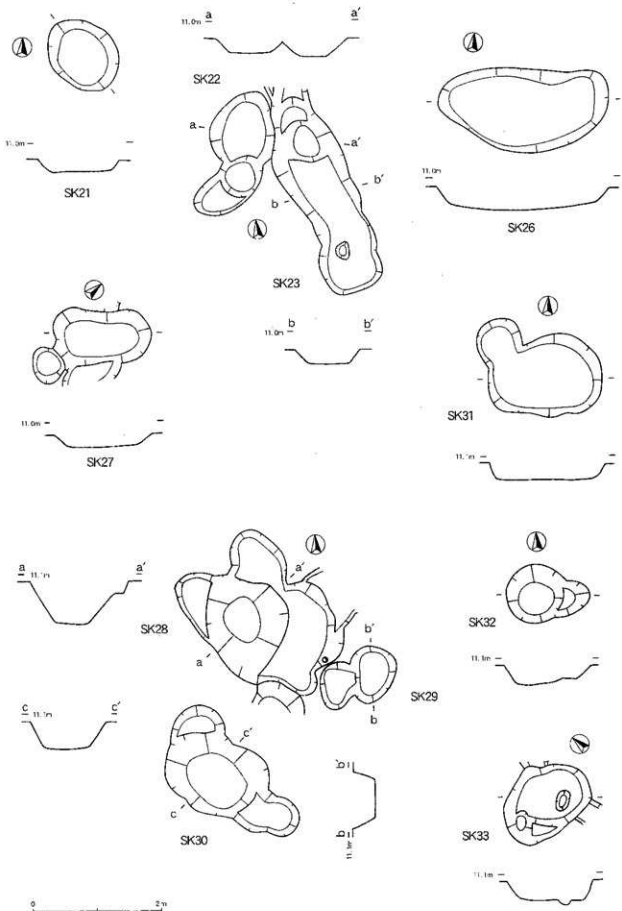
第184図 SB03・06遺構図 (1/60)



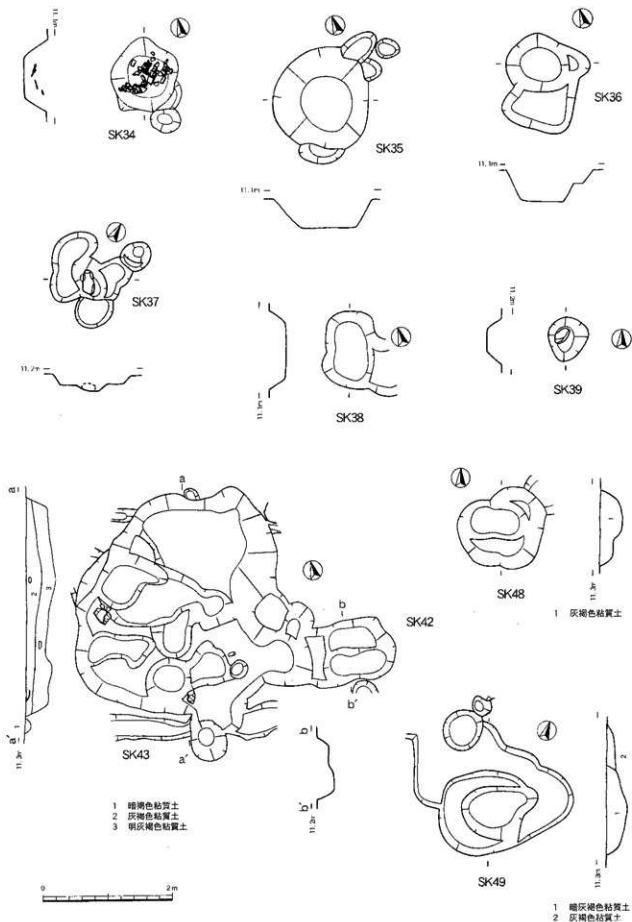
第185图 1号~3号埋設土器 (1/20)



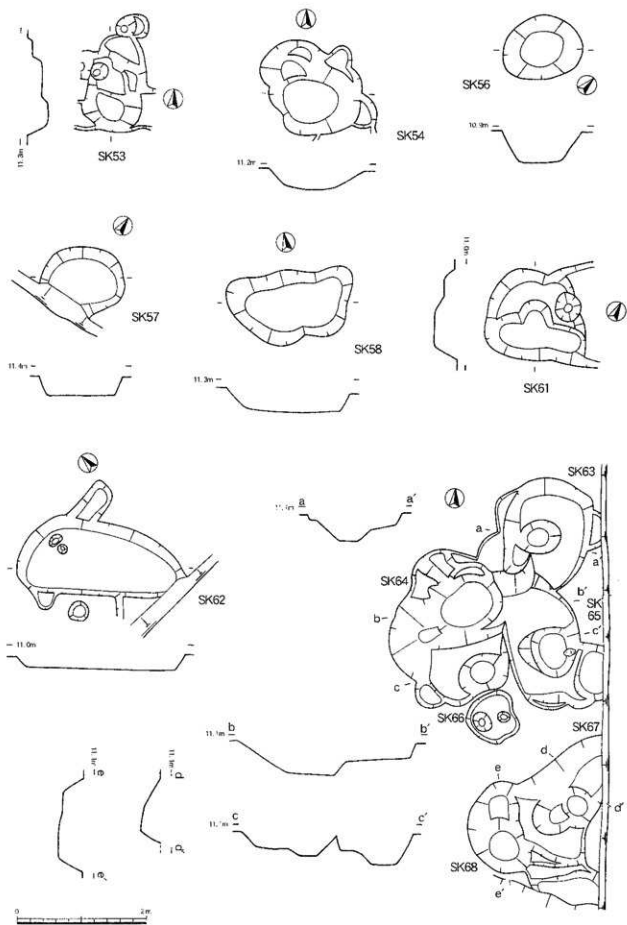
第186図 4号・5号埋設土器 (1/20)



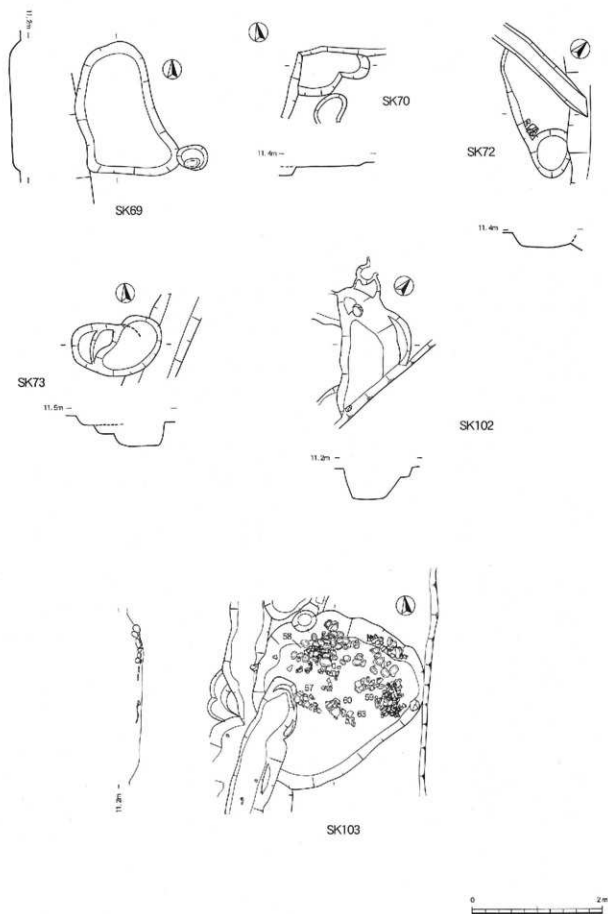
第187図 SK21~23・26~33遺構図 (1/60)



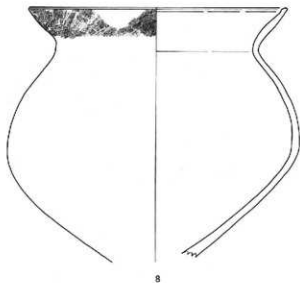
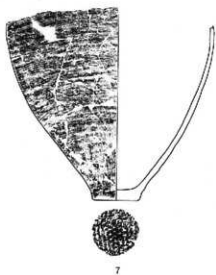
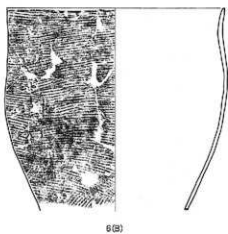
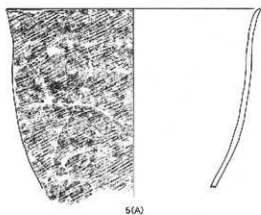
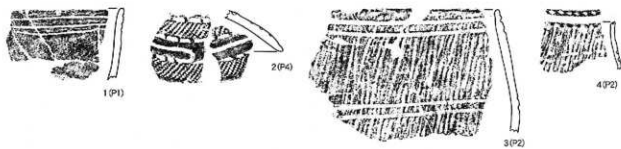
第188図 SK34~39・42・43・48・49遺構図 (1/50)



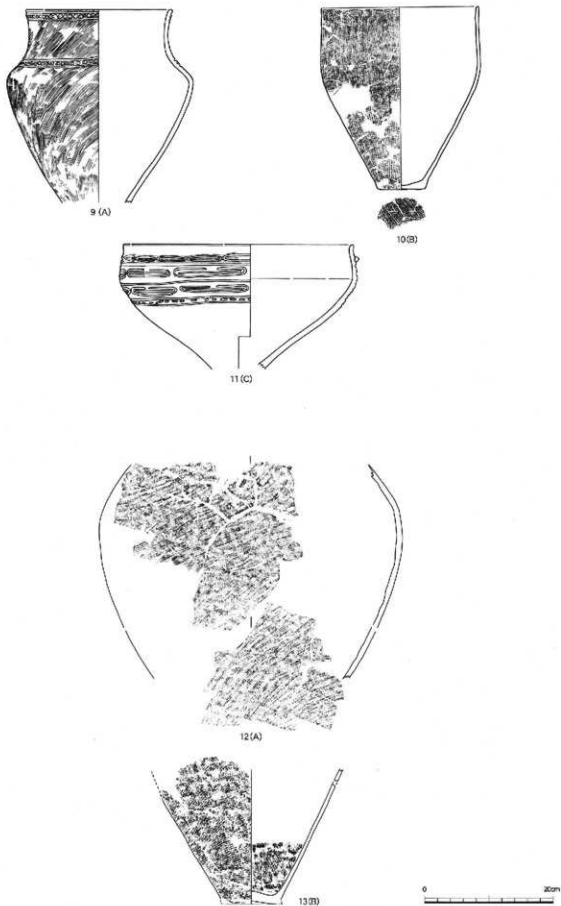
第189図 SK53・54・56~58・61~68遺構図 (1/60)



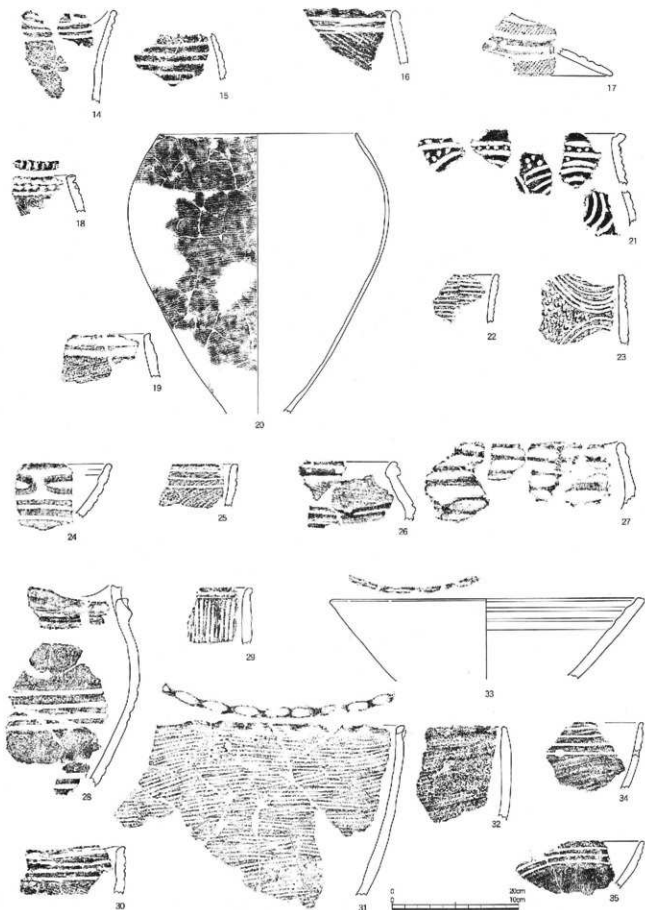
第190図 SK69・70・72・73・102・103遺構図 (1/60)



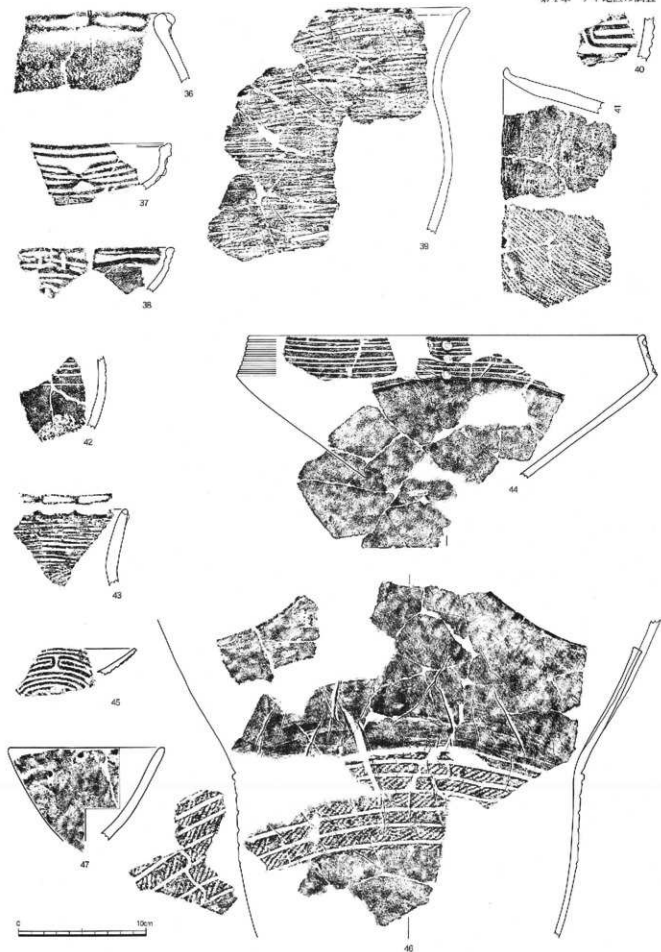
第191図 SB04 (1~4) 出土土器 (1/3)、1号 (5・6)・2号 (7)・3号 (8) 埋設土器 (1/6 8:1/3)



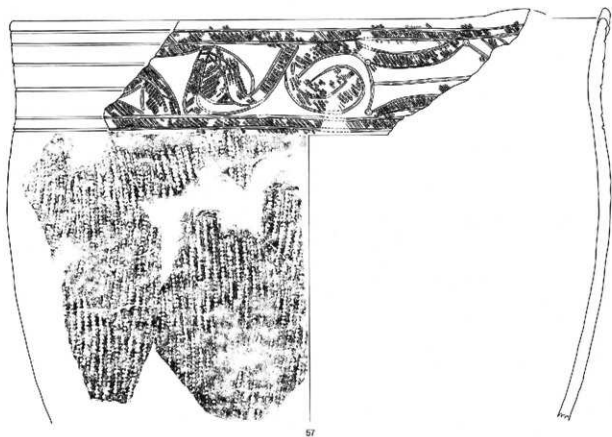
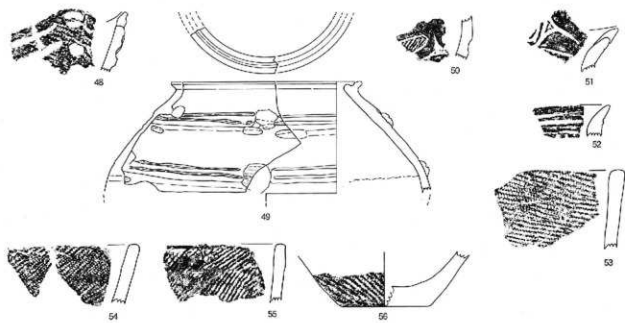
第192図 4号(9~11)・5号(12・13)埋設土器(1/6)



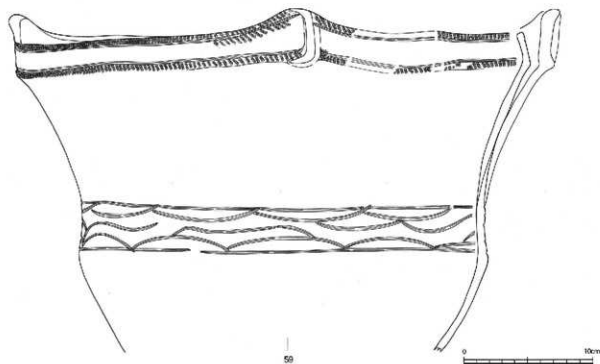
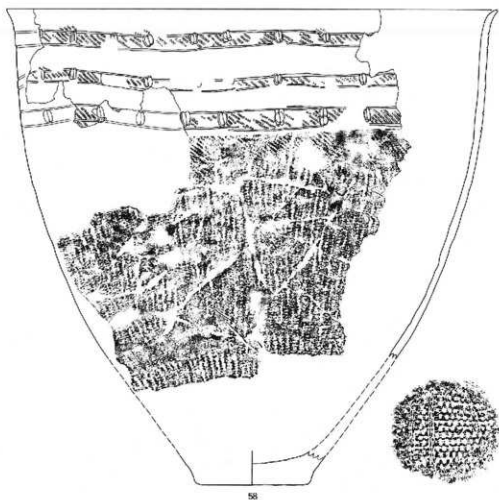
第193図 SK29 (14・15)・SK30 (16)・SK31 (17)・SK32 (18)・SK34 (19・20)・SK36 (21~23)・SK37 (24)
 ・SK39 (25)・SK42 (26・27)・SK43 (28~35) 出土土器 (1/3 20:1/6)



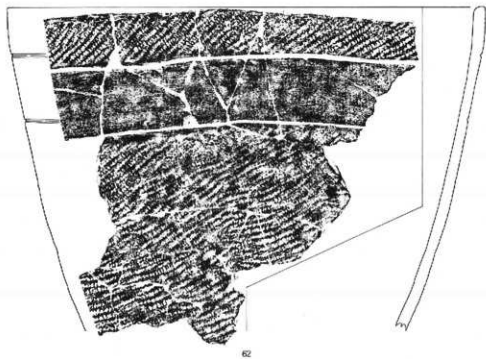
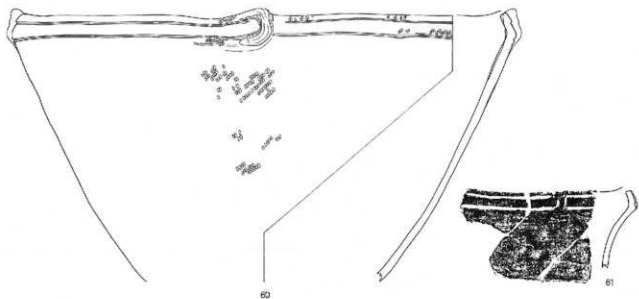
第194図 SK49 (36)・SK53 (37)・SK57 (38)・SK63 (39)・SK64 (40・41)・SK65 (42)・SK66 (43)・SK69 (44)・SK70 (45)・SK72 (46・47) 出土土器 (1/3)



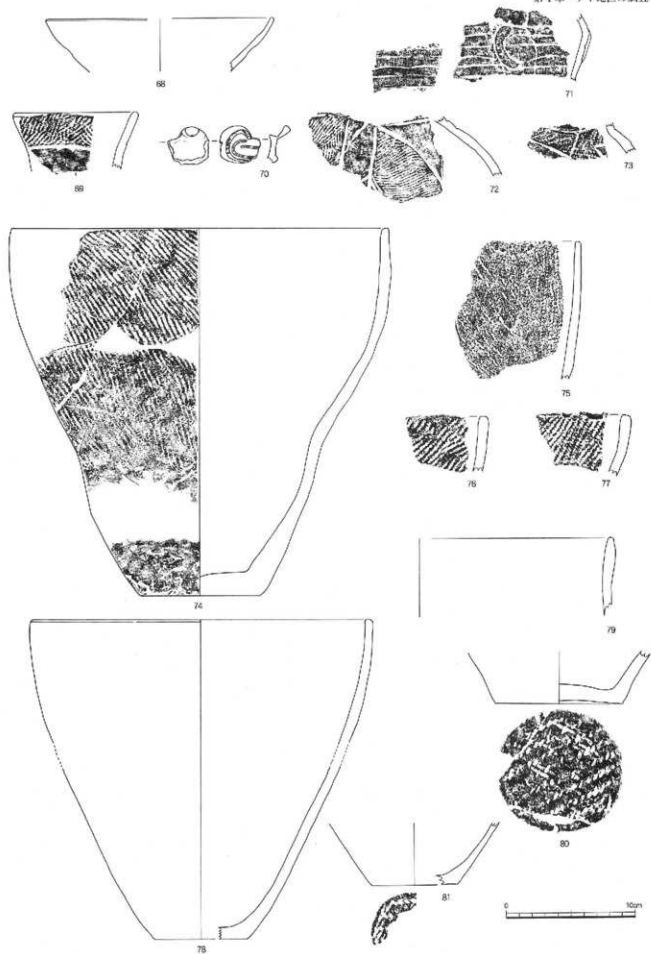
第195図 SK102 (48~56)・SK103 (57) 出土土器 (1/3)



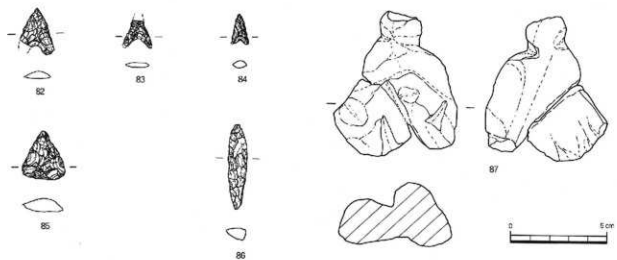
第196図 SK103 (58・59) 出土土器 (1/3)



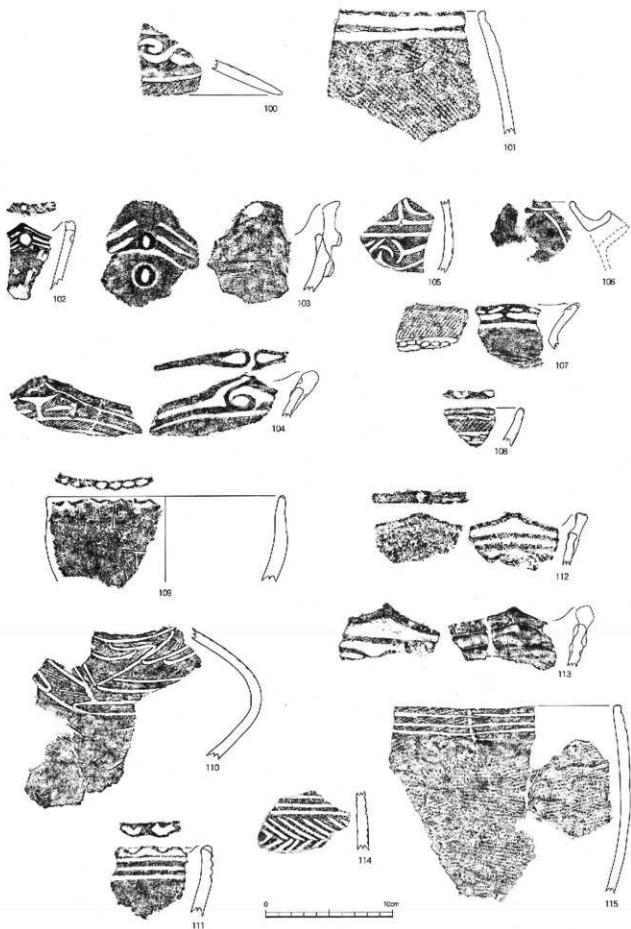
第197图 SK103 (60~67) 出土土器 (1/3)



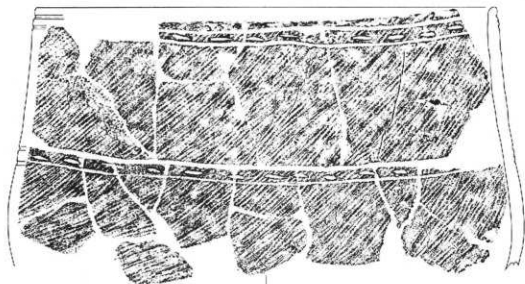
第198圖 SK103 (68~81) 出土土器 (1/3)



第199圖 SK103 (82~87) 出土石器 (1/2)・SD19 (88~99) 出土石器 (1/3)



第200図 SD20 (100・101)・SD23 (102~115) 出土土器 (1/3)



116



117



118



119



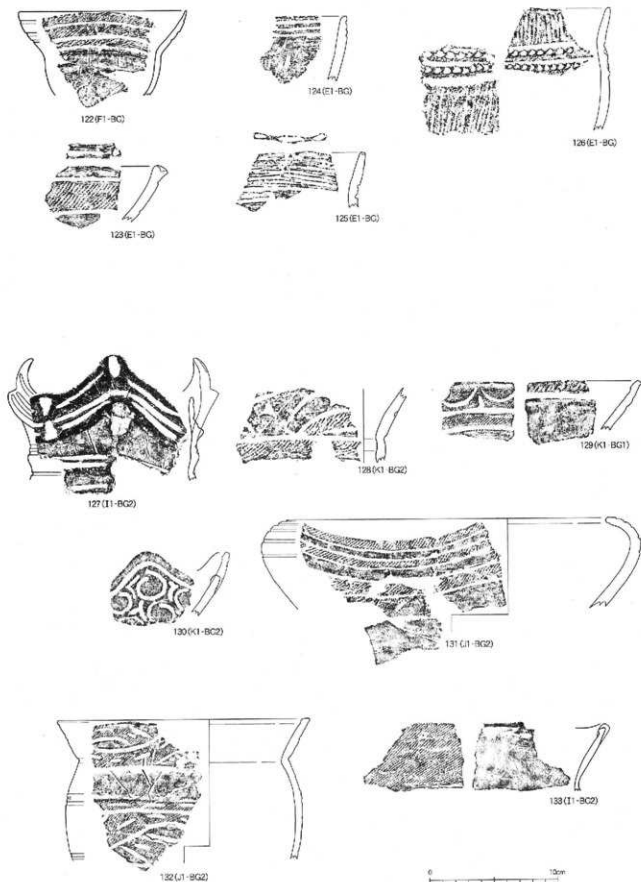
120



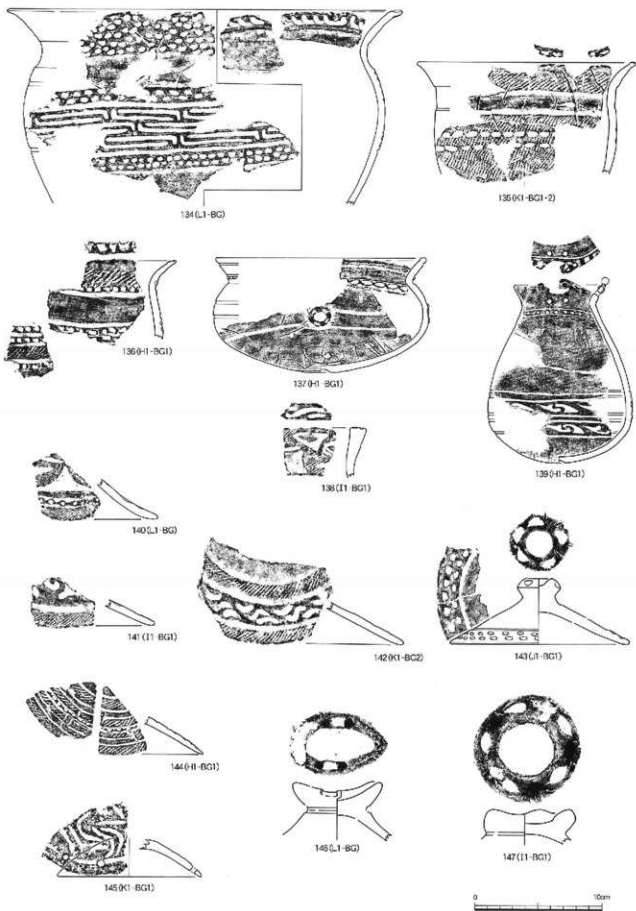
121



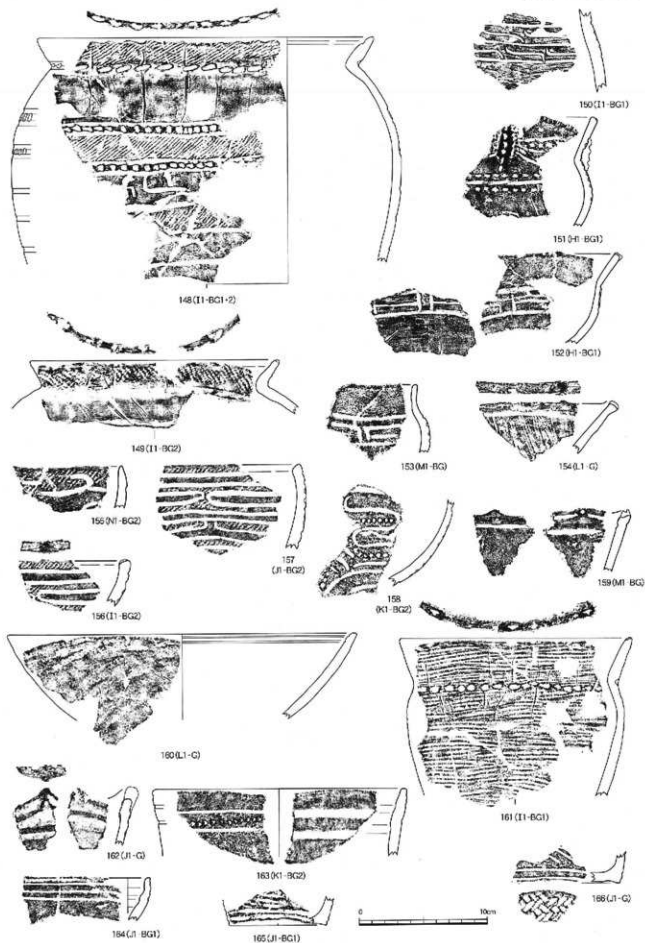
第201图 SD23 (116) · SP01 (117) · SP02 (118) · SP03 (119) · SP04 (120) · SP06 (121) 出土土器 (1/3)



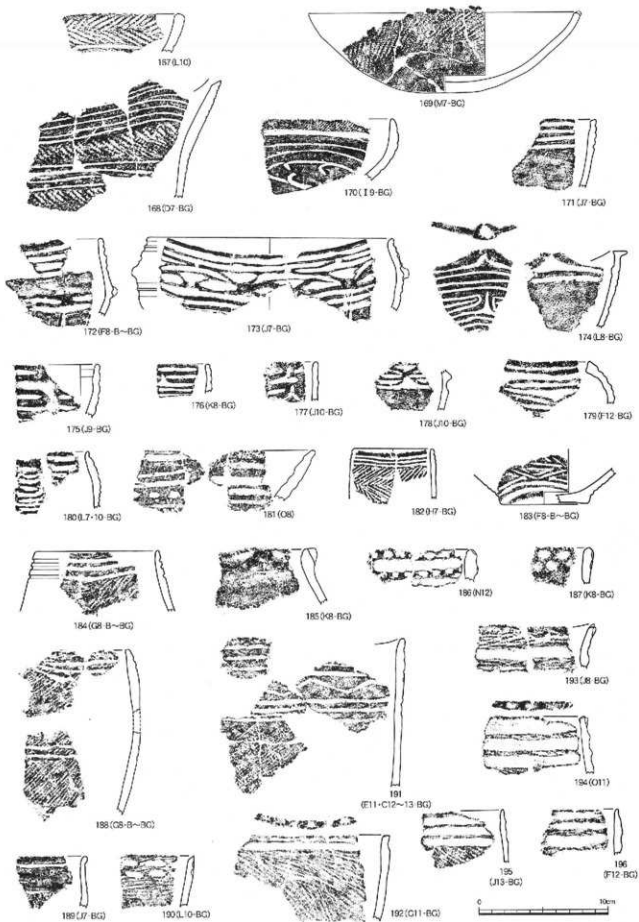
第202図 1区 (122~126)・2区 (127~132) 包含層出土土器 (1/3)



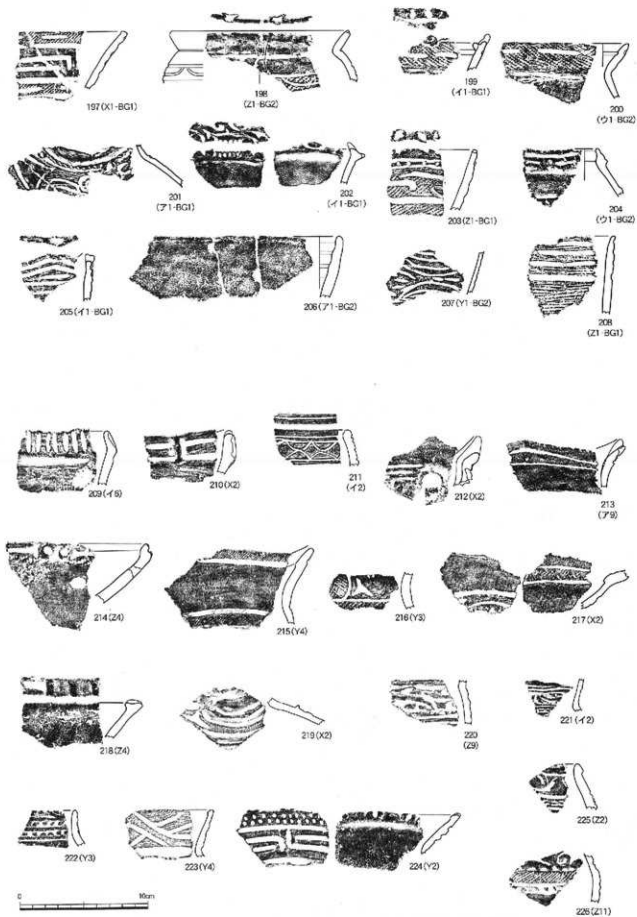
第203图 2区(134~147)包含层出土器(1/3)



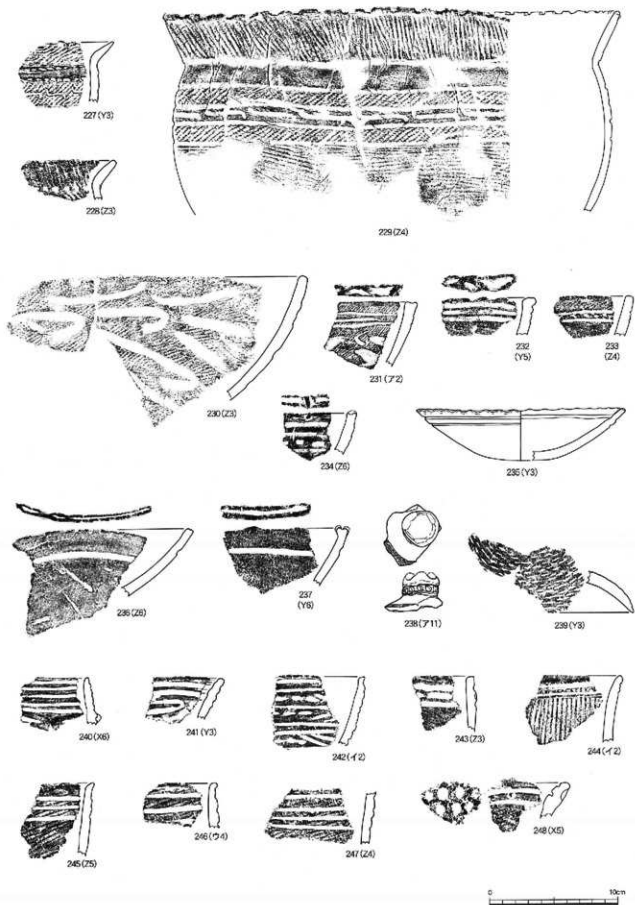
第204図 2区 (148~166) 包含層出土土器 (1/3)



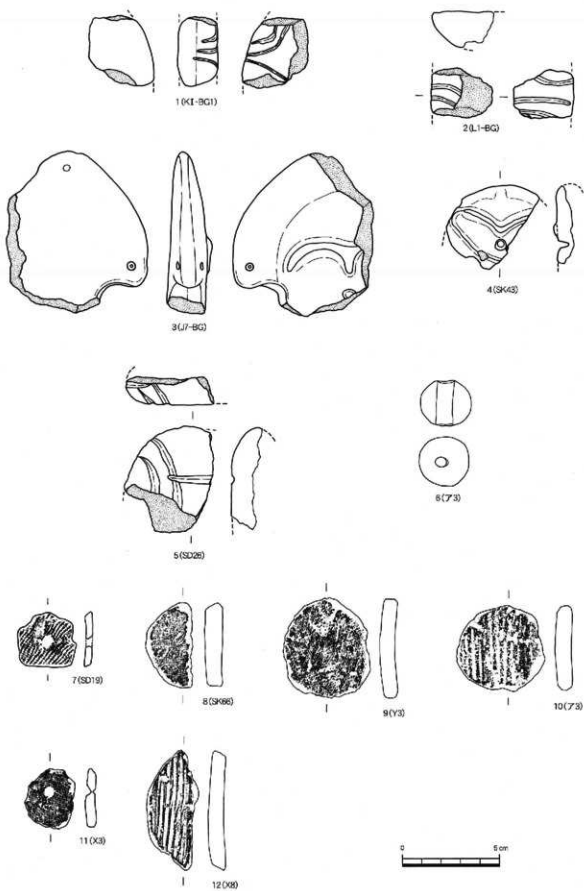
第205图 5区(167~196)包含层出土土器(1/3)



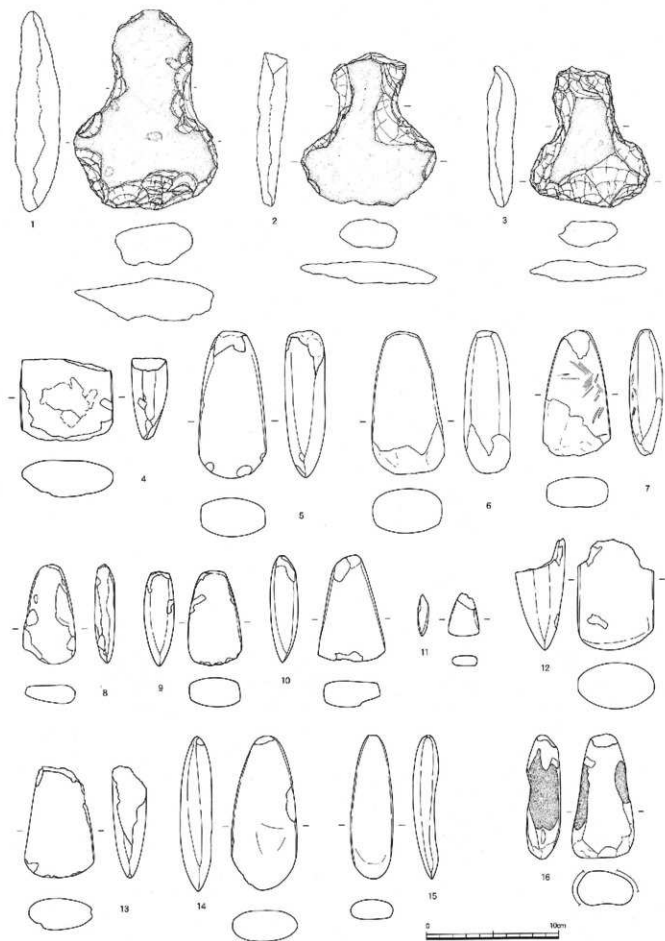
第206図 10区 (197~208)・11区 (209~226) 包含層出土土器 (1/3)



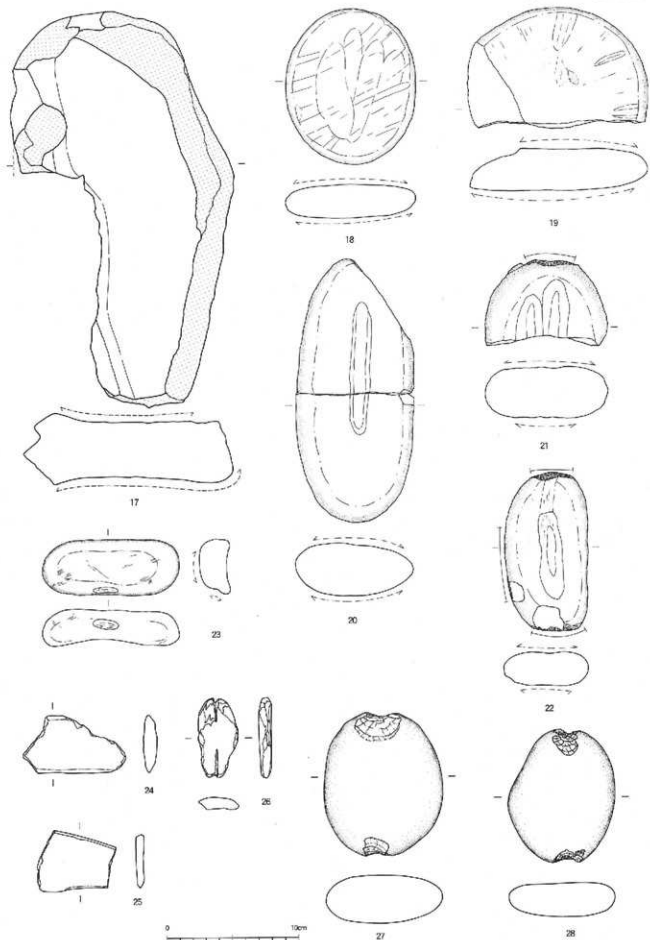
第207图 11区 (227~248) 包含层出土器 (1/3)



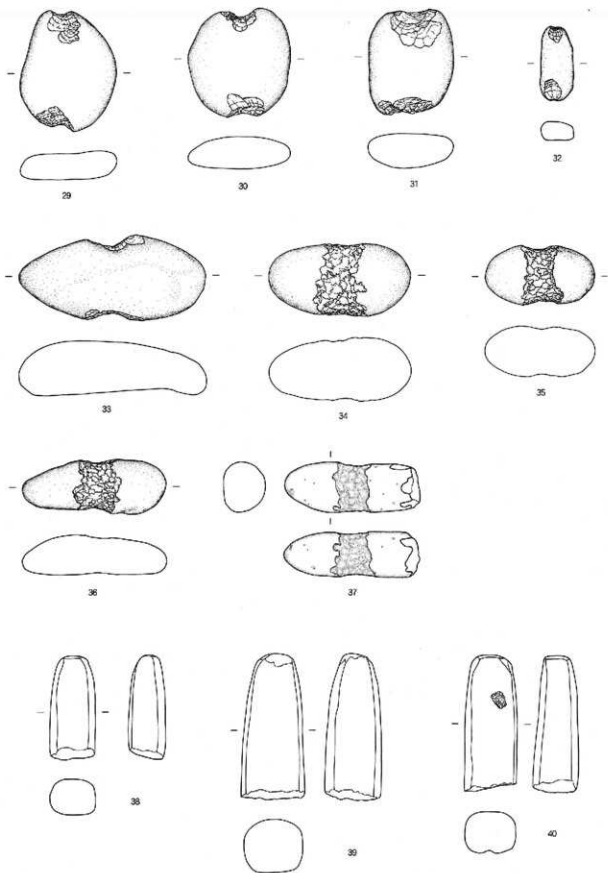
第208図 土製品実測図 (1/2)



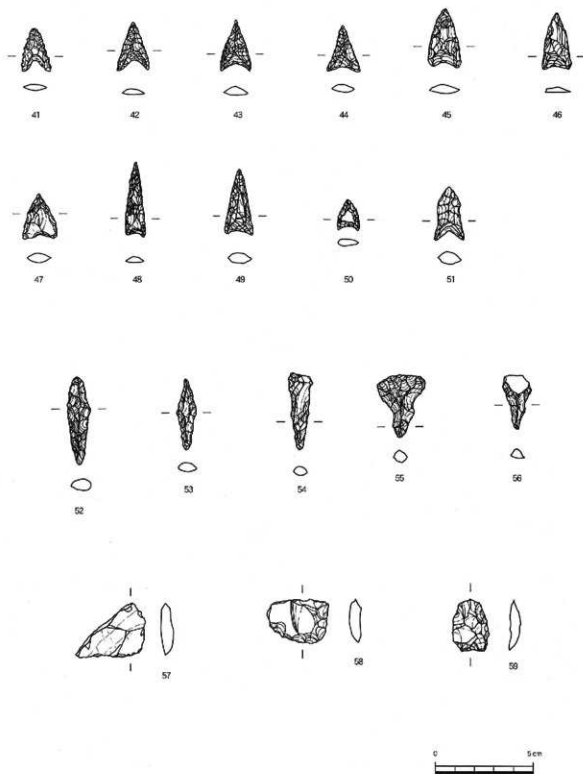
第209圖 石器 1 (1/3)



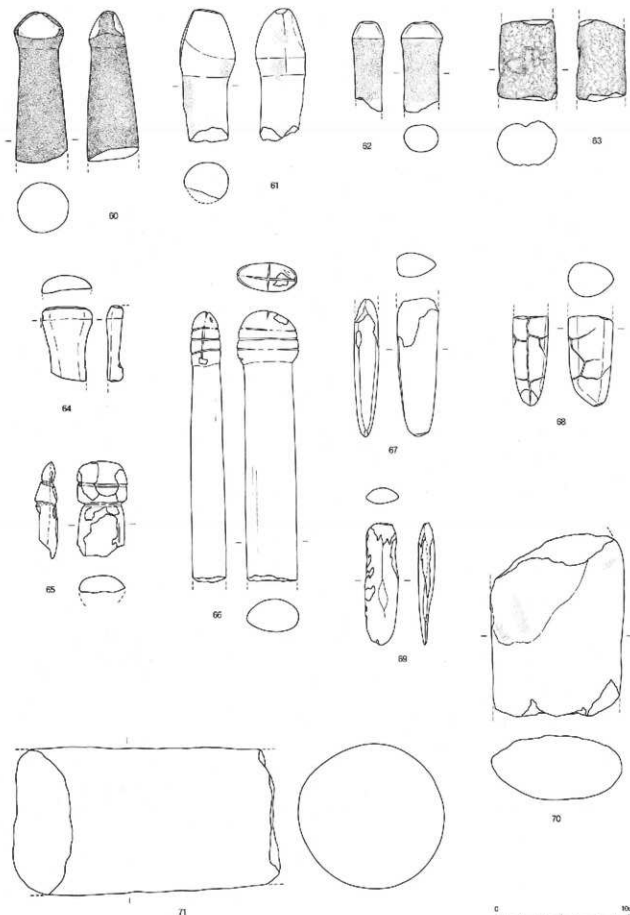
第210図 石器2 (1/3)



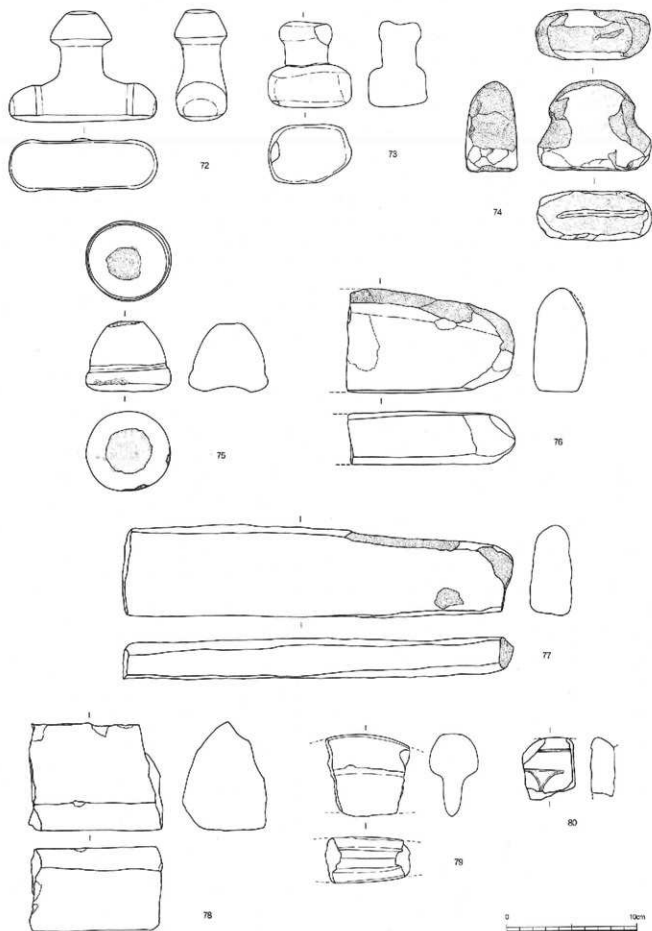
第211圖 石器 3 (1/3)



第212図 石器4 (1/2)



第213圖 石製品1 (1/3)



第214図 石製品2 (1/3)

第3節 弥生時代～古墳時代初頭

弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落跡が主体時期となり、特大型の2棟を含む竪穴建物(SI)10棟、掘立柱建物(SB)2棟をはじめ土坑(SK)や溝(SD)を検出している。遺構の多くは自然河道SD23の西側の微高地に展開するもので、その東側では3区(報告は後日の予定)に掘立柱建物1棟と区画溝が存在するにすぎない。西側の分布域は、御経塚町の既存宅地と複合するため当該期の全容は不明であるが、竪穴建物や掘立柱建物の存在する可能性は高いものである。地山の標高は11区から西へ向かって徐々に高くなっていくが、竪穴建物の遺存は後世の削平のため良好とは言えず、その壁高は低いものであった。

また、北東方向250～300mの距離をおく国道8号線東側のツカダ地区において、終末期～古墳時代前期の集落が展開しており、竪穴建物13棟、布瓠方式の掘立柱建物1棟が確認されている(野々市町教委1984・1989)。

なお、少量の柴山出村式土器が出土しているが、当期の遺構は不明である。弥生時代終末期～古墳時代初頭の出土遺物については遺物一覧表を参照して頂きたい。

1 前期の土器

7・11・12・14区の限られた範囲から出土した(第225図1～12)。後代の遺構に混入して出土した1・2・10・12のほかは包含層からのものである。

1は壺の肩部破片で押圧を連続する突帯をもち、2は条痕文系の甕(深鉢)で波状文が施される。これらは東海地方の影響が強いものである。3～11は在地系の土器である。内外面とも条痕調整し、指頭による平行沈線文がみられるものは3・5～8・10の甕(深鉢)で、3・10は細波状口縁となる。4は細波状口縁となる甕(深鉢)である。12は指頭による連続押圧文と平行沈線文・斜行沈線文が施され、巻貝の殻頂によるものと推定する小さな押圧文もみられる甕(深鉢)である。11は指頭による波状文が施されるもので、L縁部に径3mmの貫通穴が15mm間隔で2穴ある。外面には赤彩痕がみられる。器種は鉢か。1は柴山出村1式に、他は同2式に比定されよう。

2 竪穴建物

竪穴建物10棟(建替えを含めると12棟)は自然河道SD23西方の微高地上に分布し、かつ北北西方向の溝SD26の西側に位置する。建物の複合関係はSI02・03、SI08・09の2例がみられる。

平面形が円形または多角形状で主柱5本以上の建物はSI02・03c・10の3棟である。平面形が隅丸方形で主柱4本の建物はSI03a・03b・05?・06・08・09の6棟である。平面形が隅丸方形で主柱2本の建物はSI04の1棟である。また、主柱が不明のSI01と詳細不明のSI07がある。

床面積の規模では、30㎡以下の小型建物はSI01・04・05・08・09の5棟で、このうち10㎡代となるものはSI01・04・05である。31～50㎡の中型建物はSI03a～c・06である。51㎡～100㎡前後の建物はみられず、180㎡前後となる特大型のSI02・10が存在する。両者とも、金沢市類谷遺跡で検出された特大型SI1を超える規模である(安1998)。

外周溝が認められるものはSI02・03・05の3棟であるが、SI04については判断できない。その全体を窺い知ることのできるSI02・03の外周溝は、竪穴部をおおむね囲むものである。SI05では竪穴部の1/2～1/3ほどを囲んでいる。外周溝は、地形的に標高の高い建物の西方側に設けられ、開口部は東または南南東方向となるもので、雨水の竪穴浸入を防ぐ排水溝と推察できよう。

出土地点が判明する遺物については、各遺構平面図上に遺物番号を入れ位置を示した。

SI01(第216図・第226図1)

11区のほぼ中央に位置する小型の竪穴で、壁溝の確認から建物に判断したものである。中世の溝と近世の井戸に切られている。平面形は隅丸方形で、長辺推定3.3m、短辺3.05m、推定床面積は約10㎡である。壁高は46cmで、一部で幅10～15cm、深さ5cm前後の壁溝を検出した。柱穴及び炉跡は認められなかった。遺物は少量の土器

小片が覆土から出土した。

SI02 (第217図・第226～227図2～40)・SD38～40 (第218図・第227～230図41～89)

11区と14区で検出した特大型の建物で、外周溝SD39・40を有し、複合するSI03に先行する。竪穴の平面形は楕円状に近い多角形を呈し、その規模は長径16.4m、短径14.5m、推定床面積は約189㎡である。竪穴の東側で多角形の角部を確認できるが、西側ははっきりしない。主柱穴は、竪穴のほぼ角部の壁から1.7～2.0mの位置でP1～P8を検出したが、楕円状に配置される主柱数は9本であろう。その間隔は、P1～2が3.9m、P2～3が4.6m、P3～4が4.9m、P4～5が4.3m、P5～6が3.7m、P6～7が3.5m、P7～8が4.5mである。主柱穴は略円形で規模は径50～70cm、深さ40～50cmのものが多い。また、中央部にP9・10が位置し、ほぼ直線に並ぶP8とP11によって竪穴を2分するような柱穴配置がみられ、P8～9間3.1m、P9～10間5.9m、P10～11間5.3mを測る。壁高は5～10cmほどで、幅20～40cm、深さ10cm前後の壁溝が認められるが、確認できない箇所もある。伊跡は認められなかった。

土器は、床面から10・12、ほぼ床面から27・30、南西側の壁溝から5・6・9・14・18・21・35、北側の壁溝から11・19・22・31が出土し、覆土からは2～4・7・8・13・15～17・20・21・23～26・28・29・32～34・36・37である。打製石斧38・39、勾玉40は覆土からの出土である。

SD40は竪穴の壁から外側に3.0～4.5mの間隔をとりながら楕円状に廻る外周溝で、東側に開口部をもつ。開口部の幅は後代の大型土坑によって不明であるが、5m以内と考えられる。規模は溝の外側で長径27.0m、短径24.6mとなり、その内側の占有面積は約133㎡である。溝の幅は一定ではなく0.4～2.1mの範囲内であるが、1m前後の部分が多い。溝底の標高は、開口部にあたる溝の端部が深く、10.90～11.00mを測り、西側が高い傾向をみせるが一定ではなく、最も高いところは11.24mであった。検出面からの深さは4～48cmである。

土器は④地点付近から、46・56・57・62・64・77が出土した。SD39の分岐付近に集中した土器廃棄がみられた⑧地点では、41～45・47・51・55・58～61・63・65・68・70・73～79が出土している。開口部付近にあたる⑨地点からの出土は、48・49・50・72である。

SD39は外周溝SD40の北東部から分岐し東の方向へ延びる溝で、河道跡SD23への排水機能が考えられる。幅1.0～1.2mを測り、溝底の標高は徐々に東側が低くなるもので、その標高は分岐部で11.04m、検出できた東端部では10.95mを測る。

SD38はSD40に切られる溝である。流路はSD40に繋がる状況で検出した溝であるが、SI02に関連するものかは不明である。幅は1.5～1.8m、深さ11～22cmである。土器80～87が出土した。

SI03 (第216図・第230～231図90～112)・SD49 (第218図・第231～232図113～133)

11区で検出した中型の建物で外周溝SD49を有し、複合するSI02が先行する。竪穴は壁溝の状況から2回の建替えが認められるもので、順にSI03a、SI03b、SI03cとする。1回目は当初の隅丸方形の平面形を拡張し(a→b)、2回目は隅丸方形から五角形の平面形に拡張している(b→c)。

SI03cは隅丸五角形で、一辺は約4m、長軸7.6m、短軸6.8m、床面積は約42㎡を測る。主柱穴P1～P5を検出し、その間隔は、P1～2が2.1m、P2～3が2.6m、P3～4が2.4m、P4～5が2.7m、P5～1が2.6mである。上面に炭化物がみられたP9が伊跡と考えられる。

SI03aは隅丸方形を呈し、推定規模は約5×6m、床面積は約33㎡である。SI03bは隅丸方形を呈し、推定規模は約6.5×6.5m、床面積は約38㎡である。SI03aとSI03bの主柱穴は重複しP2・P3・P8・P7の一部、貯蔵穴は二段掘りのP6と推察している。主柱間隔は2.4～2.5mである。

遺物は、貼床内および床面の下から92・104・107、覆土から90・91・93～103・106・109～112、P4から108、P6から105が出土した。

SD49は竪穴の壁から外側に2.8～4.0mの間隔をとりながら略円状に廻る外周溝で、南南東側は幅7.1mの開口部となって途切れる。規模は溝の外側で長軸16.2m、短軸14.8mとなり、その内側の占有面積は約152㎡である。溝の幅は一定ではなく0.4～1.0mの範囲内であるが、0.6m前後の部分が多い。溝底の標高の多くは11.23m前後で、北東部がやや低く11.17mであった。検出面からの深さは8～20cmである。

遺物は①地点付近から120・124・126・132、②地点付近から118・122・125・131、SI02と複合する③地点付近から115～117・121・123、④地点付近から119・128・130、⑤地点付近から113・114・127・129・133が出土した。

SI04 (第219図・第232図134～136)

I2区で検出した小型の建物である。削平のため竪穴の壁は残存していない。平面形はいびつな隅丸方形で、長軸4.3m、短軸3.9m、床面積は約15㎡である。壁溝は幅20～40cm、深さ10cm前後であり、壁溝と重なるP1・P2を主柱穴に推定した。東南辺の中央で壁溝に接し、二段掘りのP3がみられる。P3の2段目は楕円形で、規模は65×55cmである。床面からの深さは1段目が6cm、2段目は16cmである。遺物は、床面から134・136、壁溝から135が出土した。

この建物の西側を囲むようにSD62・63がみられるが、外周溝との判断はつきかねるものである。

SI05 (第219図)・SD87 (第219図・第232図137)

I5区の南側において約1/2を検出した建物で、半円状と推定される外周溝SD87を有する。竪穴の壁は削平のため残存していない。平面形は隅丸方形と考えられ、確認できる一辺は3.9m、推定の床面積は15㎡ほどであろうか。壁溝は幅20～40cm、深さ10cm前後である。主柱穴P1・P2を検出し、柱間は1.2mである。4本主柱の竪穴であろう。出土遺物は皆無であった。

SD87は自然河道SD88が埋った後に掘削された半円状の溝で、開口する弦線の長さは9.5mを測る。建物からは2.0～3.0mの間隔をとる。幅は30～75cmであり、深さは4～10cmである。装飾器台137が溝の北側から出土した。

SI06 (第220図・第233～237図138～200)

20区の中央部で検出した中型の竪穴で、炭化材や焼土の検出から焼失建物と考えられる。中央部は南北の木田暗渠排水により掘削されている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸7.0m、短軸6.7m、床面積は約43㎡である。壁の残存高は30cm前後、壁溝は幅10～15cm、深さ6～10cmである。壁から約60cm内側に壁溝状の溝がみられるが、前段階の壁溝かは不明である。主柱穴は、P1～P4の4個で、その間隔は、P1～2とP2～3は3.7m、P3～4が3.8m、P4～1が3.6mである。主柱穴は、段部を除く深い部分は略円形で、規模は径25～35cm、深さ36～49cmである。南側の主柱穴P3～4間に、2段掘りのP5とP6が認められ貯蔵穴と考えられるが、先後関係は不明である。深さは、P5の1段目が9cmほどで2段目は51cm、P6は35cm前後である。炉跡については不明である。

竪穴の下層から炭化材・物と焼土を検出している。これらは、竪穴の範囲を十字に4分割すると、北東部の1/4を除く範囲で多く認められ、とくに南壁付近には炭化材の集中がみられた。また、焼土は炭化材の上面において多く確認されている。炭化物と焼土は、床面と床面から高さ10cm以内で検出されている。

覆土の状況から出土遺物は、上層出土と下層出土に大別でき、下層ではさらに床面上の遺物が抽出できる。出土状況でのほぼ床面は、床面から3cmほど浮く状態で検出したものである。遺物は、P6から155、床面下から146、床面から142・165・166・171・173・181・185～187、出土高は床面と同じであるが壁溝上から156・167・178・192・197、ほぼ床面から154・157・158・176・180、覆土下層から141～143・145・147・148・150・160・161・163・164・168・172・174・175・177・179・189・190・193・194・195・198・200、覆土上層から140・144・149・151～153・162・169・182～184・191・199、覆土の上層と下層から139・159が出土した。また、昭和期の暗渠排水溝からの138・188・196を図示した。

SI07 (第222図・第238図201～205)

20区の南側において約1/4を検出した建物で、SI06と同様に炭化材や焼土の検出から焼失建物と考えられる。平面形は隅丸方形で、SI06を超えない規模と考えられる。壁溝は9～15cmが残存し、壁溝は幅18～30cm、深さ6～9cmである。主柱穴P1は段部をもち、略円形の柱穴部は60×60cm、深さ52cmである。炭化材と焼土はほぼ床面上で検出し、P1内の炭化材の高さは床面よりやや低い状況であった。

遺物は、覆土下層から同一個体の201・202、床面から203、壁溝から204・205が出土した。

SI08 (第221図・第238図206)

14区において検出した建物で、複合する SI09が先行する。平面形は垂んだ隅丸方形であるが、その隅丸の径は小さなものである。規模は長軸5.4m、短軸5.1m、床面積は約27㎡である。壁の残存高は12cm前後、壁溝は幅10～20cm、深さ10cm前後である。主柱穴はP1～P4で、その長方形配置は歪みが大きく東側に偏っている。間隔は、P1～2が2.35m、P2～3が2.0m、P3～4が2.1m、P4～1が1.6mである。主柱穴は略円形で、規模は径35cmほど、深さ37～47cmである。東側の主柱穴P3～4間に、2段掘りの貯蔵穴P5が認められる。炉跡は不明である。土器の出土量は僅かで、覆土出土の206の図示にとどまる。

SI09 (第221図・第238図207～209)

14区において検出した建物で、複合する SI08に先行する。平面形は台形ぎみとなる隅丸方形で、その規模は長軸5.4m、短軸4.0～5.0m、床面積は約25㎡である。壁の残存高は20cm前後、壁溝は幅15～25cm、深さ10cmである。主柱穴はP6～P9で、その間隔は、P6～7が1.85m、P7～8が2.3m、P8～9が1.9m、P9～1が2.25mである。主柱穴は略円形で、規模は径30～40cm、深さ16～25cmである。東側の主柱穴P7～8間に、2段掘りの貯蔵穴P10が認められる。炉跡は不明である。北東隅で自然石の集石と土器の胎上と考えられる黄白色の強粘質土を検出している。土器の出土量は少量で、207～209は覆土出土である。

SI10 (第222図・第238図210～212)

18区において約1/3を検出した特大型の建物である。わずかに残存する壁溝から、円形の平面形を推定する。その規模は東方15mに位置する特大型のSI02に匹敵し、主柱数は8ないし9本で平面径が15mほど、床面積約170㎡前後の建物と考えられる。途切れながら残る壁溝は、幅20～35cmの深さ4cmである。P1～P4を主柱穴に、土坑状のP5を付属遺構に判断した。主柱穴は壁溝外側から2.0～2.3mの間を取り、その間隔は、P1～2が3.2m、P2～3が3.2m、P3～4が4.0mである。主柱穴は、略円形で規模は径45～55cm、深さ26～33cmである。土器は、壁溝から210・211、P5から212が出土した。

3 掘立柱建物

SB23 (第223図)

10区において検出し、溝SD26から約4m離れ桁行方向は流路に平行する。桁行2間4.4m(柱穴間2.0・2.4m)、梁行1間4.0m、面積は17.6㎡、主軸方位はN21°W、梁長/桁長は0.91である。柱穴は略円形で大きさはばらつき、径は40～80cm内、深さは42～46cmである。柱穴から遺物はみられず時期は不明であるが、柱穴埋上の状況と、弥生時代終末期の土器片が包含層より出土したことから本期で扱った。

4 土坑

SK91・96・97・136・143 (第223図、第238・239図213～218)

上坑は5基確認した。集中するものではないが堅穴建物間に分布するものが多く、SK96・97は隣接し軸をほぼ同じ方向にしている。

SK91は13区に位置し楕円形を呈する。土坑内には自然石と割り石の集石がみられる。規模は推定220×100cm、深さ25cmを測る。

SK96は14区に位置し楕円形を呈する。規模は200×105cm、深さ23cmを測る。

SK97はSK96に40cm離れて隣接し楕円形を呈する。規模は160×100cm(長軸推定)、深さ22cmを測る。

SK136は20区北側に位置し、複合するSD117に先行する。平面形と規模は楕円形で200×100cmと推定する。深さは14cmである。

SK143は20区南側に位置する。平面形は隅丸方形を推定し、規模は140×推定140cm、深さ10cmである。

5 溝

SD26 (第224図、第239～243図219～272)

SD26は10・11区に位置し、北北西方向にやや蛇行しながら延びる流路を57m検出した。溝はほぼ断面V字状

を呈し、その上面幅は1.7～3.5m内であるが大半は2.0～2.5mとなる。底面は幅30～60cmの部分が多く、南側は1m前後と広がっている。深さは80cm前後を測り、溝底の標高は南端が10.30m、北端が10.06mである。検出状況から自然河道SD23に接続するものと考えられよう。

上層の観察から覆土は、上層・中層・下層に大別している。上層は第224図3十の褐色粘質土であり、溝の中央部では大きさ10～15cmの稜群がみられることが多かった。中層は同図断面図a-a'の4・5土、同b-b'の5～8土でこの下部を下層とした。

土器の出土状況は、それぞれの層で出土高を同じとする土器の集中地点がみられ、中層段階が土器の出土量に比例しその集中地点の個所も多い。下層からの出土量は少なく、ほぼ溝底で検出した228(㊶地点)と258に1部分が重なる259(㊷地点)である。中層では5箇所の上器集中地点がSD26の南半部にみられ、集中地点ごとの土器群は、南側から順に、220・222・225・226・231・253・261(㊸地点)、227・229・241～244・265(㊹地点)、223・233・234・261(㊺地点)、245・248・251(㊻地点)、224・246・250(㊼地点)である。これらの土器群は、溝の中央部で溝底から15cmほど高い位置で出土し、先の断面図b-b'の7十に相当する層からのものである。他の中層出土土器は239・260・263・270である。上層では中層と同じく南半部で221・230・232・237・238が集中する㊽地点の1箇所がみられ、北側の地点付近では249・254・257が出土した。他の上層出土土器は219・240・247・256・267～269・271で、打製石斧272も上層からである。なお、235・236・252・262・266は11区検出の自然河道SD23からのものであり、注意して頂きたい。

SD62・63・97・116・122 (第215図・巻本図参照、第243図273・274)

SD62・63は12区で一部を検出したもので、両溝の流路は竪穴建物SI04を囲むような状況がみられ、その外周溝的な用途も想定できる。両溝とも基本的な幅は50cmほどで、深さはSD62が5～23cm、SD63は10cm前後である。SD62からは第243図273が出土した。

SD97は17区で検出した北北東方向の溝で、幅50cm前後、深さは30～40cmである。

SD116・122は20区の北側と南側で検出したもので、その方向から連絡する可能性が考えられる。SD116は幅30cmと70cm前後で深さ5～10cm、SD122は幅50cm、深さ5cmで、第243図274が出土した。

発酵時代茶葉—古墳時代初期 遺物一覽表 (第228~243頁)

番号	出土地点	器種	容量 (cc)	色調(内面/外面)	遺存	備考
37	SD2	蓋	長さ150	淡褐色/淡褐色	全周	
38	SD2	打錠石	長さ139 幅55 厚さ20 重さ31.5			中堅砂岩
39	SD2	打錠石	長さ74 幅58 厚さ22 重さ180			大川(藤原六郎)
40	SD2	勾玉	長さ41.5 幅9.9			燧岩
41	SD40	鉢	口径35 高さ118	黒褐色/褐色	1/3	スズ付着、赤色乾涸、海蝕質 剥落
42	SD40	甕	口径35 高さ101	淡褐色/淡褐色	1/3	赤色乾涸多し
43	SD40	甕	口径32 高さ117 肩径45 底径11	茶褐色	口縁全周 体部小片	
44	SD40	甕	口径35 高さ132 肩径51	淡褐色/淡褐色	1/4	スズ付着、黒味著しい、赤色 乾涸
45	SD40	甕	口径55 高さ134 肩径165 底径147	暗褐色/淡褐色	1/3	スズ灰化付着
46	SD40	甕	口径202	黒褐色/淡褐色	1/5	スズ灰化付着
47	SD40	甕	口径67 高さ137 肩径77	暗褐色/暗褐色	体部1/3	スズ付着、赤色乾涸
48	SD40	甕	口径74 高さ131	淡褐色/淡褐色	1/6	スズ付着
49	SD40	甕	口径75 高さ139 肩径232	褐色/淡褐色	1/4	スズ付着、赤色乾涸
50	SD40	甕	口径30 高さ141	暗褐色/淡褐色	1/5	スズ付着
51	SD40	甕	口径81 高さ150	淡褐色	口縁全周 体部小片	
52	SD40	甕	口径38 高さ150	暗褐色/淡褐色	口縁1/2 体部小片	
53	SD40	甕	口径68 高さ154 肩径208	暗褐色/暗褐色	口縁全周 新部1/4	肩凹縁、外面灰化付着、スズ付 着、内面スズ付着
54	SD40	甕	口径91 高さ156 肩径215 底径21	暗褐色、黒褐色、 暗褐色/暗褐色	ほぼ全	黒腐質
55	SD40	甕	口径206 高さ175	淡褐色/淡褐色	1/4	赤色乾涸
56	SD40	甕	口径101 高さ142	褐色/淡褐色	1/4	スズ灰化付着、赤色乾涸
57	SD40	甕	口径120 高さ190 肩径169	暗褐色/褐色	1/4	スズ付着、表面ハタリ多い
58	SD40	甕	口径33 高さ168	赤褐色/暗褐色	1/2	スズ付着
59	SD40	甕	口径168 高さ136 肩径104	暗褐色/褐色	1/7	赤色乾涸
60	SD40	甕	口径90 高さ138 肩径104	淡褐色	全周	
61	SD40	甕	口径76 高さ190	淡褐色/淡褐色	3/4	赤色乾涸

番号	出土地点	器種	容量 (cc)	色調(内面/外面)	遺存	備考
1	SH1	甕	口径(153)高さ(207)	淡茶褐色	小片	
2	SH1	甕	口径(145)高さ(118)	淡褐色/褐色	1/8	スズ付着
3	SH2	甕	口径68 高さ124	暗褐色/褐色	1/6	スズ付着
4	SH2	甕	口径62 高さ131 肩径207	暗褐色/淡褐色/ 暗褐色/淡褐色	1/5	肩凹縁、外面スズ付着
5	SH2	甕	口径35 高さ121	淡茶褐色/褐色	1/4	肩凹縁?
6	SH2	甕	口径38 高さ107	淡茶褐色	1/4	
7	SH2	甕	口径62 高さ135	褐色/淡褐色	1/4	スズ付着
8	SH2	甕	口径(165)高さ(138)	暗褐色	1/8	スズ付着
9	SH2	甕	口径165 高さ124	淡茶褐色	1/6	肩凹縁 スズ灰化付着
10	SH2	甕	口径170 高さ131	淡褐色/褐色	1/6	
11	SH2	甕	口径253 高さ240	淡褐色	1/3	
12	SH2-P9	甕	口径230 高さ196	褐色	1/2	スズ付着
13	SH2	甕	口径(173)高さ(146)	淡褐色/淡褐色	1/8	
14	SH2	甕	口径(187)高さ(147)	淡褐色	1/2	
15	SH2	甕	口径(166)高さ(164)	淡褐色/淡褐色	小片	
16	SH2	甕	口径111 高さ94	淡褐色/淡褐色	1/4	
17	SH2	甕	口径65 高さ81 肩径102	淡褐色に黒褐色 部分褐色	1/4	
18	SH2	甕	口径148 高さ112	淡茶褐色	1/6	
19	SH2	甕	口径90 高さ58	暗褐色/黒褐色	1/7	
20	SH2	甕	口径35	暗褐色/暗褐色	1/6	
21	SH2	甕	口径244	暗褐色	1/2	
22	SH2	甕	口径240	暗褐色、黒褐色/ 暗褐色	1/2	
23	SH2	甕	口径223	暗褐色	1/3	
24	SH2	甕	口径210	淡茶褐色	1/6	
25	SH2	甕	口径213	淡褐色/淡褐色	1/8	
26	SH2	甕	口径221	淡褐色/淡褐色	全周	肩凹縁著しい
27	SH2	甕	口径135	淡褐色/褐色	1/4	
28	SH2	甕	口径35	暗褐色/暗褐色	2/3	
29	SH2	甕	口径155 高さ62	褐色/赤褐色	1/5	
30	SH2	甕	口径72	淡褐色/淡褐色	全周	
31	SH2	甕	口径58	暗褐色/暗褐色	全周	
32	SH2	甕	口径74	暗褐色/暗褐色/ 黒褐色/黒褐色	1/4	肩凹縁著しい、赤色乾涸
33	SH2	甕	口径74	暗褐色	1/5	
34	SH2	甕	口径36	赤砂/赤砂	全周	
35	SH2	甕	口径34	淡茶褐色	全周	
36	SH2	甕	口径59 高さ78 肩径5.4	淡褐色に赤影、淡 褐色に赤影	2/3	肩凹縁著しい、赤色乾涸

番号	市土地点	番種	法量 (m ²)	色調(内面/外面)	通存	備考
83	SD03	裏	口径164 鋼径141	淡緑褐色/赤褐色 暗褐色/淡褐色	ほぼ全周	
94	SD03	裏	口径164 鋼径115	淡緑褐色	1/5	断面に灰あり
95	SD03	裏	1径174 鋼径142	暗褐色/褐色	1/5	断面に灰あり
96	SD03	裏	口径175 鋼径144	暗褐色/褐色	3/4	断面に灰あり
97	SD03	裏	1径176 鋼径138	淡緑褐色	1/6	断面に灰あり
98	SD03	裏	口径183 鋼径138	暗褐色	ほぼ全周	断面に灰あり
99	SD03	裏	口径164 鋼径116	赤褐色	1/8	断面に灰あり
100	SD03	裏	1径220 鋼径107	淡緑褐色	1/4	断面に灰あり
101	SD03	裏	口径216 鋼径107	黒褐色/暗褐色	1/11	断面に灰あり
102	SD03	裏	口径112 鋼径86	淡緑褐色	1/4	
103	SD03	裏	鋼径80	褐色	全周	断面に灰あり
104	SD03	裏	口径95	褐色	1/7	
105	SD03-P5	裏杯	口径253	淡褐色/淡褐色	口径1/3	
106	SD03	裏杯	口径1210	暗褐色	1/8	
107	SD03	裏杯	鋼径118	淡褐色/淡褐色	全周	
108	SD03-P4	台枠鉢	口径111	淡褐色/淡褐色	1/7	
109	SD03	裏	口径100	淡緑褐色	1/8	
110	SD03	裏	口径31	淡緑褐色	全周	
111	SD03	粘雑草	長さ(52)幅31 長さ31 重さ100			緑色腐葉料
112	SD03	磁石	長さ97 幅39 厚さ29 重さ288			異物
113	SD19	裏	1径175 鋼径136	暗褐色/淡褐色	1/4	赤色付着、スチ付着
114	SD19	裏	1径181 鋼径143	淡褐色-淡緑褐色 色/淡褐色	1/4	断面に針渡
115	SD19	裏	口径165 鋼径146 鋼径159	暗褐色/淡褐色	口径1/3 体部1/5	
116	SD19	裏	口径169 鋼径130	淡褐色/褐色	口径1/4 体部1/8	断面に針渡、スチ付着
117	SD19	裏	口径223 鋼径175	褐色/褐色	1/4	赤色付着、断面ハタリ多い
118	SD19	底部	鋼径148	暗褐色/淡褐色	1/3	
119	SD19	底部	鋼径25	暗褐色/淡褐色	2/3	
120	SD19	巻	口径110	淡緑褐色/暗褐色	1/9	
121	SD19	巻	鋼径132	淡緑褐色/淡褐色 色-暗褐色	1/3	
122	SD19	巻	口径92	淡褐色/淡褐色	1/5	
123	SD19	巻	鋼径167	淡褐色/淡褐色	1/9	
124	SD19	巻	口径12	淡褐色/褐色	1径1/5	スチ付着、断面著しく、断面不明、赤色付着
125	SD19	巻	1径230	暗褐色/褐色	2/3	赤色付着、断面著しく
126	SD19	巻	口径219	暗褐色/褐色	1/6	断面著しく

番号	市土地点	番種	法量 (m ²)	色調(内面/外面)	通存	備考
62	SD10	裏	鋼径205 鋼径21	暗褐色/淡褐色 暗褐色	底部全周 体部1/3	スチ付着、赤色和泥
63	SD10	巻	鋼径50	暗褐色/淡褐色 暗褐色	体部1/3	炭化付着
64	SD10	巻	鋼径112	淡茶褐色	1/5	
65	SD10	巻	鋼径112	暗褐色	1/4	
66	SD10	巻	鋼径112	暗褐色	1/8	
67	SD10	巻	鋼径112	暗褐色	1/2	
68	SD10	巻	鋼径112	淡茶褐色	1/5	
69	SD10	巻	鋼径112	淡茶褐色	全周	
70	SD10	巻	鋼径112	暗褐色	全周	
71	SD10	巻	口径124 鋼径40 鋼径40	暗褐色/暗褐色	1/3	断面著しい
72	SD10	巻	鋼径105	淡茶褐色	1/4	
73	SD10	巻	鋼径58	淡緑褐色/褐色	全周	
74	SD10	巻	鋼径79	暗褐色	全周	
75	SD10	巻	鋼径79	淡茶褐色	全周	
76	SD10	巻	鋼径141 鋼径55	淡茶褐色	つまみ穴 鋼径2/3	
77	SD10	巻	鋼径116 鋼径57	淡褐色	3/4	
78	SD10	巻	鋼径118 鋼径40 鋼径103 鋼径40	淡茶褐色/淡褐色	1/4	
79	SD10	巻	鋼径125 鋼径33	淡緑褐色	1/4	
80	SD08	裏	1径171 鋼径142	赤褐色	1/5	断面にスチ付着、断面黒色、断面に灰あり
81	SD08	裏	口径180 鋼径116	淡褐色/褐色	1/7	断面に針渡(？)
82	SD08	裏	口径180 鋼径110	暗褐色/暗褐色	1/6	断面に針渡、断面に灰あり
83	SD08	裏	口径208 鋼径105	暗褐色/暗褐色	1/7	断面に針渡、断面に灰あり
84	SD08	裏	口径167 鋼径140	暗褐色	1/8	断面にスチ付着
85	SD08	巻	LH59 鋼径173 鋼径94 鋼径115 鋼径75	淡茶褐色	3/4	
86	SD08	巻	つまみ穴鋼径25 鋼径158 鋼径45	赤赤/暗褐色	1/4	断面赤赤
87	SD08	断面に針渡	鋼径151	淡茶褐色	1/4	
88	SD09	巻	LH144 鋼径105	暗褐色	1/4	断面に針渡(？)
89	SD09	裏	口径130 鋼径132	暗褐色	1/8	断面にスチ付着、断面に針渡、断面に灰あり
90	SD03	巻	1径154 鋼径120	淡茶褐色/暗褐色	1/5	
91	SD03	巻	口径161 鋼径124	淡茶褐色	1/4	
92	SD03	巻	LH164 鋼径120	暗褐色	1/3	

番号	出土地点	器種	法量 (mg)	色調(内面/内面)	通存	備 考
127	SD49	赤杯	スズ付蓋	茶色/赤褐色	1/4	
128	SD49	赤杯	透かし穴付蓋, 3mm穴	淡褐色/淡褐色	全周	
129	SD49	赤杯	透かし穴付蓋	暗褐色/暗褐色	全周	わずかにスズ付蓋
130	SD49	白蓋	赤色粒塗, 海胆骨針付蓋	淡褐色/淡褐色	1/2	
131	SD49	白蓋	赤色粒塗	淡褐色/淡褐色	既/6	
132	SD49	白蓋	透かし穴付蓋	淡褐色/淡褐色	全周	
133	SD49	打割杯	突き113 幅110 厚さ24 重さ310	茶褐色	小片	
134	SD4	壺	口径(187)	淡褐色	小片	
135	SD4	壺	口径(157)	淡褐色	小片	
136	SD4	高杯	口径122	淡褐色	柱部全周	
137	SD87	鉢の中	口径103 突部径103 底径143 高さ207	淡褐色	ほぼ全	
138	SD6	壺	口径140 高さ109	茶褐色/淡褐色	1/7	外面ナズ黒田節88, 内面ナズ 節田作茶クズリ
139	SD6	壺	口径143 頸径105	赤褐色	2/3	
140	SD6	壺	口径150 頸径116	淡褐色/淡褐色	1/3	外面黒田節リ, ナズ, ハケ西節 ナズ, ハケ, クズリ
141	SD6	壺	口径162 頸径137	暗褐色/淡褐色	1/4	
142	SD6	壺	口径172 頸径138 胴径198 底径21 高さ206	暗褐色, 褐色, 赤褐色/黒褐色, 暗褐色	ほぼ全	
143	SD6	壺	口径197 頸径180	淡褐色	口縁全周 胴部小片	
144	SD6	壺	口径170 頸径112 胴径172	暗褐色/暗褐色, 茶褐色		
145	SD6	壺	口径181 頸径146 胴径202	褐色/淡褐色	3/4	
146	SD6	壺	口径185 頸径151 胴径218	淡褐色	1/5	
147	SD6	壺	口径156 頸径132 胴径180	淡褐色	1/5	外面スズ付蓋, 内上腹元
148	SD6	壺	口径240 底径163 高さ164	淡褐色/褐色	1/2	外面スズ付蓋
149	SD6	底部	口径24	淡褐色/褐色	全周	
150	SD6	底部	口径45	褐色	全周	
151	SD6	底部	口径43	淡褐色/淡褐色	全周	
152	SD6	底部	口径44	淡褐色/褐色	全周	
153	SD6	壺	口径130 頸径1101 胴径220 底径50 高さ270	褐色/暗褐色	ほぼ全	
154	SD6	台付蓋	口径101 頸径74 胴径129 台径100 高さ100	淡褐色	ほぼ全	

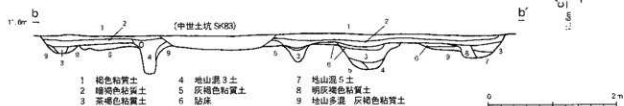
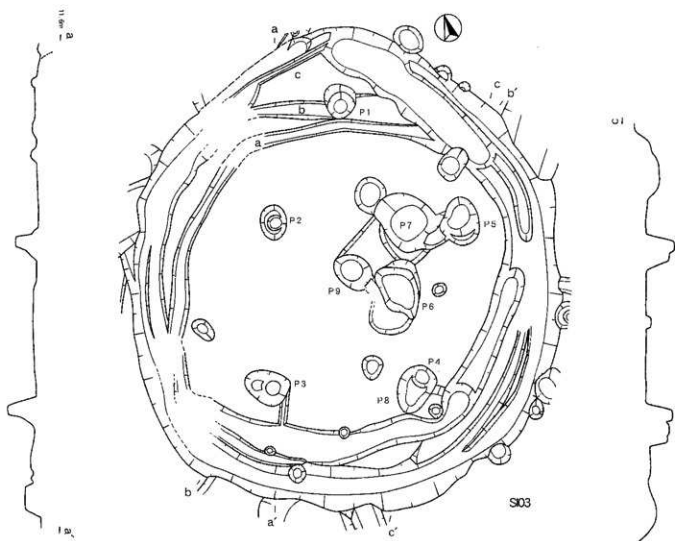
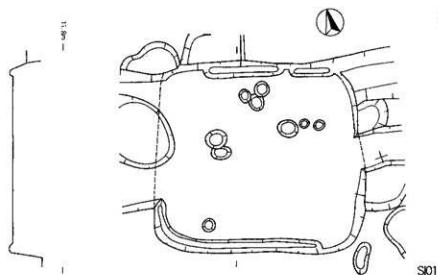
番号	出土地点	器種	法量 (mg)	色調(内面/内面)	通存	備 考
155	SD6	台付蓋	口径94 頸径71 胴径71 台径117 高さ114	淡褐色一部/褐色 色, 赤褐色/淡褐色	2/3	赤色粒塗, 口縁部赤彩か?
156	SD6	台付蓋	口径109 頸径76 胴径164 台径113 高さ203	赤彩赤彩/褐色 色	全	わずかに透かし穴付蓋あり, 3穴以内 有 杯面内面少量赤化粧付蓋
157	SD6	高杯	口径220 胴径126 高さ129	淡褐色	3/4	透かし穴付蓋
158	SD6	高杯	口径226 胴径124 高さ151	淡褐色, 暗褐色 の底/暗褐色	3/4	
159	SD6	高杯	口径142 胴径122 高さ136	淡褐色	1/3	
160	SD6	高杯	口径246 胴径144 高さ153	黒褐色, 暗褐色, 青褐色, 暗褐色	1/2	3穴付蓋(2穴現存), 内外赤彩 あり
161	SD6	高杯	口径254	赤褐色, 暗褐色, 色, 暗褐色, 暗褐色	全周	透かし穴付蓋
162	SD6	高杯	口径228	赤褐色	下腹1/4 口縁小片	
163	SD6	高杯	口径226	黒褐色, 暗褐色, 暗褐色	1/3	内外黒田節あり
164	SD6	高杯	口径245	淡褐色	1/3	
165	SD6	高杯	口径194 胴径115 高さ142	淡褐色, 褐色, 暗褐色	ほぼ全	
166	SD6	高杯	口径224 胴径129 高さ166	青褐色, 暗褐色, 赤褐色	全	透かし穴付蓋
167	SD6	高杯	口径206 胴径129 高さ169	黒褐色	胴部ほぼ全 杯部1/2	赤彩付蓋部分のみみられる
168	SD6	高杯	口径250	茶褐色, 出褐色, 淡褐色 暗色/赤褐色, 黒褐色	1/3	
169	SD6	高杯	口径210	淡褐色	1/6	腹上腹元
170	SD6	高杯	口径199	淡褐色	1/3	
171	SD6	高杯	口径162	淡褐色一部/褐色/ 淡褐色-出褐色	全周	外面ミガキ, 内面ミガキ, 湯 割付蓋
172	SD6	高杯	口径180 胴径150 高さ123	淡褐色一部/黒褐色 褐色, 暗褐色	全	
173	SD6	高杯	口径150	淡褐色-暗褐色/ 茶褐色-暗褐色/ 茶褐色-暗褐色	ほぼ全周	外面ミガキ, ハケ西腹ミガキ 胴縁黒い
174	SD6	高田壺	口径90	赤褐色-茶褐色	全周	
175	SD6	高田壺	口径90	淡褐色	全周	
176	SD6	蓋白	口径240 胴径123 高さ151	淡褐色	ほぼ全彩	
177	SD6	蓋白	口径95	淡褐色一部/褐色/ 淡褐色一部/褐色	1/3	外面ミガキ, 内面ミガキ, 赤彩粒塗
178	SD6	蓋白	口径263 胴径131 高さ150	暗褐色	ほぼ全	3穴

番号	岸上地点	器種	法電 (m ²)	色調(外側/内側)	遺存	備考
203	S07	礎石	口径140 胴径130 胴径195 胴径19 器高211	赤褐色、黒褐色/ 緑褐色、黒褐色	完	
204	S07	台付壺	口径110	黒褐色(一部赤褐色) 赤褐色、黒褐色	3/4	
205	S07	壺	口径36 胴径 120 胴径47	黒褐色、赤褐色 /赤褐色、向紅色	欠	
206	S08	壺	口径154 胴径166	赤褐色/赤褐色	完	
207	S09	高杯	口径112	赤褐色/褐色	1/10	
208	S09	高杯		赤褐色	1/3	
209	S09	高杯		赤褐色	小片	
210	S10	高杯		赤褐色	小片	
211	S10	高杯		赤褐色	小片	
212	S10-15	鉢形		赤褐色/赤褐色	1/6	外面ミガキ、内面ミガキ、胴口縁内側取付痕、胴口縁6.5出 此者らしい
213	S01	壺	口径204 胴径171	赤褐色/赤褐色	1/10小片	
214	S01	壺	口径134 胴径303	赤褐色	1/5	
215	S01	高杯		赤褐色/赤褐色	1/5	
216	S01	高杯		赤褐色/赤褐色	1/5	
217	S06	罍	口径205 胴径176	赤褐色	1/4	
218	S0136	壺	口径169 胴径147 胴径258	赤褐色/赤褐色 赤褐色	1/2	
219	S026	壺	口径233 胴径193	赤褐色/赤褐色/赤褐色	1/4	
220	S026	罍	口径200 胴径138 胴径222	赤褐色	3/4	
221	S026	壺	口径274 胴径232 胴径222	赤褐色/赤褐色	口縁全周	赤色釉薬、スズ酸化物付着
222	S026	壺	口径302 胴径164	赤褐色	口縁全周	
223	S026	壺	口径243	赤褐色	体部1/3	
223	S026	壺	口径192 胴径126 胴径203	赤褐色/褐色	胴全周 体部2/3	胴口縁5.5、指飾付痕、赤褐色スズ付着
224	S026	罍	口径98 胴径161 胴径256 胴径28	赤褐色	口縁全周 体部3/4	
225	S026	罍	口径91 胴径157 胴径208	赤褐色	ほぼ全周	外面ミガキ付着、胴口縁9
226	S026	罍	口径167 胴径156	赤褐色	3/4	
227	S026	罍	口径182 胴径119 胴径197	赤褐色	3/4	
228	S026	壺	口径181 胴径152 胴径210 胴径23	赤褐色	口縁全周	
229	S026	壺	口径180 胴径140 胴径206	赤褐色	1/6	赤色釉薬、赤褐色スズ付着

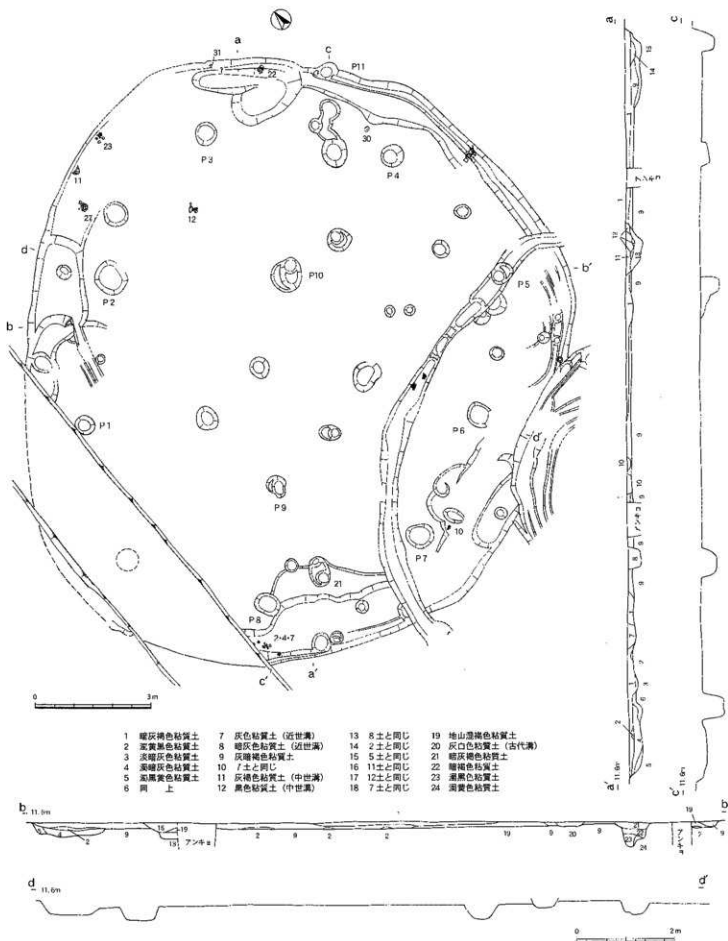
番号	岸上地点	器種	法電 (m ²)	色調(外側/内側)	遺存	備考
179	S06	礎石	口径264	赤褐色・黒褐色・黒褐色 黒褐色・赤褐色・黒褐色	ほぼ全周	外面、内面ミガキ、胴口縁、指飾付痕、赤褐色
180	S06	器台	口径119 胴径103	赤褐色	ほぼ完	酒器形影ハタケ
181	S06	装束器	口径73 胴径145 胴径125 器高198	赤褐色/黒褐色	ほぼ全周	外面ミガキ、内面ミガキ、胴口縁ハケ状、赤褐色付着
182	S06	装束器	口径174	赤褐色	2/3	外面、一部赤褐色
183	S06	装束器	口径148 胴径182	赤褐色	1/4	上面、一部赤褐色
184	S06	器台	胴径143	赤褐色・赤褐色 赤褐色	ほぼ全周	上面内側ミガキ、指飾付痕、赤褐色、ミガキ、内面ミガキ
185	S06	器台	胴径131	赤褐色	1/2	上面内側ミガキ、指飾付痕、赤褐色
186	S06	器台	胴径150	赤褐色・黒褐色/赤褐色	2/3	外面ミガキ、内面ハケ状、指飾付痕、赤褐色
187	S06	台付壺	口径116 胴径69 器高94	赤褐色	ほぼ全周	外面スズ付着
188	S06	底部	器径60	赤褐色/赤褐色	2/3	外面ミガキ、内面ハケ状、指飾付痕、赤褐色
189	S06	底部	器径80	赤褐色	2/3	外面ミガキ、内面ハケ状、指飾付痕、赤褐色
190	S06	底部	器径57	赤褐色	全周	外面スズ付着
191	S06	小型土器	口径77 胴径26 器高19	赤褐色	1/3	外面黒あり
192	S06	壺	つまみ径40 胴径170 器高71	赤褐色・赤褐色 赤褐色	ほぼ全周	外面スズ付着か、内面スズ付着か、一部黒あり
193	S06	壺	つまみ径41	赤褐色	2/3	
194	S06	壺	つまみ径32 胴径104 器高96	赤褐色	3/4	
195	S06	壺	つまみ径35 胴径89 器高44	赤褐色・赤褐色 赤褐色	完形	内外一部スズ、内面外側、ミガキの 工具痕に黒い付着による
196	S06	壺	つまみ径32 胴径86 器高40	赤褐色/褐色	1/3	外面ミガキ、内面ミガキ
197	S06	壺	つまみ径27 胴径81 器高37	赤褐色	完	
198	S06	壺	つまみ径32 胴径72 器高47	赤褐色	1/2	
199	S06	壺	つまみ径44	赤褐色	全周	
200	S06	碇石	長さ100 幅142 幅43 高さ1070	赤褐色	1/9	社庫全周 他小片
201	S07	壺	口径185 胴径156	赤褐色		
202	S07	底部	器径18	赤褐色		

番号	州土地名	品名	法量 (mmg)	色調(外側/内側)	濃 存	備 考
230	SD26	黄	11E175 額庄148 額庄188 額庄22 額庄254	淡茶褐色	1/4	
231	SD26	黄	11E174 額庄137	淡茶褐色	1/5	
232	SD26	黄	11E171 額庄131 額庄193	暗褐色/暗褐色	1/3	
233	SD26	黄	11E168 額庄138 額庄165 額庄182 額庄180 額庄25 額庄215	暗褐色/淡褐色	1/4	外側スチ付者、船頭山積あり
234	SD26	黄	11E165 額庄118 11E163 額庄136 11E161 額庄127	褐色	无	
235	SD26	黄	11E165 額庄118	茶褐色	1/4	
236	SD26	黄	11E163 額庄136 11E161 額庄127	褐色/深茶褐色	1/5	
237	SD26	黄	11E163 額庄136 11E161 額庄127	褐色	3/4	
238	SD26	黄	11E160 額庄111	淡褐色	全周	
239	SD26	黄	11E188 額庄147 額庄170 額庄58 額庄169	暗褐色/淡茶褐色	1/5	中外軒乾しい、スチ付者
240	SD26	黄	11E130 額庄26 額庄115	淡褐色		
241	SD26	黄	11E160 額庄170 額庄235	淡褐色	口縁小片	
242	SD26	黄	11E196 額庄181	暗褐色/褐色	1/4	
243	SD26	黄	11E174 額庄151	淡茶褐色/淡茶褐色	1/3	
244	SD26	黄	11E168 額庄146	淡褐色/茶褐色	全周	
245	SD26	黄	11E154 額庄139 額庄207	淡茶褐色/褐色	2/3	
246	SD26	黄	11E144 額庄131 額庄191	暗褐色/暗褐色/暗褐色/暗褐色	全周	外側スチ付者
247	SD26	黄	11E132 額庄107	暗褐色/淡褐色	全周	
248	SD26	黄	11E160 額庄141 額庄146 額庄35 額庄135	褐色/深褐色	ほぼ全	
249	SD26	黄	11E126 額庄118	暗褐色/茶褐色	小片	
250	SD26	底彫	額庄18	暗褐色/褐色	ほぼ全周	
251	SD26	黄	11E146 額庄56	淡褐色/暗褐色	1/4	棕色斑
252	SD26	黄	11E143 額庄115 額庄234	茶褐色	1/4	
253	SD26	黄	11E127 額庄91	淡褐色/淡褐色	2/3	
254	SD26	黄	11E118 額庄109	暗褐色	4/4	
255	SD26	白付盤	11E108 額庄61 額庄94	淡褐色	1/5(減小片)	
256	SD26	黄	11E131 額庄22	淡褐色/褐色	ほぼ全周	温度
257	SD26	黄	11E96 額庄76	暗褐色	1/2	

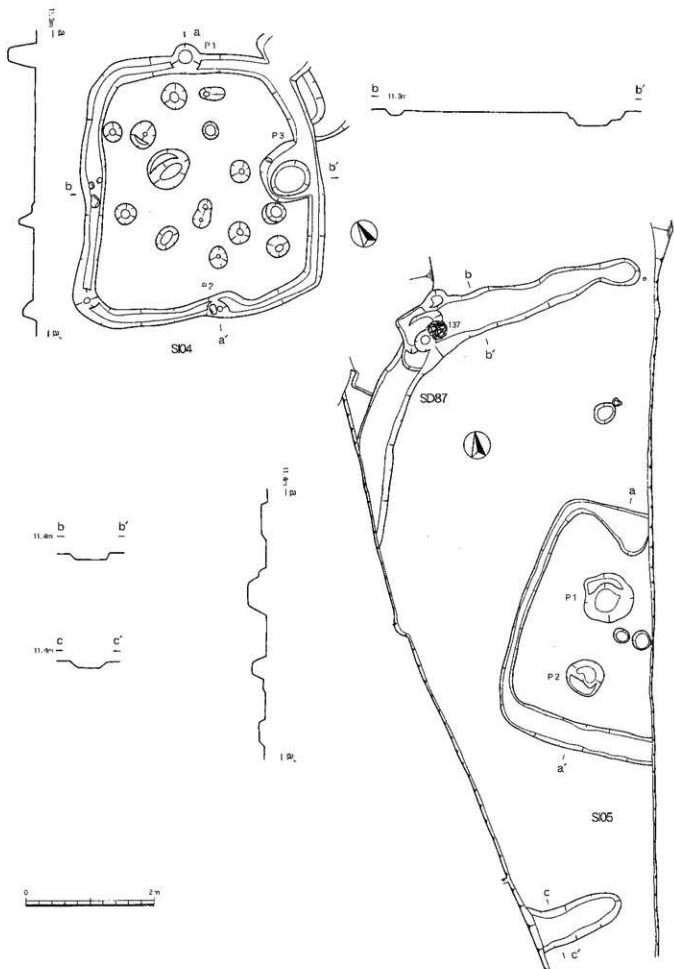
番号	州土地名	品名	法量 (mmg)	色調(外側/内側)	濃 存	備 考
258	SD26	小穴盤	11E56 額庄56 額庄112 底庄9 額庄72	赤影/深茶褐色	无	口縁部分が欠
259	SD26	白付鉢	11E63 額庄142 額庄150 底庄82 額庄140	淡褐色	ほぼ全	
260	SD26	白付鉢	11E149 額庄106	褐色/暗褐色	2/3	内外ミガキ、胴乾しい、舟 縁付針、形異
261	SD26	白付鉢	11E140 額庄126 額庄144 底庄72	褐色に淡褐色/褐色	11E213 体部全周	外ナデ、ハケ、胴乾しい、舟 タズリ、船縁付針、赤影斑
262	SD26	白付鉢	11E128 額庄128	淡茶褐色/褐色	1/4	
263	SD26	白付鉢	11E105 額庄105	褐色/暗茶褐色	1/2	
264	SD26	高杯	11E126 額庄126	淡褐色/淡褐色	1/5	海綿付針
265	SD26	高杯	11E176 額庄176	褐色	1/4	一部黒斑あり
266	SD26	高杯	11E176 額庄176	褐色	1/4	
267	SD26	高杯	11E176 額庄176	褐色	全周	
268	SD26	高杯	11E176 額庄176	褐色	全周	
269	SD26	高杯	11E176 額庄176	褐色	3/4	
270	SD26	蓋	11E142 額庄142 額庄158 額庄91	暗褐色	つまみ完 蓋部1/2	
271	SD26	蓋	11E142 額庄142 額庄158 額庄91	暗褐色	全周	
272	SD26	口縁小片	11E142 額庄142 額庄158 額庄91	暗褐色		丸山標渡底付
273	SD26	黄	11E187 額庄170	淡褐色	1/8	外側スチ付者、深目縁、船頭 圧痕あり
274	SD122	白付鉢	11E113 額庄113	褐色/暗褐色/褐色 色一暗褐色	1/3	外側ミガキ、丁具痕、内側ミ ガキ



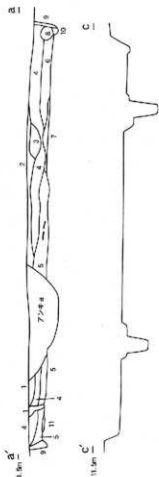
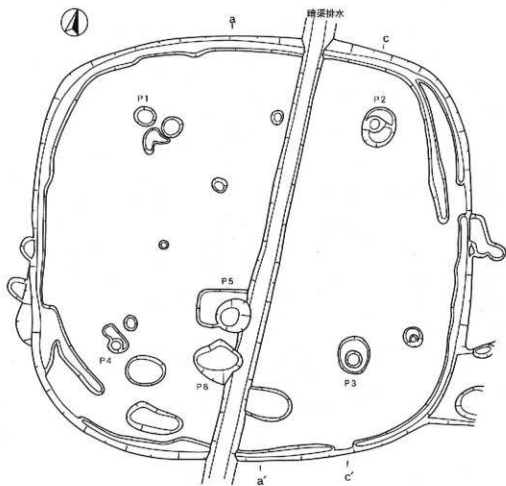
第216図 S101・03 遺構図 (1/60)



第217図 Si02遺構図 (平面図1/100・断面図1/60)

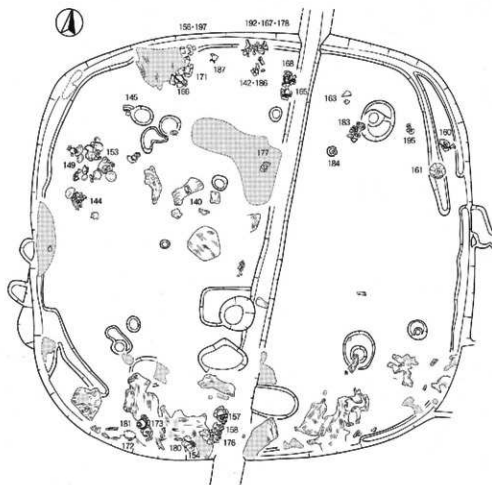


第219図 SI04・05 遺構図 (1/60)

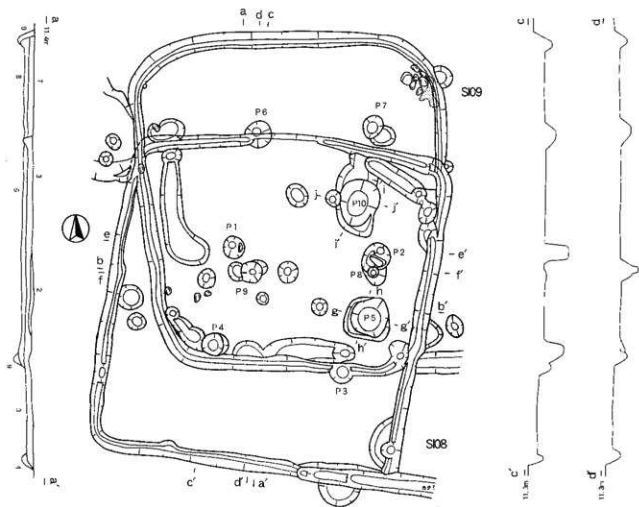


- 1 灰褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 灰褐色粘質土
- 5 暗灰褐色粘質土
- 6 地山層4土
- 7 地山層5土
- 8 地山ブロック
- 9 暗褐色粘質土
- 10 地山層4土
- 11 暗灰褐色粘質土 (6土層)

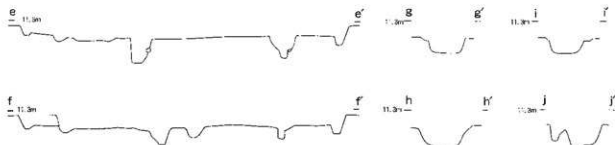
土器・炭化材出土状況
 粘土



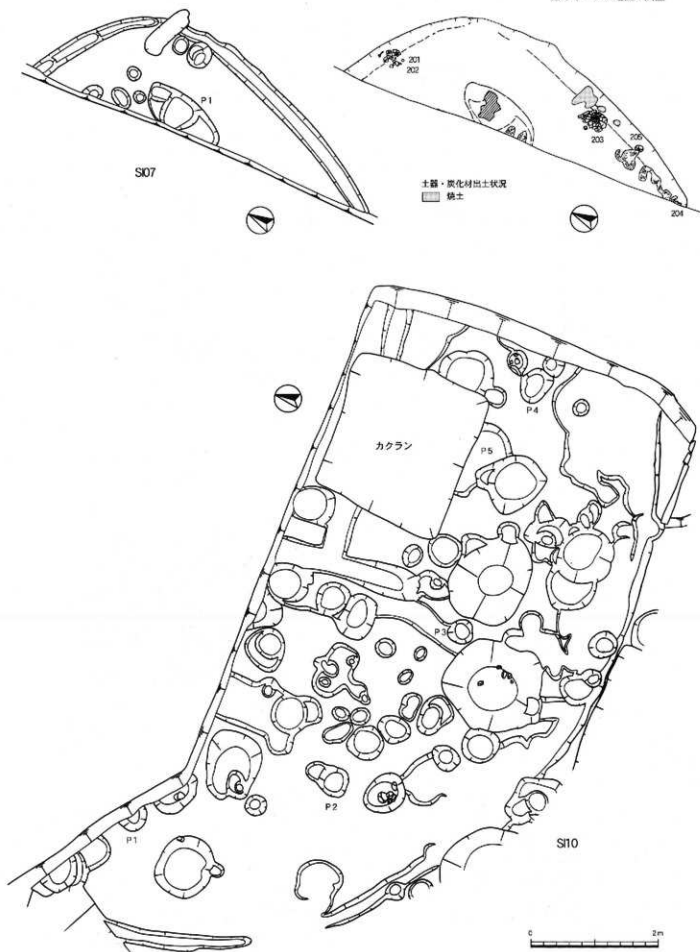
第220図 SI06 遺構図 (1/60)



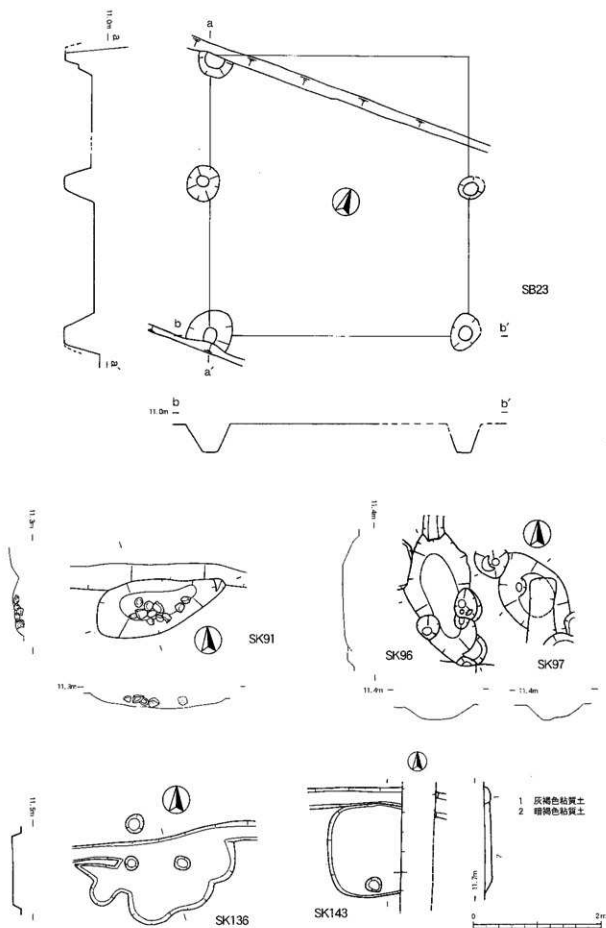
- | | |
|----------------|------------|
| 1 灰色粘質土 (カクラン) | 6 明褐色粘質土 |
| 2 暗褐色粘質土 | 7 黄茶褐色粘質土 |
| 3 褐色粘質土 | 8 明黄茶褐色粘質土 |
| 4 地山源明褐色粘質土 | 9 灰褐色粘質土 |
| 5 茶褐色粘質土 | |



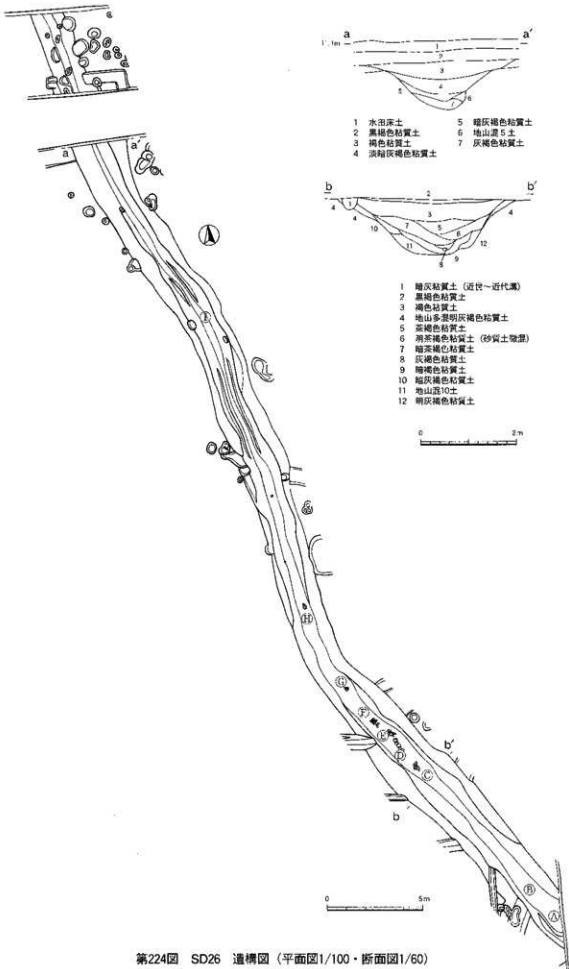
第221図 S108・09 遺構図 (1/60)



第222図 SI07・10 遺構図 (1/60)



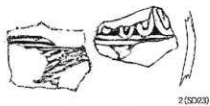
第223图 SB23·SK91·96·97·136·143 遺構图 (1/60)



第224図 SD26 遺構図 (平面図1/100・断面図1/60)



1 (SD23)



2 (SD23)



3 (X7)



4 (X7)



5 (X7)



6 (X8)



7 (X8)



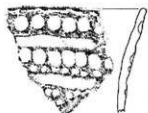
8 (Y7)



9 (X8)



10 (S104)



12 (SD68-110)

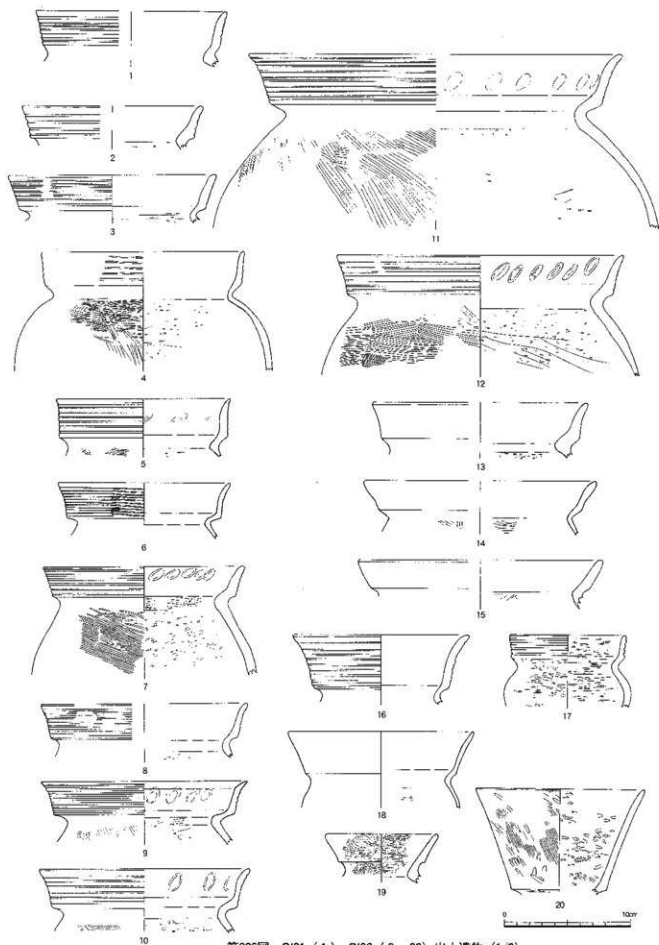


11 (カ5-6)

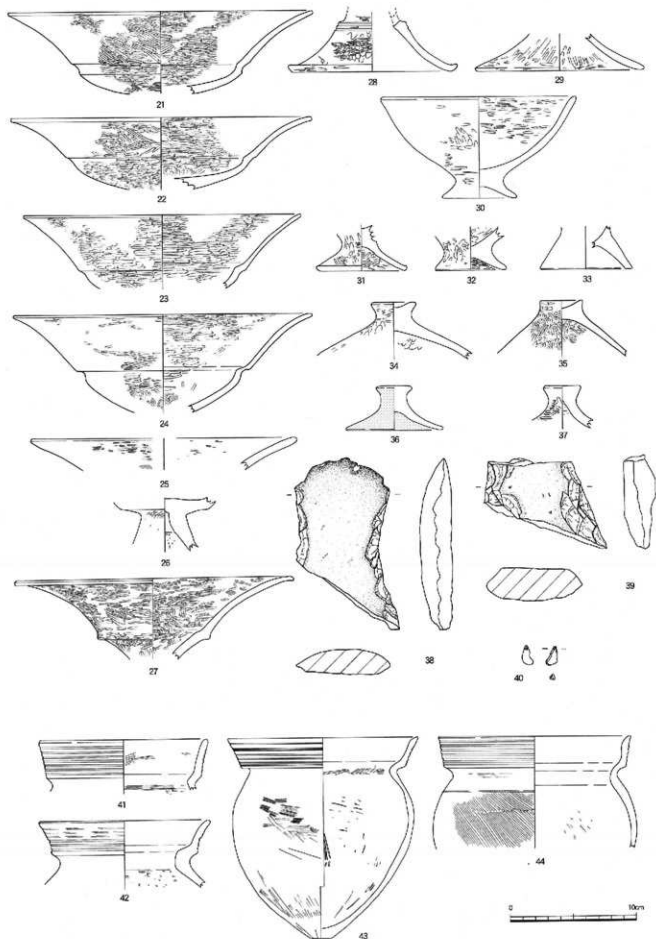
- 1・2：7区出土
- 3～9：11区出土
- 10・11：12区出土
- 12：14区出土
- () 内はクリッドまたは出土遺構名



第225図 前期～中期の土器 (1/3)



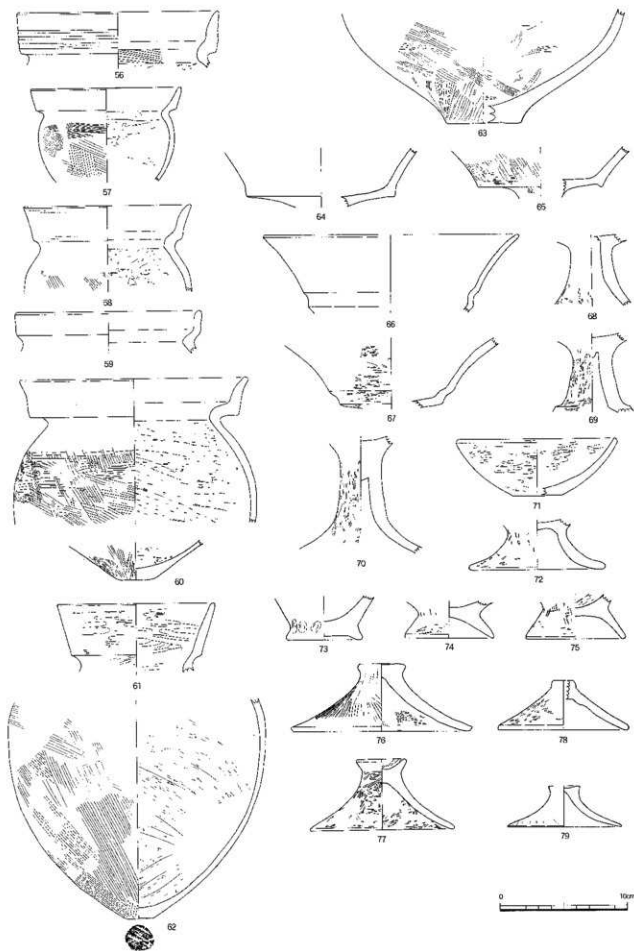
第226図 SI01 (1)・SI02 (2~20) 出土遺物 (1/3)



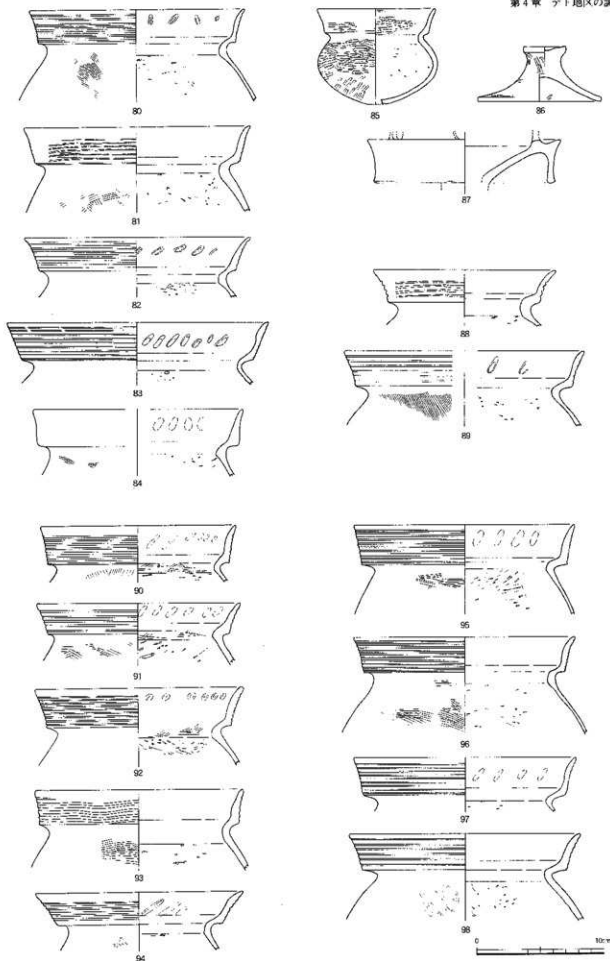
第227図 SI02 (31~40)・SD40 (41~44) 出土遺物 (1/3 40:1/2)



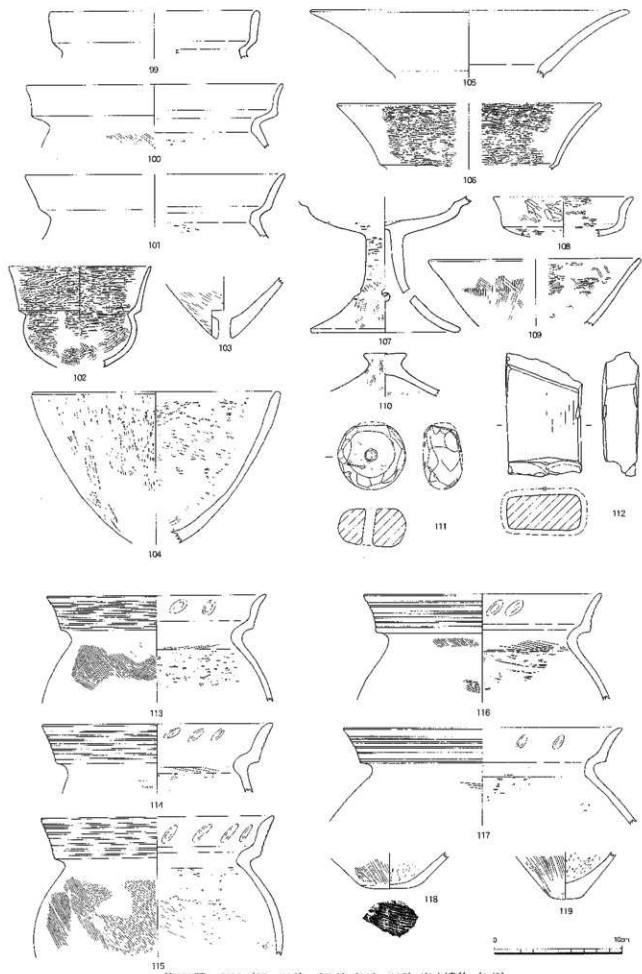
第228図 SD40出土遺物 (1/3)



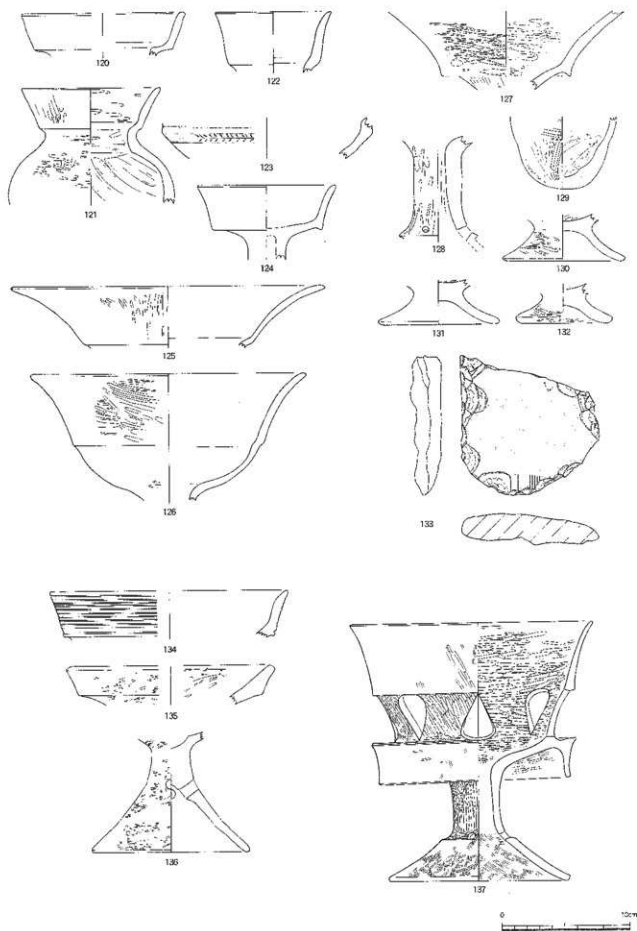
第229図 SD40出土遺物 (1/3)



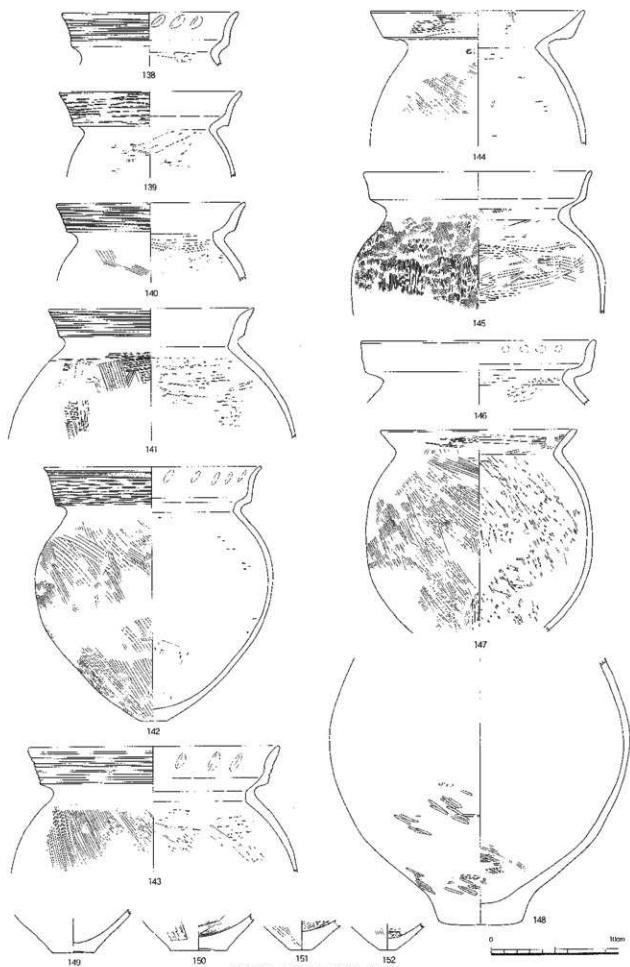
第230図 SD38 (80~87)・SD39 (88・89)・SI03 (90~98) 出土遺物 (1/3)



第231図 S103 (99~112)・SD49 (113~119) 出土遺物 (1/3)



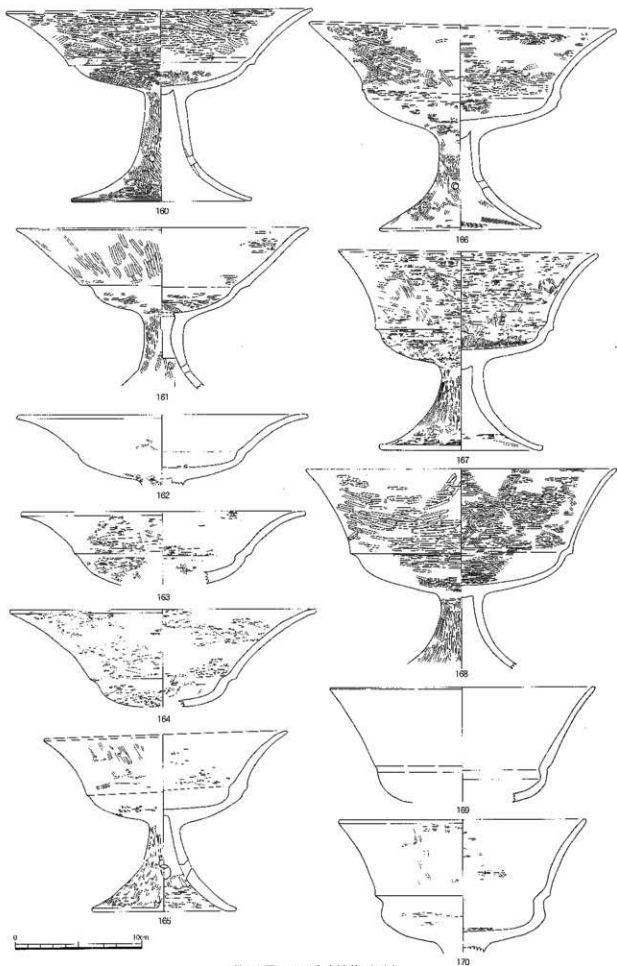
第232図 SD49 (120~133)・SI04 (134~136)・SD87 (137) 出土遺物 (1/3)



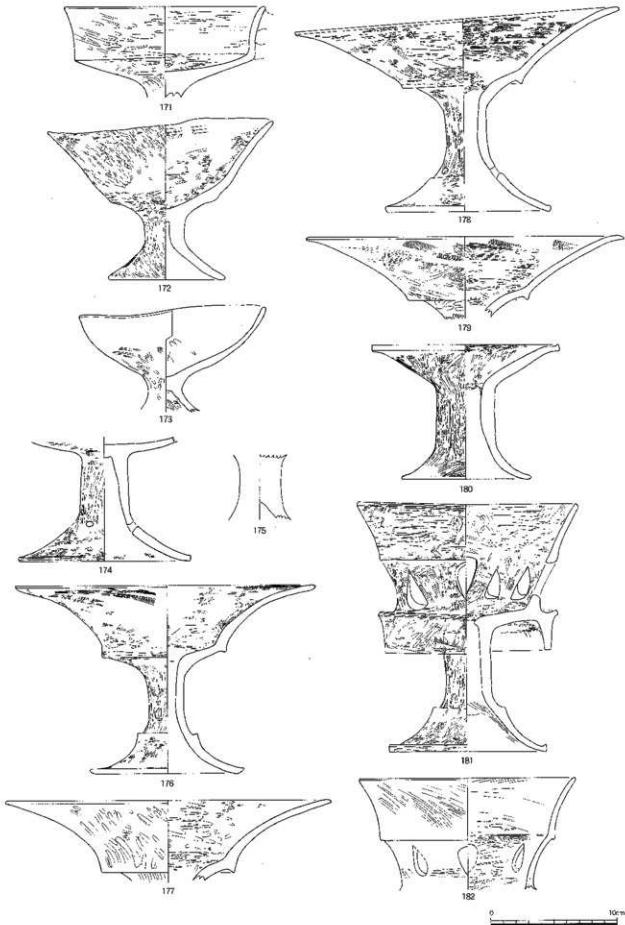
第233图 SI06出土遺物 (1/3)



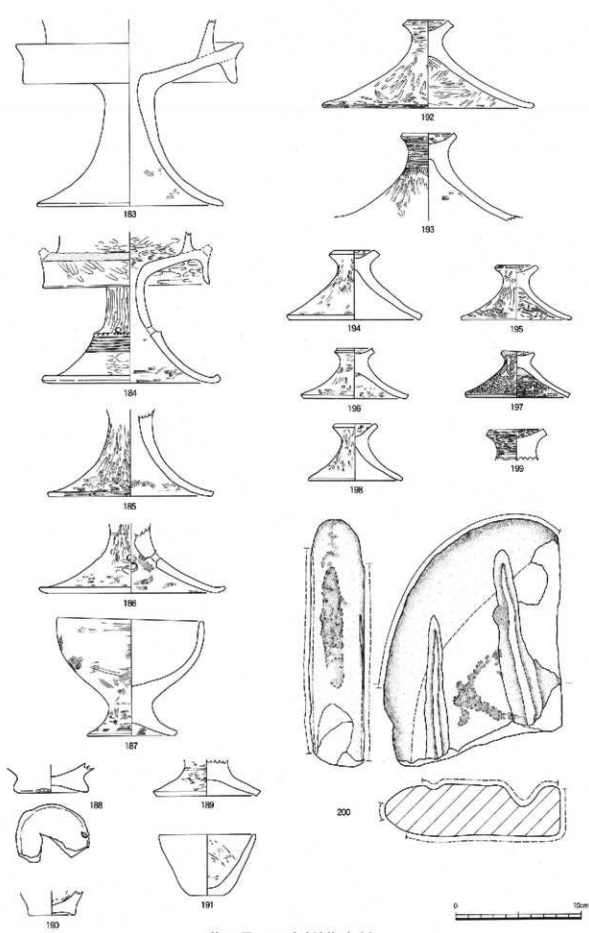
第234図 SI06出土遺物 (1/3)



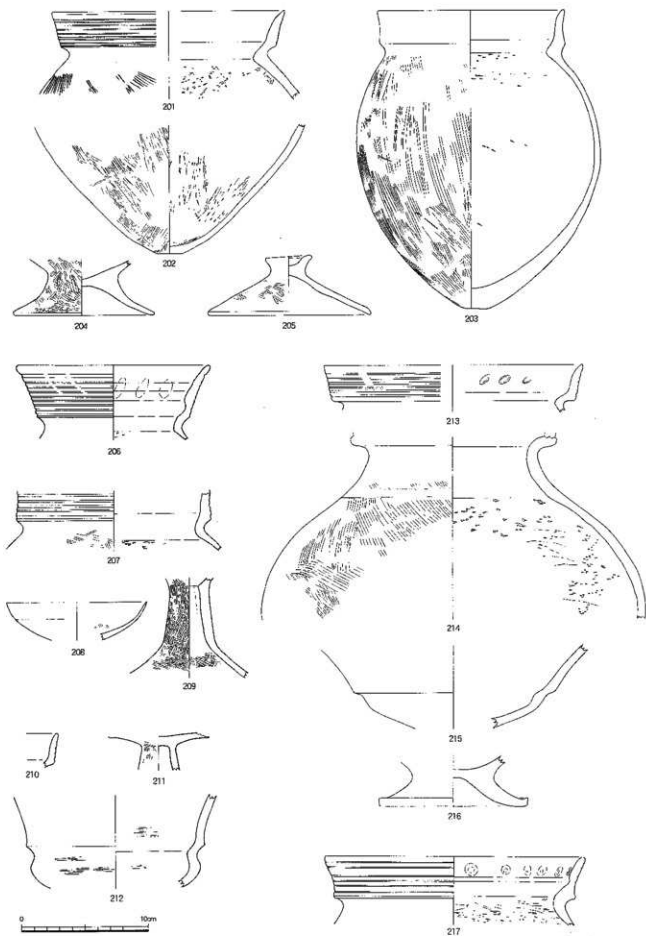
第235図 SI06出土遺物 (1/3)



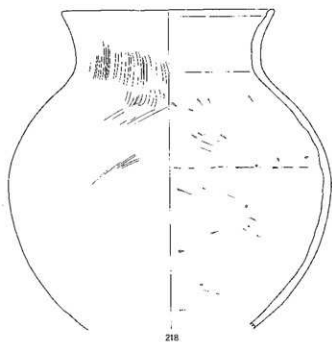
第236図 SI06出土遺物 (1/3)



第237图 SI06出土遗物 (1/3)



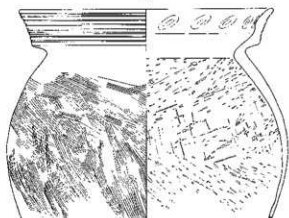
第238図 SI07 (201~205)・SI08 (206)・SI09 (207~209)・SI10 (210~212)・SK91 (213~216)・SK96 (217) 出土遺物 (1/3)



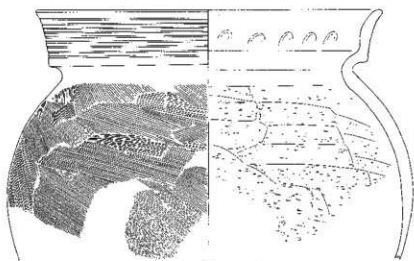
218



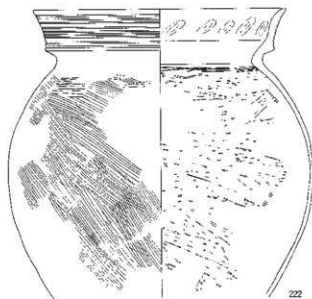
219



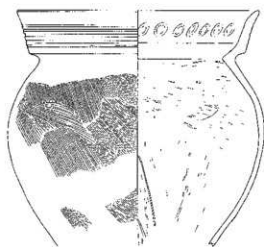
220



221



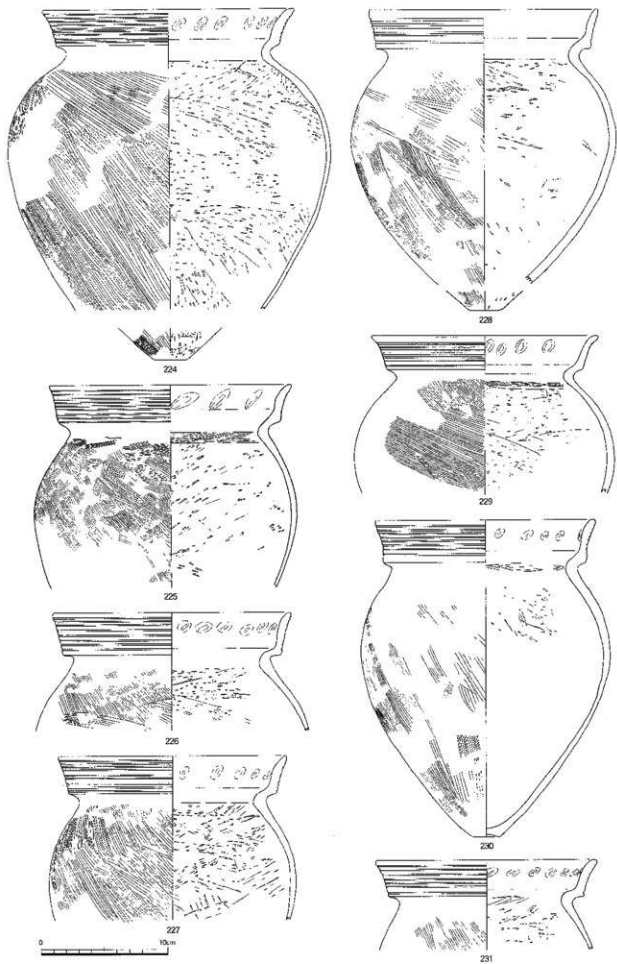
222



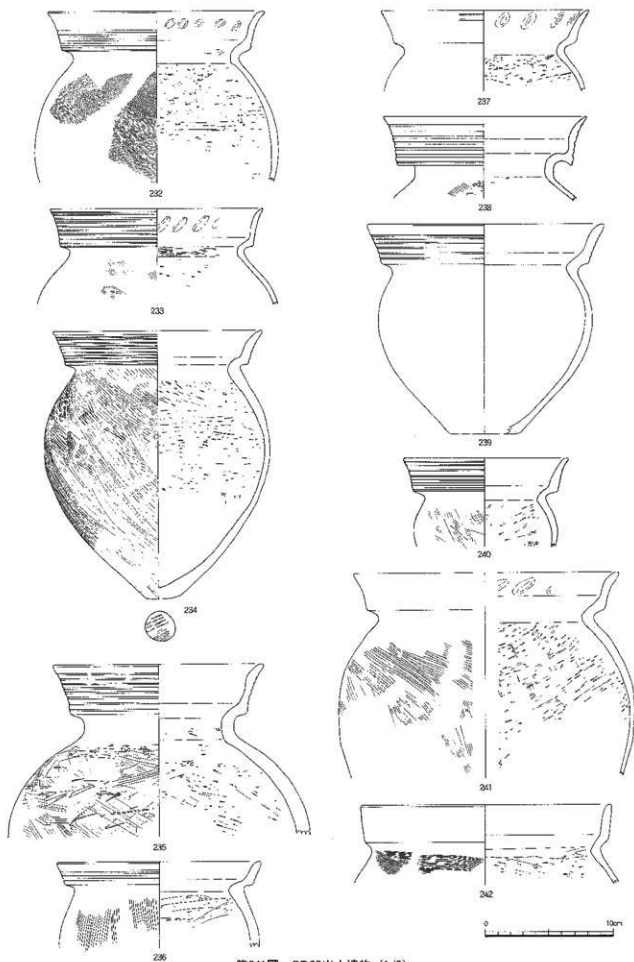
223



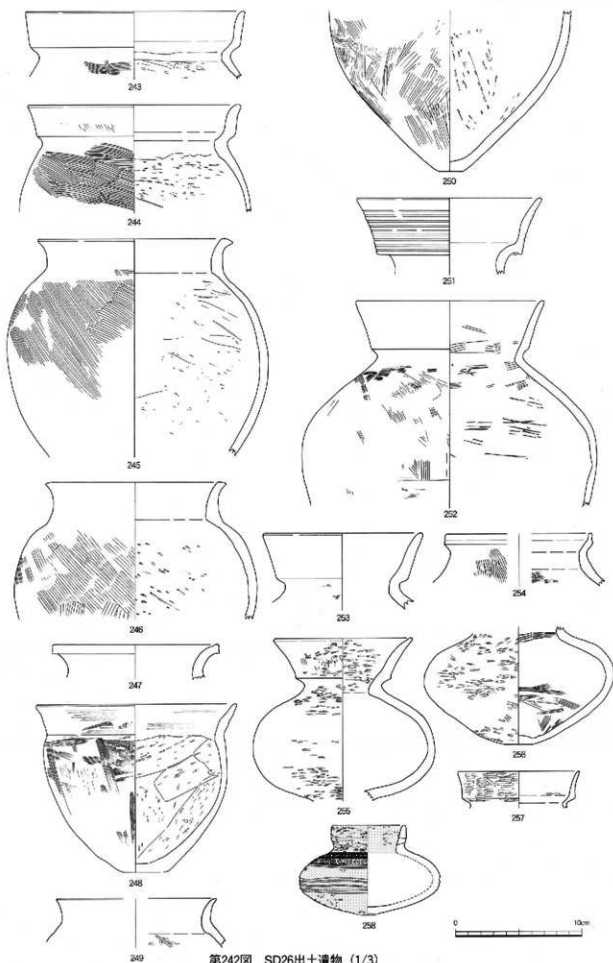
第239図 SK136 (218)・SD26 (219~223) 出土遺物 (1/3)



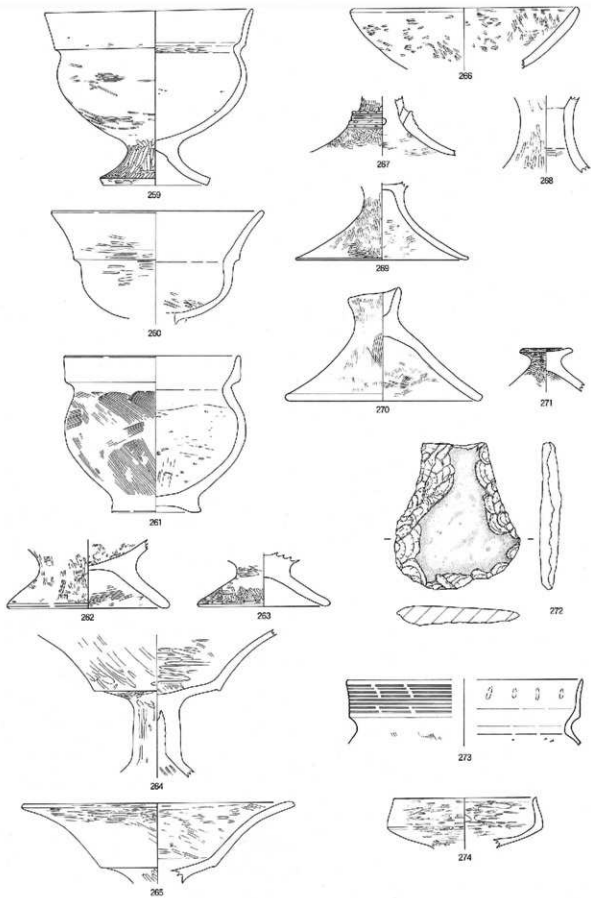
第240図 SD26出土遺物 (1/3)



第241図 SD26出土遺物 (1/3)



第242図 SD26出土遺物 (1/3)



第243团 SD26 (259~272)・SD62 (273)・SD122 (274) 出土遺物 (1/3)

第4節 古墳時代後期～古代

検出した遺構は、掘立柱建物(SB)7棟、土坑(SK)1基、溝(SD)8条である。遺構の分布や遺物の出土地区は4・5・8・11区に限られており、また後世の削平のため遺存状態は良くない。掘立柱建物は4区(報告は後口の予定)に1棟、5区に6棟が分布し、他の地区では溝のみ見られる状況である。国道8号線東側のツカダ地区において当該期の竪穴建物3棟、掘立柱建物6棟が(野々市町教委1984・1989)、また、あすなろ岡地地区でも掘立柱建物8棟が確認されている(湯尾1983)。出土遺物については節末の一覧表を参照して頂きたい。

1 掘立柱建物(第245～246図)

5区の掘立柱建物6棟のうち、SB11は調査時に認識していたが、他は平面図によって復元したもので柱筋はやや不揃いである。建物は、軸方位からSB10・16・21とSB11・12・22の2群に分かれる。

SB11の柱穴覆土は暗褐色粘質土であり、他の建物ではこれより淡い色調の褐色粘質土が柱穴の覆土である。柱穴からの遺物は無く時期特定は出来ないが、周辺の上層および柱穴の構成から当該期に判断したものである。下表の柱間の間隔は、北側または西側をはじまりとする順序で表記した。

掘立柱建物 一覧表

遺構	桁×梁	規模(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	梁/桁	面積(m ²)	軸方位	柱穴径・径・深さ(cm)
SB10	3×2 北西棟	5.0×4.2	北	1.1・2.3・1.4	東	1.8・2.3	N30°E	略円・楕円形 径38～86、深さ9～27
			南	1.3・2.3・1.4	西	2.0・2.1		
SB11	3×2 北東棟	5.0×3.1	東	1.4・2.2・1.3	北	1.5・1.5	N25°E	略円・楕円・不整形 径40～72、深さ12～35
			西	1.3・2.3・1.4	南	1.5・1.6		
SB12	3×3 北東棟	7.3×4.8	東	2.6・2.3・2.4	北	1.6・1.7・1.2	N25°E	略円・楕円形 径32～58、深さ10～28
			西	2.7・2.0・2.6	南	1.7・1.5・1.6		
SD16	4×2 北東棟	8.5×4.6	東	1.7・2.2・2.2・2.4	北	2.0・2.6	N30°E	略円形 径36～84、深さ8～25
西	2.3・1.9・2.3・1.8	南	1.7・2.5					
SB21	3×2 北西棟	6.1×4.5	北	1.4・2.4・2.3	東	?	N28°E	略円・楕円形 径32～62、深さ12～23
			南	1.9・2.2・2.0	西	1.9・2.5		
SB22	3×2 北東棟	6.2×4.8	東	2.1・2.4・1.8	北	2.8・2.0	N24°E	略円・楕円形 径38～70、深さ10～36
			西	1.7・2.0・2.4	南	2.8・2.0		

2 土坑・溝

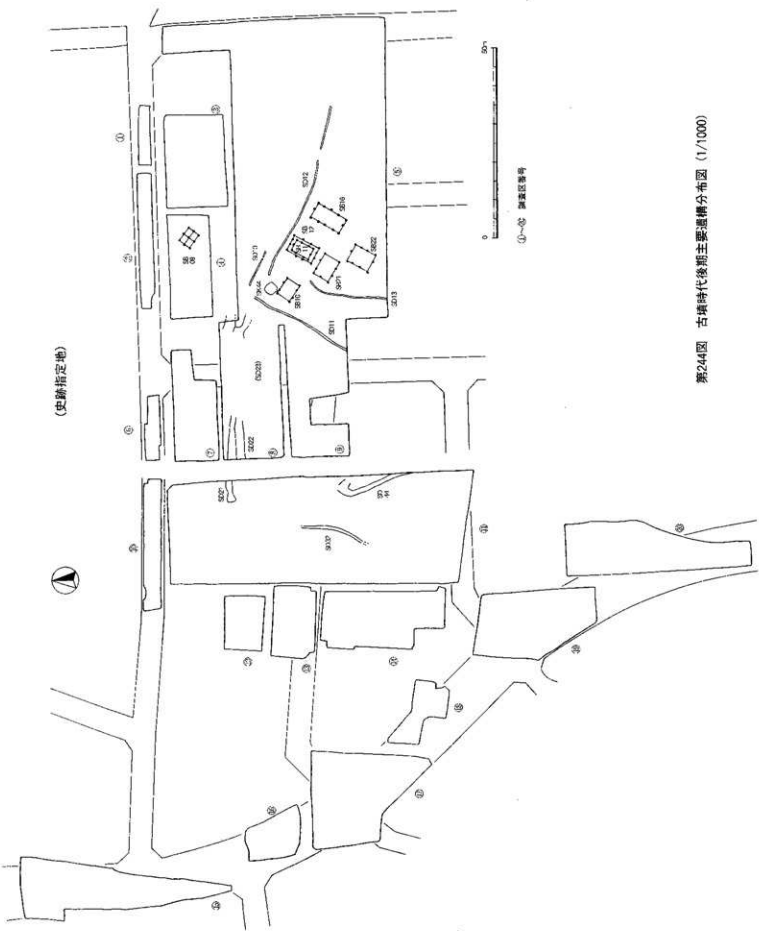
1) 土坑 SK44(第246図)

5区掘立柱建物群の北東部に位置し、隅丸方形を呈する。規模は3.0×2.9mで、深さは7cmと浅い。南東側の低い部分は先行する時期の落込みであろう。遺物の出土は無いが、覆土の暗褐色粘質土はSB11と同様である。

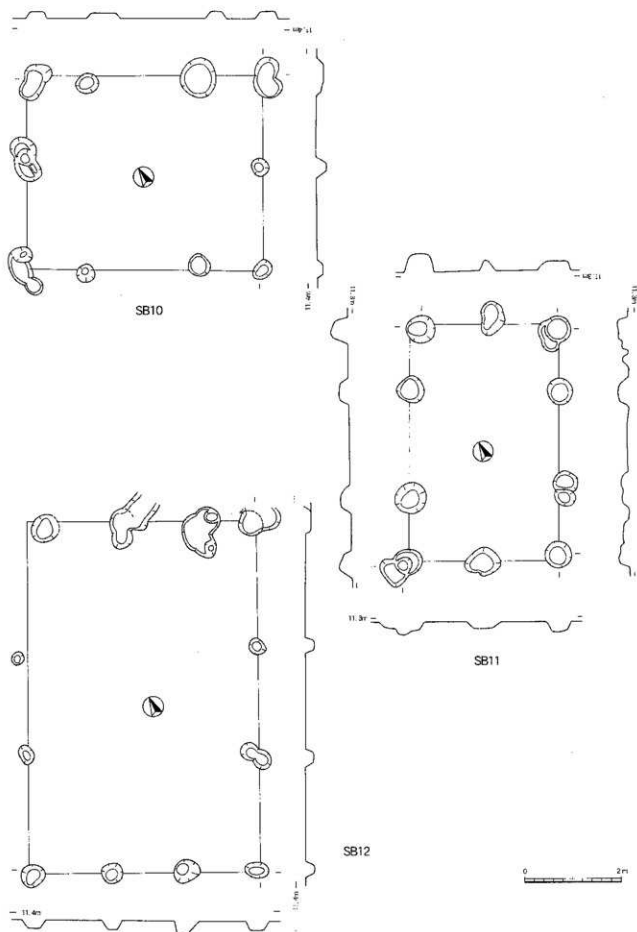
2) 溝 SD10～13・21・22・32・44(第244図・巻末図参照)

5～9区に位置するSD10～13は掘立柱建物域を区画する溝と考えられる。SD10・12は遺存が悪く途切れる検出となった。SD10は幅20～25cm、深さ8cm前後、SD12は幅25～40cm、深さ7～10cmで、ほぼ並行する地点での間隔は2.5～3.0mである。SD11は幅40cmを標準とし、深さは10～15cmである。SD13は幅20～40cm、深さ6～10cmである。

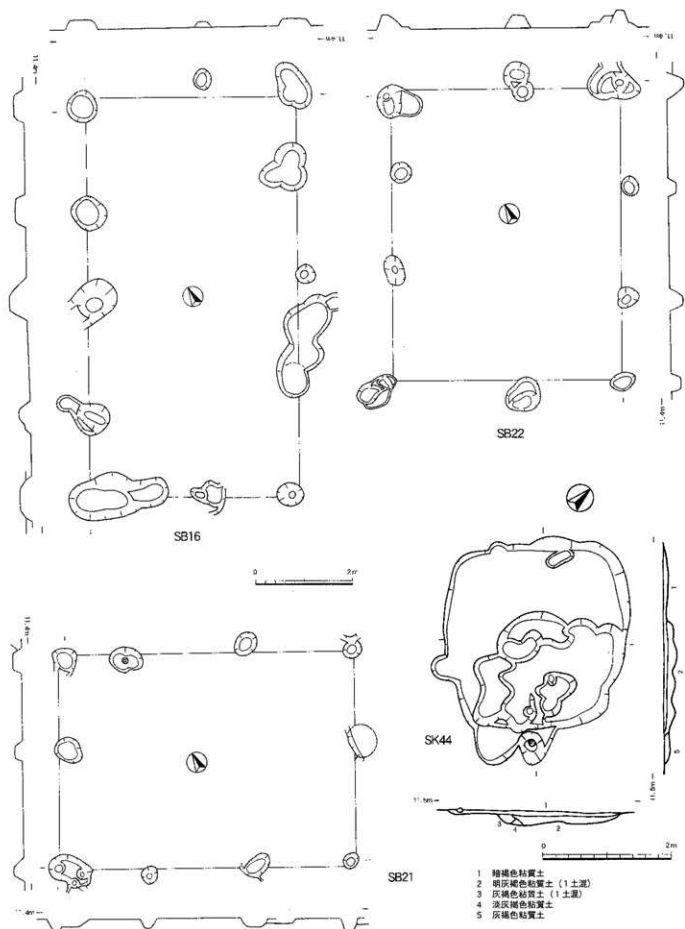
8・9区のSD21・22・32・44は出土土器から当該期に判断したが、土器は細片である。また、これらの溝は断片的な検出であり性格はいずれも不明である。SD21はSD22に先行し、幅1.5～2.2m深さ45～60cm、SD22は幅1.5～2.5m深さ30～40cmである。どちらも流路は自然河道SD23側の東方で、SD23の状態は不明だが当該期においても開口していた可能性が高い。SD32は幅70～110cm深さ13cm前後である。SD44は幅1.1～1.5m、深さ35cm前後である。



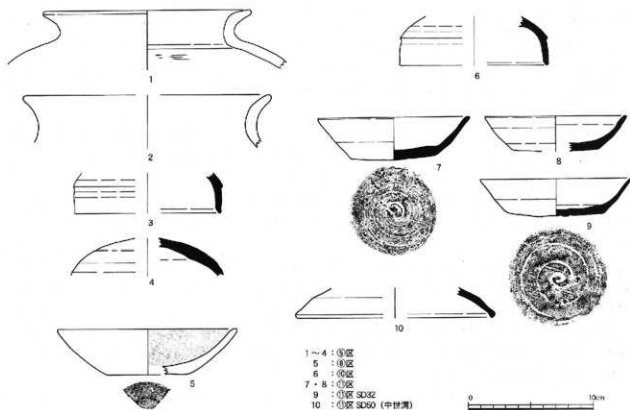
第244図 古墳時代後期主要遺構分布図 (1/1000)



第245図 SB10~12 遺構図 (1/80)



第246図 SB16・21・22 (1/80)、SK44 (1/60) 遺構図



第247図 古墳時代後期～古代出土遺物 (1/3)

古墳時代後期～古代 土器一覽表 (第247図)

番号	出土地点	器種	器種	法 量(mm)	色調(外面/内面)	遺 存	備 考
1	㊸区 N7	甕	土師器	口径167 頸径140	橙白褐色	1/6	赤色粒含む
2	㊸区 L6	甕	土師器		橙褐色	小片	口縁外部スス付着
3	㊸区 J12	蓋	須恵器		青灰色	小片	
4	㊸区 L10	蓋	須恵器		暗褐色・青灰色/青灰色	1/3	
5	㊹区 Q7	椀	土師器	口径144 底径65 器高46.5	淡赤褐色/黒色	1/6	内面黒色処理
6	㊺区 X1	蓋	須恵器		青灰色	小片	
7	㊻区 X3	杯	須恵器	口径121 底径67 器高34	灰白色	底部全周 口縁1/4	
8	㊻区 X3	杯	須恵器	口径113	青灰色	1/4	
9	SD32	杯	須恵器	口径122 底径78 器高31	青灰色	ほぼ全周	
10	SD50	蓋	須恵器	口径(160)	青灰色	小片	

第5節 中世後期

検出した遺構は掘立柱建物跡 (SB) 29棟、井戸 (SE) 39基、欄列 (SA) 7基、土坑 (SK) 36基、溝 (SD) 18条とピット (SP) 多数であり、土坑には、竪穴状遺構を含めている。これらの遺構分布からは集村的な集落構造がみられるもので、さらに11区の南半部から西側と南側一帯に展開する西側集落域と5区の東側集落域に大別できる (第248図)。

東側集落域では欄列による区画内に掘立柱建物7棟と溝が認められ、全般に遺構の密度は低いものである。また、西側集落域で普遍的な井戸と土坑が認められない違いがみられる。また、南北溝によって二つの敷地に分割される可能性がある。

集落の中心域である西側集落域では、溝による区画と建物などの分布から敷地A~Hの8つの敷地 (区画) を設定した。掘立柱建物は同一地点で建替えられるものが多く、これらに付属する井戸や土坑 (竪穴状遺構を含む) が群状に分布している。

なお、掘立柱建物と欄列の多くは、図上の検討作業により復元したものである。これらの多くは、柱穴からの出土遺物は皆無で時期の特定は出来ないが、存続時期の重なる長池キタノハシ遺跡 (野々市町教委 2000) の事例から当該期に判断したものである。

出土遺物からみた集落の時期は概ね14~16世紀に位置づけられるが、中でも14世紀後半~15世紀の遺物が多い。遺物の多くは西側集落域の井戸、土坑、溝から出土したもので、東側集落域では少量であった。これらについては遺物一覧表を参照して頂きたい。

1 東側集落域

1) 掘立柱建物 (第249・250図)

5区の掘立柱建物7棟は、その位置から東群のSB13~15・17と西群のSB18~19に分かれる。

構造は2×1間が4棟、3×1間が1棟、3×2間が2棟である。建物の規模では、面積10㎡級のSB19のほかは面積が23~33㎡の範囲に収まるものである。建物の桁行または梁行の軸方位では、真北から西へ1°のSB13・15、東へ2・3°のSB14・18・19、東へ7・9°のSB17・20の3群に分かれるが、前2者は同じ群とも考えられる。建物の軸方向と複合状況から2ないし3時期が想定できるが、その先後関係は不明である。掘立柱建物の属性を下表にまとめたが、柱穴の間隔は北側または西側をはじまりとする順序で表記している。

掘立柱建物一覧表

遺構	桁×梁等	規模(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	梁/桁	面積(㎡)	軸方位	柱穴形・径・深さ(cm)
SB13	2×1 南北棟	6.2×3.9	東	3.4-2.8	北	3.6	NI°W	略円形 径28-52、深さ9-23
			西	3.4-2.8	南	3.9		
SB14	2×1 東西棟	7.6×4.3	北	3.3-4.2	東	4.3	N3°E	略円・楕円形 径42-88、深さ18-33
			南	3.9-3.7	西	4.2		
SB15	2×1 南北棟	5.6×4.3	東	2.3-3.3	北	4.2	NI°W	略円形 径42-64、深さ18-25
			西	2.5-2.9	南	4.3		
SB17	3×2 南北棟	6.2×4.4	東	1.5-2.0-2.6	北	2.2-2.2	N7°E	略円・楕円形 径36-84、深さ13-23
			西	2.0-2.1-2.1	南	2.3-2.1		
SB18	2×1 南北棟	5.6×4.4	東	2.7-2.9	北	4.2	N3°E	略円形 径28-52、深さ14-22
			西	2.9-2.6	南	4.4		
SB19	3×1 東西棟	4.3×2.8	北	1.5-1.3-1.4	東	2.8	N2°E	略円形 径20-50、深さ13-21
			南	1.4-1.8-1.1	西	2.8		
SB20	3×2 南北棟	6.0×3.9	東	2.8-3.2	北	3.7	N9°E	略円形 径28-56、深さ12-23
			西	3.0-3.0	南	3.9		

2) 欄列 (第251図)

集落域を画する欄列は、南北欄列のSA01と東西欄列のSA02・03がみられる。方位から推察する掘立柱建物との併存関係は、SA02とSB17・20、SA03とSB13・15である。屈折するSA01の方位は南半部がSA02と直角関係

となり前者に相応するが、北半部は中間のSB14・18・19と近い方位で併存関係が考えられる。

SA01は、9間構成で長さ19.0m、中央部においてやや西方に屈折する。柱穴間の標準は2.0・2.1mで短いもので1.7m、長いもので2.6mである。略円形の柱穴の大きさは径33～50cmが標準で、深さは11～30cmである。方位は北半がN2°Eで、南半ではN7°Eとなる。

SA02は、6間構成で長さ24.8mである。柱穴の間隔は4.2mと4.5m、推定した3.8mがあり、他の欄列より広い。両端の柱穴は楕円状となり径は50～70cm、深さ25cmで、その間の柱穴より大きい。他の柱穴は径40～50cmが標準で深さは20cm前後である。方位はN82°Wである。

SA03は、11間構成で長さ31.0mである。柱穴の間隔は3.0mほどが標準で短いものは2.2mである。柱穴は径30～50cmが標準で深さは15～25cm前後である。方位はN88°Eである。

3) 溝 (第248図・巻末図参照)

SD14～17は、幅30cm前後、深さ5cm前後となる同規模の溝である。直角に折れるSD14とSD16による東西の区画幅は11mで、この区画の内側から珠洲焼播鉢118が出土した。並行するSD15～17の間隔は、順に2.7～3.0m、3.3～4.0mである。また、直線的に流路をもつ溝の方位は、SD14の東西溝がN8°W、南北溝ではSD15がN6°E、SD17はN3°Eである。

4) 出土遺物 (第282図)

出土遺物はごく僅かである。5区の西端部で14世紀中葉頃の珠洲焼播鉢118・119の小片が出土した。5区との境界付近にあたる9区東端部での珠洲焼製の小片120にはヘラ書きによる「天」の文字がみられる。

2 西側集落域

1) 敷地の設定 (第248図)

西側集落域では敷地A～Hを設定した。東西または南北方向の敷地区画溝を確認できたものは、敷地A～C・E・Hである。

11区に位置する敷地Aは西側集落域の東端にあたり、南北溝のSD58が東方外部域との境界になろう。敷地Aとその西隣の敷地Bを画する溝はSD47で、敷地B・Cを画する溝はSD68である。これらの区画溝の距離から、敷地Aの東西幅は14.5～15.5m、敷地Bの東西幅は15.5～16.0mである。両敷地の北方域を画する溝は、近接して東西方向に平行するSD29～31が相応し、敷地南北の距離は45mほどであろう。

敷地Cは13・14・18区のSD68・105・107によって囲まれるもので、これらの溝がつながり長方形の区画が構成されるものと推定している。この敷地Cの推定規模は溝の内側で、南北約38m、東西約28～30m、面積は約1102㎡(333坪)である。

20区の敷地Eとその南の敷地Hは東西溝SD120によって画されているものと考えられ、このSD120と二つの敷地を挟む11区の東西溝SD31との距離は約90mである。また、敷地A・Bの東西幅約15mは敷地Cの半分となる。以上、区画溝から敷地の大きさが南北約45m、東西約15mまたは約30m程になるものと推察し、それぞれの敷地を設定したものである。しかし、11区のSD43、14区のSD72、17区のSD102・103については理解できていない。

各敷地の遺構は以下のとおりであるが、()内は判断が不明なものである。

敷地A: SB24～29、SE05・07、SK75～81・83・86・87

敷地B: SB30～32、SE02・(03)・04・06・21～23、SK82・84・85・88・89・100・101

敷地C: SB33～35・41、SA04、SE08～20・34～41、SK92～95・98・99

敷地D: SE24～26

敷地E: SB37～40、SA05～07、SE27～29・31、SK114～120

敷地F: SB42～44、SK124・125・127

敷地G: SB45～47、SE56、SK130～135・137～140

敷地H: SE57、SK141・142

2) 獨立柱建物 (第252~257図・第269図)

獨立柱建物22棟を検出しているが、調査区の関係から全体を確認できたものは9棟である。

建物の構造は、推定も含め数えると、2×1間が10棟、3×1間が3棟、2×2間が8棟である。2×2間の8棟のうち4棟は総柱になるものである。建物の規模は、2×1間が約7・14~26㎡、3×1間が約31・39㎡、2×2間では約22・28~50㎡である。建物の桁行または梁行の軸方位では、真北から西へ3°のSB37・44、東へ9・10度のSB24・29・33・42・43の2群の抽出が可能であるが、他の建物は西1°~東6°の範囲内であり分離できない。獨立柱建物の属性を下表にまとめたが、柱穴の距離は北側または西側をはじまりとする順序で表記している。

出上遺物で図示し得たものは第269図1~3で、SB24・41・42それぞれの柱穴Paからのものである。

獨立柱建物一覧表 () 内は推定

遺構	敷地・区	桁×梁等	規模(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	梁/桁	面積(㎡)	軸方位	柱穴形・径・深さ(cm)
SB24	A 11区	2×2 南北棟	6.7×4.2	東 3.2・3.4 西 3.3・3.4	北 2.8・1.4 南 2.85・1.35	0.63	28.1	N6°E	略円形 径26~62、深さ32~53
SB25	A 11区	2×2 總柱 南北棟	6.0×4.9	東 2.7・3.0 中 2.9・3.2 西 2.7・3.0	北 2.8・2.1 中 2.7・2.2 南 2.6・2.4	0.81	29.4	N2°E	略円・楕円形 径32~48、深さ36~57
SB26	A 11区	2×1 東西棟	5.5×3.7	北 2.6・2.9 南 2.7・2.8	東 3.7 西 3.6	0.67	20.4	N5°E	略円形 径26~62、深さ29~44
SB27	A 11区	2×1 東西棟	4.4×3.6	北 2.2・2.2 南 2.1・2.3	東 3.6 西 3.6	0.82	15.8	N1°E	略円・略方形 径36~76、深さ25~76
SB28	A 11区	2×1 東西棟	6.3×4.0	北 3.0・3.2 南 3.8・2.6	東 4.0 西 3.9	0.63	25.2	N2°E	略円形 径28~(70)、深さ36~42
SB29	A 11区	2×1 東西棟	3.5×2.1	北 1.4・2.1 南 1.4・1.8	東 2.0 西 2.1	0.60	7.4	N9°E	略円形 径26~58、深さ30~39
SB30	B 11区	2×1 南北棟	5.9×3.8	東 2.9・2.9 南 2.8・3.1	北 3.8 南 3.8	0.64	22.4	N4°E	略円形 径32~60、深さ28~56
SB31	B 11・14 区	2×2 總柱 東西棟	7.1×6.0	北 3.5・3.6 中 3.4・3.3 南 ?・3.6	東 3.0・3.0 中 3.2・2.9 西 3.0・?	0.85	42.6	N3°E	略円形 径26~56、深さ28~48
SB32	B 11区	(2×1) 南北棟	6.1×?	東 2.9・3.3 西 ?				N2°E	略円形 径52~64、深さ48~62
SB33	C 14区	(3)×? 南北棟	8.4×?	東 2.8・2.7・2.9 西 ?				N10°E	略円形 径30~60、深さ30~42
SB34	C 14区	2×? 南北棟	7.4×?	東 3.7・3.7 西 ?				N2°E	略円形 径38~42、深さ30~37
SB35	C 14区	3×1 東西棟	7.4×4.2	北 2.4・2.5・2.5 南 ?	東 4.2 西 ?	0.57	31.1	N4°E	略円形 径24~52、深さ17~24
SB37	E 17区	(2×2) 南北棟	7.9×6.2	東 4.4・3.5 西 ?	北 2.6・3.6 南 ?	(0.78)	(50.0)	N3°W	略円形 径88~120、深さ19~33
SB38	E 17区	(2×2) 南北棟	(6)×5.3	東 2.8・? 西 2.8・?	北 2.6・2.7 南 ?	(0.88)	(31.8)	N2°E	略円形 径20~50、深さ13~24
SB39	E 17区	(2×1) 南北棟	(4.6)×3.4	東 2.3・? 西 ?	北 3.4 南 ?	(0.74)	(15.6)	N6°E	略円形 径38~58、深さ25~28
SB40	E 17区	(2×1) 南北棟	(4.6)×3.1	東 2.3・? 西 ?	北 3.1 南 ?	(0.67)	(14.3)	N1°W	略円形 径38~58、深さ25~28
SB41	C 18区	(2×2) 總柱 南北棟	(7.2)×6.7	東 ? 中 ?・3.7 西 ?・3.6	北 ? 中 3.7・? 南 3.3・3.4	(0.93)	(48.2)	N5°E	略円形 径42~96、深さ25~37

遺構	敷地・区	桁×梁等	規模(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	梁/桁	面積(m ²)	軸方位	柱穴形・径・深さ(cm)
SB12	F 19区	(2×1) 南北棟	6.2×?	東 3.1・3.1 西 ?				N10°E	略円形 径40~96、深さ25~47
SB13	F 19区	(2×1) 南北棟	5.6×?	東 2.8・2.8 西 ?				N10°E	略円形 径32~40、深さ17~33
SB14	F 19区	(3×1) 南北棟	7.2×?	東 2.5・2.4・2.3 西 ?				N3°W	略円形 径30~60、深さ18~37
SB45	G 20区	3×1 南北棟	7.4×5.3	東 2.4・2.5・2.5 西 2.5・2.2・2.6	北 5.3 南 5.1	0.70	39.2	N3°E	略円形 径20~56、深さ19~44
SB46	G 20区	2×2 総柱 東西棟	6.0×3.8	北 2.2・3.7 中 2.4・3.5 南 2.7・3.4	東 1.8・2.1 中 1.6・2.1 西 2.0・1.8	0.63	22.8	N6°E	略円形 径20~66、深さ22~49
SB47	G 20区	(2×2) (東西棟)	6.0×3.9	東 2.8・2.0 西 ?				N1°E	略円形 径52~72、深さ44~71

3) 横列

南北横列 SA04 (敷地 C・第254図) と東西横列 SA05~07 (敷地 E・第255・256図) の4基を検出したが、出土遺物はなかった。

SA04は、3間分の長さ11.6mを検出しており、南方へ伸びる可能性がある。柱穴間は北から3.8・4.1・3.7mを測り、略円形の柱穴の大きさは径38~52cm、深さ20~29cmである。方位はN10°Eで、SB33に付属しよう。

SA05は、5間で長さ13.2mである。柱穴の間隔は2.3・2.7mで、略円形の柱穴の大きさは径36~68cm、深さ15~40cmである。方位はN84°Wである。

SA06は、5間で長さ9.9mである。柱穴の間隔は西から2.1・1.9・1.8・2.5・1.6mで、略円形の柱穴の大きさは径36~68cm、深さ20~31cmである。方位はN82°Wである。

SA07は、3間分の長さ7.1mを検出した。柱穴の間隔は西から2.7・2.2・2.2mで、略円形の柱穴の大きさは径30~40cm、深さ11~19cmである。方位はN87°Eである。

4) 井戸 (第258~260図・第269~278図)

円筒状の掘方になるものや、ある程度の深さを有するもの39基を井戸と判断した。

内部に石組みが残るものはSE24の1基で、他は素掘りのものである。井戸上面の長軸規模では、最も小さい62cm~100cm以内のものが21基、101~202cmが15基、300cm以上が3基となる。規模3m代の大形井戸は、SE05・34の2基がみられ、底面標高は最も低くなる部類である。5mを超える大型のSE21は掘方の傾斜が緩い土坑状の形態で、他とは異なる性格の貯水場であろう。井戸底面の標高の範囲は9.89~10.71mである。

井戸からは遺物がまとまって出土しており、第269~278図に59点を図示した。

井戸一覧表 () 内は推定

遺構	敷地・区	平面形	上面規模(cm)	底面規模(cm)	底面標高(m)	備考
SE02	B・11区	楕円形	(108)×78	64×60	10.67	
SE03	Bか・11区	略円形	118×104	92×85	10.53	
SE04	B・11区	略円形	96×80	78×65	10.71	
SE05	A・11区	楕円形	314×242	240×180	9.97	SK77が先行
SE06	B・11区	略円形	80×80	64×60	10.64	SK88の北東隅に位置する

遺構	敷地・区	平面形	上面規模(cm)	底面規模(cm)	底面標高(m)	備考
SE07	B・11区	略円形	130×114	80×65	10.18	
SE08	C・14区	略円形	82×78	50×48	10.30	
SE09	C・14区	略円形	94×90	52×48	10.22	
SE10	C・14区	略円形	76×68	50×50	10.37	
SE11	C・14区	略円形	90×90	60×57	10.18	
SE12	C・14区	略円形	68×65	58×48	10.59	
SE13	C・14区	略円形	80×78	66×64	10.16	
SE14	C・14区	略円形	95×92	46×43	10.17	
SE15	C・14区	略円形	62×56	38×36	10.36	
SE16	C・14区	略円形	86×70	54×52	9.94	
SE17	C・14区	略円形	64×64	38×37	10.41	
SE18	C・14区	略円形	80×70	62×52	10.12	
SE19	C・14区	略円形	96×88	72×70	10.11	
SE20	C・14区	略円形	78×76	65×62	10.31	SD68に先行
SE21	B・11・14区	略方形か	620×520	?×220	10.2~10.3	水場的な給水施設か
SE22	B・14区	略円形	98×92	64×62	10.16	SK101の北側隣に位置する
SE23	B・14区	楕円形	104×75	58×56	10.22	
SE24	D・16区	略円形	170×158	88×84	10.33	自然産の石組が一部残存
SE25	D・16区	略円形	202×170	108×93	10.09	
SE26	D・16区	略円形	115×97	74×68	10.46	
SE27	E・17区	楕円形	178×148	156×108	10.65	
SE28	E・17区	略円形	104×87	78×70	10.44	
SE29	E・17区	略円形	108×103	70×65	10.49	
SE31	E・17区	略円形	96×94	84×65	10.30	
SE34	C・18区	略円形	370×340	260×214	9.89	SD105が先行
SE35	C・18区	略円形	(75)×57	(55)×48	10.33	
SE36	C・18区	略円形	160×146	80×70	10.22	
SE37	C・18区	略円形	152×118	58×48	10.30	
SE38	C・18区	略円形	96×84	66×59	10.32	
SE39	C・18区	略円形	94×88	66×50	10.17	
SE40	C・18区	略円形	(80)×67	60×58	10.21	
SE41	C・18区	略円形	156×152	102×90	10.28	
SE56	G・20区	略円形	176×160	136×113	10.04	
SE57	H・20区	略円形	190×160	108×90	10.46	

5) 土坑(竪穴状遺構)(第261-267図・第278-280図)

1坑とした46基には、作業小屋に理解される多くの竪穴状遺構を含めている。このなかで、長軸の規模が2m以内のものは竪穴状遺構とは言えないであろう。また、平面形が隅丸長方形になるもので、SK76・78・85・98のように長軸の長さが短軸の2倍以上となる細長い形状のものや、楕円形で大型のSK137・138などは、竪穴状遺構との判断がつかないものである。

土坑一覧表 ()内は推定

遺構	敷地・区	平面形	上面規模(cm)	底面規模(cm)	深さ(cm)	方位	備考
SK75	A・11区	楕円形	(290)×205	(220)×130	23	N5°E	
SK76	A・11区	隅丸長方形	234×120	208×95	14	N2°W	
SK77	A・11区	楕円形	285×(200)	205×(120)	32	N75°W	SE05に先行
SK78	A・11区	隅丸長方形	330×140	290×90	21	N5°W	
SK79	A・11区	隅丸長方形	(500以上)×220	(?)×130	41	N6°W	
SK80	A・11区	長楕円形	(500以上)×180	(?)	30	N1°W	
SK81	A・11区	隅丸長方形	414×320	320×260	23	N83°W	
SK82	B・11区	略円形か	?	?	25		個別図なし
SK83	A・11区	隅丸長方形	200×(130)	180×?	20	N6°E	
SK84	B・11区	隅丸長方形	(290)×280	265×(265)	18	N5°E	SB30に付属か
SK85	B・11区	隅丸長方形	327×130	(310)×112	11	N2°E	
SK86	A・11区	楕円形	170×90	100×78	32	N83°E	
SK87	A・11区	?	260×?	230×?	20		
SK88	B・11区	隅丸長方形	(360以上)×310	?×200	37	N6°E	北東部に SE06
SK89	B・11区	隅丸長方形	192×172	(180)×142	6	N3°E	SB31に付属か
SK90	B・11区	?	210×?	185×?	22		
SK92	C・14区	隅丸長方形	(400以上)×290	?×240	43	N73°W	SD68に先行
SK93	C・14区	隅丸長方形か	280×?	228×?	27	N82°W	SD72が先行、SD68-SK94に先行
SK94	C・14区	隅丸長方形	(340)×220	300×200	30	N88°W	SK93が先行、SD68に先行
SK95	C・14区	隅丸長方形	(300以上)×180	?×125	16	N80°W	SD68に先行
SK98	C・14区	隅丸長方形	410×120	366×72	27	N83°W	
SK99	C・14区	隅丸長方形	300×300	210×180	28	N4°E	
SK100	B・14区	隅丸長方形	310×200	290×178	9	N3°E	
SK101	B・14区	隅丸長方形	(480以上)×300	?×263	18	N5°E	
SK114	E・17区	隅丸長方形	(610)×420	(550)×350	32	N88°E	SK115-117・SD103が先行、SK116に先行
SK115	E・17区	隅丸長方形	580×(370)	550×?	15	N89°E	SK114に先行
SK116	E・17区	隅丸長方形	(340以上)×?		15		SK114が先行
SK117	E・17区	隅丸長方形か	280×213	260×190	15	N14°E	SK114に先行
SK118	E・17区	隅丸長方形	(240)×120	?×97	11	N84°W	SK115が先行
SK119	E・17区	隅丸長方形	(310)×294	?×270	21	N7°E	SB37に付属か

遺構	敷地・区	平面形	上面規模(cm)	底面規模(cm)	深さ(cm)	方位	備考
SK120	E・17区	隅丸方形か	(340)×?		13	N9°E	
SK124	F・19区	隅丸長方形か	605×?	576×?	15		
SK125	F・19区	楕円形	114×86	65×56	60	N69°W	
SK127	F・19区	楕円形か	?×120	?×64	50	N87°E	
SK130	G・20区	隅丸方形か	370×?	230×?	46		
SK131	G・20区	楕円形	320×290	280×220	32	(N4°E)	
SK132	G・20区	楕円形か	(100×80)		40	N80°W	SKI33が先行
SK133	G・20区	略円形	184×170	150×76	69	N8°E	SKI32に先行
SK134	G・20区	隅丸方形	286×(270)	234×(210)	21	N62°W	
SK135	G・20区	楕円形	(150)×130	114×96	43	N28°E	
SKJ37	G・20区	楕円形	450×300	335×170	74	N82°W	SKI38・139が先行
SKJ38	G・20区	楕円形	(540)×420	?×340	67	N11°W	SKI39が先行
SK139	G・20区	隅丸長方形	200×(160)	174×?	16	N18°W	
SK140	H・20区	不整形	500×400		90~155		複数の上坑の複合か
SK141	H・20区	楕円形	180×(150)	165×?	19	N59°W	
SK142	H・20区	略隅丸長方形	405×300	392×290	18	N88°W	

6) 溝 (第215図・巻末図参照、第281・282図)

溝は基本的に各敷地を画するものと考えられ、その流路の方向は東西および南北方向である。溝の規模では、幅が2m前後以上となる幅の広いもの、幅が1m前後のもの、70cm前後、50cm以下のものがある。

溝の関係として推定されるものに、SD30はSD68の排水溝、SD43とSD72は同一溝、SD68とSD105およびSD107は同一溝があげられよう。

個別遺構図として図示したものは、SD68 (第268図) とSD119・120である。敷地の区画に関しては先に記したので、溝の属性について下表にまとめ、溝の幅についてはその溝の標準的な幅を示した。溝の方位については概数値である。なお、SD118は近世の溝であり注意願いたい。

溝一覧表 () 内は推定

遺構	区	幅(cm)	深さ(cm)	方位
SD29	11	30~38	10~19	N81°W
SD30	11	70~108	14~30	N82°W
SD31	11	70~110	25前後	N82°W
SD34	11	70~95	16~23	N
SD43	11	80~100	15~25	N85°W
SD47	11	50~70	8~16	N3°E
SD58	11	40~80	12~17	N6°W
SD67	13	35~50	13~21	N85°W
SD68	13・14	200~280	24~47	N85°W N12°E N3°E

遺構	区	幅(cm)	深さ(cm)	方位
SD72	14	40~85	7~16	N82°W
SD102	17	50~60	11~17	N88°E
SD103	17	46~70	32~36	N88°W
SD105	18	170~190	41	N3°E
SD107	18	?	?	?
SD118	20	120~150	12~16	-
SD119	20	250~360	80~99	(N78°E)
SD120	20	(200以上)	40前後	(N88°W)

3 出土陶磁器の組成と比率

本遺跡で使用された製品の破片数量とその比率を求めたものが下表である。先に述べたが、製品の時期は14世紀～16世紀におさまるものである。

陶磁器破片数量表

製 品			数量	製 品			数量	
中国	青磁	碗	33	国産	瀬戸・美濃焼	茶入	3	
		皿	1			天目茶碗	5	
		盤	1			計	30	
		計	35			珠洲焼	壺	47
	白磁	皿	6		壺		16	
		坏	2		播鉢		43	
		計	8		その他		9	
	染付	碗	1		計	115		
		皿	6		越前焼	壺	65	
		計	7			壺	1	
天目茶碗	1	播鉢	9					
中国製品合計	51	その他	4					
東南アジアか	壺または鉢	1	計	82				
船載品合計	52	国産	加賀焼	壺	16			
国産	瀬戸・美濃焼			灰釉	皿	壺	2	
						丸皿	1	播鉢
					御皿	1	その他	5
			丸碗		3	計	24	
			平碗		3	信楽焼	壺	3
			天目茶碗		1		播鉢	1
			小壺		1		計	4
			瓶子		1	瓦質土器	花瓶	1
			大海茶入		1		壺形	1
			花瓶		1		不明	6
			香炉		1		計	8
			その他		1	十師質土器	皿	81
			御皿		1	国産製品合計	344	
			壺		1	総 計	396	

産地別の破片量と比率表

	製 品	数量	比率(%)
船載	中国製品	51	12.9
	東南アジアか	1	0.2
	(船載品計)	(52)	(13.1)
国産	瀬戸・美濃	30	7.6
	珠洲焼	115	29.0
	越前焼	82	20.7
	加賀焼	24	6.1
	信楽焼	4	1.0
	瓦質土器	8	2.0
	土師質土器	81	20.5
	(国産製品計)	(344)	(86.9)
総 計	396	100.0	

壺・壺・播鉢の産地別比率表

区 分	壺(%)	壺(%)	播鉢(%)
珠洲焼	36.7	64.0	79.6
越前焼	50.8	16.0	16.7
加賀焼	12.5	8.0	1.85
信楽焼	0	12.0	1.85
	100.0	100.0	100.0

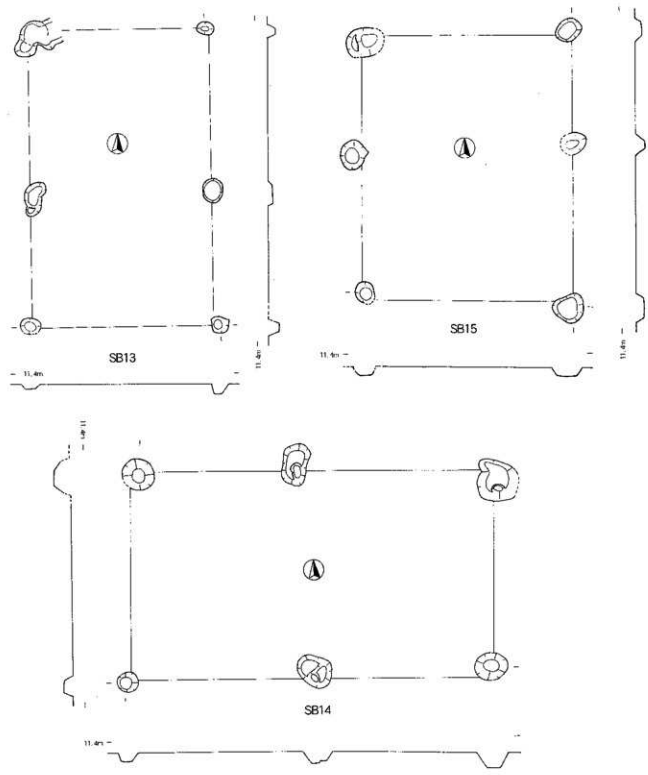
中継後継通称一覽表 (第309~282頁)

番号	市上地点	種別	通称	法線・車線	器種	種別	備考
1	SE21	石製品	緑石	長さ(63)幅35 厚さ29 重さ85	皿	SE21-Pa	上野器
2	SE11-Pa	乾漆			部鉢	SE11-Pa	乾漆
3	SE42-Pa	西磁			皿	SE42-Pa	西磁
4	SE27	上野器			小片	SE27	上野器
5	SE24	石製品			行火	SE24	石製品
6	SE24	石製品			石臼	SE24	石製品
7	SE24	石製品			石臼	SE24	石製品
8	SE24	石製品			石臼	SE24	石製品
9	SE24	石製品			茶臼	SE24	石製品
10	SE25	香盤			鉢	SE25	香盤
11	SE25	磁洲			部鉢	SE25	磁洲
12	SE26	石製品			行火	SE26	石製品
13	SE26	石製品			石臼	SE26	石製品
14	SE27	磁洲			罎	SE27	磁洲
15	SE28	上野器			罎	SE28	上野器
16	SE28	上野器			罎	SE28	上野器
17	SE28	石製品			石鉢	SE28	石製品
18	SE28	石製品			石鉢	SE28	石製品
19	SE28	石製品			石鉢	SE28	石製品
20	SE29	上野器			皿	SE29	上野器
21	SE33	瀬戸・美濃			菓子	SE33	瀬戸・美濃
22	SE36	石製品			外縁石	SE36	石製品
23	SE36	石製品			炉礎石	SE36	石製品
24	SE37	瀬戸・美濃			茶入	SE37	瀬戸・美濃
25	SE39	石製品			破石	SE39	石製品
26	SE10	石製品			破石	SE10	石製品
27	SE20	磁洲			部鉢	SE20	磁洲
28	SE21	石製品			石鉢	SE21	石製品
29	SE21	石製品			茶臼	SE21	石製品

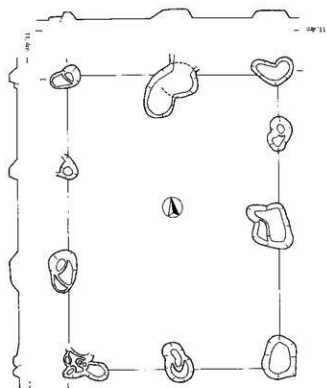
番号	市上地点	種別	通称	法線・車線	器種	種別	備考
30	SE21	石製品	緑石	長さ(63)幅35 厚さ29 重さ85	部鉢	SE21	中野石 大塚産か
31	SE22	石製品	行火	高さ(133)厚さ75 重さ(58)	行火	SE22	上野型
32	SE22	石製品	行火	幅(83)厚さ(11) 重(80)重さ(78)	行火	SE22	上野型
33	SE23	石製品	行火	幅(59)厚さ(71) 重(46)厚さ(26)	行火	SE23	上野型
34	SE25	瀬戸・美濃	皿	口径110	皿	SE25	瀬戸産、14C後半か
35	SE25	瀬戸・美濃	天蓋		天蓋	SE25	瀬戸・美濃
36	SE26	瓦葺土器	花風	高さ69	花風	SE26	1/5 14C前半-16C
37	SE27	磁洲	罎		罎	SE27	瀬戸
38	SE27	磁洲	罎		罎	SE27	瀬戸
39	SE27	石製品	七鉢	径(260)厚さ46	七鉢	SE27	緑色磁州瓦
40	SE27	石製品	石鉢か	長さ(177)幅(128) 厚さ37 重さ835	石鉢か	SE27	外函スス付番
41	SE27	石製品	外縁石	長さ(146)幅(100) 厚さ37 重さ779	外縁石	SE27	D型
42	SE29	行火蓋	行火蓋	厚さ35 重さ284	行火蓋	SE29	1/3
43	SE31	瀬戸・美濃	平鉢	口径116	平鉢	SE31	1/3 大塚産(美濃、14C末)
44	SE31	石製品	行火	厚さ22 重さ175	行火	SE31	瀬戸型
45	SE31	石製品	行火	径さ93	行火	SE31	瀬戸型
46	SE34下層	上野器	罎	口径61 底径60 高さ22	罎	SE34下層	1/4 14C後半
47	SE34下層	磁洲	罎	口径120	罎	SE34下層	1/5 前期、14C後半
48	SE34上層	磁洲	罎	底径86	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
49	SE34上層	磁洲	罎	底径145	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
50	SE34上層	磁洲	罎	底径158	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
51	SE34上層	磁洲	罎		罎	SE34上層	1/5 前期、14C
52	SE34上層	磁洲	罎	底径190	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
53	SE34上層	磁洲	罎	底径213	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
54	SE34上層	磁洲	罎	底径244	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
55	SE34上層	磁洲	罎	底径284	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
56	SE34上層	磁洲	罎	底径324	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
57	SE34上層	磁洲	罎	底径364	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
58	SE34上層	磁洲	罎	底径404	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
59	SE34上層	磁洲	罎	底径444	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
60	SE34上層	磁洲	罎	底径484	罎	SE34上層	1/5 前期、14C
61	SE10	石製品	石臼	径(260)厚さ100	石臼	SE10	上野・花崗岩産、瀬戸産(瀬戸方面)
62	SE56	石製品	破石	幅(280)厚さ18	破石	SE56	中野石、大塚産か
63	SE25	石製品	部鉢	口径73 底径60 高さ19	部鉢	SE25	中野石
64	SE25	石製品	部鉢	口径140	部鉢	SE25	1/6 15C前半

番号	出土地点	種類	器種	法量・電量	保存	備考
101	SD68	土製品	土埴	長さ40 幅10	小片	
102	SD68	石製品	石槌	高さ32 長さ55	小片	杵村用、10C 以降
103	SD68	石製品	砥石	長さ86 幅33	小片	杵村用、砥石
104	SD68	石製品	行火	奥行115	小片	横口型
105	SD105	陶器	器鉢	高さ94 幅41	小片	V 期
106	SD118	瀬戸・美濃	内戸	高さ94 幅41	1/2	117-118C、瀬戸系白磁器伊
107	SD118	瀬戸・美濃	香伊	高さ94 幅41	完	横口型、15C 後半
108	SD118	石製品	行火	長さ(40)	小片	横口型
109	SD118	石製品	行火		小片	横口型
110	SD119	珠洲	器		小片	V 期
111	SD120	石製品	伊豫石	幅121	小片	
112	SD97	土製品	器	口径78	1/5	15C 前半-1半
113	SP08	陶器	器鉢		小片	V 期
114	SP10	青磁	瓶	1径(158)	1/8	15C 前半
115	SP11	珠洲	器鉢		小片	
116	SP12	土製品	瓶	口径(110)	小片	3000年、14C 後半
117	SP12	瀬戸・美濃	水筒	口径28 高さ24	1/2	瀬戸系白磁、14C
118	SP12	珠洲	器鉢	高さ20	小片	V 期、14C 後半
119	SP12	珠洲	器鉢		小片	V 期、14C 後半
120	SP12	珠洲	器鉢		小片	へら型、文字付、14C
121	SP12	土製品	器鉢	口径50	1/4	117型保存器、10C 半

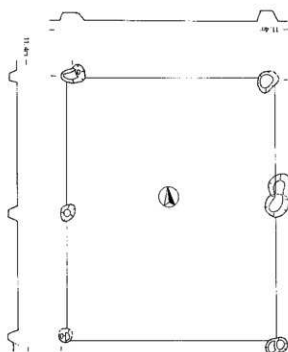
番号	出土地点	種類	器種	法量・電量	保存	備考
65	SK20	加賀	茶	1径(257)	小片	14C 前半、流し、谷津
66	SK80	珠洲	器鉢	口径(307)	小片	V 期
67	SK82	越前	器鉢	口径(360)	小片	
68	SK83	珠洲	茶	1径(367)	1/6	V 期
69	SK95	加賀	文化土器	口径23.8 高さ1.65	1/5	香林、元禄元年(1095年)加賀
70	SK99	土師器	皿	口径70 高さ13	完	外周厚弁者、14C 後半
71	SK99	土師器	皿	口径68	小片	14C 後半
72	SK99	珠洲	器鉢	高さ106	1/3	V 期
73	SK99	土師器	皿	口径33 高さ50	完	15C 前半
74	SK101	珠洲	器鉢	高さ19	小片	V 期
75	SK114	土師器	皿	口径(140) 高さ80	1/6	16C 中 全沢から
76	SK114	土師器	皿	口径(127) 高さ80	1/6	16C 中 全沢から
77	SK114	珠洲	器鉢	高さ20	完	V 期
78	SK114	越前	茶	高さ139	器鉢	10C
79	SK114	石製品	伊豫石	高さ(224)	完	10C
80	SK114	石製品	伊豫石	長さ(200) 高さ290	完	水山産、灰石
81	SK125	珠洲	器鉢	高さ160	小片	V 期
82	SK127	土師器	行火		1/3	上田 D 型
83	SK132	石製品	伊豫石		1/8	15C 後半
84	SK137	瀬戸・美濃	天目茶碗	口径108	1/8	15C 後半
85	SK142	石製品	砥石	長さ(65) 幅39	小片	中砥石
86	SD21	珠洲	器鉢	高さ38 長さ170	小片	V 期
87	SD16	瀬戸・美濃	丸皿	口径(267)	小片	大器、14C 中葉
88	SD68 下層	青磁	碗	口径(148)	小片	15C 中葉
89	SD68	青磁	碗	口径(142)	小片	15C 中葉
90	SD68	青磁	碗	口径(139)	1/7	14C 末-15C 中葉
91	SD68	青磁	碗	高さ1653	器鉢	
92	SD68	白磁	皿	口径88 高さ45	1/8	15C 後半
93	SD68 上層	瀬戸・美濃	天目茶碗	口径118	1/7	大器、11C 末
94	SD68	瀬戸・美濃	茶碗	口径155	1/6	15C 前半
95	SD68 上層	瀬戸・美濃	茶入	口径27 高さ33	完	
96	SD68 下層	瀬戸・美濃	花瓶	高さ52	小片	香林系、灰磁、香器タイプ、15前半
97	SD68 上層	珠洲	茶		小片	和前期
98	SD68 下層	珠洲	茶		小片	V 期
99	SD68 下層	珠洲	器鉢		小片	V 期
100	SD68 上層	越前	器鉢		1/4	15C



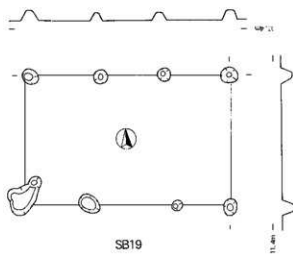
第249図 SB13~15 遺構図 (1/80)



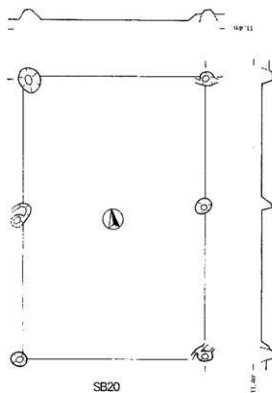
SB17



SB18



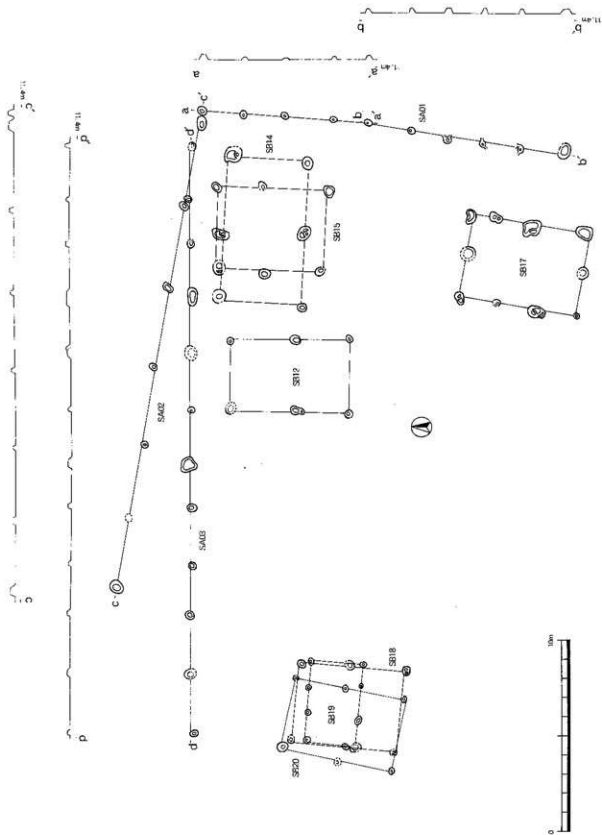
SB19



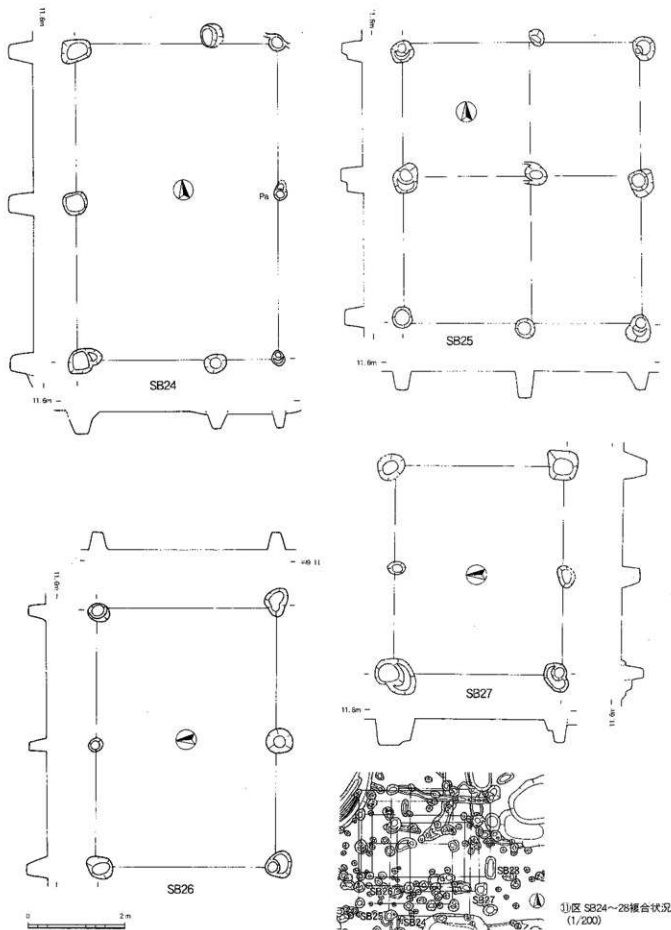
SB20



第250図 SB17~20 遺構図 (1/80)

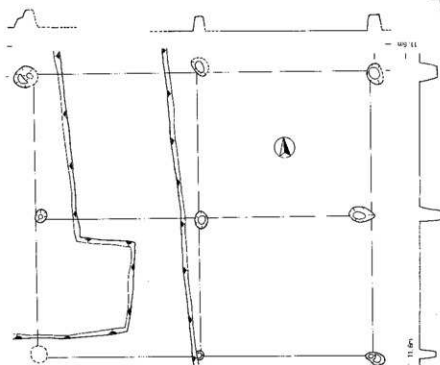
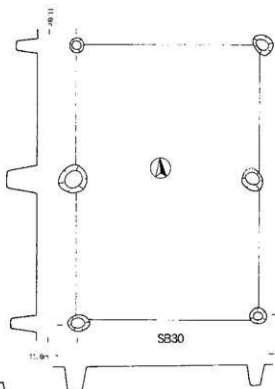
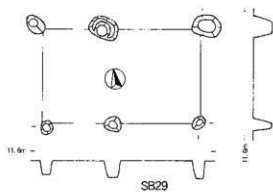
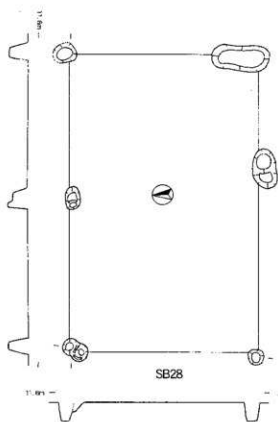


第251圖 SA01~03 連絡図 (1/200)



①)区 SB24~28複合状況 (1/200)

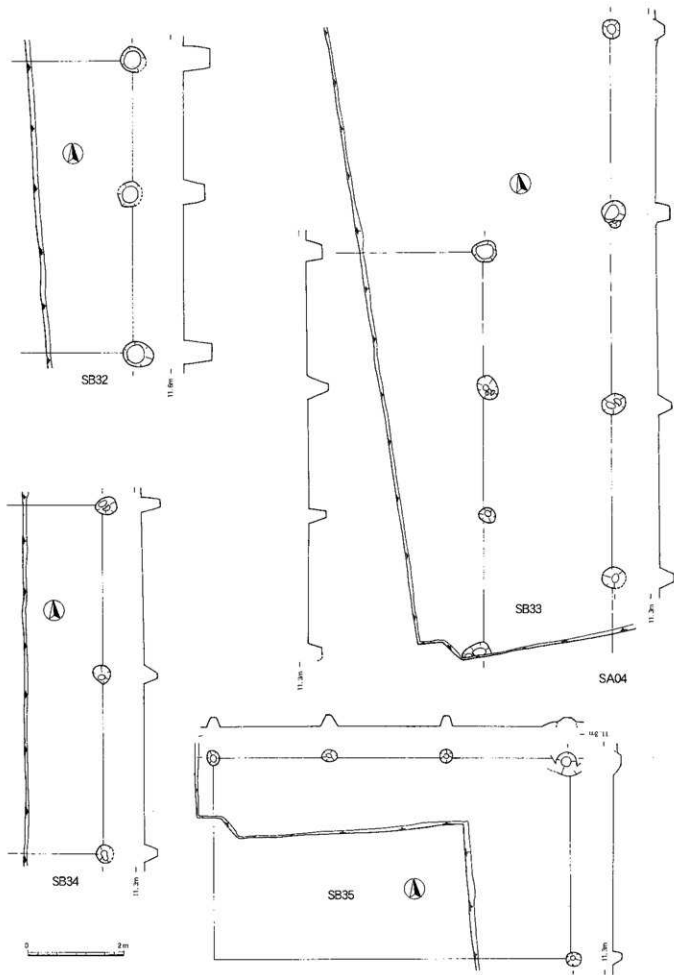
第252図 SB24~27 遺構図 (1/80)



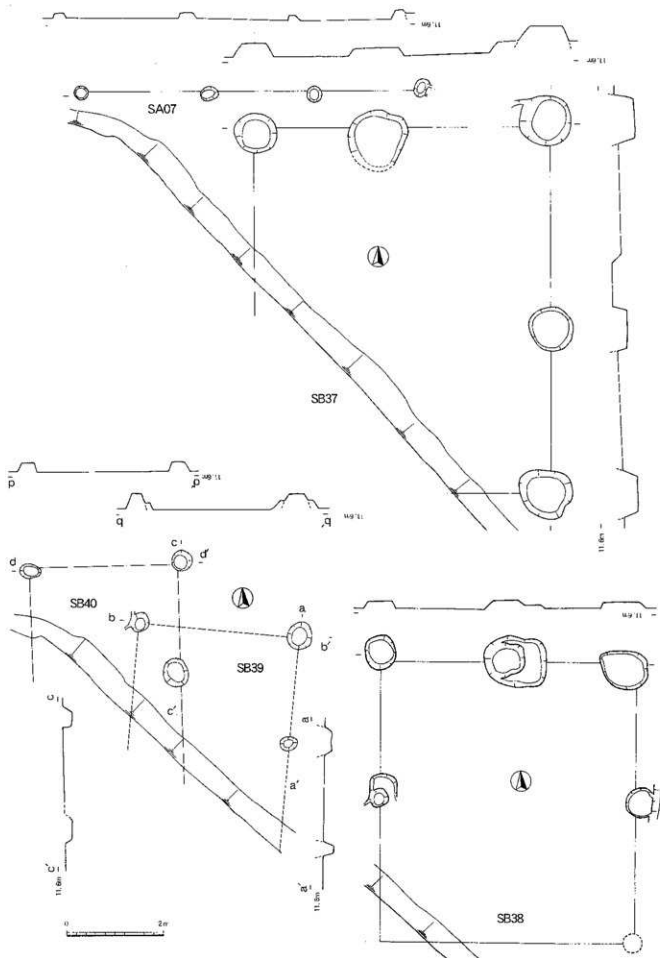
SB31



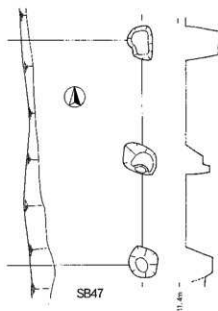
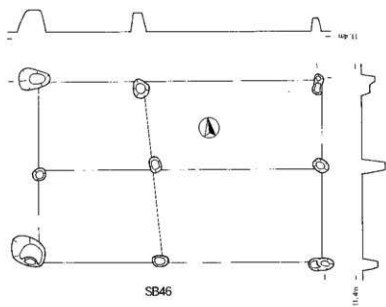
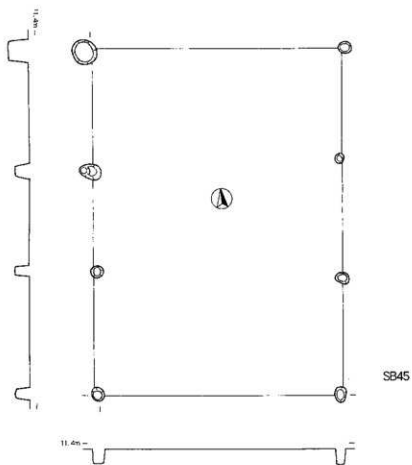
第253図 SB28~31 遺構図 (1/80)



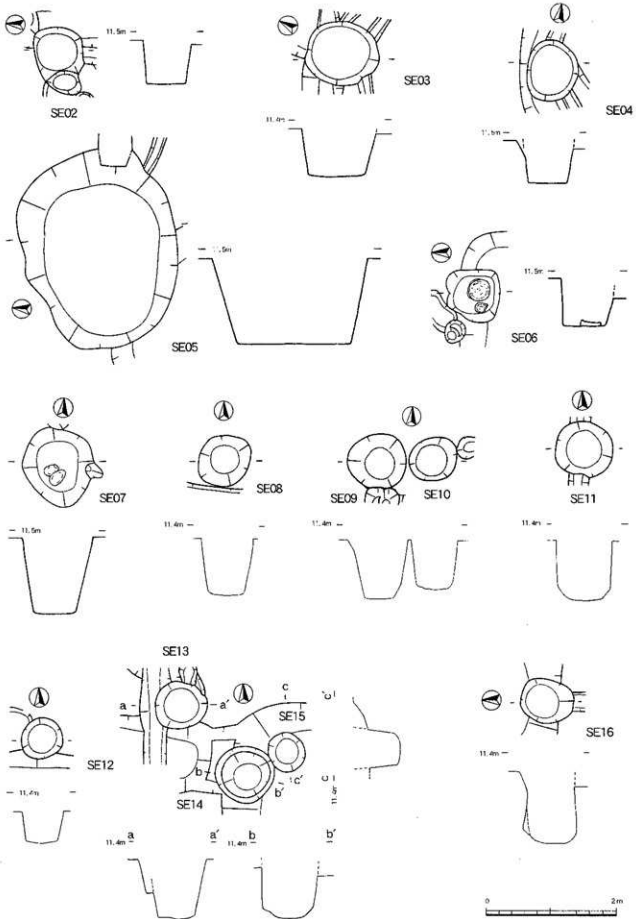
第254図 SB32~35・SA04 遺構図 (1/80)



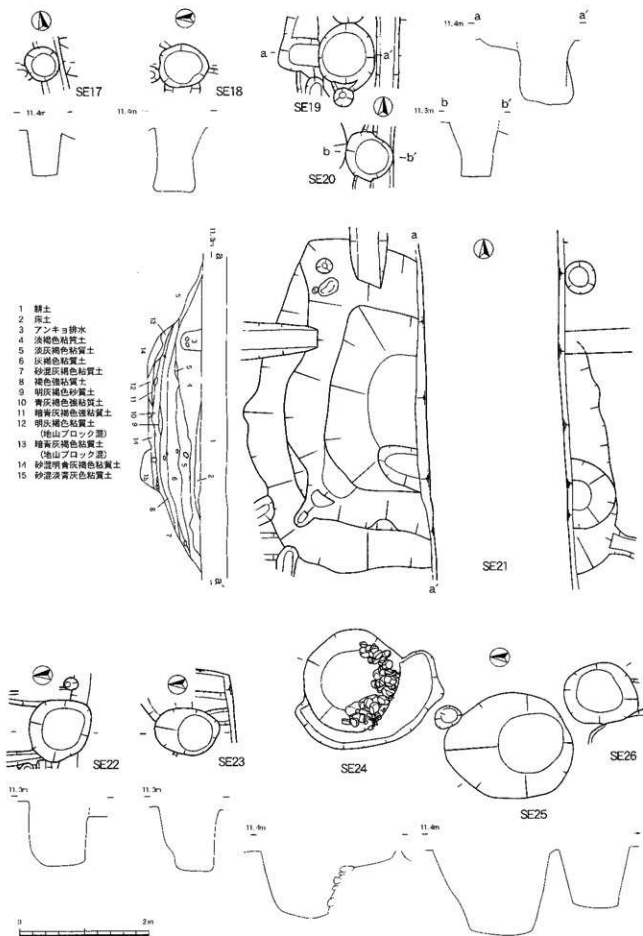
第255図 SB37~40・SA07 遺構図 (1/80)



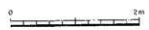
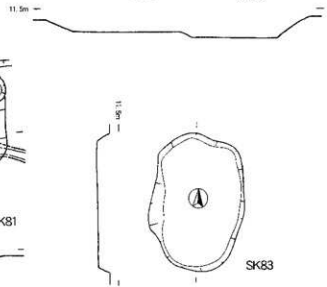
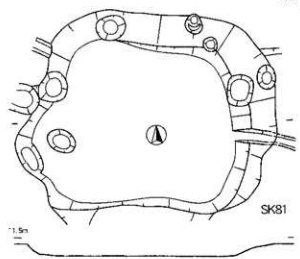
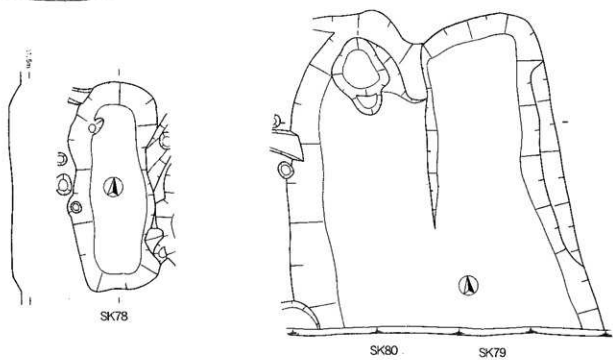
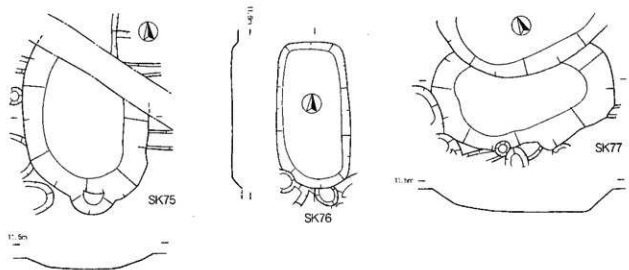
第257図 SB45~47 遺構図 (1/80)



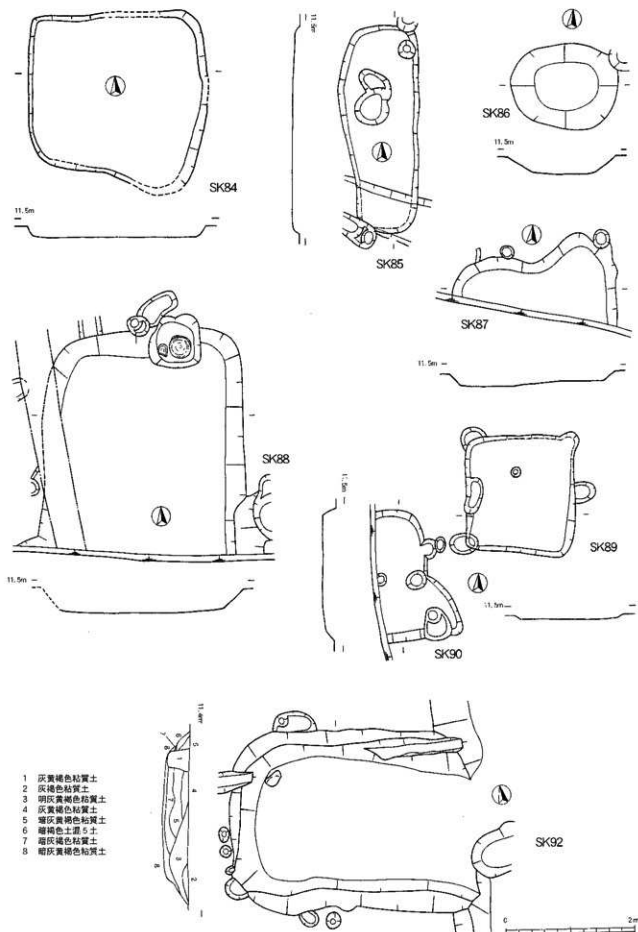
第258図 SE02~16 遺構図 (1/60)



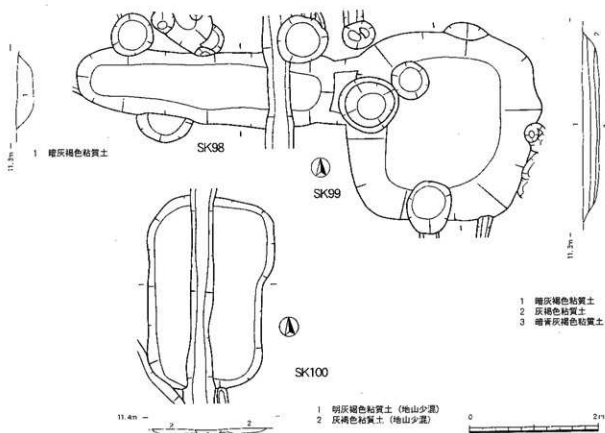
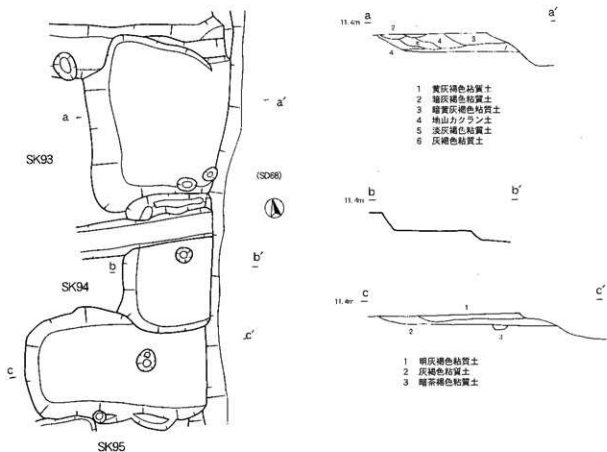
第259図 SE17~26 遺構図 (1/60)



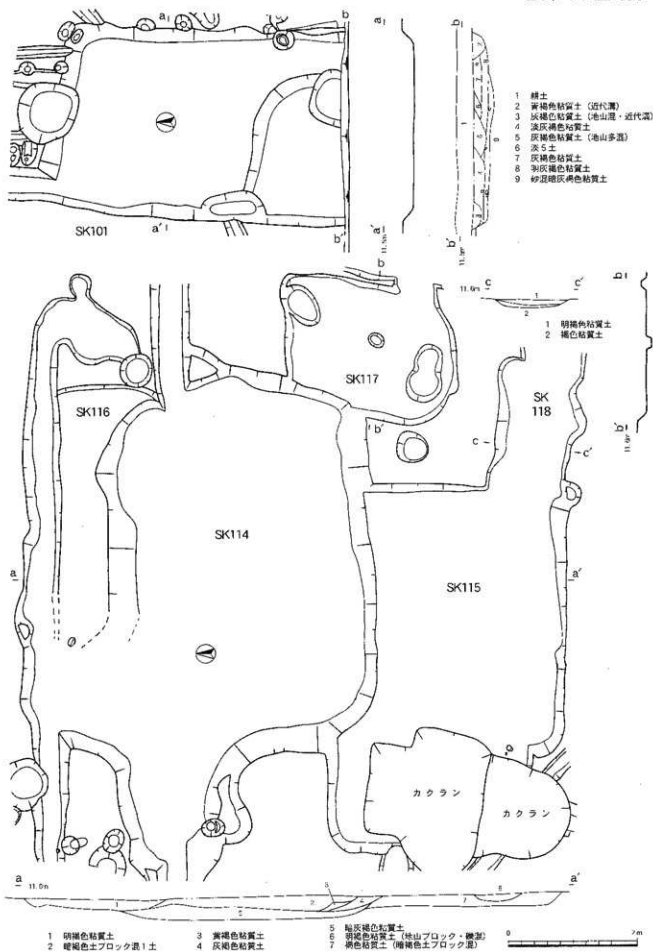
第261圖 SK75~81・83 遺構圖 (1/60)



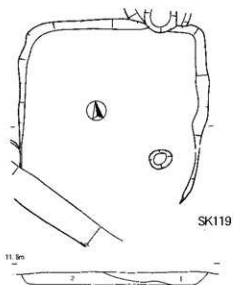
第262図 SK84~90・92 遺構図 (1/60)



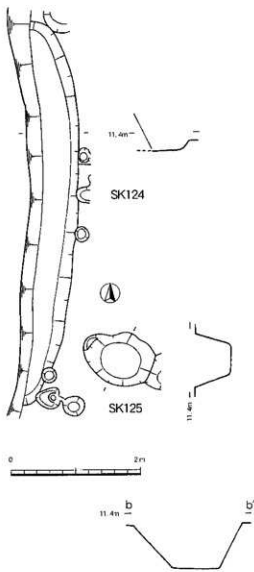
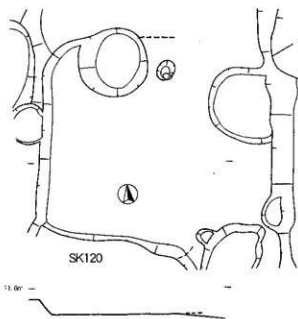
第263図 SK93~95・98~100 遺構図 (1/60)



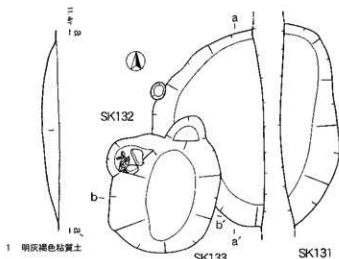
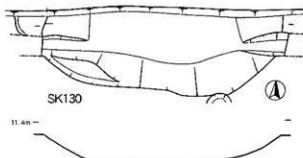
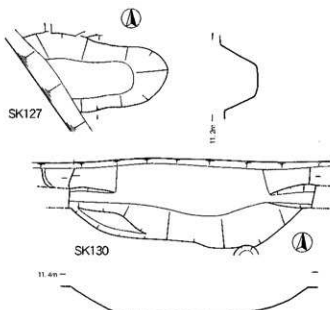
第264図 SK101・114～118 遺構図 (1/60)



- 1 灰褐色粘質土
2 暗褐色土ブロック並1土

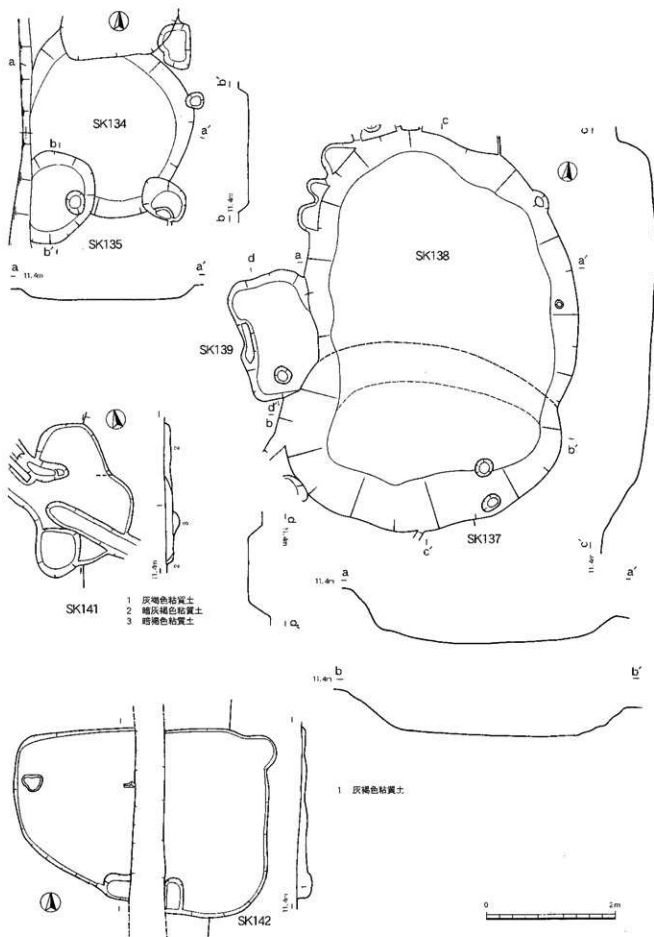


SK125

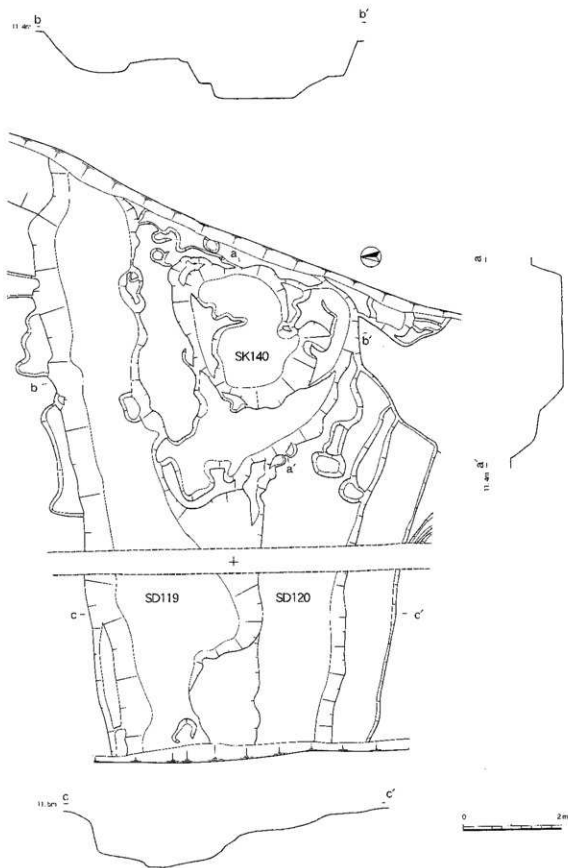


1 明灰褐色粘質土

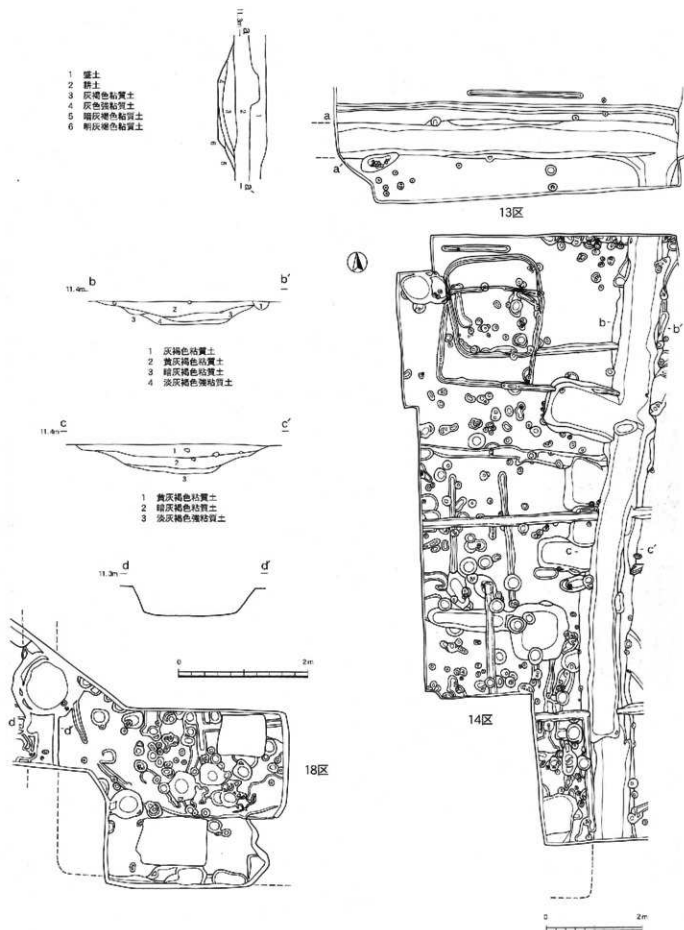
第265図 SK119・120・124・125・127・130~133 遺構図 (1/60)



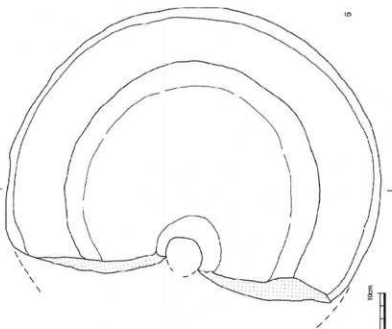
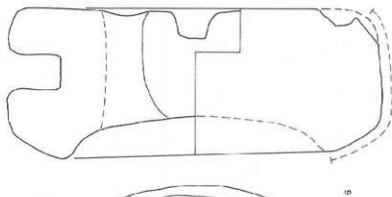
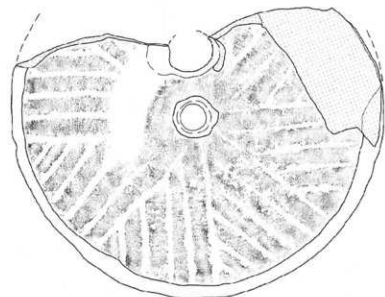
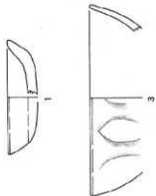
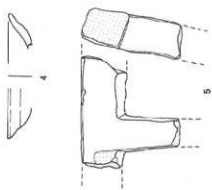
第266図 SK134・135・137~139・141・142 遺構図 (1/60)



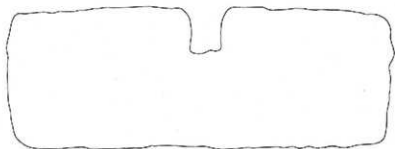
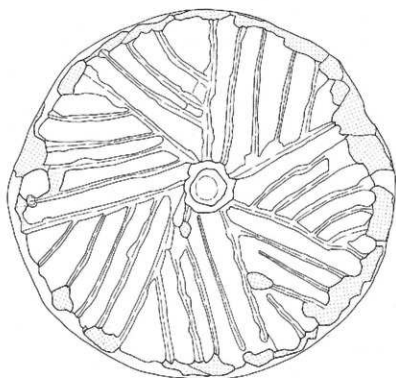
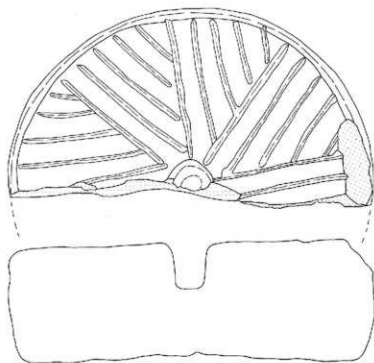
第267図 SK140・SD119・SD120 遺構図 (1/80)



第268図 SD68遺構図（平面図1/200・断面図1/60）



第269圖 SB 24 (1)・SB41 (2)・SB42 (3)・SE02 (3)・SE04 (5・6) 出土遺物 (1/3)

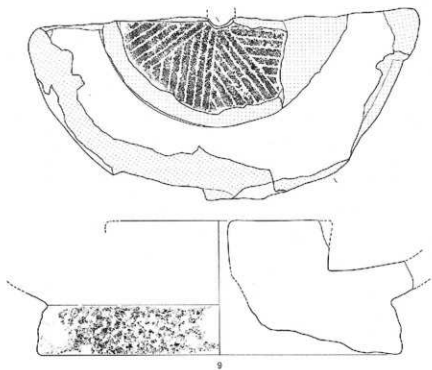


8

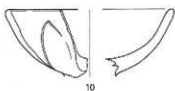
c

10cm

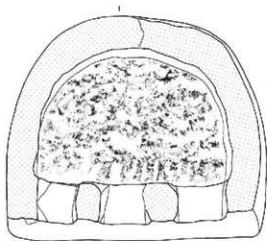
第270図 SE04出土遺物 (1/3)



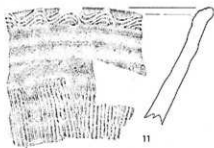
9



10



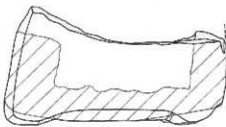
12



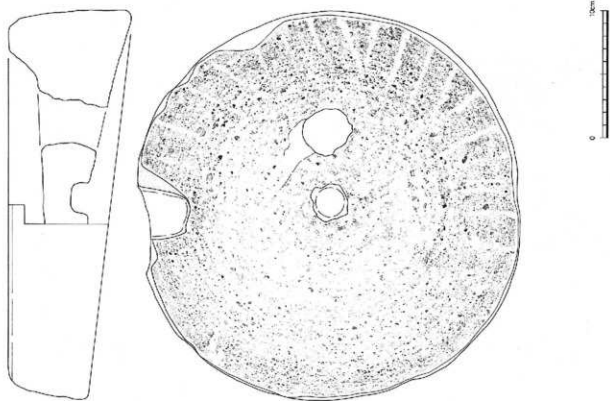
11



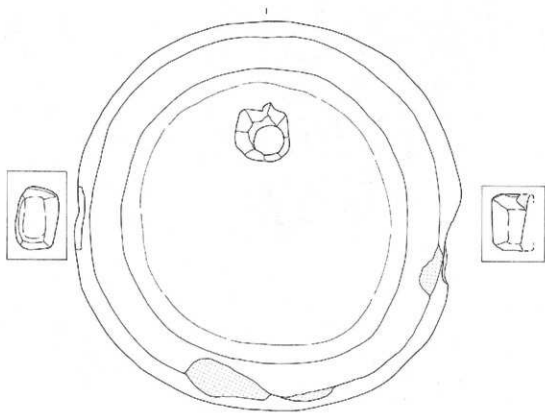
12



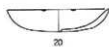
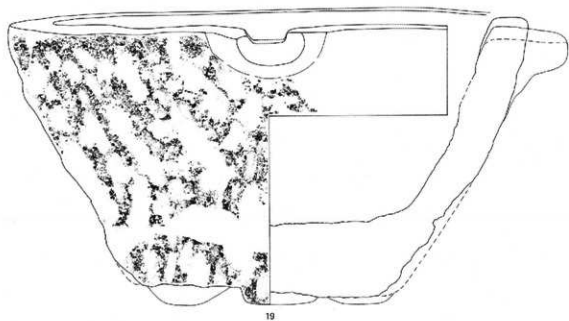
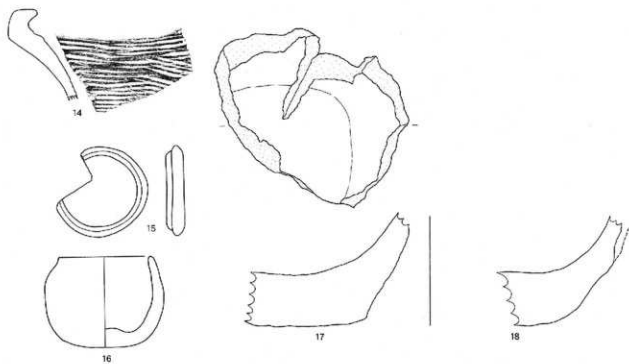
第271図 SE04 (9)・SE05 (10・11)・SE06 (12) 出土遺物 (1/3)



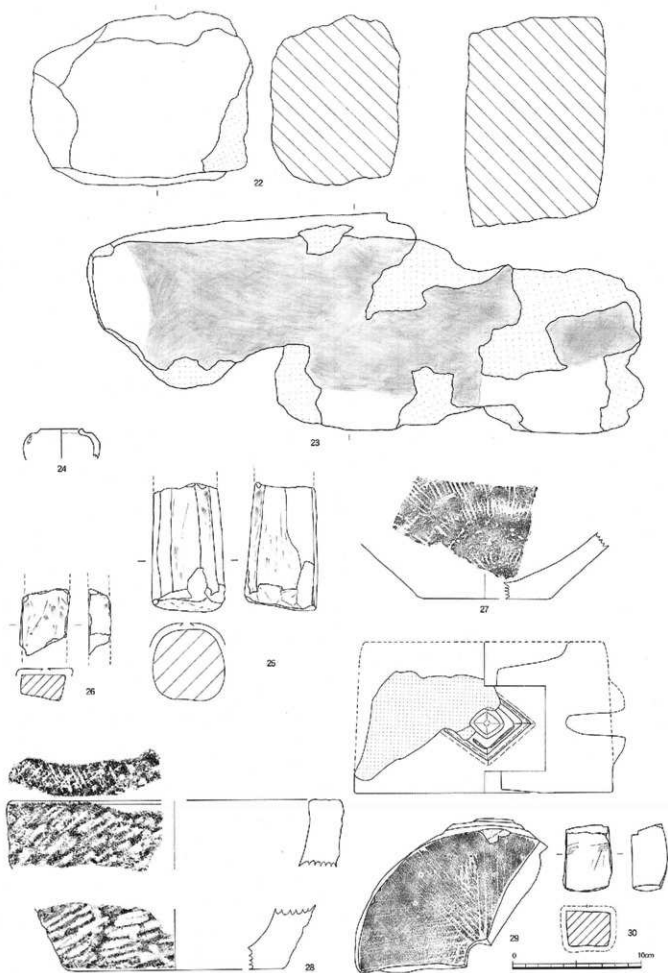
13



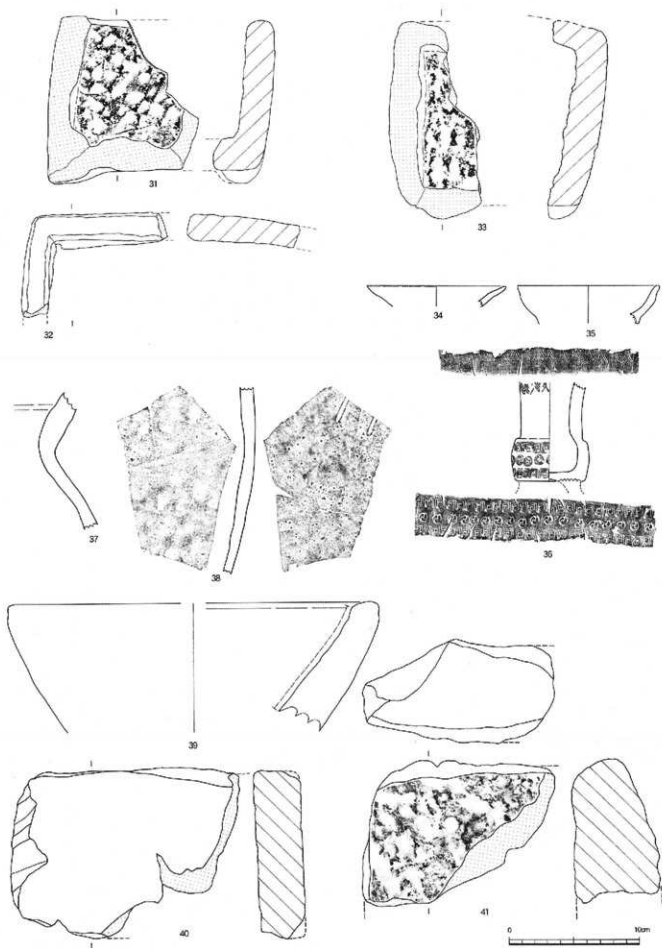
第272図 SE06出土遺物 (1/3)



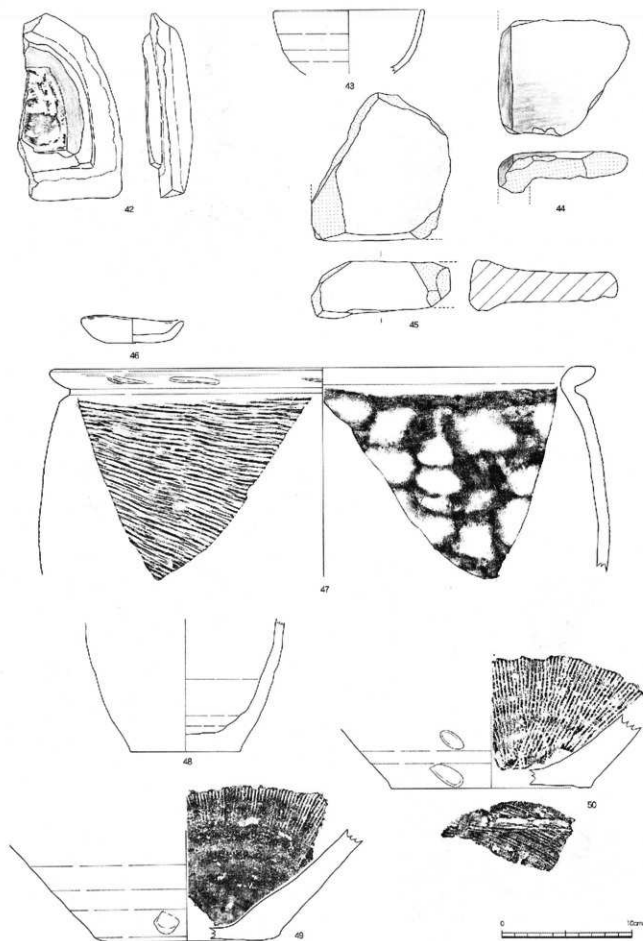
第273図 SE07 (14)・SE08 (15~19)・SE09 (20)・SE13 (21) 出土遺物 (1/3)



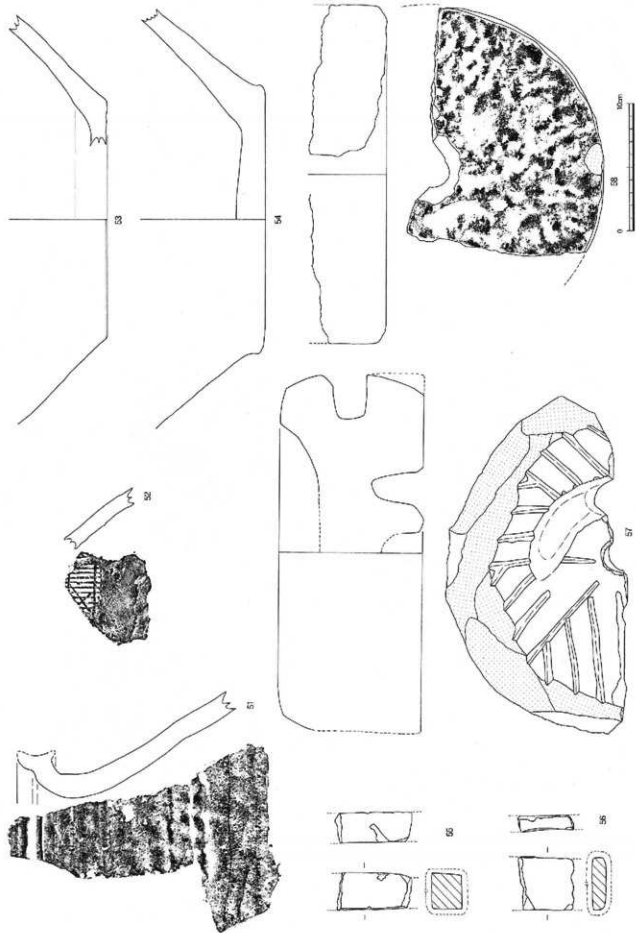
第274図 SE16 (22・23)・SE17 (24)・SE19 (25・26)・SE20 (27)・SE21 (28~30) 出土遺物 (1/3)



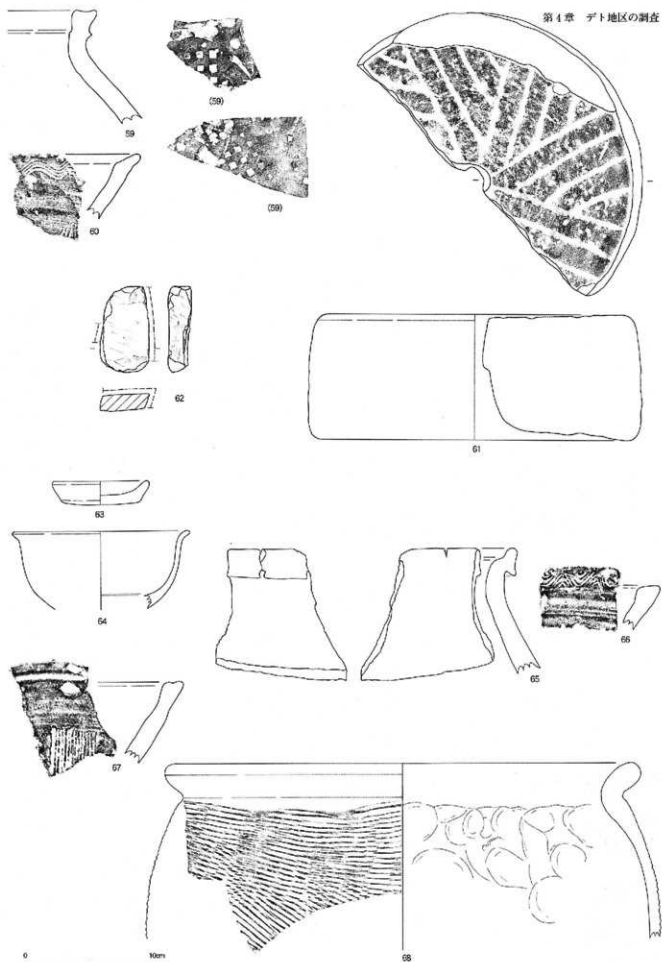
第275図 SE22 (31・32)・SE23 (33)・SE26 (34~36)・SE27 (37~41) 出土遺物 (1/3)



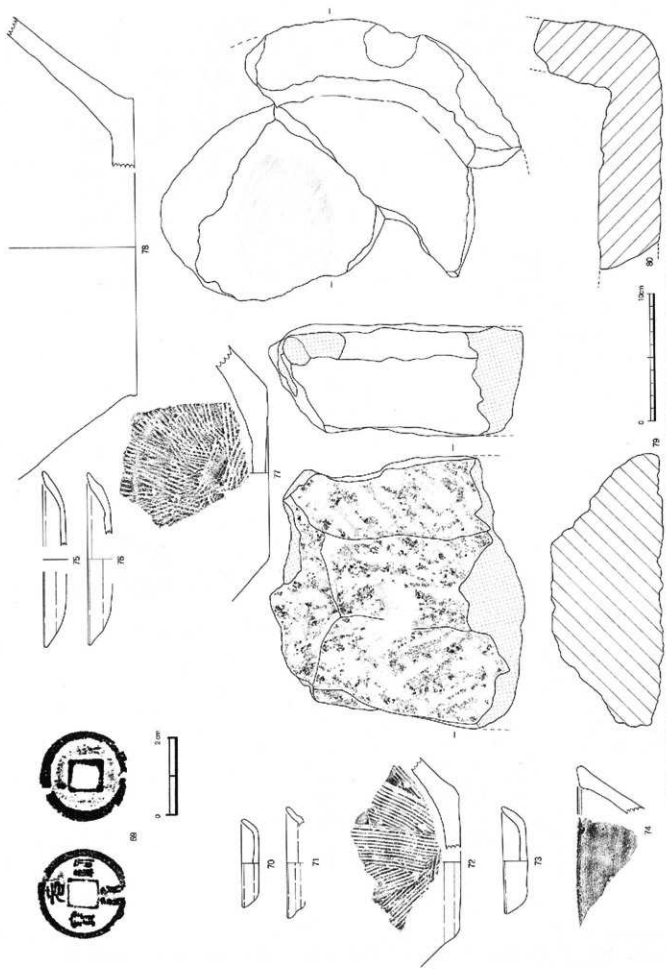
第276図 SE29 (42)・SE31 (43~45)・SE34 (46~50) 出土遺物 (1/3)



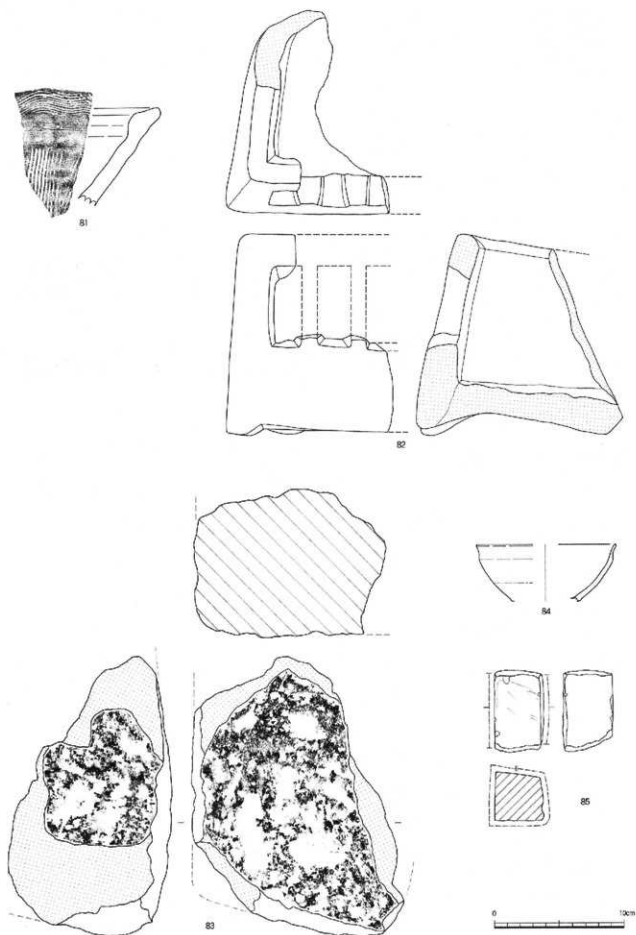
第277圖 SE34出土遺物 (1/3)



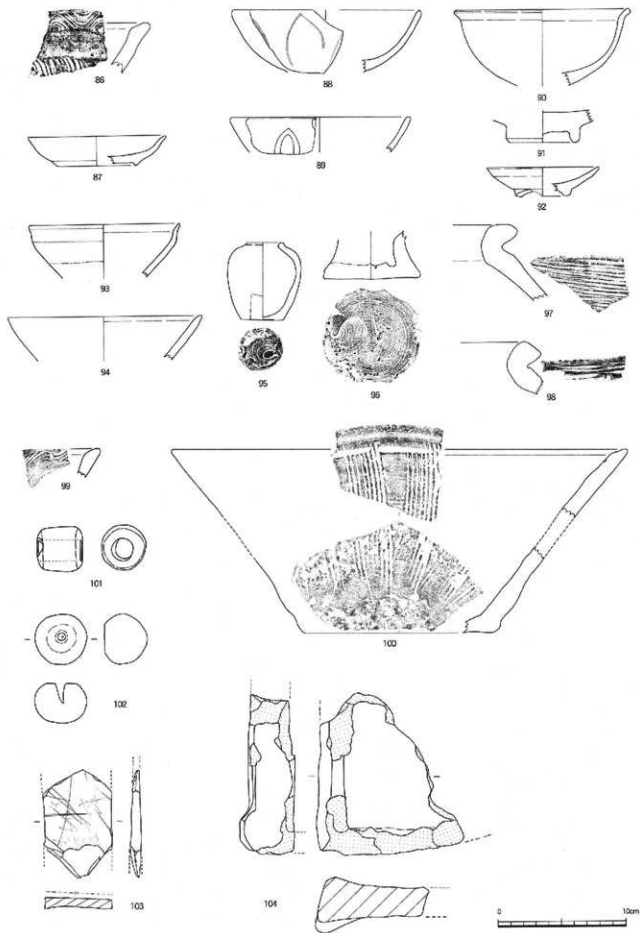
第278図 SE38 (59・60)・SE40 (61)・SE56 (62)・SK75 (63・64)・SK80 (65・66)・SK82 (67)・SK83 (68)
出土遺物 (1/3)



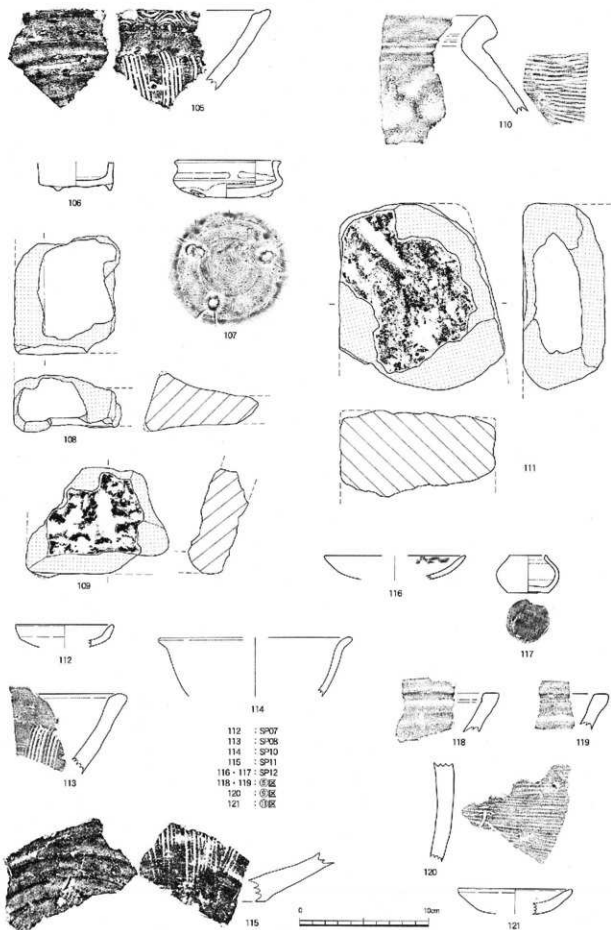
第279図 SK86 (68)・SK90 (70・71)・SK93 (72)・SK99 (73)・SK101 (74)・SK114 (75-80) 出土遺物 (1/3)



第280図 SK125 (81)・SK127 (82)・SK132 (83)・SK137 (84)・SK142 (85) 出土遺物 (1/3)



第281図 SD31 (86)・SD48 (87)・SD68 (88~104) 出土遺物 (1/3)



- 112 : SP07
 113 : SP08
 114 : SP10
 115 : SP11
 116・117 : SP12
 118・119 : ②区
 120 : ③区
 121 : ④区

第282図 SD105 (105)・SD118 (106~109)・SD119 (110)・SD120 (111)・SP (112~117)・
 調査区 (118~121) 出土遺物 (1/3)

第6節 近世以降

近世の遺構として、建物跡 (SB) 1棟、井戸 (SE) 10基、土坑 (SK) 7基と溝を検出しているが、他に時期不明の土坑があり近代の遺構とともに第6節に区分した (第284図)。報告は近世を主とし、近代の遺構や遺物については割愛したのでご了承願いたい。

近世の遺構と遺物を集中して検出した16・17・19区は、第283図の耕地整理前地籍図では集落の敷地となる部分で、いずれも平成3年まで住宅が存在した箇所である。また、他の調査区は水田地であった。

11区では中央部で井戸1基を検出し、他に14・15区同様溝がみられる。16区では礎石建物SB36と南北溝が複合し検出している。17区では東西両側で区画溝がみられ、その内側に井戸や土坑が分布するものである。19区では、SD113の西側にこれに沿うような分布で井戸4基を検出している。

近世の出土遺物のほとんどは18～19世紀の時期のものである。肥前系では、コンニャク印判による団鶴・松文の碗や、銅緑釉陶器、蛇の目釉刺手法、見込コンニャク印判、青磁染付などが目立ち、他に瀬戸・美濃系、九谷系、須佐系、越前系の陶磁器や焼塩土、土人形などがみられる。

さきにも記したが、御経塚は正保郷帳 (1644～1647) に村名がみえ、「高免付給人帳」では寛文年間 (1661～1672) の家高数17、百姓数25。宝永5年 (1708) の「村々高免家数等覚帳」では、家数46、人数243。明治9年のいわゆる「皇国地誌」には家数59・人数332と記録がある。また、御経塚では集落が西出と東出の二区に分かれており、16・17・19区はこの東出の東端部にあたる。17区に建っていた家の屋号は「アタラシヤ」と呼ばれ、古老の聞き取りでは「新興の有力な地主やった」とのことであった。集落にはその北方と南東に神社があり、西出に所属する北方の旧佐那武神社には明応5年 (1496) 九月一七日の紀年名をもつ五輪塔の地輪があった。なお、耕地整理事業は明治44年 (1911) に認可され大正12年 (1923) に完成している。

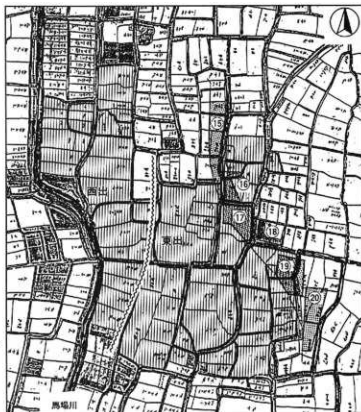
1 建物

SB36 (第285図)

16区の西側で、南北に並ぶ根石S1～S3と礎石S4を検出した。S4は大きさ40×30×25cmの自然石が据えられている。S1～S3では大きさ15～25cmの礎を4ないし5個を集石している。また、S3の検出上面の標高は他のものより低い。S1～4の距離は9.0m (5間) で、それぞれの間隔は、S1～2が2.6m、S2～3が2.8m、S3～4は3.6mである。軸方位は、ほぼ真北である。SD90がこの建物に付属しよう。

2 井戸 (第286～287図、第290・291図)

近世の井戸は、11区中央部のSE01の他は、17・19区で検出している。いずれも肥前系陶磁器が出土した。深さは1～1.2m、底面の標高は10.06～10.59mである。手取川扇状地北部先端の湧水地帯であった本地区での飲



第283図 耕地整理前地籍図 (S=1/3000)

□ 宅地 ▨ 調査区 (15～20)

料水確保の容易さが変わるもので、古老からは「6尺掘りゃ水は湧くが、井戸なら9尺は掘らんなん」と聞いており、近代では標高9.3m ぐらいまで掘ったものであろう。井戸については、時期不明や近代に判断したものを図版と下表に含めており、近世以降の合計は17基となる。

井戸一覧表 () 内は推定

遺構	区	平面形	上面規模(cm)	底面規模(cm)	底面標高(m)	備考
SE01	11区	楕円形	146×120	106×95	10.50	近世
SE30	17区	略円形	125×112	110×84	10.59	近世
SE32	17区	略円形	?×130	?×55	10.31	近世
SE33	17区	略円形	210×190	145×140	10.48	近世
SE43	19区	略円形	(140×140)	90×80	10.42	近代
SE44	19区	略円形	360×300	130×124	10.06	近世
SE45	19区	楕円形	(280×200)	170×70	10.42	近世
SE46	19区	楕円形	232×190	174×105	10.48	近世、2基複合か
SE47	19区	略円形	120×98	60×50	10.48	時期不明
SE48	19区	略円形	125×100	66×58	10.45	近世
SE49	19区	楕円形	170×140	100×80	10.59	時期不明
SE50	19区	略円形	80×80	40×40	10.39	時期不明
SE51	19区	略円形	80×60	50×40	10.21	時期不明
SE52	19区	略円形	236×235	97×92	10.32	近世
SE53	19区	楕円形	300×(220)	220×110	10.58	近世
SE54	19区	略円形か	150×?	100×?	10.49	時期不明
SE55	19区	楕円形か	?×160	?×115	10.53	近代、2基複合か

3 土坑 (第285・288～289図、第278～280図)

近世の上坑10基を下表に示したが、井戸の分布とほぼ同じく16・17区で検出したものである。17区西側の土坑群の形状や大きさは一定でなく、深さも13～51cmとばらつく。上坑からは、肥前系、瀬戸・美濃系、九谷系の陶磁器が、壁付近からは広東磁もどき、銅線軸皿、瀬戸・美濃系端反碗がみられ、鉢型の焼塩釜が土坑と調査区壁より1点ずつ出土している。

ほかに時期不明のものや近代の土坑がある。11区SK74は土取りを行なった上坑と考えられるもので、厚さ約1mの覆土下には多量の粉炭がみられた。近代のものでは、ゴミ穴が多くみられる。18区の長方形の掘乱は約30年前頃までの小屋跡で、泥の糞を原料にガスを発生させて家まで引いて燃料にしたとのことである。

土坑一覧表 () 内は推定

遺構	区	平面形	上面規模(cm)	底面規模(cm)	深さ(cm)	備考
SK104	16区	隅丸長方形	325×(170)	310×?	14	
SK105	17区	楕円形	(320)×280	?×240	30～40	
SK106	17区	楕円形	120×65	90×40	51	
SK107	17区	楕円形	110×80	92×62	34	
SK108	17区	楕円形	?×110	?×80	24	
SK109	17区	楕円形	124×90	104×75	48	
SK110	17区	隅丸長方形か	?×230	?×200	25	

遺構	区	平面形	上面規模 (cm)	底面規模 (cm)	深さ (cm)	備考
SK111	17区	不整略円形	340×150~230	280×90~160	25	2基複合か
SK112	17区	隅丸長方形	200×(130)	180×?	43	
SK121	17区	隅丸方形	(220)×160	(200)×145	13	SK111が先行
SK123	19区	不整形	?	?	10	詳細不明
SK126	19区	不整形	145×110	135×95	18	第287図

4 溝 (第285・289図・巻木図参照、第294~302図)

11・14・15区で検出した近世の溝は、水田に関係するものと考えられる。16区ではSB36と複合する南北溝のSD89~91がみられるが、SD91はSD89とSD90間の遺構確認面から1段低く落ち込んだ部分であり、溝としたが不明なものである。遺物は肥前系磁器皿(見込五弁花コンニャク判・蛇の目軸刺)、越前系播鉢がみられる。17区では、敷地を区画する溝と推察する東側の南北溝SD94と、西側では鍵状に屈折するSD99と南北方向のSD101がみられ、その東西間の距離は約18m(10間)である。同区のSD96では、この溝の上面で大きさ20cm前後の礫を横方向に1列並べた長さ2.9mの石列を検出している。なお、第1節中世後期で報告した20区のSD118は近世の溝である。

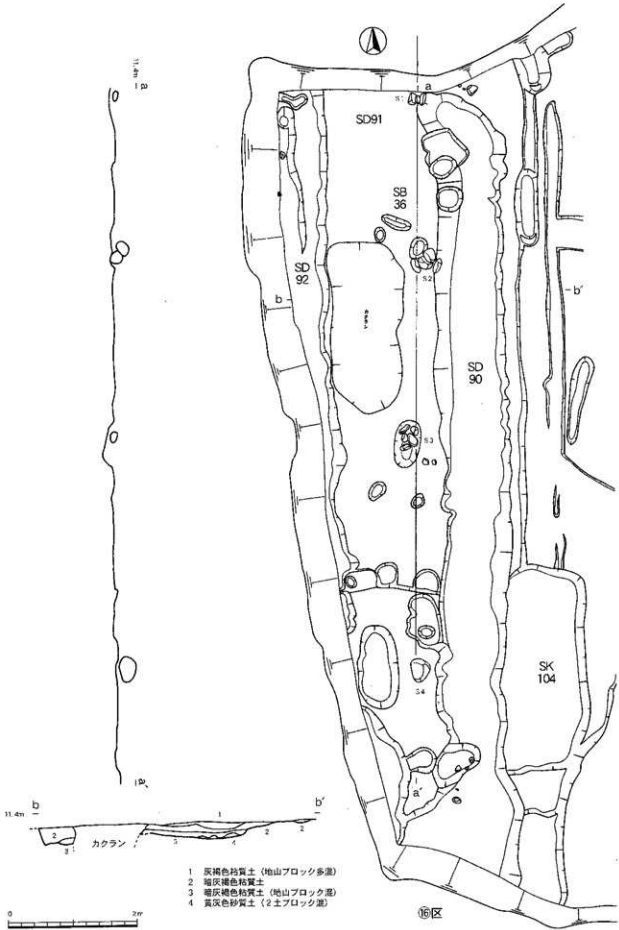
近代の溝とした17区のSD93・95と19区のSD113は、第284図耕地整理前地籍図で確認できる水路であり、宅地整備や耕地整理で埋められるまで開口し機能を有していた用水と考えられる。これらの水路からは、肥前系、瀬戸・美濃系、九谷系の磁器をはじめ、肥前系・越前系の播鉢、寛永通貨、ワイン瓶など18世紀から近代までの遺物が混在し出土している。

溝一覧表 ()内は推定

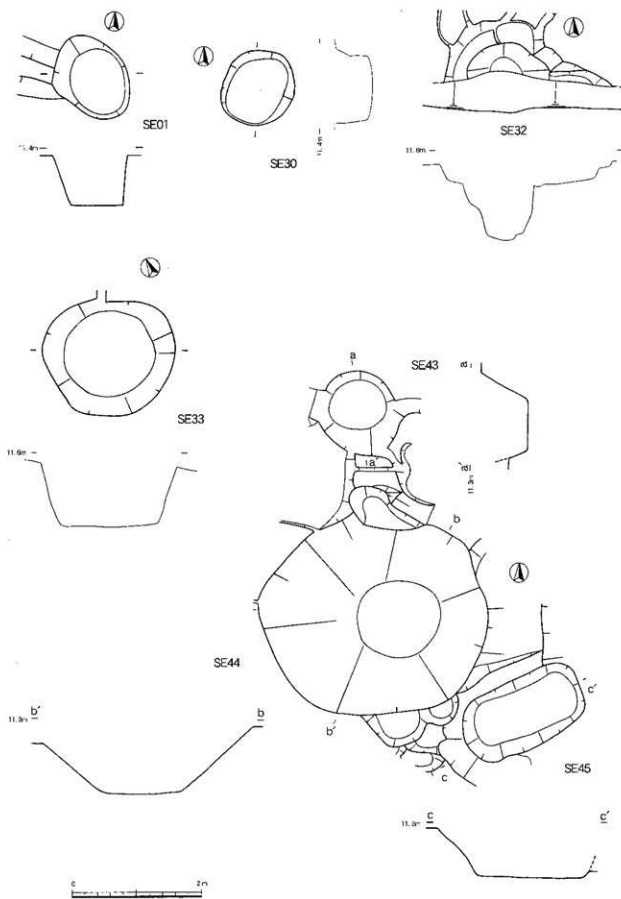
遺構	区	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
SD27	11	40~80	24~41	近世
SD28	11	25~35	19~26	近世
SD48	11	50~80	18~27	近世
SD56	11	35~50	15~26	近世
SD75	14	40~50	9~17	近世
SD83	15	50~70	25~50	近世
SD84	15	40~50	14~42	近世
SD86	15	30~35	10~24	近世
SD89	16	?	35~40	近世
SD90	16	100前後	26~30	近世
SD91	16	?	15~28	近世

遺構	区	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
SD93	17	?	36~51	近代用水
SD94	17	220~270-350	45~68	近世
SD95	17	?	(36~80)	近代
SD96	17	50~55	20~25	近世
SD99	17	(160~180)	33~46	近世
SD101	17	(120)	19前後	近世
SD108	19	140(210)	59~83	近代
SD113	19	(650) 東(280) 西(230)	60~70	近代用水

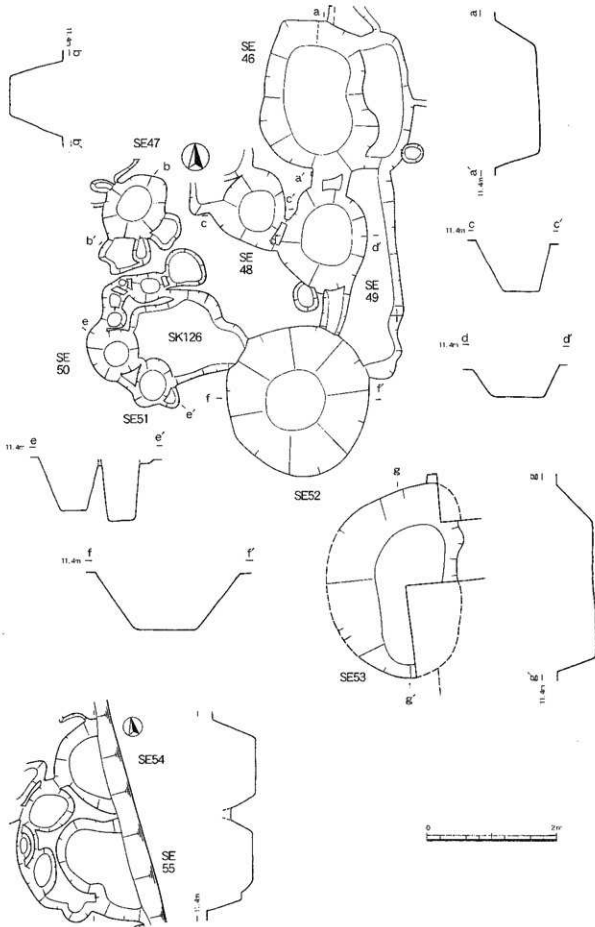
番号	品名	規格	材質	寸法(mm)	重量(g)	備考
159	SD113線	線	鋼	口径215 長さ121 鋼高34		彫削、18C
160	SD113線	鋼器部分	鋼	口径128 長さ102 鋼高28		彫削、口径コシヤク印削、18C後半
161	SD113線	鋼器	鋼	口径144 長さ62 鋼高42		太交(彫削)、18C→40
162	SD113線	鋼器部分	鋼	口径84		彫削
163	SD113線	鋼器	鋼	口径331		入交、18C中後
164	SD113線	鋼器	鋼	口径119 鋼高79 鋼高30 鋼高90 鋼高21		帯米から製作、蓋上蓋と外面体部に白彫ハケ目
165	17区鋼器	鋼器部分	鋼	口径93 鋼高45 鋼高29		彫削、コンニエヤク印削、18C前半
166	17区鋼器	鋼器部分	鋼	口径150 鋼高48 鋼高63		彫削、コンニエヤク印削、18C前半
167	17区鋼器	鋼器部分	鋼	口径120 鋼高48 鋼高59		彫削、凸削彫もどき、18C
168	17区鋼器	鋼器	鋼	口径50		
169	17区鋼器	鋼器	鋼	口径180 鋼高40 鋼高49		
170	17区鋼器	鋼器	鋼	口径122 鋼高62 鋼高63		
171	17区鋼器	鋼器	鋼	鋼高60		彫削、外面彫削
172	17区鋼器	鋼器	鋼	鋼高38		彫削、入交、18C前半
173	17区鋼器	鋼器部分	鋼	口径122 鋼高68 鋼高36		彫削、彫込コンニエヤク印削、5弁花
174	17区鋼器	鋼器部分	鋼	口径122 鋼高40 鋼高36		彫ノ目輪削
175	17区鋼器	鋼器	鋼	口径116 鋼高42 鋼高33		彫ノ目輪削、鋼輪削、17C後半→18C
176	17区鋼器	鋼器部分	鋼	口径122 鋼高45 鋼高36		彫削、彫ノ目輪削
177	17区鋼器	鋼器	鋼	口径167 鋼高74 鋼高69		帯米→彫削
178	17区鋼器	陶器	行平か	口径400 鋼高200 鋼高207		入交か
179	17区鋼器	上蓋	彫削	長さ90 鋼高119 厚さ60 重さ460		蓋の部分
180	17区鋼器	陶器	彫削	長さ90 鋼高119 厚さ60 重さ460		彫削、青磁原料、18C後半→18C初
181	17区	石製品	行火	長さ200 鋼高193 厚さ20 重さ1320		彫削、青磁原料、18C後半→18C初
182	17区	鋼器部分	鋼	口径60 鋼高68 鋼高22		彫削
183	17区	石製品	行火	長さ200 鋼高193 厚さ20 重さ1320		彫削、青磁原料、18C後半→18C初
184	17区	鋼器部分	鋼	口径60 鋼高38 鋼高36		彫削
185	17区	鋼器部分	鋼	鋼高56		彫削
186	17区	陶器	行平か	口径87 鋼高37 鋼高65		彫削
187	17区	陶器	鋼	口径210		彫削
188	17区	陶器	鋼器	鋼高160		彫削
189	17区	十器	火鉢	底径180		
190	17区	石製品	行火	重さ665		彫削
191	17区	鋼器部分	鋼	口径75 鋼高44 鋼高20		彫削
192	17区	陶器	丸明皿	口径110 鋼高32 鋼高21		彫削、彫上目3コ
193	17区	石製品	行火	長さ45 重さ409		彫削
194	17区	陶器	行平鋼器	口径137 底径44 鋼高45		彫削、小彫、18C中後→帯米
195	17区	十器	火鉢	口径130		
196	18区	鋼器部分	鋼	口径103		彫削
197	18区	陶器	鋼器	底径151		内外彫削
198	20区	石製品	燧石	長さ124 鋼高49 厚さ39 重さ440		



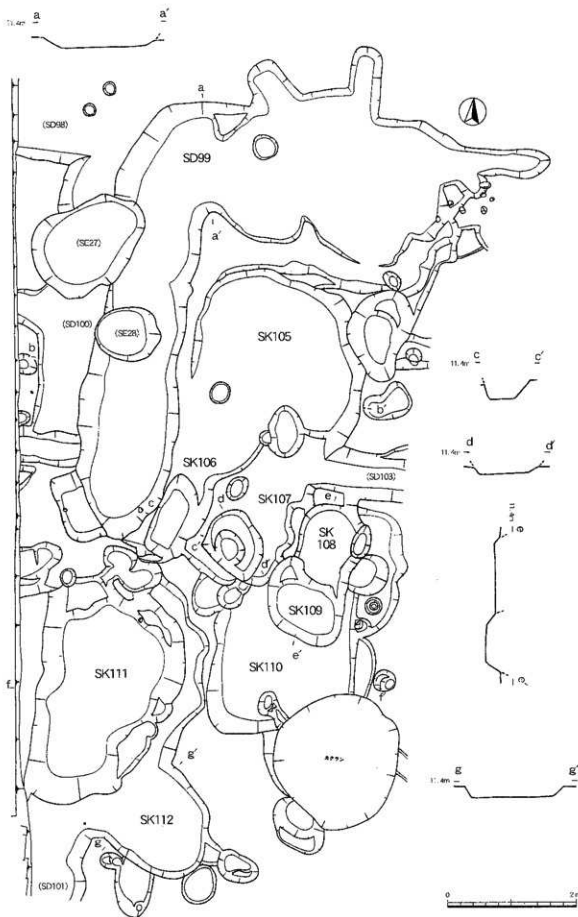
第285図 SB36・SD90～92・SK104 遺構図 (1/60)



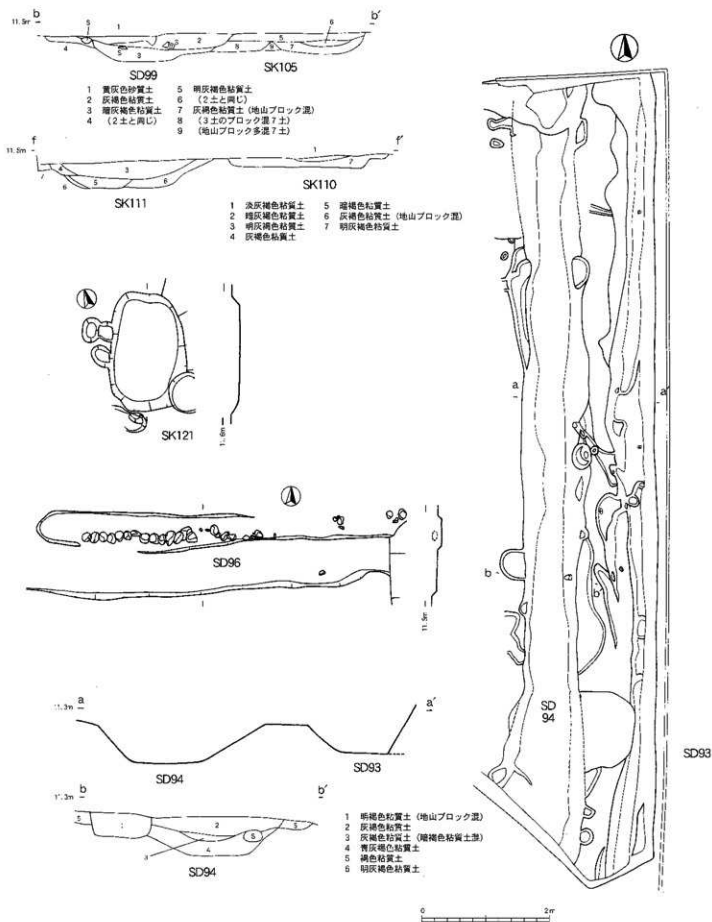
第286図 SE01・30・32・33・43~45 遺構図 (1/60)



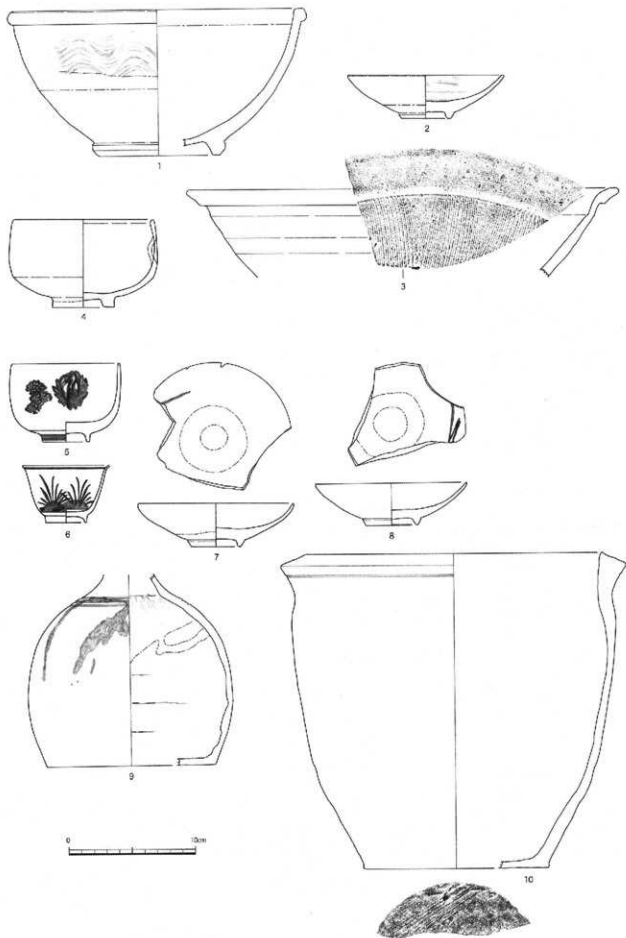
第287図 SE46~55・SK126 遺構図 (1/60)



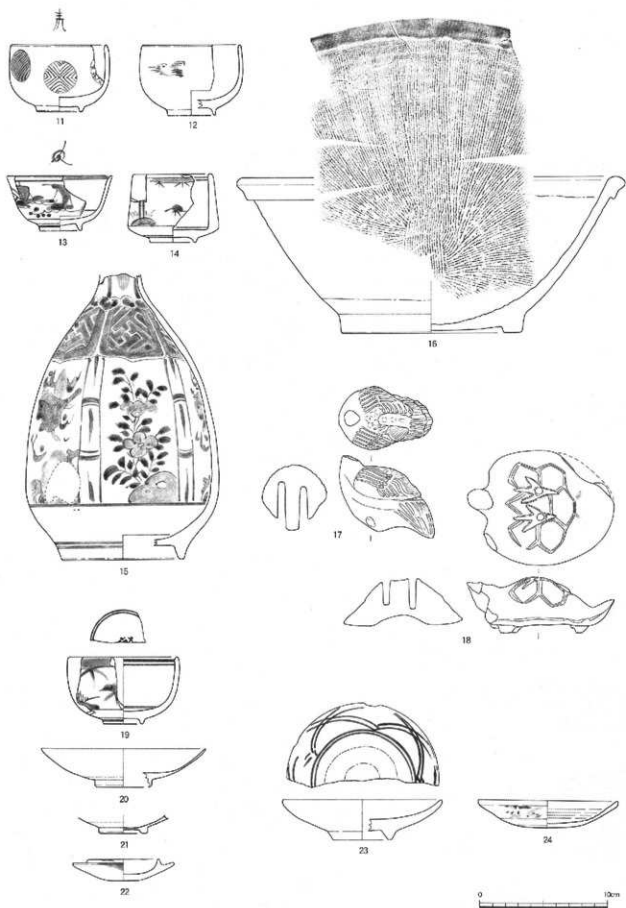
第288图 SK105~112・SD99 遺構図 (1/60)



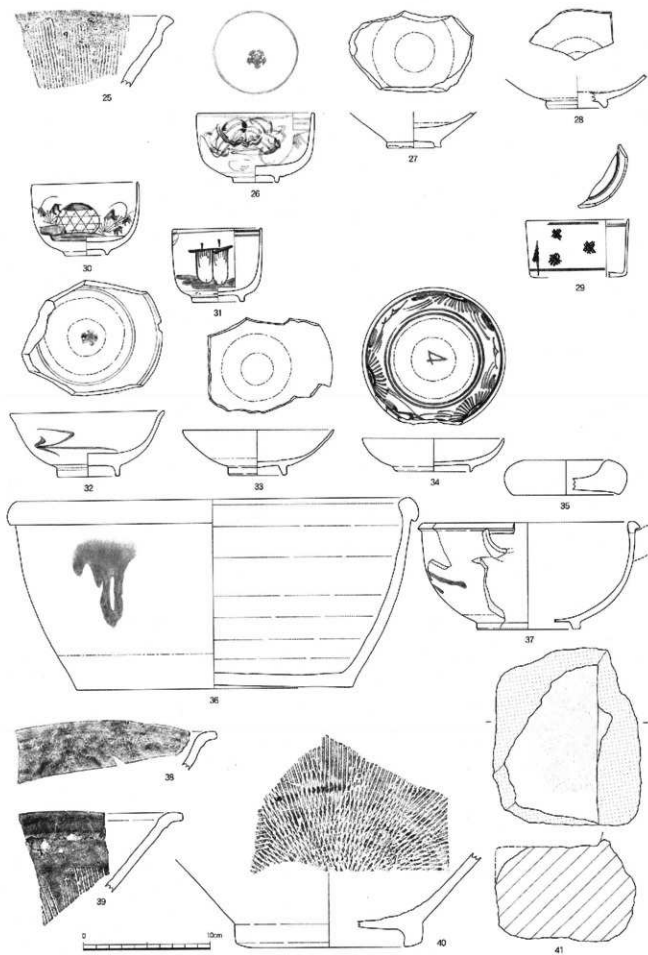
第289図 SK105・SK110・SK111・SD99 断面図、SK121・SD96 遺構図 (1/60)
 SD93・94 遺構図 (平面図1/150・断面図1/60)



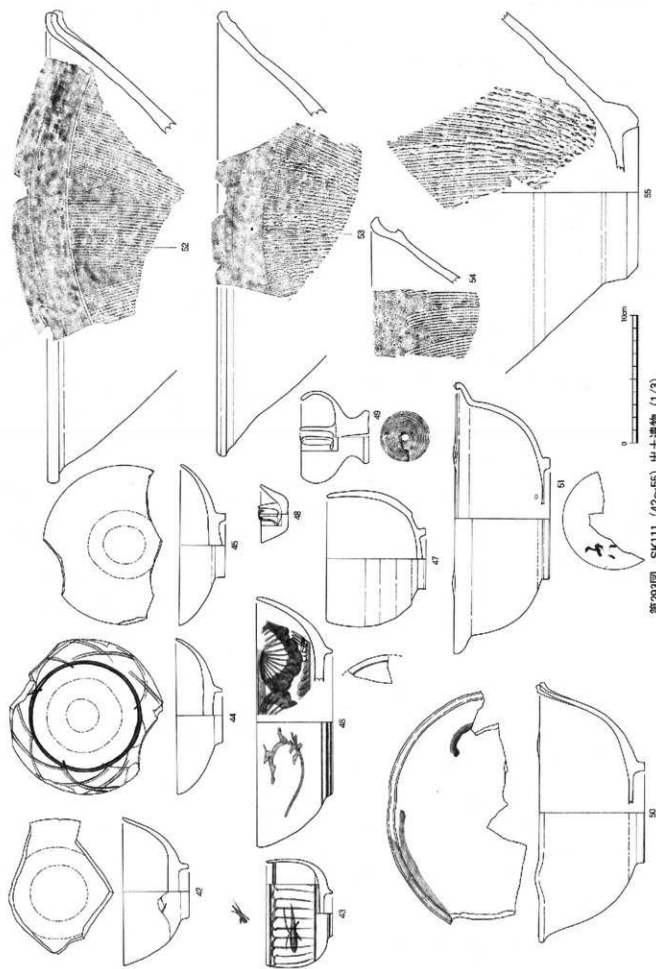
第290图 SE30 (1)・SE32 (2・3)・SE44 (4)・SE45 (5~9)・SE46 (10) 出土遺物 (1/3)



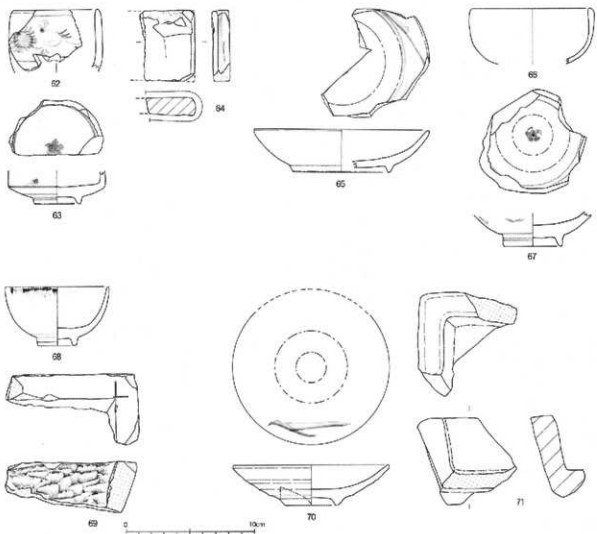
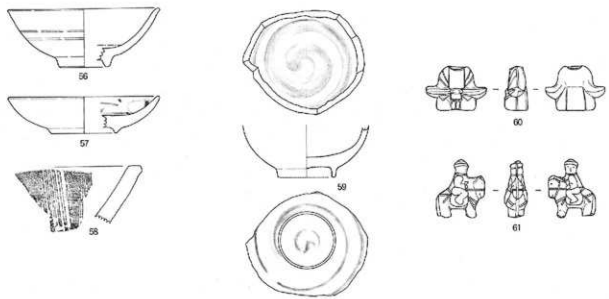
第291図 SE52 (11~18)・SE53 (19~22)・SE55 (23・24) 出土遺物 (1/3)



第292図 SK106 (25)・SK107 (26・27)・SK108 (28)・SK109 (29)・SK112 (30~41) 出土遺物 (1/3)



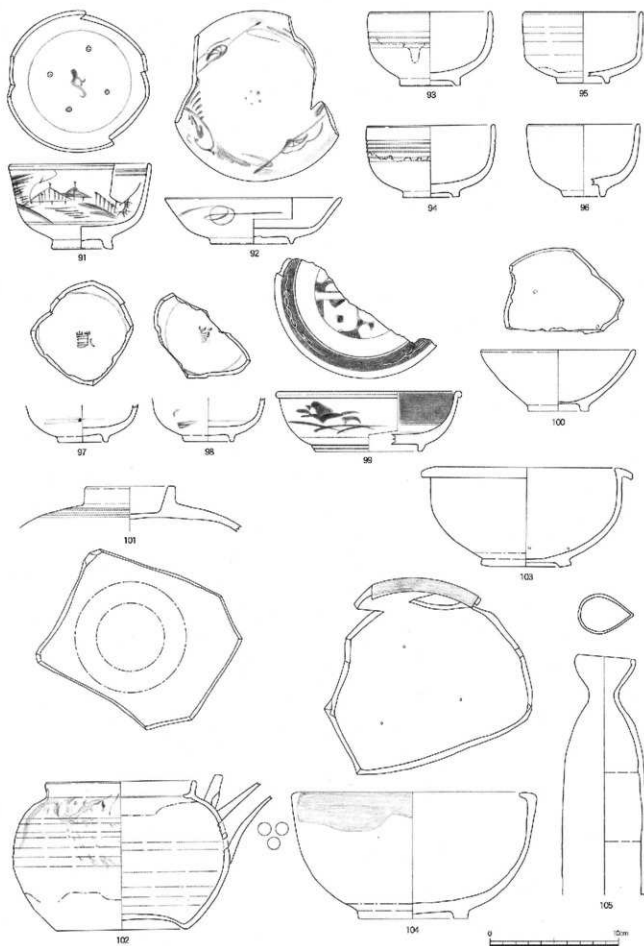
第293図 SK111 (42~55) 出土遺物 (1/3)



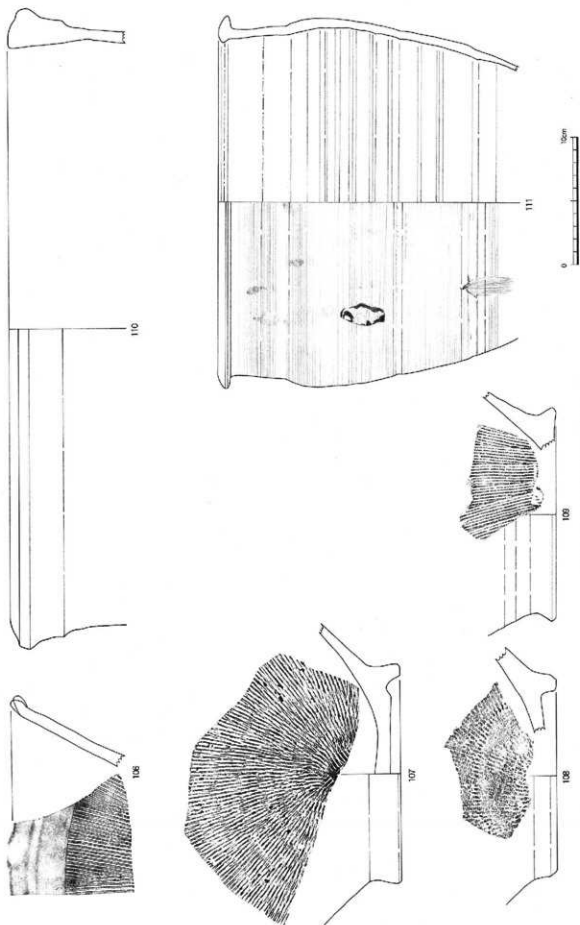
第294図 SK113 (56~58)・SK123 (59)・SK126 (60・61)・SD83 (62~64)・SD86 (65)・SD89 (66・67)・SD90 (68・69)・SD91 (70・71) 出土遺物 (1/3)



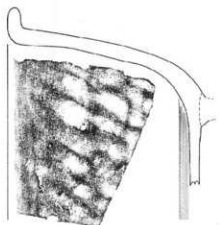
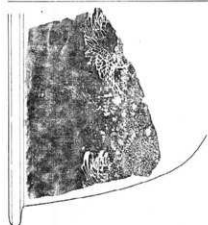
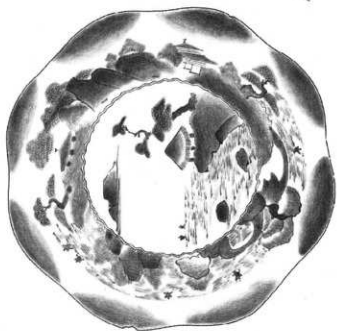
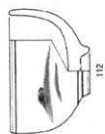
第295図 SD93出土遺物 (1/3)



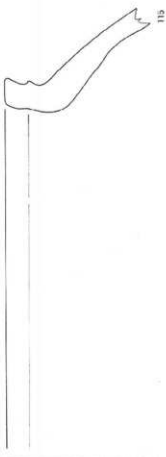
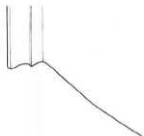
第296図 SD93出土遺物 (1/3)



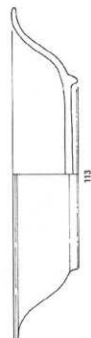
第297図 SD93出土遺物 (1/3)



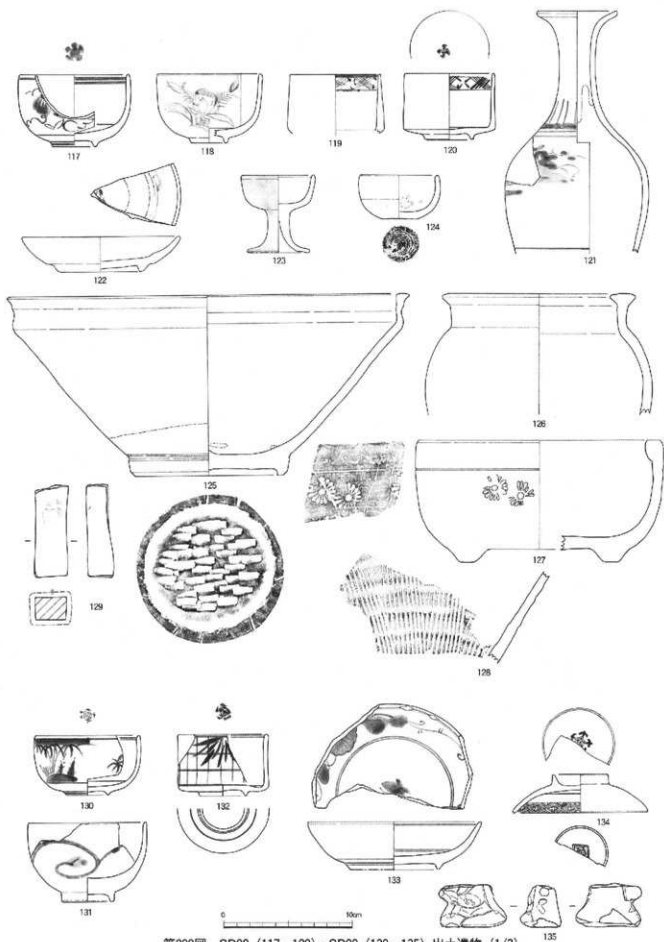
114



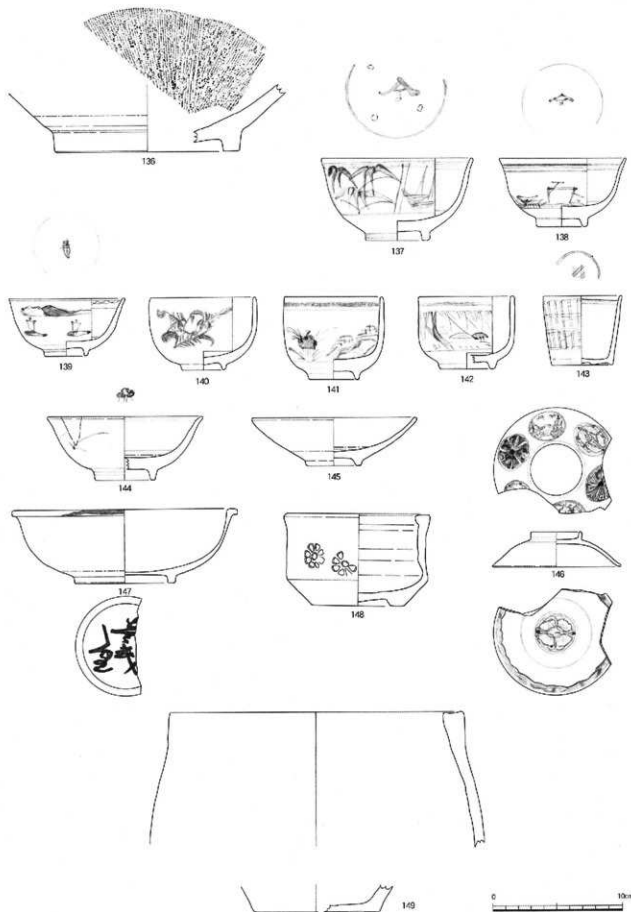
115



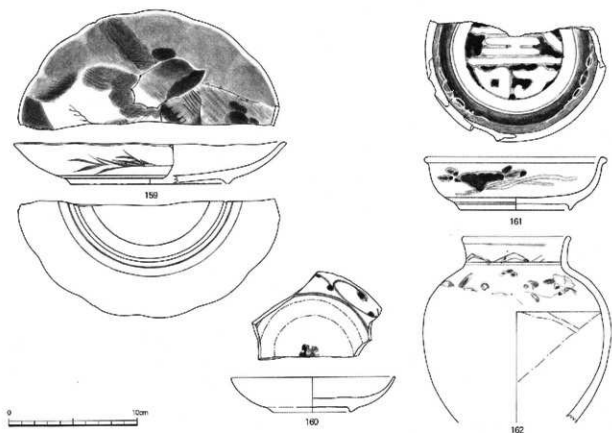
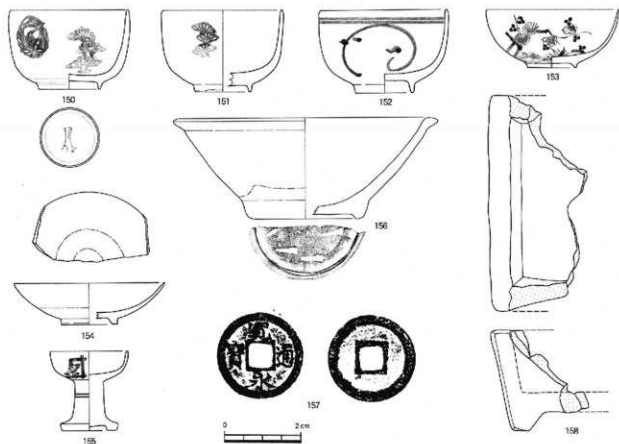
第298図 SD94出土遺物 (1/3)



第299図 SD98 (117~129)・SD99 (130~135) 出土遺物 (1/3)



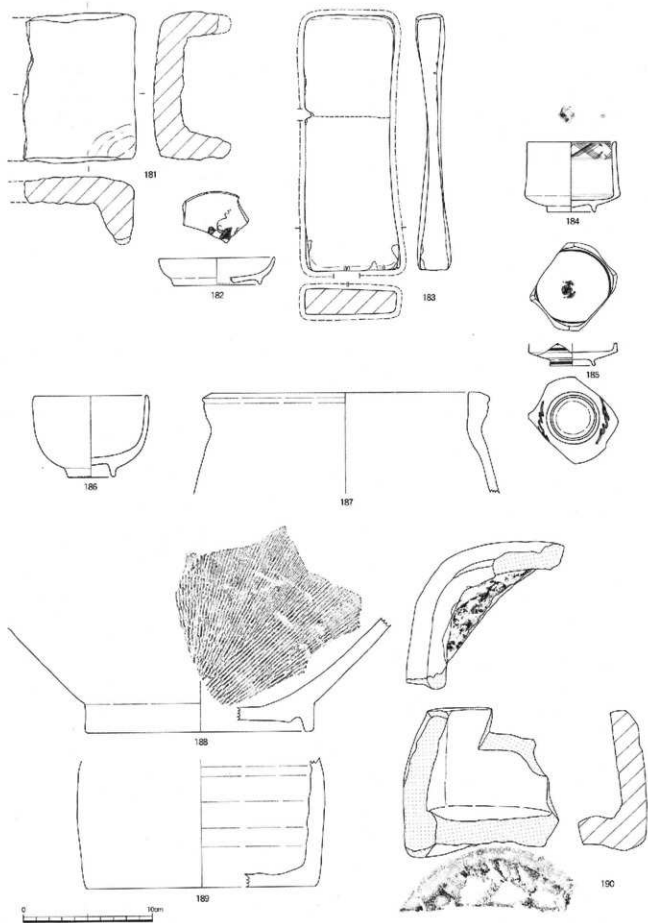
第300图 SD100 (136)・SD108 (137~149) 出土遺物 (1/3)



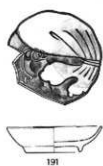
第301図 SD113西側 (150~158)・SD113東側 (159~162) 出土遺物 (1/3 157は1/1)



第302図 SD113東側 (163・164)・17区西壁 (165~180) 出土遺物 (1/3)



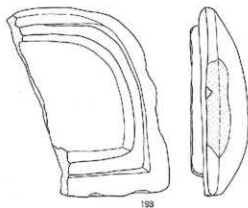
第303図 17区出土遺物 (1/3)



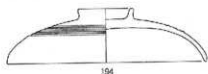
191



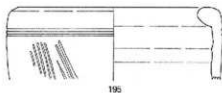
192



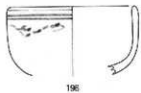
193



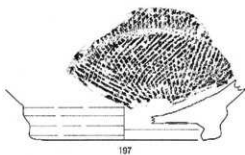
194



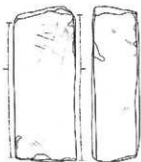
195



196



197



198



第304图 17区 (191~195) · 18区 (196 · 197) · 20区 (198) 出土遺物 (1/3)

第5章 総括

第1節 御経塚遺跡における建物跡の検討 ～北陸縄文晩期集落理解への基礎作業～

1 はじめに

御経塚遺跡は北陸(註1)における縄文時代後晩期の代表的な集落跡として知られる。1956年、押野村史編纂に伴う第1次発掘調査に端を発し、その後、史跡指定関連や土地区画整理事業に起因する発掘調査など第28次までの調査が行われた。本報告書はその中の第21・22次および第24～28次までの報告を行うものであり、御経塚遺跡の既往の調査の大部分が提示されることとなる。

よってここに、これまでの資料を踏まえた上であらためて御経塚遺跡の縄文時代集落跡のあり方を考えるため、本稿にて建物遺構の検討を行うこととした。

従来、御経塚遺跡では竪穴状の掘り込みがある建物跡「竪穴住居跡」が存在することが知られていた。後に金沢市チカモリ遺跡の発掘により円形や方形、長方形に柱を立て並べた建物跡が新たに知られるようになり、御経塚遺跡の柱穴群にも、その存在が指摘されることとなった。他には、地床厚と見られる焼土を中心とした柱穴群が御経塚遺跡や米泉遺跡で建物跡として指摘されてきている。

したがって、こうした先学の調査・確認してきた遺構を、今回報告書で明示することとなった御経塚遺跡の遺構内で検討することが先ずは必要になると考えるが、御経塚遺跡は、遺跡の時間幅が後期前葉から晩期末までと長期にわたり、また遺構の密度も比較的高いこともあって、密集して多数発掘されている穴群から、如何にして建物跡を復元していくかが非常に大きな問題になる。

一般に竪穴を掘り込まないタイプの建物跡については、発掘調査によって検出された穴をその特徴から柱穴と認識し、柱穴と柱穴を結んで建物跡を推定する方法がとられている。北陸の後晩期遺跡では、上述したように金沢市チカモリ遺跡での発見とその後の検討により明らかにされてきた「環状木柱列」「環状柱穴列」「方形木柱列」「方形柱穴列」などが、そうした手法に基づいており、特にチカモリ遺跡では柱根が明らかなる例が多かったこともあり、比較的明確に建物の遺構として認識されてきた。

したがって本稿でも、やや回り道となるが、近接する同時期の遺跡である金沢市チカモリ遺跡の遺構群の検討を基礎として、北陸における他遺跡の調査成果の再検討を行う中から、建物跡の抽出と類型化を試み、建物跡認識のための指標を今一度確認してみたい。幸いチカモリ遺跡は柱穴だけではなく柱根が多数遺存していることで、建物跡の抽出や類型の検討に、より適した資料と評価することができる。そしてチカモリ遺跡での検討結果に基づいて、北陸の同時期資料や御経塚遺跡について検討を加えていくことで、チカモリ遺跡で認めた建物跡類型が妥当なものであるかの検証や、北陸地方全体を見据えた該期建物跡の類型化も可能となろう。

よって以上を、御経塚遺跡及び北陸地方の縄文時代後晩期集落を考えていく上での基礎作業と位置付け、各遺跡の調査資料について検討を行っていきたい。なお、取り扱う時期は、チカモリ遺跡が後期後葉から晩期末葉に主体を持つ遺跡であることから、今回の検討も縄文時代後期後葉から晩期までとする。

なお、遺構の呼称について従来と異なる呼称をする場合がある。「竪穴住居跡」を「竪穴建物跡」、「環状柱穴列」を「円形建物跡」と呼び変える点に顕著だが、その理由については後述することとし、報告書等からの引用については「」付で対応しておきたい。

2 北陸後晩期集落の研究史

まずは北陸における後期後葉から晩期にかけての縄文集落の研究史を概観し(註2)、その成果と課題を確認する。

1) チカモリ遺跡発掘以前

北陸での縄文時代晩期の調査は、戦前の土器研究に始まる。中でも1952・1953(昭和27・28)年の九学会能登

総合調査では、山内清男による県内縄文資料の調査に大きな影響を受け、この時に教示をえた高塚勝喜氏や沼田啓太郎氏、淡 眞氏らを中心として土器の編年研究が進められていく。

1952（昭和27）年、中屋村民から石川考古学研究会会長宛の土器片出土の手紙によって、6月に沼田啓太郎・安村伴儀氏が現地踏査で確認し、同年11月に石川考古学研究会が中屋遺跡を調査した。沼田氏の報告では、八日市新保につく晩期の単純遺跡から中屋式の一型式を認め、東北系文化の受容と中屋特有の人組文の発達、西日本から受け入れた糸文調整の粗製土器が特徴となるとしている（沼田1956）。

1953（昭和28）年には、地元の教師から土器出土の連絡を受けた高塚勝喜氏らが押野村（当時）八日市新保の遺跡を視察し、翌1954（昭和29）年3月、高塚氏他と石川考古学研究会により八日市新保遺跡（当時：現在新保本町チカモリ遺跡）の第1次発掘調査が行われている。トレンチ調査ながら平箱17箱分の遺物が出土した（高塚1958）。

1956（昭和31）年には、押野村史編集委員会により押野村御経塚遺跡の発掘を行なわれた。調査は八日市新保遺跡に引き続き高塚氏が担当し、土器多数が出土している。また、御物石器が遺構に伴う状況で検出され周囲を露かせた。

八日市新保と御経塚の両遺跡の成果をまとめる形で、高塚氏は、1964（昭和39）年に「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」、「石川県押野村史」を発表した。調査によって検出された遺構として、「御物石器を伴う配石」が報告されている。御物石器が発掘調査で出土したのは当時初めてのことであり、遺構に伴っての発見もこの時が初となる。これにより御物石器の時間的な位置付けが晩期であることを確かなものにした。その他の遺構についての記述は見られないものの、集落に関わる部分として、手取扇状地北東部における縄文時代の遺跡立地が論じられており注目される。

高塚氏は、扇状地上の「遺跡は、いずれも低湿地と微高地をさけ、微低地に占地していることが注意される」。「扇状地北部ではこの両遺跡を南北に分かって東西に走る10米等高線から北が、地下水の白噴地帯であり、耕地整理以前はそれよりやや南にあたる17.5米線に近い字野代においても白噴水がみられ」「この白噴水または地下水面がさわめて浅いことが、縄文時代においても遺跡立地と密接な連関をもつて」おり、「扇状地の遺跡立地が縄文時代から既に、水によって厳しく規制されていたことを示している」との理解を示した。また「旧手取川分流の氾濫によって形成された自然堤防にあたるこれら微高地が、採集生活において植物・動物質食料を供給する場としての林野に成長していたこともまた、縄文集落占地の一要因をなしていたと考えようであろう」とし、集落が存続するための生業基盤に関する見通しも述べている。本文の内容的な重点は北陸縄文後晩期土器型式の設定とその編年にあるが、その一方で手取扇状地上における遺跡群立地に関する指摘は現在においてもその価値を失っていない。

その後しばらくは、史跡指定をにらんで動き出した御経塚遺跡の発掘調査が北陸後晩期集落研究の役割を担うこととなる。

『御経塚遺跡 一第5次調査概報一』（高塚・西野1974）は、御経塚遺跡の第5次までの調査に關しての概報である。その中で、遺跡保存計画の策定を念頭においた遺跡分布範囲調査も兼ねた第2次調査の結果、御経塚遺跡が「中央に広場をもつ径約200mの円形に近い大集落であると推定されるにいたった。」と述べられており、集落跡の形状についての言及が見られるようになる。また、第3次調査時点での見解として、遺跡の表面観察と聞き取りから「大小二つの馬蹄形に近い遺跡が、中央の空地を挟んで向かい合いながら、一つの馬蹄状遺跡を形成しているようにも考えられる」ことを述べている。中央の空地については「自然の低湿地なのか、人為的な広場であるかが問題となる。」が、その性格については検討が必要とされた。報告された遺構は「住居跡」1基、炉跡が14基で、時期的には井口式期の「住居跡」1基、伊跡10基、八日市新保式期の「住居跡」1基、伊跡2基、御経塚式期の伊跡1基、中屋式期の伊跡1基とされている。伊跡については竪穴状の落ち込みを確認できなかったものの、「竪穴住居」に付随するものとしての理解を示している。

この時の調査は、従来までの「竪穴住居址」を主とした遺構調査に終始していた発掘方法から「土層の微妙な変化に注目し、土坑、柱穴などは余さず検出するという発掘方法を基本」とするなど、調査技術面で質的な改革

を遂げたものであった(高橋1983)(註3)。

続く1974年の第6次調査で井口式期の炉跡2基、八日市新保式期の炉跡1基(高堰・西野・高本1975)、1975年の第7次調査では井口式期の平式石組炉の設置された「竪穴住居跡」3基、炉跡4基、八日市新保式期の炉跡1基を加えている。そして、それまでを通じて得られた所見として、炉に伴って埋設された井口式期の深鉢は「北と西の間に口縁をむける共通性が認められる」とまとめている。

御経塚遺跡の第8次調査は1976年に石川県教育委員会によって行われた。ここでは後期井口式期の「方形住居跡」1基、打製石斧埋納土坑1基が検出されている(高堰・湯尾・宮井ほか1976)。

そして1983年、御経塚遺跡第8次調査までの調査成果を盛り込んだ報告書が刊行された(高堰ほか1983)。第5次から第7次までの合計として「竪穴住居跡」5基、炉跡22基の報告があり、炉跡については黒色土中での検出が多かったことから竪穴部分が流出もしくは検出できなかったものであろうとし、概ね「竪穴住居跡」に附属していたものと理解している。他に第1次・第2次調査ではそれぞれで竪穴状の落ち込みが1基ずつありいずれも「竪穴住居」と見られることや、第8次調査での「方形住居跡」例も加えて更に3基が加えられた。各遺構の所属時期は、井口式期の「住居跡」2基、炉跡7基、八日市新保式期の「住居跡」4基、御経塚式期の「住居跡」1基、時期不明「住居跡」1基、炉跡17基と報告されている。

その結果を受け高橋氏は、御経塚遺跡の集落跡は、「北部地区の竪穴住居跡と炉跡を比べ、第1次調査のA区と第8次調査で検出した方形住居址点を結べば、円形に近い集落の形態が再現できる。東西150m、北部区域の東よりで若干突出するため、いびつな形にゆがめられて、円形というよりは馬蹄形と呼ぶべき形態を示している。」とまとめた。また、第7次調査区で検出された2基の「竪穴住居跡」が南方に向かって出入口状の張り出し柱穴を有することから、この出入口の方向が「馬蹄形状をなす集落の広場にほかならないであろう。」として、遺構の分布とその設置状況から集落跡形態の推測を行っている(高橋ほか1983)。

その頃、富山県では、同時期の集落遺跡として、富山県井口村井口遺跡が発掘調査されていた。井口遺跡は、縄文後期井口式の標識遺跡である。大規模な発掘調査が行われたのは1978年と1979年で、河岸段丘上の遺跡には多数の柱穴と見られる穴群が検出された(橋本・酒井・久々1980)。

概要報告書では、それら柱穴群について、「竪穴住居跡」の床面から上が全て削平されているものと理解している。形状は、柱柱が8本から10本を中心とする円形もしくは楕円形が推測されており、19基の「住居跡」を復元している。また、その「住01から住04」については、ほぼ同じ場所でも4回の柱替えが見られることや、張り出し部となる柱穴が付属すること、また、定形的で他の「住居跡」と比較して面積も大きいなど、「特殊な性格を有する竪穴」として考えられるとした。そして、その特殊な位置付けが行える「住01から住04」を中心に、「住居跡」が「北群(住05～住16)と南群(住17～19)」に分布していることから、「住01から住04」の特殊性が強くうかがわれる事を指摘している。

この御経塚遺跡と井口遺跡の報告時点では、縄文時代における建物遺構としては、いわゆる「竪穴住居跡」が一般的に知られており、集落跡における遺構の認識が「竪穴住居跡」を念頭に置いたものになっているのは当然の成り行きであろう。竪穴部が削平された「竪穴住居跡」としての見方ではあるものの、概観的に柱穴が並列される建物跡が北陸で注意されるようになったのは井口遺跡が初めてであり、その後のチカモリ遺跡での「半截材止円形プラン家屋址」(南 1983)発見の際に、既に比較の対象として存在していたことにより、遺構の特徴を考える上で重要な役割を果たしたと思われる。そして、もう一つ、不規則に並ぶ穴群を建物跡の主柱穴と見立て、積極的に建物跡を復元したことも成果といえるだろう。ただ、それら「住居跡」については、概要報告ということもあってか、建物復元に至る過程や、その基準などが明瞭にされていない。その為、以後に他の遺跡で同様な視点からの復元がなされることがほとんどなく、建物跡復元例としての妥当性が確認されないままに終わっている点が惜しまれる。

2) チカモリ遺跡発掘(1980年)以後

押野村八日市新保遺跡(当時)は、1954(昭和29)年、高橋勝喜氏等と石川考古学研究会により第1次発掘調査が行われている。そして翌々年の1956(昭和31)年、押野村から金沢市への編入に伴う地名変更を受け、遺跡

名称も新保本町遺跡に改称された。1974・75（昭和49・50）年には金沢市教育委員会による分布範囲確認調査が行われている。分布調査の結果から、当時発掘調査の進んでいた野々市町御経塚遺跡との関連にも触れつつ、後期後葉から晩期にかけての重要な遺跡との認識が生まれるに至っている（宮本1976）。

大規模な調査が計画されたのは、新保本町での土地区画整理事業が始まったことによる。遺跡の調査が行われたのは1980（昭和55）年のことであり、周囲に存在する「新保本町」を冠した遺跡が数多くなってきたことを受け、この時点での遺跡地図には、「新保本町チカモリ遺跡」と三日目の遺跡名変更が行われている（註4）。

第3次となる1980年の発掘調査では、3,100㎡が調査対象となった。晩期を主体とする集落跡の大半を調査する中、大形木柱根の検出をはじめとして、それらが円形に配列される「正円形プラン家屋址」や方形・長方形に配列される「方形・長方形プラン家屋址」、小形で「正円形プラン家屋址」に類似する「一般家屋」が確認されるなど、極めて大きな成果をあげている。

その後、報告書が刊行され（南1983）、チカモリ遺跡の建物跡や集落跡に関する多くの指摘がなされ以後の北陸における縄文晩期建物遺構研究のスタンダードとなっていった。重要な部分が多いので、ここで、その成果をまとめておこう。

集落については、「正円形プラン家屋址」「正方形プラン家屋址」「長方形プラン家屋址」の3者からなる「特殊家屋」と、他に「一般家屋」が認められる。「当遺跡には中央に広場があることが予想され、その広場を取り囲むように円形に一般家屋があり、それらの中心的な位置に特殊家屋があると考えられる。」「特殊家屋、一般家屋の正円形プランにおいては、線対称軸を延長すると広場中央にあつまり、門扉は広場に面するのでその他の家屋も広場の中央にむかって出入口部が設けられている可能性が高いことが指摘される。」「長方形プランにおいては、短辺が広場に面し、短辺の中点を通る主軸は広場中心付近を通る。などの特徴が認められている。

また、「正円形プラン家屋址」に関しては、円形に柱穴が配置される部分と出入口と思われる部分があり、「両者とも唯一の軸によって対称な位置に配列されている。出入口を有することから、建物は「出入口を必要とする閉鎖的なもの、すなわち有覆屋の建物である」と思われる。建物の柱根から「半截された半円形木柱根の円弧面は、いずれも向心性が強い」こと、つまり、円弧面が建物の内側を向くことがその特徴として述べられた。

「一般家屋」とされる遺構についても記述をたどる限り、「正円形プラン家屋址」とほぼ同様な形状、特徴を示しているものと思われる。また、「正方形プラン」「長方形プラン」の「家屋址」に関しては、丸柱を用いている、ほぼ正方形・長方形に配されていることが大きな特徴とされている。

北陸において、集落を構成する遺構の種類を指摘しつつ、それらの集落における配置や出入口の方向から、環状集落であることを具体的に指摘した事例としては、このチカモリ遺跡における南氏の指摘が、御経塚遺跡での高橋勝孝氏の検討に続くものである。また、チカモリ遺跡での柱根や柱穴から行われた建物遺構の復元は、その後の北陸の晩期集落研究における建物遺構イメージの出発点ともなった。そして「特殊家屋」とされる「正円形プラン家屋址」に関して、同一地点で数回にわたりに立て替えられることや、集落の「かなめの部分」に占地する「集落の中心的機能を果たした家屋」であるとの指摘は、富山県井口遺跡における「特殊な性格を有する竪穴」に引き続き、重要な指摘であると評価すべきである。

チカモリ遺跡の発掘に引き続き、1982年には、能都町貞籠遺跡の発掘により、能登地方において円形や方形に柱根を配列した遺構が発掘された（高橋ほか1986）。報告書で「巨大木柱列」と呼称されたこの遺構は、柱穴の出土遺物から晩期中原式に比定されるとともに、柱根の配置方法やその規模などがチカモリ遺跡と類似していることが判明した（加藤1986）。また既往の調査資料の見直しが行われる中、先に指摘されていた富山県井口遺跡例に加えて、石川県野々市町御経塚遺跡（高橋他1983）や鳥越村下古吉遺跡、鶴米町白山遺跡（西野1985）においても柱穴が円形に配される遺構が指摘されるなど、このような遺構が、北陸において面的に存在、分布していることが明らかにされた（南 1986）。

3) 「環状木柱列」論・晩期集落跡の展開

チカモリ遺跡の発掘以後も、御経塚遺跡では調査が継続され、御経塚遺跡ツカダ地区（古田1989）、プナラシ地区・デト地区（本書）で、主に上地区西整理事業に伴う発掘調査と報告が行われた。また、富山県小杉町北野

遺跡(酒井重洋1987)、新潟県青海町寺地遺跡(寺村他1987)、石川県金沢市米泉遺跡(西野1989)、中尾サワ遺跡(市1992)、小松市六橋遺跡(本田1997)、大津くろだのもり遺跡(久田2002)、藤江C遺跡(布尾2002)などで晩期建物跡の事例が蓄積されていく中、チカモリ遺跡で「正円形プラン家屋址」と呼ばれた遺構は「大型木柱使用の建造物遺構」(橋本1985)、「巨大木柱列」(市1986、加藤1986)、「大型木柱跡」(酒井1987)、「環状木柱列」・「方形木柱列」(西野1989・1994、加藤1989・1994、橋本1994)、「円形柱列」[方形柱列](本田1997)、「環状柱列」[掘立柱建物](久田2002)など様々な呼称で呼ばれるようになる。

そして、それらと共に、いわゆる「環状木柱列」[方形木柱列]を軸とした議論が多岐にわたって展開するようになる。内容としては、南久和氏によるチカモリ遺跡の報告書中における問題意識を基礎として、「環状(方形)木柱列」の設計・規格や建築材の調整・加工の特徴に関する具体的な検討、構築方法・上原構造・材選択の理由などの推定、集落内での占地、そしてそれらを通して考えられる遺構の性格についてなどである。

建物跡として遺構を見る場合、遺構には、設計、構築資材の準備、構築、機能の段階を経て、腐蝕、埋没に至る各段階を設定することができる(黒尾・小林1996)。発掘調査によって検出される遺構に見られる様々な特徴は、そうしたいくつもの段階が複合して現象化したものであろう。「木柱列」遺構の特徴や研究史もそうした遺構形成の各段階を鑑み、本稿では、先にあげたテーマに即して、「環状(方形)木柱列」の形態的特徴・設計規格や、集落内での占地・重複、集落の形態について述べられた部分を取り上げて、北陸における縄文晩期の遺構論・集落論がどの様に進められてきたかを確認してみる(註5)。

a 設計規格に関して 研究史のチカモリ以後の部分で述べたように、「環状木柱列」はその発見の当初から、規格性の強い建物であるとの見方がなされていた(市1983)。繰り返しとなるがその特徴をまとめると、

- ① 木柱列は平面円形に配置され、且つ、軸に対して対称の位置に配される。
- ② 木柱列は円形に配された円環部分と、「ハ」字状に開く出入口部分からなる。
- ③ 木柱は半截材を使用し、平坦面を外側、弧面を内側に向けて設置する。

の3点が最も強調されている。そして、

- ④ 木柱の下に板材や礎などを置いて木柱の沈下を防いでいる。
- ⑤ 柱の数は9から10本で概ね等間隔に配される。

ことも指摘されている。

続く真脇遺跡(加藤1986)と米泉遺跡(西野1989)の報告書では、「環状木柱列」の特徴として①②③④がほぼ認められ、新たに、

- ⑥ 柱は柱穴内で建物の中心寄りに置かれる。
- ⑦ 出入口部には弧状の板材が使用される(真脇遺跡)。
- ⑧ 米泉遺跡では柱の数が8本で、柱が若干内側に傾いている。

なども指摘された。御経塚遺跡・真脇遺跡・米泉遺跡の三遺跡の事例から特徴をまとめた橋本澄夫氏は、それらに加えて、

- ⑨ 円環の直径は概ね6～8m。
- ⑩ 柱にはクリ材を使用。
- ⑪ 柱列に伴う竪穴状の掘り込みは確認できず、通常の炉跡や埋葬に関連するような上坑も検出されていない。

ことを述べつつ、「環状木柱列」の諸特徴をまとめている(橋本1994)。

またこうした規格性については、

⑫ 巨大な「環状木柱列」は「一般住居と想定される環状木柱列と基本的な構造を同じくする」(加藤1989・1994)と述べるように、チカモリ遺跡の「正円形プラン家屋址」・真脇遺跡の「巨大環状柱列」が同「一般家屋」・「環状木柱列」と、規模の違いこそあるものの、その他の規格性という点ではおおむね変わらないものであることも指摘されている。

その後西野氏は「環状木柱列」における柱の幅と柱間距離に注目して、柱間距離が使用されている柱の幅の倍数に近いことを真脇遺跡・米泉遺跡・チカモリ遺跡の事例から指摘した。弧面の残る割版を柱とし、その間に芯

部分を含む板材並べて立てて閉塞空間を作り出し「時的な祭祀の場」を構築したものであり、「祭祀が終了した後には、割板は隣接する高床式倉庫で床・敷材として転用され」たとして、その建物構造に関する推察を述べた(西野1995)。同様に割板を壁材として使用した可能性を説いたものとしては、山田昌久氏や橋本澄夫氏による、柱の平坦に調整された面に横方向に壁板を当てる、円に近い多角形となる半円プランとなる家屋の想定もあるが(橋本1994)、「円環部に残されていたのは建物の垂直材であるが、横材、斜材はどのようなものが使用されていたのか分かっていない」のが現状である(南1994)。

次に「方形木柱列」について確認する。「方形木柱列」は当初新潟県寺地遺跡の事例が知られていた。チカモリ遺跡では、4本柱の「正方形プラン」と6本柱の「長方形プラン」が1基ずつ検出され、ともに径50cmを超える丸柱を用いられることで耳目を引くこととなる。真船遺跡でも径40cm程の丸柱使用の長方形プラン4本柱の「方形木柱列」が確認、続いて富山県北野遺跡では正方形配置の「1号柱跡」が検出され、北陸晩期集落における、もう一つの典型的な遺構として認識されるに至っている。

これらの「方形木柱列」については、各事例を検討した酒井重洋氏が、当時知られていた6遺跡11例の事例を検討し(範囲は石川・富山・新潟)。

⑬ 柱穴の配列方法として、「長方形配列」・「長方形配列を複数並べる例」・「正方形配列」があることを指摘した。また、幅約1mの「正方形配列」柱跡である新潟県寺地遺跡例と北野遺跡は、寺地遺跡例が配石を伴うことから「配石遺構に伴う立つ物」の可能性が高く、その他は「建物の性格が強い」と述べ方形建物にも機能差がある可能性を指摘している(酒井1987)。また、加藤三千雄氏(加藤1989)は、

⑭ 「方形木柱列に丸柱を使う約束は一寺地・チカモリ・真船・北野B遺跡一の4遺跡で検証された。」

⑮ 「樹種はクリ、ヒノキ(真船)、スギ(寺地)が知られている」

などから、クリ使用が多い「環状木柱列」に対して、形態だけでなく用材も異なることも指摘している。

b 集落形態 続いて集落の形態や、「環状木柱列」「方形木柱列」の集落内での在り方について検討された論考を確認しておこう。

南久和氏はチカモリ遺跡の報告書で、集落が環状(弧状)を呈していることと、「正円形プランの特殊家屋は、一般家屋に比べ大きな木が用いられ、何度も同じ場所に建て替えられていることから、集落の中心的機能を果たした家屋と考えられ、集落のかなめの部分に占地するものと考えられる。」と述べ、巨大な木柱を用いた特殊な建物が集落の中で特別な場所に占地し、かつ、幾度も重複して構築されていることを強調した(南1983)。この点については真船遺跡においてもよく似た状況(A環～C環の重複とその周辺に弧状に展開する遺構群)が観察されており、環状(弧状)を呈する集落において、ほぼ同一地点で重複して構築される大形の「環状木柱列」が存在することが早くから明らかとなっていた(註6)。

そうしたなか東日本を中心に縄文集落の研究を進める石井寛氏は、チカモリ遺跡について、「一般家屋は「半截材正円形プラン家屋」と関連させると見事に弧を描くがごとき分布をなすことに気付く。一方、円柱の用いられた方形プランの「特殊家屋」はそれらの内帯に分布するらしい傾向も指摘可能で、更には調査区の東側が広場になる蓋然性が高く、「半截材正円形プラン家屋」も含めた住居群の入り口は、この広場を向くと推定されている。とすれば「半截材正円形プラン家屋」の占拠点、まさに集落の「要」にあたることになり、しかも、同一地点において繰り返し建て替えがなされる様は、多重複住居を要として展開した港北ニュータウン地域の加曾利B1式期集落の様相に近づくこととなる。もしも、「半截材正円形プラン家屋」の前面に見られる落ち込みが墓坑となれば、墓坑の位置さえも一致してくる可能性さえある。」と述べ、チカモリ遺跡について集落の形状を整理するとともに、関東地方の後期集落に認められる類似点について指摘した(石井1989)。またその後、「チカモリ遺跡 半截材を用いた建物を核とした集落構成と考えられる」「私見では、小丸遺跡の「核家屋」と類似した集落の要となる施設であったと考える」(石井1998)と述べている

c 集落内での遺構の状況 こうした、いわゆる「集落のかなめ」に占地する「環状木柱列」について、酒井重洋氏は、「円形配列の例は、一部が重複し数回の立替がみられるものが多く」あることを指摘、チカモリ遺跡や真船遺跡において、柱を新たに建てる際に柱穴の重複部分では柱根がないことに注目し、「前に存在した柱

が朽ち果てた後に立て替えるという遺構の性格を示し、周期的に抜き取り立て替えるようなものではなく一代限りの立つ物である可能性が高い」と述べた。また、遺構の性格については「半截した巨大なクリ材の使用を考えると呪術などに使用する特殊な空間」と想定している(酒井1987)。また橋本澄夫氏も、後半、チカモリ遺跡・真脇遺跡の事例では「重なり合うサークルの柱根が抜き取られずに、その柱穴の中に残されている」ことから、建てられてからかなりの年月を経て、「柱の地中部分を残り、上部で腐食・倒壊が進んだ段階で」、「地上部での柱が容易に除去できた後での」立替えが行われたものと推測し、酒井氏とほぼ同様な理解を示す(橋本1994)。そして柱穴に礎板や根固めを敷く例も取り上げ、そうした沈降を防ぐ施設も、できる限り長期にわたる使用を念頭に置いて工夫されたものとした。

酒井氏・橋本氏の両氏は、遺構の形成過程として、「(建物の構築→使用→廃絶→腐朽・倒壊→新建物の構築(建物範囲内の残柱根の処理)→使用)」といった流れを想定しているものと思われるが、こうした遺構のライフサイクル的な考え方は、遺構の性格を考える上でも重要な指摘といえる。ただし、遺構の「廃絶」に際して、人為的に火を入れて建物を燃やしたり、あるいは橋本氏の述べるように、腐朽の進んだ柱を地表面近くで切断したりすることで、残存する遺構の状況は同様なものとなるのが予測されるので、廃絶後に「前に存在した柱が朽ち果てる」までの時間をみる必要があるか否かは今後議論が必要な部分である。

「環状木柱列」以外の遺構に関しては、集落内に近接して「方形木柱列」が存在することがチカモリ遺跡・真脇遺跡・米原遺跡・北野遺跡の事例から知られ、場合によっては特殊な配石遺構を伴うことが真脇遺跡・寺地遺跡などの事例から明らかになっていった。また「方形木柱列」は「重複する配石形態になる例が少ない」という指摘(西野1994)も重要な知見である。

d 構造・性格

「環状木柱列」「方形木柱列」の構造・性格については、多様な見解が述べられている。大きく見て「環状木柱列」に関しては①家屋説と②非家屋説にわけられる。簡単にではあるが以下にまとめておこう。

① 家屋説は、「環状木柱列」が、屋根・壁のついた家屋とみる説である。(南1983・1994)(橋本1985・1994)(山田1989)(加藤1989)(石井1989)などで指摘され、その性格については、

①a 「特殊な共同で使用する家屋」(男子集会所・若者小屋・儀礼小室)・・・(南1983)

①b 集会所あるいは祭祀所・・・(橋本1985)(加藤1989)(渡辺仁1990)

①c 「集落の祭祀機能が集約された建物」と一般的な「住居」・・・(石井1989)、「核家屋」(石井1998)

①d 特殊な遺構(巨大環状木柱列)と住居(環状木柱列)・・・(加藤1989)

①e 竪穴式建物・・・(久田2002)

などとされる。

② 非家屋説は、「環状木柱列」が、屋根のつかない構造物であったとみる説で、

②a 祭祀所 屋根がなければ「集約儀礼用屋内型埋地」・・・(渡辺仁1990)

②b 祭祀所 「ただ1回だけの祭祀行為が行われた場」・・・(西野1994・1995)

②c 祭祀所 「巨大木柱列は火の祭りの場であったのである」・・・(渡辺誠1995)

などがある。

③「方形木柱列」に関しては基本的に倉庫とする説があるのみで、

③a 高床倉庫・・・(加藤1989)

③b 「堅果類を主とした植物性食料の貯蔵用施設」・・・(橋本1994)

③c 食料用の「高床式倉庫」・・・(西野1994)

などがあげられよう。

チカモリ遺跡で指摘された「半截材正円形プラン家屋址」と「一般家屋」については、後に石井氏の「核家屋」論議でも確認され、また加藤氏も述べるように、「巨大環状木柱列と環状木柱列は大きさや集落内におけるそれらの配置という点で、機能・用途の上から区別されるべき」(加藤1994)として、両者には異なる性格付けをする必要性が指摘されている。その内いよめる「正円形プラン家屋址」「巨大環状木柱列」には、南氏の共同利用

家屋説や久田氏の竪穴建物説という指摘を除いて、祭祀色の強い建物との見方が多く、橋本氏・加藤氏の祭祀所そのものの説や、石井氏による、祭祀者が住まう住居である「榎家屋」という理解がなされている。

非家屋説は、祭祀の内容についての推論に差があるものの、柱列の内部で祭祀を行う祭祀所という見方は各氏同様である。興味深いのは、チカモリ遺跡に見る「正円形プラン家屋址」と「一般家屋」との2種類の存在について言及すること無く、おしなべて「環状木柱列」として検討を行っている点で、米泉遺跡のような小規模な集落では成り立つ祭祀所説が、チカモリ遺跡のような大規模な集落でも成り立つかどうかの言及は無い。こうした「一般家屋」、あるいは巨大でない「環状木柱列」に関しては、石井氏や加藤氏により、集落を構成する住居という見方がなされており、それに対して、「環状木柱列 祭祀所説の立場としては、チカモリ遺跡で12基程度確認できると報告されている一般家屋が、全て祭祀所なのか否かという点を示す必要がある。

一方、「方形木柱列」に関しては、加藤氏により、上中に入っている部分が深くないので「高く単独で樹立していたかは疑わしい」もので、「丸柱は半蔵柱と比較すれば2倍以上の底面積を持ち、なおかつ礎石ないし礎石を底面に引くものだから、重畳のある建築物あるいは高床をもつ底辺の構造と理解したい」と述べられるように(加藤1989)、高床式の構造を持つもので、性格的には、堅果類の林の中にある米泉遺跡などの例から、植物質食料用の「倉庫」という見方に落ち着いているようである。

4) 研究史を通して

各氏の論考により、a設計規格の項で確認した「環状木柱列」と「方形木柱列」に見られる諸特徴は、地域的・時間的にある程度のまとまりを有していることが明らかになっている。これは、建物構築時の規格性が反映したものと見られ、共通の規格意識を有する人々によって、縄文時代晩期に、加賀・能登・越中の各地で類似する遺構が作られたとすることに、異論のないところであろう。そして、同時期の遺跡で、木柱が遺存していない場合でも、配列される柱穴に、特徴①②③④⑤などが認められる場合は同様な遺構の痕跡として理解することは可能であり、真脇遺跡の報告書で南氏が行った、月山遺跡例や御経塚・中屋サウ遺跡などについて行われた類似遺構の指摘(南1986)は、的を射たものであった。

ただし、その後の六橋遺跡や大津くらのもり遺跡では柱穴が円形に配列されずにややゆがんだ状態で復元されたものが同様な遺構であると報告され、また、筆者が報告を担当した藤江C遺跡の竪穴建物跡も、柱穴の配列が放射状にバランスよく配されるものではないにもかかわらず、柱穴が円形配列をとることから、「環状木柱列」に類する遺構と認識するなど、「環状木柱列」の範囲がそれ以前の定義を超えてしまう傾向をみせるようになる(註7)。これらについては類例の確認や検討を行うなどの作業を要するものの、少なくとも学史的には「環状木柱列」と呼べるものではないことを確認しておく必要がある。

集落形態に関しては、早い時期から御経塚遺跡について、環状あるいは馬蹄形との指摘を行ってきた高塚勝喜氏の指摘に加え、チカモリ遺跡における南氏と石井氏の環状集落という指摘、米泉遺跡を列状集落とする西野氏によるチカモリ遺跡列状集落説が見られる。西野氏によるチカモリ遺跡列状集落説は、遺構の分布や軸の向きなどから検討された環状集落説により成立しないと思われるが、米泉遺跡については河川に対して遺構が列状に並ぶ可能性は高く、集落によっては異なる形態をとる場合があることを指摘したのもとして重要であろう。

「環状木柱列」の構造・性格に関する議論は、その特殊な設計規格や集落内での位置、重複の状況、民族事例などから、多様な見解が生まれている。大切なのは橋本氏や石井氏が行っているように、遺跡における遺構の状況を確認しつつ、遺跡間で比較検討を行い、蓋然性の高い判断と解釈を求めることであり、一部の事例のみに適用可能な解釈を展開していくことは慎むべきである。自戒の意味を込めつつ、今後の課題としたい。

3 事例検討

本項では、石川県・富山県で発掘された縄文時代後晩期の遺跡の内、集落跡が調査され、遺構が良好に検出されている遺跡に関して、建物跡の再検討を行うものである。手帳としては、チカモリ遺跡を出発点として建物跡の確認や類型化を改めて行い、その上で、石川県・富山県域を中心に当該時期の資料に当たり、チカモリ遺跡で確認された類型の確認を行うこととしたい。また、その過程で異なる建物跡類型が確認できた場合は、検討した

上で新たに類型を設定したい。まずは、報告書に記載されたデータや図面に基づき建物跡を推定復元することから始めることとなるが、報告書に記載されていない建物跡復元案も存在すると思われるので、その際は、本稿にて「SB○、SB○○建物跡」などと便宜的に建物跡番号を附することとした。

記述の關係上使用する用語についてもここでいくつかのこだわりを入れておきたい。対象とする縄文時代後晩期における建物遺構の形態として考えられるものは、「竪穴建物」と「掘立柱建物」である。竪穴建物は従来から縄文時代における主要な居住施設として認識される遺構であり、北陸地方の高期にも確認できる。「竪穴住居」「竪穴住居跡」「竪穴住居跡」などと呼ばれるものが通例だが、当地における竪穴には炉跡の付属しない例も多く、先見的に「住居」と呼称するのではなく多少し集落の中での位置づけ等の検討を行うことが必要であると考えられる。よってここでは機能的な意味合いをいったん棚上げした「竪穴建物」と呼称して以後の検討に備えることとした。

掘立柱建物については石井寛氏の指摘（石井1989）以後、集成を踏まえた分類をへて、地域毎あるいは時期ごとにおける検討が進み、縄文時代の特に中期から晩期にかけての主要な建物施設としての理解がなされつつある。

通常、遺跡においては方形や亀甲形など建物を構成したと思われる有意な形状に柱穴が配列されているものをもって掘立柱建物跡と呼称しており、本稿でもそれに従うこととなる。また、遺構として見た場合の分類をする上では、発掘調査のデータから平地式、高床式、竪穴式のいずれかを判断することが困難なものも多い。したがって本稿では有意な形状に柱穴を配置して柱を立てて建物としたと見られる遺構について「建物跡」と記載し、調査によって竪穴状の掘り込みが確認されたものについて「竪穴建物跡」と呼称することとした。「建物跡」については、平面形の違いによる後述する分類を踏まえて、円形建物跡、方形建物跡、亀甲形建物跡などと呼称することとした。

なお、「建物」と「建物跡」の区別は、発掘調査時に遺構として現象化したものを指す場合は「建物跡」とし、調査データなどを元にして概念的に当時の集落などを復元する際には「建物」を使用するものとする。「集落」・「集落跡」なども同様である。

1) チカモリ遺跡 (第305～307図)

a 資料 金沢市新保本町チカモリ遺跡は、後・晩期の人規模集落跡であり、既述のとおりさまざまな学史的意義のある遺跡である。

調査は第1次が石川考古学研究会、第2次から第4次までを金沢市教育委員会が行った。第1次調査の報告では、北陸における縄文時代晩期初頭の上器型式として八日市新保式が設定されている（高塚1964）。

第2次から第4次調査分については、『金沢市新保本町チカモリ遺跡 一遺構編一』（南1983）、『金沢市新保本町チカモリ遺跡 一七器編一』（南1984）、『金沢市新保本町チカモリ遺跡 第4次発掘調査兼上器編』（南1986）が報告されている。また、近年、金沢市史編纂において、一部再検討を経てチカモリ遺跡として掲載された（南1999）。本稿では、それらの文献を用い、チカモリ遺跡の遺構の再検討を行うものである。

上記報告書には、チカモリ遺跡調査担当者である南久和氏による「家屋址」の特徴が詳しくまとめられている。その内容については報告書や本稿2、3）を参照していただきたいが、そこでの南氏による検討は今日でも多量有益なものが多く、今回の検討でも活用させていただく部分が多い。ただ報告が「A-H 環」や「長方形プラン家屋址」に代表される大形材をもちいた遺構に比較的重点が置かれているため、追加項目として、小規模の柱根や柱穴も検討の対象とすること、円形及び方形以外の柱穴配置を示す遺構をあらためて探すことをあげ、遺構図の見直しを行った。なお、その際、チカモリ遺跡では弥生時代以降の遺物や遺構が報告されていないので、遺構図に記載されている柱穴は全て縄文時代後晩期のものと理解した。

集落跡の全域が調査されたものではないこと、遺構の重複が著しいこと、遺構の断面や底面のレベルが不明なものが殆どであることなど問題点はあるものの、資料数が多いことや、柱根が遺存していることにより建物跡を推定する際に蓋然性が高められることなどから北陸の資料の再検討を行ううえでは最も基礎的な検討にたえる資料と思われる。以下に、本稿での建物跡の分類を示す。

b チカモリ遺跡における建物跡の分類 チカモリ遺跡の報告書に記載された遺構全体図をもとに、柱穴配置とその平面形から建物跡の復元と類型化を行った（第305図）。分類は平面形により、A類：方形、長方形の柱

穴配置をとるもの、B類：亀甲形の柱穴配置をとるもの、C類：円形の柱穴配置をとるものとし、さらに形態的特長から適宜細分類をおこなった（第306・307頁）。

A類 平面が方形や長方形になるように柱穴が配されるもの。1周1周のものが大部分を占める。他に柱間の数が多いものを入れたに柱穴を配するものが確認されることから3細分を行った。

A1類 1周1周の方形ないし長方形に柱穴が配されるもの。平面がより方形に近いもの（SB41・SB42・SB43・SB44・SB49・SB50・SB51・SB58・SB74号建物跡など）と長方形に配されるもの（SB38・SB40・SB52・SB53・SB57・SB63・SB67・SB68・SB69・SB70号建物跡）があり、更なる細分も可能であるが、区分点が明瞭でないことから今回は細分しなかった。柱材の特徴としては、柱穴の径が小さいものが多いことと、半截材が多く見られことがあげられる。ただし丸材を使用している例（SB40号建物跡）や、半截材と丸材を共に使用している例（SB63号建物跡）もあるようなので厳密な使い分けはないようである。また、半截材の配置の方法としては平坦面を内側に、弧面を外側に向けるものが多く、建物構築時における規格の1つであったと理解される。

A2類 1間2間以上で平面長方形に柱穴が配列されるもの。1周2周のSB31号建物跡1基が該当する。全ての柱に際して太い丸材を用いており、遺跡全体の中でも特殊な事例となっている。報告書で「丸柱長方形プラン家屋址。（南1983）」として報告されているものである。

A3類 方形ないし五角形に配列された柱穴を取り囲むように長方形に柱穴が配されるもので、内側部分と外側部分が入れ子の二重構造になっている。チカモリ遺跡ではSB32・SB33号建物跡が該当する。両者は内部の方形部分には太い丸材を使用し、外側の長方形部分には半截材を用いている点で共通した作りとなっている。また、外枠部分では半截材の平坦面を建物内側に向けて配置するのも共通しており、強い規格性が観取できる。内枠部分には建物長軸の位置に半截材が配される点も同様である。

本類については遺構の重複である可能性も疑われたが、異なる地点で上記のような共通性・規格性が認められたため1基の独立した建物跡と判断した。

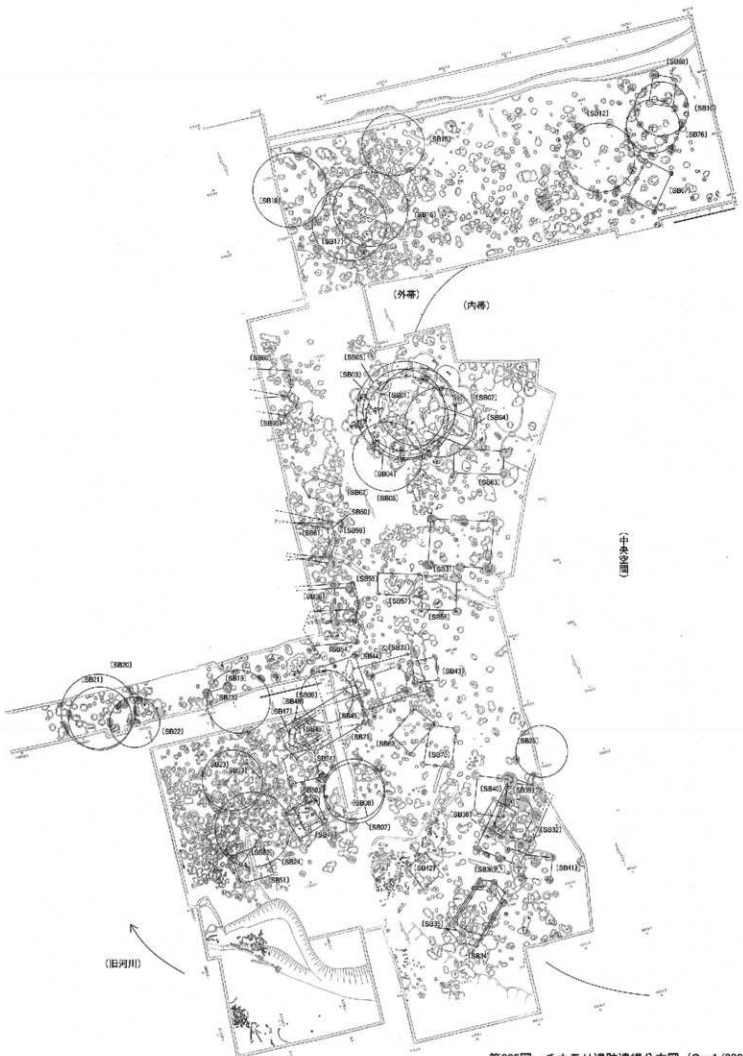
なおSB32号建物跡は外側方形柱列の長軸上で棟持柱の想定される位置に柱穴が2箇所確認される。その片方には丸柱が入っており一体のものである可能性もあるが、SB33号建物跡では確認されないことから本建物に付属するものであるか否かを判断するのは現時点では難しい。

B類 平面亀甲形に柱穴が配列されるもの。確認できるのは柱穴6箇所構成されるか、もしくは6箇所と想定されるものがほとんどで、6箇所以上と想定されるものはSB55号建物跡の1基のみであった。SB55号建物跡については全形が不明であるが、新潟県吉田遺跡で事例が多く見られることから一つの類型として設定した。

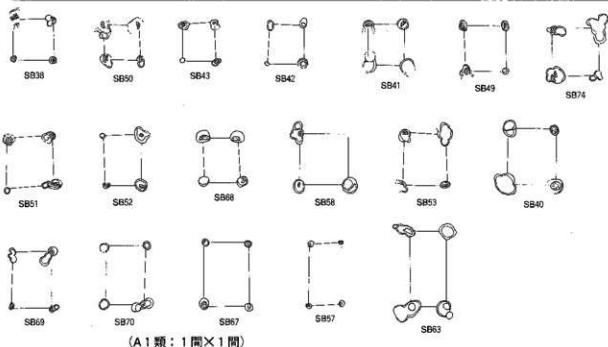
B1類 平面亀甲形で6箇所の柱穴が配されるものの内、長軸方向に柱が配されるもの。SB34・SB35・SB39・SB64・SB71号建物跡などが代表的なもので、柱根の遺存状態も良い。柱根を見ると半截材を用いるものがほとんどで、その多くが平坦面を内側に向けてすえられていることが確認でき、柱材の選択、配置と設置時の規格性が高いことが指摘できる。

B2類 平面亀甲形を呈すると思われるものの内、6本以上の柱穴が想定されるもの。SB55号建物跡が該当するが、全体が検出されたわけではなく、亀甲形の片側と、そこから更に外側に伸びた位置にもう一組の柱穴と柱根が確認された。

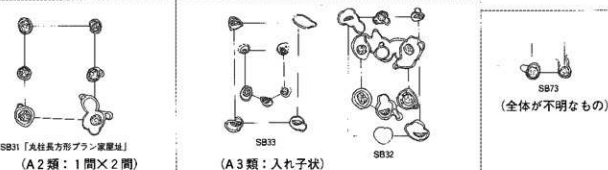
C類 平面円形に柱穴が配されるもの。柱穴ないしは柱根が概ね円周上に乗るものがほとんどで、出入り口と見られる「ハ」字状に開く付置柱穴ないし柱根がみられるものもある。南氏の述べる「正円形プラン家屋址」の特徴が当てはまる。柱穴は建物主軸となるラインに対してバランスよく対称的に配される傾向にあり、出入り口部の付属柱も同様となる。使用される柱材は確認できるものは全て半截材であり、（南1983）で指摘されたように、弧面を内側、平面を外側に向けるという特徴を示す。



方形建物跡 (A類)



(A1類: 1間×1間)



SB31「丸柱長方形プラン家屋址」

(A2類: 1間×2間)

SB33

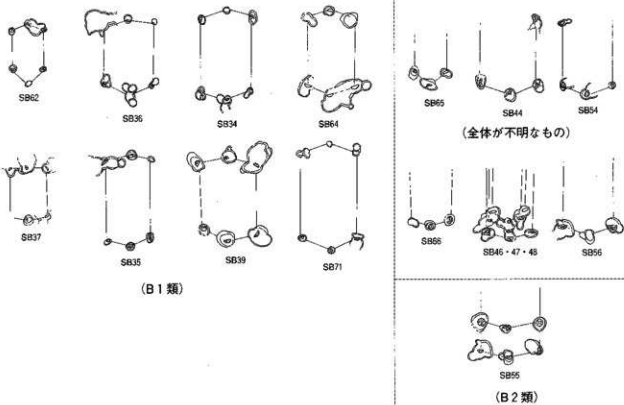
(A3類: 入れ子状)

SB32

SB73

(全体が不明なもの)

亀甲形建物跡 (B類)



(B1類)

(全体が不明なもの)

(B2類)



SB25



SB76

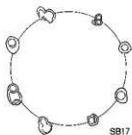
(C1類：主柱6本)



SB10



SB23



SB17



SB08



SB02 [B欄]



SB12

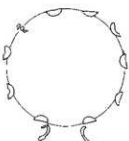
(C2類：主柱8本)



SB24



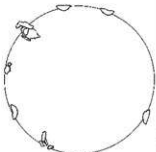
SB16



SB01 [A欄]



SB05 [D欄]



SB03 [C欄]

(C3類：主柱10本)



SB25



SB22



SB07



SB21



SB19



SB15



SB06



SB20



SB18

(主柱本数が不明なもの)

円形建物跡 (C類)

第307図 チカモリ遺跡の建物跡 (2) (S=1/200)

円周上に乗る柱穴の数により細分類を行うが、全体が不明なものがあり細分類不明となるものも多い(SB06・SB07・SB13・SB14・SB15・SB18・SB19・SB20・SB21・SB22・SB25号建物跡など)。

C1類 平面円形に柱穴が配列されるものの内、円周上に6箇所柱穴が想定されるもの。SB75・SB76号建物跡が該当する。平面亀甲形となるB類建物跡の一類型であることも考えたが、柱穴は円周上に乗る位置に配されていることや、柱根に半截材が使用されその平坦面を外側に向けている点がB類とは異なることによりC類建物跡の一類型と理解した。

C2類 平面円形に柱穴が配列されるものの内、円周上に8箇所の柱穴が想定されるもの。出入り口部の付属柱穴が確認できるもの(SB23・SB08号建物跡)と、確認できないもの(SB10・B環(SB02)・SB17号建物跡)が存在する。

C3類 平面円形に柱穴が配列されるものの内、円周上に10箇所の柱穴が想定されるもの。出入り口部の付属柱穴が確認できるもの(A環(SB01)・SB12・SB21号建物跡)と、確認できないもの(D環(SB05)・SB16・SB03号建物跡)が存在する。

以上をチカモリ遺跡の集落を構成する建物跡として認識した。「A環」～「D環」は報告書のとおり用いる。そして、報告書において復元された建物跡に、本稿にて新たに復元をおこなった建物跡を加えた遺構の数は、70基にのぼる。多数の柱穴や柱根から見れば、まだまだその多くを建物跡として復元できていないが、建物跡の類型化を念頭に、柱穴と柱根の配置などから妥当と思われるものを抽出したものである。ただし個々の建物跡の時期については遺構出土遺物が報告書に記載されていないので言及することはできない。調査により出土した遺物を見ると、縄文時代後期後葉から晩期全般にわたるものが大量に出土しており、とりあえず、その期間を時期幅として集落の継続時期と見ておく必要がある。

c 集落跡の形態 次に前項にて指摘した建物跡の分布状況から、チカモリ遺跡の集落跡としての特徴を簡単にまとめておきたい。

集落跡には、A類方形建物跡・B類亀甲形建物跡・C類円形建物跡が弧状に分布する。遺構の分布域は、遺構密度の低い広場状の中央空間と、A類方形建物跡が多く分布する集落内帯、B類亀甲形建物跡とC類円形建物跡が多く分布する集落外帯に区分される。南氏の指摘に始まる集落の「かなめ」の位置には、「A環」～「E環」の建物跡がほぼ同一地点で多数重複しながら構築されている。

これらは後期後葉から晩期までの時間幅を有する集落が、時間的に圧縮された状態で現出したもので、上述した理由により、時間的な細分ができる状況にないことが惜まれる。集落の東半は調査区外であり不明なため、環状を呈するか否かについては不明であるが、長期にわたって集落のデザインが維持されたことは確かであり、本稿では環状集落として取り扱って行きたい。なお、集落の西側には田河川が蛇行しつつ北に流下している。

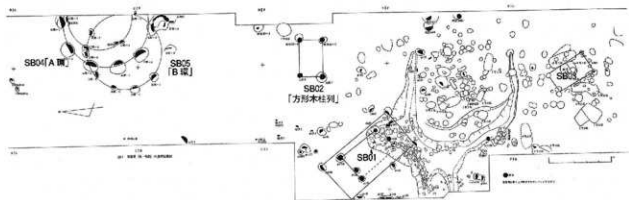
2) 真脇遺跡 (第308図)

a 資料 能都町真脇遺跡は縄文時代前期から晩期までの遺物が連続と出土したことで知られる大規模な遺跡である。縄文晩期層では、チカモリ遺跡に次いで、同様な柱根が円形に配置される「巨大木柱列」が検出されており、北陸において広範囲にその種の遺構が存在することを確認させる事となった。

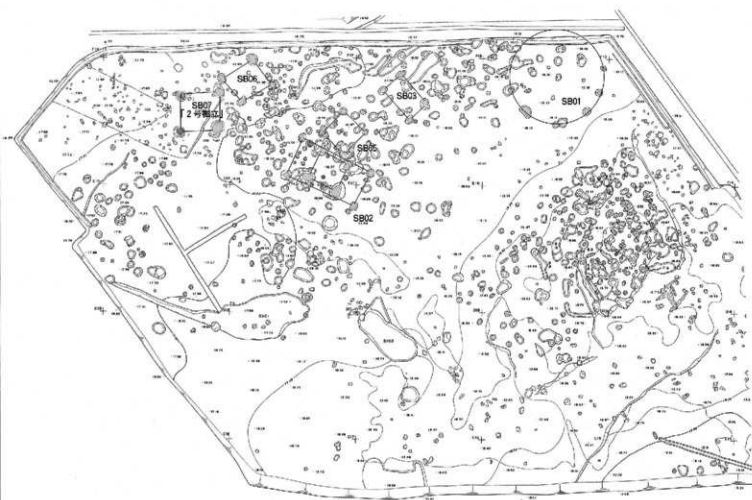
本稿での再検討は1981年から1985年にかけておこなわれた調査の報告書(高橋勝彦ほか1986)を元におこなった。報告書では「晩期の巨大木柱列・柱根」(加藤1986)と「真円配置の巨大木柱列について」(南1986)が掲載されており、「巨大木柱列」がA環・B環・C環の3帯、「方形木柱列」が1帯報告されている。

b 建物跡 今回は、チカモリ遺跡での検討を踏まえ、方形建物跡A1類としてSB02・SB03号建物跡、A3類としてSB01号建物跡、円形建物跡C3類として「A環」「B環」を認識した。「C環」は柱根の配置からC1類になる可能性が高い。SB02建物跡は「方形木柱列」として報告されているものであり、円形建物跡は報告書のものに準じている。

新たに確認したSB01建物跡は入れ子状になる方形建物跡で、①外側に長方形、内側にホームベース状の五角形を呈した柱根の配置が見られること、②外側の柱根は北西部の1箇所が調査区外のため確認できないものの、他の3本は半截材が使用され、弧面を外、平坦面を内側に向けていること、③内部の方形部分には丸柱が用いられ、



第308図 真窟遺跡遺構分布図 (S=1/300) 【能都可教委他1986に加筆】



第309図 大津くろだの森遺跡遺構分布図 (S=1/300) 【久田ほか2002に加筆】

長軸上棟持柱の位置にある一本が円形建物跡の出入口方向で示される集落の中央空間の方向に置かれること、の3点が、チカモリ遺跡で確認されたA3類建物跡と共通する。したがってこれらは同様な設計規格に基づくものとして集落内で構築されたものと理解することが可能となろう。柱穴に加えて柱根も遺存する例はチカモリ遺跡のほかには本例のみであり、内側部分の建物主軸上の柱がチカモリ遺跡例は半截柱であるのに対し本例は丸柱が用いられていることが相違点として挙げられるものの、A1類の建物跡が、部材の加工やその配置方法などにも遺跡間で共通点があることを示した点で貴重な事例となる。

c 集落跡の形態 調査区が部分的なので集落跡の形状は不明な部分が多いが、従来からの指摘どおり、3度の重複がある円形建物跡を「かなめ」に位置する特殊な建物とし、これとよく似た軸方向をとるSB01号・SB03号と共に、南東方向に中央空間のある弧状の集落を構成するようである。

3) 米泉遺跡 (第310図)

a 資料 石川県金沢市米泉町二丁目に所在し、1987年に発掘調査がおこなわれた。縄文時代後期中葉と晩期中葉の集落跡が調査されている。遺構の検討は報告書(西野ほか1989)記載の遺構分布図と実測図でおこなった。後期と晩期の集落跡がほぼ同一面で検出されており、多数検出されているピットから新たに建物跡を推定するのは難しく、ほとんどが報告書記載の建物跡を踏襲することとなった。なお、後期集落と晩期集落の分離は報告書に準じ、竪穴建物跡や石囲炉があるものを後期集落に伴うものとして検討の対象からはずしている。弥生時代以降については河道跡の肩部から土器が数点出土しており周辺での集落跡の存在が指摘されているものの、調査区内では遺構の存在を想定しなくてよいと思われる。

b 建物跡 米泉遺跡では、方形建物跡A1類:SB05号建物跡(「方形プランの柱根址」)、亀甲形建物跡B1類:SB03・SB08号建物跡、円形建物跡C2類:SB01(「環状木柱列」)を、チカモリ遺跡と同様な観点から確認した(第310図)。

報告書では他にも「第20号住居址」「第21号住居址」「第22号住居址」「第23号住居址」「第24号住居址」「第25号住居址」「第26号住居址」「第27号住居址」「第28号住居址」が記載されており、地床炉を伴う住居址として理解されている。今回のチカモリ遺跡の検討では確認できなかった建物跡類型となるが、地床炉があり、柱穴を伴うものであることから居住施設である建物跡であることに異論はなく、ここに新たにD類型を設け、これらも集落を構成する建物跡類型の一つとして理解していくこととした。

D類 特徴は「炉址を中心として径約3.5mの範囲に柱穴が円形に巡るもの」と報告書に端的にまとめられている。加えて、円周上での柱穴の配列が、C類建物跡のようにバランスのよい配置をとらず、不定形な配置であることと、柱穴の径がC類と比較して小さいことをD類建物跡の特徴としておきたい。

なお、米泉遺跡で確認された遺構の時期は、「晩期の包含層を発掘していく過程で」焼上が検出されていることや、地床炉周辺で炉跡と組むと見られる柱穴から晩期の土器片が出土していること、米泉遺跡の晩期の主体的時期が中層式期であることから、晩期中層式期のものであるという報告書での見解を踏襲する。

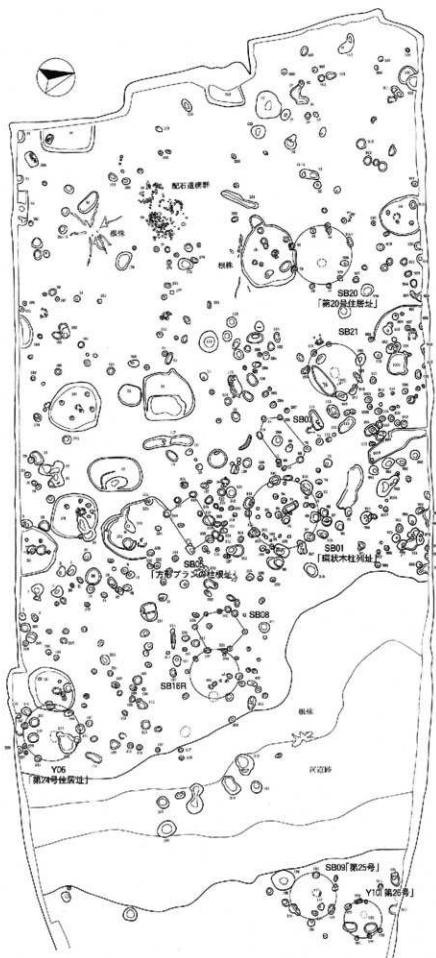
c 集落跡の形態 調査区を横切り北流する旧河川に対して、左右両岸に建物遺構群が展開している。数が多いのは左岸側であり、A類・B類・C類が、軸を河川に向けて分布する。D類は柱穴配置が不定形なので軸を確認しづらいが、開口部を河川に向けると、河川からずらすものがある。右岸にはD類のみが分布する。確認できる限りでは弧状を呈さず、西野氏の言うとおり列状集落跡といえよう。

4) 大津くろだのもり遺跡 (第309図)

a 資料 石川県鹿島郡田鶴浜町大津地内に所在し、1994・1995・1996年の3次にわたって発掘調査がおこなわれた。検討は報告書(久土ほか2002)を用いて行い、後晩期の遺物や遺構がまとまっている地区の遺構図を対象とした。

b 建物跡 確認した遺構は方形建物跡A1類がSB02・SB03・SB04・SB05建物跡の4基、方形建物跡A3類がSB01建物跡の1基、円形建物跡C3類の可能性のあるSB01号建物跡である(第309図)。

報告書では「1号環状柱列」「2号環状柱列」「1号孤立柱建物跡」「2号孤立柱建物跡」が報告されている。



第310図 米泉遺跡遺構分布図 (S=1/300) 【西野1989に加筆】

2基の「環状柱列」については円形建物跡としての検討をしたが、建物主軸に対して柱穴が対称的に配されないことや、「2号」のように円周上から大きく外れるものもあり、今回は認定基準に納まらないものとはせずさせていただいた。「1号掘立柱建物跡」はSB01号建物跡の内側の方形部分、「2号掘立柱建物跡」はSB05号建物跡と同じである。SB01号建物跡は入れ子状になる内側の部分がチカモリ遺跡や真脇遺跡に見られるような五角形になるものと異なり、穴4基からなる方形となっているが、建物中心軸上の1本を除いた状態と類似するためA3類に含めた。

c 集落跡の形態 中央空間に向かって円形建物1基が配され、その円形建物の両側に柱穴群が多数、弧状に展開するようである。そのうち建物跡として復元できたのは、北東側のSB01号～SB05号建物跡であり、SB01号～SB03号は建物中軸線も中央空間の方向を向く。もう一方の南西側では建物跡を復元していないが、多数ある柱穴から建物跡が存在する可能性は高い。

5) 六橋遺跡 (第310図)

a 資料 小松市金平町に所在する。1990年と1991年の2年にわたって調査され、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の遺構と遺物が検出された。継続期間が長い遺跡だが遺構検出面は1面であり、層位的に分離できる状態ではない。後期後葉から晩期の遺構については、主として「4トレンチから7トレンチの間の両側に展開」するものの「当該期の遺構は集中分布があまりにもすさまじい」状況とされ、遺構出土遺物からの時期比定にも困難が伴うと報告されている。ただ、弥生時代以降の遺物は報告されていないので、本稿ではその遺構集中地点について、遺物が出土している縄文時代後期後葉から晩期という時間幅を想定しつつ、報告書の遺構平面図(本田ほか1997)を元に検討することとした。

b 建物跡 六橋遺跡では、方形建物跡A1類としてSB05・SB06・SB08・SB09・SB10(「1号方形柱列90」)・SB13号建物跡、亀甲形建物跡B類としてSB07・SB12号建物跡、円形建物跡C2類としてSB03・SB09・SB11・SB12(「1号円形柱列90」)号建物跡、C3類としてSB01・SB02号建物跡を確認した(第310図)。報告書では「1号円形柱列91」「2・3号円形柱列91」が復元されているが、出入り口付近の柱穴位置がやや建物の内側に入って環状を呈さないことから、いくつかの柱穴の変更を行いSB01・SB02号建物跡とさせていただいた(註8)。

c 集落跡の形態 「4トレンチから7トレンチの間」の周囲に遺構密度がやや薄い地点があるので、ここに中央空間を想定し、その周囲にA類・C類の建物遺構が分布する集落跡として理解したい。B類はやや離れた場所に分布する。

6) 旭遺跡群(一塚地区) (第310図)

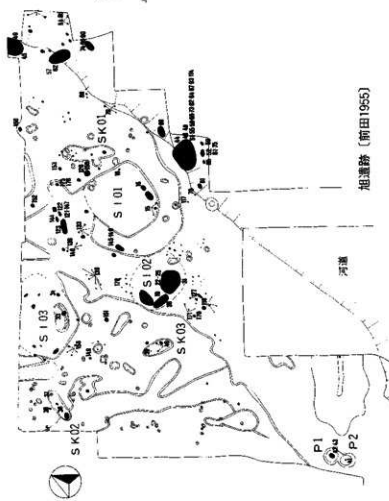
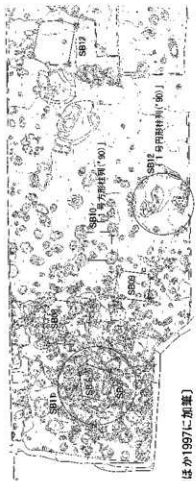
a 資料 松任市一塚町に所在する。旭遺跡群は手取扇状地扇端部から沖積低地に立地し、一塚遺跡・旭小学校遺跡・宮永遺跡の総称とされる。遺跡は1985年に県埋文センターにより一塚イノツカ遺跡として発掘調査が行われた(米澤ほか1990)。その後、1989年に松任市教育委員会によって再び発掘調査が行われ、後期後葉井口式から八日市新保1式期を主体とする竪穴建物跡を伴う集落跡が検出された(前田ほか1995)。弥生時代以降の遺構検出面から50cmほどの間層を挟んで縄文の遺構検出面が確認されており、弥生時代以降の混入は考えなくてよいようである。集落跡は石田炉を伴う建物跡1基と炉跡を伴わない竪穴建物跡2基が検出されていて、集落跡の調査事例が少ない当時期において貴重な資料となっている。

b 建物跡 この松任市教育委員会が調査した地区の事例を見る限り、少なくとも後期後葉の井口式期から八日市新保1式期には、集落を構成する建物跡としては竪穴建物跡が主体的であると理解できるとと思われる。竪穴建物跡は「SI01・SI02・SI03」の3基が確認されており、略隅丸方形を呈し、柱穴は不明瞭で、石田炉を伴うものと伴わないものが存在する。一方チカモリ遺跡で確認できたような、方形・亀甲形・円形を呈する建物跡は確認できない。調査面的には集落の範囲のごく一部にとどまっていると思われるので、存否の積極的な評価は難しいものの、現状では、それらは存在していないと認識しておくべきであろう。

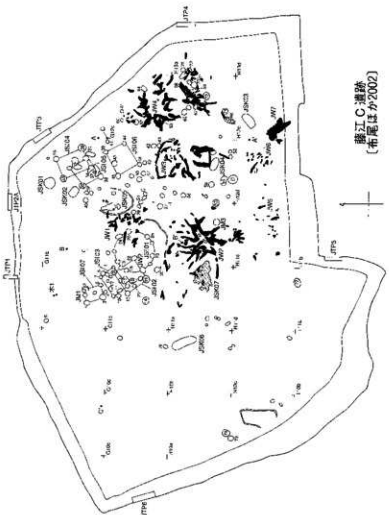
E類 ここでは、本遺跡での竪穴建物跡の存在から、建物遺構の類型の一つとして「E類:竪穴建物跡」を設定したい。またその際、E類には炉跡の確認できるもの、確認できないものを取りあえず含めておき、今後必要があれば細分を行うこととしておきたい。



六橋遺跡(本田ほか1997に加筆)



相違跡(前田1955)



藤江C遺跡
(布尾ほか2002)

第310図 六橋遺跡・相違跡・藤江C遺跡遺構分布図 (S=1/300)

c 集落跡の形態 北流する旧河川の右岸に遺構が展開する。調査区が部分的なので、全体は不明だが、竪穴建物跡は間口の広いほうを河川に向けているもの「SI01・SI03」と横をむくもの「SI02」に分かれる。

7) 藤江C遺跡 (第310図)

a 資料 金沢市藤江北に所在し、1997年に発掘調査された。金沢平野の沖積低地に立地する。弥生時代の遺構確認面から約1.4m下に縄文時代後期中葉から晩期中葉の遺物包含層と遺構確認面が存在し、調査の結果、後期末から晩期初頭の竪穴建物跡1基、掘立柱建物跡6基が検出されている(布尾ほか2002)。出土土器の主体が八日市新保式後半期のものであり、わずかに見られる遺構出土土器も八日市新保式から御経塚式の初め頃のものに比定されるので、藤江C遺跡の状況が当地域での縄文時代後期末から晩期初頭の集落の状況の一端を示しているものと理解することができる。

b 建物跡 竪穴建物跡は円形に柱穴が配され、円形建物跡C類に類縁性が指摘できるが、竪穴を伴うのでE類とする。掘立柱建物跡は全て4本柱穴であり、方形建物跡A1類に分類される(第310図)。

c 集落跡の形態 調査区の西半と北側に空閑地が存在する。西半は遺物の出土量自体が少なく、一方北側の空閑地には、大量の遺物出土が認められた。これとA類建物跡の軸が概ね北北西を向くことから、集落としての意識は北側の空閑地を指向していたと見ることができる。また、建物遺構群の南側には自然木の根株が数ヶ所確認されており、空閑地・建物遺構群・林地帯の3帯に区分できる。

8) 北野遺跡

a 資料 富山県小浜町北野地内に所在し、1986年に発掘調査された。遺跡は鍛冶川左岸に面する台地上に立地する。晩期の遺構と遺物はB地区で確認され、少量の上器片と、「第1号柱列」「第2号柱列」と呼ばれる遺構が検出されている。報告書は1987年に刊行されており、建物跡に関する酒井重洋氏の論考がある(酒井1987)。

b 建物跡 北野遺跡では、方形建物跡A1類となるのが「第1号柱列」、円形建物跡C2類となるのが「第2号柱列」である。他に「穴24～26」周辺の穴群がまとまっており、建物跡が存在する可能性がある。

c 集落跡の形態 遺構が少なく、確認できる限り最もシンプルな集落となる。「第2号柱列」建物跡の出入り口方向を鑑みれば、約15mの空間を挟んで穴群、約25mの空間を挟んで「第1号柱列」建物跡が対峙しており、中央空間を挟んで、東西両側に建物跡が分布しているものと理解できる。

9) 小結 建物跡類型の提示

以上、チカモリ遺跡での建物跡の基礎的な検討を元に、近年までに調査された北陸の縄文時代後・晩期集落から主要なものを取り上げて、同様な視点から建物跡の検討を行った。チカモリ遺跡では、これまでに(南1983)によって確認されていた「丸柱正方形プラン家屋址」と「丸柱長方形プラン家屋址」を鑑みつつ、「柱穴(柱眼)が方形に配列されるもの」とすることで、方形建物跡A1類、A2類を設定した。また、「半載材正円形プラン家屋址」や「一般家屋址」とされていた、主柱(穴)を円形にバランスよく配列する建物跡をまとめて、円形建物跡C類とした。そして今回方形の柱列が重複し入れ子状に配列される方形建物跡A3類と亀甲形に配される亀甲形建物跡B類を新たに確認している。

類型ごとの分布状況を確認すると、A1類については、チカモリ遺跡をはじめとして6遺跡、遺跡A2類はチカモリ遺跡のみ、A3類はチカモリ・真脇・大津くろだの森遺跡、B1類はチカモリ・米泉・六橋遺跡、B2類はチカモリ遺跡のみ、C1類はチカモリ・真脇・六橋遺跡、C2類はチカモリ・米泉・六橋・北野遺跡、C3類はチカモリ・真脇・大津くろだの森・六橋・井口遺跡、D類が米泉遺跡のみ、E類が旭遺跡群と藤江C・中屋サワ・近岡遺跡となる。

これにより、チカモリ遺跡で設定した建物跡類型については、A2類とB2類を除いてはチカモリ遺跡だけでなく複数の遺跡で存在しており、少なくとも、石川県・富山県域における北陸地方の縄文後期末から晩期の集落跡における建物跡の類型として提示することが可能になるとと思われる。残されるA2類についても、これは1間×2間の明確な建物跡であり、またB2類は新潟県域での確認例が増えているもので、北陸での類例は少ないとはいえ建物跡の類型として認識しておくことは必要であろう。

チカモリ遺跡では確認できなかった建物跡類型としては、米泉遺跡で地床下の付属する簡易な円形建物跡D

類、旭遺跡群や藤江C遺跡で竪穴建物跡E類を設定した。これは、従来から竪穴建物跡として理解されていたものであり、何らかの理由によりチカモリ遺跡では検出できなかったと思われるものである。これらについても、建物の遺構であることは調査状況から明らかであると思われることから、建物跡類型として加えておく。よって以上を、チカモリ遺跡をはじめとする遺跡の事例検討によって導かれた、北陸地方の縄文時代後期末から晩期集落跡における建物跡類型として理解していくこととしたい。

他にも金沢市近郊遺跡の「竪穴状遺構」（楠本1998）や中屋サワ遺跡の円形建物と「竪穴状遺構」（南ほか1992）、鶴来町白山遺跡の円形建物（西野1985）、富山県井口遺跡の円形建物（酒井ほか1980）など検討に加えるべき遺跡・遺構が存在するが、調査面積が少ないことや、概要報告のみであることなどの理由で今回は果たせなかった。これらについては個別の遺構で分類できるものを適宜検討することとし、遺跡全体の検討は今後機会を見て行っていきたい。

4 御経塚遺跡の検討

1) 資料

研究史の項でも触れたように、御経塚遺跡は1956年の第1次調査をはじめとして、現在までに第28次、計21,600㎡の発掘調査が行われている。本書は、その中でも特に遺構が密集している遺跡北西部分に当たるブナシ地区南半についての報告書であり、ブナシ地区北半を主とした既報告分（高塚ほか1983、以下では「御経塚Ⅰ」と記載）と併せてブナシ地区全体の検討を可能とするものである。遺跡北東部分はツカダ地区（吉田1989、以下では「御経塚Ⅱ」と記載）、遺跡南半部はデト地区（木書）となっており、それらを合わせて考えることで集落跡の全体像も資料に基づいた形で検討をすることが可能となりつつある。以下では、既報告分と今回報告分について、前章までの検討に基づいて建物跡の分類と集落内での配置状況を検討することとしたい。

2) 建物跡（第311～313図）

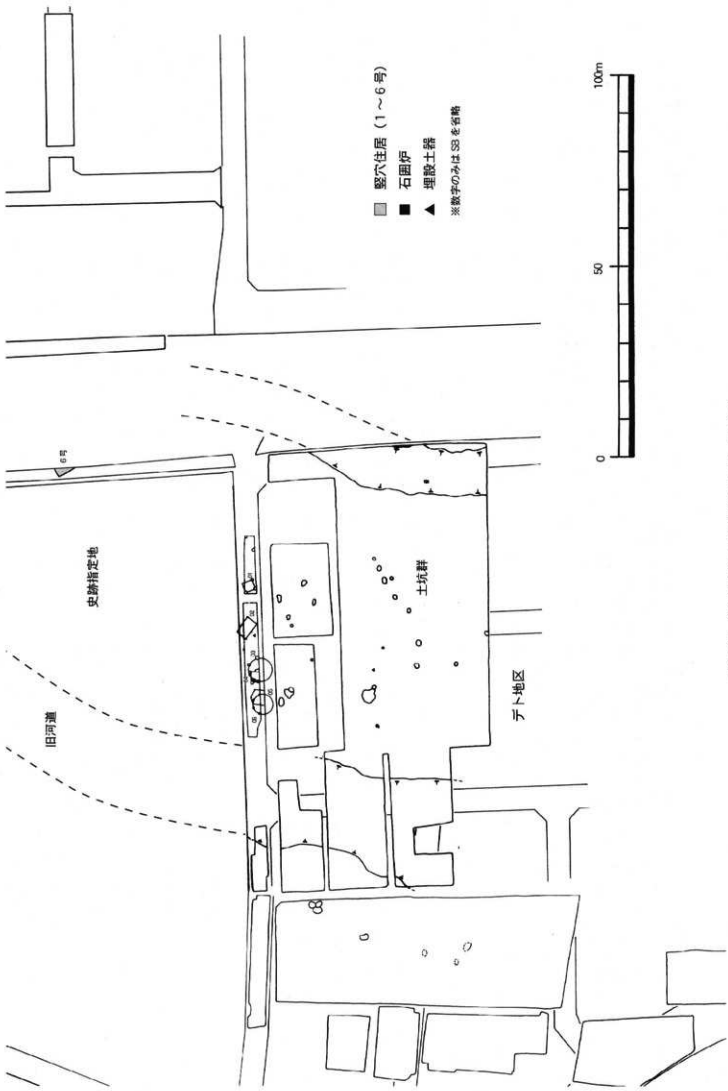
「御経塚Ⅰ」報告分では、ブナシ地区北半に当たるⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区から竪穴建物跡5基、石厩22基、土坑、配石遺構などが報告されている。竪穴建物跡については報告では後期後葉から後期末に位置づけられる「第1号住居址」以外は後期井口式期に位置づけられている（高塚1981）。後の検討では後期後葉井口式期に「3号住居址」「4号住居址」「5号住居址」、晩期前葉に「1号・2号・6号住居址」が位置づけられることとなった（吉田2003）。これらはE類建物跡に含まれる。

石厩についてはその多くが作出土器から後期後葉井口式期を主体として八日市新保式期頃までのものとされ、晩期になるものはないようである。これらは米原遺跡で見られたD類建物跡や竪穴を作るE類になる可能性が考えられるが、柱穴を伴う簡易な円形建物跡となるD類としての検討を行うと周辺のピットと組み合わせると建物跡として理解できるのは「7号厩」「8号厩」である。ただし、これらの作出土器については、井口式に伴う粗製土器という評価が報告書においてされており、今回の検討対象からは外れることとなる。なおその他の厩跡についても井口式期に位置づけものがほとんどであり今回は検討から除外した。

新たに確認したものとしては、方形建物跡A1類としてSB51号建物跡、A2類としてSB54号建物跡、A3類としてSB53号建物跡、亀甲形建物跡B1類としてSB52・SB55号建物跡の5基が挙げられる。

「御経塚Ⅱ」ではツカダ地区の遺構と遺物が報告されている。ツカダ地区ではA2類に「17号住居」、C類に「19号住居」「20号住居」が該当する。新たにB3類「21号住居」の1基を確認した（「住居」の名称は準拠）。

本報告書掲載の建物跡については、遺構の重複が著しい中から、チカモリ遺跡で抽出された遺構類型毎の柱穴配置の特徴や、柱穴の深さ・大きさなどを加味して建物跡を復元したものである。地区ごとと分類ごとに見ていくと、ブナシ地区では方形建物跡A1類はSB29建物跡、A2類がSB15・SB23・SB24・SB35建物跡、A3類がSB05・SB16建物跡、亀甲形建物跡B1類がSB06・SB07・SB08・SB09・SB10・SB11・SB12・SB13・SB14・SB19・SB20・SB21・SB22・SB25・SB26・SB27・SB28・SB32・SB36・SB38・SB41・SB43・SB45・SB46・SB50建物跡、亀甲形建物跡B3類がSB42・SB48、円形建物跡C2類がSB01・SB17・SB30・SB31・SB34建物跡、C3類がSB02・SB03・SB04・SB18・SB33・SB37・SB39・SB40・SB44建物跡、C類不明がSB47・SB49建物跡と



第311図 御経塚遺跡主要遺構分布図 (S=1/1000)

なっている。他の遺跡と比較してA1類建物跡が極端に少なくなっているが、これはA1類建物跡が1基の柱穴からなる最も単純な形態を示すことから、御経塚遺跡の柱穴の重複が著しい場所では、後通りが復元できてしまうことになるため復元を控えたことによる。

デト地区では方形建物跡A1類がSB01、A2類がSB02、A類不明がSB04、亀甲形建物跡B類がSB05、円形建物跡C類がSB03・SB06である。デト地区は調査区が細長く限定された区域であることから細別類型では不明なものが多い。また、ブナラシ地区の建物番号との区別を明瞭にするため、以下では、ブナラシ地区のものをブナSB01、ブナSB02、デト地区のものをデトSB01、デトSB02、ツカダ地区のものをツカダ20号住などと地区名の略称をつけ、区別を明瞭にすることとした。

なお御経塚遺跡全体で現時点で確認できた建物跡などの数は、後期井口式期のものも含め、竪穴建物跡6基、方形建物跡14基、亀甲形建物跡31基、円形建物跡20基、石垣炉24基(ブナラシ地区23基・ツカダ地区1基)である。

3) 建物跡の時期

建物跡の時期は出土した遺物から考えることとなるが、炉跡に土器を伴うD類や、遺構覆土から土器の出土するE類の竪穴建物跡はともかくとして、A類からC類までの建物跡は柱穴から出土した遺物がごくわずかにあるにすぎず、時期の判断ができるもの自体がすくない。また、遺構の重複も著しいこともあり、出土した遺物が、そのままその遺構の時期を示すと判断することも難しい。このような状況で敢えて遺構の時期比定をするのは無理を重ねることとなるが、現時点では他の遺跡も、当該時期の遺構出土土器の提示は数が多くない状況を鑑みれば、御経塚遺跡において大まかにでも遺構の時期を示すことは意味あることと思われるので、ここで出土遺物を確認しつつ遺構の時期を考えていきたい。

本書で示す時期は当地での土器型式編年の成果により、後期末に八日市新保式、晩期は御経塚式・中屋式・下野式・長竹式とした。遺構密度が高く、遺構の重複による遺構構築前の遺物の混入が多く存在すると思われるので、遺構の時期はとりあえず出土した土器片の示す時期のうち最も新しいものがその遺構の時期を示すものとして取り扱うこととする。

八日市新保式期から御経塚式期の遺構としては、E類「1号・2号・6号住両址」が該当する。いずれも伴出土器から判断したが、竪穴建物跡である「住両址」は遺物の出土状況が不明であり明確さに欠ける。他に検討によっては石垣炉のいくつかが当期に位置づけられる可能性があらう。

中屋式期はA1類：ブナSB29、A2類：ブナSB24・ブナSB35、B1類：ブナSB08・ブナSB12・ブナSB13・ブナSB19・ブナSB22・ブナSB26・ブナSB27・ブナSB32・ブナSB38・ブナSB46、B3類：ツカダ21号住、C2類：ブナSB17・ブナSB31・ブナSB33・ブナSB40・デトSB06・ツカダ19号住、C3類：ブナSB18、C類不明：ブナSB49・ツカダ20号住を出土土器から当期に該当するものとした。

下野式期はA2類：ブナSB54・デトSB02、A3類：ブナSB05・ブナSB15・ブナSB53、B1類：ブナSB06・ブナSB09・ブナSB11・ブナSB14・ブナSB20・ブナSB21・ブナSB25・ブナSB28・ブナSB36・ブナSB43・ブナSB45・ブナSB50・ブナSB52・ブナSB55、B3類：ブナSB42・ブナSB48、B類不明：デトSB05、C2類：ブナSB01・ブナSB30・ブナSB34、C3類：ブナSB37・ブナSB39、C類不明：ブナSB47である。

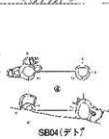
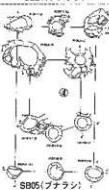
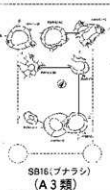
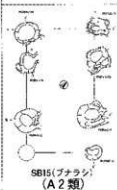
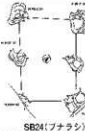
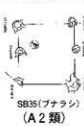
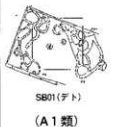
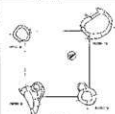
長竹式期の遺構はA1類：ブナSB51・デトSB01、A2類：ブナSB23、A類不明：デトSB04、A3類：ブナSB16、B1類：ブナSB10・ブナSB41、C2類：デトSB03、C3類：ブナSB02・ブナSB03・ブナSB04・ブナSB44が該当する。なお、ブナSB07・ツカダ17号住の時期は不明である。

円形建物跡については、従来真臨遺跡や米沢遺跡の例により中屋式期に位置づけられる事例が知られており、「後期後葉ごろから次第に巨大化が進み、最大規模まで達した時期が中屋式期だったと考えられる」(橋本1994)という評価がされていた。御経塚遺跡の検討からは、晩期初葉御経塚式期の動向は判然としなものの、中屋式期には円形建物跡C2・C3類と共にA1・A2類やB1類も確認でき、その後、下野式期にA3類が加わって長竹式期まで、円形・亀甲形・方形の各建物跡が組成されていた状況を確認できる。

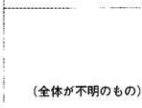
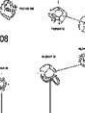
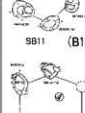
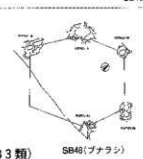
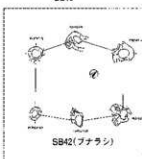
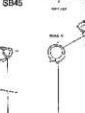
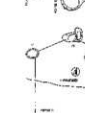
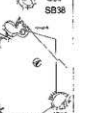
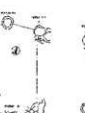
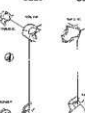
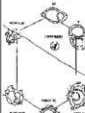
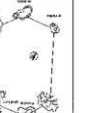
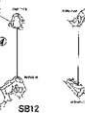
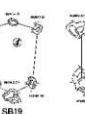
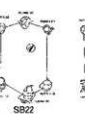
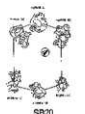
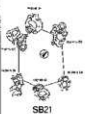
4) 建物跡の分布状況・集落跡の形態

今回確認した建物跡の分布の状況を見てみると、ブナラシ地区で顕著なように、遺構の検出されていない空間

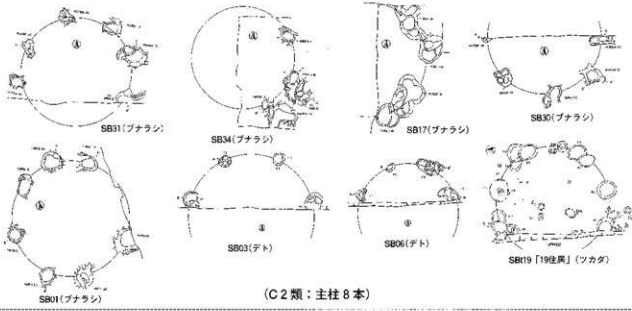
方形建物跡 (A類)



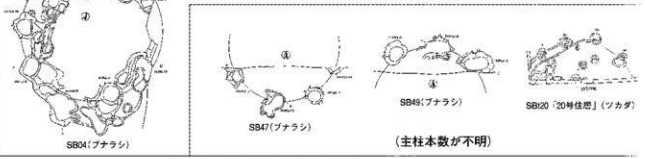
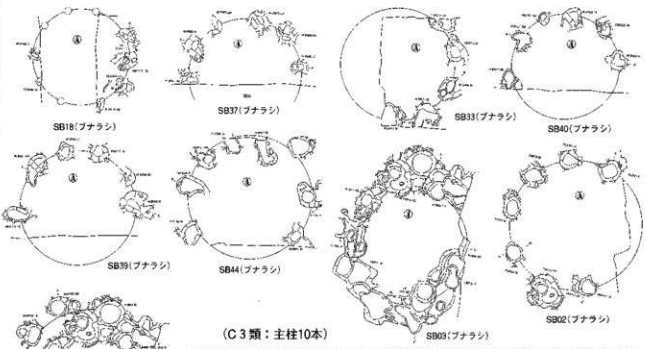
亀甲形建物跡 (B類)



第312図 御経塚遺跡の建物跡 (1) (S=1/200)



円形建物跡 (C類)



第313図 御経塚遺跡の建物跡(2) (S=1/200)

を中心に、弧状を呈して建物跡が配されている状況が確認できる。長方形や亀甲形を呈する建物跡では長軸方向をその中央空間に向けるものがほとんどであることも特徴的であり、チカモリ遺跡などとの類似性が指摘できる。遺跡全体を見渡すと、縄文時代までさかのぼると見られる自然河川跡が遺跡のほぼ中央を北東方向に流れており、ブナシ地区の中央空間はその河川跡に接するような位置関係にある。したがって建物跡群は河川左岸において河辺を取り囲むように弧状に広がっている状況といえる。

一方河川右岸はそれほど多くの発掘調査が行われておらず、不明点が多い。北側のツカダ地区、南側のデト地区など、調査が行われている部分を見てみると、集落の中央空間などはよくわからないものの、ほぼ河川に平行するようにして遺構群が認められるので、こちら側にも多数の建物群が展開する可能性は高い。高尾勝喜氏が指摘していたように河川を挟んでの環状集落（高尾1983等）となるものと思われる。

時期別の動向を確認すると、土器型式毎の分布状況は、建物跡の復元数が少ないことと重複が著しいことにより、集落の状況を示すものから多少遠ざかっていると判断せざるを得ないものの、集落形態の変化についてはある程度の推察が許される。それは竪穴建物跡から掘立柱建物跡の変化と連動しているようで、後期後葉から晩期前葉にかけてのものが多い竪穴建物跡と対峙し、今回確認した建物跡群の外縁部に展開し、後の中屋式期以降にはその内側で弧状分布を呈している。ブナシ地区南岸での著しい遺構重複の結果、それ以前の遺構が損壊を受けている可能性や、逆に、ブナシ地区北半まで晩期中ごろ以降の遺構が分布していた可能性があるものの（註9）、今のところは、晩期前葉頃を境に、建物の主要な形態とともに、集落内での配置意識も変化したものと理解しておきたい。

5 結語 北陸縄文晩期集落の特徴

1) 建物跡類型 (第314・315頁)

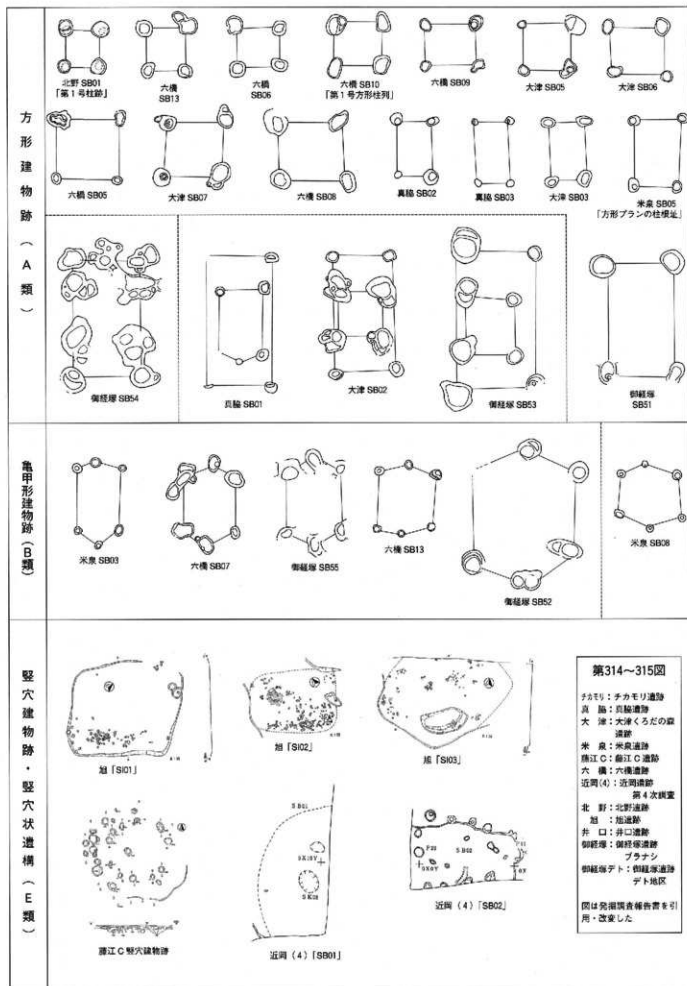
前項までに、石川・富山県域における縄文時代晩期集落を事例に建物跡に関する再検討をおこない、当期の建物跡類型として、A類：方形建物跡、B類：亀甲形建物跡、C類：円形建物跡、D類：簡易な円形建物跡、E類：竪穴建物跡を提示した。これらは、縄文時代後期末から晩明にかけて、複数の遺跡とその存在が確認されたことにより成立すると判断したものである。その詳細は前述したとおりであるが、研究史上最も議論の自覚したいいわゆる「半蔵材止円形プラン家屋址」「巨大木柱列」と呼ばれる遺構については、今回、C類：円形建物跡の中にも、格別に類型化を行っていない。その点については、これも研究史で言及があるように、使用する材材が大形化している事例が確認できるものの基本的な設計規格としては他の円形建物跡との明確な区分点は存在しないことがあげられる。この種の遺構については他と比較して大形である点と共に、むしろ集落中での重複占地が問題なのであり、その意味で他と区別する名称を行うべきであろう。これについては、石井寛氏の「核家塚」という集落跡を検討するうえでより適した概念・用語が提示されているので、今後の検討では「核家塚」という用語を用いることとしたい。

2) 北陸の縄文晩期集落跡

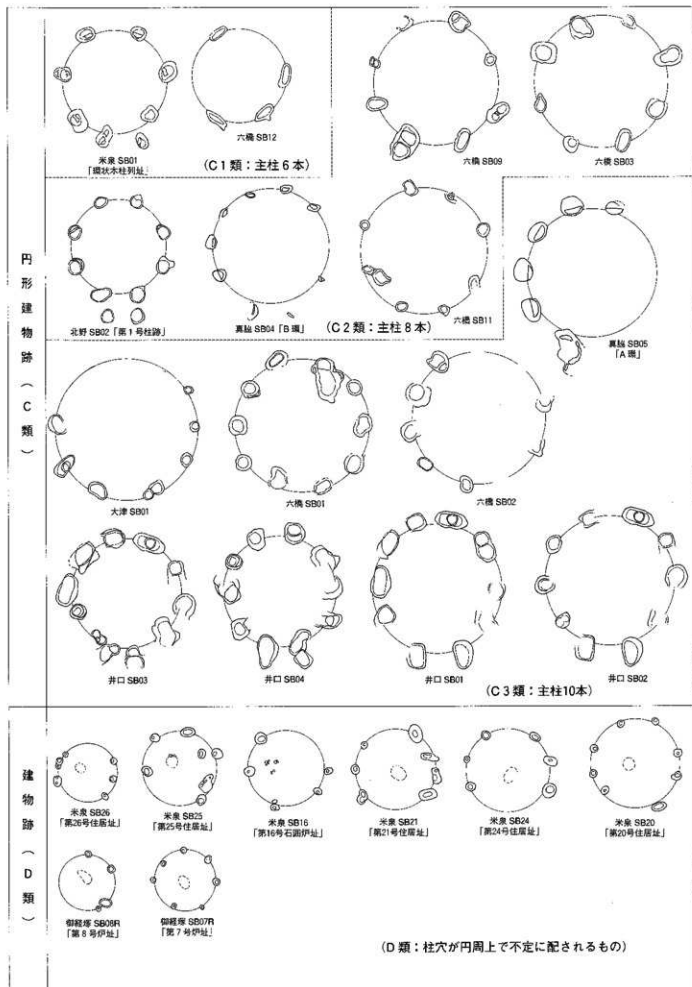
a 集落跡と建物の様相 集落跡が、前記とおり類型化される建物跡からなると理解することで、その分布状況や建物類型の組成、核家塚の有無などを検討することが可能となる。

遺跡としてのあり方から大まかに分けるならば、遺跡の継続時期が長い・建物跡類型が多様・建物数が多い・遺構の分布範囲が広い・集落跡の規模が大きかったといった特徴を示す大規模な集落遺跡（御経塚遺跡・チカモリ遺跡・真船遺跡・六橋遺跡・井門遺跡）と、継続時期が短い・建物類型が少ない・建物数が少ない・集落跡の規模が少ないという特徴を有する小規模な遺跡に分けることが可能である。

建物跡は掘立柱建物跡が多く、その時間的な位置づけは既述したように困難なものが多いが、遺跡単位で確認する限りでは、後期後葉前半が主体となる旭遺跡群や後期末から晩期初頭が主体となる藤江C遺跡ではE類：竪穴建物跡が確認され、晩期の北野遺跡、米泉遺跡ではE類はなく、A1類とC2類建物跡が組成されるように、後期段階の竪穴建物跡優勢の状況から晩期中葉以降の掘立柱建物跡優勢に変化している状況が指摘できる。これは、米泉遺跡の後期中葉集落跡において竪穴建物跡が多数検出されていることや、御経塚遺跡の検討でも示した



第314図 後・晩期の建物跡 (1) (S=1/200)



第315図 後・晩期の建物跡 (2) (S=1/200)

ように、晩期前葉までは整った建物跡が確認できるもののその後は孤立柱建物跡系のA・B・C類主体となるという動きにも重なることと見られ、現時点での石川・富山県域における集落とその構成遺構の変遷として理解される。

建物跡類型については、時期ごとに確認したものを第316図に示した。調査された遺跡の少ない晩期前葉御経塚式期が不明なものの、A1類はF類と共に後期末に確認できる。晩期集落を構成する建物類型はA1・A2・A3・B1・C1・C2・C3類であり、中層式・下野式で安定して確認される。他には米泉遺跡のD類や、近岡遺跡のD類などが散見されるが、各集落で普遍的に確認されているものではない。下野式以降は御経塚遺跡で時期が確認できる遺構があるのみで、周辺の状況は不明な点が多い。確認できるところでは、下野式期からはC1類が見られなくなっている。

小規模な集落跡のなかでもっともシンプルな構成を示すのは北野遺跡であり、A1類：方形建物跡とC2類：円形建物跡から構成されている。類似した状況を示すのは米泉遺跡と天津くろだの森遺跡で、米泉遺跡ではこれにB1類・D類が加わり、天津くろだの森遺跡では、二重の方形建物跡であるA3類が加わる。それぞれに存続時期の幅が異なるため一概には言えないが、北陸晩期の集落跡に関しては、その構成上、少なくともA1類建物跡とC類建物跡の2種が伴う事実が指摘できる。換言すれば、集落には柱を方形に配列した建物と、円形に配列した建物が、最低1棟ずつ存在していた可能性が高いということである。将来的に時期を細かく区分していくことで、円形建物跡のみの時期や、方形建物跡のみの時期が確認される可能性が残るものの、円形建物跡のみ、あるいは方形建物跡のみといった集落遺跡が検出されていない現状からは、2種類で組であったと考えたほうが蓋然性は高い。

また、米泉遺跡や天津くろだの森遺跡の事例からは、円形建物跡1基に対して、方形建物跡が数基、それも重複して複数時期にわたっている。建物跡の類型により、建替えの頻度が異なることを示している可能性がある。

大規模な集落遺跡が、ただ単に小規模な集落遺跡が時間的に累積して、見かけ上大規模化しているのではないことは、チカモリ遺跡・真脇遺跡のように「かなめとなる家屋（核家屋）」が存在する例があることで理解できよう。核家屋は円形建物跡という点では、他の建物跡に類似するが、他と比較して大形の材を使用して構築されることや、集落内で特定の場所で継続して建替えられることにより、集落内において特殊、特別な建物であったことが理解できる。チカモリ遺跡や真脇遺跡のような集落跡はこの核家屋をまさに「集落の要」の場所に配置し、その両翼に様々な形態の建物跡が配されることで成立していると思われる。

b 核家屋の性格 小規模な集落においては、方形建物と円形建物がセットで存在していることは前述した。これは、建物の性格を考える上でも、重要な点である。これまでの検討により、円形建物は円形であるがゆえに特殊なわけではなく、集落において要となる位置に存在する建物が特別な意味を持つものであることを確認した。したがって、巨大な柱を使うなど、特殊であるが故に付帯させる強い祭祀性や、そこから歩進んで理解される祭祀所としての理解は、大規模な集落の核家屋については検討の余地を残すものの、小規模な集落の円形建物について同様な理解をする場合には、その前提として、他に人々が居住する施設を明示する必要性を生じさせる。この要件を満たすのは簡易な円形建物跡D類の検出された米泉遺跡のみであり、C類を祭祀所、A1類を倉庫、D類を一般家屋と理解することで、集落跡を構成する建物遺構の類型と性格を整理できるようにも見える。

ただ、この理解を他へ当てはめていった場合には不都合が生じることも確かである。1つは他の集落遺跡においてD類建物跡が確認されていない点にある。仮にこれをD類の遺構が簡易であることや遺構確認面の問題として、実際には存在していたと仮定した場合は、小規模な集落跡に関しては米泉遺跡と同様な理解を敷衍することが可能だが、大規模な遺跡においては、円形建物は同一時期に複数存在しており、その理解には無理が生じてこよう。例えばこの複数存在する円形建物に対していずれも特別な祭祀性の強い施設（祭祀所）として理解することは、同一時期の集落において、複数の祭祀所が、おそらくは居住施設である他の建物とともに環状・弧状に展開していた景観を想定しなければならなくなる。これでは、他時期・他地域の縄文時代集落跡との比較を行った場合、その異質性が際立つのみであろう。

もしくは、核家屋とした施設を祭祀所とし、他の円形建物を居住施設として理解する場合でも、同一の構造を有する円形建物のうち、一方を屋根無の施設で他方を屋根有の家屋と認識したり、もしくは一方を祭祀所、他方

	A1類	A2類	A3類	B類	C2類	C3類	D類	E類
後期	八日市新塚式期 [新塚式期等] 東江C(SB03) 東江C(SB02)							
晩期	中屋式期 [北野 1号位跡] 御陵番 SB29 御陵番 SB35 御陵番 SB24	御陵番 SB35 御陵番 SB24	御陵番 SB12 御陵番 SB22 御陵番 SB20 御陵番 SB00 御陵番 SB05	御陵番 SB12 御陵番 SB22 御陵番 SB00 御陵番 SB05	御陵番 SB03 北野[第2号位跡]	御陵番 SB37	御陵番 木製[9位] 木製 [26位]	東江C(SB04) 近頃1号(SB01)
	下野式期	御陵番 SB02 子ノ地区 SB02 御陵番 SB15	御陵番 SB11 御陵番 SB00 御陵番 SB05	御陵番 SB02 御陵番 SB04 御陵番 SB11 御陵番 SB00 御陵番 SB05	御陵番 SB01	御陵番 SB37		
	長竹式期	御陵番 SB03 御陵番 SB16	御陵番 SB10	御陵番 SB10	御陵番子ノ地区 SB03	御陵番 SB02		

第316図 後期後葉から晩期の建物跡類型と変遷案 (S=1/300)

を住居とその性格を推定する際の前提となる根拠については、明かできるものは一つもないのではなからうか。

北陸の「核家屋」は、遺構の特殊性から「祭祀性の強い遺構」との理解がなされることが多いが、遺構内からまとまって呪具が出土する事例は今日まで知られておらず、出土遺物から祭祀性の強さや、どの様な儀礼が行われていたかを答えられる状況にはない。したがって、ここで一旦、核家屋や類似の建物を、直接的に祭祀と結びつける考え方は朝上上げし、別の方向から改めてその性格論議に対する解釈を行う必要があるのではないだろうか。

冷静に遺構の状況を確認するならば、繰り返し述べるとおり、核家屋は、「継続する集落の中で特定の場所が準備され、他の円形建物と比較して大形である」点で特別なものである。また、その構築や維持にかかる労働力が破格と見られることから、集落や集落間における世帯同士の共同作業を暗示すると共に、社会の中で特別とみなされる優位性・象徴性を現象化させた存在と理解できよう。そして、その共同作業自体も集落社会を成立させる上で重要な意味を持つ行為であったことが想像される。更に進めれば、そうした北陸の核家屋の存在は、継続していく集落社会において、継続的に共同作業を導く役割を果たす指導者の存在を示すことになるのではないだろうか。

豊富な出土遺物から、北陸晩期の縄文社会が、土偶や呪具を多用する、儀礼を重視する社会であったことを前提にするならば、そうした核家屋に居住する指導者が、集落における司祭者・祭祀長であることも考えられ、その意味では集落の祭祀を象徴する場であった可能性はある。ただし、直接的な祭祀所という理解には至らない点をここで確認しておきたい。現時点では、核家屋は、単一の集落、あるいは集落間社会を維持する上で指導者層が居住する建物と理解したい。

c 居住形態 核家屋が居住施設であると理解する立場からは、同様な形態を示すC類：円形建物跡は、集落の成員が居住する建物であると理解するのが自然であろう。これは円形建物跡がいずれの集落遺跡でも確認されることによっても支持されると思われる。

方形建物A類については、学史的にその形態的特長から高床式の倉庫であろうとの指摘がたびたび行われてきた。筆者らの分類ではA類をA1・A2・A3類の三細別しているが、倉庫と指摘されているのは、A1類とした、米家遺跡のSB05（「方形プランの柱根址」）と、チカモリ遺跡のA2類SB02号建物跡、A3類のSB01号建物跡など、太めの丸柱を用いた建物である。注意したいのはチカモリ遺跡の再検討により、A1類に丸柱だけでなく半截・多截柱を使用した事例が確認されたことである。これにより、A類建物跡全てについて倉庫としての重量を支えるために丸材を使用しているとの形態的特長からの言及が困難になった。

今回の整理からは、A類建物跡については、A3類とした内側に太い丸材・外側に半截材を使用する規格性の強い建物は別として、A1・A2類については、太目の丸材を使用したものと、細めの半截材・多截材を用いたものが共に存在していると見ることができる。遺構をみれば、柱根が残存しておらず、柱穴のみしか残らない例が多いことから、両者を明確に分けて類型化することは困難であろう。したがって、柱根や柱根痕跡から太目の丸材の使用が認められるものについては、倉庫としての指摘が生きるが、その他については不明とせざるをえない。

集落でのあり方から考えれば、方形建物跡A1類は集落構成要素の基本であり、小規模な集落跡の状況からは、円形建物跡よりもその数が多く、遺構の重複が目立つ点に特徴があった。また、チカモリ遺跡では、集落内帯・外帯と区分されるうちの内帯に多数の方形建物跡が分布している状況にある。それらを踏まえつつ縄文時代の集落研究を振り返れば、倉庫説・住み分け説・季節的な分散居住施設説（夏の家・冬の家）などいくつかの説が理解を進める上で適用可能になってくるかもしれない。いずれにしても現状では遺構の状況に基づいて明確な意見を示す状態がなく、今後、更に検討を進めていく中で、方向性を求めていく必要がある。

B類：亀甲形建物跡は、石川県域での縄文晩期集落では本稿で初めて明確になった。富山県域では確認されていないが、現在のところ検討できる遺跡が少ないことや、隣接する新潟県では籠峰遺跡や青田遺跡などで後晩期集落の主要な建物形態と認識されており、今後確認できる可能性は高いと思われる。チカモリ遺跡の検討では、B1類建物は半截・多截材を使用しており、C類建物と異なって、柱の弧面を外側に向ける点が特徴的である。集落における分布状況は小規模な集落での確認例が少ないこともあり他類型との比較が難しいが、唯一特徴的な

のはチカモリ遺跡での分布状況であり、弧状を呈する集落内帯には方形建物が多く、集落外帯には円形建物と亀甲形建物が主体的に分布している。他の集落では確認できない分布状況なので、チカモリ遺跡の特殊性なのかもしれないが、その配置からは、円形建物と同様な性格を読み取ることができよう。前記した新潟県での状況を鑑みれば、B類もC類と共に住居として集落内に存在していたものと思われる。

おわりに

C類：円形建物跡は、チカモリ遺跡での柱根の発見により大きな話題を呼び、北陸の縄文時代晩期集落における特徴的な遺構として認識されてきた。その後「環状木柱列」論の展開とともにその認識については多様な議論が起り、理解が深められている。ただ、その中で、「環状木柱列」に偏り気味の遺跡理解が行われてきたのも事実であり、御経塚遺跡やチカモリ遺跡で、あれだけの多様・多様・大量な遺物を残した人々はどこに、どのように暮らしていたのか、集落の景観はどのようなものであったのかという素朴な問いが忘れられがちであったようにも思う。

今回、北陸の縄文時代晩期集落の資料に対しては、集落の復元という目的のもとで、遺構の類型化作業と、各遺跡での分布状況等の検討を行った。その中で、「祭祀・特殊」という見方が行われてきた「環状木柱列」に関しては、亀甲形建物跡など集落内帯で他にも異なる建物跡類型が存在していることが判明したことにより、集落を構成する建物の一形態であるとの認識から相対化を図るべきとの思案にいたったため、本稿にて円形建物跡として改称させていただいた。また、チカモリ遺跡「A環」や真脇遺跡「A環」に代表される、大形で、集落の「かなめ」の場所に重複して構築される特別な建物に関しては、南久和氏と石井寛氏の所論に導かれ、集落における「核家屋」との見解に同意を得るにいたり、北陸晩期集落理解のまさに「かなめ」であることが理解できた。

B類：亀甲形建物跡やA類：方形建物跡についても、遺構の整理と集落内での位置づけ等に関する指摘をいくつか行ったが、いずれにしても表題の通り「基礎作業」の域を出るものではなく、むしろ不足部分が多々あるものと思う。

再検討に当たっては、報告書のデータを使用しつつも、今回筆者らの意向で報告書とは異なる見解になったものもある。報告者の方々にはその非礼をお詫びしつつ、今日的な集落研究を踏まえてのローデータからの検討を意図したものとご寛恕を願うばかりである。本稿で行った北陸の晩期集落に関する個々の指摘については、調査例が少ない中でなしたものもあり、今後調査される資料とともに再吟味・再検討を行っていく必要がある。あくまでも現時点における、諸データのまとめであり、その解釈である。不明な点があればご教示をいただき、今後に生かしていきたい。

本稿は、本書執筆のために占田淳が行ったチカモリ遺跡と御経塚遺跡の遺構の再検討に基づいたものである。両遺跡におけるB類亀甲形建物跡の新たな確認や多数の建物跡の配置状況の復元はこの時になされたもので、その後、占田・布尾が協議して本稿の企画をし、布尾が他の遺跡の検討と本文の記述を行った。本文を執筆するにあたっては荒川 隆史氏、安 英樹氏をはじめ、多くの方々のご教示を得ました。記して感謝いたします。

註

- 1 概官的に石川県、富山県、福井県をその範囲とするが、今回資料の検討を行えたのは石川県、富山県の資料である。
- 2 集落跡を構成する遺構としては建物跡の他に土坑や配石遺構など様々なものが存在するが、本稿では、上述した理由により建物跡を中心に研究史を振り返る。
- 3 縄文時代の上坑や柱穴の検出は県内では昭和48年の金沢市古府遺跡第5次発掘調査においてなされており、引き続き同年に御経塚遺跡の調査を担当した西野秀和氏によるところが大きいと思われる。

- 4 名称変更の経緯については(市1983)文献に詳しい。
- 5 道構構築に関わる論議、道構の性格に関わる論議は、紙数の関係もあり別の機会にまとめることとしたい。
- 6 これについては西野秀和氏が米泉遺跡の検討からチカモリ遺跡も並列集落ではないかとの反論があるもの(西野1994)。建物の弧状分布や軸の方向が集落の中央空間を向くことなどを考えると、チカモリ遺跡は、道構群が環状(弧状)を呈する集落との見方が妥当なものといえる。
- 7 布尾が報告した藤江C遺跡例は、柱穴は等間隔の配置を見せず、見方によっては4基方形の柱穴が二組にも見える。学史的な検討を終ると、「環状木柱列」道構とすべきではないことは明らかである。
- 8 これも今回のチカモリ遺跡での検討に基づいた取り扱ひである。今回の検討では、木田氏の復元案による建物跡をチカモリ遺跡の中で探しまれていないので若干の変更となったが、今後の資料の増加や検討によっては、大津くろだのもり遺跡での久田氏の復元案とともにC類の一種として類型化される可能性もあろう。
- 9 フナラシ地区北半で検出された竪穴建物跡群の覆上から比較的時期の新しい遺物が出土していることや、南半部の累積する柱穴群の分布が不自然なことから、北半部にもある程度柱穴群が展開していた可能性がある。

引用・参考文献

- 石井 寛 1989 縄文集落と孤立柱建物跡『調査研究集録 第6冊』港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井 寛 1994 『縄文後期集落の構成に関する一試論』『縄文時代 5』縄文時代文化研究会
- 石井 寛 1998 『第5章第1節 縄文集落から見た孤立柱建物跡』『先史日本の住居とその周辺』
- 石井 寛 1999 『道構研究 大形住居址と大形建物跡』『縄文時代 10』縄文時代文化研究会
- 加藤三千雄 1986 『第5章第1節 晩期の巨大木柱列・柱根』『真跡遺跡』
- 加藤三千雄 1989 『北陸における縄文晩期の木柱列』『縄文時代の木の文化』富山考古学会
- 加藤三千雄 1994 『石川県能登町真綿遺跡の巨木遺構』『考古学ジャーナル』377 ニューサイエンス社
- 木下百夫・布尾和史 2001 『石川県・福井県における縄文時代集落の経緯相』『列島における縄文時代集落の経緯相』縄文時代文化研究会
- 黒足和久・小林謙一 1996 『住居埋設土器の接合関係からみた喫煙行為の復元』『日本考古学協会第62回総会研究発表要覧』
- 酒井永洋ほか 1980 『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』井口村教育委員会
- 酒井永洋ほか 1987 『北野遺跡B地区』『富山県小杉町北野遺跡・権土遺跡』小杉町教育委員会
- 岡 雅之 1987 『第2章 配石遺構と木柱群の考察』『新潟県寺地遺跡』青海町
- 高塚勝彦 1958 『石川県石川郡新保遺跡』『日本考古学年報』第7号
- 高塚勝彦 1964 『金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査』『石川県押野村史』押野村史編集委員会
- 高塚勝彦 1964 『金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査』『石川県押野村史』押野村史編集委員会
- 高塚勝彦・西野秀和 1974 『石川県御経塚遺跡 一第5次調査概報一』野々市町教育委員会・御経塚遺跡調査団
- 高塚勝彦・西野秀和・高木 実 1975 『石川県御経塚遺跡 一第6次調査概報一』野々市町教育委員会・御経塚遺跡調査団
- 高塚勝彦・西野秀和 1976 『石川県御経塚遺跡 一第7次調査概報一』野々市町教育委員会・御経塚遺跡調査団
- 高塚勝彦・泥尻修平・宮原久山ほか 1976 『野々市町御経塚遺跡調査(第8次)概報』石川県教育委員会
- 高塚勝彦ほか 1983 『縄文時代の道構』『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
- 高塚勝彦ほか 1986 『真綿遺跡』能登町教育委員会・真綿遺跡発掘調査団
- 中島栄一・渡邊明和 1994 『新潟県内の巨柱遺構』『考古学ジャーナル』377 ニューサイエンス社
- 西野秀和 1985 『第4章 遺構』『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓群』石川県立埋蔵文化財センター
- 西野秀和ほか 1986 『金沢市米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 西野秀和 1994 『金沢市米泉遺跡の環状木柱列』『考古学ジャーナル』377 ニューサイエンス社
- 西野秀和 1995 『第4章第2節 環状木柱列について』『金沢市近郊遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

- 西野秀和 南 久和 1999 『旧石器・縄文時代』『金沢市史 資料編19 考古』
- 布尾和史ほか 2002 『金沢市藤江C遺跡Ⅳ・Ⅴ 第1分冊 縄文時代編』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 沼田啓太郎 1956 『旧石川郡安原村中丘遺跡調査報告』『石川考古学研究会会誌』第8号
- 宮本百郎 1976 『新保本町(旧八日市新保)遺跡分布調査報告』『石川県考古学研究会会誌』第19号
- 橋本浩夫 1985 『北陸における大型木柱使用の建造物遺構』『古代日本海文化の源流と発達』大和書房
- 橋本浩夫 1994 『環状木柱列と半級柱の発見』『考古学ジャーナル』377 ニューサイエンス社
- 橋本 正・酒井道洋・久々忠義 1980 『富山県井口村 井口遺跡 発掘調査概要』井口村教育委員会
- 久田正弘ほか 2002 『田鶴浜町 大津くろだの森遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 本出秀生ほか 1997 『六橋遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 前田清彦 1995 『鬼道跡群Ⅰ』松任市教育委員会
- 南 久和 1983 『金沢市新保本町チカモリ遺跡—遺構編—』金沢市教育委員会ほか
- 南 久和 1986 『第5章第1節2 真門配前の巨大木柱列について』『真脇遺跡』
- 南 久和 1989 『縄文時代晩期の木器と石器』『縄文時代の木の文化』富山考古学会縄文時代研究グループ
- 南 久和 1991 『北陸地方の柱穴列』『阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって』研究会資料 長野県茅野市教育委員会
- 南 久和 1992 『金沢市中屋サリ遺跡』金沢市教育委員会
- 南 久和 1994 『チカモリ遺跡の巨大な木柱』『考古学ジャーナル』377 ニューサイエンス社
- 山田 治 1986 『第5章第1節3 真脇遺跡出土の巨大木柱列の14C年代測定』『真脇遺跡』
- 山田昌久 1989 『木製遺物からみた縄文時代の集落と暮らし』『縄文時代の木の文化』富山考古学会
- 吉田 淳 1989 『御経塚遺跡Ⅱ』野々市町教育委員会
- 吉田 淳 2003 『第1章第2節 扇状地の拠点集落—御経塚遺跡—』『野々市町史 資料編1』野々市町史編纂専門委員会
- 米澤義光ほか 1990 『松任市一塚イチノツカ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 浅辺 仁 1990 『縄文式階層化社会』

第2節 弥生時代以降の様相

1 ブナラシ地区

弥生時代の確実な遺構は確認しておらず、終末期月影Ⅱ式の上器細片が5区の包含層から出土したにすぎず、デト地区やツカダ地区で展開する集落の分布はみられない。

古代では、3区で9世紀後半期の須恵器片を出土した北流する溝SD01の検出にとどまり、中世後期では、14世紀前半期の加賀焼を出土した小河道跡と考えられるSD02の検出したにすぎない。

ブナラシ地区において弥生時代初期以降は、集落地としての土地利用は行われていない状況が確認できた。

2 デト地区

1) 弥生時代～古墳時代初期

弥生時代初期では、弥生時代初期に位置づけられる柴山出村1・2式土器が自然河道SD23東側の7・11・12・14区の限られた範囲で少量出土している。該期の遺構は不明であるが、国道8号東側のツカダ地区(野々市町教委1989)においても同様な状況が確認されており、弥生時代初期には縄文時代からの集落が急激に衰退していた状況がうかがわれる。

弥生時代終末期の月影Ⅱ式期から古墳時代初期にかけて再びデト地区において自然河道SD23の左岸に分布域をもつ集落が形成され、竪穴建物10棟、掘立柱建物1棟を検出した。また、SD23の東側の3区で同期の掘立柱建物2棟と土坑、区向溝を検出している(別途報告)。なお、対岸のツカダ地区では、同期の大型・中型・小形住居がそれぞれ1棟ほどで1グループを構成したと考えられる集落が確認されており、竪穴建物14棟、掘立柱建物1棟を検出している(野々市町教委1989)。

デト地区での竪穴建物10棟には①特大型建物、②中型建物、③小型建物がみられる。①では、不整な多角形状(楕円形状)を呈し、床面積約189㎡のSI02と、円形を呈し床面積約170㎡と推定するSI10、②は床面積31～50㎡で、五角形状のSI03c、隅丸方形のSI03a・03b・06、③は床面積30㎡以下のSI01・04・05・08・09の5棟で、このうちSI01・04・05は10㎡代である。また、ツカダ地区で確認されている床面積51㎡～100㎡前後の大型建物のみはみられない。

特大型建物は、主柱を楕円状または円状に配置し、SI02では伊跡は確認されず、その大きさとともに一般住居ではなかった可能性がある。南側主柱穴の内側に穴遺構がみられること、南側主柱の床面に複雑な掘り込みがみられること、平面形で西側が角ばっていないことから、当初は平面楕円形状で建てられ、次に南東側へ拡張されたことが考えられよう。中型建物では、隅丸方形から五角形へと拡張されたSI03が外周溝をもつ。小型建物ではSI08が隅丸の径が小さく方形に近い平面形となり時期差とみられる形態特徴がある。

竪穴建物の時期推移として、1期はSI02・05・09、2期はSI03・06・07・10、3期はSI01・04・08で、1・2期は月影Ⅱ式、3期は白江式段階と考えている。また、北側でSD26に沿うように掘立柱建物SB23が位置するが時期は不明である。調査区は、御経塚の住宅地域及びこれに接する区域のため集落の全容を把握するに至っていないが、自然河道SD23に沿って形成され、特大型建物の存在から対岸のツカダ地区の集落より上位に当たる集団の集落と言えよう。

2) 古墳時代後期～古代

掘立柱建物7棟SB10～12・16・21・22を検出しており、軸方位からN24・25°EのI群:SB11・12・22とN28・30°EのII群:SB10・16・21に分かれる。また、別途報告分である第244園4区のSB09の軸方位はN34°Eである。ツカダ地区およびアスナロ川地関係調査において該期の掘立柱建物が14棟検出されている(湯尻1983)、I群と方位の合うものはアスナロ川地関係調査の4間×3間建物Ⅱ-3の方位N25°Eだけであり、II群について近似する建物はN36°E前後のものがあるが、同じ方位の建物はみられない。掘立柱建物が集中する5区出土の遺物から、建物群の時期については6世紀後半から7世紀前半頃に位置づけられよう。

自然河道SD23は幅を約5mにせばめて存在していたものと考えられ(第179図溝B)、その左岸域では建物の存在はみられず溝のみが確認されている状況であり、9世紀後半期の遺物が出土している。

3) 中世後期

14世紀～16世紀に営まれた集落は集住化し、幅約6mほどとなった自然河道SD23(第1794溝A)の両岸に展開しているが、全般的に遺構から出土する遺物は少なく時期不明な遺構が多い。存続時期の重なる集落として、南西500mに位置する長池キタノハシ遺跡(野々市町教委2000)の類型を参考に集落様相を概観したい。

右岸にあたる東側集落域とした5区では掘立柱建物7棟を確認したが井戸や土坑(竪穴状遺構)とのセットは検出されず、約20～30mの長さとなる欄列SA01～03が確認されており、左岸の西側集落域とした地域と違った遺構の状況がみられる。この区域の掘立柱建物群は左岸の集落地とは性格が異なり、居住を目的としたものではなく特殊な建物とも考えられる。方位からの掘立柱建物と欄列の関係は、北向きに近いものからI群はSB13・15・SA03(東西欄)、II群はSB14・18・19・SA01(南北欄)、III群はSB17・20・SA02(東西欄)となる。南北欄SA01は南半部が屈折し方位が東西欄SA02と直角となるが、SA02は標準的柱列穴間が4mの前半代と広く同時期とは考えにくい。また、SA01は標準的柱列穴間が2mほどで、同約3mのSA03とも異なる。

遺物が出土していないためこの地区における建物等の時期はデト地区全体の出土遺物から14世紀後半～16世紀としか認識できない。しかし、建物ではデト地区のなかでも東西棟1間×3間構造はSB19だけであり、長池キタノハシ遺跡での同例2棟は15世紀中葉の位置づけ案があり、II群は15世紀中葉に相応する可能性がある。

SD23左岸の西側集落域においては溝の位置から敷地A～Hを設定し報告を進めたところであり、各敷地の状況をもとに全体様相の把握に努めたい。

敷地Aの遺構は、SB24～29、SE05・07、SK75～81・83・86・87であるが、遺物から時期を判断した遺構は、14世紀後半のSB24、14世紀末～15世紀前半のSK80・83、15世紀前半のSE07・SK75、15世紀中頃のSE05である。出土遺物の時期は14世紀後半から15世紀中頃におさまっており、時期不明な遺構もこの時期内の所産と考えられている。長池キタノハシ遺跡では、掘立柱建物とセットなる井戸と竪穴状の土坑の位置が建物の周辺に位置する事例がみられる(東側または北側に位置することが多い)。このことから、1地点で重複して建替えられているSB24～28とセットなる井戸はSE05とSE07が推定される。SE05はとくに大きく、短期間ではなく一定期間機能した井戸と推定している。他の遺構の具体的なセット関係は不明であるが、敷地Aの遺構は14世紀後半から15世紀中頃にかけての所産と理解したい。

敷地Bの遺構は、SB30～32、SE02～04・06・21～23、SK82・84・85・88・89・100・101である。遺物から時期判断した遺構は、14世紀後半のSE02・SK90・101、15世紀中葉～後葉のSE04・06、15世紀後葉のSE21である。推察される遺構のセット関係と時期は、14世紀後半のSB32・SE02、15世紀中葉～後葉のSB30・SE04とSB31・SE06・SK88とだろう。

敷地Cの遺構は、SB33～35・41、SA04、SE08～20・34～41、SK92～95・98・99である。遺物から時期判断した遺構は、14世紀後半のSE09・17、15世紀中頃のSE13・40、15世紀後半～16世紀前半のSE08・38、16世紀代のSB41・SE34で、区西溝SD68・105は15世紀後半頃に掘削され16世紀前半には埋まっていたものとみられる。推察される遺構のセット関係と時期は、14世紀後半のSB34・SE09、15世紀中葉のSB33・SE13・SA04である。敷地C東側部は、14世紀後半ではSD68はまだ存在しておらず、敷地B内とも考えられる。また、土坑群はSD68に先行するもので14世紀後半から15世紀前半の時期が与えられる。敷地C西側部の16世紀代SE34はSD105が埋まっ以降の所産で、SB41とのセット関係となる可能性を有する。

敷地Dの遺構は、SE24～26である。遺物から時期判断した遺構は、14世紀後半のSE26である。

敷地Eの遺構は、SB37～40、SA05～07、SE27～29・31、SK114～120である。遺物から時期判断した遺構は、15世紀中頃～16世紀前半のSE29、15世紀後半～16世紀前半のSE27、16世紀中頃のSK114、16世紀末頃のSE31である。推察される遺構のセット関係は、方位等からSB37・SA07・SK119、SB39・SA05であるが、他の遺構の関係は不明である。重複する土坑の先後関係は、SK115・117～16世紀中頃SK114～SK116、SK115～SK118である。敷地Eの遺構は、出土遺物から15世紀中頃～16世紀末頃の時期が与えられる。

敷地Fの遺構は、SB42～44、SK124・125・127である。遺物から時期判断した遺構は、14世紀末頃～15世紀前半のSK125、15世紀前半のSB42、15世紀中頃～16世紀前半のSK127で、遺構のセット関係は不明である。

敷地Gの遺構は、SB45～47、SE56、SK130～135・137～140である。遺物から時期判断した遺構は、15世紀後

半のSK137で、複合するSKI38・139が先行する。南側の敷地Hを画するSD119からは、14世紀末頃～15世紀前半の遺物が出土している。

敷地Hの遺構は、SE57、SKI41・142であるが、遺物から時期が判断できた遺構は無く時期不明である。

以上、デト地区の各敷地の様相について推察を併せてきたが、出土した遺物と遺構の時期により各敷地の存続期をまとめると以下のとおりとなった。

東集落域 一部は15世紀中葉か、他は不明

西集落域 敷地A：14世紀後半～15世紀中頃

敷地B：14世紀後半～15世紀後葉

敷地C：14世紀後半～16世紀前半、16世紀代

敷地D：14世紀後半

敷地E：15世紀中頃～16世紀末頃

敷地F：14世紀末頃～16世紀前半

敷地G：14世紀末頃～15世紀後半

敷地H：不明

以上から西側集落域では、敷地によって存続期が異なり、15世紀代までの敷地A・B・D・Gと16世紀代を含む敷地C・E・Fに大きく2分できよう。敷地Dの存続状況は不明確であるが、集落は東側の敷地A・B・Gから西側の敷地C・E・Fへ移行する変遷動向がみられるものである。

西側集落域における各敷地の存続期間と掘立柱建物の重複関係やその方位を検討推考し、東側集落域を含めて掘立柱建物の時期について、1期：14世紀後半頃、2期：15世紀前半～中頃、3期：15世紀中頃～後葉、4期：16世紀代の4時期に帰属させた。その結果を下表に示したが、あくまでも試案の段階である。

デト地区掘立柱建物時期別表（案）

地区	1期(14C後半頃)	2期(15C前半～中頃)	3期(15C中頃～後葉)	4期(16C)
東集落域		SB17・20(Ⅲ群)	SB14・18・19(Ⅱ群)	SB13・15(Ⅰ群)
西集落域 敷地A	SB24・25・28	SB26・27・29		
敷地B	SB32		SB30・31	
敷地C	SB34	SB33	SB35	SB41
敷地E			SB38	SB37・39・40
敷地F		SB42・43		SB44
敷地G	SB46	SB47	SB45	

4) 近世以降

近世以降の遺構では住居に付随する井戸が、16・17・19区に集中してみられる。この地区は御経塚集落の「東川」で、かつその東端の住居地にあたり明治期から平成3年まで住宅が建っていたことは報告で述べた。

近世の主要遺構は16区で根石または礎石建物1棟（時期不明）、17区では17世紀末頃～19世紀中頃の井戸3基と土坑群、南北溝、19区では18世紀後半～19世紀の井戸6基を検出している。遺物は、17世紀前半から近世全般の遺物が出土しているが17世紀末までの遺物は少量で、これ以降の遺物は一定量が確認できる。

このように、近世の遺物は17世紀前半から、遺構は17世紀末頃からのものを確認しており、とくに、中世後期で16世紀代の遺構を確認した敷地C（17区）と、16世紀末頃の遺構を確認した敷地F（19区）に重複するものである。この状況は、集落が中世後期から空白期をおかず近世へと移行したことを物語るものであろう。

限られた調査区域であることから、近世での17世紀代末頃までの遺構は確認していないが、遺物の存在と「正保郷帳（1644～1647）」での御経塚村の記載から17世紀前半に集落が存在していたことは間違いなく、現在の御経塚集落は、中世後期と近世の調査成果から、14世紀後半にムラが形成され現在にまで至っていることがうかがわれるものである。

参考・引用文献

- 石川郡押野村史編集委員会 1964 『押野村史』
- 樋口文雄 1999 『遺物研究 石皿・磨石・麻石（四石）』『縄文時代文化研究の100年 第4分冊 遺物研究』縄文時代文化研究会
- 岡本浩一 2001 『松任市乾道跡発掘調査報告書 A・C区下層編』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 垣内光次郎 2003 『第5章第2節（2）御経塚遺跡（デト地区）』『野々市町史 資料編1』野々市町
- 小島俊彰・西野秀和・酒井重洋 1994 『北陸の上層編年—後期後半・晩期中葉—』『縄紋晩期前葉—中葉の広域編年』林謙作編
- 小杉町教育委員会 1987 『富山県小杉町北野道跡・椎上道跡緊急発掘調査概要』
- 小林正史 1998 『土器の文様はなぜ変るか』『水道跡発掘調査資料図説第二冊』水道跡発掘調査資料図説発行会
- 芝田 悟 1996 『金郷宮仏供箱と出土銭貨』鶴来町教育委員会
- 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識 Ⅲ 縄文』柏書房
- 高尾勝喜 1964 『金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査』『石川県押野村史』石川郡押野村史編集委員会
- 高取勝孝 1975 『石川県御経塚遺跡—第6次調査概報』野々市町教育委員会・御経塚遺跡調査団
- 高橋啓吾他 1983 『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
- 鏡路喬・野村忠司ほか 1996 『縄絡遺跡発掘調査報告書Ⅰ—遺構編—』中郷村教育委員会
- 新美倫子 2003 『第1章第3節 焼骨資料』『野々市町史 資料編1』野々市町
- 布尾和史 2002 『石川県』『屈状木柱列』『屈状木柱列と縄文の聖地』小矢部市教育委員会
- 野々市町教育委員会 1984 『野々市町御経塚ツカダ道跡（御経塚B道跡）発掘調査報告書Ⅰ』
- 野々市町教育委員会 1989 『御経塚遺跡Ⅱ』
- 野々市町教育委員会 2000 『長池キタノハシ遺跡』
- 橋本澄夫・高橋裕 1973 『野々市町御経塚遺跡』石川県教育委員会
- 久田正弘 1998 『北陸地方西部の土器の動き』『水道跡発掘調査資料図説第二冊』水道跡発掘調査資料図説発行会
- 平凡社 1991 『石川県の地名』
- 安 秀樹 1988 『金沢市瀬谷遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 湯尻修平他 1976 『野々市町御経塚遺跡調査（第8次）概報』石川県教育委員会
- 湯尻修平 1983 『加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格』『東大寺横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 南久和 1983 『金沢市新保本町チカモリ遺跡—遺構編—』金沢市教育委員会
- 南久和他 1986 『金沢市新保本町チカモリ遺跡—第4次発掘調査兼土器編—』金沢市教育委員会
- 宮下健司 1983 『有清砥石』『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 宮本良二郎 2002 『青田遺跡の住居と集落』『川辺の縄文遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財事業団・新潟県教育委員会
- 矢島國雄・前山裕明 1983 『石皿』『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 横山貴広 2003 『第2章第2節（6）御経塚遺跡詳』『野々市町史 資料編1』野々市町
- 吉田 淳 2003 『第1章第2節 屈状地の拠点集落—御経塚遺跡—』『野々市町史 資料編1』野々市町

第6章 土器付着炭化物の放射性炭素年代

山本直人 (名古屋大学大学院文学研究科)

小田寛貴 (名古屋大学年代測定総合研究センター)

御経塚遺跡から出土した縄文土器に関しては、これまでに土器型式が明確な土器に付着した炭化物を試料に放射性炭素年代測定をおこなってきている(小田・山本2001、山本1998・1999)。本稿の目的は、試料を採取した縄文土器のうち資料番号17OKD01～27の27点について実測図や拓本を掲載することと(第1表、第1～5図)、それらのなかで測定を実施した資料について較正年代をふくめて測定結果を再度報告しなおすことである(第2表)。

役割分担については、山本が吉田淳氏の協力をえて付着炭化物を採取し、名古屋大学年代測定研究センター第1実験室で前処理をおこない、同センターのタンデロン加速器質量分析計1号機を運転して測定をおこなった。小田はその結果を解析し、較正年代を算出した。

なお、17OKD30～67の38点については、「野々市町史」資料編1で報告している(小田・山本2003)。また、17OKD23は17OKD30と、17OKD25は17OKD34とおなじ縄文土器から付着炭化物を採取している。

引用文献

小田寛貴・山本直人、2001、「縄文土器のAMS14C年代と較正年代」『考古学と自然科学』第42号、1～13頁。

第1表 採取試料一覧表

資料番号	挿図番号	遺跡名	時期	土器型式	器種	炭化物付着面	炭化物付着部位
17OKD23	第1図1	シンデン	後期	加曽利B1式	深鉢	外面	口縁
17OKD24	第1図2	シンデン	後期	加曽利B1式	深鉢	内面	口縁
17OKD25	第1図3	シンデン	後期	加曽利B1式	深鉢	外面	口縁
17OKD13	第1図4	御経塚	後期	井口Ⅱ式前半	深鉢	内面	胴
17OKD14	第1図5	御経塚	後期	井口Ⅱ式前半	深鉢	内面	胴部下半
17OKD15	第5図1	御経塚	後期	井口Ⅱ式前半	深鉢	内面	口縁
17OKD10	第2図1	御経塚	後期	井口Ⅱ式後半	深鉢	内面	胴
17OKD11	第2図2	御経塚	後期	井口Ⅱ式	深鉢	外面	口縁
17OKD12	第2図3	御経塚	後期	井口Ⅱ式	深鉢	内面	胴
17OKD09	第2図4	御経塚	後期	八日市新保Ⅰ式	深鉢	内面	胴部下半
17OKD16	第5図2	御経塚	後期	八日市新保Ⅰ式	深鉢	内面	口縁
17OKD17	第5図3	御経塚	後期	八日市新保Ⅰ式	深鉢	内面	口縁部～胴部上半
17OKD18	第5図4	御経塚	後期	八日市新保Ⅱ式	深鉢	内面	口縁
17OKD19	第5図5	御経塚	後期	八日市新保Ⅱ式	深鉢	内面	口縁
17OKD20	第5図6	御経塚	後期	八日市新保Ⅱ式	深鉢	内面	口縁
17OKD07	第3図1	御経塚	晩期	御経塚式	深鉢	外面	胴部上半
17OKD08	第3図2	御経塚	晩期	御経塚式	深鉢	外面	口縁
17OKD21	第5図7	御経塚	晩期	御経塚式	深鉢	内面	口縁
17OKD01	第4図1	御経塚	晩期	中塚Ⅰ式	深鉢	内面	胴
17OKD22	第5図8	御経塚	晩期	中塚Ⅰ式	深鉢	外面	口縁
17OKD02	第4図2	御経塚	晩期	中塚Ⅱ式	深鉢	内面	胴部下半
17OKD03	第4図3	御経塚	晩期	中塚Ⅱ式	深鉢	外面	胴
17OKD04	第2図5	御経塚	晩期	中塚Ⅱ式	深鉢	内面	胴部上半
17OKD26	第5図9	御経塚	晩期	下野式前半	深鉢	外面	口縁
17OKD05	第3図3	御経塚	晩期	下野式後半	鉢	外面	口縁
17OKD06	第3図4	御経塚	晩期	下野式後半	深鉢	外面	胴部上半
17OKD27	第5図10	御経塚	晩期	下野式後半	深鉢	外面	口縁

第2表 測定結果一覧表

資料番号	^{14}C 年代 [BP]	$\delta^{13}\text{C}$ [‰] *1	校正年代 [cal BC] *2	測定コード
17OKD23 (1)	3070±90	未測定	未算出	NUTA-5484
17OKD23 (2)	3070±110	未測定	未算出	NUTA-5863
17OKD25	3790±110	未測定	未算出	NUTA-5864
17OKD13	2710±120	未測定	未算出	NUTA-5485
17OKD14	2940±100	未測定	未算出	NUTA-5865
17OKD10	3282±196	-24.7±1.1	1858 () 1845, 1770 (1524) 1386, 1332 () 1322	NUTA-5647
17OKD12	2720±110	未測定	未算出	NUTA-5486
17OKD16	2838±88	-24.7±1.1	1186 () 1184, 1127 (999) 899	NUTA-5526
17OKD19	3410±100	未測定	未算出	NUTA-5527
17OKD07	2790±117	-24.7±1.1	1111 () 1099, 1083 () 1060, 1053 (966, 964, 921) 823	NUTA-5530
17OKD01 (1)	2622±114	-24.7±1.1	895 () 876, 856 () 854, 843 (801) 761, 679 () 670, 609 () 598	NUTA-5531
17OKD01 (2)	3510±130	未測定	未算出	NUTA-5644
17OKD02 (1)	2651±122	-24.7±1.1	915 (806) 764	NUTA-5532
17OKD02 (2)	2688±100	-24.7±1.1	966 () 964, 921 (828) 795	NUTA-5645
17OKD02 (av.)	2670±79	-24.7±1.1	899 (820) 796	
17OKD04 (1)	1830±110	未測定	未算出	NUTA-5533
17OKD04 (2)	1760±110	未測定	未算出	NUTA-5866
17OKD06 (1)	2742±250	-24.7±1.1	1258 () 1234, 1216 (897) 759, 682 () 666, 635 () 590, 579 () 556	NUTA-3529
17OKD06 (2)	2668±167	-24.7±1.1	998 (818) 760, 680 () 668, 626 () 624, 613 () 593, 574 () 564	NUTA-5646
17OKD06 (av.)	2704±150	-24.7±1.1	1004 (831) 787	

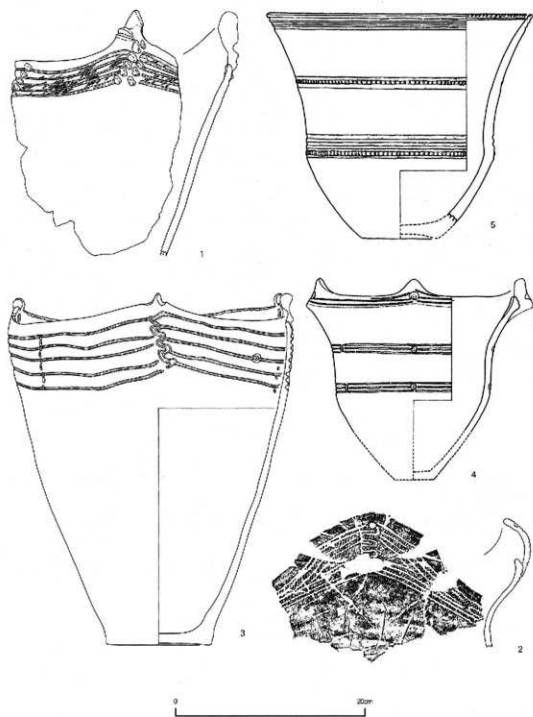
*1) 実測値のないものは、 -24.7 ± 1.1 [‰] を用いて同位体分別効果の補正に充てた。

*2) () 内の数値は14C年代の平均値を校正した値であり、() 外の数値は校正後の誤差範囲を示す。

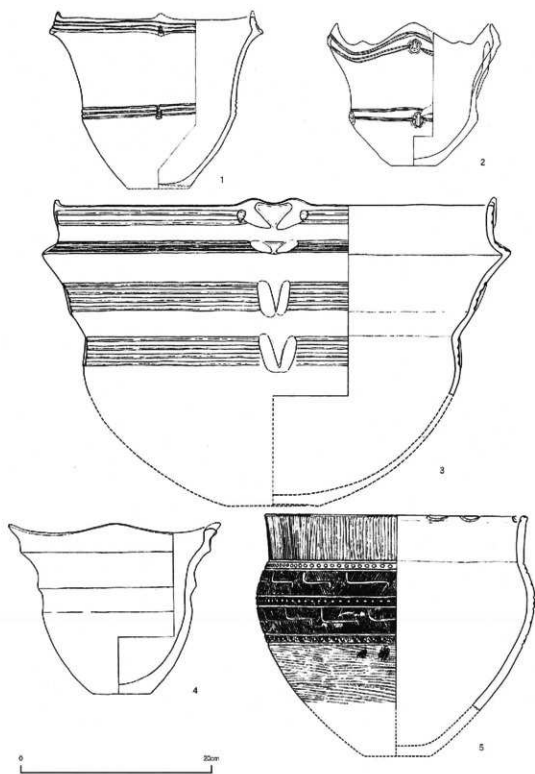
小田寛貴・山本直人、2003、「土器付着炭化物の放射性炭素年代」『野々市町史』資料編1（考古／古代・中世）、103～114頁。

山本直人、1998、「縄文土器の AMS14C 年代 (2)」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』Ⅷ、161～170頁。

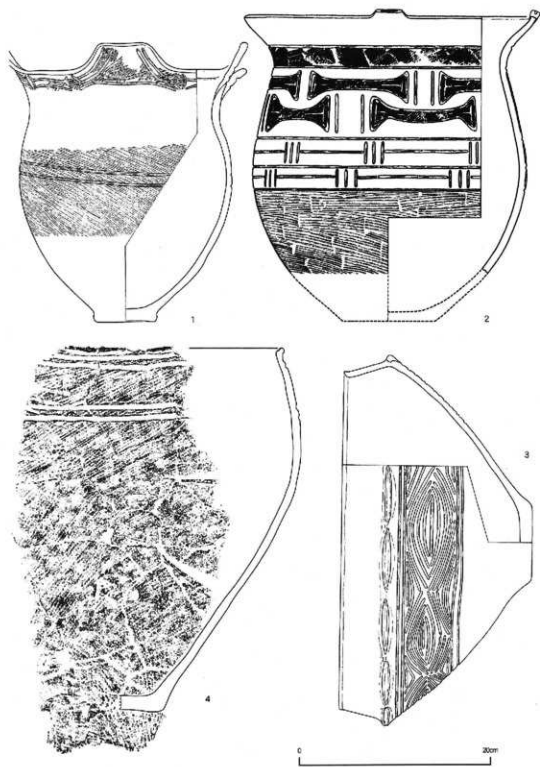
山本直人、1999、「縄文土器の AMS14C 年代 (3)」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』Ⅹ、121～123頁。



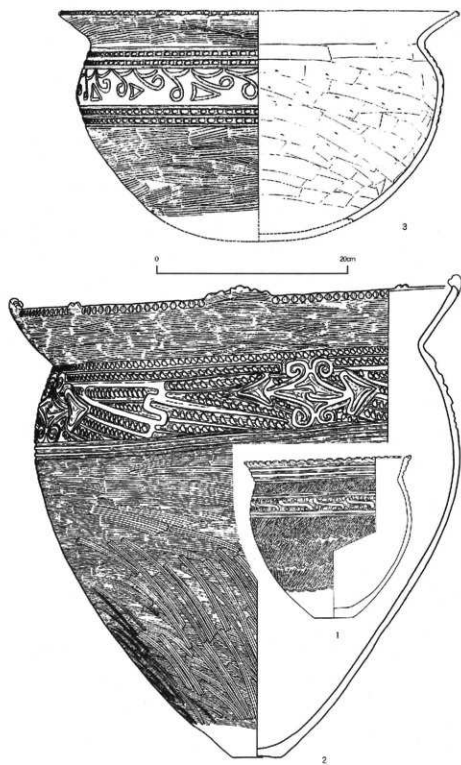
第1図 炭化物採取土器実測図1 (S=1/4)



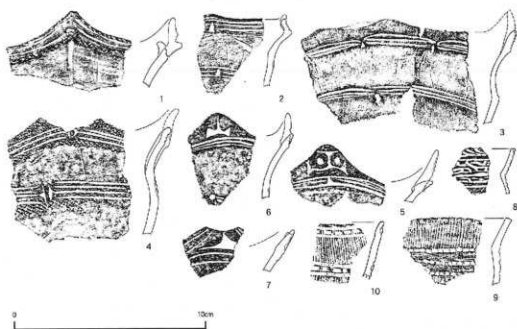
第2図 炭化物採取土器実測図2 (S=1/4)



第3图 炭化物採取土器実測图3 (S=1/4)



第4図 炭化物採取土器実測図4 (S=1/4)



第5図 炭化物採取土器実測図5 (S=1/4)



平成4年の発掘調査区(3・6・8区)と史跡指定地(北東より)



調査前風景(西より)



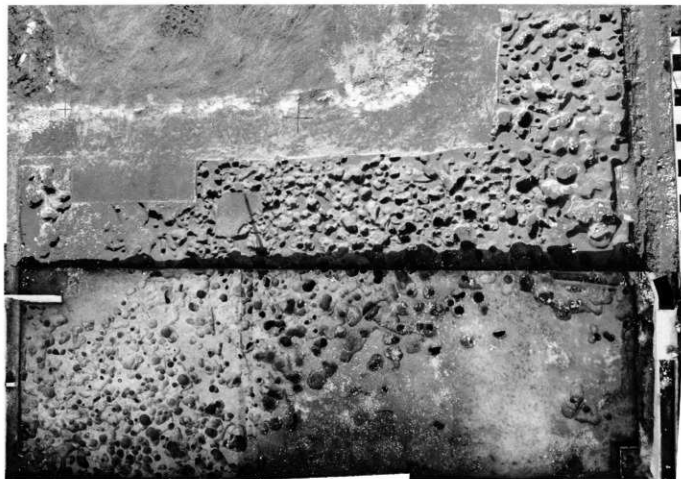
調査前風景(北より)



1区全景(西より)



2区全景(南東より)



3区全景 (↑北・合成写真)



4区全景 (↑北)



5区全景 (東より)



5区全景 (西より)



6区全景 (↑北)



7区全景 (↑北)

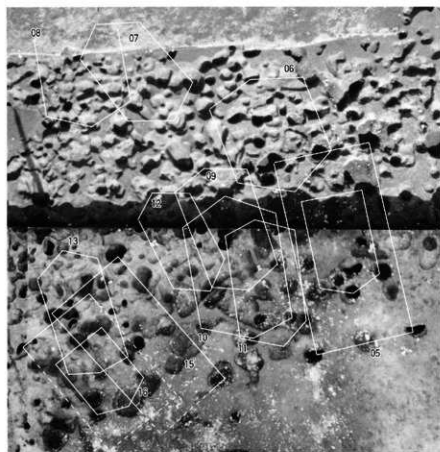
写真図版4 (ブナラシ地区)



8区全景 (↑北)



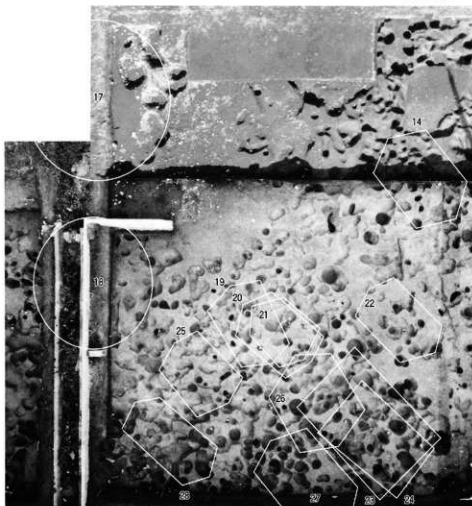
9区全景 (↑北)



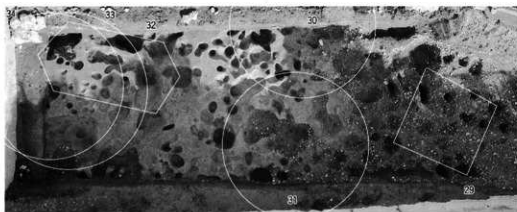
SB05~13・15・16 (3区・↑北)



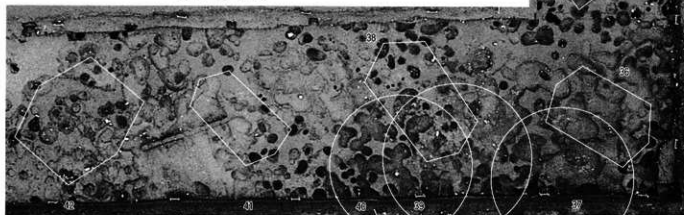
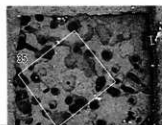
SB01~04 (3区・↑北)



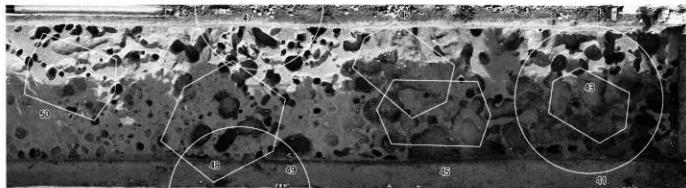
SB14・17~28
(3区・一部6区)



SB29~34 (4区)



SB35~42 (6区)



SB43~50 (7区・↑北)



23号炉 (5区)



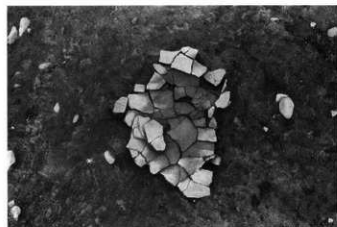
1号埋設土器 (3区)



2号埋設土器 (3区)



3号埋設土器 (3区)



4号埋設土器 (3区)



5号 (右) ・ 6号埋設土器 (3区)



7号埋設土器 (3区)



8号埋設土器 (3区)



9号埋設土器 (3区)



10~13号埋設土器 (5区)



14号埋設土器 (6区)



15号埋設土器 (6区)



17号埋設土器 (6区)



18号埋設土器 (6区)

写真図版 8 (ブナラシ地区)



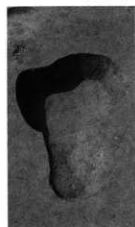
PF20-6 (5区)



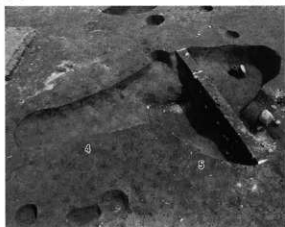
PF21-1 (5区)



PF21-2 (5区)



PE21-2 (5区)



PH25-4・5 (5区)



PH25-3 (5区)



PF24-2・4 (5区)



PN20-2 (6区)



PO19-31 (6区)



4号配石遺構 (3区)



8



9



17



29



37



44



47



41



66



75



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



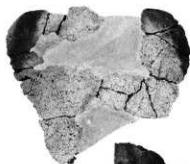
89



90



91



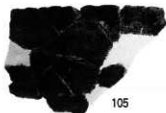
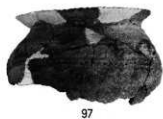
92



93



94



写真図版12 (ブナラシ地区)



138



139



140



146



158



182



191



193



199



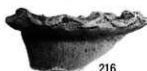
204



222



227



216



225



236



242



244



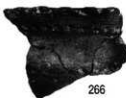
274



246



258



266



276



277



282



286



290



292



297



313



316



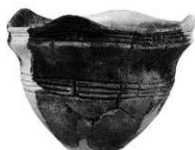
319



320



331



335



340



341



342



344



375



379



382



390



405

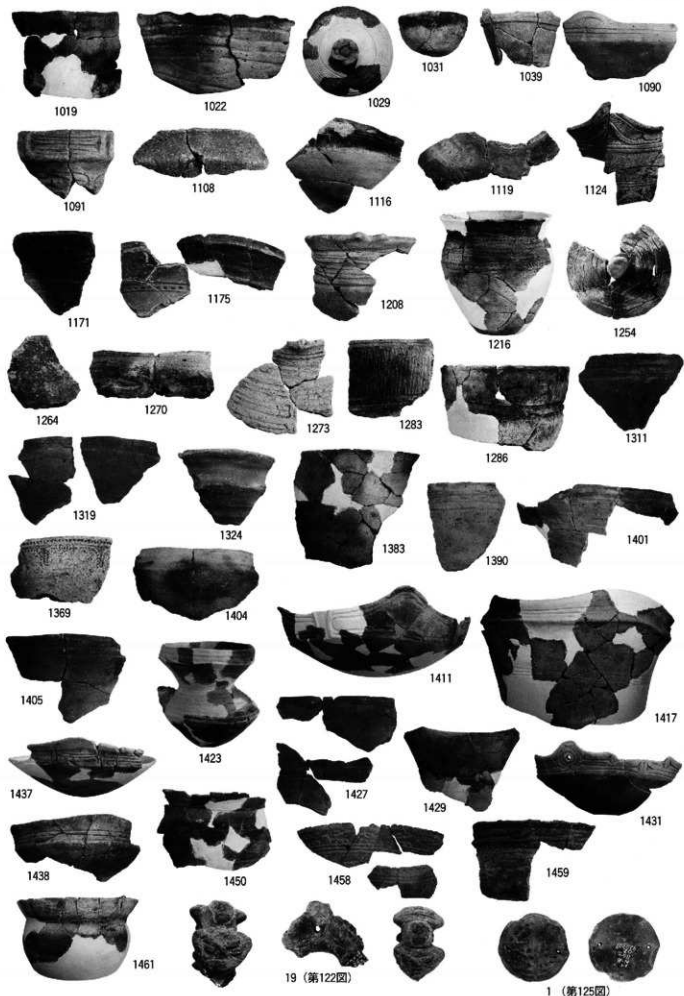
写真図版14 (ブナラシ地区)





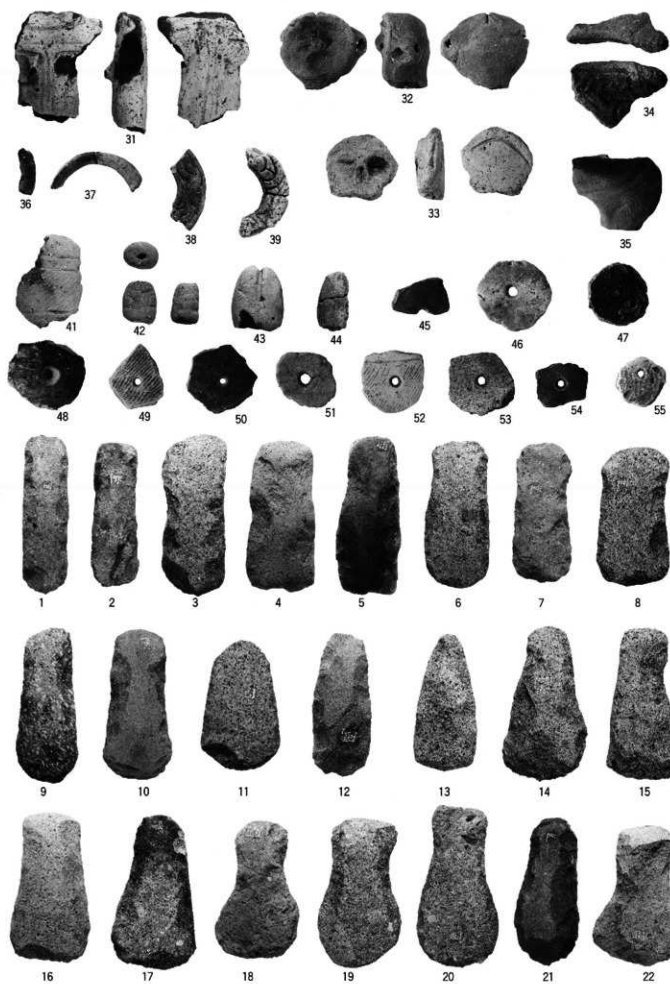
写真図版16 (フナラシ地区)

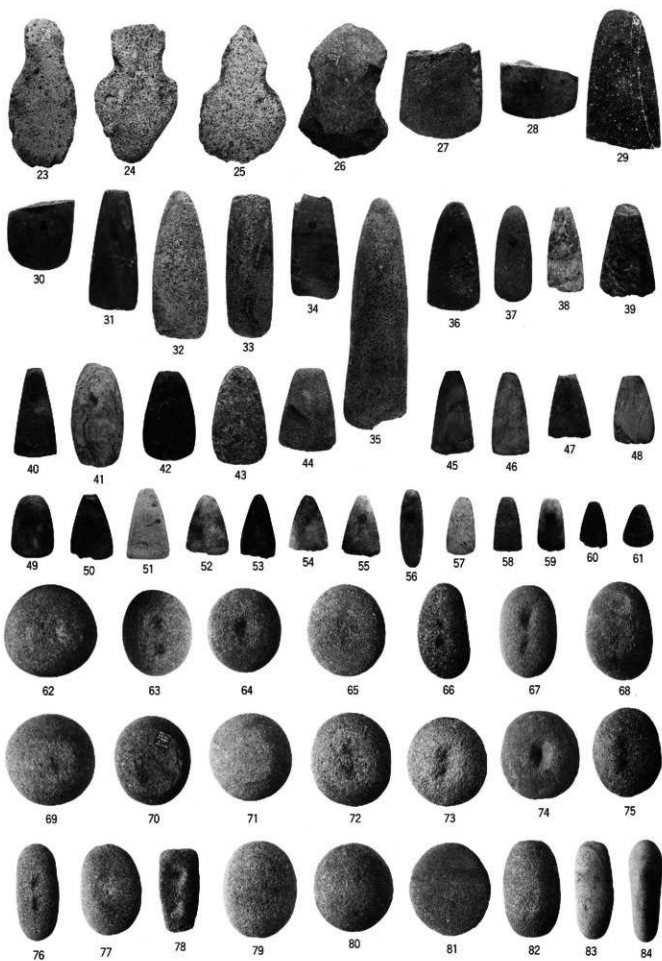




写真図版18 (ブナラシ地区)









85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



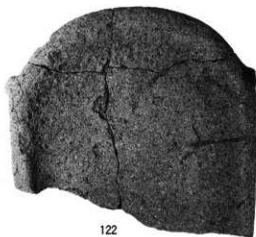
117



118



119



122



123



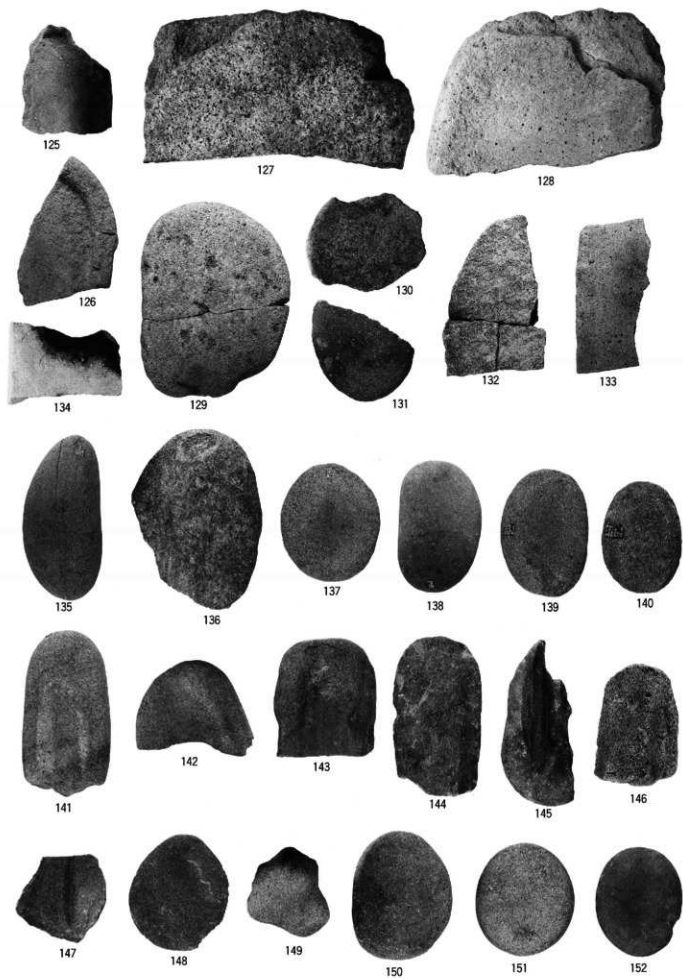
120

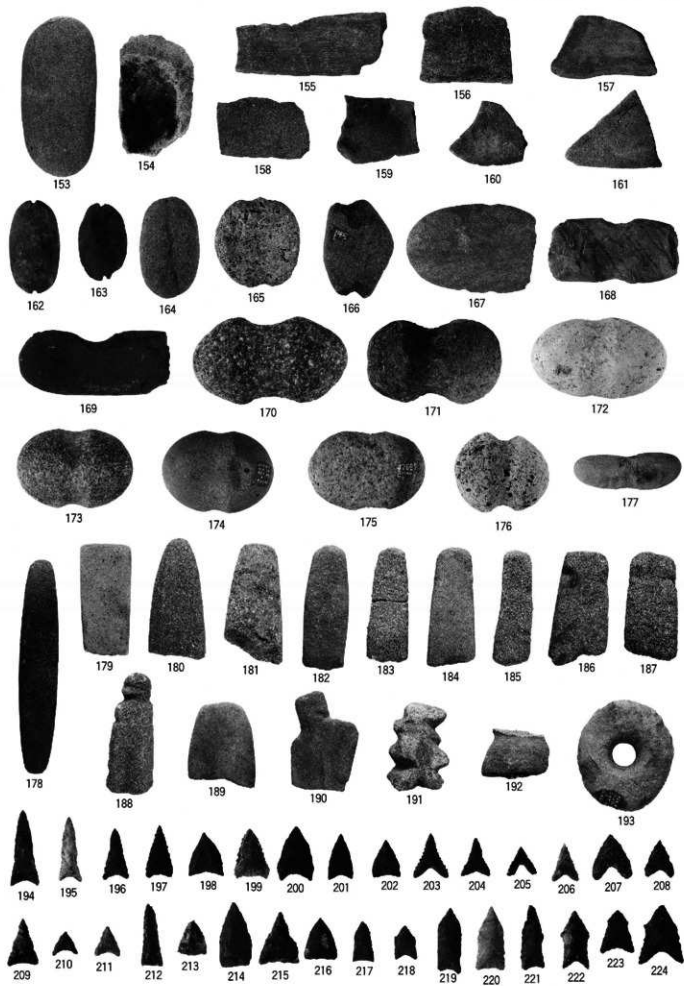


121

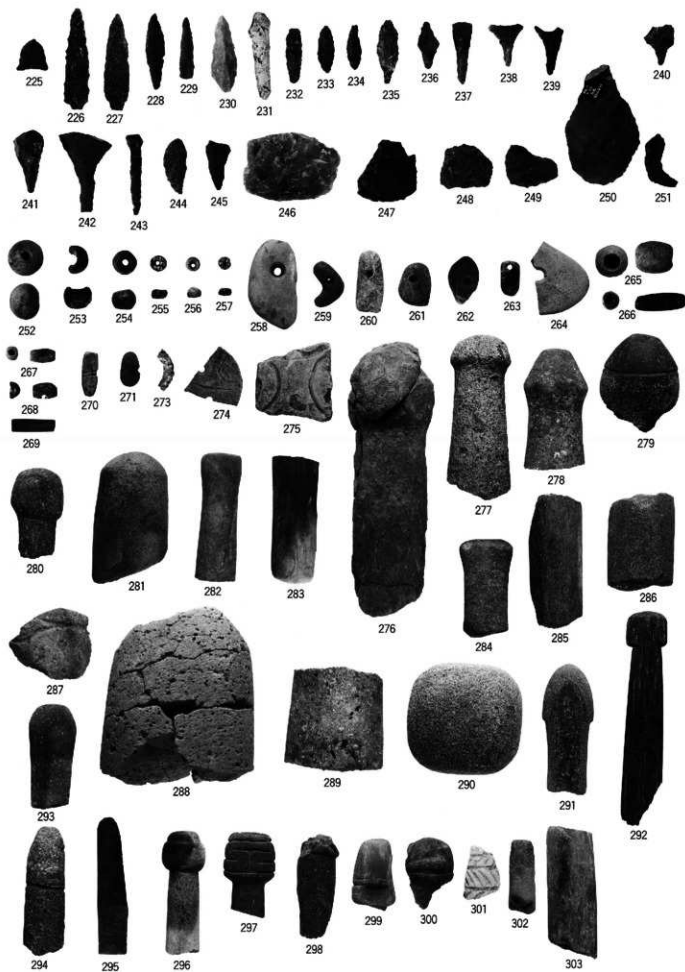


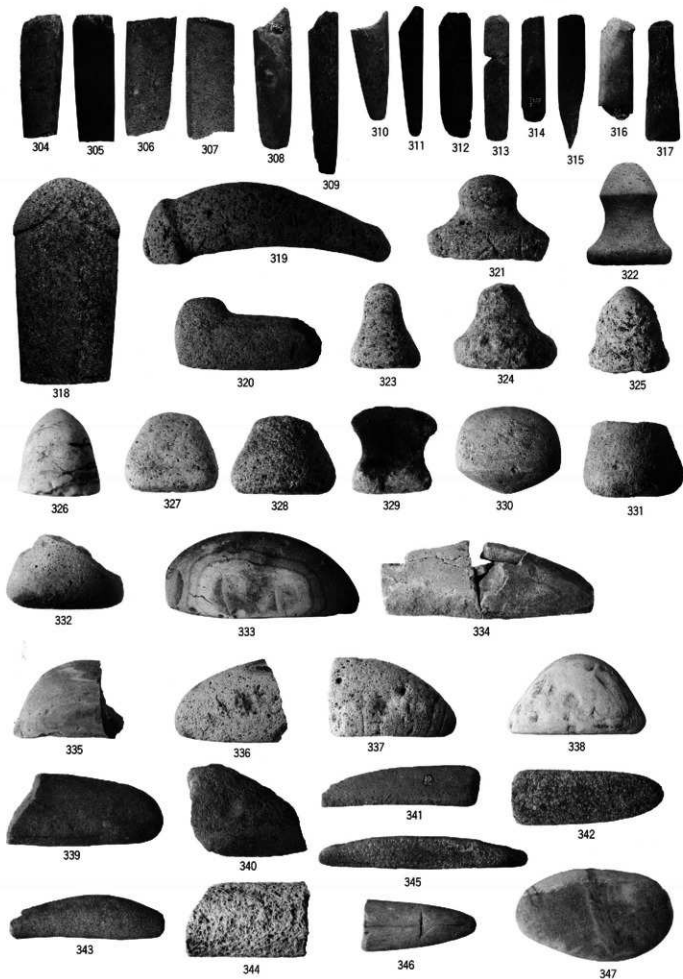
124





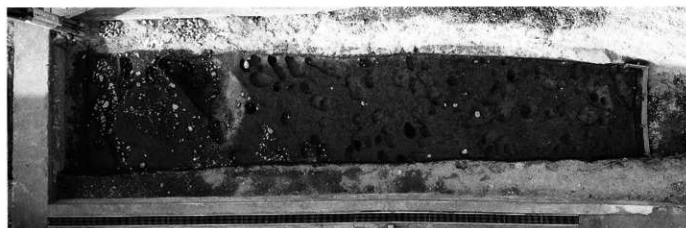
写真図版24 (ブナラシ地区)







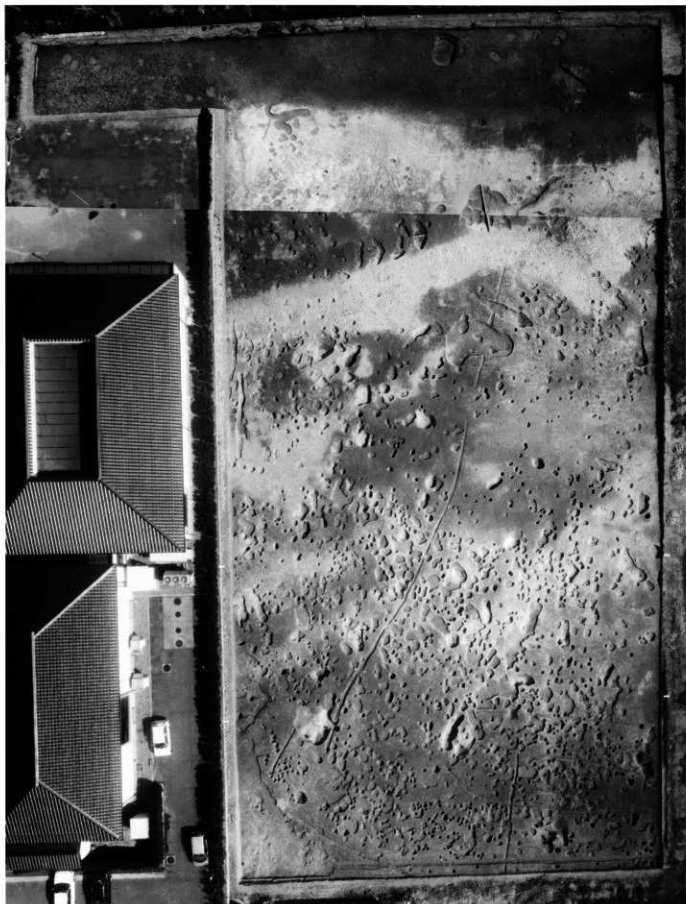
平成元年度調査区と周辺(北西より)



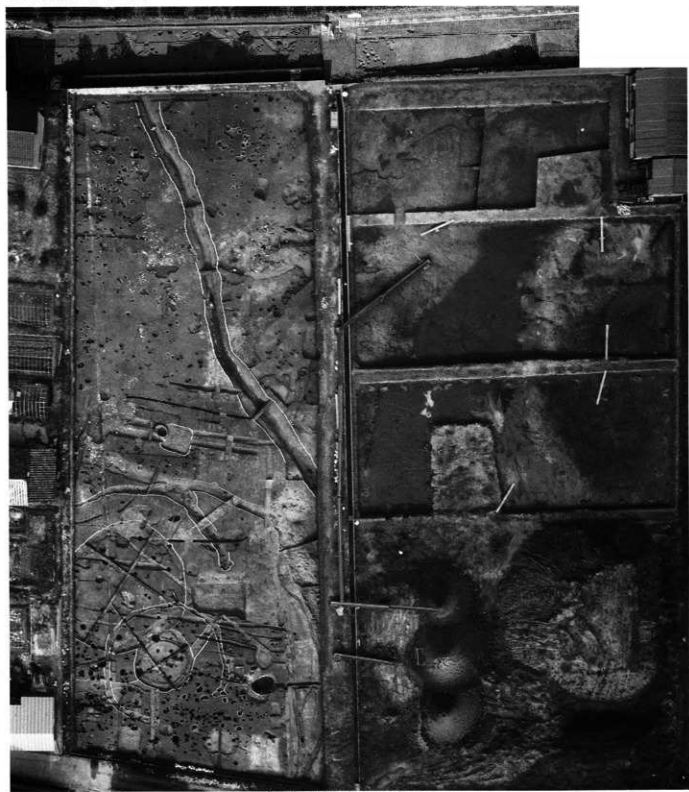
1区全景(↑北)



2区全景(↑北)



5区全景 (←北・合成写真)



6~11区全景 (↑北・合成写真)



12区近景 (南東より)



13区全景 (北東より)



14区全景 (北より)



14区全景 (南より)



15区全景 (↑北)



16・17区全景 (↑北)



18区全景 (↑北)



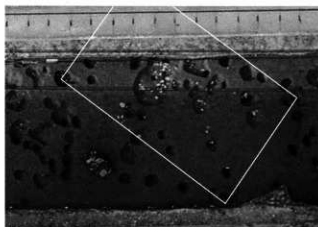
19区全景 (↑北)



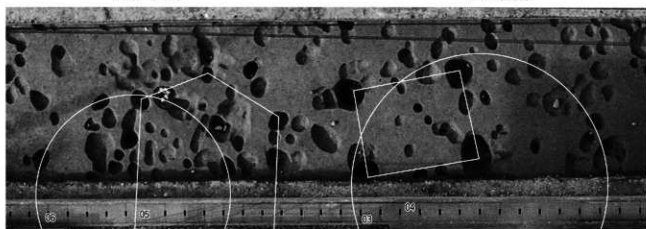
20区全景 (↑北)



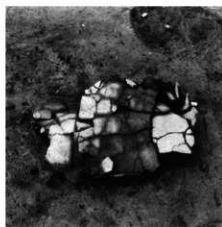
SB01 (1区)



SB02 (2区)



SB03~06 (2区)



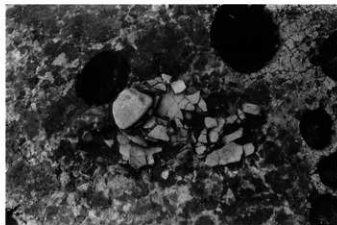
1号埋設土器 (2区)



2号埋設土器 (2区)



3号埋設土器 (5区)



4号埋設土器 (5区)



5号埋設土器 (5区)



SK34 (5区)



SK35 (5区)



SK36 (5区)



SK43 (5区)



SK48 (5区)



SK63-66 (11区)



SK102 (15区)



SK103 (15区)



5



6



7



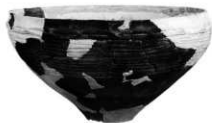
8



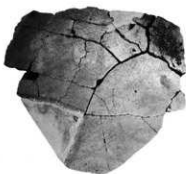
9



10



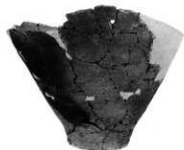
11



12



20



13



45



28



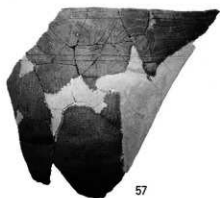
44



46



49



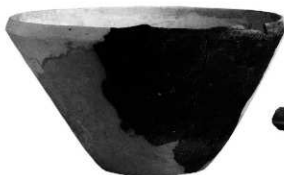
57



58



59



60



61



62



63



65



66



67



68



69



70



71



72



74



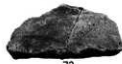
75



76



78



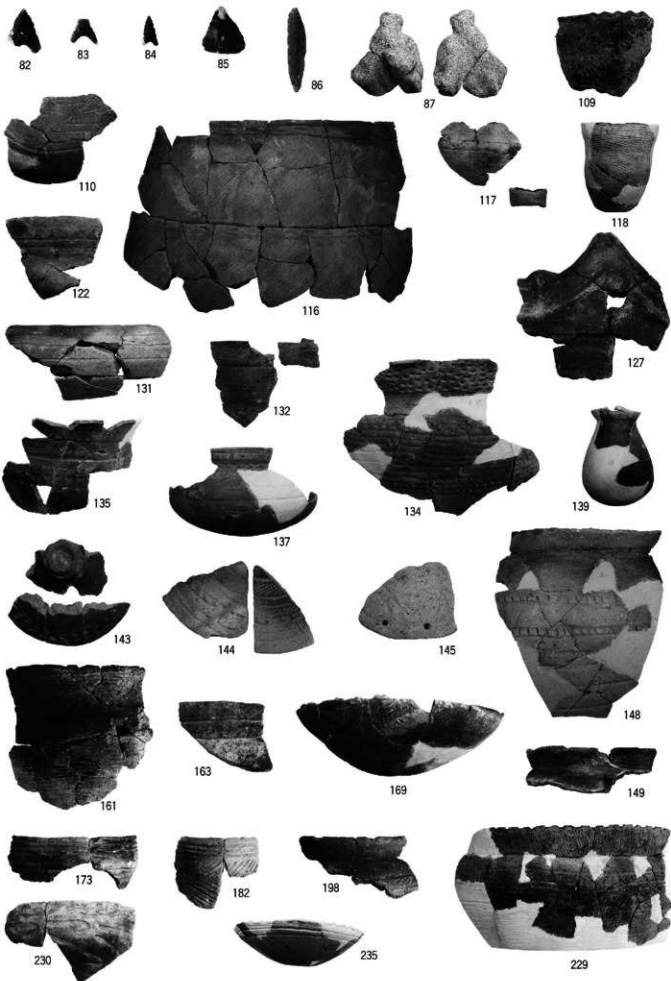
73



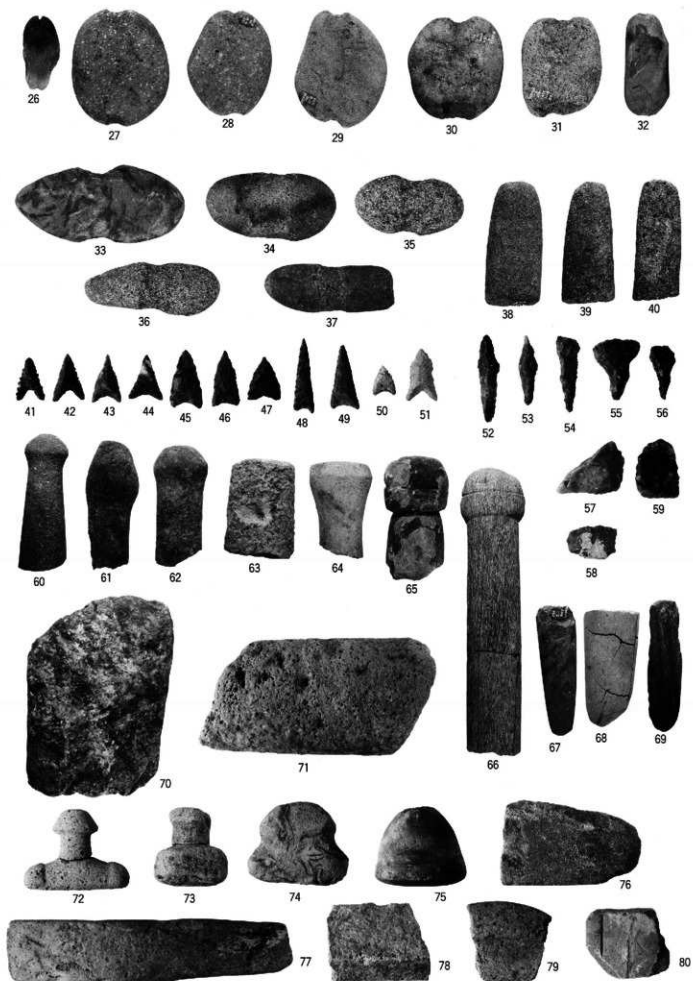
77

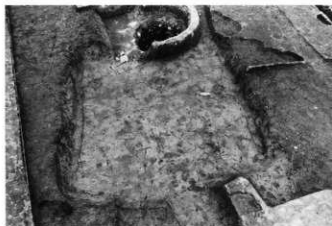


79









SI01 (11区)



SI02 (左)・03 (11区)



SI04 (12区)



SI08 (奥)・09 (14区)



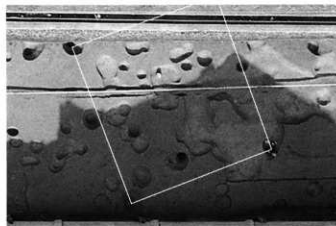
SI05 (15区)



SI06 (20区)

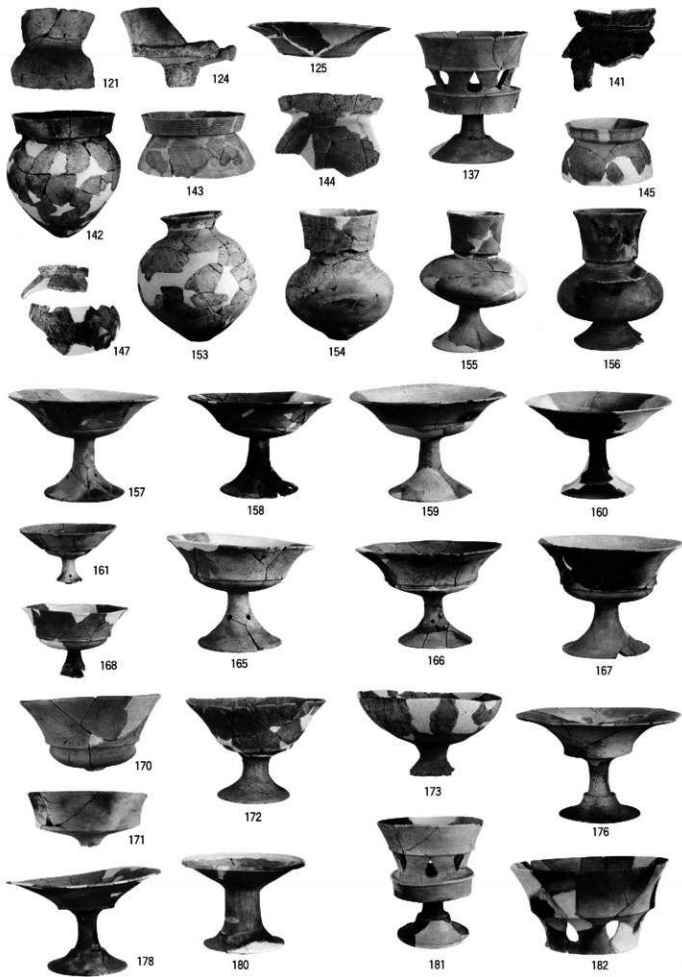


SI07 (20区)



SB23 (10区)







183



184



187



192



193



195



196



197



200



203



205



218



220



221



222



223



224



225



226



227



228



230



231



234



238



237



240



244



248



245



259



246



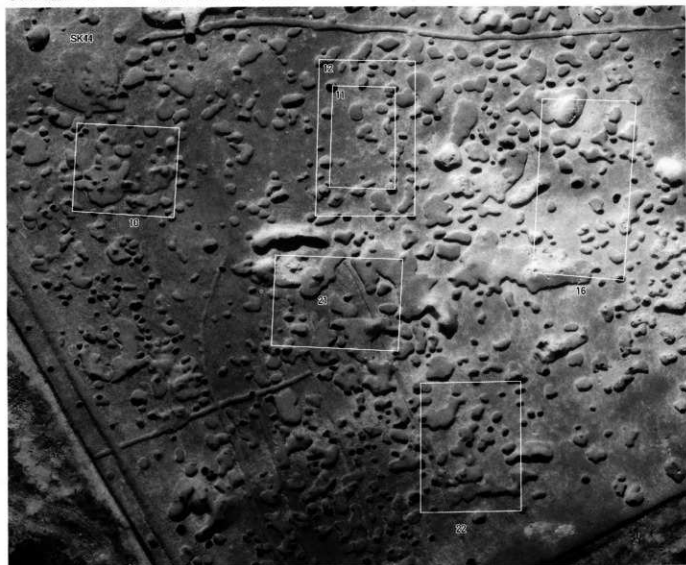
260



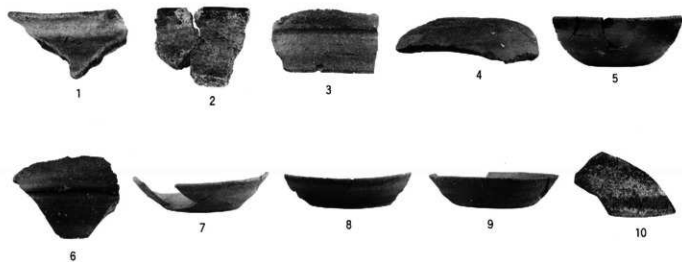
261

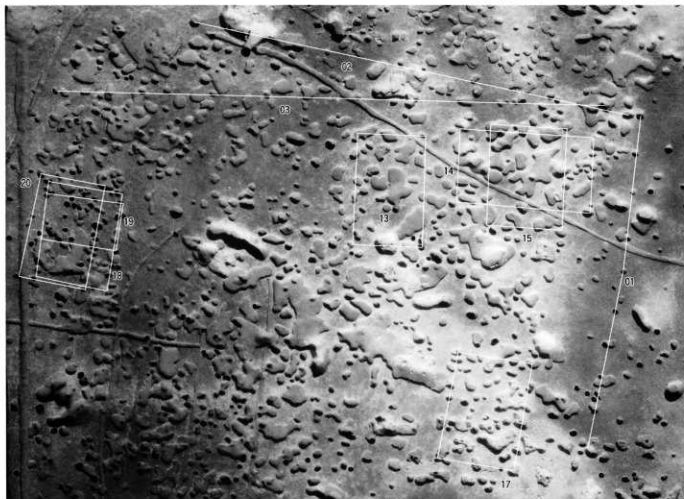
258





SB10~12・16・21・22 SK44 (5区)





SB13~15・17~20 SA01~03 (5区)



SB24~32 SE02~07 SK75~90 (11区)

写真図版44 (デト地区・中世後期)



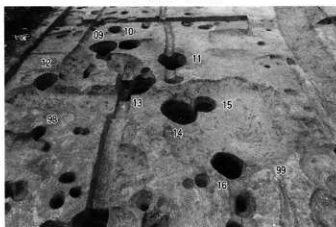
SD68 (13区・東より)



SD68 (14区・北より)



SB33・34 SA04 (14区)



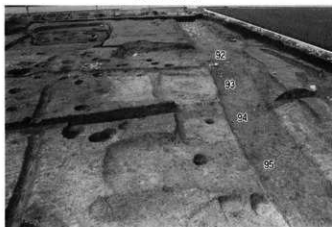
SE09~16 SK98・99 (14区)



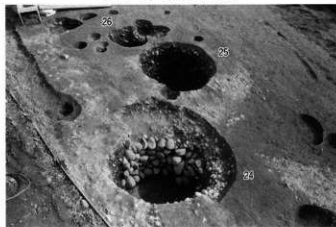
SE21 (14区)



SE22・23 SK101 (14区)



SK92~95 (14区)

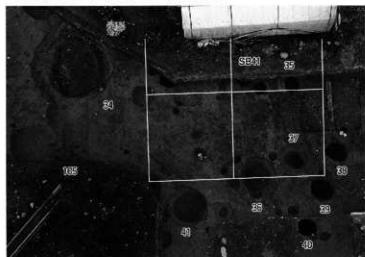


SE24~26 (16区)



SB37~40 SA05~07 SE27~29・31 SK114~120 (17区)

写真図版46 (デト地区・中世後期)



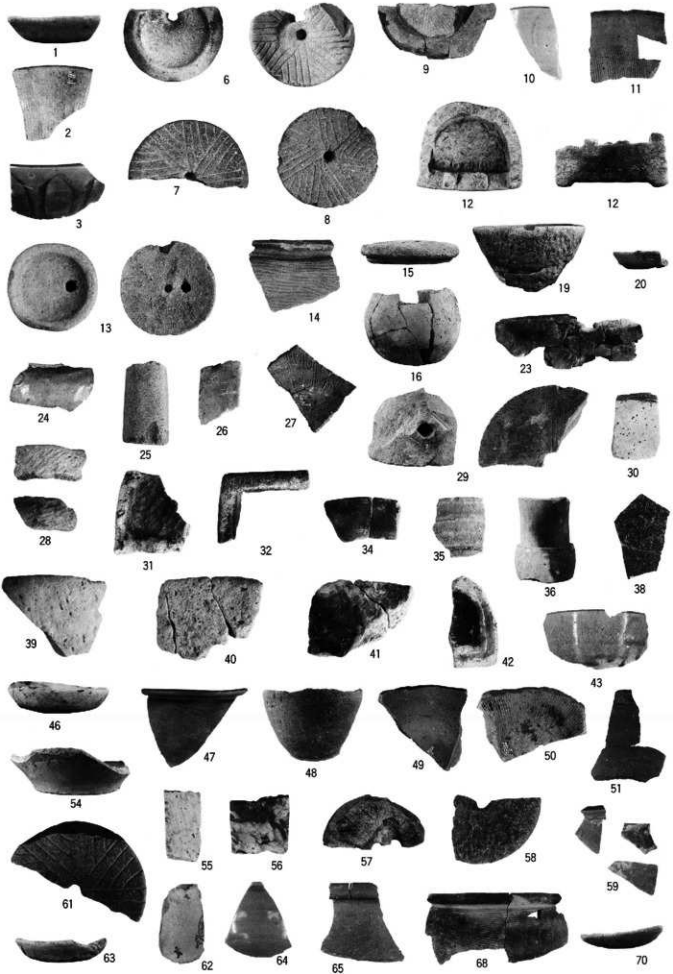
SB41 SE34~41 SD105 (18区)

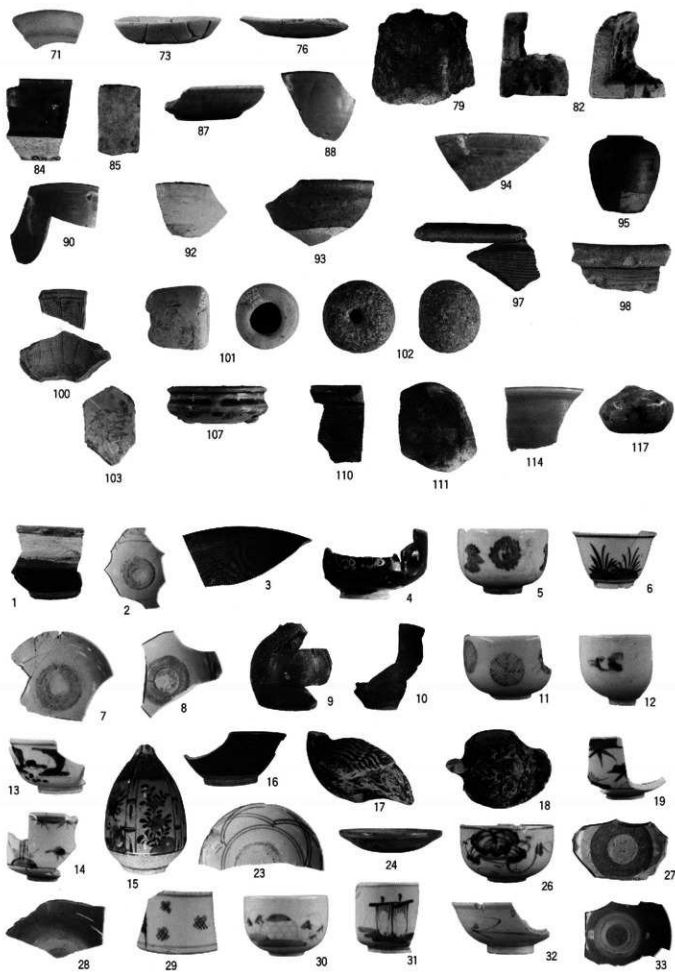


SB42~44 SK124・125・127 (19区)



SB45~47 SE56・57
SK130~134・137・138・140~142 (20区)









報告書抄録

ふりがな	おきょうづかいせき							
書名	御経塚遺跡Ⅲ							
副書名	野々市町御経塚第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	古田 淳、布尾 和史							
編集機関	野々市町教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県石川郡野々市町本町5丁目4番1号							
発行機関	野々市町教育委員会							
発行年月日	西暦2003年(平成15年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御経塚遺跡	石川県石川郡 野々市町御経塚 1-2-4・5丁目	17344	16027	36度 32分 35秒	136度 36分 10秒	19890703～19820603 19901204～19901217 19920526～19921103 19930415～19931225 19940610～19941209 19950509～19951030 19960508～19960627	3,470㎡ 190㎡ 1,120㎡ 1,970㎡ 1,550㎡ 1,620㎡ 330㎡	御経塚 第二 土地区画 整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御経塚遺跡	集落	縄文時代後晩期	掘立柱建物、土坑	縄文土器、土製品、石器、石製品	晩期の掘立柱建物多数検出
	集落	弥生時代末～古墳時代初頭	竪穴建物、掘立柱建物、土坑	弥生土器、石製品	北降最大級の竪穴建物の検出
	集落	古代	掘立柱建物	須恵器、土師器	
	集落	中世後期	掘立柱建物、欄列、井戸、土坑	土師器、瓦質土器、陶磁器、石製品	現在の御経塚集落に至るムラの出現
	集落	近世	建物、井戸	陶磁器、土器、石製品	
要約	<p>縄文時代後期中葉から晩期終末(弥生時代初頭は散布地)、弥生時代終末期から古墳時代初頭、古代、中世後期から近世にかけての集落跡である。遺跡地中央部に北東流路の自然河川の両岸に集落は立地し各時代の主要分布域は異なる。</p> <p>本報告の調査では、縄文時代晩期中葉から後葉の掘立柱建物56棟を復元し、新潟県域で隆盛する鳥甲形建物を多数確認した。この建物群の確認によって晩期における集落跡相の痕跡が復元でき、集落は晩期終末以降急激に衰退していくことが判明した。弥生時代末期から古墳時代初頭の集落は、北降最大級の竪穴建物2棟を検出しており、自然河道対岸(ツカダ地区)で確認されている集落の裏村的性格を有するものである。古代では調査地の東端一帯で分布する6世紀後半から7世紀の集落分布の西端部を把握した。中世後期では14世紀後半に集住化する集落が形成されており、近世を経て現在に至る御経塚集落の出現時期を把握した。</p>				

御 経 塚 遺 跡 III

野々市町御経塚第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

発行日 2003年3月31日

発行者 野々市町教育委員会

921-8815 石川県石川郡野々市町本町5丁目4番1号

印刷 株式会社 橋本確文堂

御経塚遺跡遺構図 No. 1 (ブナラシ地区)



(史跡指定地)

1 : 300

凡例：本図は今回報告調査区に高堀他1983及び瀬尻他1976の調査区を合成したものである。

野々市町教育委員会

株式会社太陽測地社調製

平成13年2月

御経塚遺跡遺構図 No.2 (デト地区)



凡例
 ●井戸 (SE を省略し番号を表示)
 ○土坑 (SK を省略し番号を表示)

